

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXVII

鳥取県鳥取市鹿野町

OTSU GA SE YA SHIKI MAWARI
乙亥正屋敷廻遺跡

第3分冊（2・3区）

2019

鳥取県埋蔵文化財センター

目次(2・3区・第3分冊)

第IV章 2・3区の調査

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査	(岡野、原田、馬路)	1
1 V-4層出土の遺物		1
2 第7面の遺構		1
第9節 第8面(VI層下面)の調査	(岡野、原田、馬路)	163
1 VI層出土の遺物		163
2 第8面の遺構		163
第10節 第9面(VII層下面)の調査	(岡野、原田、馬路)	259
1 VII層出土の遺物		259
2 第9面の遺構		259
第11節 第10面(VIII・IX層下面)の調査	(岡野、原田、馬路)	335
1 VIII・IX層出土の遺物		335
2 第10面の遺構		335
第12節 第11面(X層下面)の調査	(岡野、原田、馬路)	388
1 X層出土の遺物		388
2 第11面の遺構		388
第13節 I層、I b層、攪乱及びトレンチ出土遺物	(岡野、原田、馬路)	557
1 I層、I b層、攪乱出土の遺物		557
2 トレンチ出土の遺物		557

挿図目次

第IV章 2・3区の調査

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

第IV-8-1図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物 1	2
第IV-8-2図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物 2	3
第IV-8-3図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物 3	4
第IV-8-4図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物 4	5
第IV-8-5図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物 5	6
第IV-8-6図 2・3区 第7面 V-4・5層 出土遺物分布図	7・8
第IV-8-7図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図A	9
第IV-8-8図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図B	10
第IV-8-9図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図C	11
第IV-8-10図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図D	12
第IV-8-11図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図E	13
第IV-8-12図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図F	14
第IV-8-13図 2区 第7面 V-4層 出土遺物分布拡大図G	15

第IV-8-14図	2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図	16
第IV-8-15図	2・3区 第7面 遺構配置図	17・18
第IV-8-16図	2区 第7面 V-4層出土遺物6	19
第IV-8-17図	2区 第7面 V-4層出土遺物7	20
第IV-8-18図	2区 第7面 V-4層出土遺物8	21
第IV-8-19図	2区 第7面 V-4層出土遺物9	22
第IV-8-20図	2区 第7面 柱穴(2S-769、773、782、788、792、820) 平・断面図及び出土遺物	23
第IV-8-21図	2・3区 第7面 柱穴(2S-769、782、788、3S-79) 平・断面図及び出土遺物	24
第IV-8-22図	2区 第7面 土坑(2S-771、772、774、779、780、783) 平・断面図	25
第IV-8-23図	2区 第7面 土坑(2S-784、789、794、796、800、884) 平・断面図及び出土遺物	26
第IV-8-24図	2区 第7面 溝(2S-245・267) 完掘状況全体図及び出土遺物分布図	27・28
第IV-8-25図	2区 第7面 溝(2S-245・269)機能時全体図	29・30
第IV-8-26図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図1	31
第IV-8-27図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図2	32
第IV-8-28図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図3	33
第IV-8-29図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図4及び変遷模式図	34
第IV-8-30図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図5	35
第IV-8-31図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図6	36
第IV-8-32図	2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図7	37
第IV-8-33図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図1	38
第IV-8-34図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図2	39
第IV-8-35図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図3	40
第IV-8-36図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図4	41
第IV-8-37図	2区 第7面 溝(2S-267) 出土遺物	41
第IV-8-38図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図5	42
第IV-8-39図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図6	43
第IV-8-40図	2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図7及び 掘方内出土遺物	44
第IV-8-41図	2区 第7面 溝(2S-245) 掘方内遺物出土状況図	45・46
第IV-8-42図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物1	48
第IV-8-43図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物2	49
第IV-8-44図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物3	50
第IV-8-45図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物4	51
第IV-8-46図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物5	52
第IV-8-47図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物6	53
第IV-8-48図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物7	55
第IV-8-49図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物8	56
第IV-8-50図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物9	57
第IV-8-51図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物10	58
第IV-8-52図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物11	59
第IV-8-53図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物12	60
第IV-8-54図	2区 第7面 溝(2S-245)出土遺物13	61

第IV - 8 - 55図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物14	62
第IV - 8 - 56図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物15	63
第IV - 8 - 57図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物16	64
第IV - 8 - 58図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物17	65
第IV - 8 - 59図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物18	66
第IV - 8 - 60図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物19	67
第IV - 8 - 61図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物20	68
第IV - 8 - 62図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物21	69
第IV - 8 - 63図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物22	70
第IV - 8 - 64図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物23	71
第IV - 8 - 65図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物24	72
第IV - 8 - 66図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物25	73
第IV - 8 - 67図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物26	74
第IV - 8 - 68図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物27	75
第IV - 8 - 69図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物28	76
第IV - 8 - 70図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物29	77
第IV - 8 - 71図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物30	78
第IV - 8 - 72図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物31	79
第IV - 8 - 73図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物32	80
第IV - 8 - 74図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物33	81
第IV - 8 - 75図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物34	82
第IV - 8 - 76図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物35	83
第IV - 8 - 77図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物36	84
第IV - 8 - 78図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物37	85
第IV - 8 - 79図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物38	86
第IV - 8 - 80図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物39	87
第IV - 8 - 81図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物40	88
第IV - 8 - 82図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物41	89
第IV - 8 - 83図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物42	90
第IV - 8 - 84図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物43	91
第IV - 8 - 85図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物44	92
第IV - 8 - 86図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物45	93
第IV - 8 - 87図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物46	94
第IV - 8 - 88図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物47	95
第IV - 8 - 89図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物48	96
第IV - 8 - 90図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物49	97
第IV - 8 - 91図	2区	第7面	溝(2S-245)出土遺物50	98
第IV - 8 - 92図	2区	第7面	溝(2S-763・764)新旧関係模式図	99
第IV - 8 - 93図	2区	第7面	溝(2S-763新・764新)完掘状況図及び断面図	100
第IV - 8 - 94図	2区	第7面	溝(2S-763新・764新)護岸平・立・断面図	101
第IV - 8 - 95図	2区	第7面	溝(2S-763新・764新)出土遺物分布図	102
第IV - 8 - 96図	2区	第7面	溝(2S-763新)出土遺物	103
第IV - 8 - 97図	2区	第7面	溝(2S-764)出土遺物 1	104
第IV - 8 - 98図	2区	第7面	溝(2S-764)出土遺物 2	105
第IV - 8 - 99図	2区	第7面	溝(2S-764)出土遺物 3	106
第IV - 8 - 100図	2区	第7面	溝(2S-764)出土遺物 4	107

第IV - 8 - 101図	2区	第7面	溝(2S763古・764古・824)	
完掘状況図及び出土遺物分布図				109・110
第IV - 8 - 102図	2区	第7面	溝(2S-763古・764古・824) 機能時平・断面図	111・112
第IV - 8 - 103図	2区	第7面	溝(2S-763古) 平・立面図1	113
第IV - 8 - 104図	2区	第7面	溝(2S-763古) 平・立・断面図2	114
第IV - 8 - 105図	2区	第7面	溝(2S-763古) 平・立面図3	116
第IV - 8 - 106図	2区	第7面	溝(2S-764古) 平・立・断面図4	117
第IV - 8 - 107図	2区	第7面	溝(2S-763古・824) 遺物出土状況全体図	118
第IV - 8 - 108図	2区	第7面	溝(2S-824) 遺物出土状況拡大図A	119
第IV - 8 - 109図	2区	第7面	溝(2S-824) 遺物出土状況拡大図B	120
第IV - 8 - 110図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図C	121
第IV - 8 - 111図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図D	122
第IV - 8 - 112図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図E	123
第IV - 8 - 113図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図F	124
第IV - 8 - 114図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図G	125
第IV - 8 - 115図	2区	第7面	溝(2S-763古) 遺物出土状況拡大図H	126
第IV - 8 - 116図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物1	126
第IV - 8 - 117図	2区	第7面	溝(2S-763古) 挖方遺物出土状況拡大図	127
第IV - 8 - 118図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物2	128
第IV - 8 - 119図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物3	129
第IV - 8 - 120図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物4	130
第IV - 8 - 121図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物5	131
第IV - 8 - 122図	2区	第7面	溝(2S-824) 出土遺物6及び 溝(2S-763古) 出土遺物1	132
第IV - 8 - 123図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物2	133
第IV - 8 - 124図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物3	134
第IV - 8 - 125図	2区	第7面	溝(2S-763掘方) 出土遺物	135
第IV - 8 - 126図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物4	136
第IV - 8 - 127図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物5	137
第IV - 8 - 128図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物6	138
第IV - 8 - 129図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物7	139
第IV - 8 - 130図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物8	140
第IV - 8 - 131図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物9	141
第IV - 8 - 132図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物10	142
第IV - 8 - 133図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物11	143
第IV - 8 - 134図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物12	144
第IV - 8 - 135図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物13	145
第IV - 8 - 136図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物14	146
第IV - 8 - 137図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物15	147
第IV - 8 - 138図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物16	148
第IV - 8 - 139図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物17	149
第IV - 8 - 140図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物18	150
第IV - 8 - 141図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物19	151
第IV - 8 - 142図	2区	第7面	溝(2S-763古) 出土遺物20	152
第IV - 8 - 143図	2区	第7面	溝(2S-883) 平・断面図及び出土遺物	153
第IV - 8 - 144図	2区	第7面	溝(2S-781、791) 平・断面図及び出土遺物	154

第IV-8-145図	2区 第7面 溝(2S-858) 平・断面図	155
第IV-8-146図	2区 第7面 溝(2S-858) 出土遺物	156
第IV-8-147図	2区 第7面 溝(2S-895) 平・断面・遺物出土状況図及び出土遺物	157
第IV-8-148図	3区 第7面 溝・擬似畦畔(3S-50・53~55・58・59) 平・断面図	158
第IV-8-149図	3区 第7面 溝(3S-50) 出土遺物	159
第IV-8-150図	3区 第7面 溝・擬似畦畔(3S-50) 遺物出土状況拡大図A(上)、B(下)	160
第IV-8-151図	3区 第7面 耕作土(3S-54・55・59) 出土遺物1	161
第IV-8-152図	3区 第7面 耕作土(3S-54・55・59) 出土遺物2	162
第9節 第8面(VI層下面)の調査		
第IV-9-1図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物1	164
第IV-9-2図	2・3区 第8面 VI層出土遺物分布図	165・166
第IV-9-3図	2区 第8面 VI層遺物出土状況拡大図A	167
第IV-9-4図	2・3区 第8面 VI層遺物出土状況拡大図B(上)・C(下)	168
第IV-9-5図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物2	169
第IV-9-6図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物3	170
第IV-9-7図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物4	171
第IV-9-8図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物5	172
第IV-9-9図	2・3区 第8面 VI層 出土遺物6	173
第IV-9-10図	2・3区 第8面 遺構配置図	175・176
第IV-9-11図	2区 第8面 遺構配置図拡大図A	177
第IV-9-12図	2区 第8面 遺構配置図拡大図B	178
第IV-9-13図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 平・断面図及び出土遺物1	179
第IV-9-14図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況図	180
第IV-9-15図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図A	181
第IV-9-16図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図B	182
第IV-9-17図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図C	183
第IV-9-18図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 出土遺物2	184
第IV-9-19図	3区 第8面 周堤溝(3S-70) 出土遺物3	185
第IV-9-20図	3区 第8面 周堤溝(3S-103, 104) 平・断面図	186
第IV-9-21図	2区 第8面 柱穴(2S-1078, 1254) 平・断面図及び出土遺物	187
第IV-9-22図	2区 第8面 土坑(2S-886)	188
	平・断面図、底面直上出土遺物状況図及び出土遺物	188
第IV-9-23図	2区 第8面 土坑(2S-903, 905) 平・断面図及び出土遺物	189
第IV-9-24図	2区 第8面 土坑(2S-913, 915, 1144, 1145) 平・断面図及び出土遺物	190
第IV-9-25図	3区 第8面 土坑(3S-76) 平・断面図及び出土遺物1	191
第IV-9-26図	3区 第8面 土坑(3S-76) 出土遺物2	192
第IV-9-27図	2区 第8面 土坑(2S-859, 861, 864, 865, 866, 869) 平・断面図	192
第IV-9-28図	2区 第8面 土坑(2S-870-885, 875, 876, 877, 888, 892, 894, 899-900-1001, 1005) 平・断面図	193
第IV-9-29図	2区 第8面 土坑(2S-1003, 1173) 平・断面図	194
第IV-9-30図	2区 第8面 土坑(2S-860, 876) 出土遺物	194
第IV-9-31図	2区 第8面 D・E 4グリッド遺構群 平面図	195・196
第IV-9-32図	2区 第8面 土坑(2S-1141) 平面図	198
第IV-9-33図	2区 第8面 土坑(2S-1141) 杖列平・立面図及び断面図	199

第IV - 9 - 34図	2区 第8面	土坑(2S-1141) 遺物出土状況図	200
第IV - 9 - 35図	2区 第8面	土坑(2S-1141) 出土遺物 1	201
第IV - 9 - 36図	2区 第8面	D・E4 グリッド変遷模式図	201
第IV - 9 - 37図	2区 第8面	土坑(2S-1141) 出土遺物 2	202
第IV - 9 - 38図	2区 第8面	土坑(2S-1141) 出土遺物 3	203
第IV - 9 - 39図	2区 第8面	溝(2S-841・904・912・926) 平・断面図及び遺物出土状況図	205・206
第IV - 9 - 40図	2区 第8面	溝(2S-841) 遺物出土状況、1-2間平・立面図	207
第IV - 9 - 41図	2区 第8面	溝(2S-841) 遺物出土状況拡大図A	208
第IV - 9 - 42図	2区 第8面	溝(2S-904・912・926) 平・立・断面図	209
第IV - 9 - 43図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 1	210
第IV - 9 - 44図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 2	211
第IV - 9 - 45図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 3	212
第IV - 9 - 46図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 4	213
第IV - 9 - 47図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 5	214
第IV - 9 - 48図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 6	215
第IV - 9 - 49図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 7	216
第IV - 9 - 50図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 8	217
第IV - 9 - 51図	2区 第8面	溝(2S-841) 出土遺物 9	218
第IV - 9 - 52図	2区 第8面	溝(2S-904・912・926) 出土遺物 1	219
第IV - 9 - 53図	2区 第8面	溝(2S-904・912・926) 出土遺物 2	220
第IV - 9 - 54図	2区 第8面	溝(2S-904・912・926) 出土遺物 3	221
第IV - 9 - 55図	2区 第8面	溝(2S-904・912・926) 出土遺物 4	222
第IV - 9 - 56図	2区 第8面	溝(2S-830) 機能時(上)及び完掘状況(下) 平・立・断面図及び出土遺物 1	223
第IV - 9 - 57図	2区 第8面	溝(2S-830) 出土遺物 2	224
第IV - 9 - 58図	2区 第8面	溝(2S-916) 平・断面図及び出土遺物	225
第IV - 9 - 59図	2区 第8面	溝(2S-916) 遺物出土状況(上)・埋土完掘状況(下) 平・立面図	226
第IV - 9 - 60図	2区 第8面	溝(2S-916) 掘方完掘状況 平・断面図	227
第IV - 9 - 61図	2区 第8面	流路(2S-916) 出土遺物	229
第IV - 9 - 62図	2区 第8面	溝(2S-901) 平・断面図、 遺物出土状況拡大図及び出土遺物	230
第IV - 9 - 63図	2区 第8面	溝(2S-901) 出土遺物	231
第IV - 9 - 64図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 平・断面図	233・234
第IV - 9 - 65図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 平・立面図 1	235
第IV - 9 - 66図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 平・立面図 2	236
第IV - 9 - 67図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 平・立・断面図 3	237
第IV - 9 - 68図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 出土遺物	239
第IV - 9 - 69図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 遺物出土状況図	241・242
第IV - 9 - 70図	2区 第8面	溝(2S-927・928) 遺物出土状況拡大図A	243
第IV - 9 - 71図	2区 第8面	溝(2S-927) 出土遺物 1	244
第IV - 9 - 72図	2区 第8面	溝(2S-927) 出土遺物 2	245
第IV - 9 - 73図	2区 第8面	溝(2S-927) 出土遺物 3	246
第IV - 9 - 74図	2区 第8面	溝(2S-928) 出土遺物 1	247
第IV - 9 - 75図	2区 第8面	溝(2S-928) 出土遺物 2	248

第IV - 9 - 76図	2区 第8面 流路(2S-921、917・1246) 平・断面図及び出土遺物	249
第IV - 9 - 77図	2区 第8面 流路(2S-923) 平・断面図及び出土遺物	250
第IV - 9 - 78図	2区 第8面 溝(2S-923) 出土遺物	251
第IV - 9 - 79図	2・3区 第8面 溝・落ち込み(3S-77、2S-922) 平・断面図	252
第IV - 9 - 80図	2区 第8面 溝(2S-1009) 出土遺物	253
第IV - 9 - 81図	2区 第8面 溝・流路(2S-868、878、879) 平・断面図及び出土遺物	254
第IV - 9 - 82図	2区 第8面 流路(2S-902) 平・断面図	255
第IV - 9 - 83図	2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物 1	256
第IV - 9 - 84図	2区 第8面 流路(2S-920) 平・断面図及び出土遺物	256
第IV - 9 - 85図	2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物 2	257
第IV - 9 - 86図	2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物 3	258
第10節 第9面(VII層下面)の調査		
第IV - 10 - 1図	2区 第9面 VII層出土遺物 1	260
第IV - 10 - 2図	2・3区 第9面 VII層出土遺物分布図	261・262
第IV - 10 - 3図	2区 第9面 VII層出土遺物 2	263
第IV - 10 - 4図	2区 第9面 VII層出土遺物 3	264
第IV - 10 - 5図	2・3区 第9面 遺構配置図	265・266
第IV - 10 - 6図	2区 第9面 VII層出土遺物 4	267
第IV - 10 - 7図	2区 第9面 遺構配置図拡大図A	269
第IV - 10 - 8図	2区 第9面 遺構配置図拡大図B	270
第IV - 10 - 9図	2区 第9面 遺構配置図拡大図C	271
第IV - 10 - 10図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)統合平面図	272
第IV - 10 - 11図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)A段階平面図及び出土遺物	273
第IV - 10 - 12図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)断面図	274
第IV - 10 - 13図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)断面図註記	275
第IV - 10 - 14図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)B段階平面図及び出土遺物	276
第IV - 10 - 15図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)C段階平面図及び出土遺物	277
第IV - 10 - 16図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)D段階平面図及び出土遺物	278
第IV - 10 - 17図	2区 第9面 壁穴住居(2 S-1155)E段階平面図及び出土遺物	279
第IV - 10 - 18図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-952-953、954、955、956、957、1031)平・断面図 1	280
第IV - 10 - 19図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-1039、1040、1053、1054、1055)平・断面図 2	281
第IV - 10 - 20図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-1131、1135、1138、1139、1156)平・断面図 3	282
第IV - 10 - 21図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-1157、1159、1160、1161、1162、1165)平・断面図 4	283
第IV - 10 - 22図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-1166、1167、1168、1177、1179、1181)平・断面図 5	284
第IV - 10 - 23図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑 (2 S-1185、1189、1196、1197、1204)平・断面図 6	285
第IV - 10 - 24図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑(2 S-1056、1134、1180、1183、1188) 平・断面図 7	286
第IV - 10 - 25図	2区 第9面 2 S-1155内及び周辺土坑(2 S-1051、1052、1059、1176、1190) 平・断面図 8	287

第IV-10-26図	2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1132、1154、1182、1184) 平・断面図9	288
第IV-10-27図	2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑 (2S-1200、1201、1202、1203、1205、1206)平・断面図10	289
第IV-10-28図	2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑 (2S-1207、1227、1228、1229、1230、1251)平・断面図11	290
第IV-10-29図	2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑 (2S-1251、1257、1258、1259、1260、1261)平・断面図12	291
第IV-10-30図	2区 第9面 壁穴住居(2S-1155)D段階出土遺物	292
第IV-10-31図	3区 第9面 周堤溝(3S-105) 平・断面図及び出土遺物	294
第IV-10-32図	2・3区 第9面 柱穴(2S-675・676、677、678、3S-112) 平・断面図及び出土遺物	295
第IV-10-33図	2区 第9面 柱穴(2S-950、970、1008) 平・断面図及び出土遺物	296
第IV-10-34図	2区 第9面 土坑(2S-673、674、679、680、681、682、684、685、755) 平・断面図	297
第IV-10-35図	2区 第9面 土坑(2S-943、947、948、963、968、981) 平・断面図	298
第IV-10-36図	2区 第9面 土坑(2S-985、990、991、1058、1178、1241) 平・断面図	299
第IV-10-37図	2区 第9面 土坑(2S-683、828、979、980、1080、1121、1122、1123) 平・断面図及び出土遺物	300
第IV-10-38図	2区 第9面 土坑(2S-1124、1125、1126、1127、1128、1129、1130) 平・断面図	301
第IV-10-39図	3区 第9面 土坑(3S-92、96、97、98、109、110、112、117、121) 平・断面図及び出土遺物	302
第IV-10-40図	2・3区 第9面 土坑(2S-1163・1164、3S-91、116) 平・断面図	303
第IV-10-41図	2区 第9面 土坑(2S-1017～1020) 平・断面図	304
第IV-10-42図	2区 第9面 土坑(2S-1017～1020) 出土遺物	305
第IV-10-43図	2区 第9面 土坑(2S-851) 平・断面図及び出土遺物	305
第IV-10-44図	2区 第9面 土坑(2S-890、1068、1070) 平・断面図及び出土遺物	306
第IV-10-45図	2区 第9面 土坑(2S-825、826) 平・断面図	307
第IV-10-46図	2区 第9面 溝(2S-898) 平・断面図	307
第IV-10-47図	2区 第9面 溝(2S-1026) 平・断面図及び遺物出土状況図	308
第IV-10-48図	2区 第9面 溝(2S-1026) 出土遺物1	309
第IV-10-49図	2区 第9面 溝(2S-1026) 出土遺物2	310
第IV-10-50図	2区 第9面 溝(2S-1028) 平・断面図及び出土遺物	311
第IV-10-51図	2区 第9面 溝(2S-856a) 平・立面図	312
第IV-10-52図	2区 第9面 溝(2S-856) 断面図	313
第IV-10-53図	2区 第9面 溝(2S-856a) 溝内遺物出土状況図	314
第IV-10-54図	2区 第9面 溝(2S-856b) 溝内遺物出土状況及び遺構平面図	315
第IV-10-55図	2区 第9面 溝(2S-856) 出土遺物1	316
第IV-10-56図	2区 第9面 溝(2S-856) 出土遺物2	317
第IV-10-57図	2区 第9面 溝(2S-1143) 平・断面図、 出土遺物分布図及び出土遺物1	318
第IV-10-58図	2区 第9面 溝(2S-1143) 平・立面図及び出土遺物2	319

第IV-10-59図	2区	第9面	溝(2S-1143) 出土遺物3	321
第IV-10-60図	2区	第9面	溝(2S-1143) 出土遺物4	322
第IV-10-61図	2区	第9面	流路(2S-1023、1024) 平・断面図	323
第IV-10-62図	2区	第9面	流路(2S-951) 平・断面図	324
第IV-10-63図	2区	第9面	流路(2S-951、1023) 出土遺物	325
第IV-10-64図	2区	第9面	流路(2S-978) 平・断面図及び出土遺物1	326
第IV-10-65図	2区	第9面	流路(2S-978) 出土遺物2	327
第IV-10-66図	2区	第9面	流路(2S-1041、1120) 平・断面図及び出土遺物	328
第IV-10-67図	3区	第9面	流路(3S-115・118) 平・断面図及び出土遺物1	329
第IV-10-68図	3区	第9面	流路(3S-115・118) 出土遺物2	330
第IV-10-69図	3区	第9面	流路(3S-115・118) 出土遺物3	331
第IV-10-70図	3区	第9面	流路(3S-115・118) 出土遺物4	332
第IV-10-71図	3区	第9面	落ち込み(3S-94、114) 平・断面図	333
第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査				
第IV-11-1図	2・3区	第10面	VII・IX層出土遺物1	336
第IV-11-2図	2・3区	第10面	VII・IX層出土遺物分布図	337
第IV-11-3図	2・3区	第10面	VII・IX層出土遺物2	339
第IV-11-4図	2区	第10面	VII・IX層出土遺物3	340
第IV-11-5図	2・3区	第10面	遺構配置図	341
第IV-11-6図	2区	第10面	遺構配置図拡大図A	343
第IV-11-7図	2区	第10面	遺構配置図拡大図B	344
第IV-11-8図	3区	第10面	竪穴住居(3S-122、123、128、130) 平・断面図	345
第IV-11-9図	3区	第10面	竪穴住居(3S-122) 平・断面図	346
第IV-11-10図	3区	第10面	竪穴住居(3S-122、123、128、130) 出土遺物	347
第IV-11-11図	2区	第10面	竪穴状遺構(2S-1281) 平・断面図、及び出土遺物	348
第IV-11-12図	2区	第10面	柱穴(2S-1086、1089、1100、1092、1104、1110、1111) 平・断面図及び出土遺物	349
第IV-11-13図	2区	第10面	土坑(2S-1071) 平・断面図及び出土遺物	350
第IV-11-14図	2区	第10面	土坑(2S-1062) 平・断面図及び出土遺物	351
第IV-11-15図	2区	第10面	土坑(2S-1067) 平・断面図	351
第IV-11-16図	2区	第10面	土坑(2S-832、835、836、837、838、853、855) 平・断面図	352
第IV-11-17図	2区	第10面	土坑(2S-1049、1050、1072、1073、1074、 1075、1076、1087、1088) 平・断面図	353
第IV-11-18図	2区	第10面	土坑(2S-1091、1093、1094、1095、 1097、1098、1101、1102、1103) 平・断面図	354
第IV-11-19図	2区	第10面	土坑(2S-1072、1073、1095、1106、1109、1112・1113、1114、1115) 平・断面図及び出土遺物	355
第IV-11-20図	2・3区	第10面	土坑(2S-1116・1117、1118、1148、1150、1058、3S-124) 平・断面図及び出土遺物	356
第IV-11-21図	3区	第10面	土坑(3S-125～127、129、133～137) 平・断面図	357
第IV-11-22図	2区	第10面	溝(2S-831、834、839) 平・断面図及び出土遺物	358
第IV-11-23図	2区	第10面	溝(2S-833) 平・断面図及び出土遺物分布図	359
第IV-11-24図	2区	第10面	溝(2S-833) 平・立面図	360
第IV-11-25図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物1	361
第IV-11-26図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物2	362

第IV-11-27図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物3	363
第IV-11-28図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物4	364
第IV-11-29図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物5	365
第IV-11-30図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物6	366
第IV-11-31図	2区	第10面	溝(2S-833) 出土遺物7	367
第IV-11-32図	2区	第10面	溝(2S-854) 平・断面図	368
第IV-11-33図	2区	第10面	溝(2S-1025) 平・断面図、遺物出土状況平面図	369
第IV-11-34図	2区	第10面	溝(2S-1025) 出土遺物1	370
第IV-11-35図	2区	第10面	溝(2S-1025) 出土遺物2	371
第IV-11-36図	2区	第10面	溝(2S-1029) 平・断面図、遺物出土状況平面図	372
第IV-11-37図	2区	第10面	溝(2S-1029) 出土遺物	373
第IV-11-38図	2区	第10面	溝(2S-1066) 平・断面図	373
第IV-11-39図	2区	第10面	溝(2S-1066) 遺物出土状況平・断面図	374
第IV-11-40図	2区	第10面	溝(2S-1066) 出土遺物1	375
第IV-11-41図	2区	第10面	溝(2S-1066) 出土遺物2	376
第IV-11-42図	2区	第10面	溝(2S-1069) 平・立・断面図	377
第IV-11-43図	2区	第10面	溝(2S-1069) 出土遺物1	378
第IV-11-44図	2区	第10面	溝(2S-1069) 出土遺物2	379
第IV-11-45図	2区	第10面	流路(2S-1079) 平・断面図	380
第IV-11-46図	2区	第10面	流路(2S-1079) 遺物出土状況図	381
第IV-11-47図	2区	第10面	流路(2S-1079) 出土遺物1	382
第IV-11-48図	2区	第10面	流路(2S-1079) 出土遺物2	383
第IV-11-49図	2区	第10面	流路(2S-1079) 出土遺物3	384
第IV-11-50図	2区	第10面	流路(2S-1079) 出土遺物4	385
第IV-11-51図	2区	第10面	流路(2S-1090、1108) 平・断面図	386
第IV-11-52図	2区	第10面	落ち込み(2S-829) 平・断面図及び出土遺物	387
第12節 第11面(X層下面)				
第IV-12-1図	2区	第11面	X層出土遺物分布図及び遺物出土状況図	389・390
第IV-12-2図	2区	第11面	X層出土遺物1	391
第IV-12-3図	2区	第11面	X層出土遺物2	392
第IV-12-4図	2区	第11面	X層出土遺物3	393
第IV-12-5図	2区	第11面	X層出土遺物4	394
第IV-12-6図	2区	第11面	遺構配置図	395・396
第IV-12-7図	2区	第11面	X層出土遺物5	397
第IV-12-8図	2区	第11面	遺構配置図拡大図A	398
第IV-12-9図	2区	第11面	遺構配置図拡大図B	399
第IV-12-10図	2区	第11面	遺構配置図拡大図C及び土層断面図1	400
第IV-12-11図	2区	第11面	遺構配置図拡大図C及び土層断面図2	401
第IV-12-12図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147) 遺物出土状況及び断面図	402
第IV-12-13図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147) 機能時床面平・断面図	403
第IV-12-14図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147) 構造物除去後床面	
平面図及び出土遺物1				404
第IV-12-15図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147)	
掘方平面図、柱穴断面図及び出土遺物2				405
第IV-12-16図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147)	
壁材平・立面図及び出土遺物3				406

第IV-12-17図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147) 出土遺物4	407
第IV-12-18図	2区	第11面	竪穴住居(2S-1147) 出土遺物5	408
第IV-12-19図	2区	第11面	建物跡(2S-1262) 平面図	409
第IV-12-20図	2区	第11面	建物跡(2S-1262) 断面図、床面焼土検出状況図	410
第IV-12-21図	2区	第11面	建物跡(2S-1262) 関連柱穴等 (2S-1004、1191～1195、1267、1268、1273) 平・断面図	411
第IV-12-22図	2区	第11面	柱穴(2S-1267、1269、1273) 出土遺物	412
第IV-12-23図	2区	第11面	建物跡(2S-1262)、 関連土坑(2S-1231、1267、1268、1192、1195) 出土遺物	412
第IV-12-24図	2区	第11面	土坑(2S-1272、1276) 平・断面図及び出土遺物	413
第IV-12-25図	2区	第11面	土坑(2S-1240、1242) 平・断面図	414
第IV-12-26図	2区	第11面	溝(2S-852) 平・断面図	414
第IV-12-27図	2区	第11面	E4グリッド検出矢板列合成図	415・416
第IV-12-28図	2区	第11面	溝(2S-1046) 平・断面図	418
第IV-12-29図	2区	第11面	溝(2S-1046) 平・立面図1及び出土遺物1	419
第IV-12-30図	2区	第11面	溝(2S-1046) 平・立面図2及び遺物出土状況図	420
第IV-12-31図	2区	第11面	溝(2S-1046) 出土遺物2	421
第IV-12-32図	2区	第11面	溝(2S-1046) 出土遺物3	422
第IV-12-33図	2区	第11面	溝(2S-1047) 平・断面図及び出土遺物	423
第IV-12-34図	2区	第11面	溝(2S-1048・1250) 平・断面図及び出土遺物	424
第IV-12-35図	2区	第11面	溝(2S-1048・1250、1248) 平・立面図及び出土遺物	425
第IV-12-36図	2区	第11面	溝(2S-1250) 出土遺物1	426
第IV-12-37図	2区	第11面	溝(2S-1250) 出土遺物2	427
第IV-12-38図	2区	第11面	溝(2S-1247、1249、1253、1255、1256) 平・立・断面図	428
第IV-12-39図	2区	第11面	溝(2S-1278、1271) 平・立面図	429
第IV-12-40図	2区	第11面	溝(2S-1247、1249、1255、1271) 出土遺物	430
第IV-12-41図	2区	第11面	溝(2S-1253) 出土遺物	431
第IV-12-42図	2区	第11面	溝(2S-1256、1271) 出土遺物	432
第IV-12-43図	2区	第11面	溝(2S-1030a) 平・立面図	434
第IV-12-44図	2区	第11面	溝(2S-1030a) 遺物出土状況平面図	435
第IV-12-45図	2区	第11面	溝(2S-1030a) 断面図	436
第IV-12-46図	2区	第11面	溝(2S-1030b) 平面図	436
第IV-12-47図	2区	第11面	溝(2S-1030b) 遺物出土状況平面図	437
第IV-12-48図	2区	第11面	溝(2S-1030b) 断面図	438
第IV-12-49図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物1	438
第IV-12-50図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物2	439
第IV-12-51図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物3	440
第IV-12-52図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物4	441
第IV-12-53図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物5	442
第IV-12-54図	2区	第11面	溝(2S-1030) 出土遺物6	443
第IV-12-55図	2区	第11面	溝(2S-1264) 平・立・断面図	444
第IV-12-56図	2区	第11面	溝(2S-1264) 出土遺物1	445
第IV-12-57図	2区	第11面	溝(2S-1264) 出土遺物2	446
第IV-12-58図	2区	第11面	溝(2S-1065) 断面図	447
第IV-12-59図	2区	第11面	遺物出土状況 平・断面図	448

第IV-12-60図	2区	第11面	溝(2S-1065) 出土遺物	449
第IV-12-61図	2区	第11面	溝(2S-1063) 平・断面図及び出土遺物	450
第IV-12-62図	2区	第11面	溝(2S-1234) 遺物出土状況 平・立・断面図	451
第IV-12-63図	2区	第11面	溝(2S-1234) 出土遺物	452
第IV-12-64図	2区	第11面	溝(2S-1263) 平・断面図及び出土遺物	453
第IV-12-65図	2区	第11面	溝(2S-1265) 平・断面図及び出土遺物	454
第IV-12-66図	2区	第11面	溝(2S-964) 平・断面図	455
第IV-12-67図	2区	第11面	流路(2S-1057)	
			完掘平面図(A-A'断面2~14層相当)	456
第IV-12-68図	2区	第11面	流路(2S-1057) 断面図(A-A'断面)	457
第IV-12-69図	2区	第11面	流路(2S-1057) 断面図(B-B'断面)	458
第IV-12-70図	2区	第11面	流路(2S-1057) 遺物出土状況図(7~14層)	459
第IV-12-71図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物1	460
第IV-12-72図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物2	461
第IV-12-73図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物3	462
第IV-12-74図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物4	463
第IV-12-75図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物5	464
第IV-12-76図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物6	465
第IV-12-77図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物7	466
第IV-12-78図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物8	467
第IV-12-79図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物9	468
第IV-12-80図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物10	469
第IV-12-81図	2区	第11面	流路(2S-1057) 出土遺物11	470
第IV-12-82図	2区	第11面	谷(2S-840) 平面図及び出土遺物分布図	471·472
第IV-12-83図	2区	第11面	谷(2S-840) 断面図	473
第IV-12-84図	2区	第11面	谷(2S-840)	
			中層遺物出土状況図(1段目:全体図)	475·476
第IV-12-85図	2区	第11面	谷(2S-840)	
			中層遺物出土状況図(2段目:全体図)	477·478
第IV-12-86図	2区	第11面	谷(2S-840)	
			中層遺物出土状況図(3段目:全体図)	479
第IV-12-87図	2区	第11面	谷(2S-840) 出土遺物1	480
第IV-12-88図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-1段目:木器出土状況拡大図)	481·482
第IV-12-89図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-1段目を除く全体図)	483
第IV-12-90図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-2段目:木器出土状況拡大図)	484
第IV-12-91図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-2段目を除く全体図)	485
第IV-12-92図	2区	第11面	谷(2S-840) 出土遺物2	486
第IV-12-93図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-3段目:木舞出土状況拡大図)	487·488
第IV-12-94図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図 (3-3段目:木舞1段目)	490
第IV-12-95図	2区	第11面	谷(2S-840) 中層遺物出土状況図	

(3-3段目：木舞1段目を除く全体図)	491	492				
第IV-12-96図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物3		493				
第IV-12-97図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞2段目)		494				
第IV-12-98図 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞2段目を除く全体図)		495	496			
第IV-12-99図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物4			497			
第IV-12-100図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞3段目)			498			
第IV-12-101図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞3段目を除く全体図)			499	500		
第IV-12-102図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物5				501		
第IV-12-103図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞4段目)				502		
第IV-12-104図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞4段目を除く全体図)				503	504	
第IV-12-105図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物6					505	
第IV-12-106図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞5段目)					506	
第IV-12-107図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-3段目：木舞6段目)					507	508
第IV-12-108図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物7						509
第IV-12-109図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-4段目：全体図)						510
第IV-12-110図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(3-5段目：全体図)						511
第IV-12-111図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(4段目：全体図)						512
第IV-12-112図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(5段目：全体図)						513
第IV-12-113図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図						
(6段目：全体図)						514
第IV-12-114図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物8						515
第IV-12-115図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物9						516
第IV-12-116図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物10						517
第IV-12-117図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物11						519
第IV-12-118図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物12						520
第IV-12-119図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物13						521
第IV-12-120図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物14						522
第IV-12-121図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物15						523
第IV-12-122図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物16						524
第IV-12-123図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物17						525
第IV-12-124図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物18						527
第IV-12-125図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物19						528
第IV-12-126図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物20						529
第IV-12-127図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物21						530

第IV-12-128図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物22	531
第IV-12-129図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物23	532
第IV-12-130図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物24	533
第IV-12-131図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物25	534
第IV-12-132図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物26	535
第IV-12-133図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物27	536
第IV-12-134図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物28	537
第IV-12-135図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物29	538
第IV-12-136図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物30	539
第IV-12-137図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物31	540
第IV-12-138図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物32	541
第IV-12-139図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物33	542
第IV-12-140図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物34	543
第IV-12-141図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物35	544
第IV-12-142図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物36	545
第IV-12-143図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物37	546
第IV-12-144図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物38	547
第IV-12-145図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物39	548
第IV-12-146図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物40	549
第IV-12-147図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物41	550
第IV-12-148図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物42	551
第IV-12-149図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物43	552
第IV-12-150図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物44	553
第IV-12-151図	2区	第11面 谷(2S-840)	出土遺物45	554
第13節 I層、Ib層、攪乱及びトレンチ出土の遺物				
第IV-13-1図	I層、Ib層及び攪乱出土遺物1			558
第IV-13-2図	I層、Ib層及び攪乱出土遺物2			559
第IV-13-3図	I層、Ib層及び攪乱出土遺物3			560
第IV-13-4図	各トレンチ出土遺物1			561
第IV-13-5図	各トレンチ出土遺物2			562
第IV-13-6図	各トレンチ出土遺物3			563
第IV-13-7図	各トレンチ出土遺物4			564
第IV-13-8図	各トレンチ出土遺物5			565
第IV-13-9図	各トレンチ出土遺物6			566
第IV-13-10図	各トレンチ出土遺物7			567
第IV-13-11図	各トレンチ出土遺物8			568
第IV-13-12図	各トレンチ出土遺物9			569
第IV-13-13図	各トレンチ出土遺物10			571
第IV-13-14図	各トレンチ出土遺物11			572
第IV-13-15図	各トレンチ出土遺物12			573
第IV-13-16図	各トレンチ出土遺物13、調査区内出土遺物			574

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

1 V-4層出土の遺物(第IV-8-1~14、16~19図)

V-4層からは多くの遺物が出土した。土器は乙亥正V~VII期と考えられるものが多数出土し、壺(7-001~014)、甕(7-015~049)、高坏(7-052~055、059、061~068、073~075)、低脚坏(7-056~058)、器台(7-079~083)、蓋(7-085~090)、瓶型土器(7-076)、注口土器(7-093)などがある。高坏(7-059、060)は近畿北部系のものと考えられる。他に、黒曜石製の錐(S4256)を1点図化した。

2区中央部からは横槌(4304)、火鑽臼(4388)、板材(5675)が出土した。横槌は敲打部が炭化して約半分しか残っていない。板材は、厚さ4.5cmと比較的の厚みがあり、上下が分割されたもので何らかの素材と考えられる。(馬路)

2 第7面の遺構(第IV-8-15図)

この遺構面では、調査区全体で柱穴、土坑、溝を検出したほか、3区で疑似畦畔を検出した。

柱穴

柱穴は、2・3区において、柱が残存するものと土層断面で柱痕を確認できたものを合わせて8基確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。

2 S-769(第IV-8-20、21図)

E4グリッドで検出した。平面形は楕円形で、北側半分は浅いテラスを呈し、南半部に柱根が残存する。長径0.28m、短径0.2m、深さ0.17mである。埋土中から、乙亥正III~VII期の土器小片が出土した。柱は芯持ち丸太材で径約9.3cmである。(馬路)

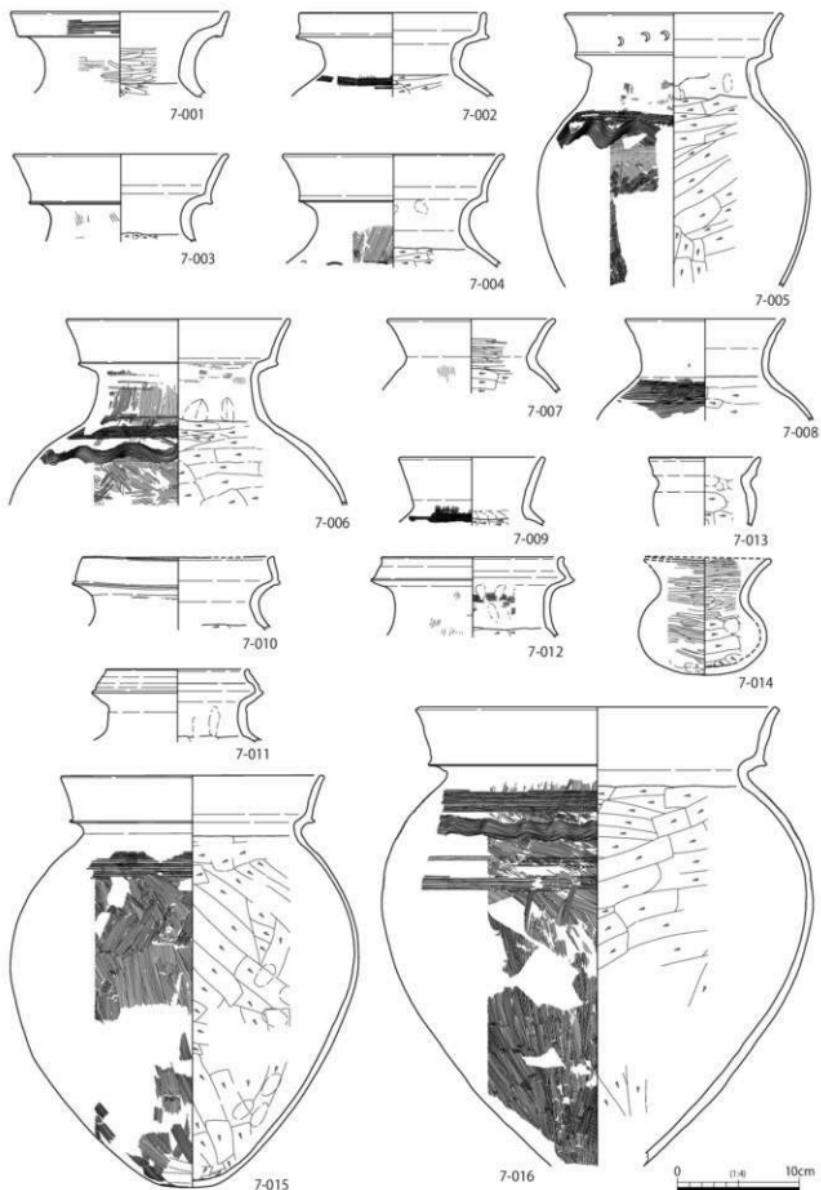
2 S-773(第IV-8-20図)

E4グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.19m、短径0.16m、深さ0.26mである。断面形はコップ形で、埋土中程から上に土層断面で幅約0.08mの柱痕(3層)を確認できる。遺物は土器小片が出土したのみである。(馬路)

2 S-782(第IV-8-20、21図)

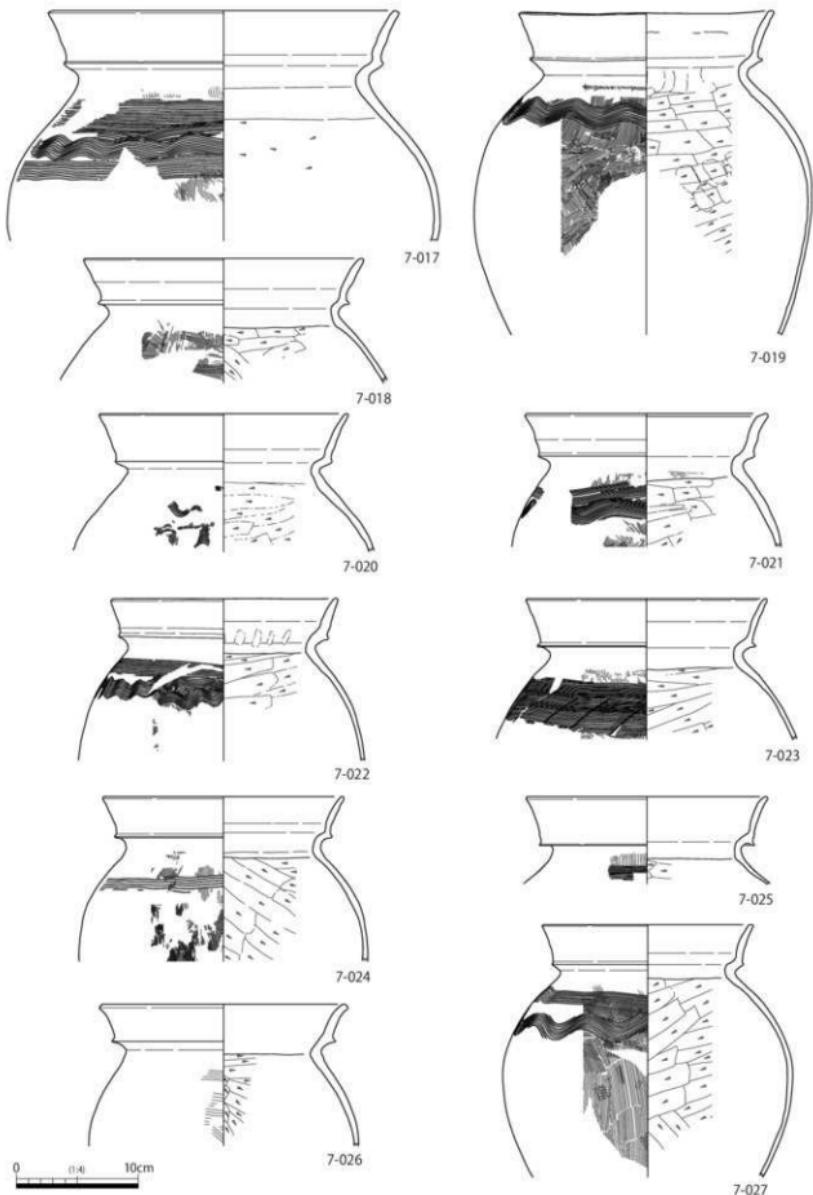
E3グリッドで検出した。平面形は東西に細長い楕円形で、長径0.43m、短径0.31m、深さ0.73mである。断面形は細長い逆台形で、底面から0.1m程浮いた状態で径約10cmの柱が残存していた。柱は上半部が腐食して、砂質粘土になっていた。埋土中から、乙亥正VII期ごろの土器小片が出土した。柱は芯持ち丸太材で、末端部は平坦に加工している。(馬路)

2 S-788(第IV-8-20、21図)



第IV-8-1図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物1

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

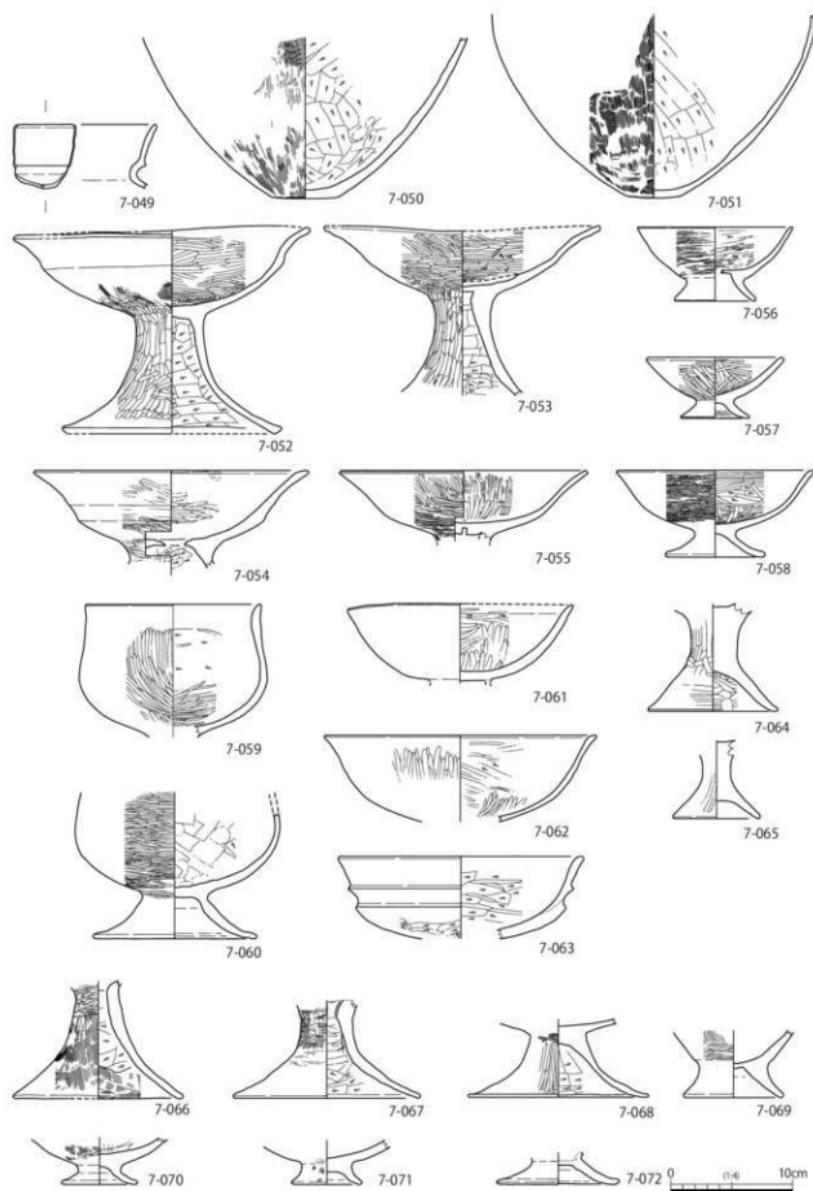


第IV-8-2図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物2

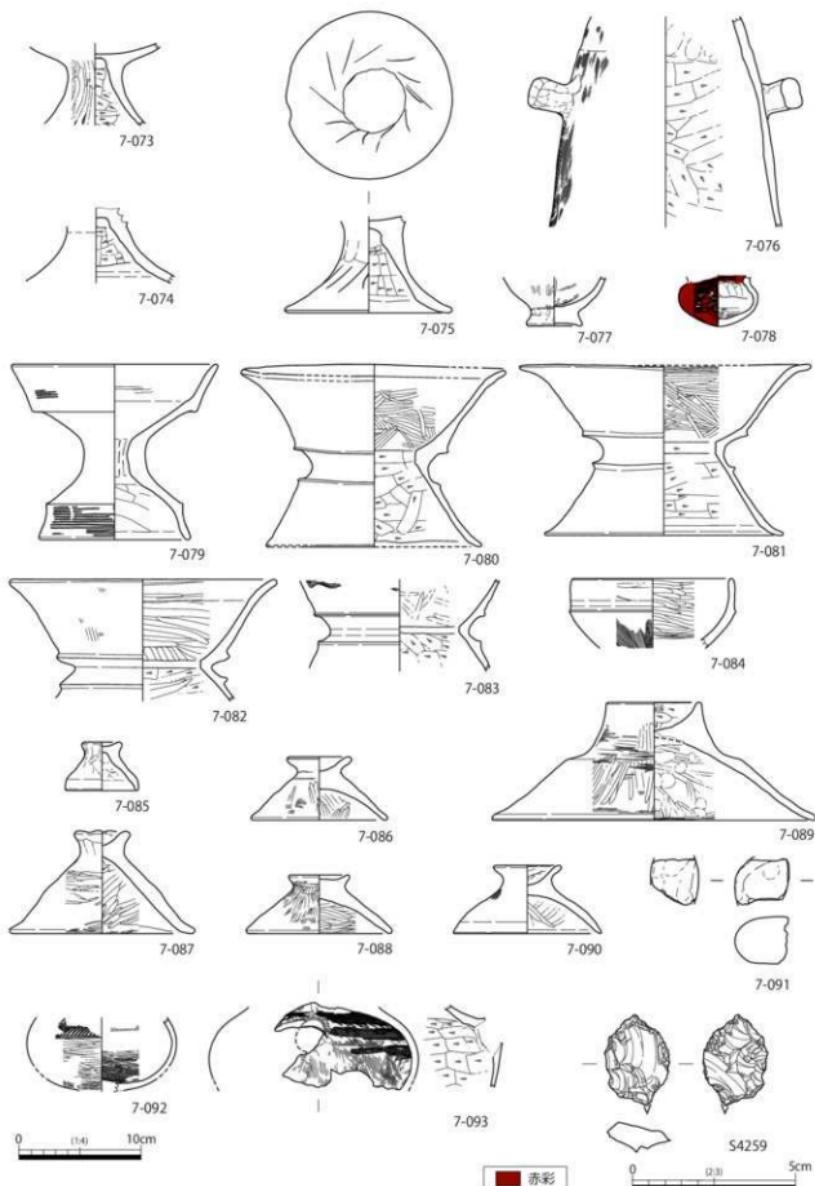


第IV-8-3図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物3

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-4図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物4

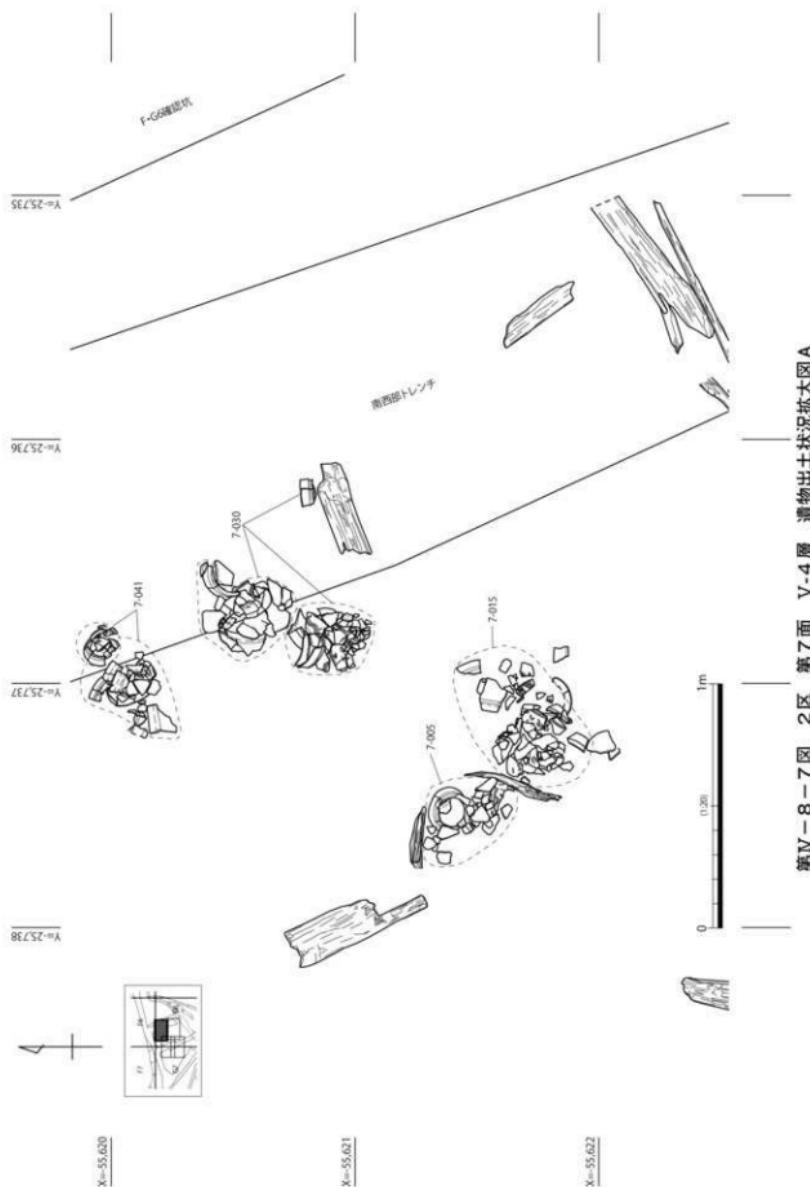


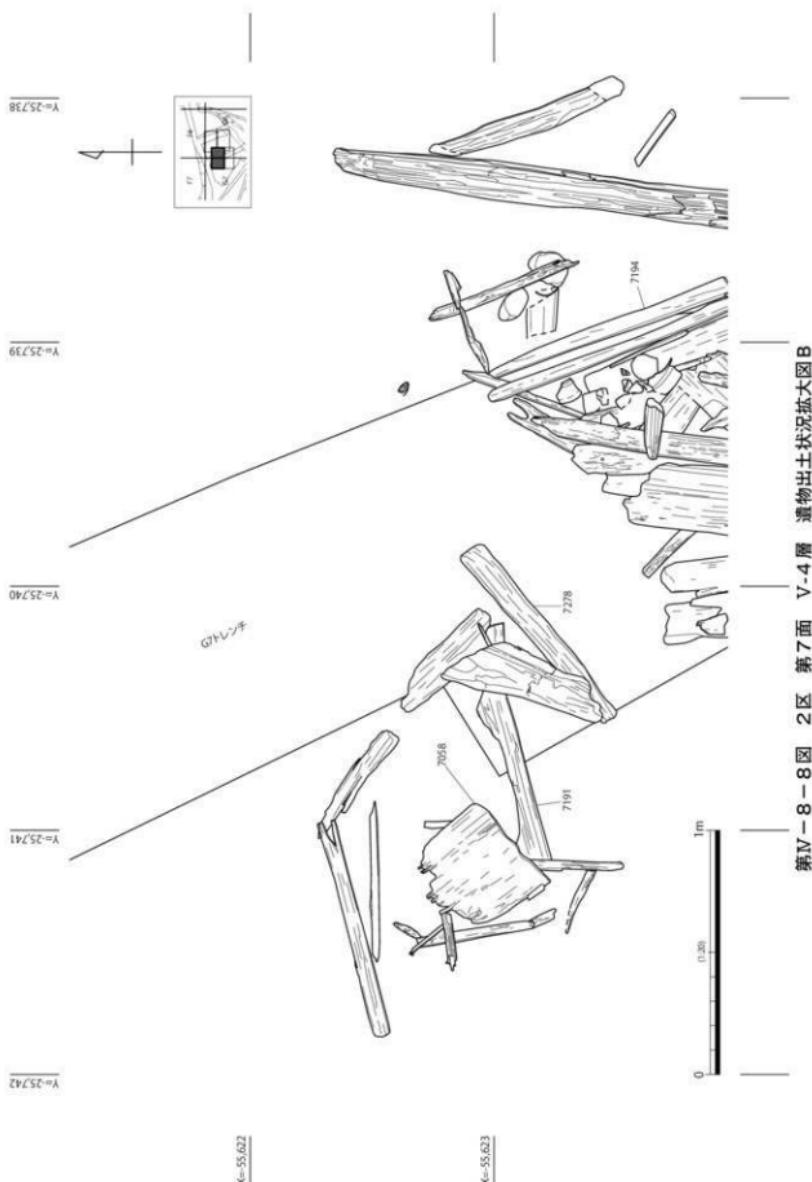
第IV-8-5図 2・3区 第7面 V-4層出土遺物5



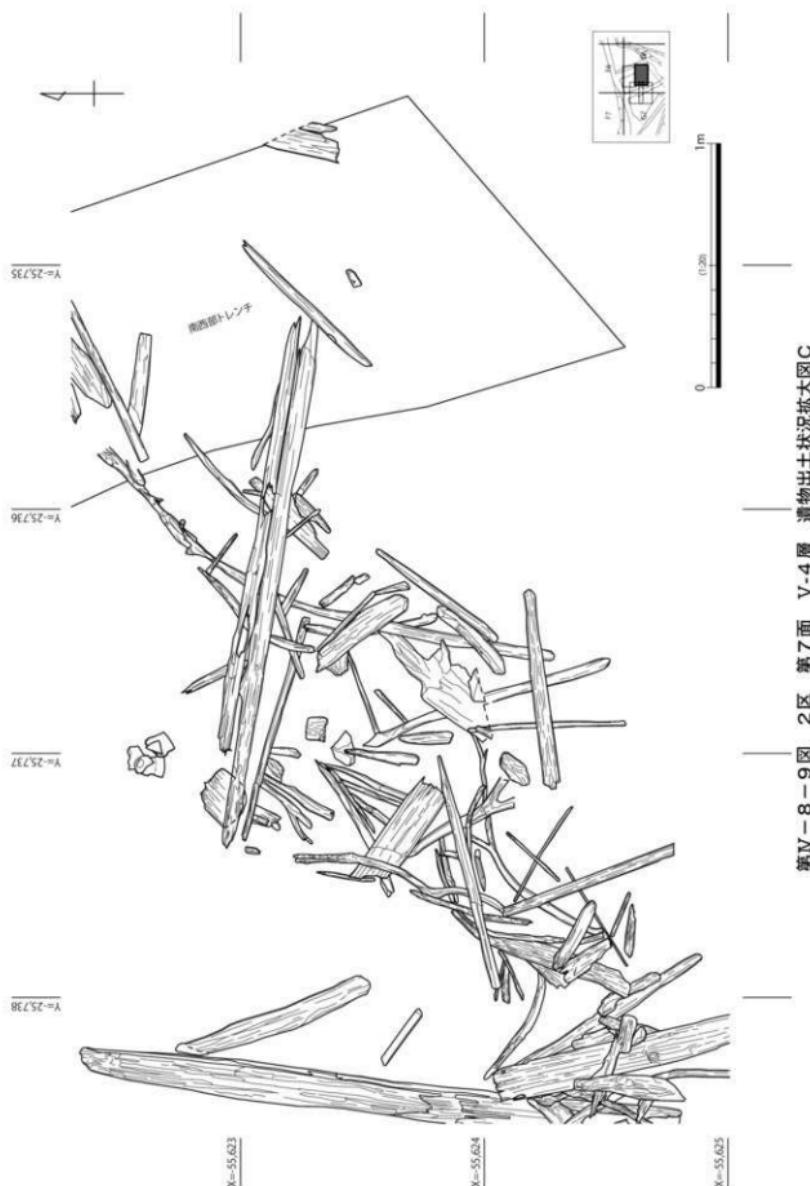
第N-8-6図 2・3区 第7面 V-4・5層 出土遺物分布図

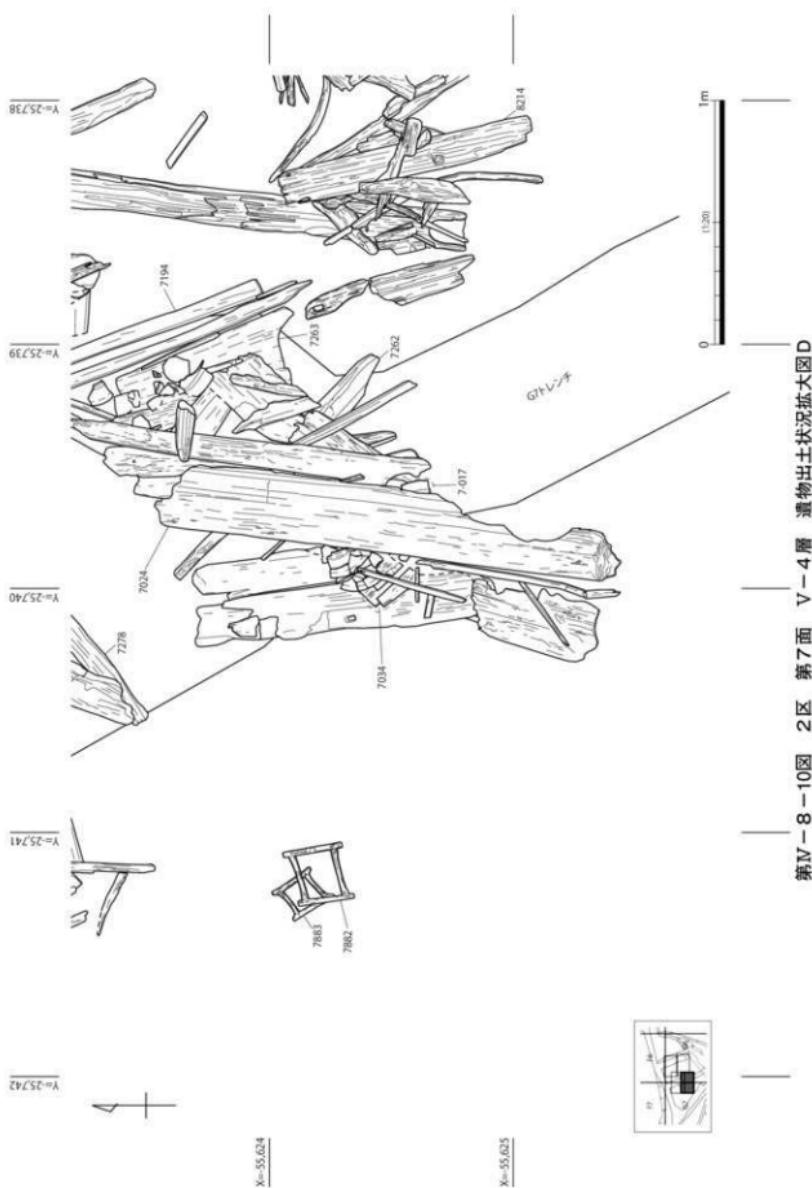
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



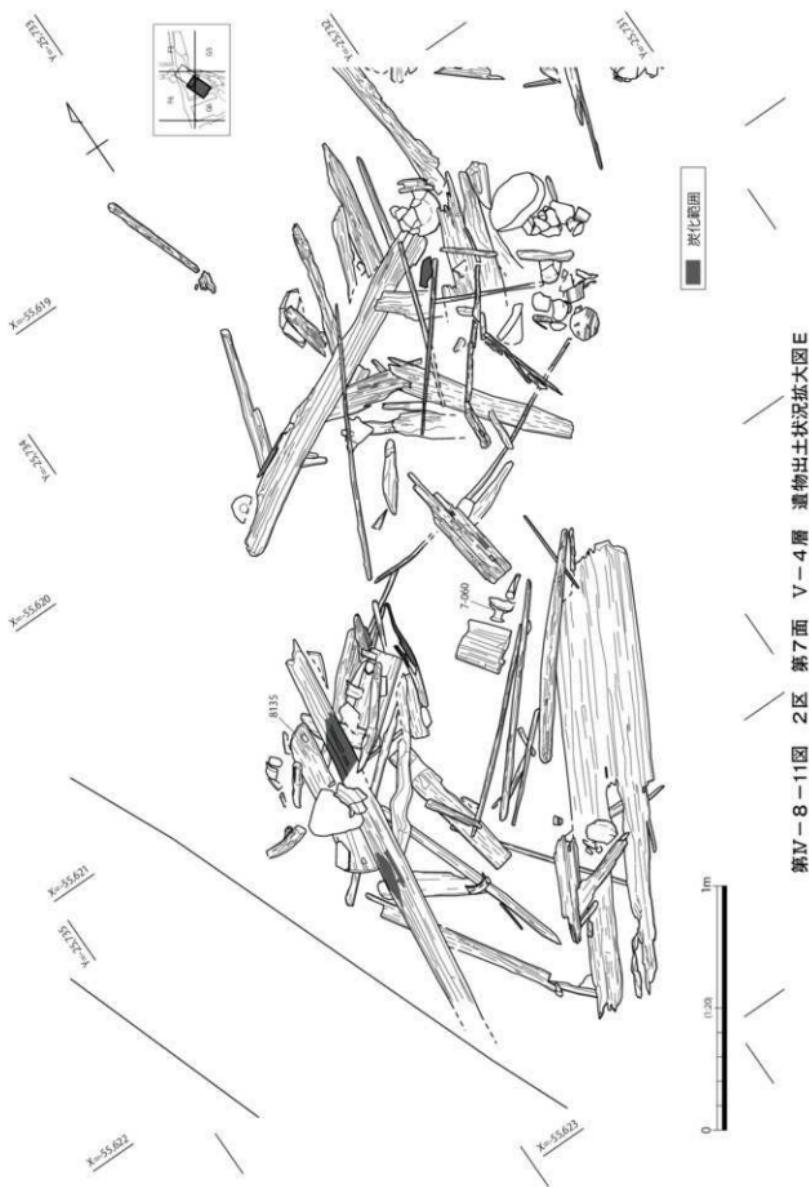


第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

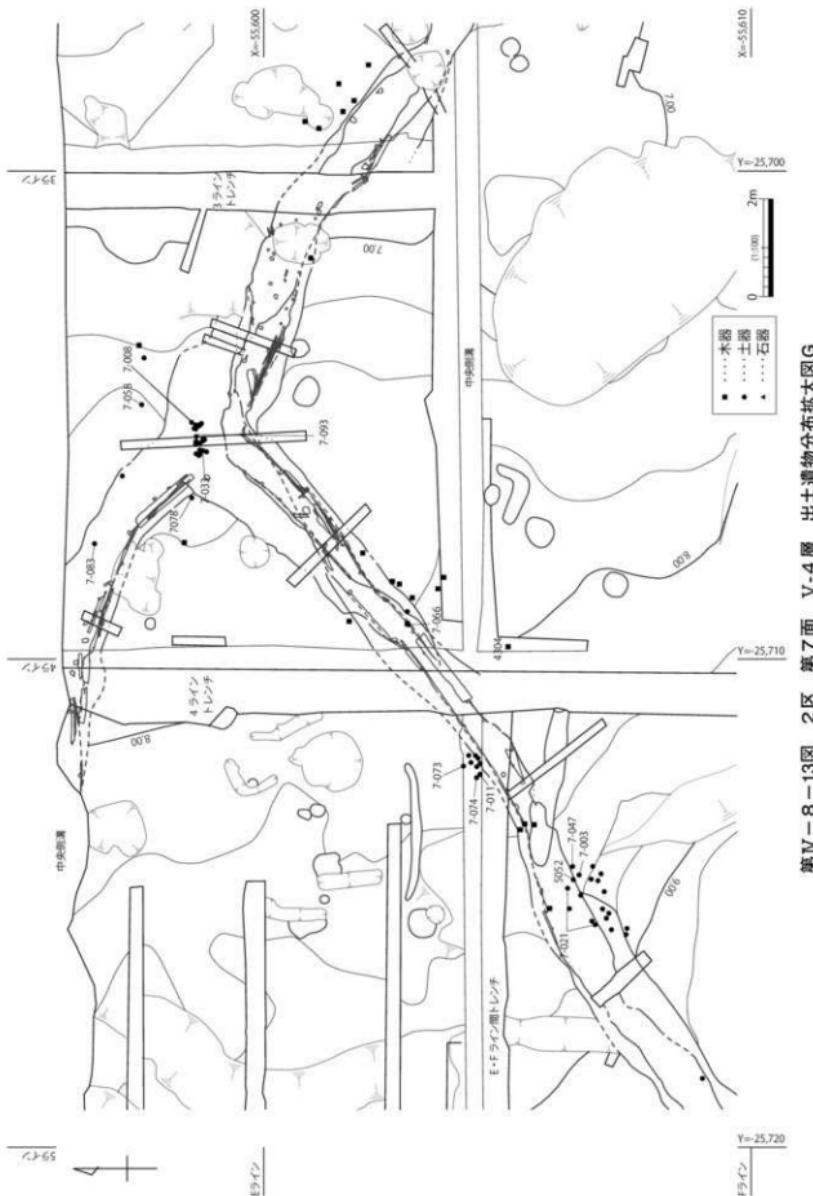




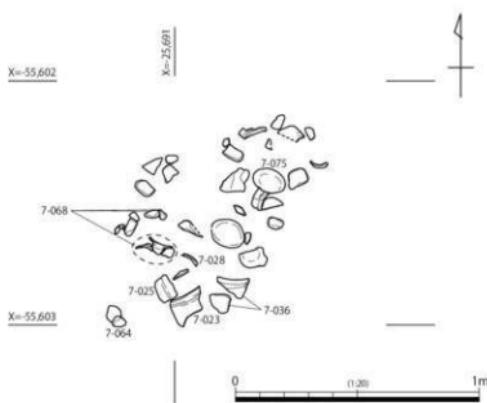
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査







第V-8-13圖 2區 第7面 V-4層 出土遺物分布拵大図 G



第IV-8-14図 2区 第7面 V-4層 遺物出土状況拡大図H

E 2グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.37m、短径0.32m、深さ0.2mである。断面形はコップ形で、北から北東側は中程がテラス状になる。また、底面から少し浮いた状態で、径約11.7cmの柱が残存していた。埋土中から、乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した。柱は芯持ち丸太材で末端部は平坦に加工している。(馬路)

2 S-792(第IV-8-20図)

E 2グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.39m、短径0.37m、深さ0.27mである。断面形は楕円形で、底面で一辺約0.2mの方形の板材を1枚検出した。礎板の可能性が考えられるが、土層断面で明確な柱痕は確認できなかった。埋土中から、乙亥正V期の土器小片が出土した(馬路)。

2 S-820(第IV-8-20図)

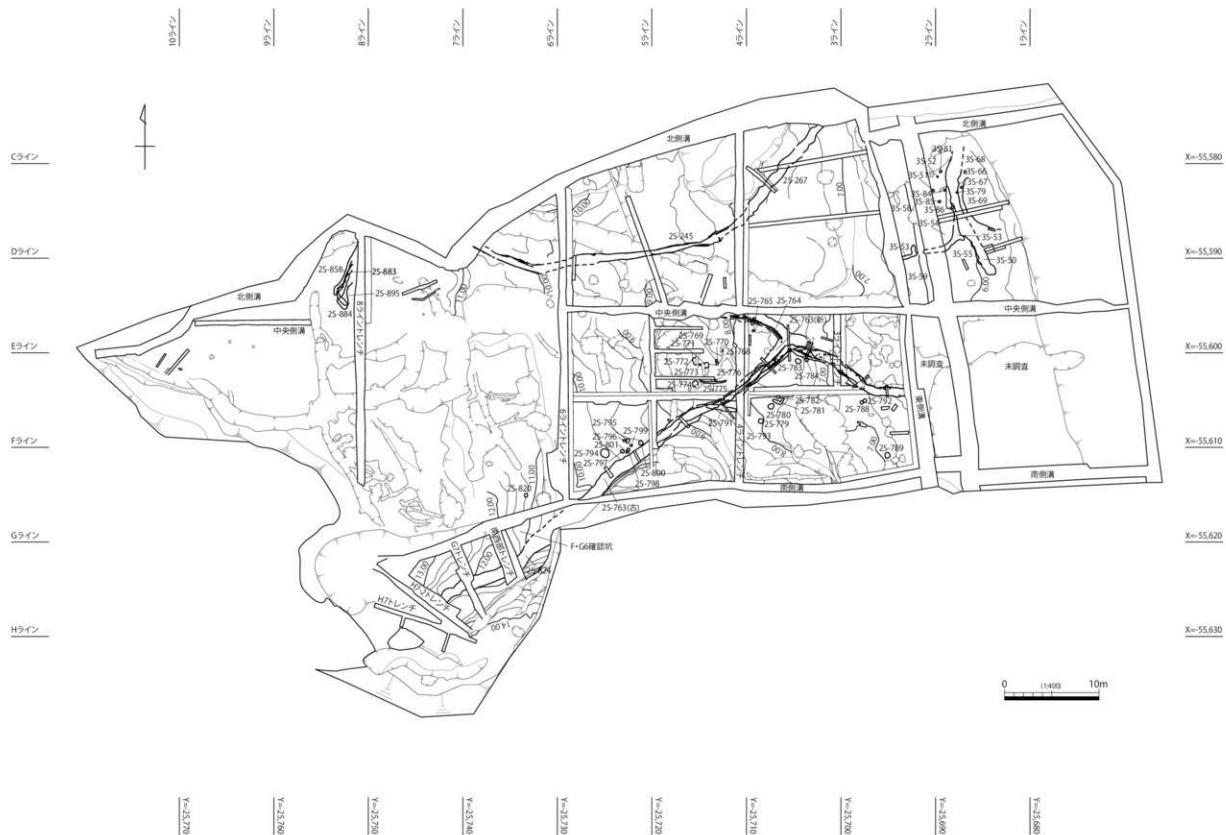
F 6グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.4m、短径0.34m、深さ0.23mである。断面形は長方形で、底面の中央部が一段深く凹む。この凹みに対応して、幅約0.11mの柱痕を確認した。埋土中から、乙亥正Ⅳ期の甕が出土した。(馬路)

3 S-79(第IV-8-21図)

C 1グリッドで検出した。溝(3 S-50)の調査後に、その肩部で検出したため、本来の平面形は不明である。断面形は楕円形で、底面から少し浮いた状態で径約0.18mの柱が残存していた。埋土中からは柱以外に遺物は出土しなかった。(馬路)

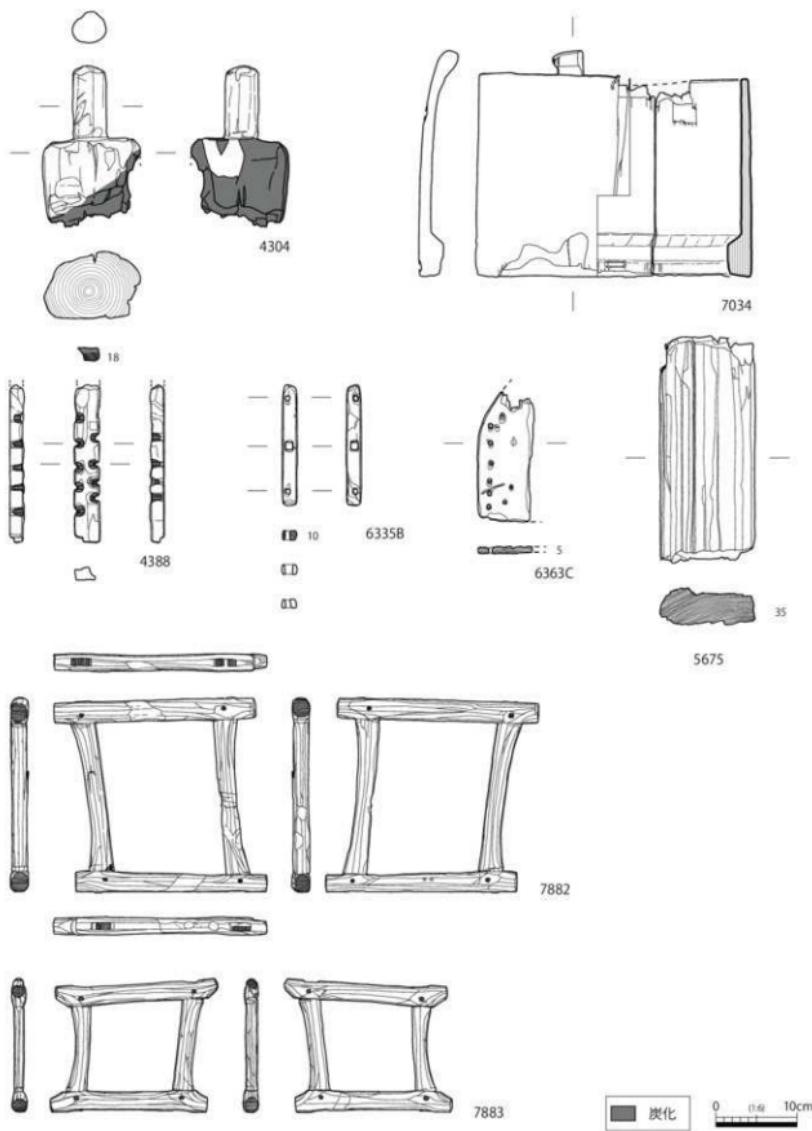
土坑

土坑は、2・3区において合計29基を確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。これらの内の主だったものについてのみ、個別に報告する。

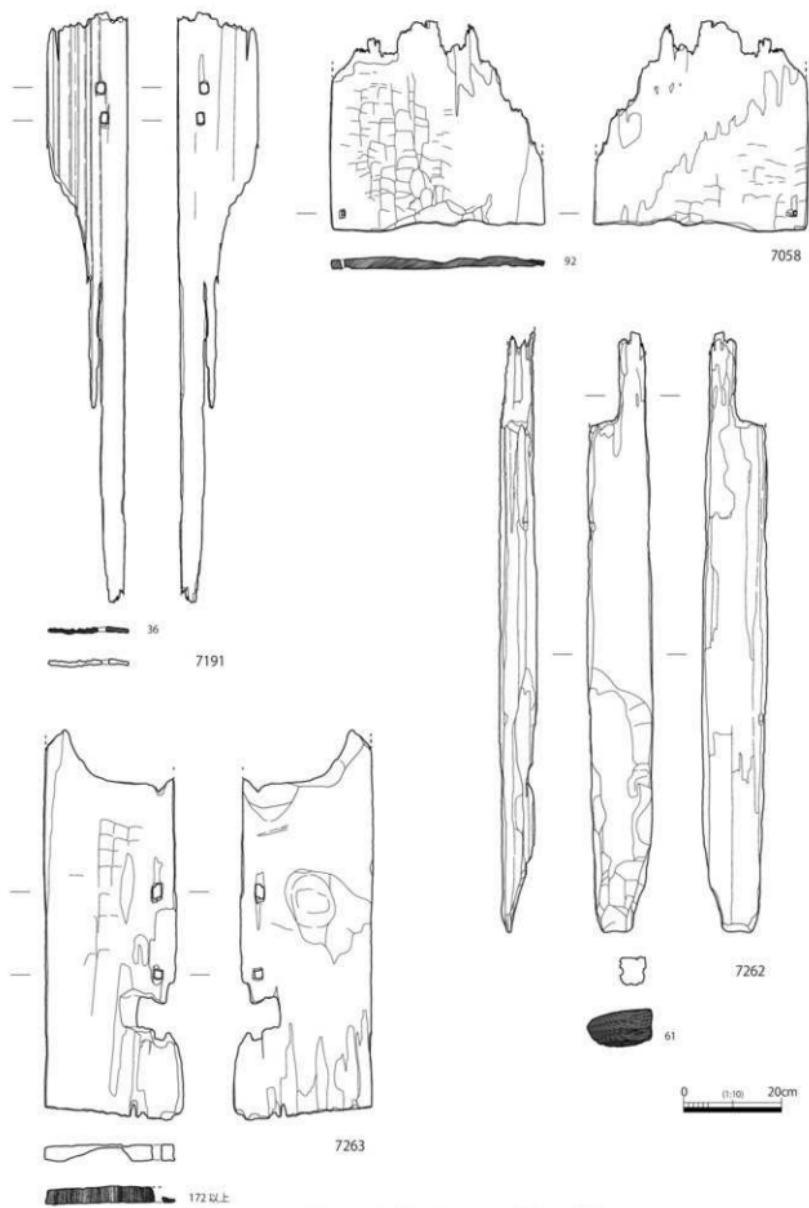


第IV-8-15図 2・3区 第7面 遺構配置図

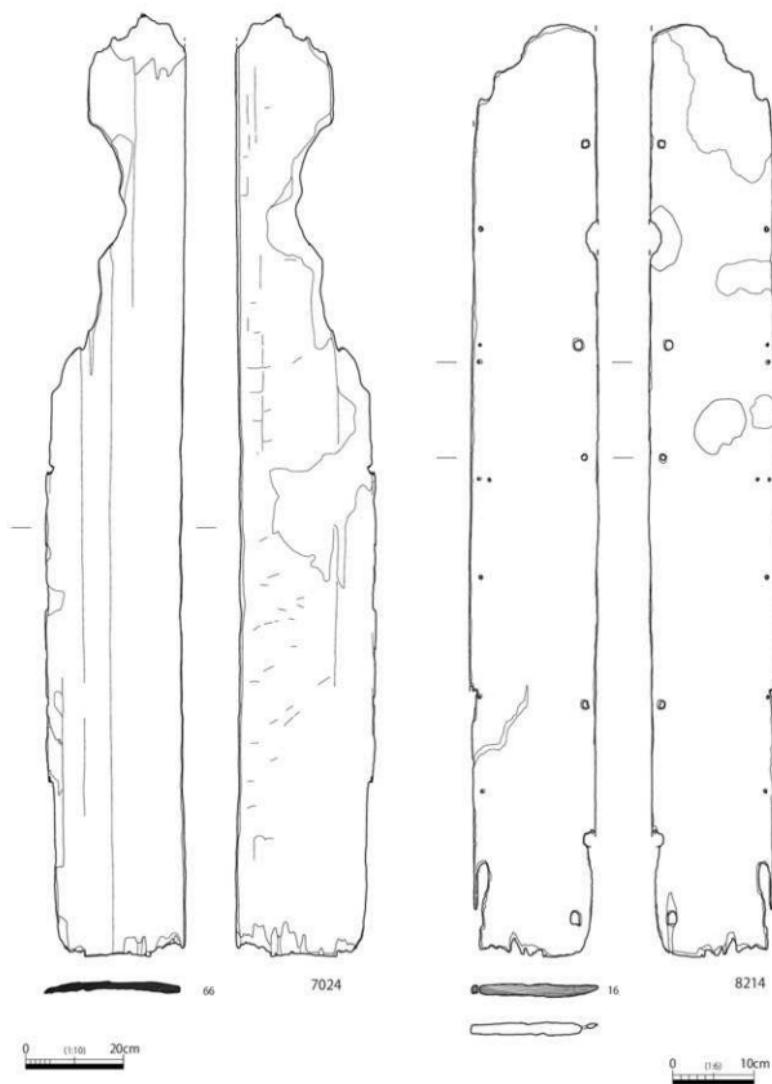
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



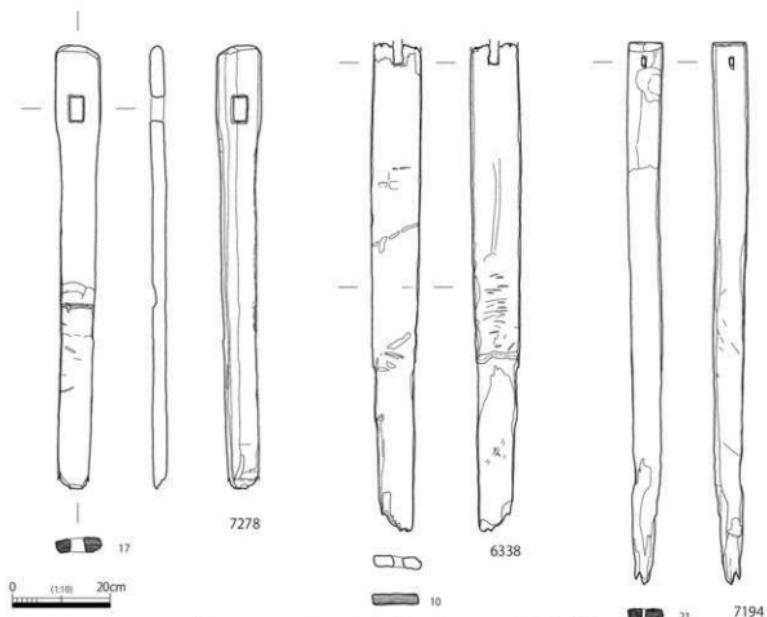
第IV-8-16図 2区 第7面 V-4層出土遺物6



第IV-8-17図 2区 第7面 V-4層出土遺物7



第IV-8-18図 2区 第7面 V-4層出土遺物8



第IV-8-19図 2区 第7面 V-4層出土遺物9

2 S-771(第IV-8-22図)

E 4グリッドで検出した。西側は攪乱により消滅しているが、平面形は隅丸方形と推測できる。長径0.55m、短径0.41m、深さ0.14mである。断面形は浅い椀形で、埋土中から乙亥正Ⅲ～Ⅶ期の土器小片が出土した。(馬路)

2 S-772(第IV-8-22図)

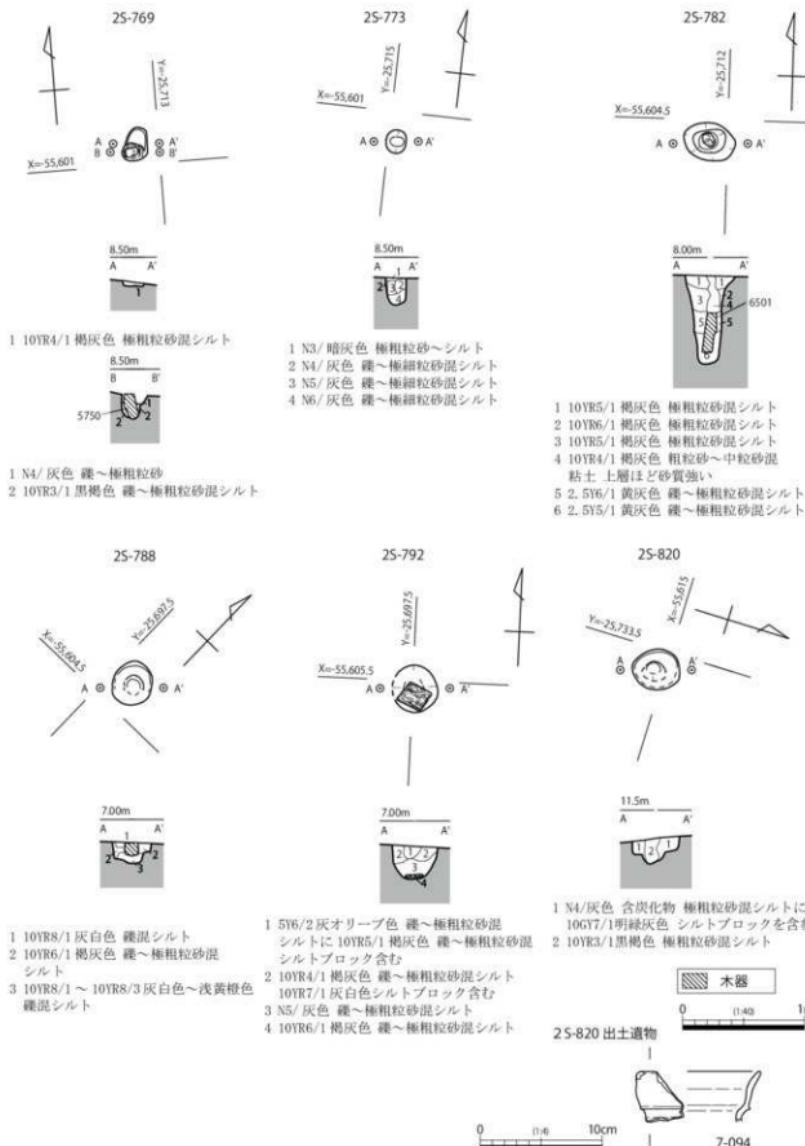
E 4グリッドで検出した。東側は攪乱により消滅しているが、平面形は歪な梢円形と推測できる。長径0.77m、短径0.37m、深さ0.19mである。断面は隅丸長方形で底面に凹凸がある。埋土中から土器小片が出土した。(馬路)

2 S-774(第IV-8-22図)

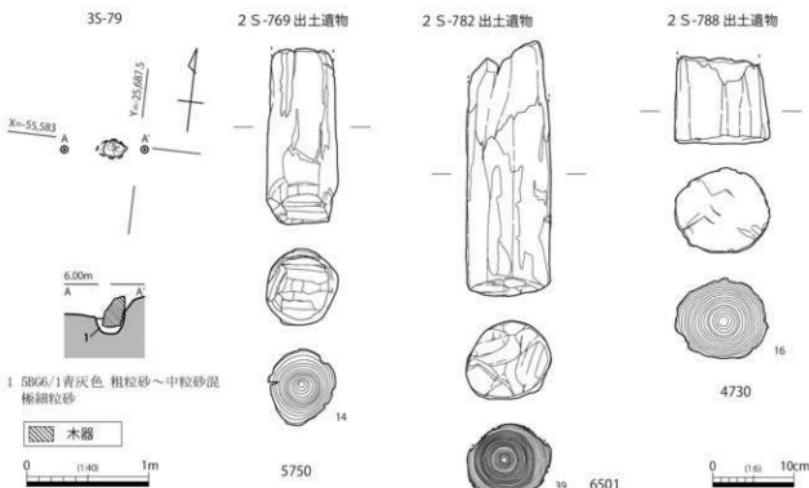
E 4グリッドで検出した。南東隅は攪乱により消滅しているが、平面形は隅丸方形と推測できる。長径0.64m、短径0.45m、深さ0.29mである。断面形は椀形で、埋土中から乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した(馬路)。

2 S-779(第IV-8-22図)

E 3グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.53m、短径0.5m、深さ0.22mである。断面形は椀形で、埋土中から土器小片が出土した(馬路)。



第N-8-20図 2区 第7面 柱穴(2S-769、773、782、788、792、820)
平・断面図及び出土遺物



第IV-8-21図 2・3区 第7面 柱穴(2S-769、782、788、3S-79) 平・断面図及び出土遺物

2 S-794(第IV-8-23図)

F 5グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.99m、短径0.88m、深さ0.14mである。断面形は皿形である。土坑中央部で、板材の小片が突き刺さったような状態で出土したが、底面に刺さっているわけではなく、埋没過程で入ったものと考えられる。埋土中から乙亥正VII期の土器が出土した。(馬路)

2 S-780(第IV-8-22図)

E 3グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長径0.66m、短径0.55m、深さ0.44mである。断面形はコップ形で、西側は上部ほど口が広がる。遺物は出土しなかった。(馬路)

2 S-783(第IV-8-2図)

E 3グリッドで検出した。平面形は梢円形で、長径0.61m、短径0.48m、深さ0.39mである。断面形は椀形である。乙亥正III～VII期の土器小片が出土した。(馬路)

2 S-784(第IV-8-22図)

E 3グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.39m、短径0.38m、深さ0.16mである。断面形は逆台形で、遺物は出土しなかった。(馬路)

2 S-789(第IV-8-23図)

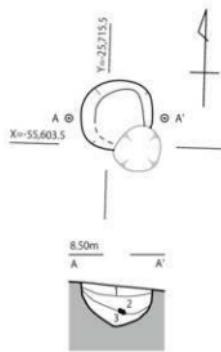
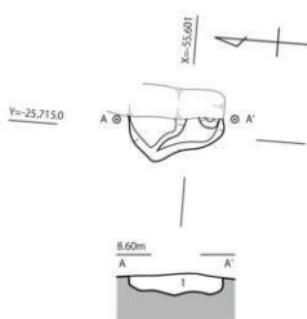
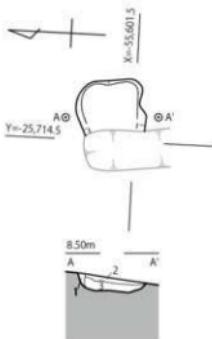
F 2グリッドで検出した。平面形は隅丸方形で、長径0.56m、短径0.53m、深さ0.22mである。断

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

2S-771

2S-772

2S-774



1 10YR6/1 暗灰色 糙～シルト

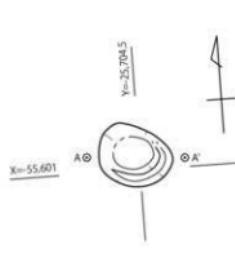
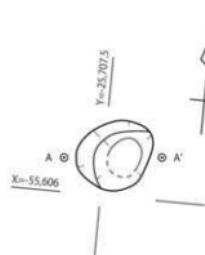
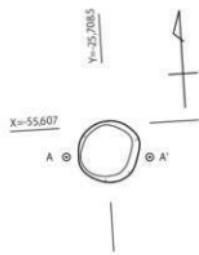
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 糙～極粗粒砂混シルト
- 2 10YR5/1 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルトに 10YR8/1 灰白色 糙混シルトブロックを含む
- 3 N3/ 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト

- 1 10YR5/1 暗灰色 糙～極細粒砂混シルト
- 2 10YR4/1 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト～粘土
- 3 N4/ 灰色 粗粒砂混シルト

2S-779

2S-780

2S-783



- 1 10YR6/2 灰黄褐色 糙～極粗粒砂混シルトに 10YR8/1 灰白色 糙混シルトブロックを含む

- 2 10YR5/1 暗灰色 糙～極細粒砂混シルト
- 1 10YR7/2 にぶい黄橙色 糙混シルト
- 2 10YR6/1 暗灰色 含炭化物 糙～極粗粒砂混シルト
- 3 10YR4/1 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト
- 4 10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂混シルト～粘土

- 1 10YR7/2 にぶい黄橙色 糙混シルト

- 2 10YR6/1 暗灰色 含炭化物 糙～極粗粒砂混シルト

- 3 N4/ 灰色 糙～極粗粒砂混シルト

- 4 N3/ 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト

- 1 10YR5/2 灰黄褐色 糙～極粗粒砂混シルト

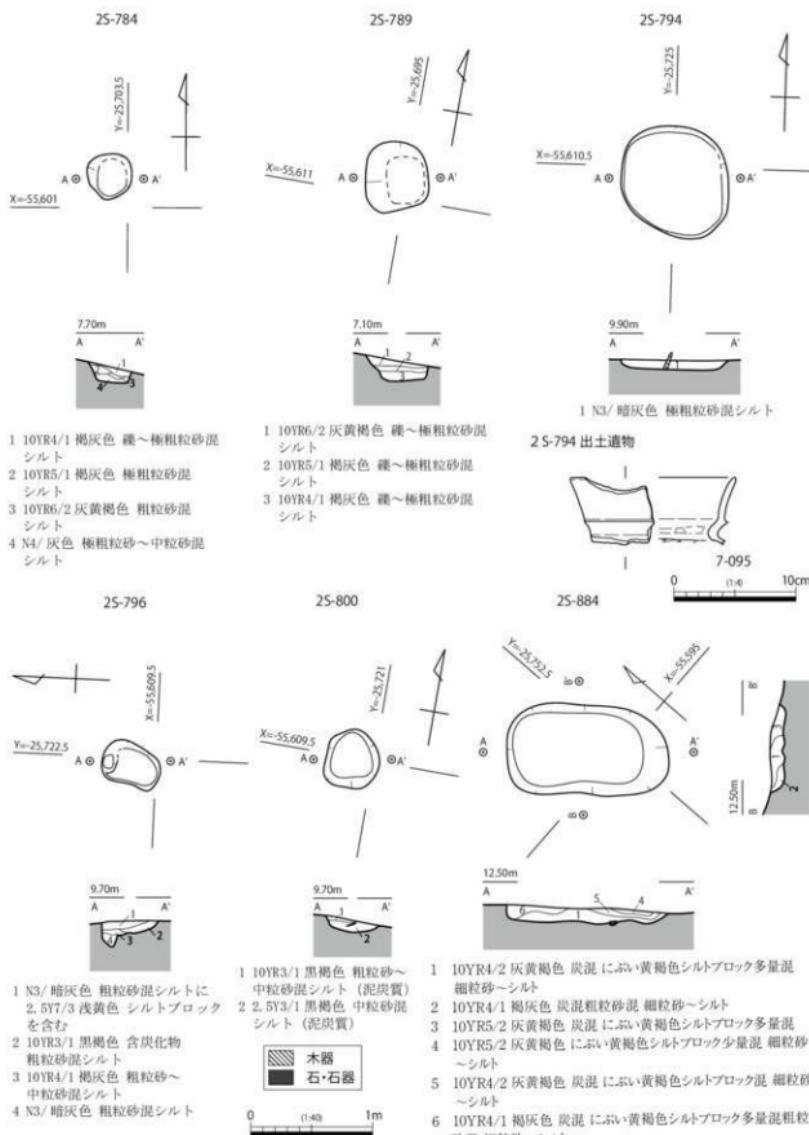
- 2 10YR4/1 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト

- 3 N4/ 灰色 糙～極粗粒砂混シルト

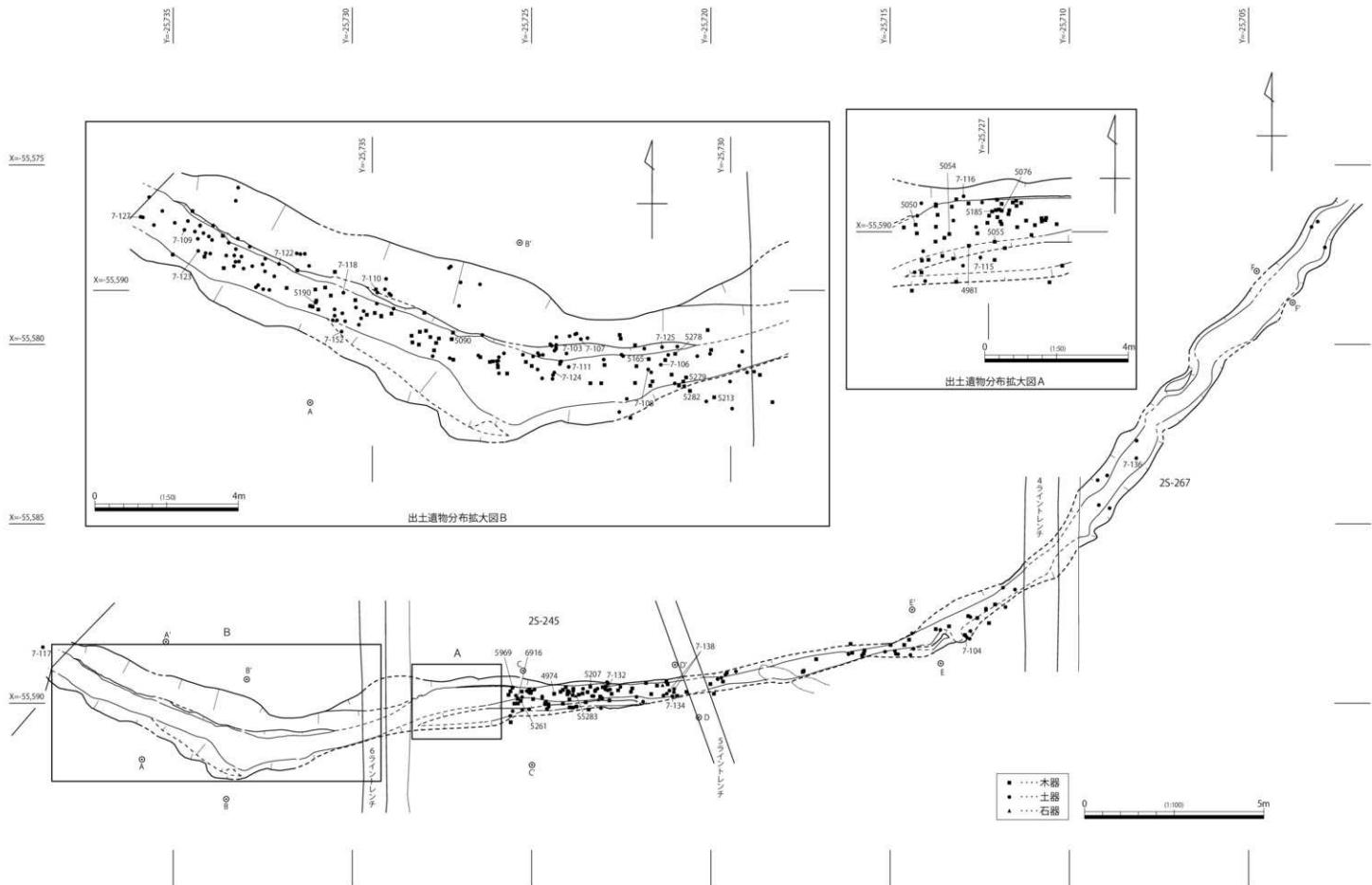
- 4 N3/ 暗灰色 糙～極粗粒砂混シルト



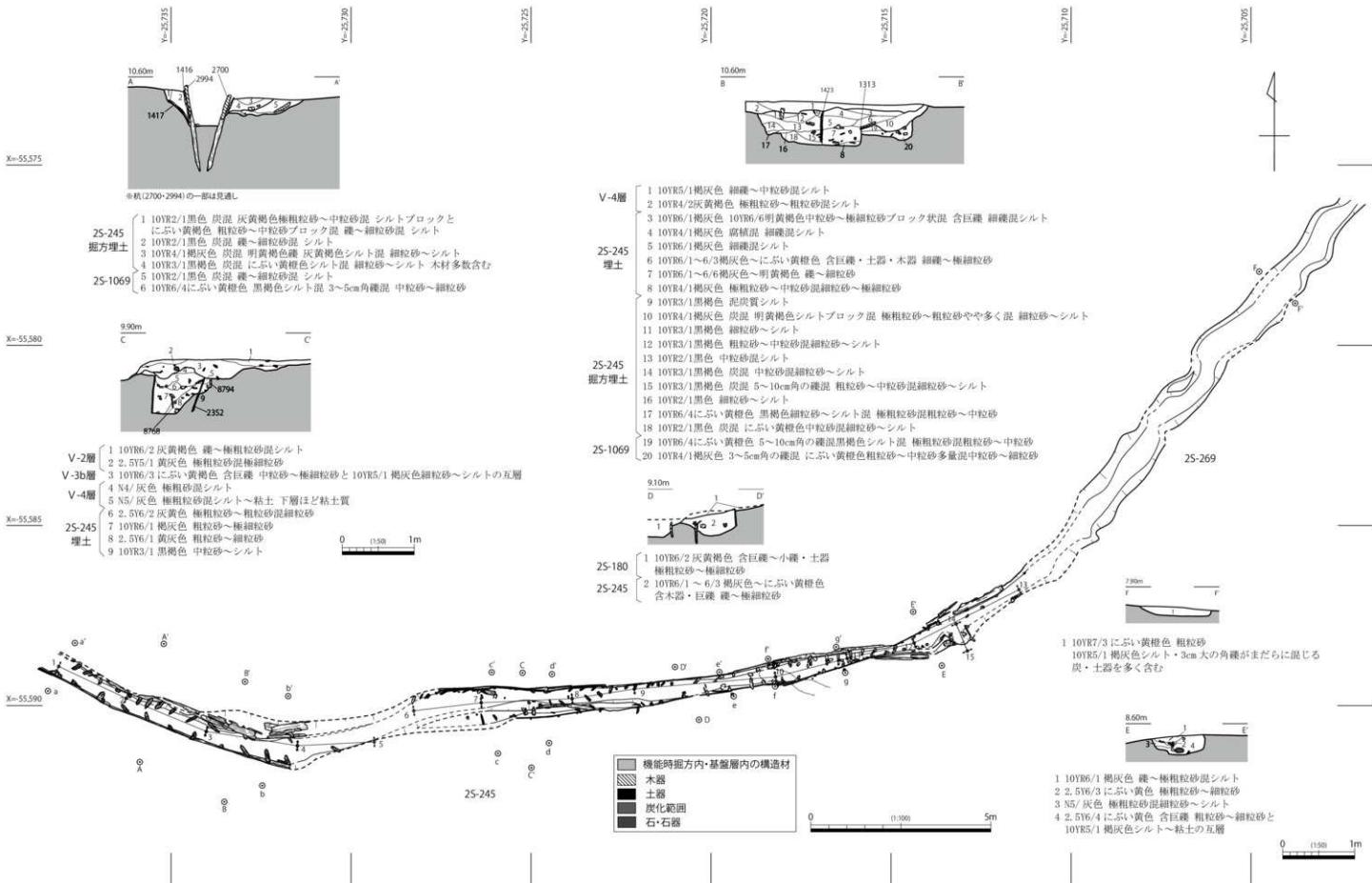
第IV-8-22図 2区 第7面 土坑(2S-771、772、774、779、780、783) 平・断面図



第IV-8-23図 2区 第7面 土坑(2S-784、789、794、796、800、884) 平・断面図及び出土遺物

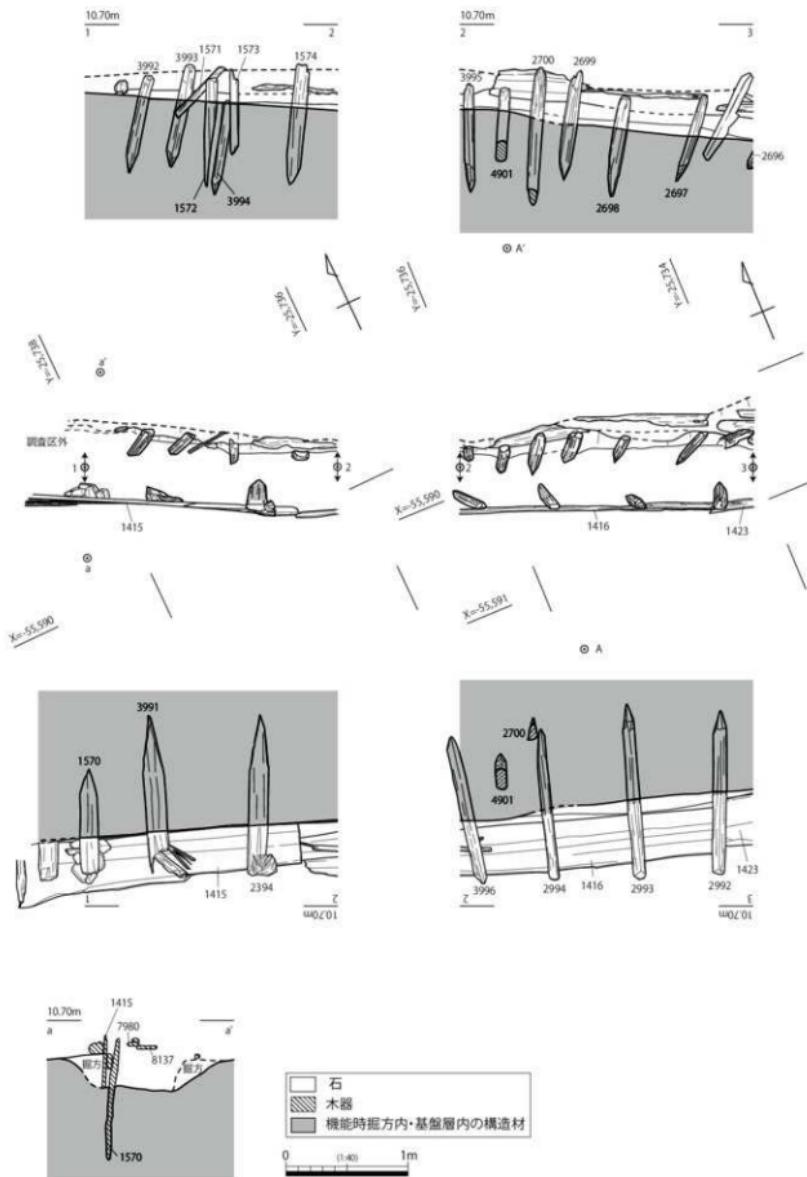


第IV-8-24図 2区 第7面 溝(2S-245・267) 完掘状況全体図及び出土遺物分布図



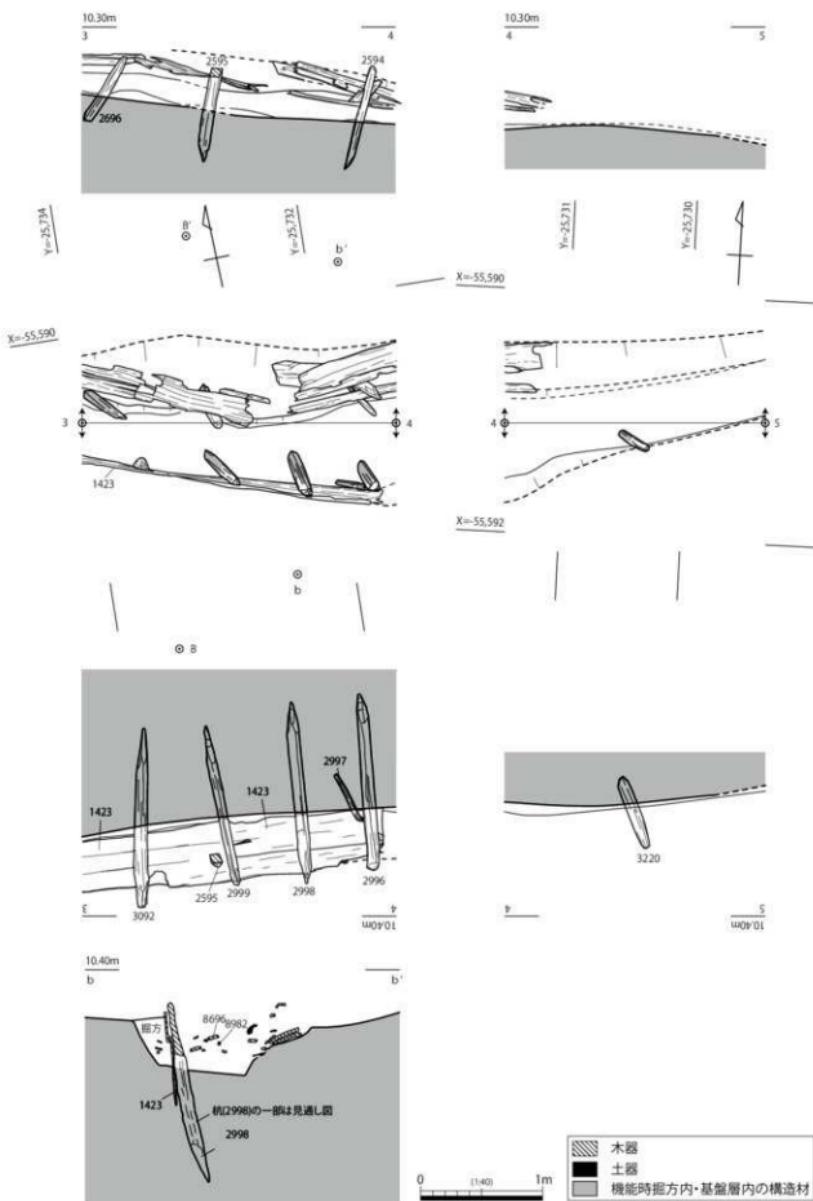
第IV-8-25図 2区 第7面 溝(2S-245・269)機能時全体図

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



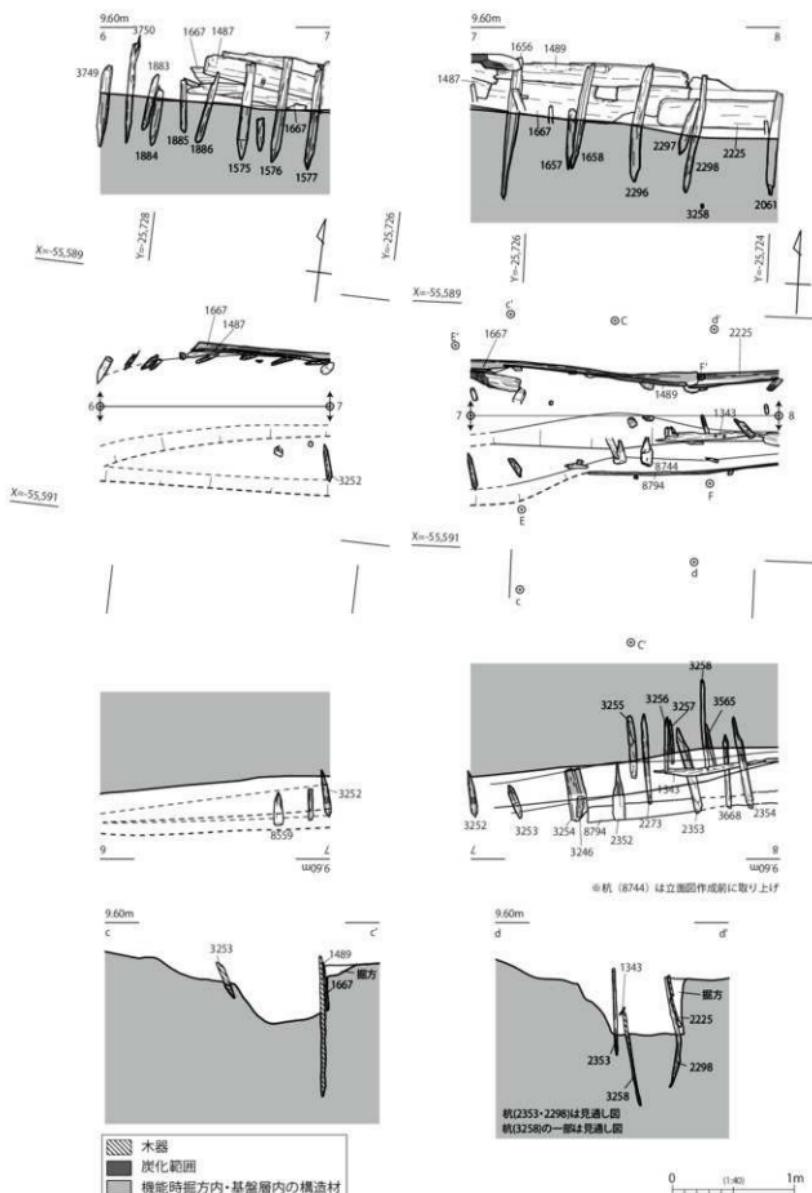
第IV-8-26図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図 1

第IV章 2・3区の調査成果

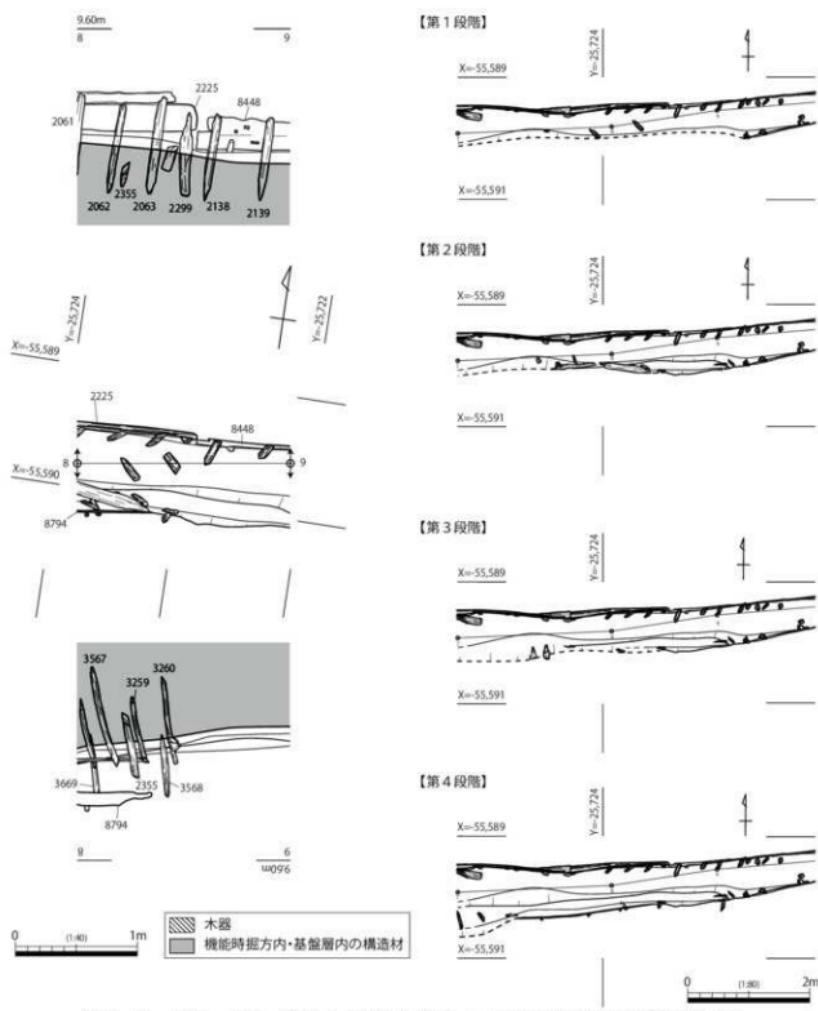


第IV-8-27図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図2

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-28図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図3

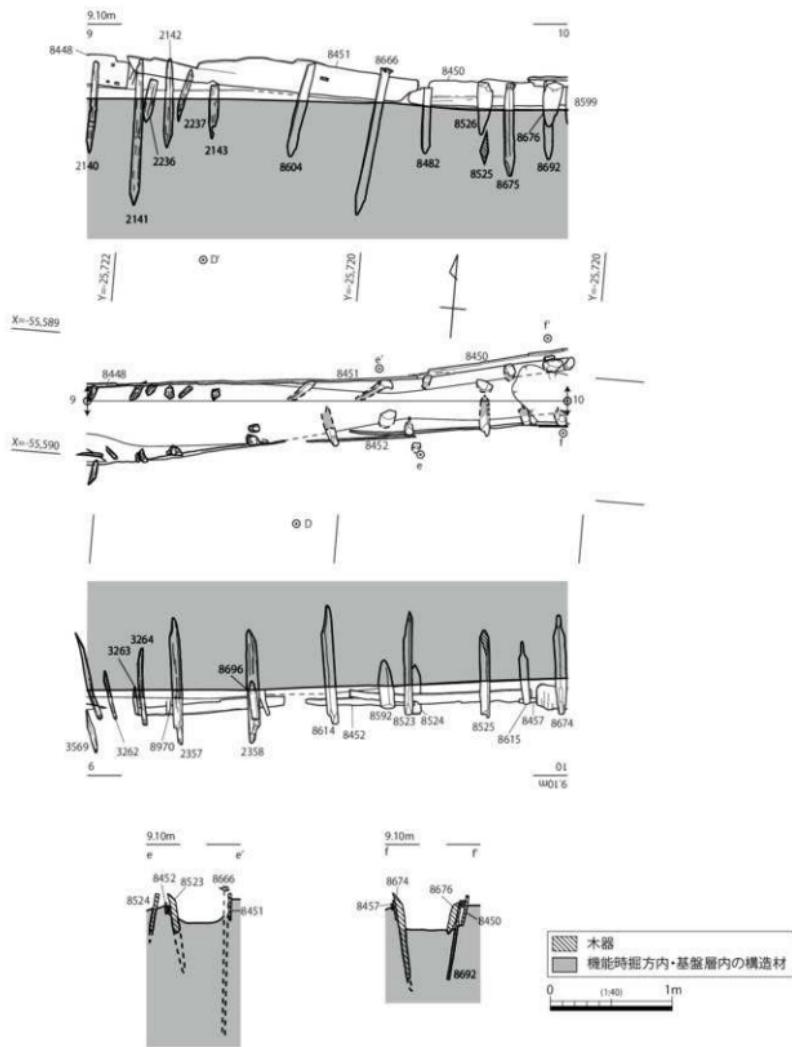


第IV-8-29図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図4及び変遷模式図

面形は逆台形で、埋土中から乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した(馬路)。

2 S-796(第IV-8-23図)

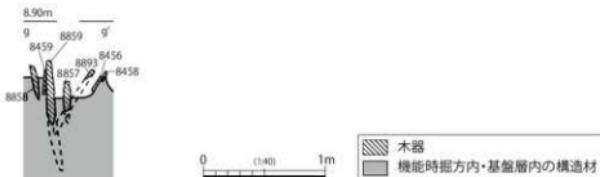
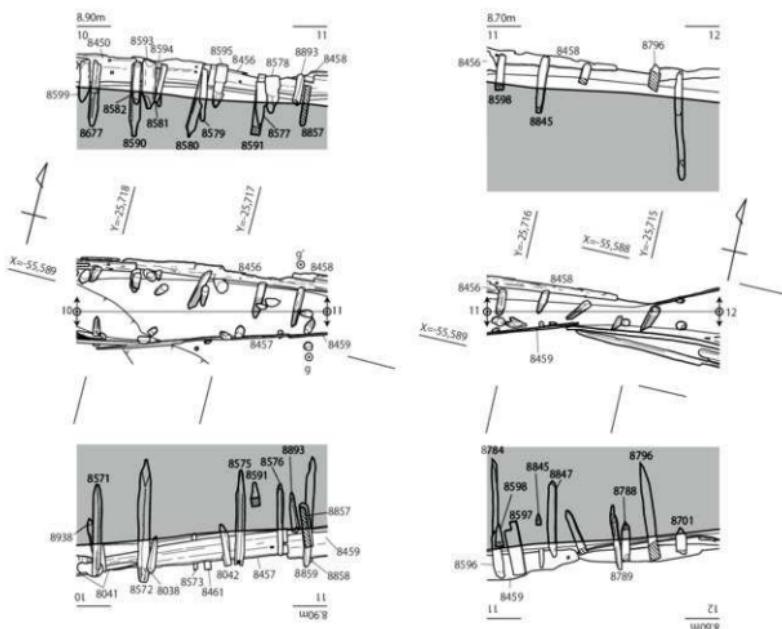
E 5グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.49m、短径0.35m、深さ0.23mである。断面形は皿形で、北端の底部が円形に一段深く凹む。遺物は出土しなかった(馬路)。



第IV-8-30図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図5

2S-800(第IV-8-23図)

E 5 グリッドで検出した。平面形は歪な楕円形で、長径0.48m、短径0.48m、深さ0.14mである。断面形は楕形で、埋土中から乙亥正三～七期の土器小片が出土した(馬路)。



第IV-8-31図 2区 第7面 溝(2S-245) 平・立・断面図6

2 S-884(第IV-8-23図)

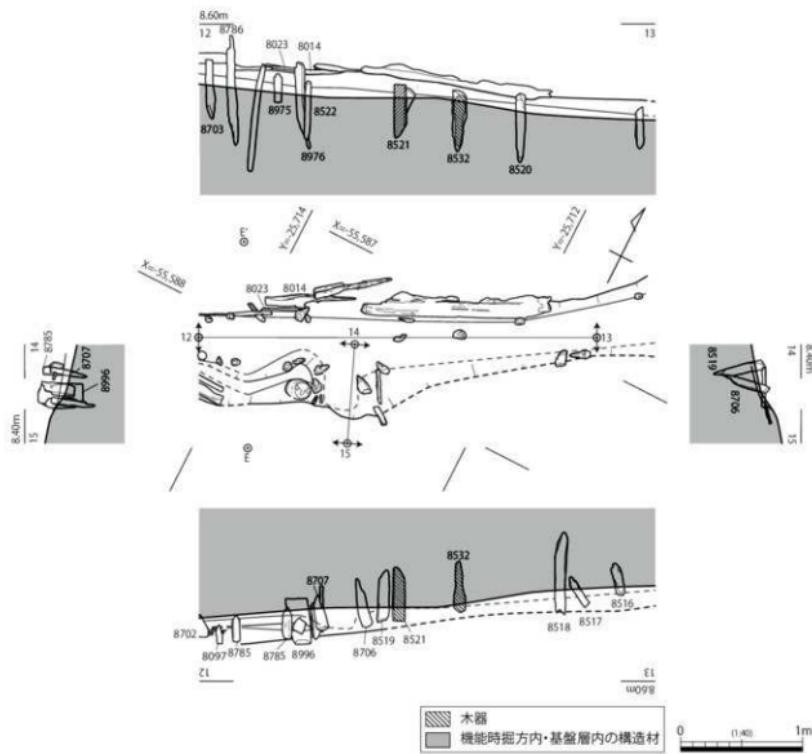
D 8グリッドで検出した土坑である。長径 1.32m、短径 0.75m、深さ 0.16m で、平面は正な方形をなす。埋土中から土器小片が出土している。(岡野)

溝

2 S-245・267(第IV-8-24～91図)

調査区北側の3ラインから7ラインにかけて検出した。北側丘陵が南へ張り出した裾部に沿って、北西から北東へ緩やかに弯曲して流れる。4ライントレンチの約3m西側で南岸の横板が途切れ、南に分岐してわずかに延びる。分岐部分から南側では杭の痕跡などは確認できなかった。

延長は約42.6mあり、その内4ライントレンチ以西の約28.6mには横板と杭による護岸を伴う。こ



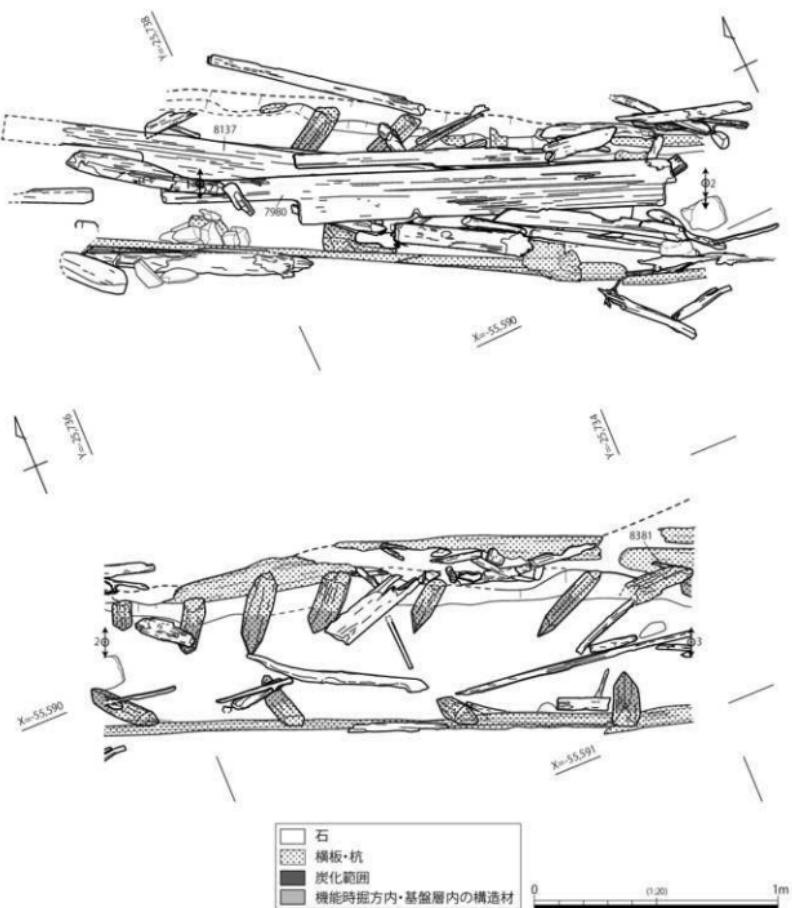
第N-8-32図 2区 第7面 満(2S-245) 平・立・断面図7

の護岸を伴う部分を2S-245、伴わない東側部分を2S-267と呼び分けて調査を行った。

2 S-245は、6ライントレーナーを挟んで東西約6mの幅で、上層のV-3 b層による擾乱を受けて、護岸が破壊されていた。特に南岸は、北西から南東に流れる溝が東向きに流れを変える屈曲部の攻撃面にあたるため、大きく破壊され、護岸材は残存しなかった。北岸は、立面ポイント1・4間で横板が北側へ押し倒されており、残存状態が悪い。B B'断面のやや東側部分では横板の上に人頭大の礫が乗っていたほか、埋土中にも拳大～人頭大の礫が含まれており、埋没過程の最終段階で洪水による破壊があったことを想定できる。

護岸の基本的な構造は、機能部分よりも一回り外側に二段掘りないし断面逆台形を呈するように掘方を掘削し、横板と杭を設置する。B B' 断面やC C' 断面から横板はほぼ垂直に立てられたと考えられる。杭は、先端を溝の中心寄りに斜めにして打ち込み、横板との間に隙間ができた箇所には、礫を詰めて隙間を埋めている(立面ポイント1-2間)。

立面ポイント1-4間の南岸は護岸材の残存状態が良く、横板の幅は0.4～0.5m、長さ約2.5～3mの材を使用していた。杭は、転用した分割材を利用し、約0.55～0.83m間隔で溝の底面から約0.56～0.95

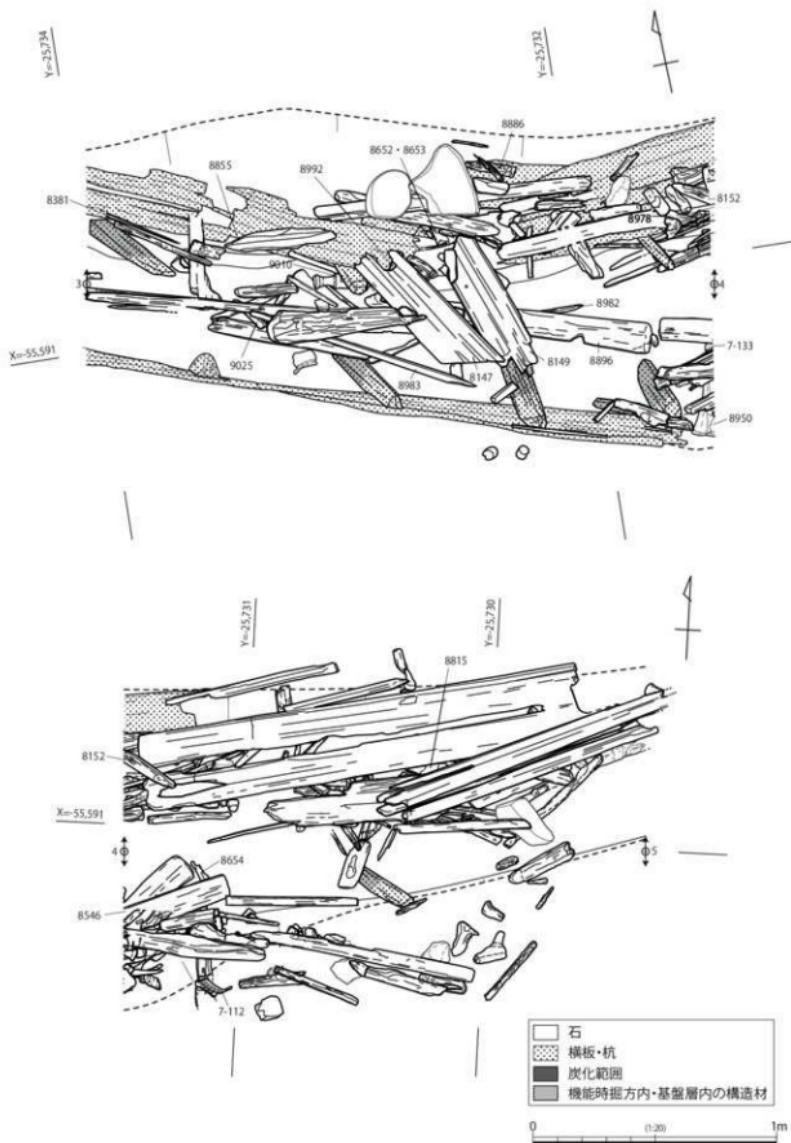


第N-8-33図 2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図1

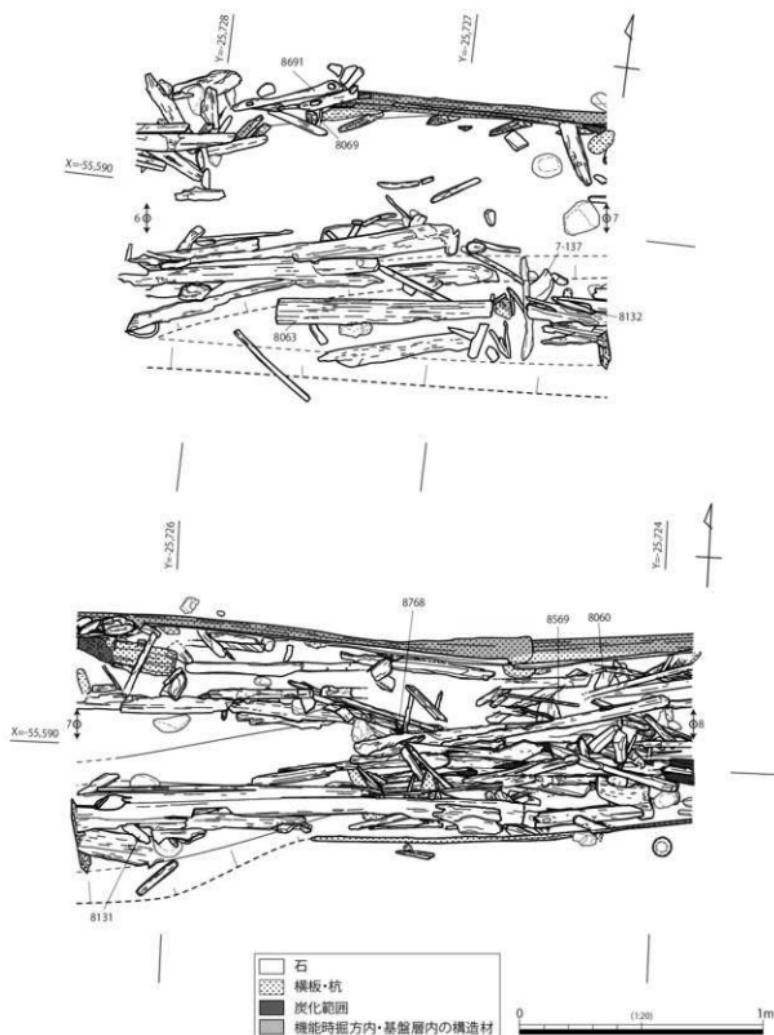
mの深さまで打ち込まれている。北岸は、横板の残存状態が悪く、掘方内の材との区別がつきにくい箇所もあった。杭は、西側ほど間隔が狭く0.2~0.4m程度で、南岸よりも狭い間隔で多くの本数が打ち込まれており、東側へ行くにつれて間隔が広くなり0.6~1.2mへと広がる。

立面ポイント6-9間は、西側の6ライントレーナ寄りほど残存状態が悪い。特に残存状態が悪い南岸は、CC'断面と残存する杭列と横板から複数回の補修が行われたと考えられる。平面、断面で直接切り合い関係を確認したわけではないが、溝を内側にずらしながら補修したとすると、最終段階の横板が残存するか、断面でその痕跡を確認できる可能性を考えられるが、そのような状況は認められなかった。南岸に帰属する横板は2点検出したが、1点は溝内で内側に倒れて埋もれた状態

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



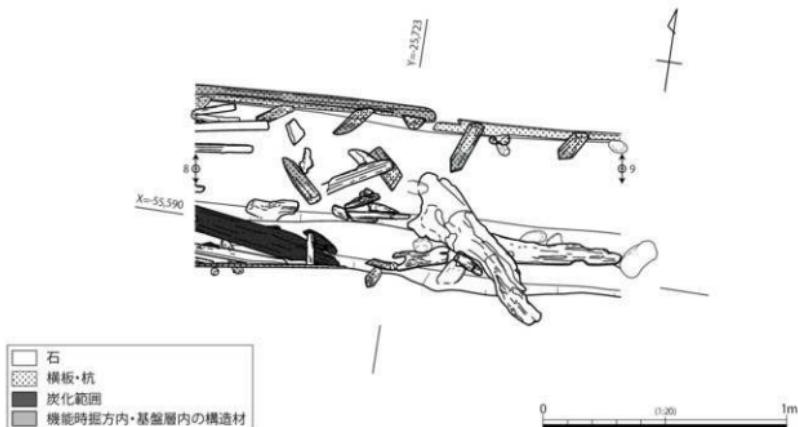
第IV-8-34図 2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図2



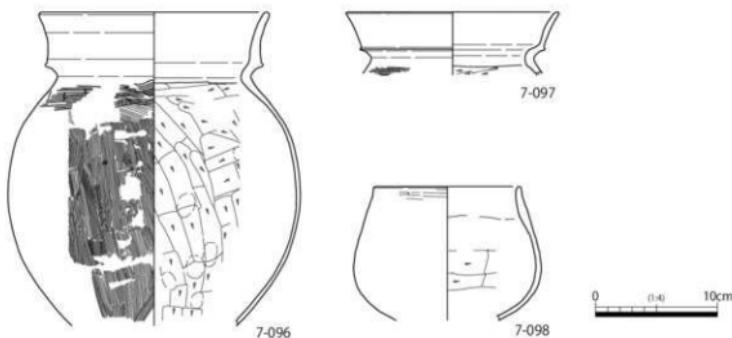
第IV-8-35図 2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図3

(1343)、残りの1点は南岸の際に原位置を保った状態(8794)だったことから、内側の方が古く、外側が新しいと考えられる。

内側から外側に溝を広げながら補修が行われた可能性が高いと考えると、CC'断面の6～8層に対応する部分が最も古い段階の溝と考えられ、これに伴う横板は認められない。杭は2273、2354、



第IV-8-36図 2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図4



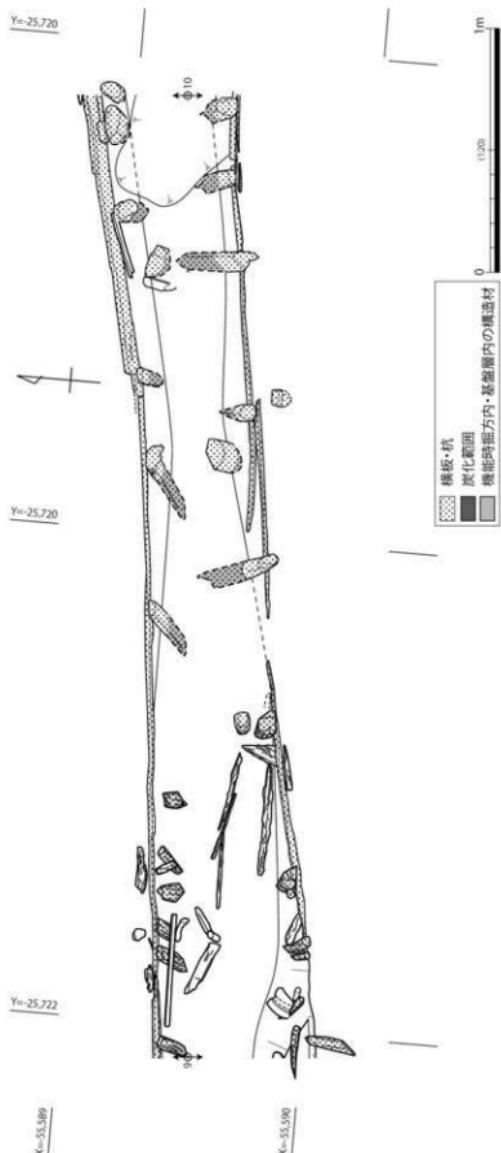
第IV-8-37図 2区 第7面 溝(2S-267) 出土遺物

2355などが対応すると考えられる(第IV-8-29図)。

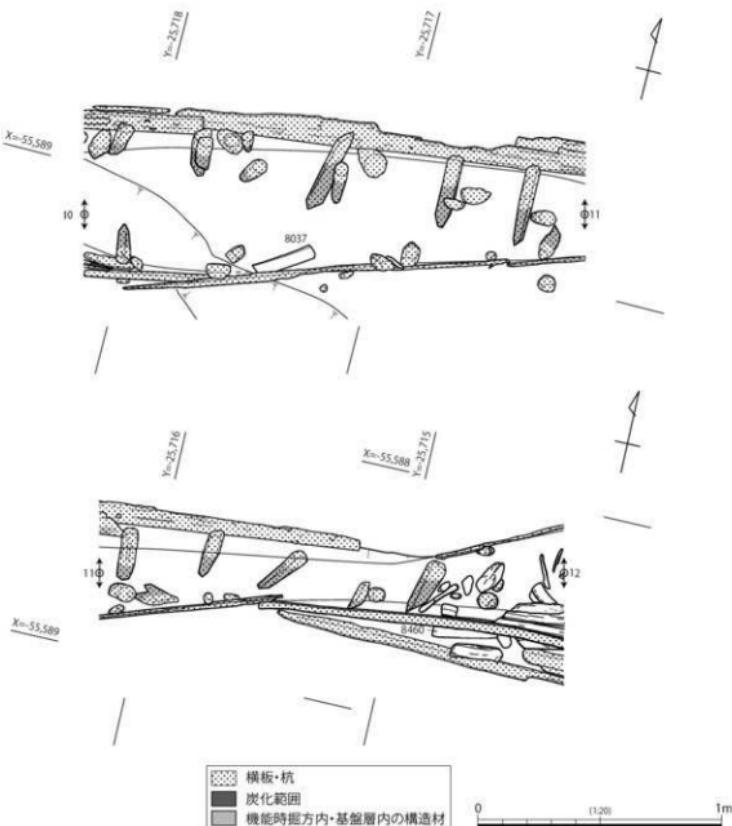
第2段階は、横板1343とこれに伴うと考えられる杭3255、3256、3257、3258、3567、3259である。横板の後ろ側に堆積した砂層の土圧により横板は内側に傾き、西側では溝底面から浮いた状態、東側(立面ポイント8・9間)では南岸のテラスに乗った状態で検出した。護岸を修復する段階で南側に若干広げるとともに東側では高さ数cmの低いテラスを形成している。西側部分では横板がテラスの下に設置されていたと考えられるから、この段階では西側部分のテラスは形成されていなかった可能性が高い。

第3段階は、C C'断面の杭2252に対応する。他にテラス落ち際で、前段階の横板のすぐ後ろに打ち込まれた杭2353が対応すると考えられる。横板は確認できなかったが、南岸テラスの落ち際で杭のすぐ後ろに設置したものと想定できる。

第4段階は、C C'断面のテラスに対応し、既に第2段階で東側に形成されていたテラスを西側ま



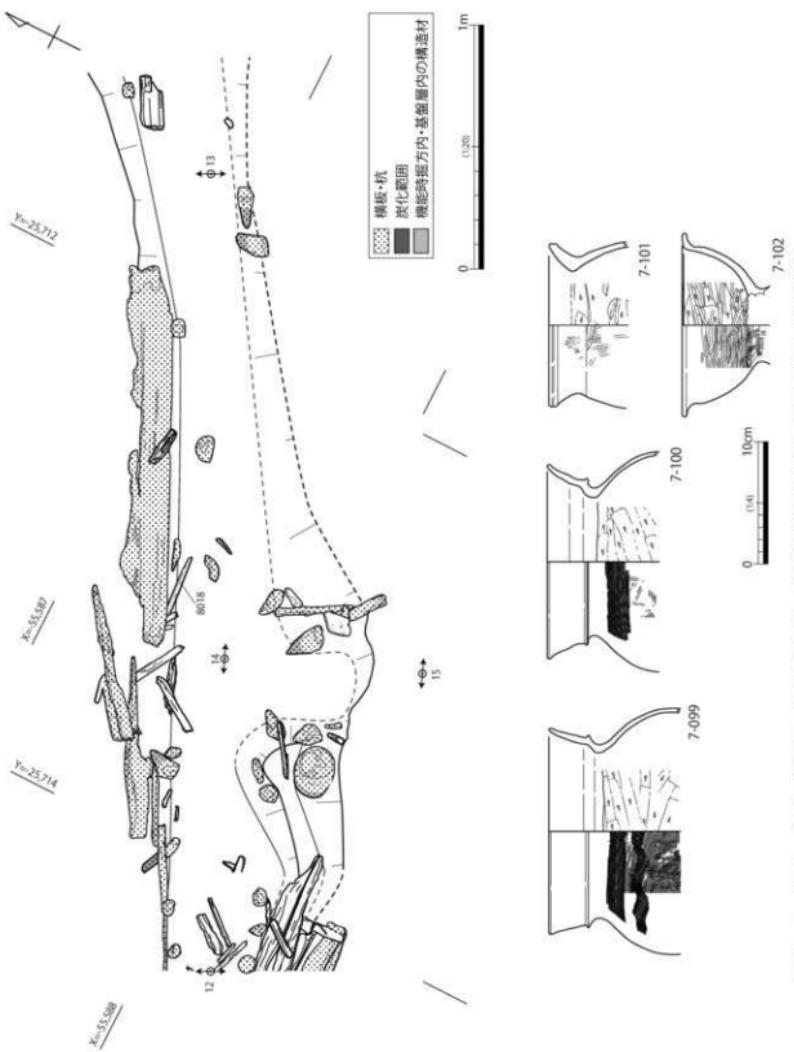
第IV-8-36図 2区 第7面 溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図5

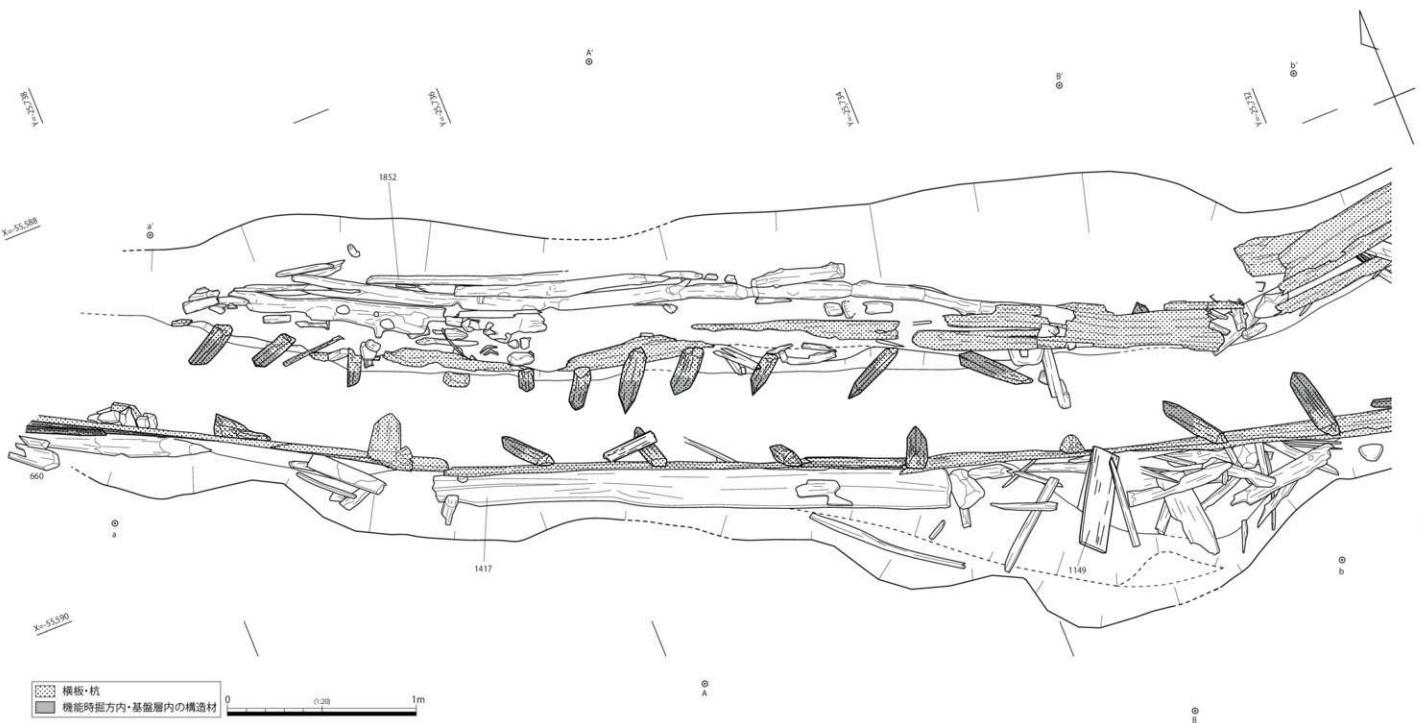


第IV-8-39図 2区 第7面溝(2S-245) 溝内遺物出土状況図6

で延長したと考えられる。南岸の端にある横板8794と杭3254、3260が対応すると考えられる。他に横板の後ろ側(陸側)に打ち込まれた杭が5本あり、伴うものか判断が分かれることだが、横板に沿って、ほぼ横板の長さに対応する区间にのみ認められることから、伴うものと考えられる。横板の高さを高くするために横板を追加して前後の杭で挟んだ可能性が考えられる。残存状態で横板の幅約0.11m、長さ約2.2mである。

一方、北岸の横板は6ライントレンチ際を除くと残存状態が比較的良好だった。建築部材の転用材と考えられる板材を用いて護岸をしている。東側の8-9間では1段、西側の6-8間では上下2段に重ねて溝の深さを確保している。東側は、上面の造構面の流路と重複していることから、攪乱により流出した可能性が高いと考えられる。横板の幅は2段重ねで約0.45mである。長さは長いもので約3m、短いもので約1.2mである。杭の間隔は、西側の6ライントレンチ際では約0.2~0.3mの比較的狭い間隔で、7-8間では0.5~0.6m間隔へと広がる。8-9間では再び0.2~0.3m間隔へと狭くなる。杭





第IV-8-41図 2区 第7面 溝(2S-245) 掘方内遺物出土状況図

の長さは、約0.7～1mで、約0.4～0.5mの深さまで地中に打ち込まれていた。

立面ポイント9-12間は、後世の造成により切り土されていた場所に該当するため、溝の下半のみが残存したと考えられ、検出面から底面までの深さは約0.15mと浅い。溝の幅はこれまで概ね約0.5～0.6mで一定していたが、西側の11-12間中程でハの字状に横板が内側に寄って溝の幅は約0.3mまで狭くなり、その後、再び約0.5mに広がる。狭くなる箇所は、溝全体が北東へ流れを変える屈曲点に相当し、南岸の横板は両隣の横板の流れに沿って設置されている。しかし、北岸の横板は、10-11間の8456と11-12間の8458の2枚が南に振れて設置されたために溝の幅が狭くなったと考えられる。ただし、この2枚の横板は外側に約30°傾けて設置されている。この横板に伴う杭も同様の傾斜をつけて打ち込まれており、地中部分は南岸に達する(g'断面)。溝の上半が失われていると考えられることから、この傾斜で護岸が設置されていたとすると、推定の溝上端部での幅は、0.6m程度ではかの場所と変わらなかったと考えられる。

横板は、南岸、北岸共に建築部材の転用と考えられるものが多く、長さは長いもので約2.4m、短いものは1m前後、幅は0.1～0.2mである。杭は、比較的多く検出しておらず、横板とは接しないものも多い。補修などが行われた可能性もあるが詳細は不明である。明らかに横板と接して打ち込まれていて、横板に伴うと考えられる場合も、長さ0.8～1m程度の長い杭に近接して、0.4m前後の短い杭が浅めに打ち込まれている箇所がある。

立面ポイント12-13間は、南岸の中程に南東方向への分岐点がある。この区間は東ほど護岸材の残存状態が悪く、南岸は分岐点から東側に横板は無く、杭も少ない。北岸の横板は、長さ約0.7～1.5mで他の区間よりはやや短めの材を用いている。杭は、西側から分岐点付近までは約0.2～0.3m間隔で、場所によっては近接して2本打ち込まれている。分岐点から東側は約0.9m間隔で打ち込まれている。前区間からの続きの横板の端がある以外に、横板は無い。杭は、横板の無い区間はあまり規則的に打ち込まれていない。

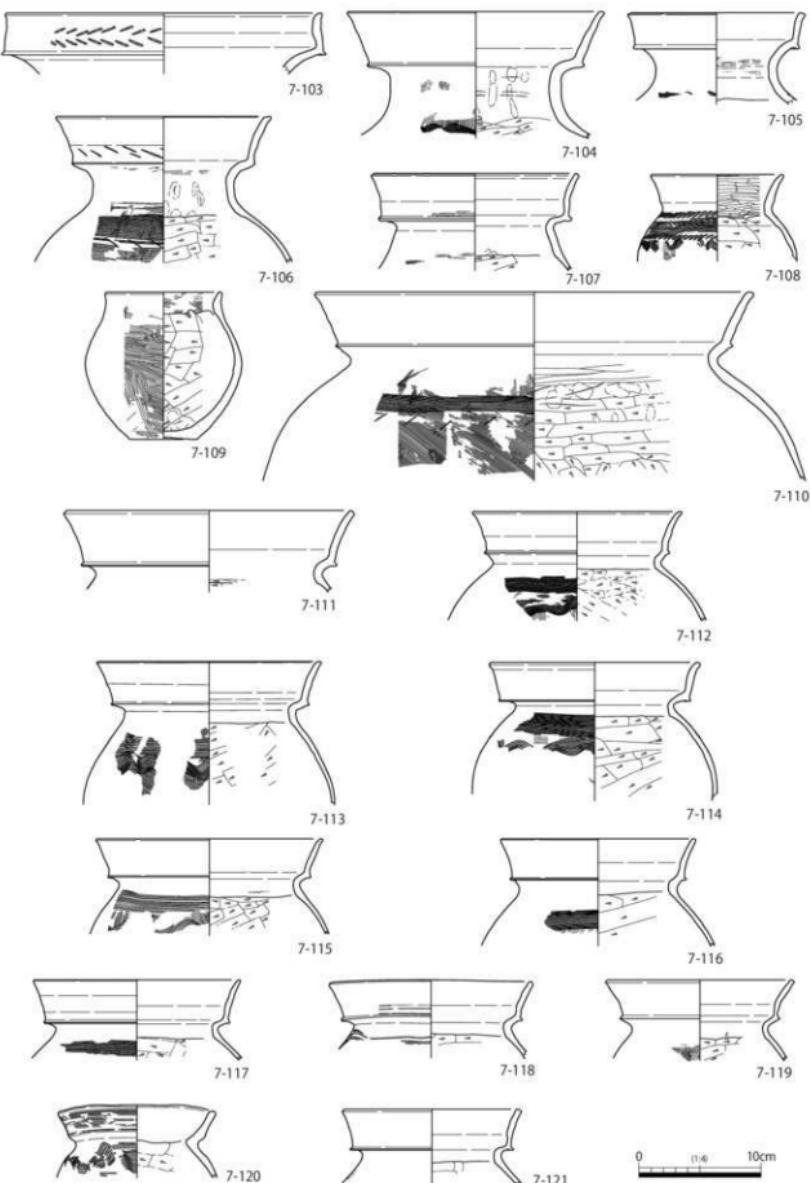
分岐部分(14-15間)には横板は認められなかった。東岸には短く幅の狭い板が複数認められたが、護岸とは考えにくかった。分岐部分の杭は、角を中心比較的間隔を狭く打ち込まれていた。分岐先の南東方向には杭の痕跡などは確認できなかったが、分岐部分は北向きに低くなっている、南東から流れ込む溝との接続部分と考えられる。2S-245と中央側溝の間は後世の流路等により擾乱を受けているが、中央側溝の南側には、溝(2S-764)があることと、次の遺構面で検出した大型土坑(2S-1141)と考えられる遺構があることから、これらの遺構から流れ込む溝がつながっていた可能性が考えられる。

2S-267は、延長約14.5m、幅約1mである。北側丘陵の張り出し部の東側を回って、北東方向へ流れていたと考えられる。埋土は粗砂から細粒砂である。

埋土中の遺物は、全体的に西側ほど多く出土し、東側はそれに比べて少なかった。特に5ライントレンチ以西の上流部から集中的に、埋土下層から上層にかけて偏りなく遺物が出土した。製品だけでなく自然木も多数出土し、上流ほど大型の木器が目立つ。木包丁、鎌などの農工具、高杯や桶などの容器、匙、剣形などが出土した。

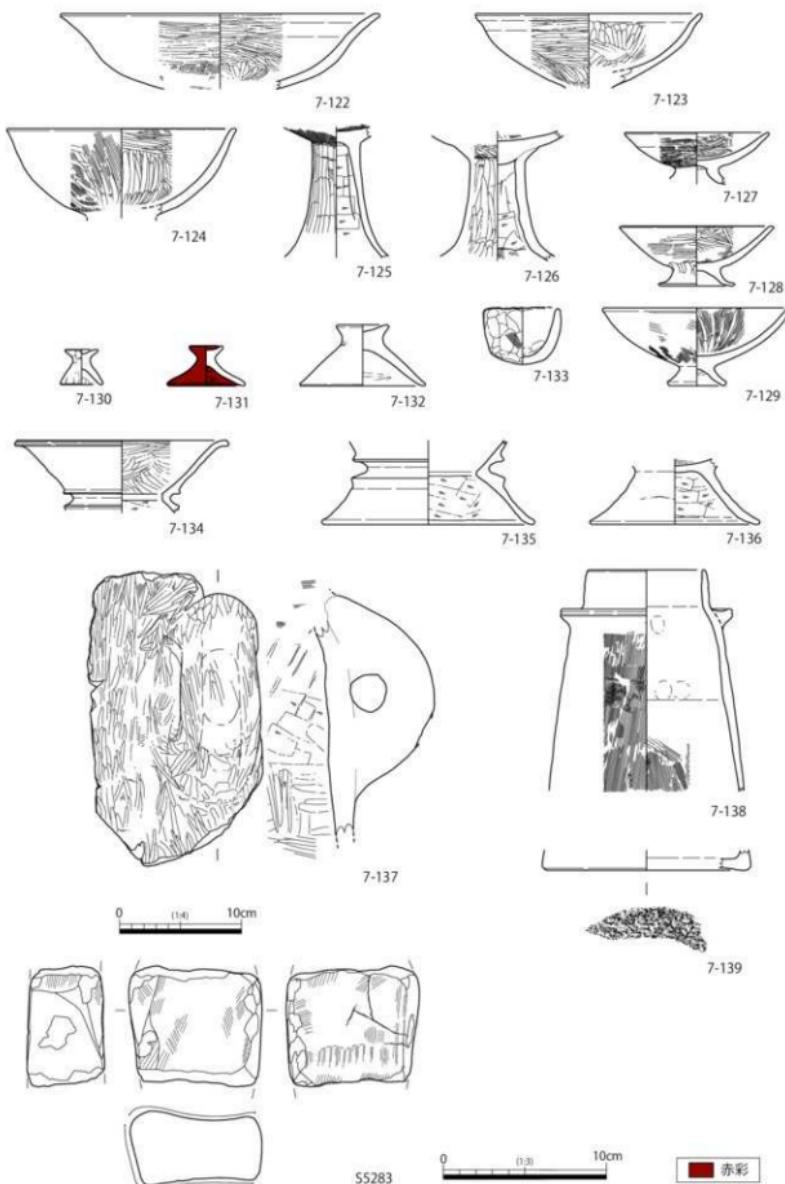
2S-245掘方

掘方は、立面ポイント1-8間で調査を行った。それより東側では、溝上半部が消滅していたこと

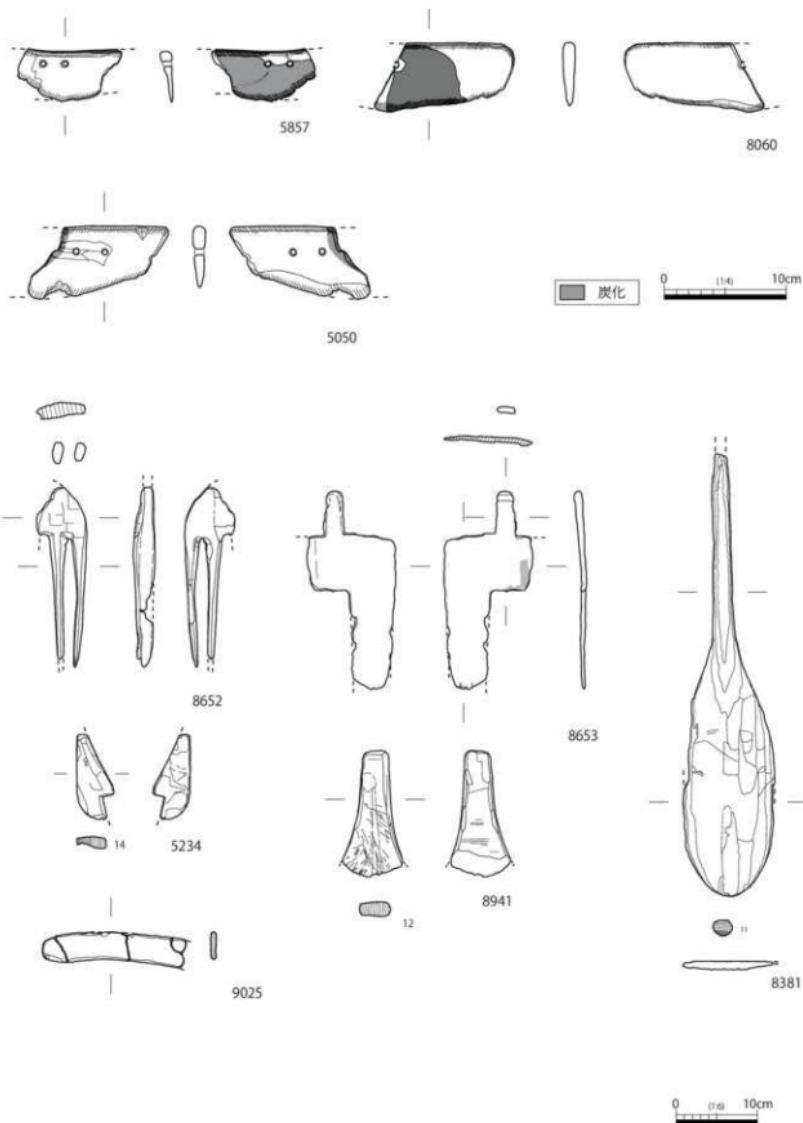


第IV-8-42図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物 1

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

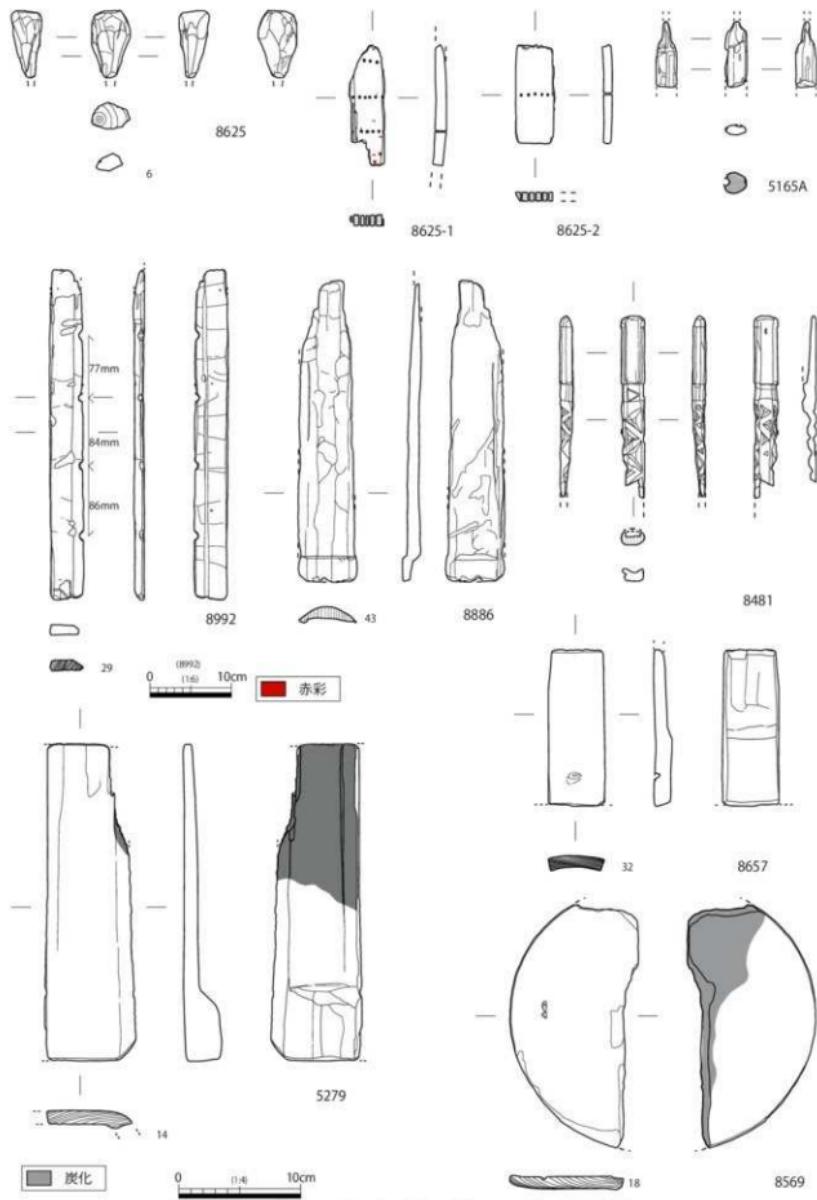


第IV-8-43図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物2

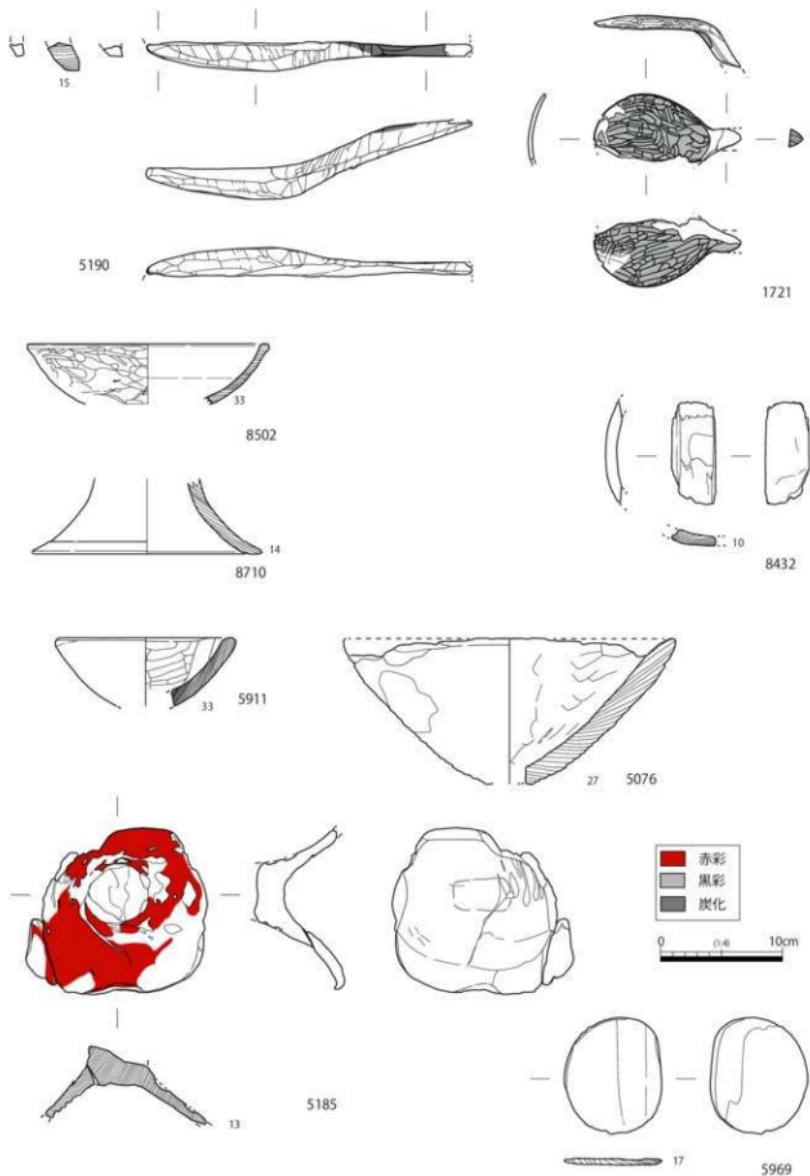


第IV-8-44図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物3

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

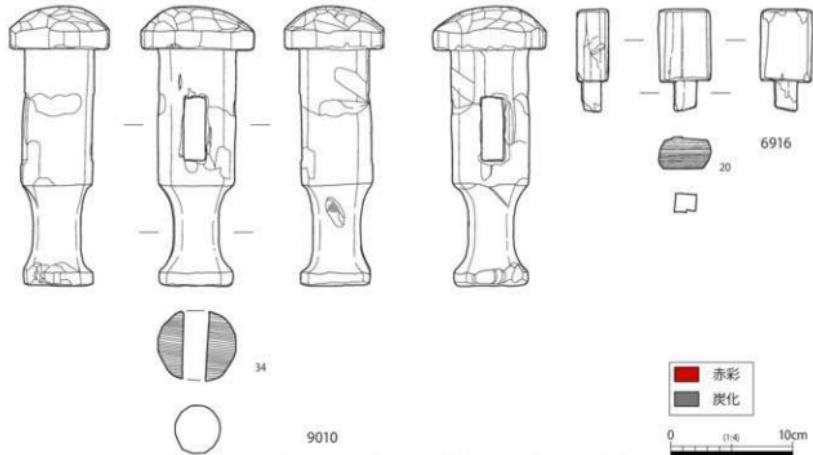
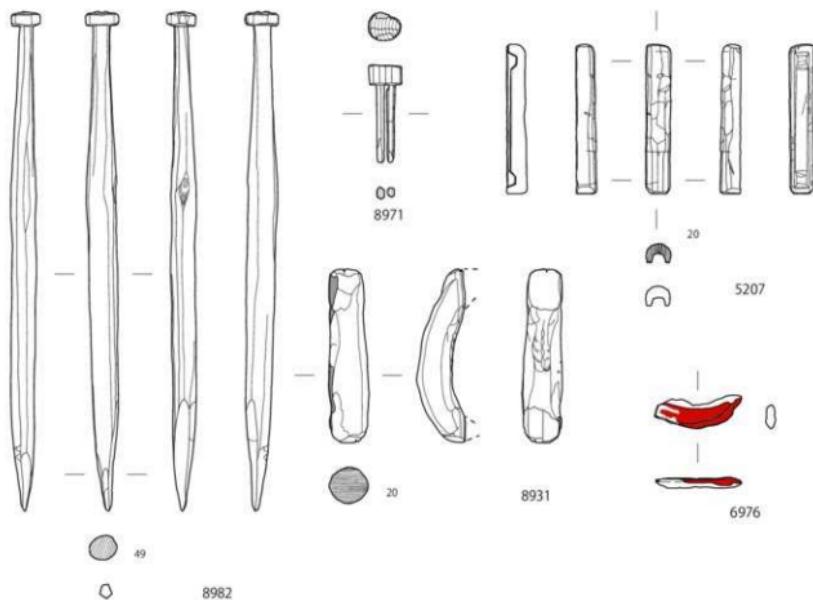


第IV-8-45図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物4



第IV-8-46図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物5

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-47図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物6

もあり、掘方が明確ではなかった。横板の残存状態が良好だった1-5間の南岸は掘方も明瞭だった。この部分では、掘方内から板材などが出土した。北岸は、2S-245に切られる2S-1069に伴う板材が露出した。掘方内から出土した土器(7-099~102)には、古相のものもあるが、壺は乙亥正VII期のものと考えられる。

土器は、それほど磨滅していないものが多く出土した。下流の2S-267からは、乙亥正VI~VII期と考えられる複合口縁の壺(7-096、097)とワイングラス形の坏部を持つ高坏(7-098)が出土した。高坏は近畿北部系のものと考えられる。2S-245からは、乙亥正V~VII期の土器が出土し、乙亥正VII期のものを中心に複合口縁の壺(7-103~107)、直口壺(7-108、109)、複合口縁の壺(7-110~121)、高坏(7-122~126、136)、低脚坏(7-127~129)、蓋(7-130~132)、器台(7-134、135)などを図化した。蓋には、内外面共に赤彩されたもの(7-131)がある。壺は乙亥正V期のもの(7-120)を1点図化した。乙亥正V期のもので図化した土器は少ないが、出土量は比較的多い。

石器は、2S-245から出土した砥石(S5283)を図化した。上下両端を欠損している。

木器の農工具は、5857、8060、5050が木包丁でいずれも部分的に炭化している。青谷上寺地遺跡の分類に拠ると5857と8060は2孔1対の紐孔を結ぶ溝が無いB1類、5050は溝を有するのでB2類又はB3類ということになる。又鋤(8652)は、左半分と頭部を欠損しているが、直柄と考えられる。5234と8941は曲柄又鋤の頭部片と考えられる。8653は組み合わせ平鋤である。9025は、鎌状に緩く湾曲し、下側の側縁は両刃に加工されている。鎌とするには身幅が狭く、器種は不明である。8625は、木鍤である。くびれ部から半分だけが残存する。8992は編み台かと思われる。片側縁に7.7~8.6cm間隔の刻みがある。

漁労具は櫂(8381)が出土した。武器は盾の破片(8625-1・2)がある。表面には赤彩がある。5165Aは弓の端部、弭と考えられる。8886は鞘装具である。鞘間の途中から鞘尻を欠損しているので、全長は不明である。横断面形は倒卵形になるので刀鞘と考えられる。8481は小型工具の柄である。上半部がソケット状になり、そこに茎を挿入したと考えられる。柄間に三角形の文様を削り込む。表面の方が裏面よりも文様が大きく深く削り込まれている。装飾だけでなく、指の掛かりを良くする効果もあったのかもしれない。全長の中程が一回り細く加工されており、表面のみ浅く三角形の文様が削り込まれている。紐などで緊縛したと考えられる。

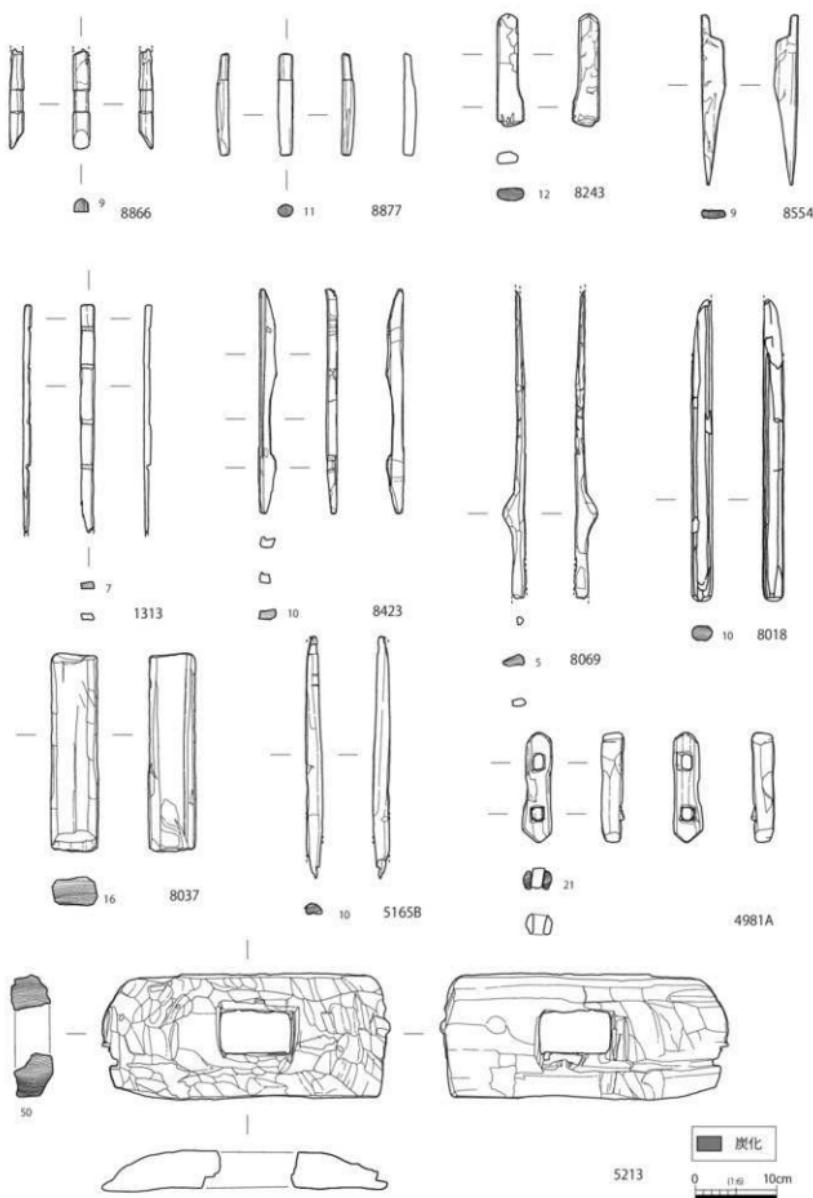
食事具は匙が出土した。5190は綫に半分を欠損した状態で出土した未製品である。1721は柄を欠損している。内外面ともに黒彩したものである。

容器は、桶(5279、8657)の破片が出土した。他には高杯の脚部(5185、8710)があり、5185の外面は赤彩されている。高杯の杯部ないし椀と考えられるものに8502、5911、8432、5076がある。5969、8569は底板である。

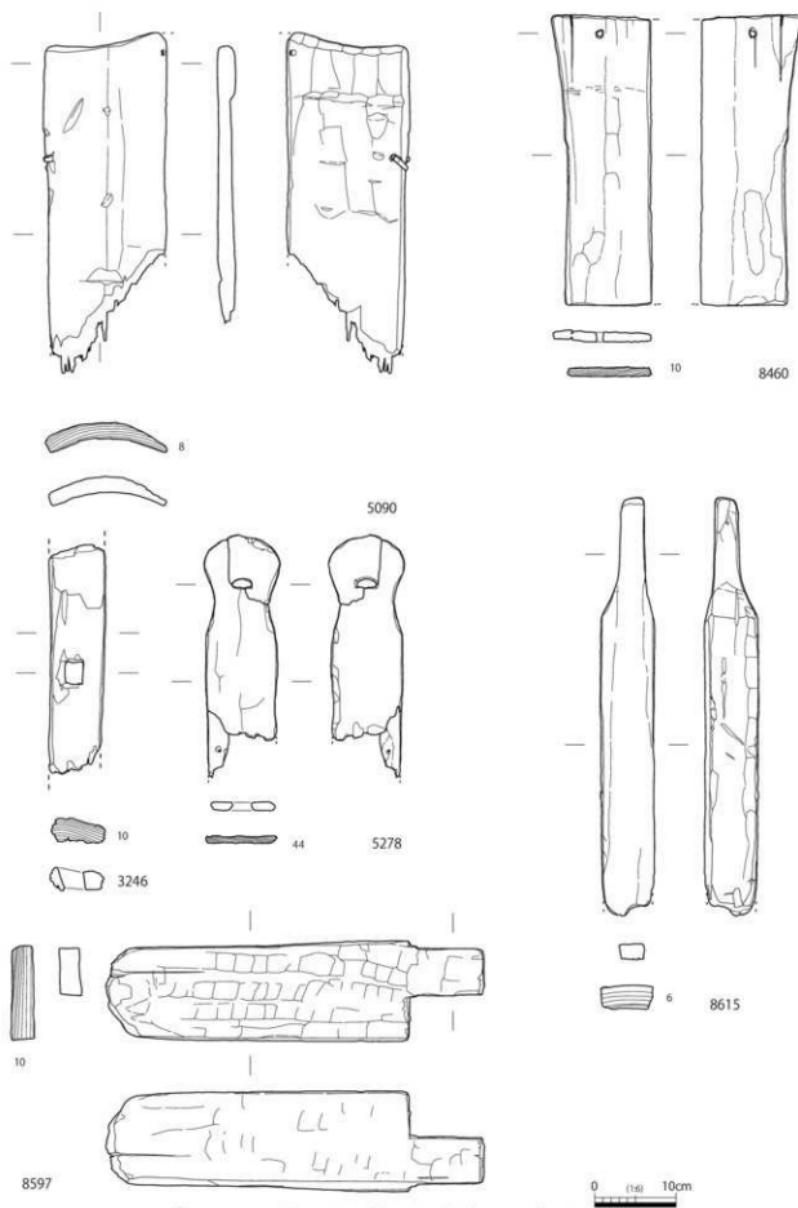
栓は4点ある。8982は円形の頭部に先端を尖らせた軸が付く。洋釘状の形態である。8971も円形の頭部に2又に分かれた短い軸が付く。6916は長方形の頭部に断面方形の軸部が付く。9010は円形の頭部に横断面円形の軸が付き、長方形の孔が貫通する。軸部中程から下端の間は一回り細く絞るように成形されている。

5207は器種不明である。長方形の部材の裏側を、縁を残して器形に沿って削り込み、両端部はさらに1段深く削る。6976は何らかの部材の一部で、おそらく円形を呈する。外面は赤彩されている。8866、8877、8243、8554、1313、8423、8069、8018、5165Bは棒状の部材である。4981Aは長方形の

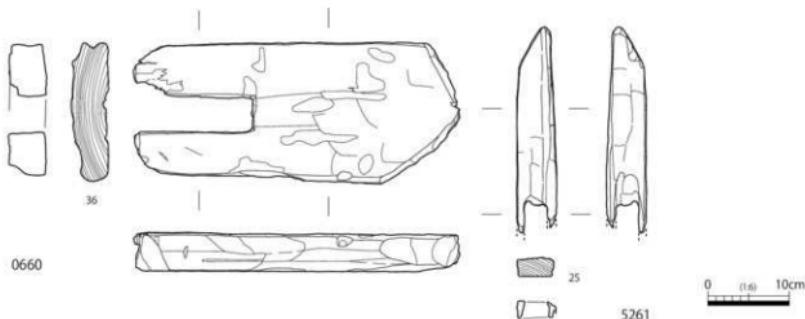
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-48図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物7



第IV-8-49図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物8

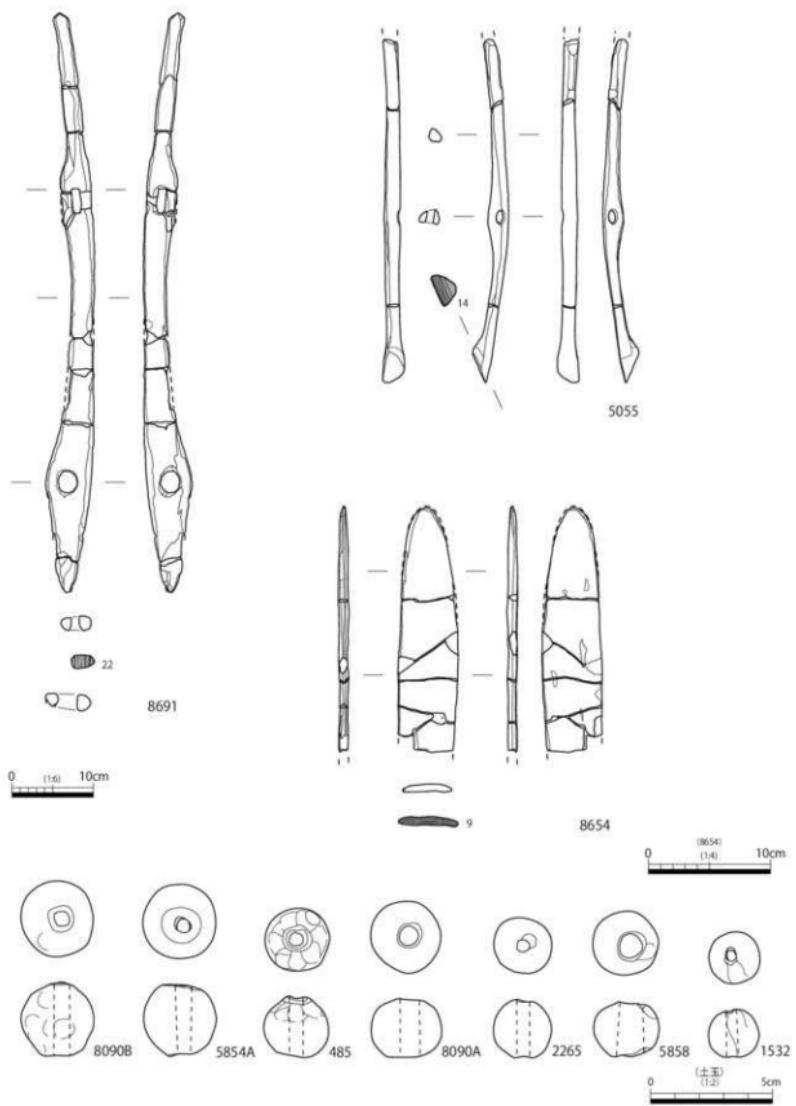


第IV-8-50図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物9

材の両小口を山形に加工する。表面に2つの方形孔を貫通させ別材を挿入している。図下側の孔には別材が残っていた。8037は何かの素材と考えられる。小口側は切断されている。5213は平面長方形で、側面からみると角の丸い台形状をなし、中央に長方形の孔を穿つ。何らかの台と考えられる。5090は桶の下端を再加工して湾曲させているので、再利用したものと考えた。側縁2カ所に円孔を穿っている。1カ所には樹皮が残存する。8460は板材で上端中央に円孔が一つある。左長側辺は上から下に内湾気味に加工されている。右長側辺は欠損である。3246は長方形の部材に方孔がある。5278は長方形の板材の上寄りに両側からくびれを作り、上端を丸く頭部状に成形している。くびれ部のやや上寄りに梢円形の孔を穿つ。8615は平面長方形、断面方形の板材の一端を柄状に細く削り出したものである。8597は板材の一端が相欠状に階段状を呈する。元はもっと長い材の仕口部分と思われる。0660は平面長方形の一端を山形に加工し、もう一端は長方形に欠き込む。5261は下端を欠損しているので、欠き込むか方孔を穿つかのどちらかである。8768と5055は大きさと細部の作りは異なるが、横断面梢円形の棒材の一部に膨らみを持たせて、そこに円孔ないし方孔を穿つという特徴が類似する。機能は不明である。

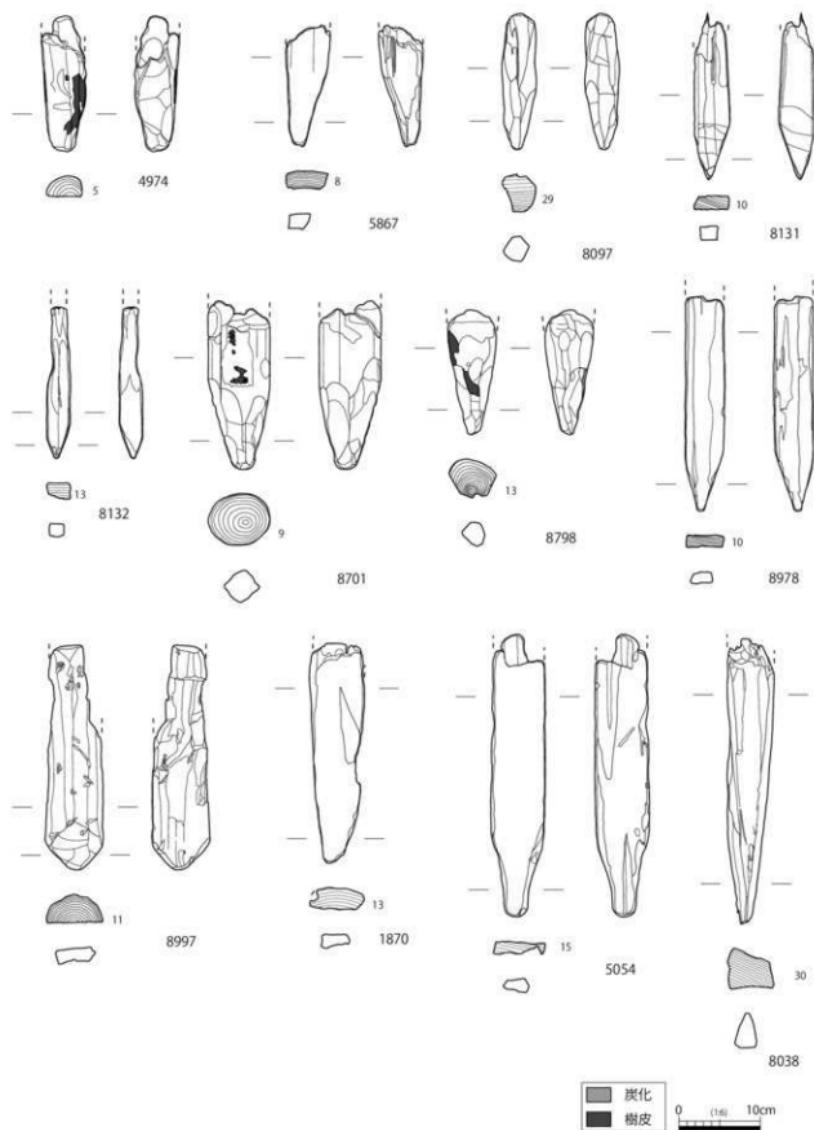
祭祀具は剣形(8654)が出土した。保存処理後の実測のため、出土時よりも薄くなってしまっており、鎬も丸みを帯びて刃部が不明瞭になっている。

杭の多くは護岸用に用いられたものだが、一部には埋土中から出土したものも含まれる。主に横断面の形態的特徴から分類すると、I類)芯持ち丸太材を用いる丸いもの、II類)半円形で半裁丸太材を用いるもの、III類)断面長方形の分割材を用いるもの、IV類)断面台形ないし三角形の分割材を用いるものの4種類に分類できる。I類とII類は樹皮が残存するものが多い。出土時には樹皮が残存していたが、取り上げまでに時間を要して剥がれたものや、取り上げ後に剥がれたものも多いので、本来樹皮が付いたまま先端部のみ加工したものと考えられる。III類は、部分的に杭に転用される前のものと考えられる加工痕が残存するものがあり、板目のものと柾目のものがある。IV類の多くは分割面以外に転用前の加工痕が顕著である。III、IV類は建築部材から転用されたものと考えられ、樹種同定は行っていないがほとんどが針葉樹と考えられる。中には8152のように楔の転用品と考えられるものもある。I、II類は転用品ではなく、当初から杭として利用するために手近に入手できる材を利用したと考えられる。護岸材としての出土傾向はIII、IV類は溝の西側で特に5ライントレーナー以西で多用される。I、II類は5ライントレーナー付近から東側で多く使われる傾向がある。

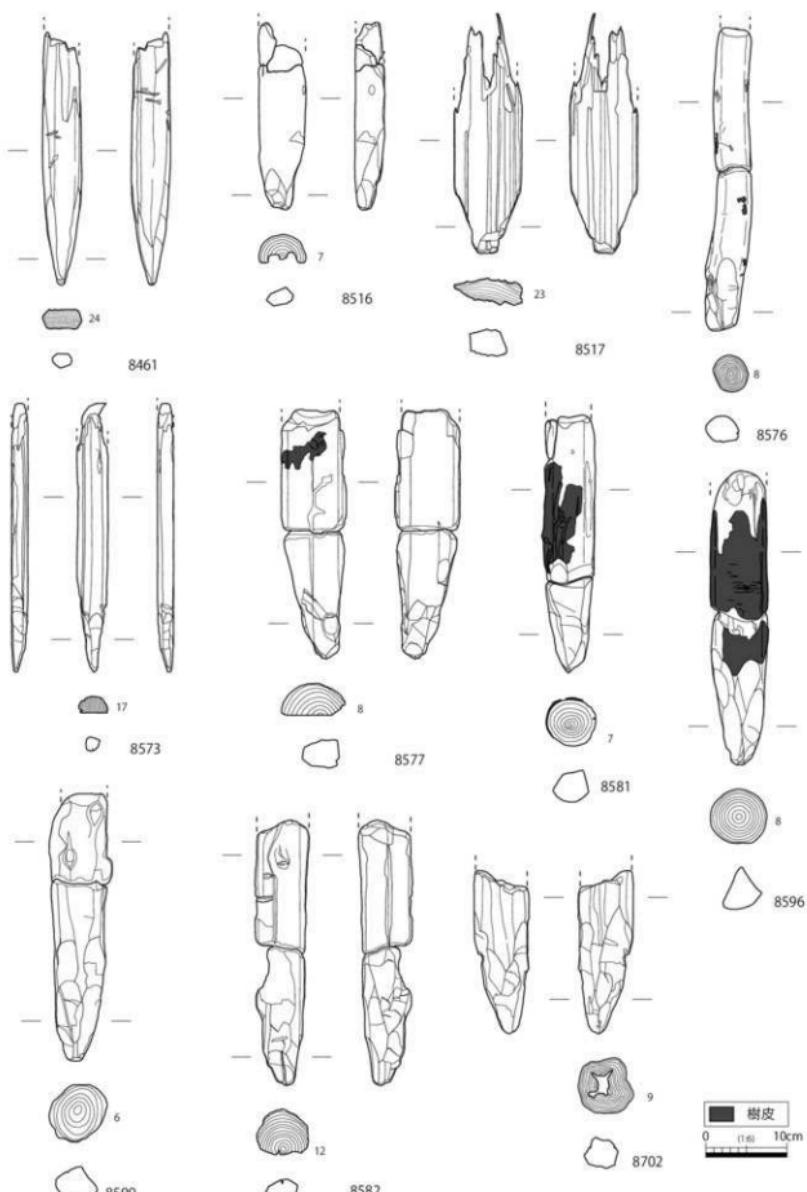


第IV-8-51図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物10

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

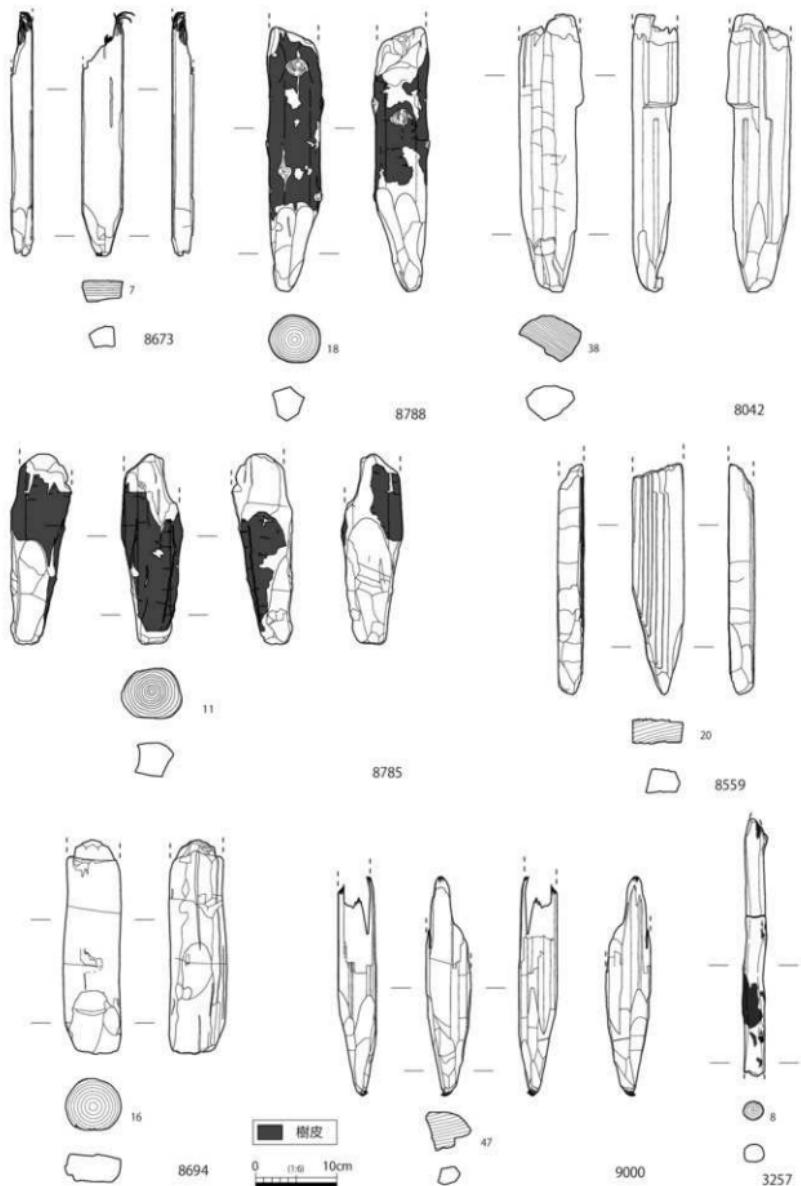


第IV-8-52図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物11

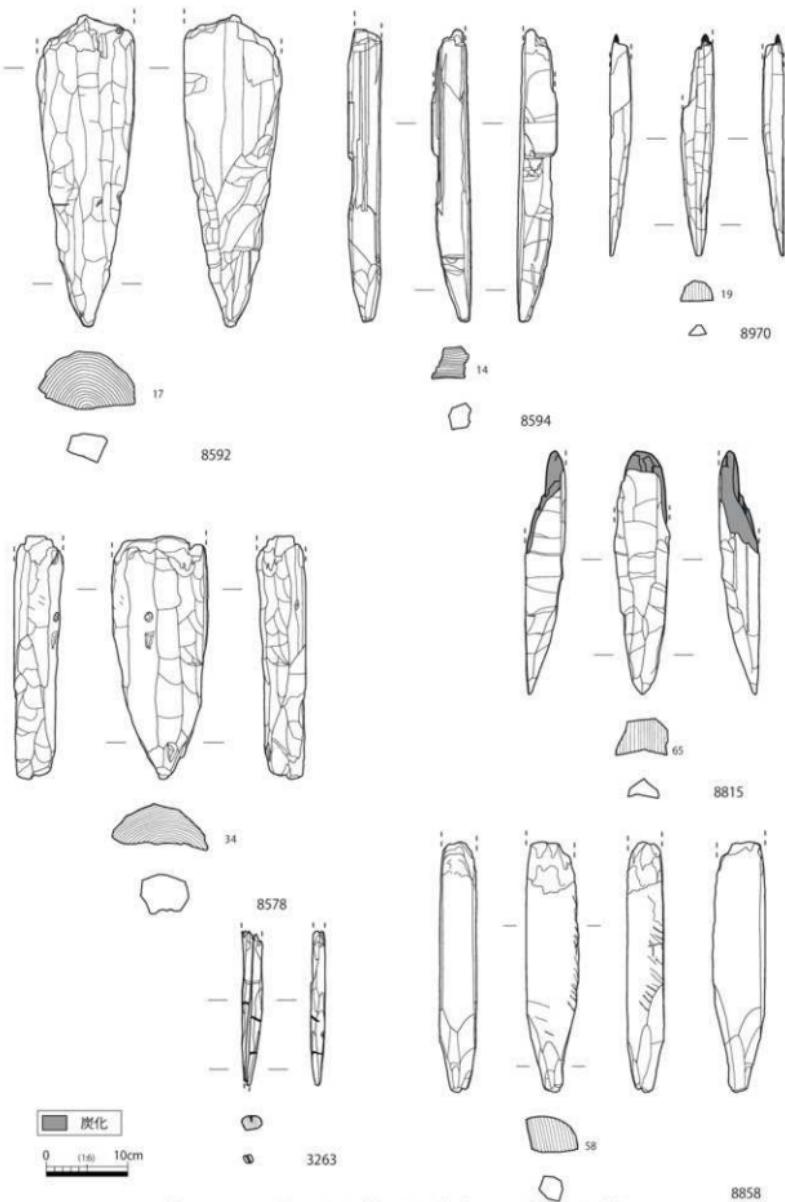


第IV-8-53図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物12

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

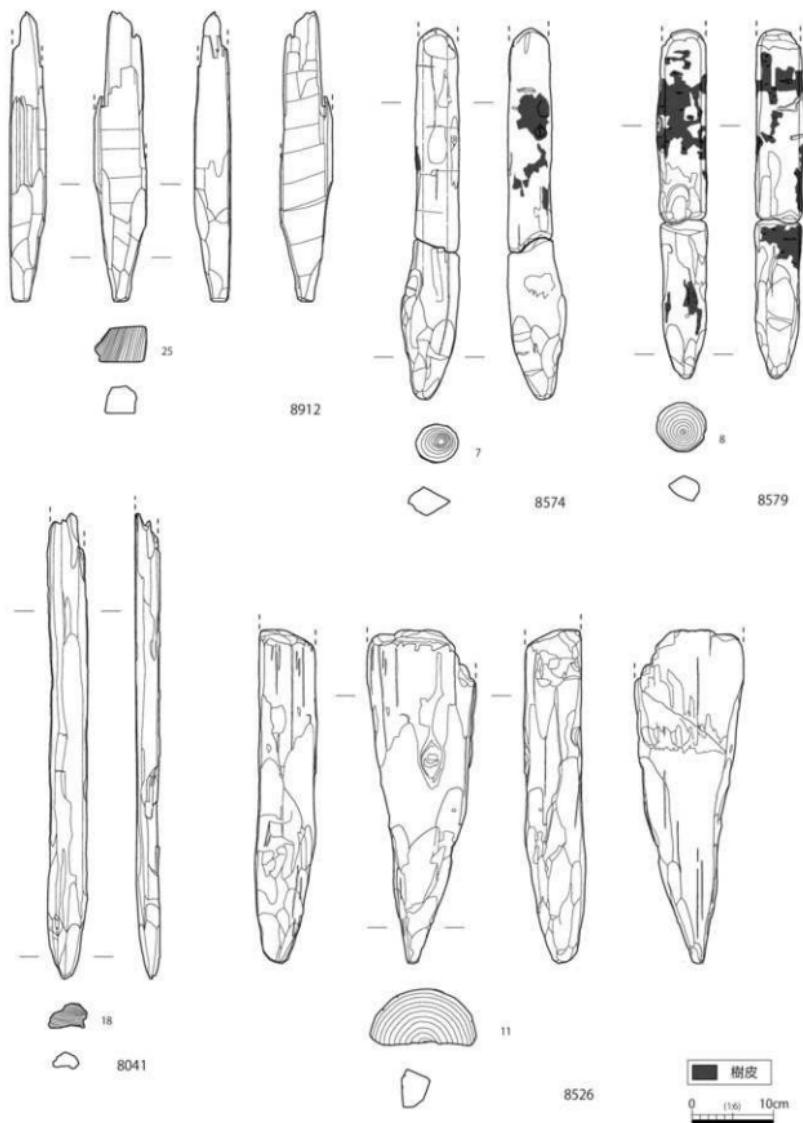


第IV-8-54図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物13

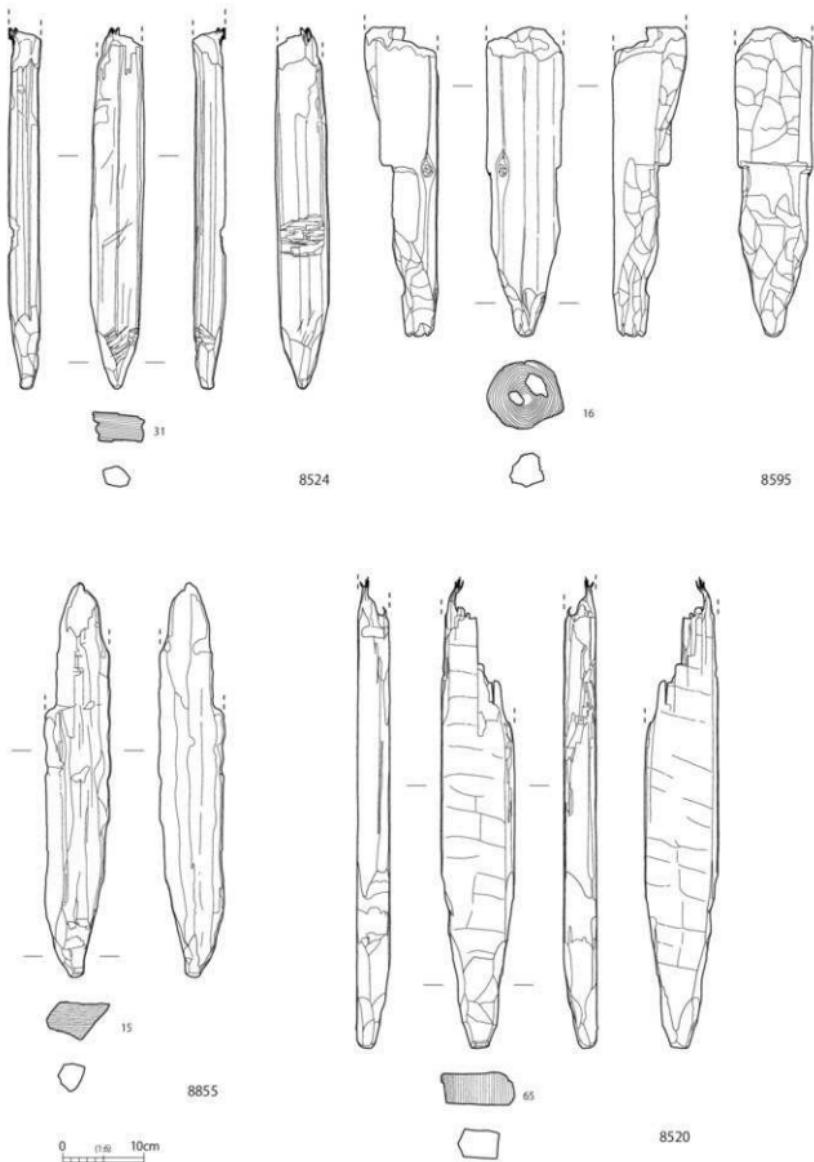


第IV-8-55図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物14

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

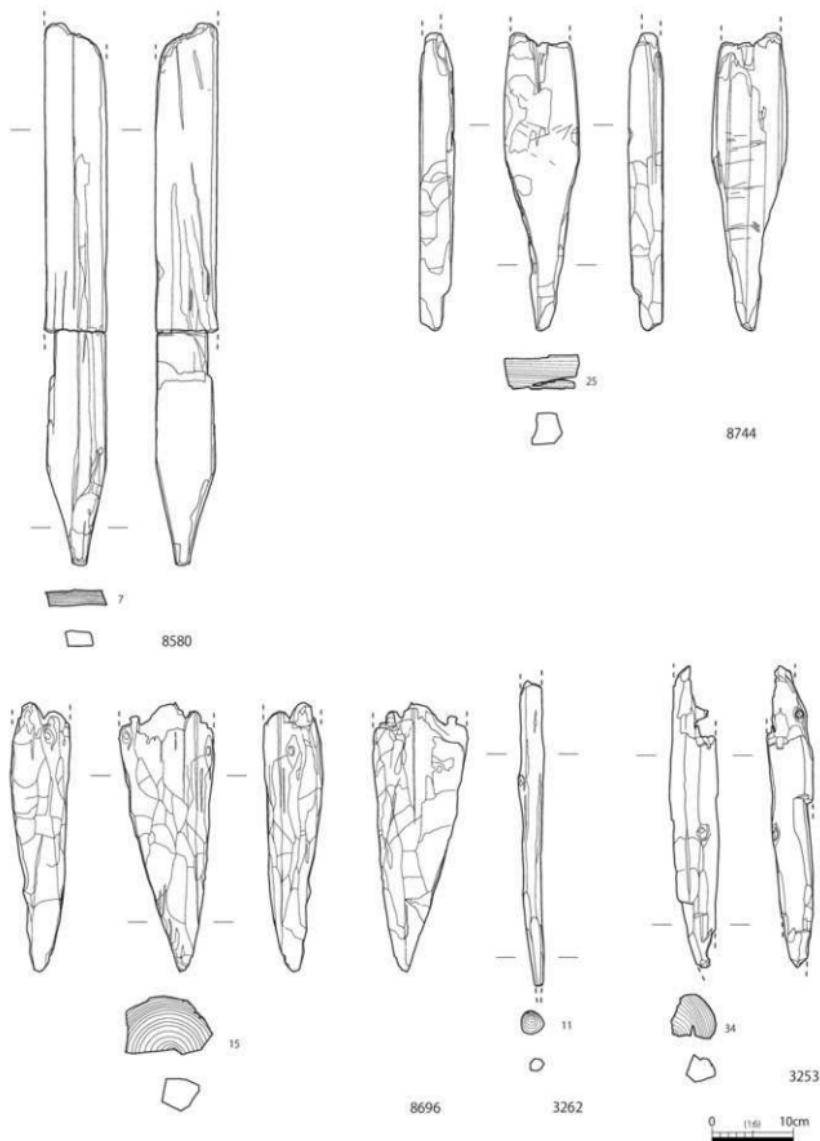


第IV-8-56図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物15

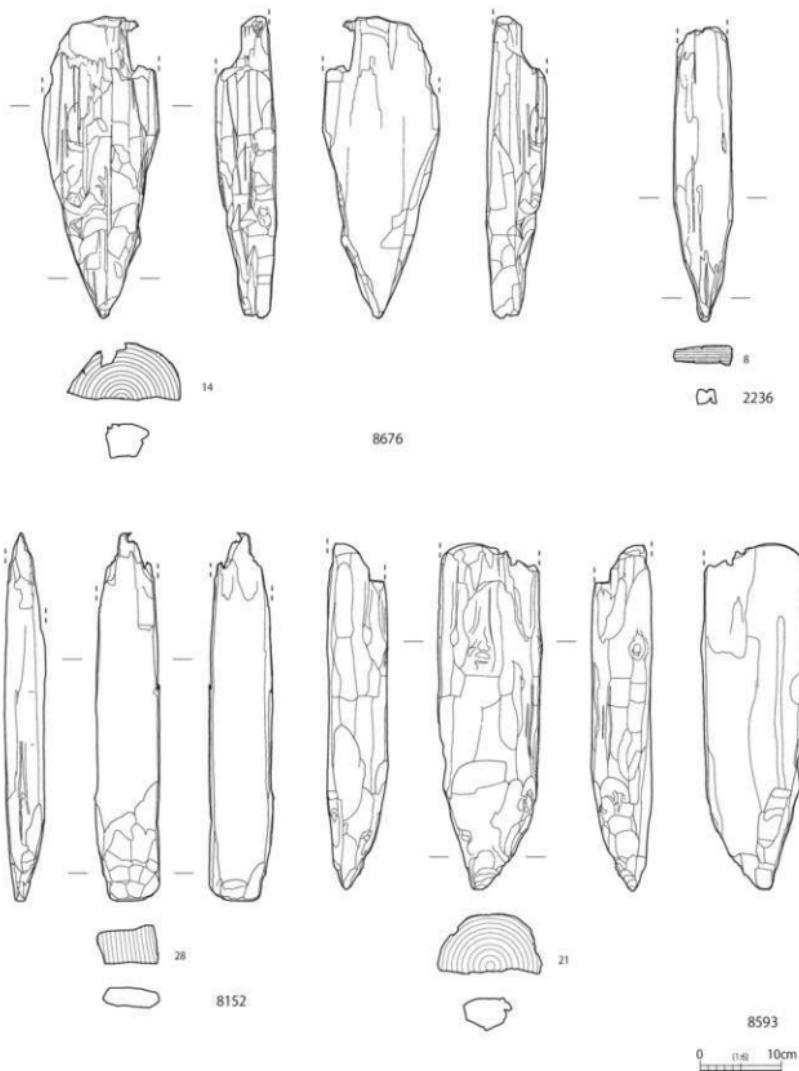


第IV-8-57図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物16

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

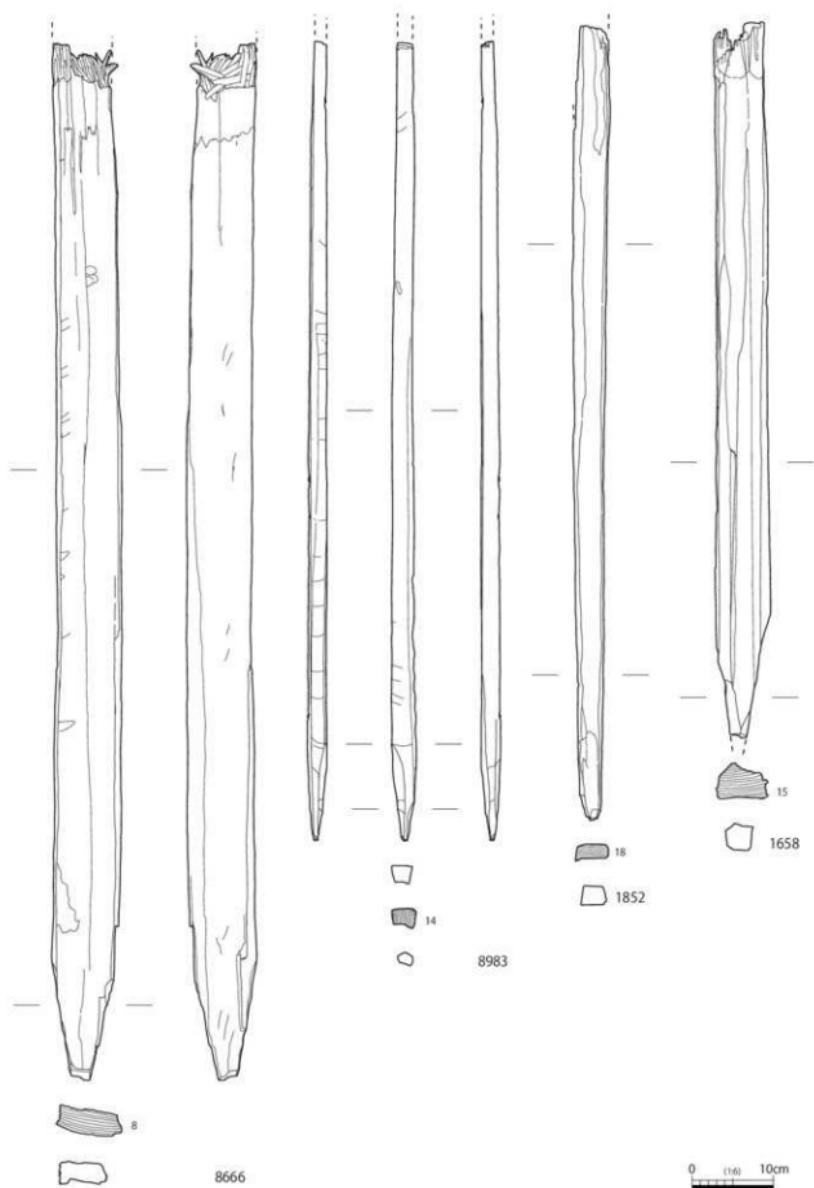


第IV-8-58図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物17

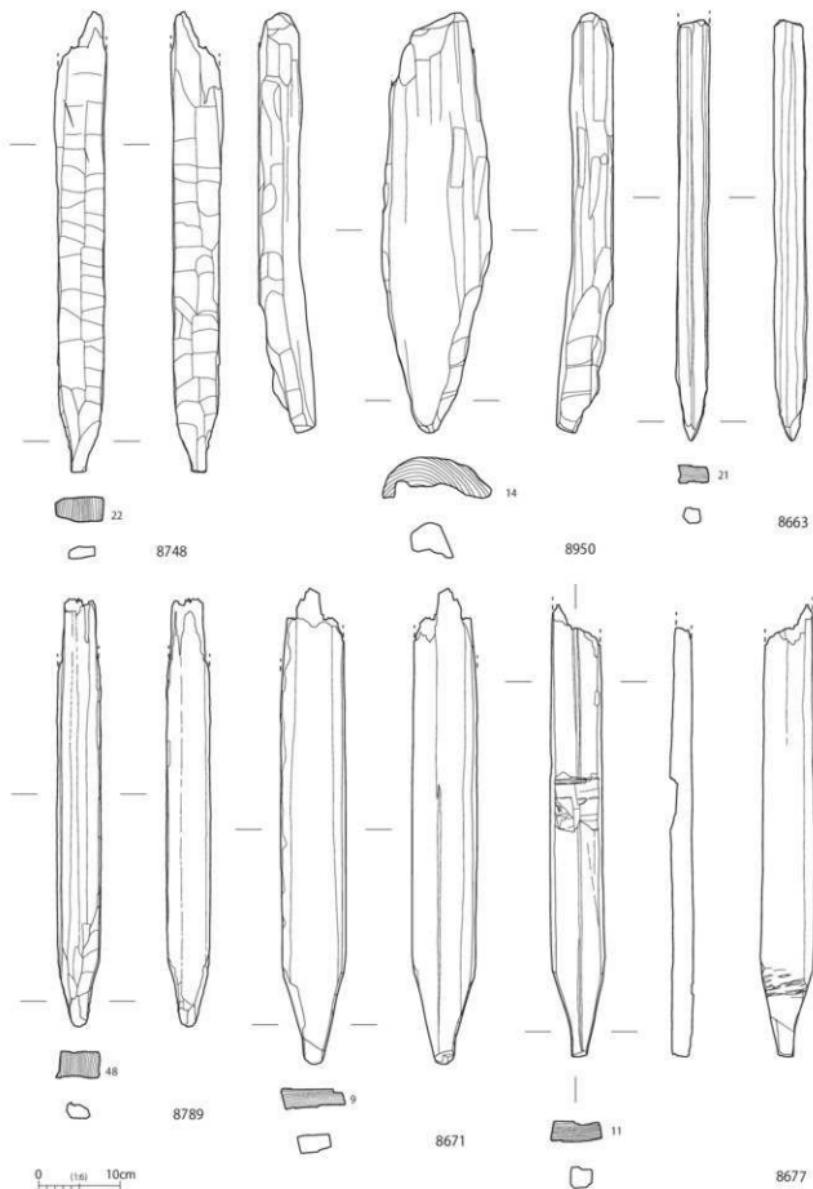


第IV-8-59図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物18

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

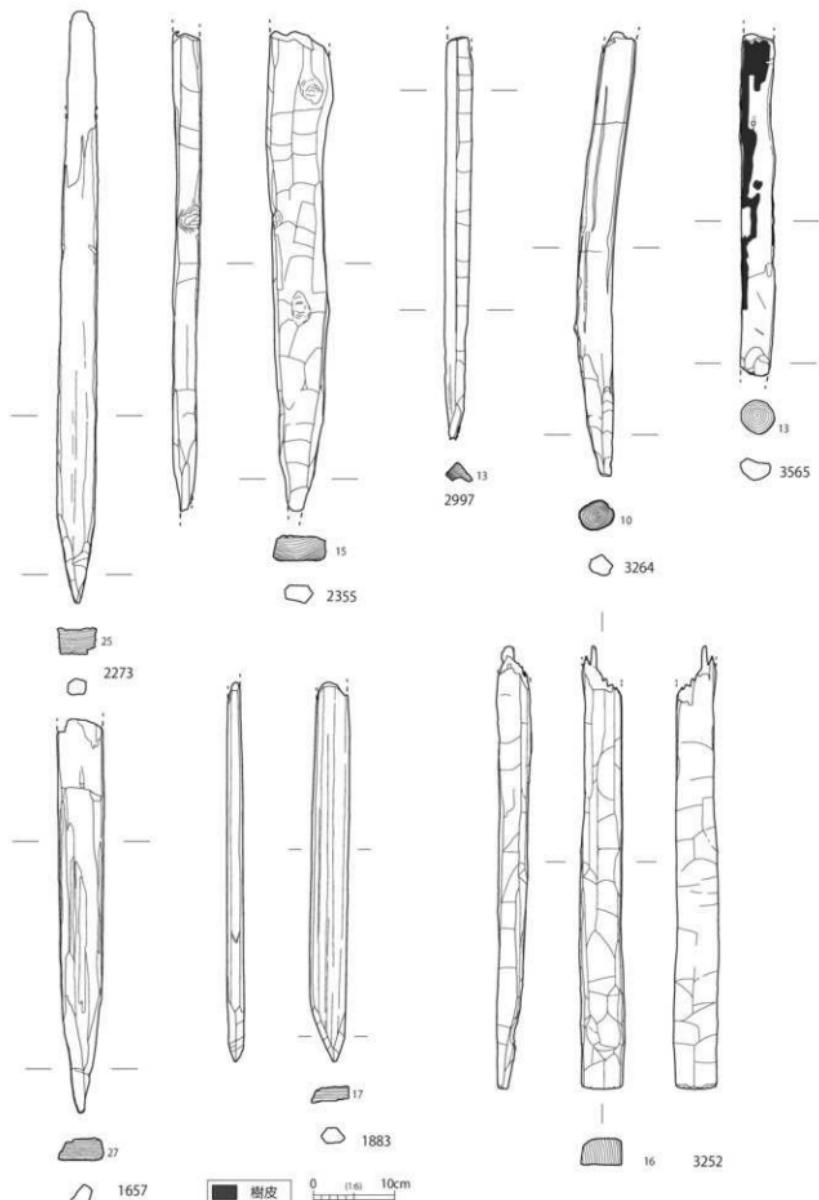


第IV-8-60図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物19

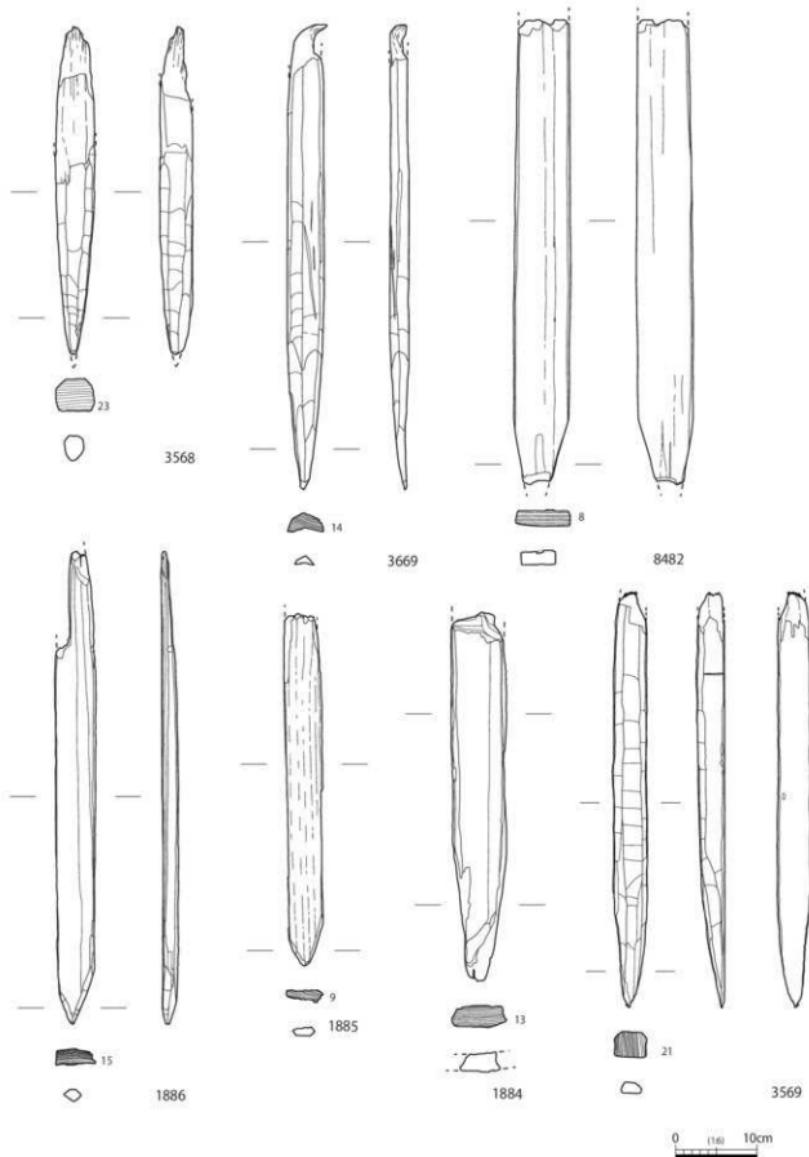


第IV-8-61図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物20

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

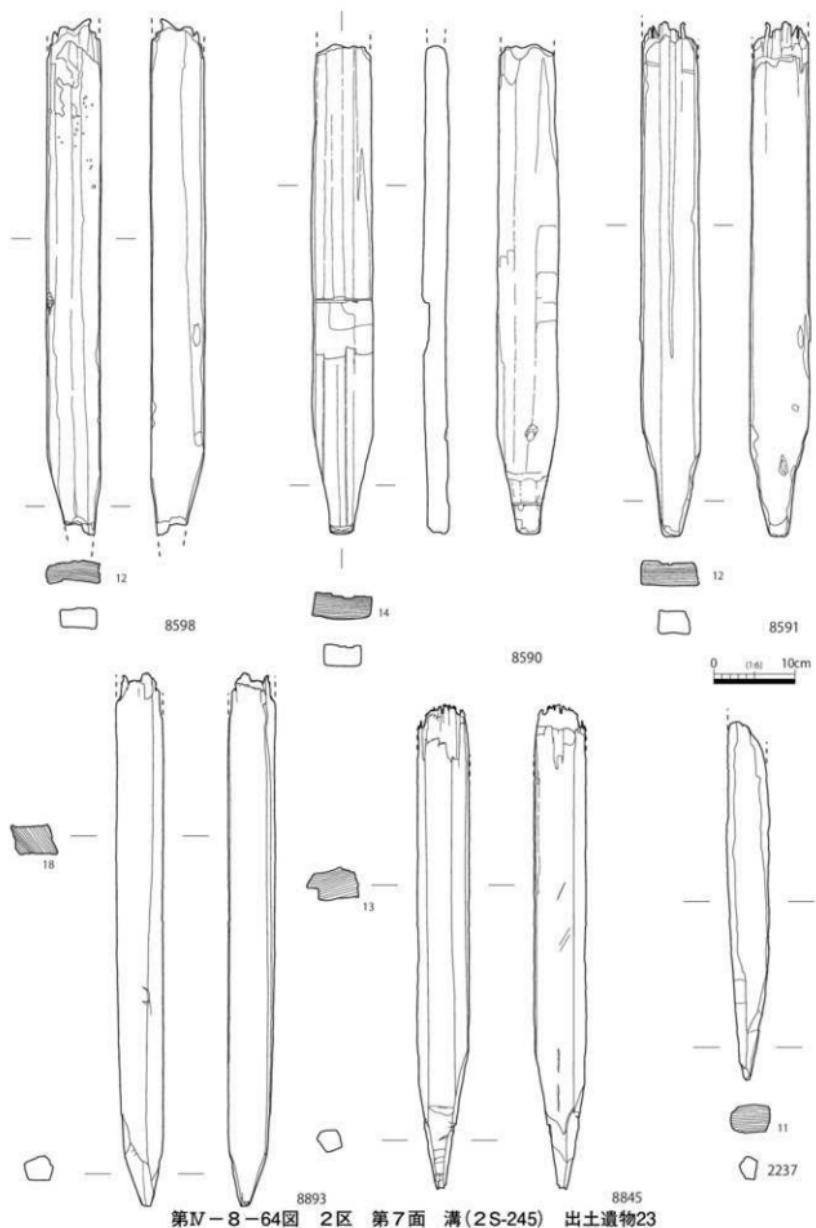


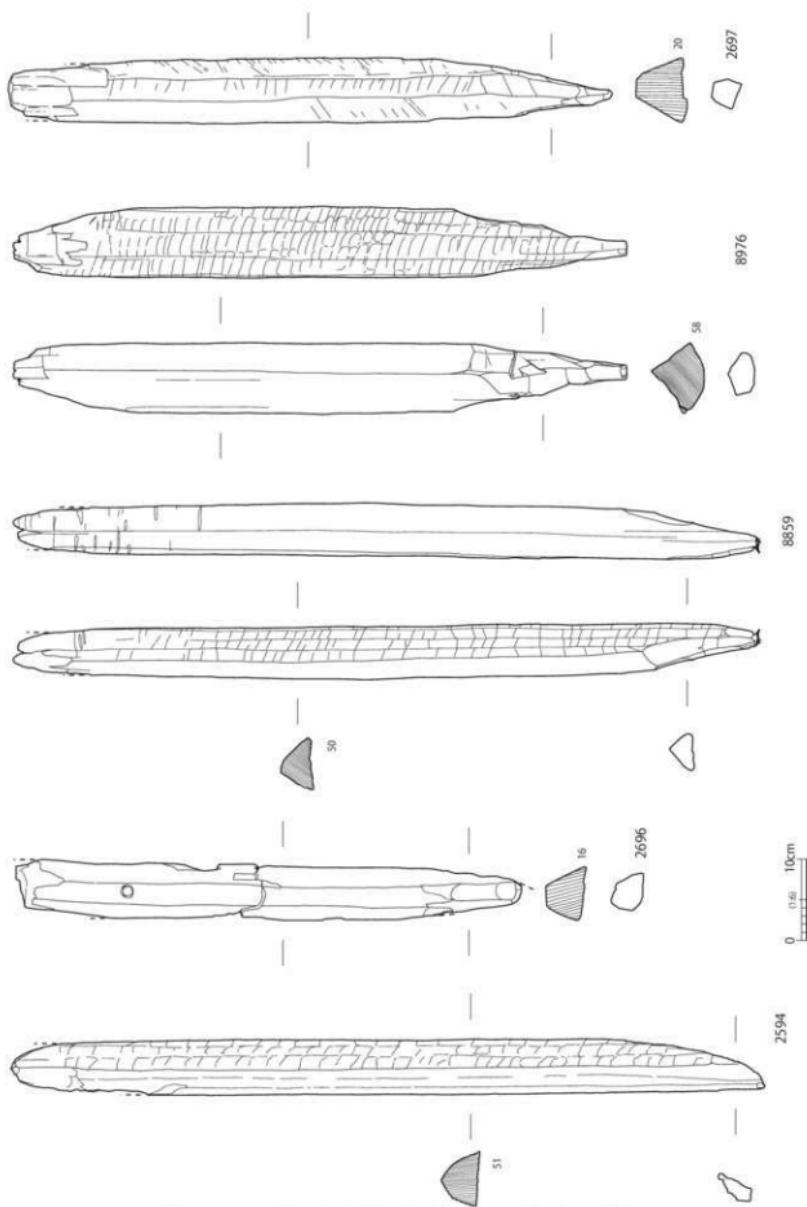
第IV-8-62図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物21



第IV-8-63図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物22

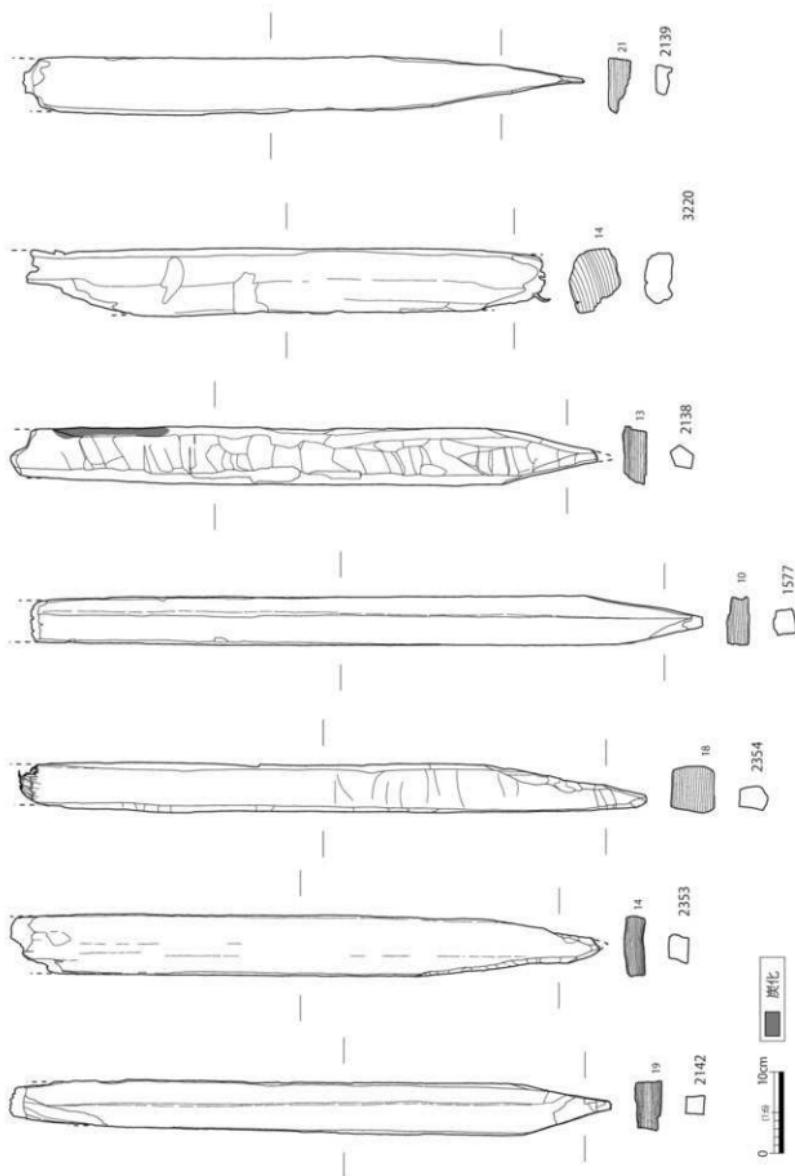
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



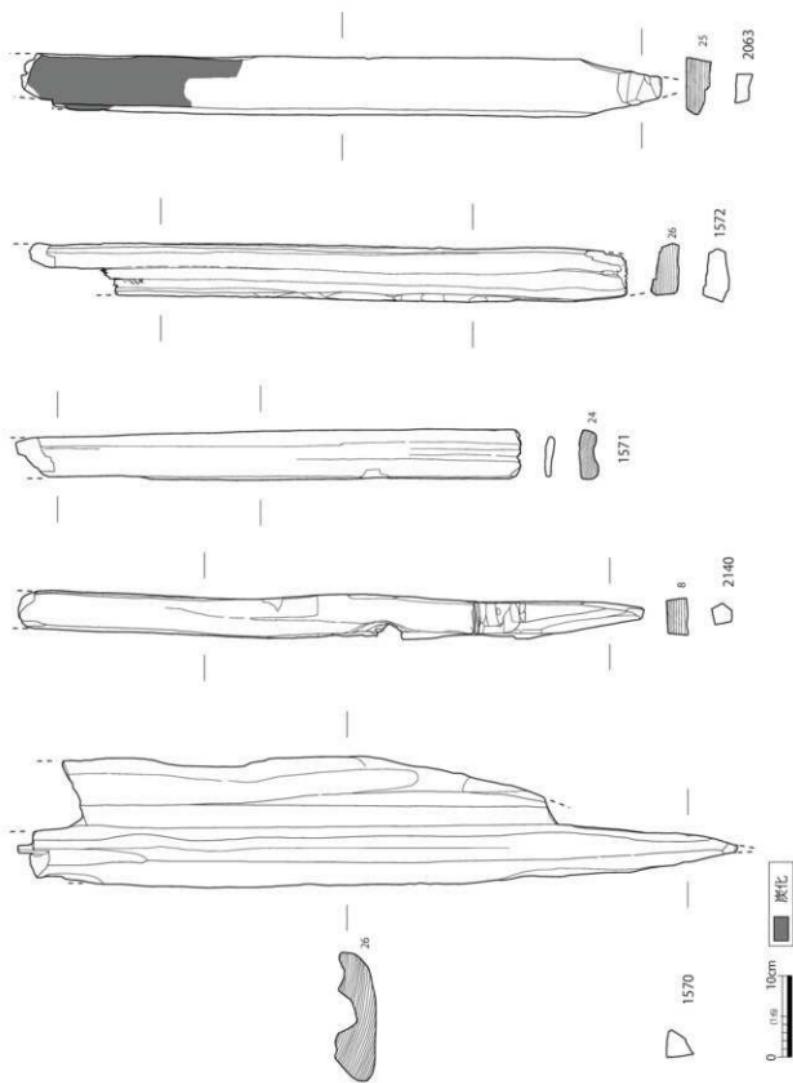


第IV-8-65図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物24

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

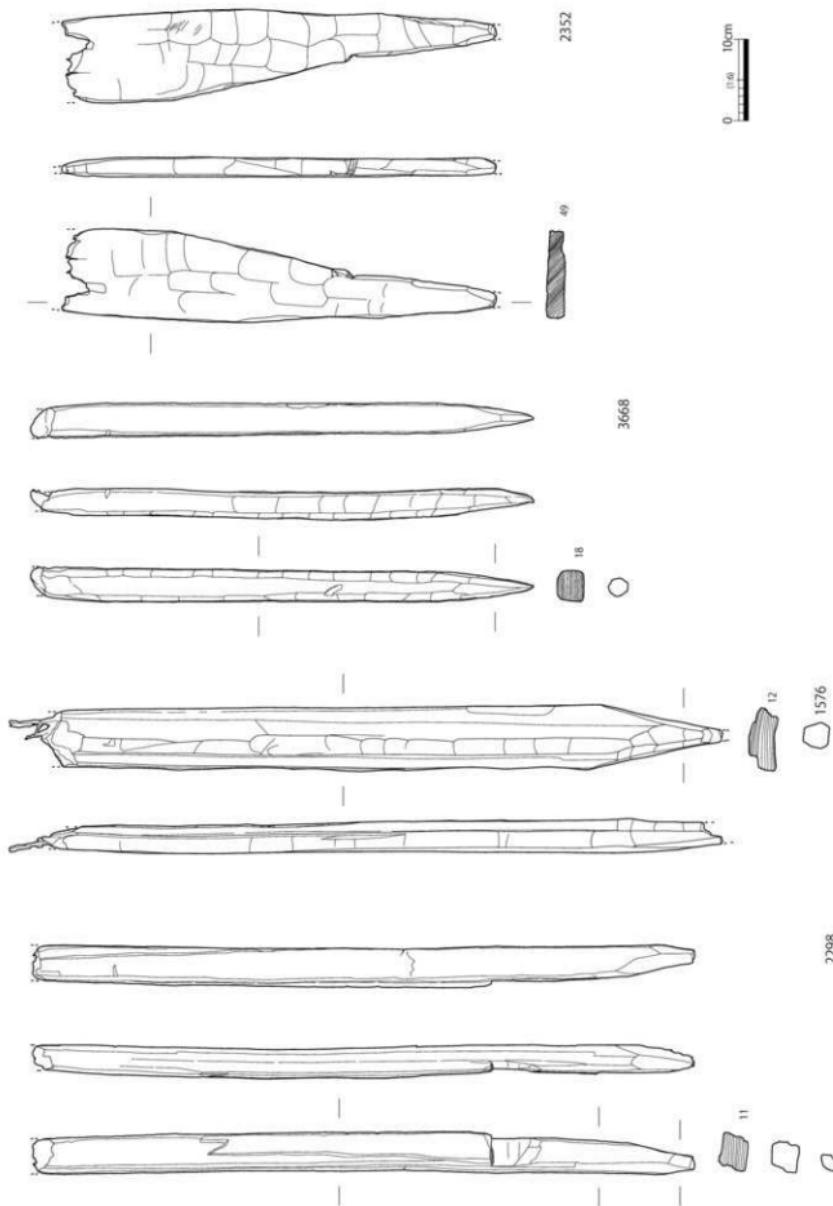


第IV-8-66図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物25

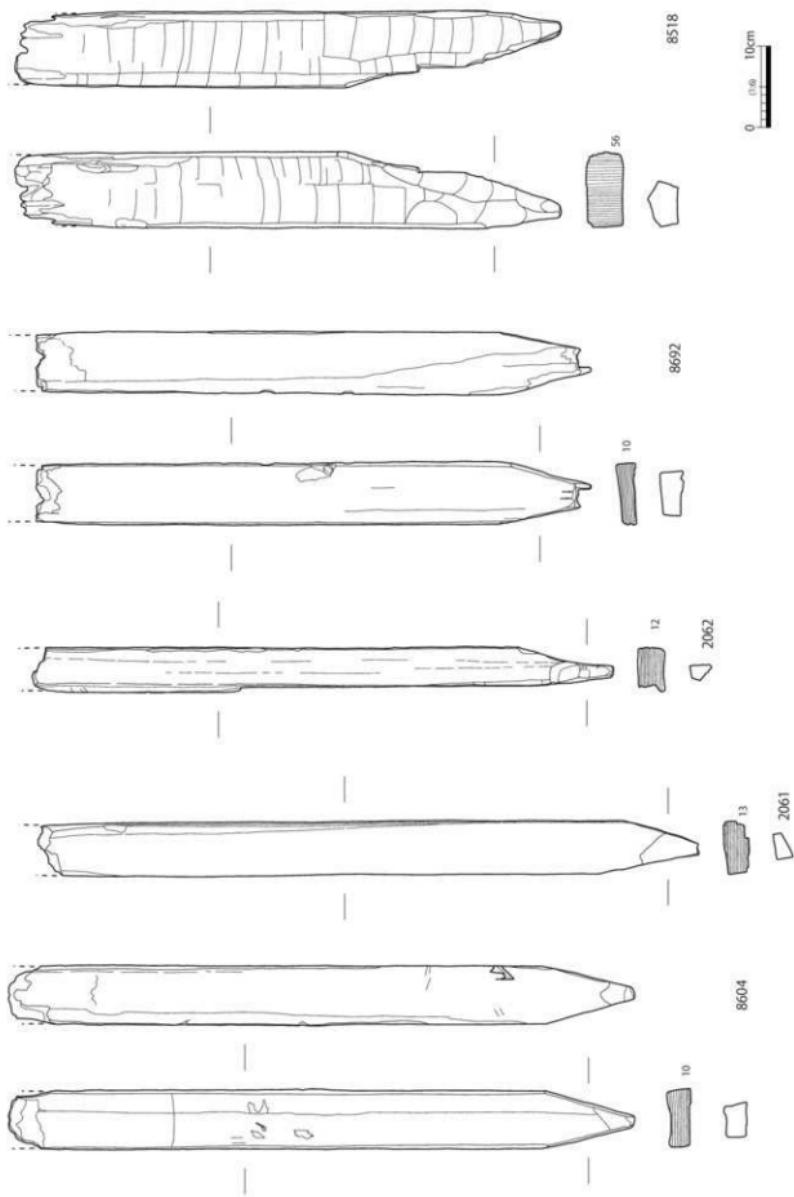


第IV-8-67図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物26

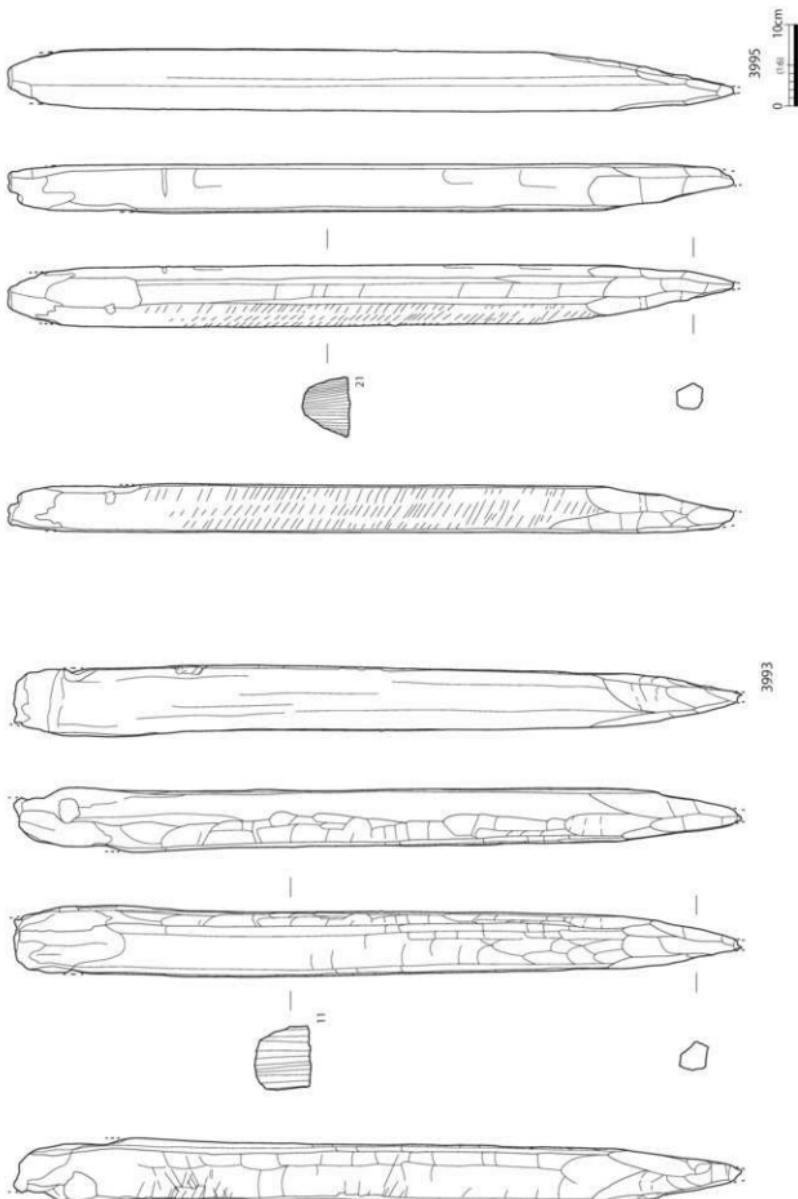
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



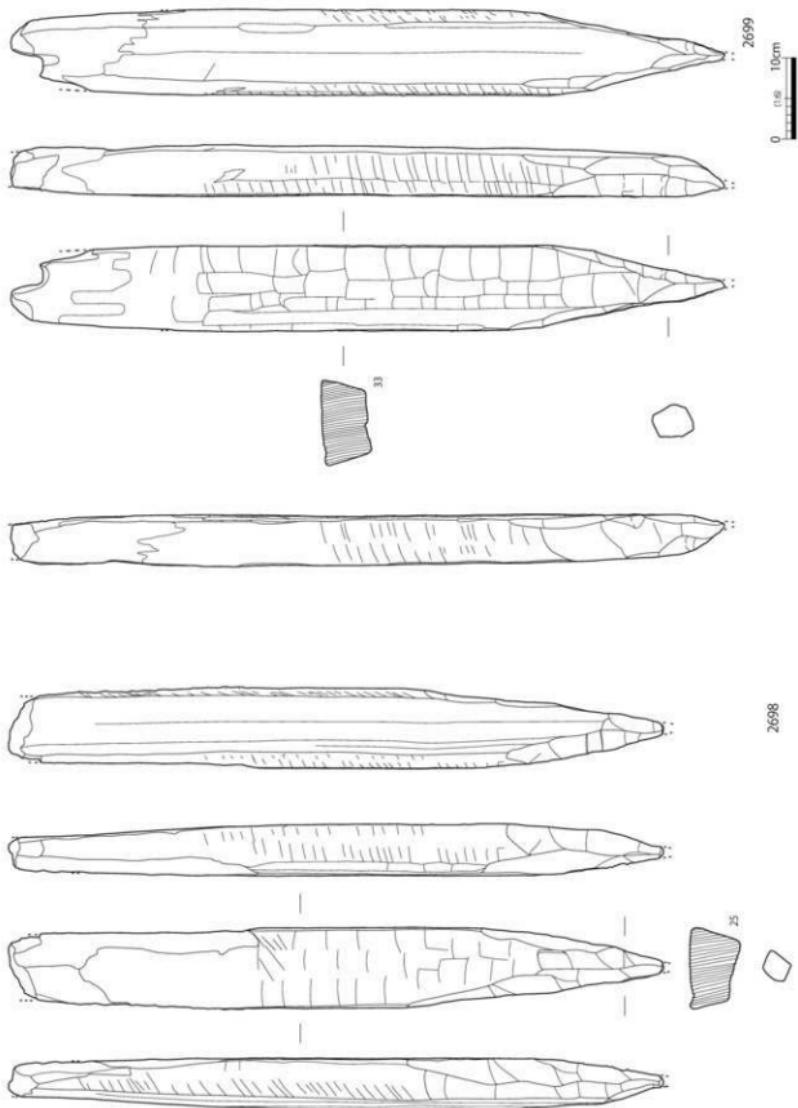
第IV-8-68図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物27



第IV-8-69図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物28

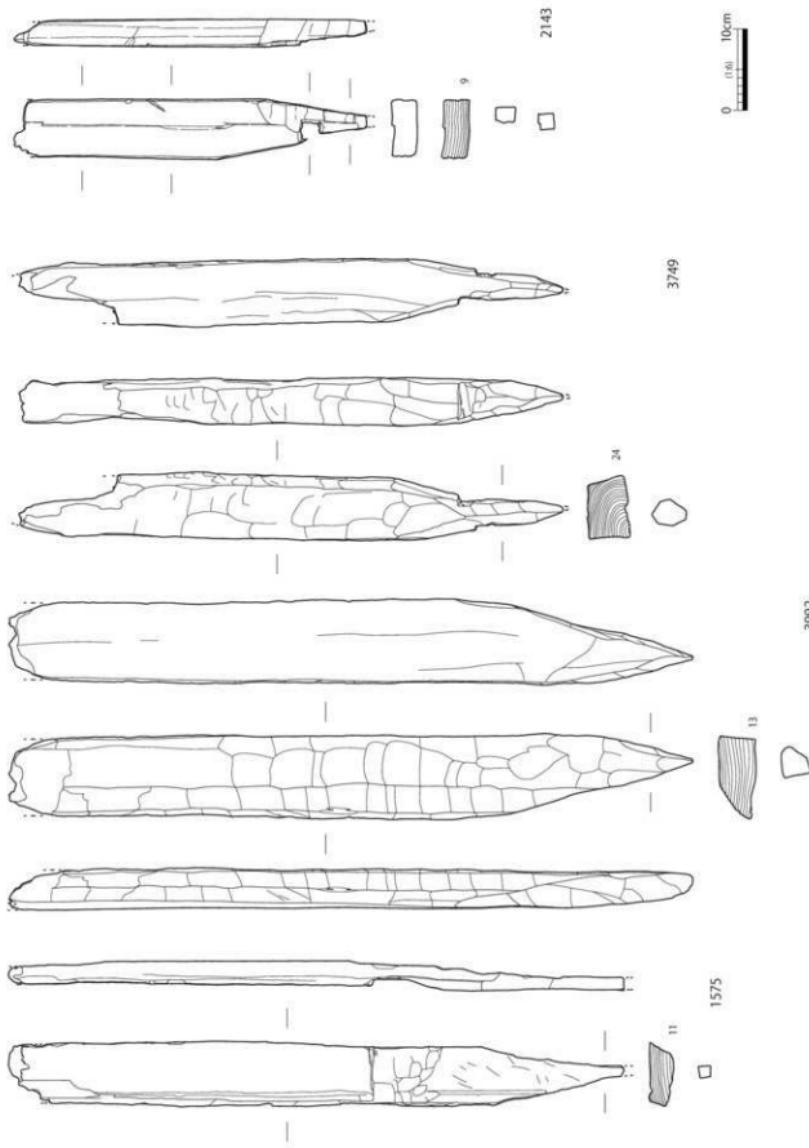


第IV-8-70図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物29

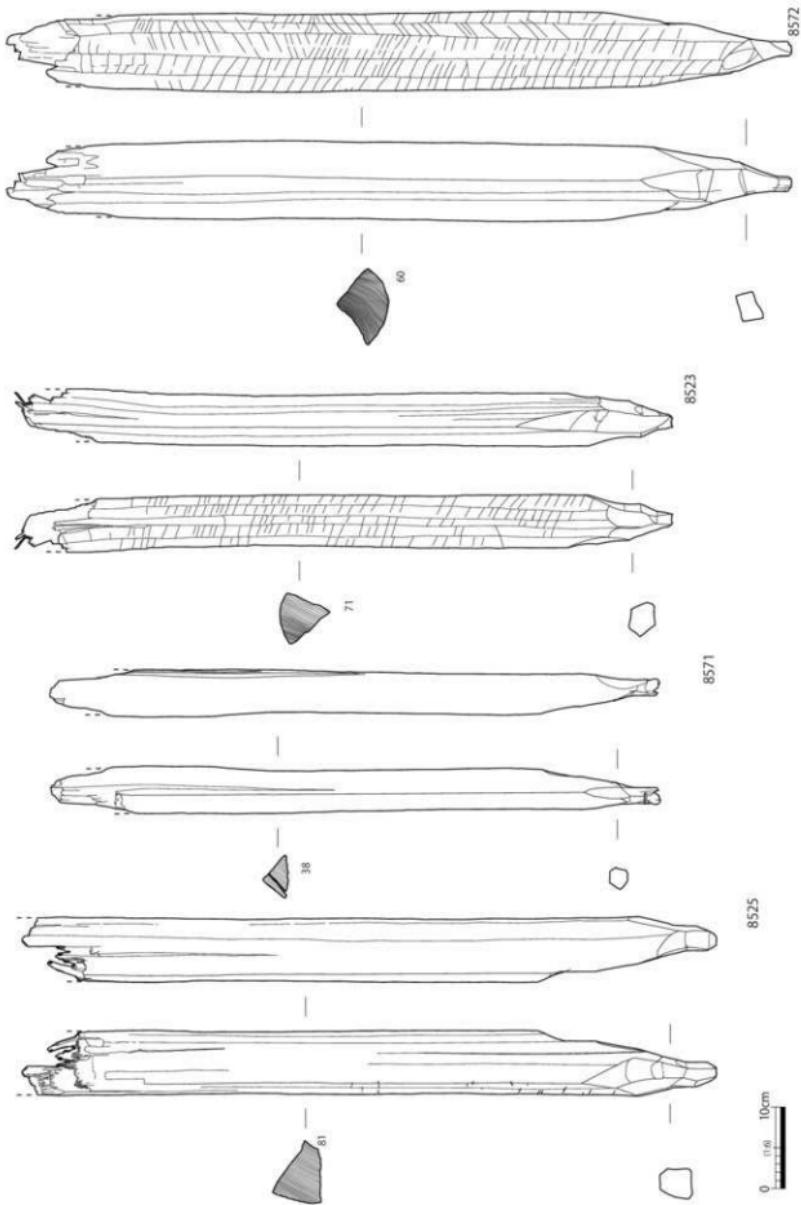


第IV-8-71図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物30

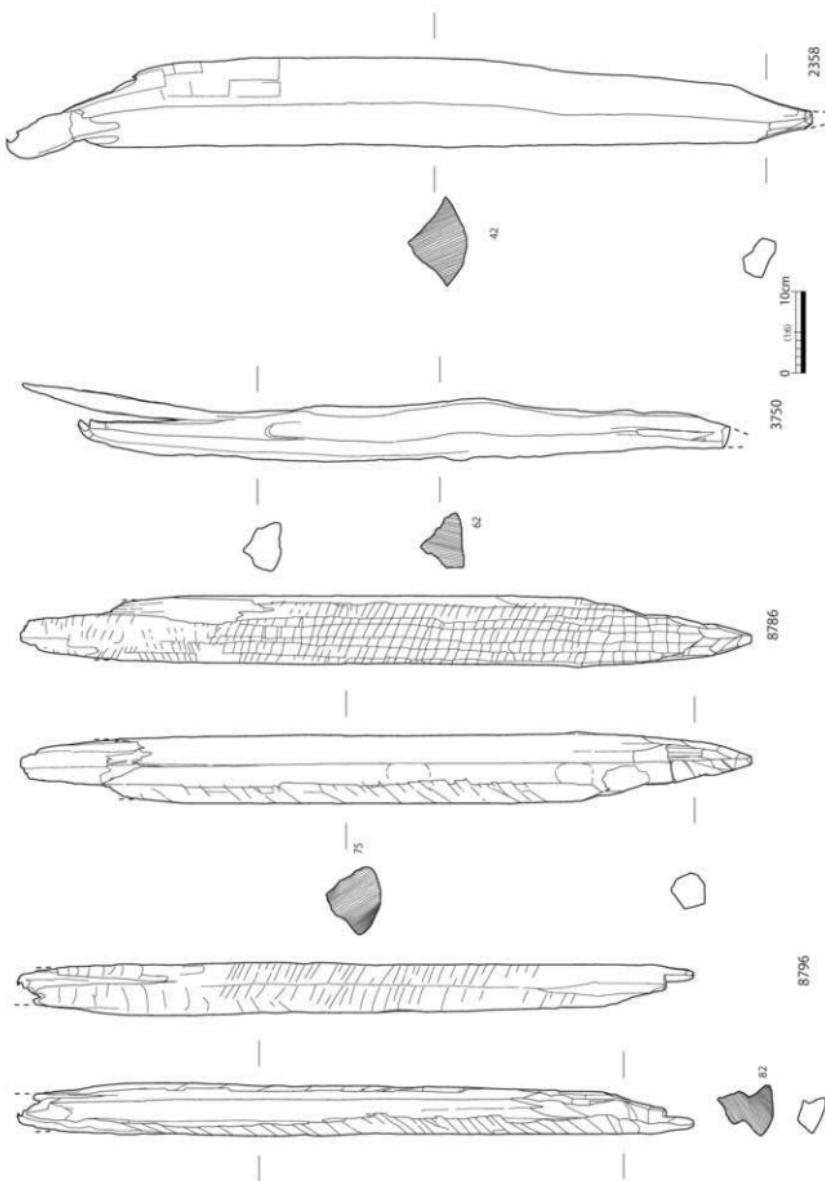
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



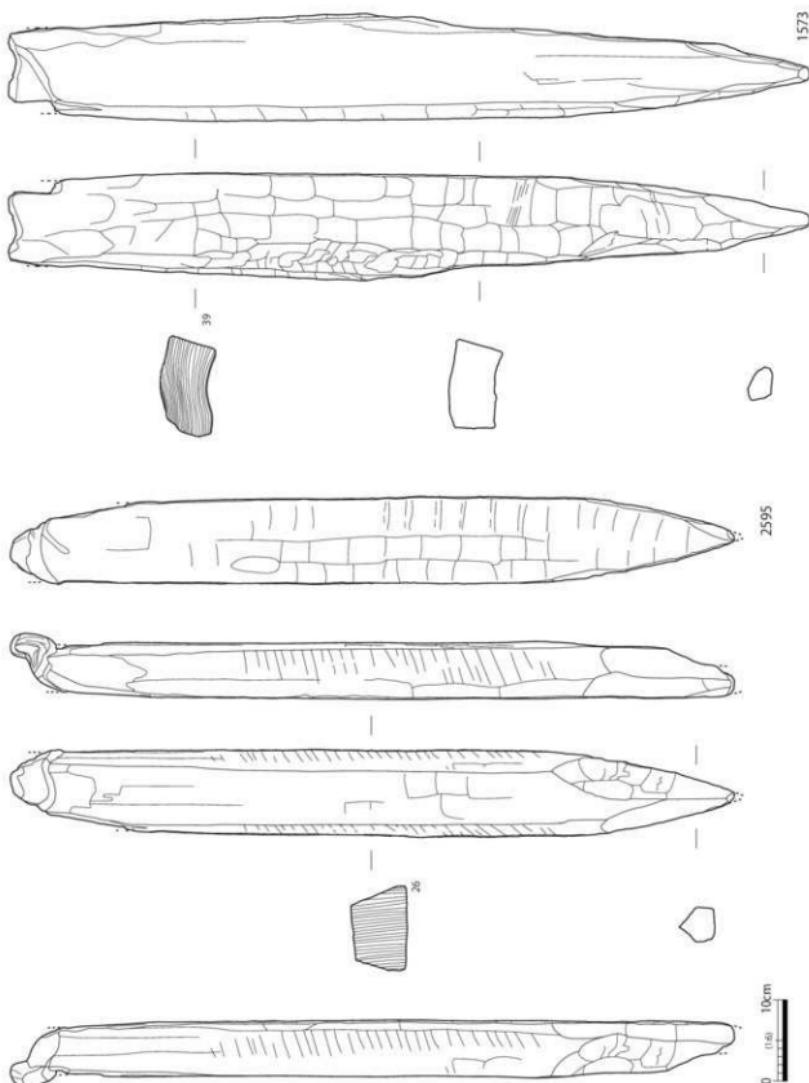
第IV-8-72図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物31



第IV-8-73図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物32

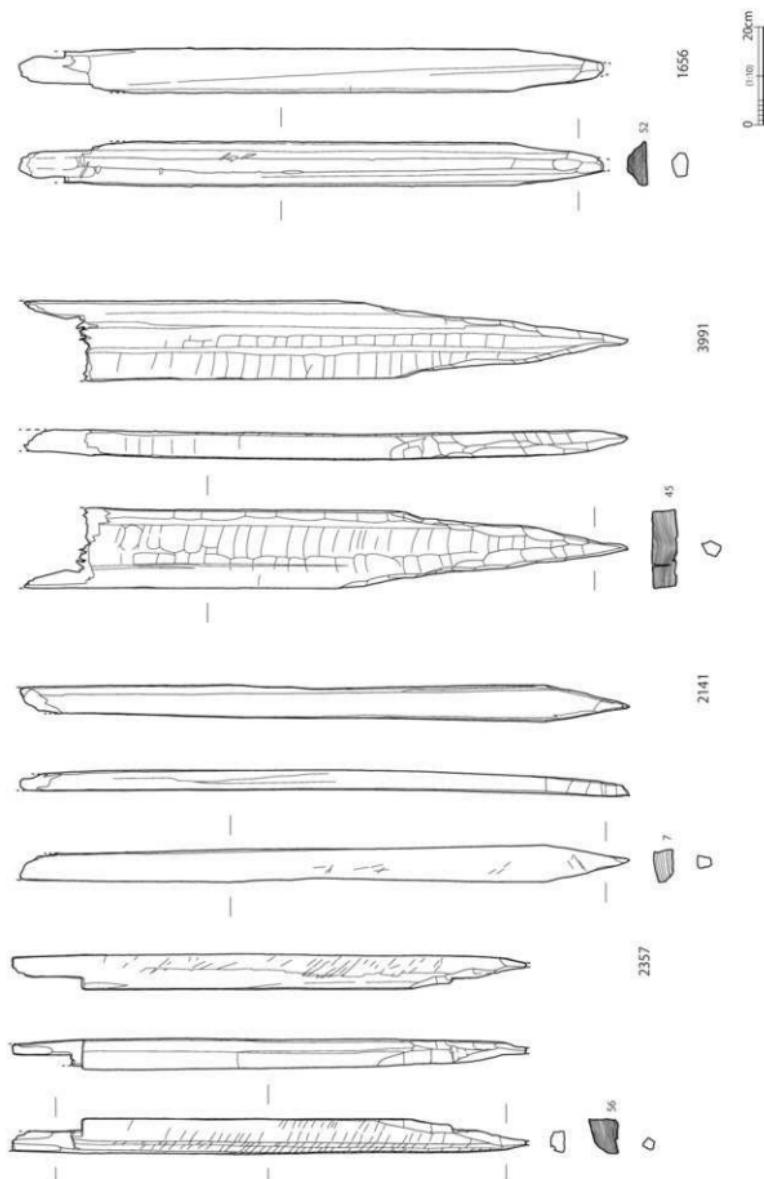


第IV-8-74図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物33

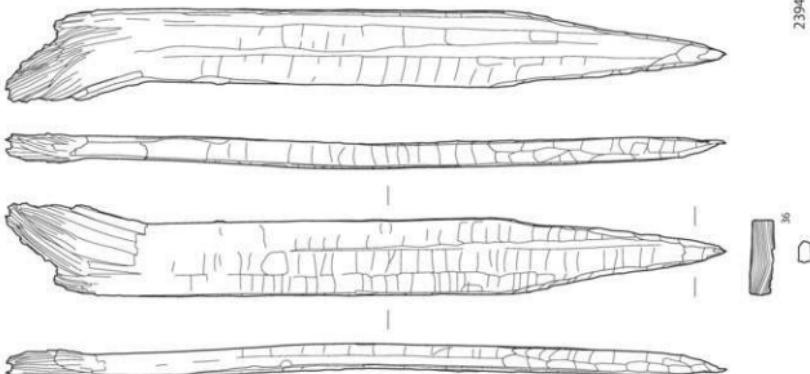
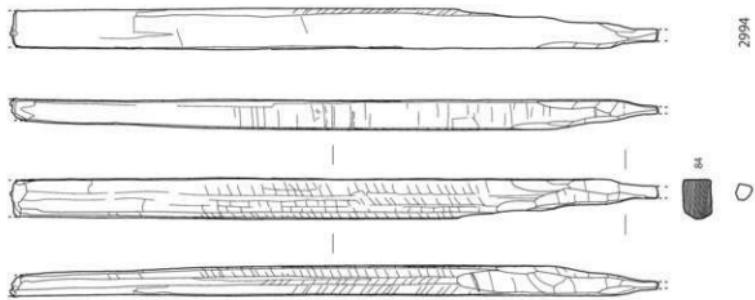
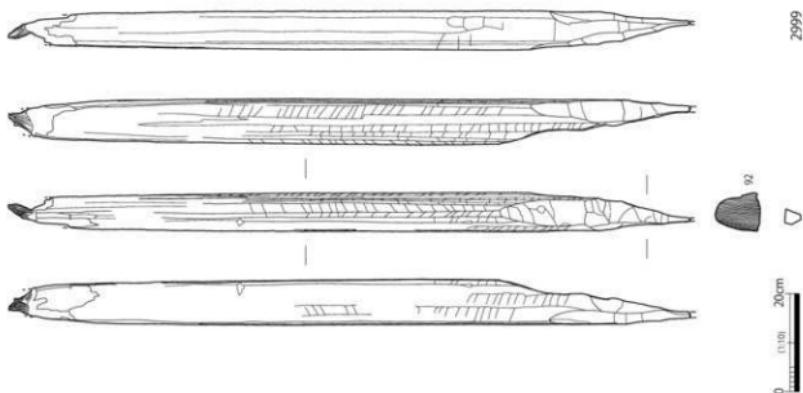


第IV-8-75図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物34

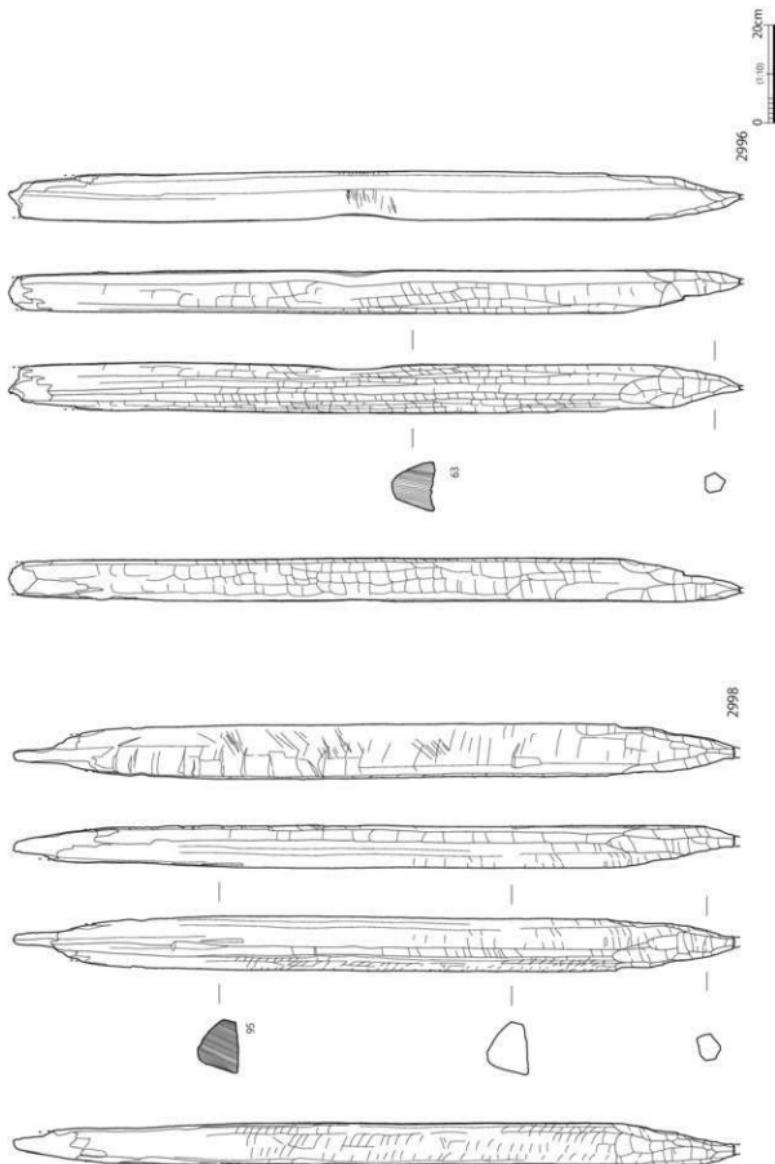
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



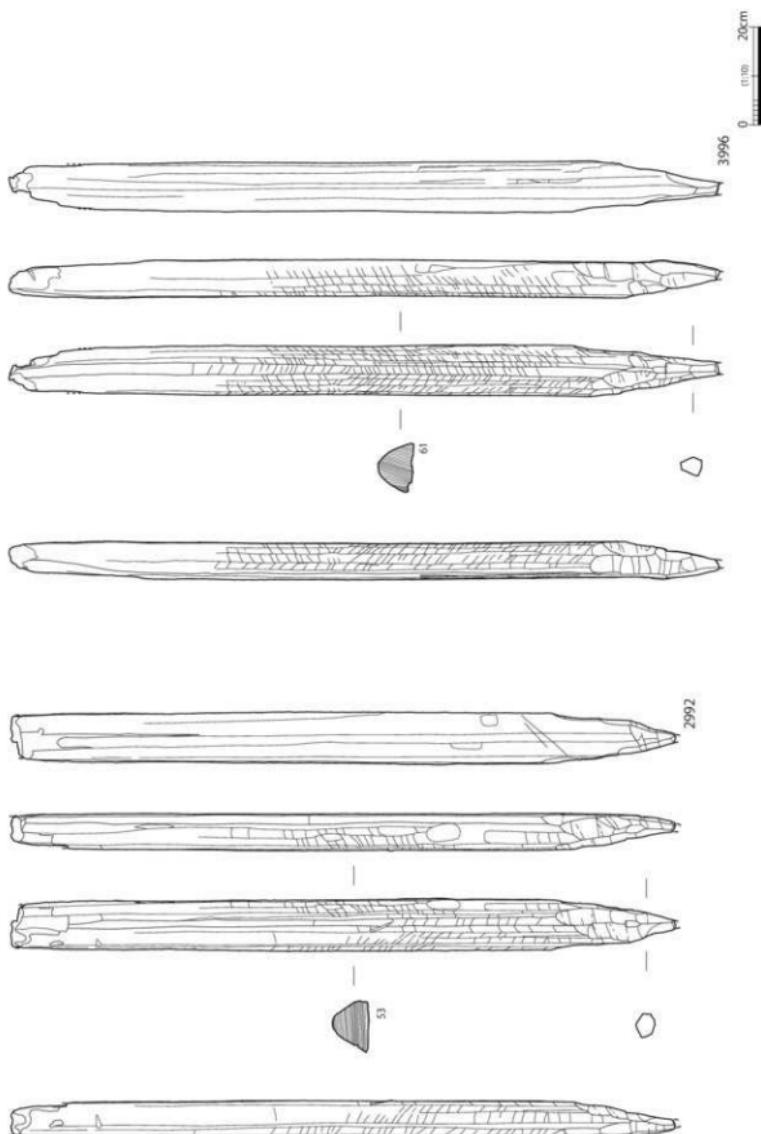
第IV-8-76図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物35



第IV-8-77図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物36

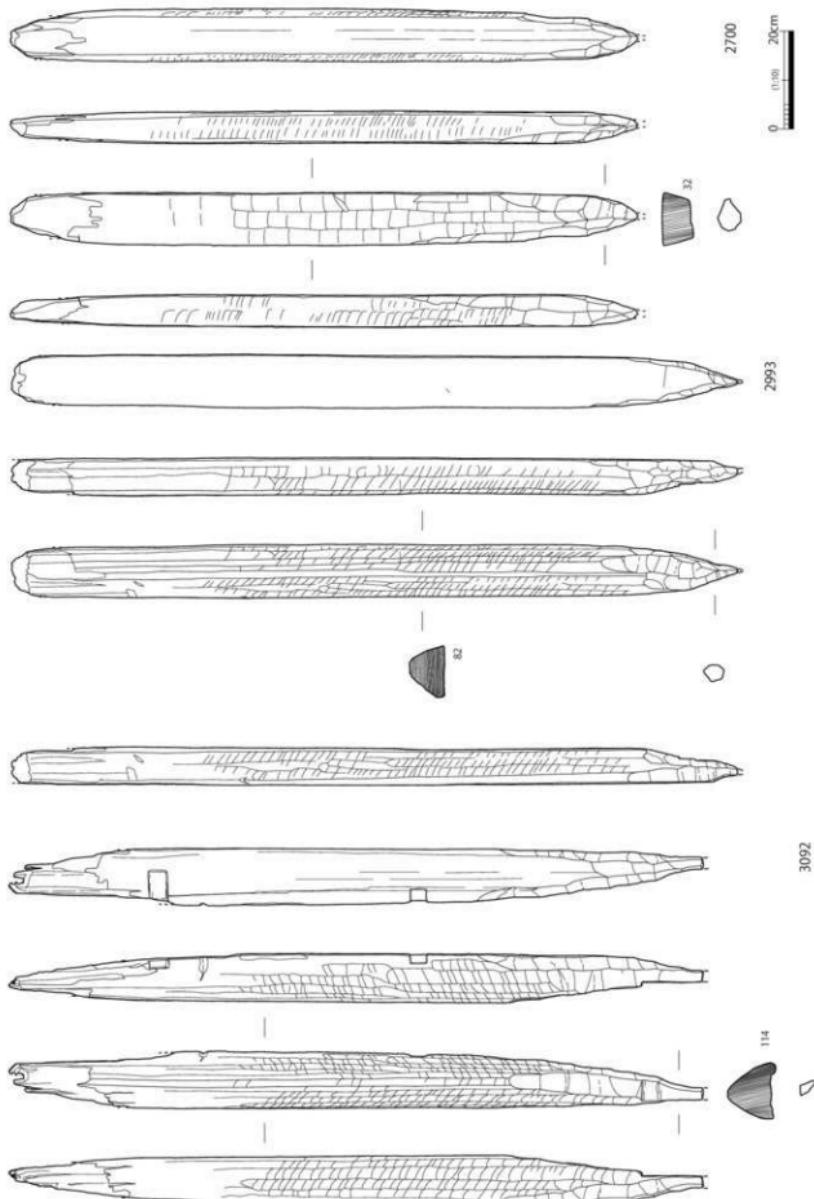


第IV-8-78図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物37

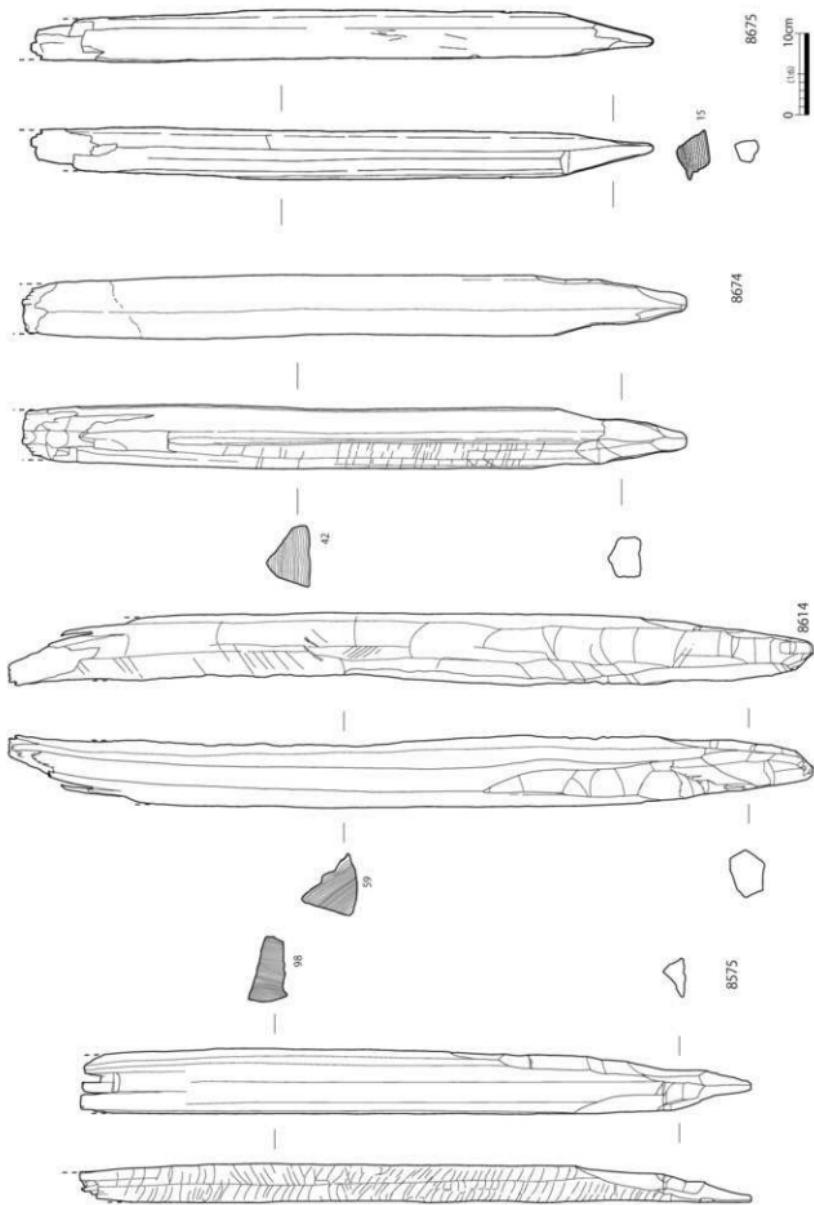


第IV-8-79図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物38

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

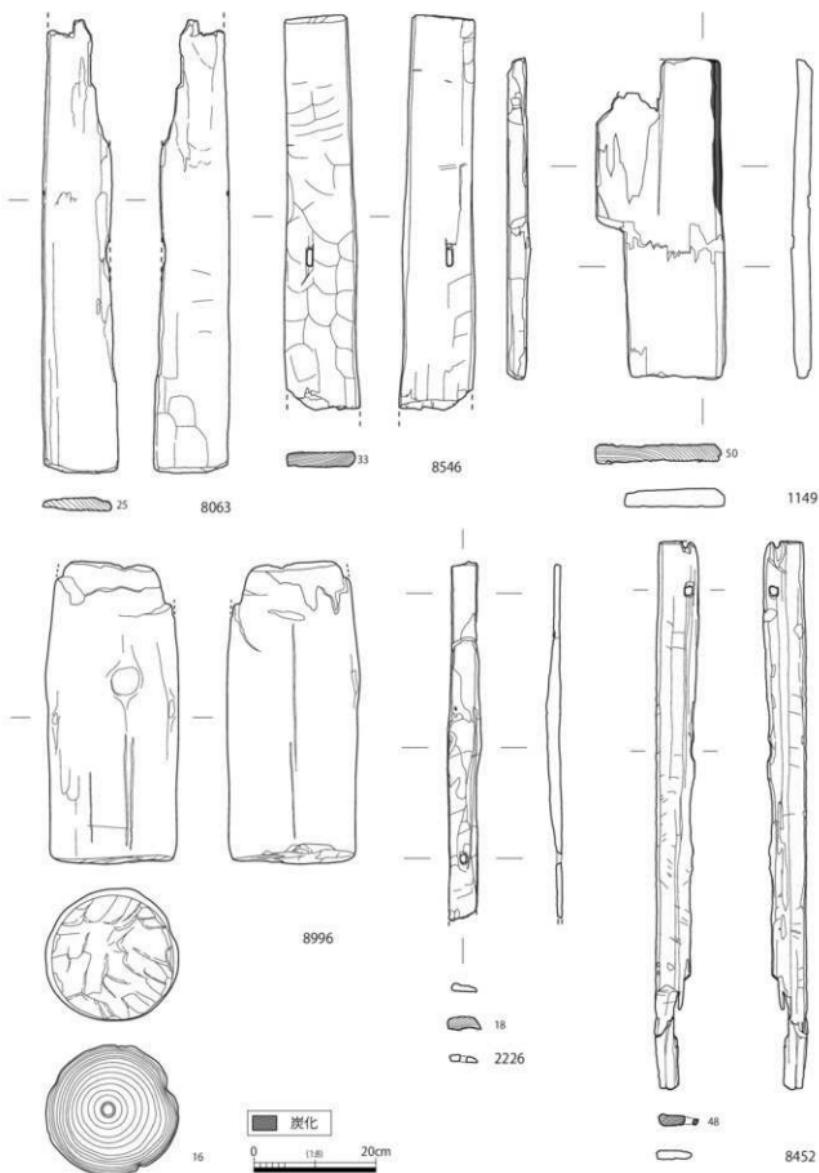


第IV-8-80図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物39

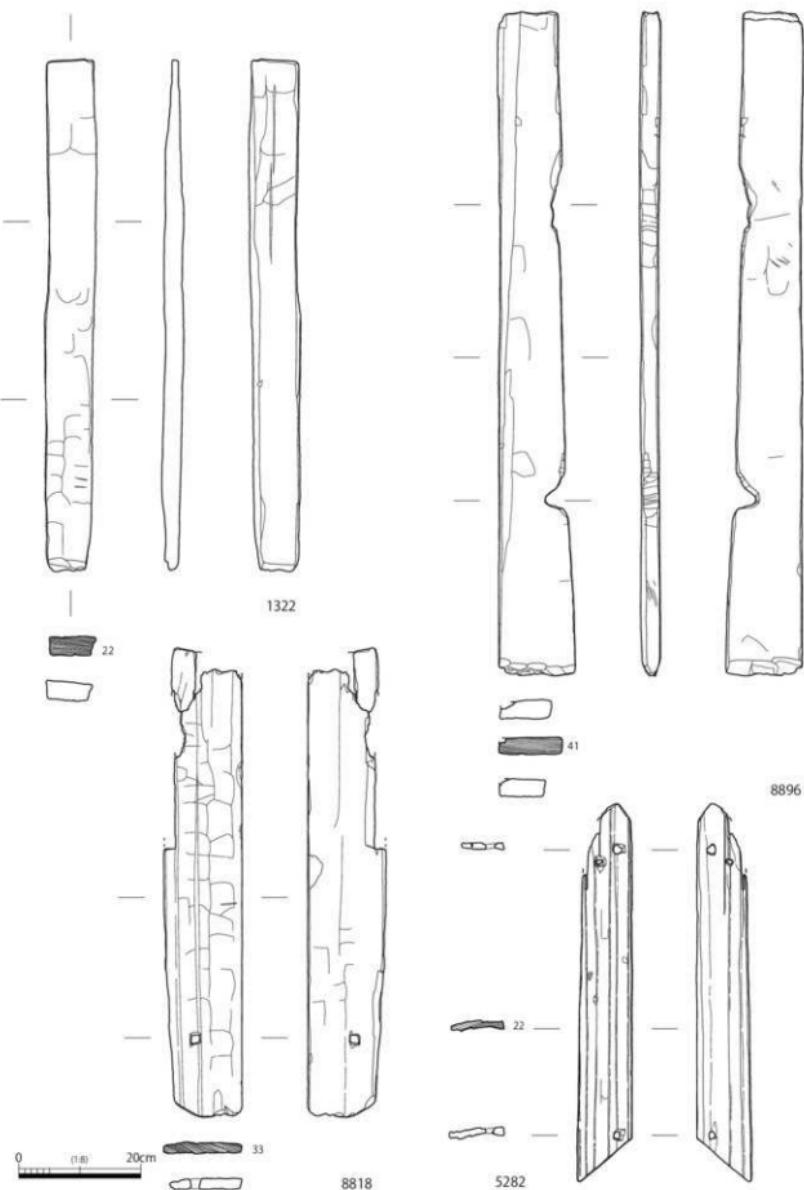


第IV-8-81図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物40

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

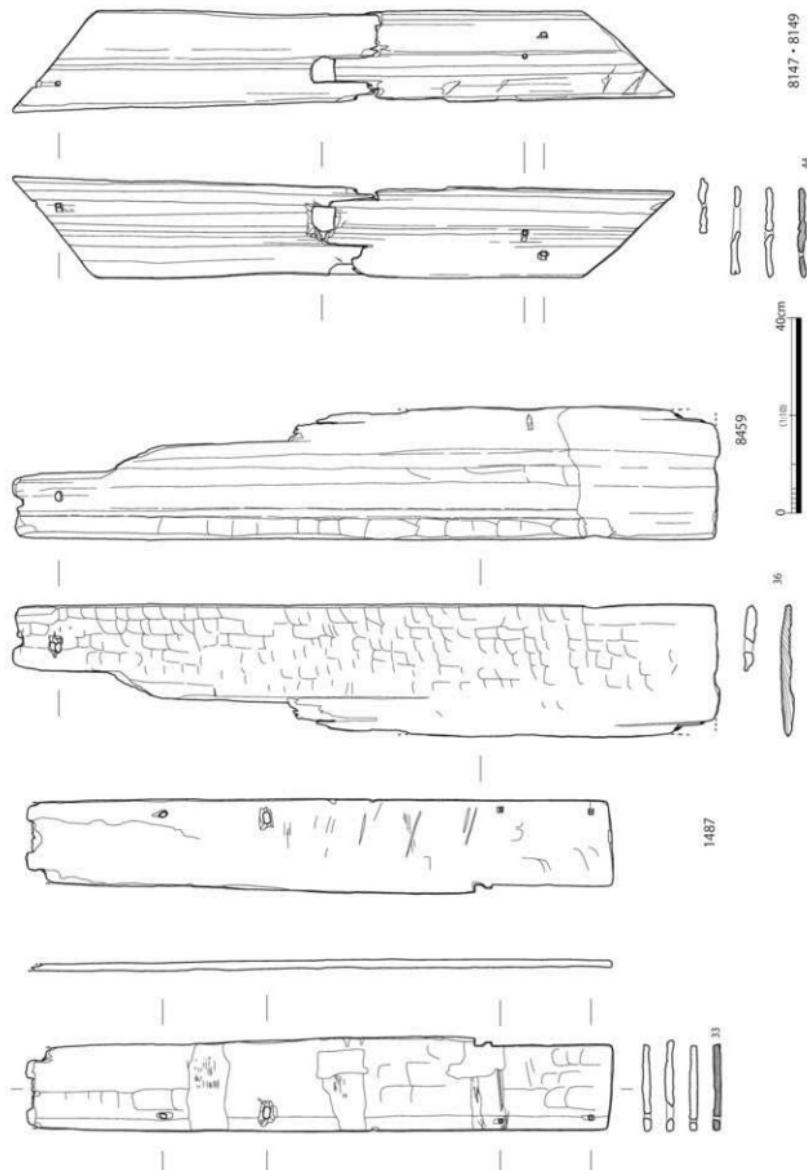


第IV-8-82図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物41

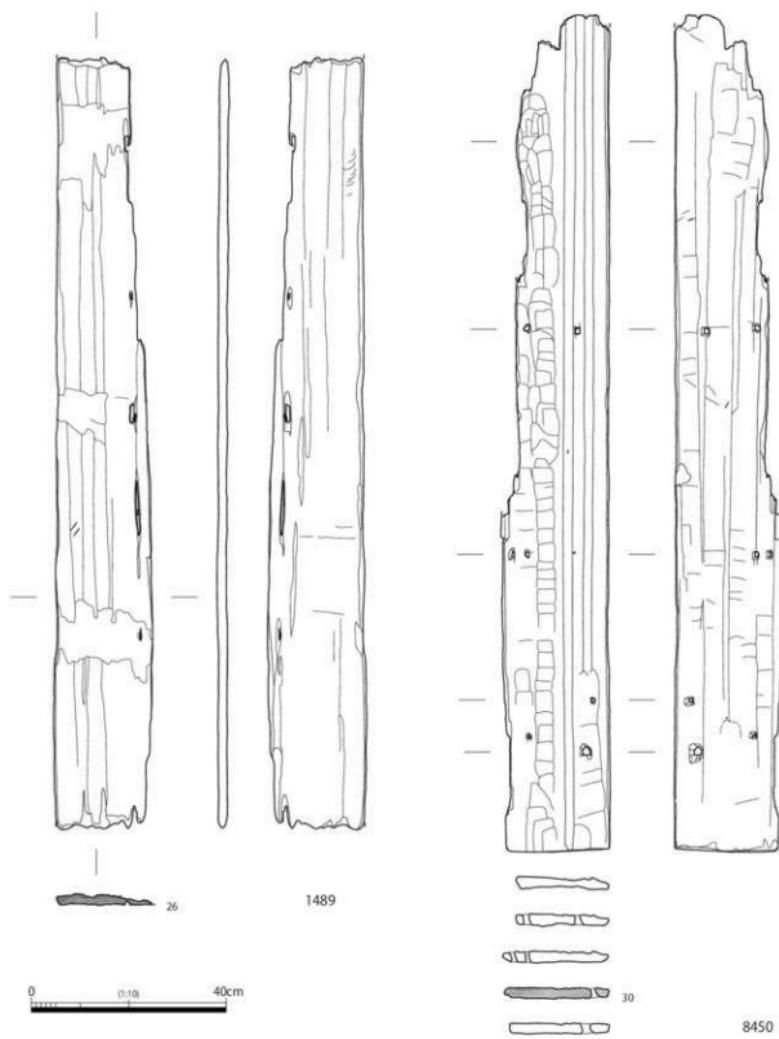


第IV-8-83図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物42

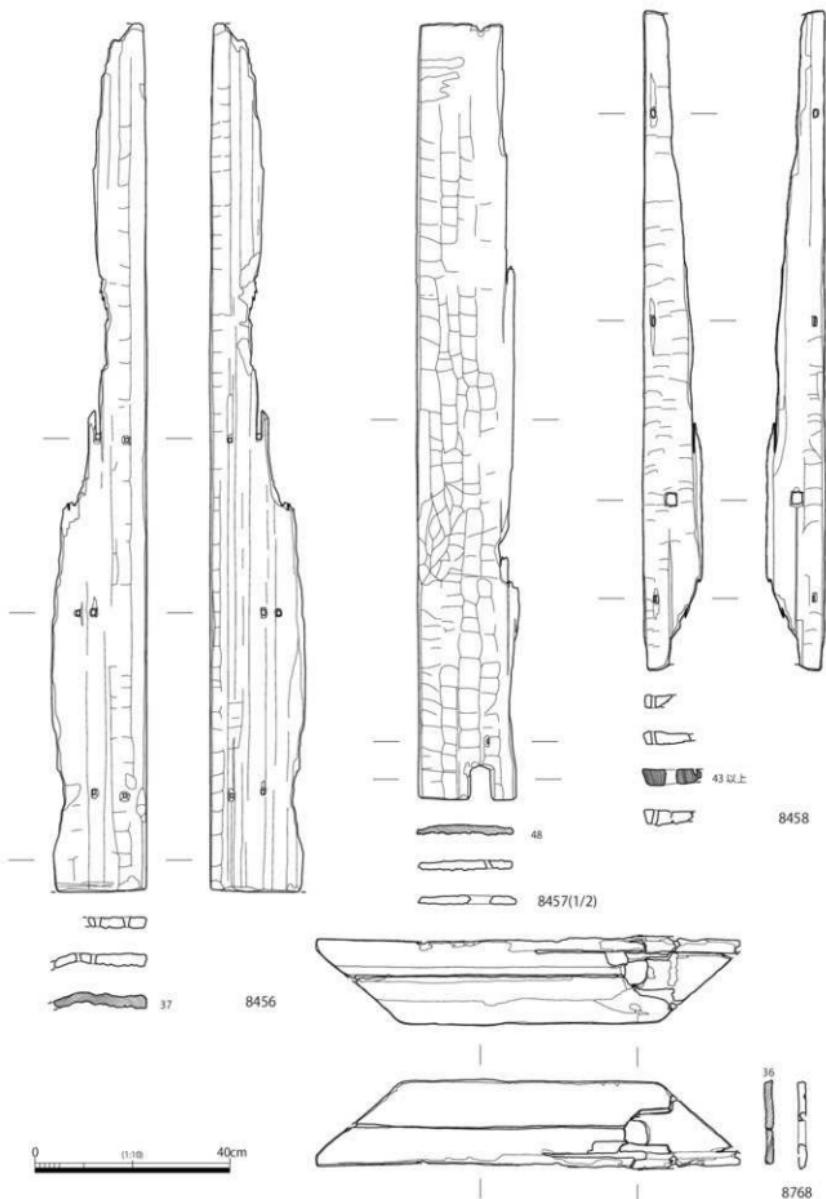
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



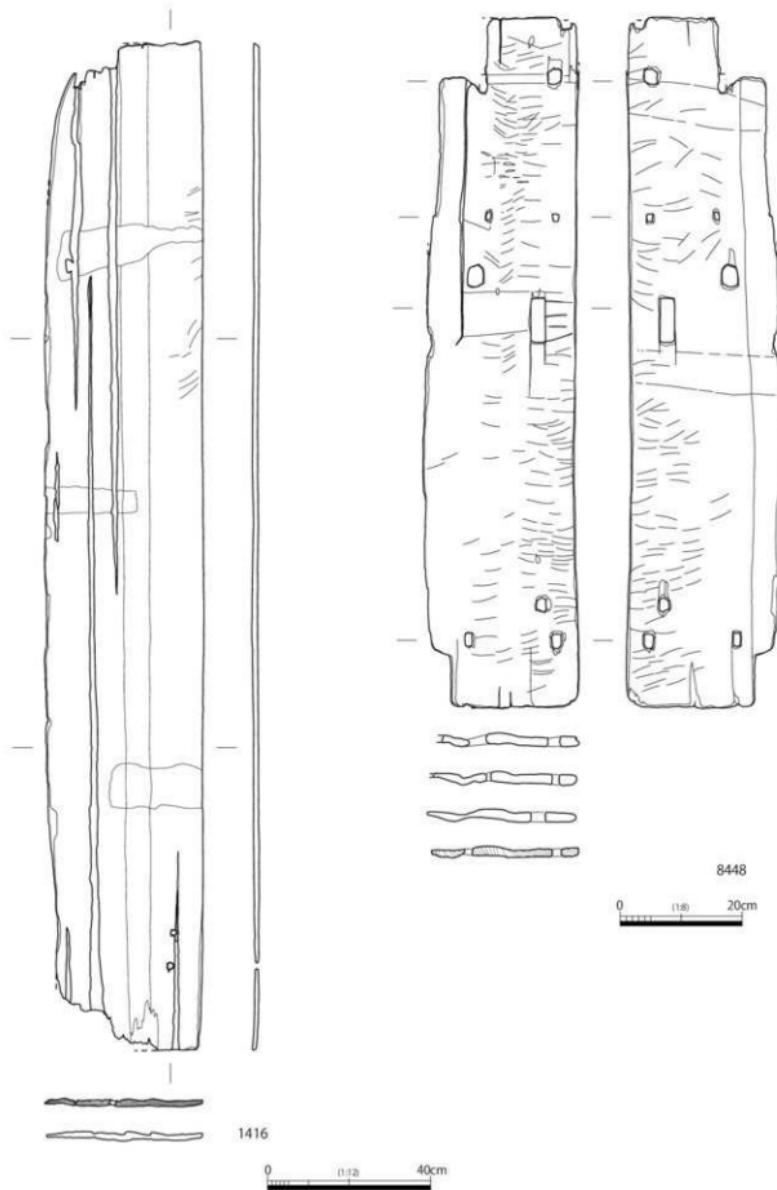
第IV-8-84図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物43



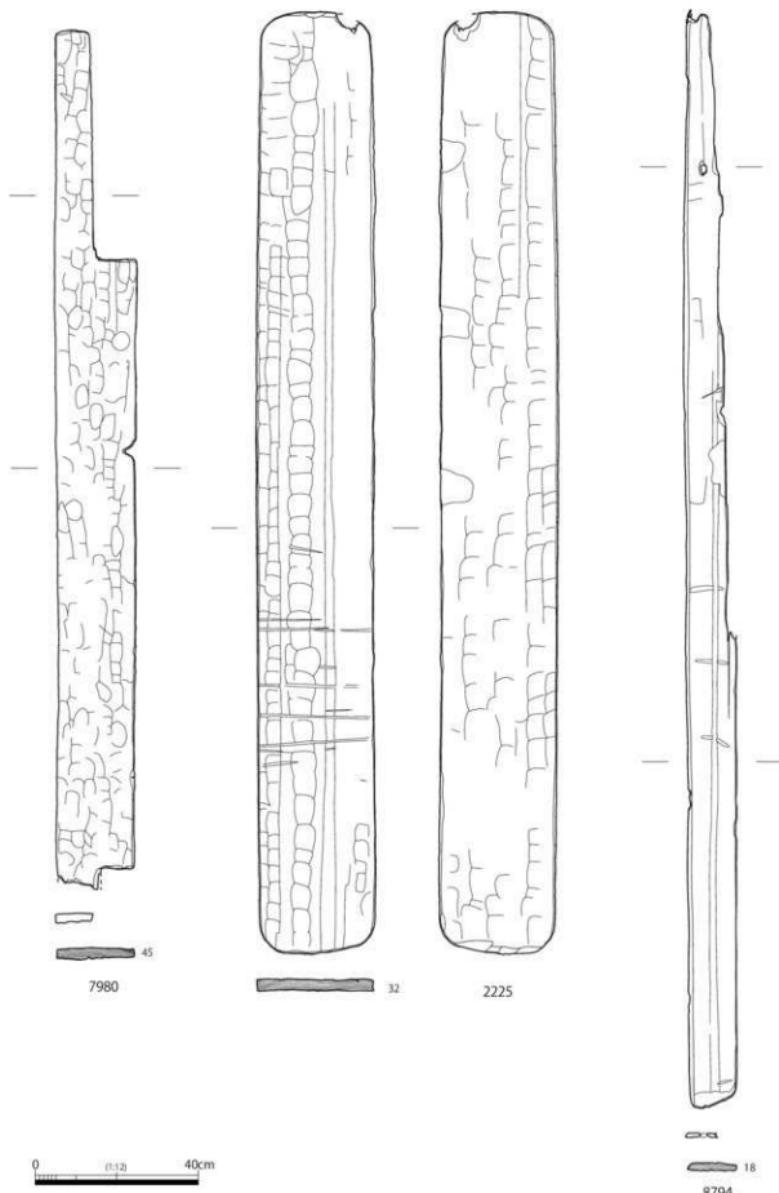
第IV-8-85図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物44



第IV-8-86図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物45



第IV-8-87図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物46

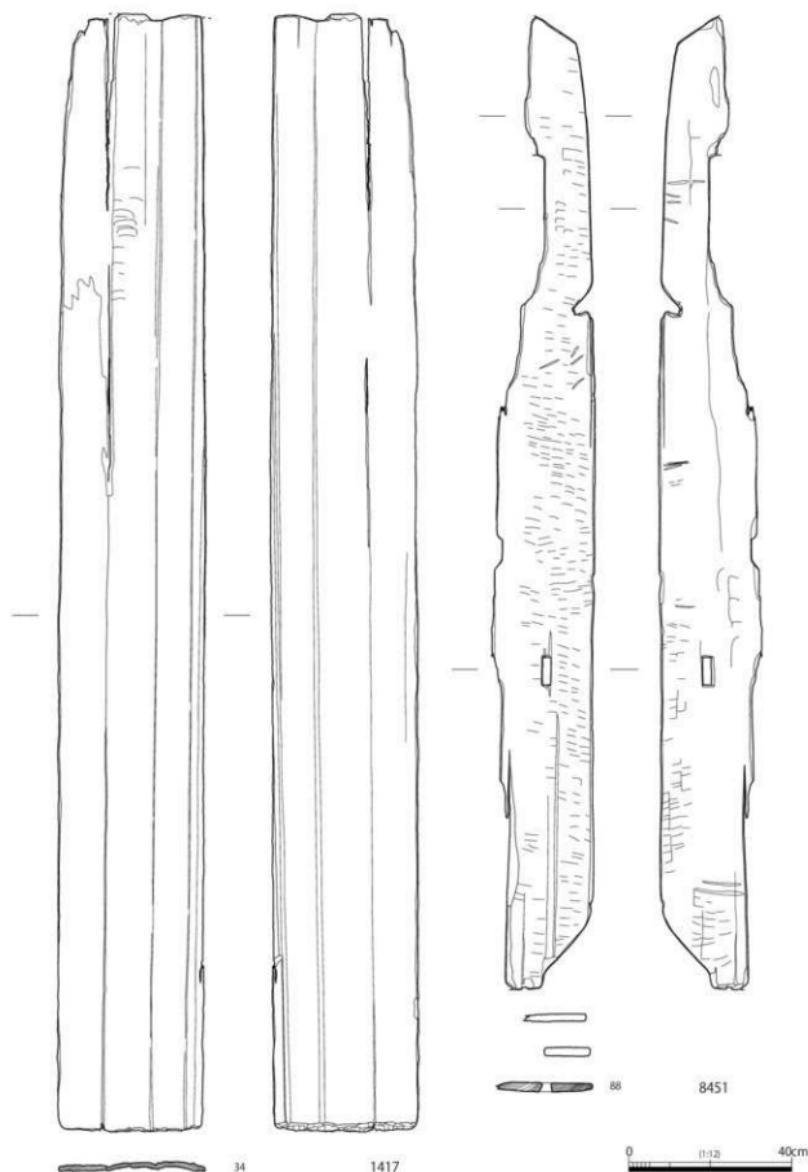


第IV-8-88図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物47

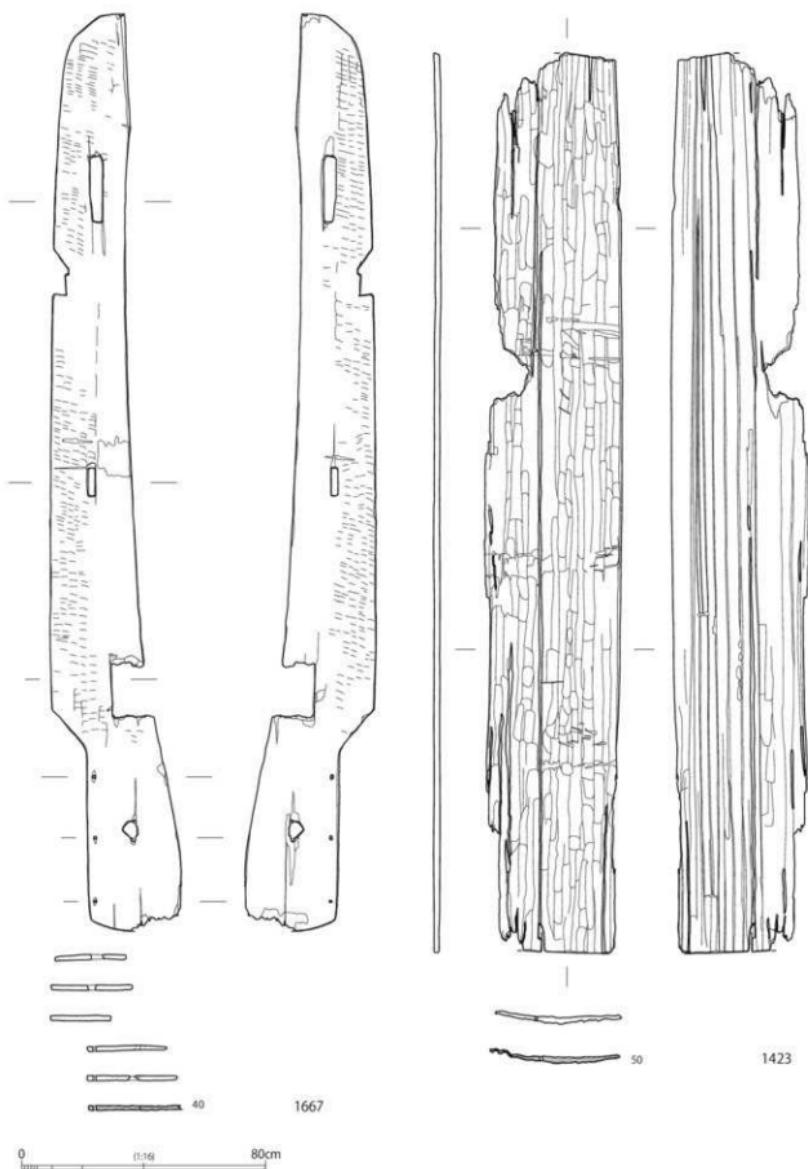


第IV-8-89図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物48

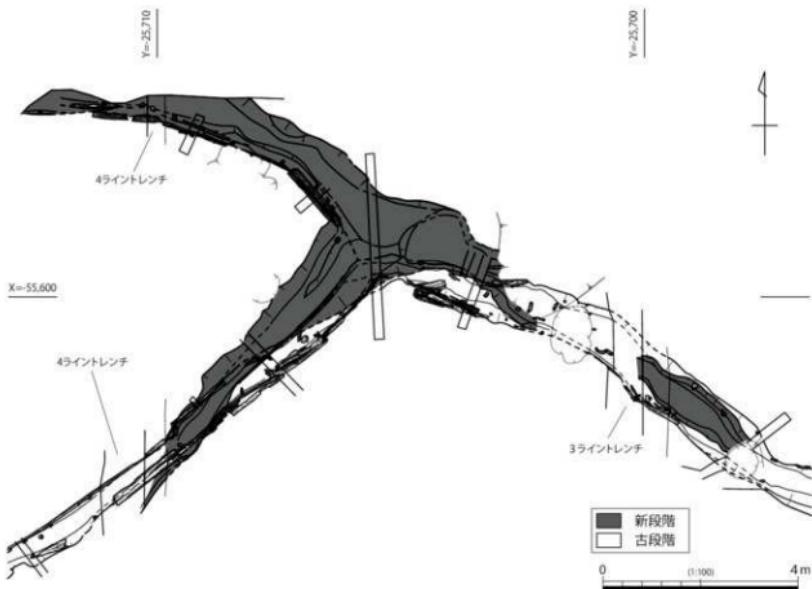
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-90図 2区 第7面 満(2S-245) 出土遺物49



第IV-8-91図 2区 第7面 溝(2S-245) 出土遺物50

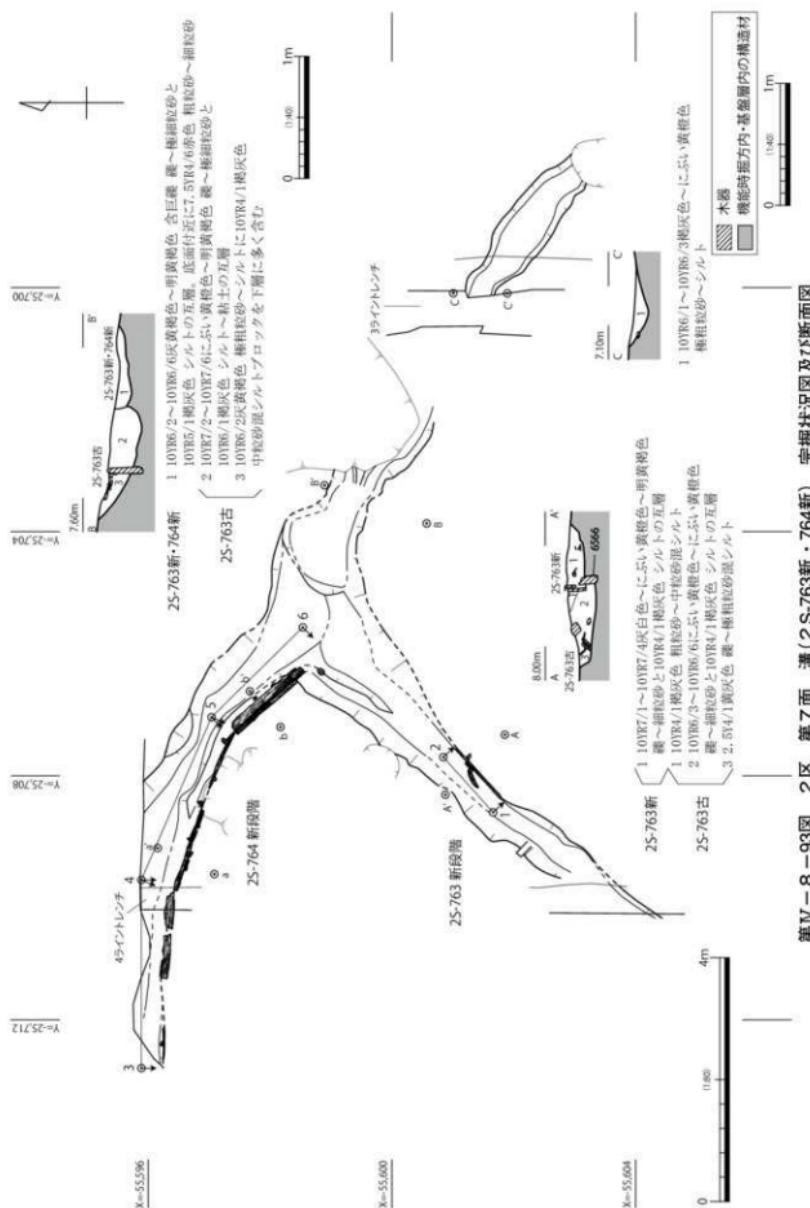


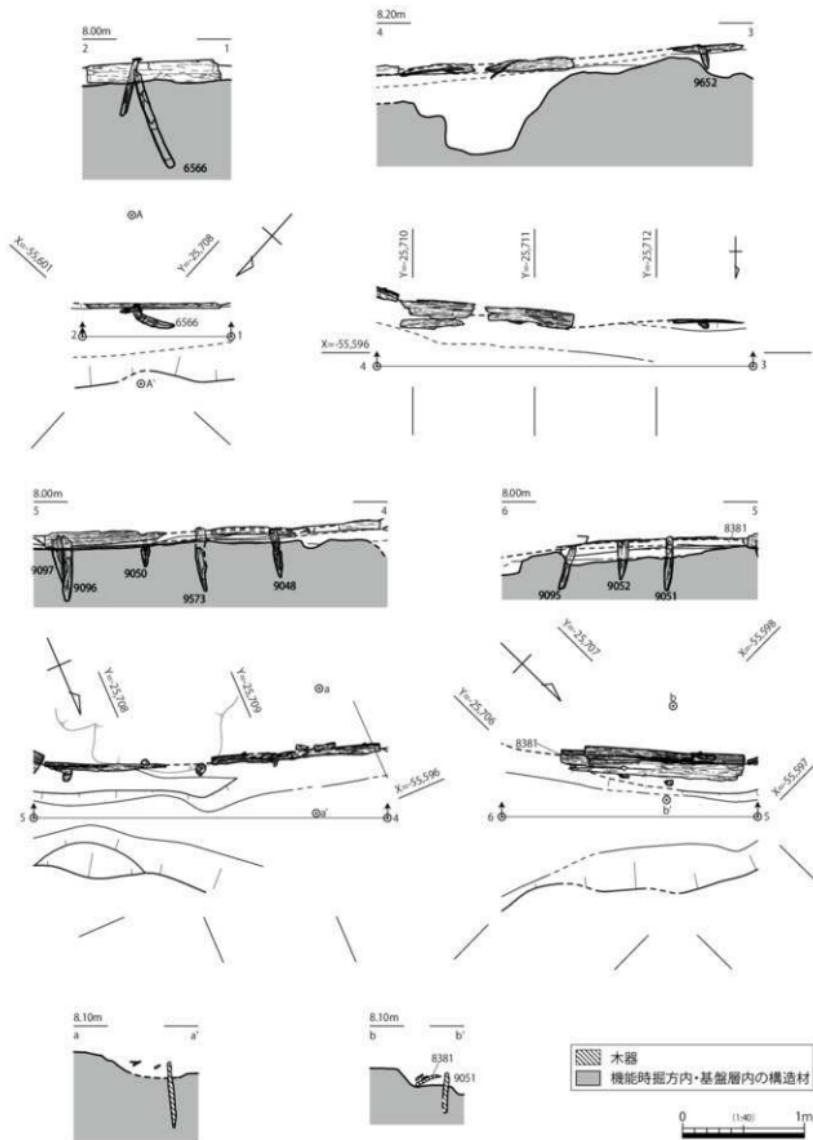
第IV-8-92図 2区 第7面 溝(2S-763・764) 新旧関係模式図

建築部材は杭に利用された柱材(8996)がある。図化したものは基本的に板材が多く、護岸材に転用されていたものである。部材を同定できるものは少ないが、8768、8147・8149は妻壁と考えられる。8768の両側縁は約40°、44°、8147・8149の両側縁は約45°と50°の勾配に加工されている。8768には左側縁よりに約4.5cmの隅丸方形の孔がある。8147・8149は中央部にはほぼ同型、同規模の孔がある。8147・8149は他にも紐孔と考えられる方形孔が3カ所ある。他の板材は方孔を伴うものや側辺に欠き込みを伴うものなどがある。壁材や床材と考えられる。これらの板材は厚みのある8458を除き、木取りは板目である。(馬路)

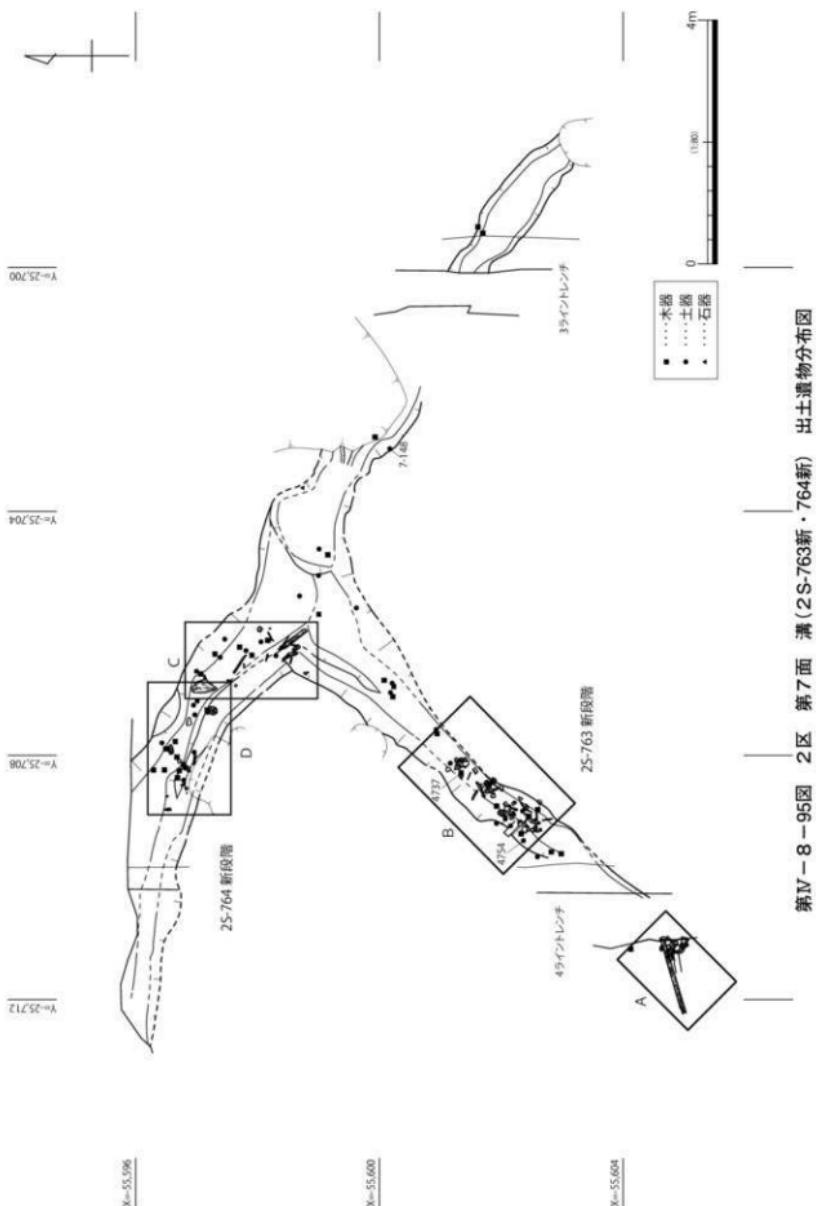
2 S-763・764・824(第IV-8-92～142図)

2区南側の全体で検出した。2 S-763・824は、調査区南側の丘陵と1区の丘陵が東に張り出すことにより2区南西部に形成された谷筋に設置された溝である。南側丘陵が北に張り出した裾を廻るよう、南西から北東方向に流れ、4ラインレンチと3ラインレンチの間で2 S-764と合流して南東方向へと流れる。一方、2 S-764は、2区中央部で4ラインレンチの約2.5m西側から、南東方向へと流れる溝で、先述のとおり2 S-763と合流する。2 S-824は、2 S-763と一連の溝で6ラインレンチ以西の部分が該当する。また、2 S-763と764はそれぞれほぼ同一場所での切り合いが認められることから、それぞれに新旧2段階があったと考えられる(第IV-8-92図)。2 S-763は、新段階の方が残存状態はあまり良くなく、検出範囲はほぼ3ラインから4ラインの間に限定される。





第IV-8-94図 2区 第7面 溝(2S-763新・764新) 護岸平・立・断面図



2 S-764は、南岸の横板と杭の前後関係と残存状態を基に新旧関係を推測すると、溝の内側の横板の方が残存状態は悪く、横板の上にさらに砂層が堆積して内側に倒れこんでいることから、内側の方が古く外側が新しいと判断した。(馬路)

2S-763・764新段階(第IV-8-93~100図)

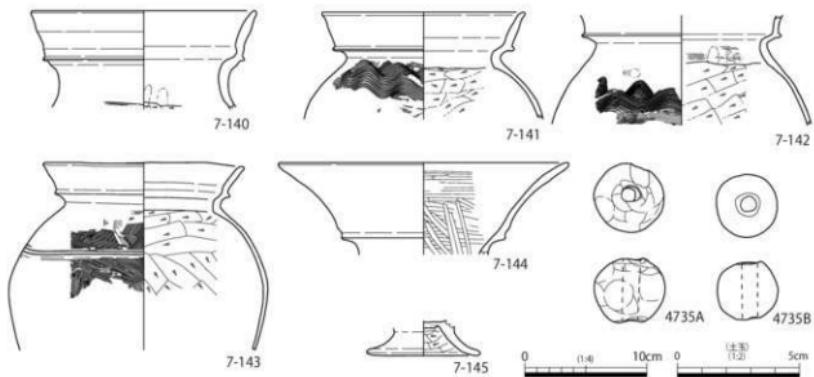
2 S-763(新段階、以下段階は省略)は、4ライントレチから東側に残存し、北東方向に流れる。

2 S-764(新)は4ライントレチより約2.5m西側から南東方向に流れ、2 S-763(新)とY字形に合流する。合流後は南東方向に流れる。合流点までの延長は、2 S-763(新)は約7.2m、2 S-764(新)は8.2mで、合流点から下流は約8.6mである。幅は、約0.4~0.6mで、合流点付近のみ0.8m程度まで広くなる。深さは約0.15mと浅く、上半部は失われている可能性が高い。

いずれも護岸材の残存状態が悪く、それぞれ南岸の一部に残存するだけで、北岸には護岸材がない。北岸に伴う明らかな杭の痕跡も認められず、護岸が設置されなかった可能性が高い。合流点より下流側においても、護岸材は認められないで素掘りの溝だったと考えられる。

2 S-763(新)の護岸材は、横板の長さが約1.1m、幅が約0.18mで、この横板の中央部で2本の杭が交差して打ち込まれている。横板側の杭の長さは0.48mで地中部分が0.28m、もう一方は0.85mで地中部分が0.75mである。

2 S-764(新)の護岸材は、立面ポイント3-4間と4-5間は横板が腐食によりとぎれとぎれに残存する。3-4間で確認できた杭は1本で、4-5間では5本の杭が約0.4~0.7m間隔で打ち込まれていた。立面ポイント5-6間は、古段階と同一のもので、横板の長さは約1.5m、3本の杭が約0.4m間隔で打ち込まれていた。杭の長さは、約0.3~0.4mである。これらの杭は、南岸に形成されたテラス部分の落ち際に打ち込まれているのに対し、横板は南岸際から内側に倒れこんでいるため、杭(9051、9052)と横板の間に隙間が生じている。現状では4-5間の横板との並びに乱れは無いが、杭列に合わせると横板(8381)の西端が溝の内側に入り込み、4-5間の横板との並びが乱れる。このことから杭は本来古段階の護岸設営時に設置されたものがそのまま再利用された可能性が考えられる。



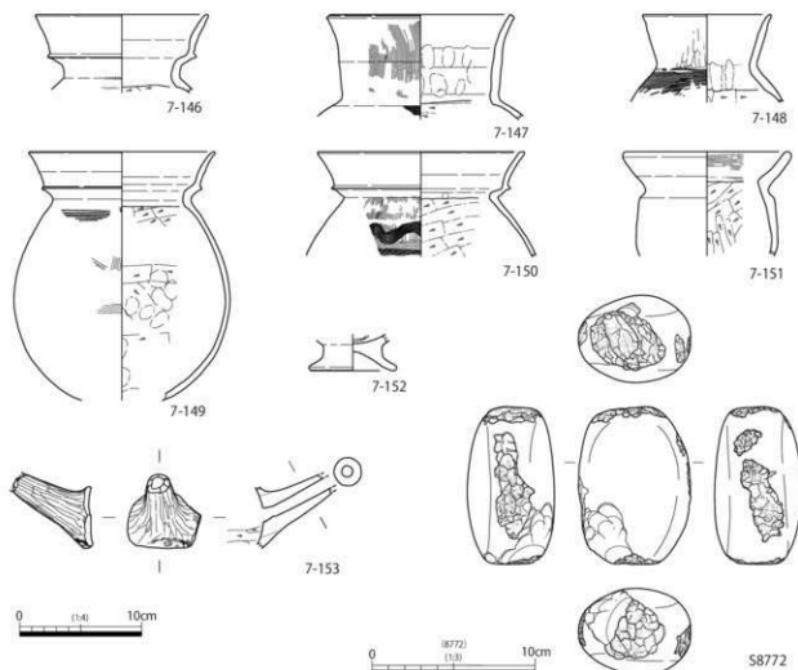
第IV-8-96図 2区 第7面 溝(2S-763新) 出土遺物

遺物は、合流点付近よりも上流側でまとめて出土した。2 S-763(新)では、護岸材の残る付近から土器がまとめて出土した。2 S-763(新)と2 S-764(新)から出土した土器は、乙亥正VII期のものと考えられる。なお、2 S-764(古)の出土遺物は、調査時に2 S-764(新)と区別して調査を行っていないため、全て2 S-764(新)に帰属するものとして報告する。土器は複合口縁壺(7-140, 146)、直口壺(7-147, 148)、複合口縁甕(7-141~143, 149, 150)などが出土した。石器は、敲石(S8772)を1点図化した。楕円形の礫の長軸両端を中心に敲打痕が残る。

木器は、2 S-764(新)では、護岸材以外にはあまり出土しなかったが、8388は椀の口縁部片、5069は火鑄臼である。8381は護岸に転用された建築部材で壁材ないし床材と考えられる。杭は2 S-245と同様に芯持ち丸太材、半裁丸太材、転用材と考えられる断面方形のものがある。(馬路)

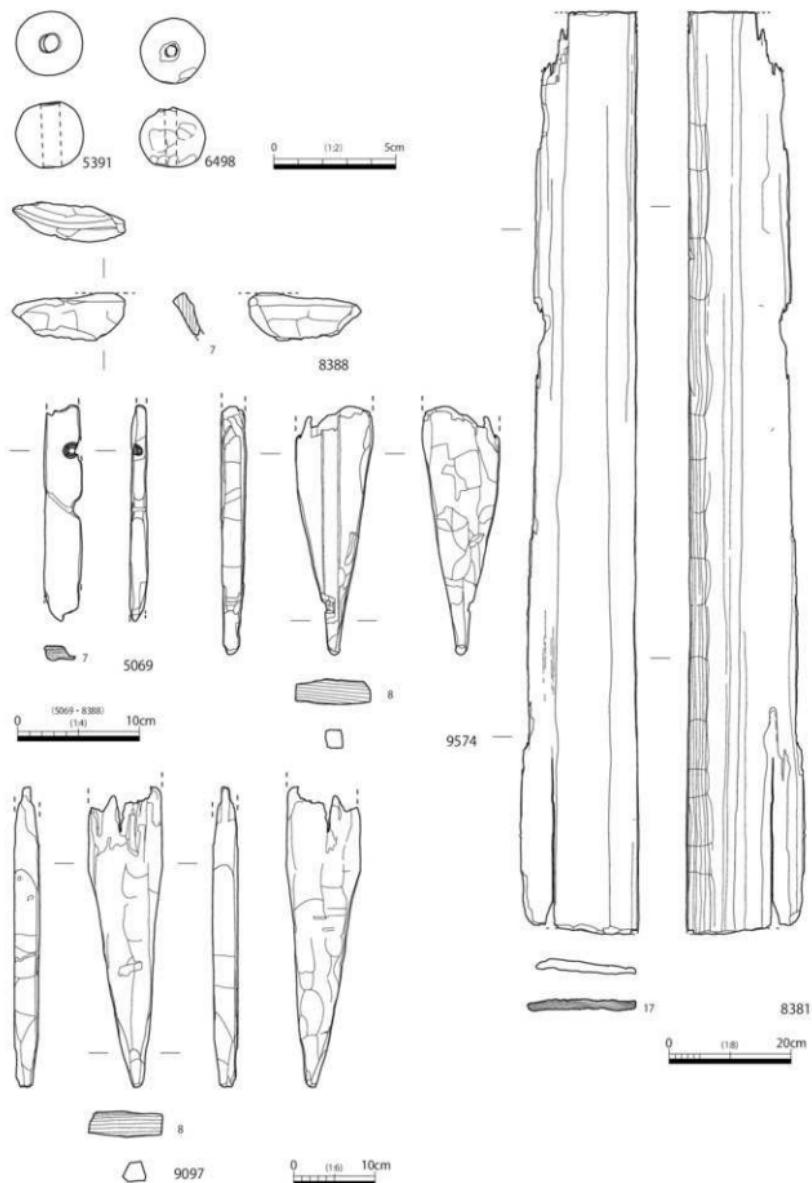
2 S-824(第IV-8-101, 102, 116, 118~122図)

2区南西部F 6, G 6・7グリッドのV-5層下面で検出した。検出面と走向から、2区中央部で検出された2 S-763(古)の上流部分にあたると判断した。検出できた規模は直線距離で約12.6m、最大幅で約1.3m、深さ0.2mを測り、護岸構造は認められなかった。確認できた範囲に留まるが、埋土

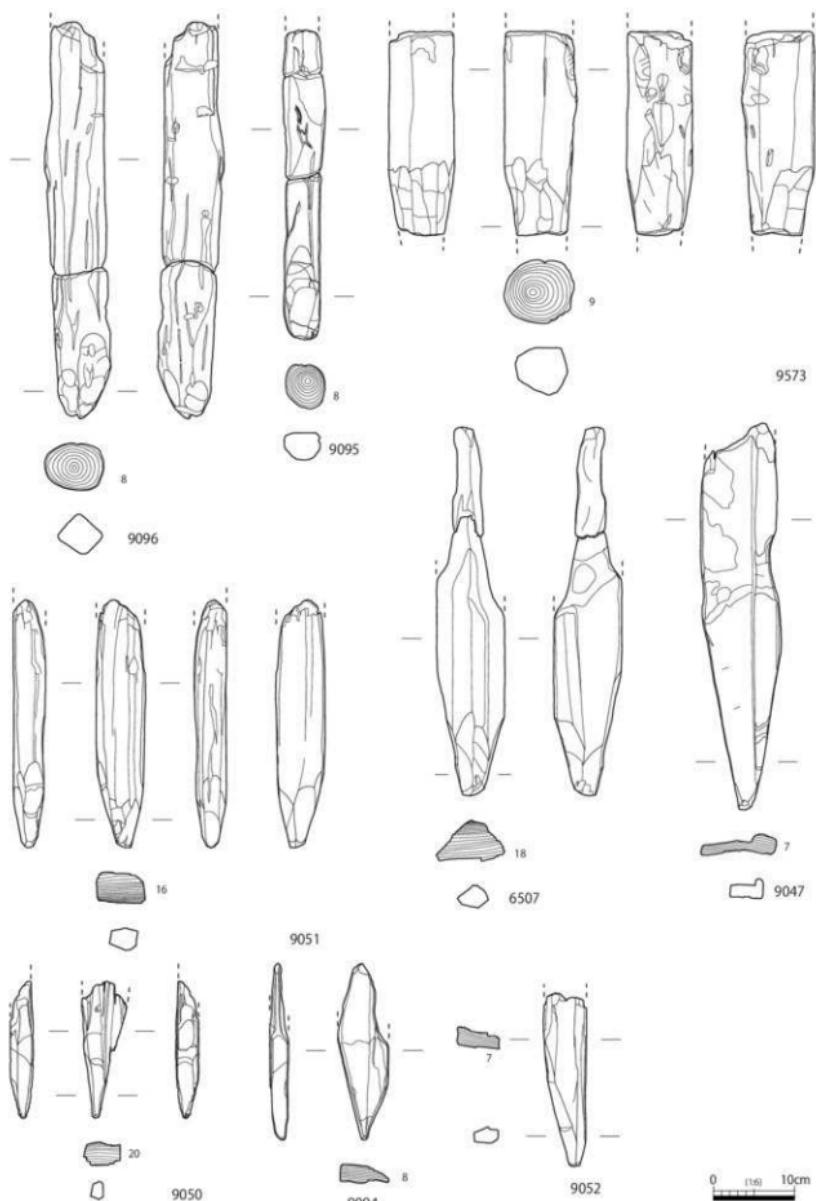


第IV-8-97図 2区 第7面 溝(2S-764) 出土遺物 1

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

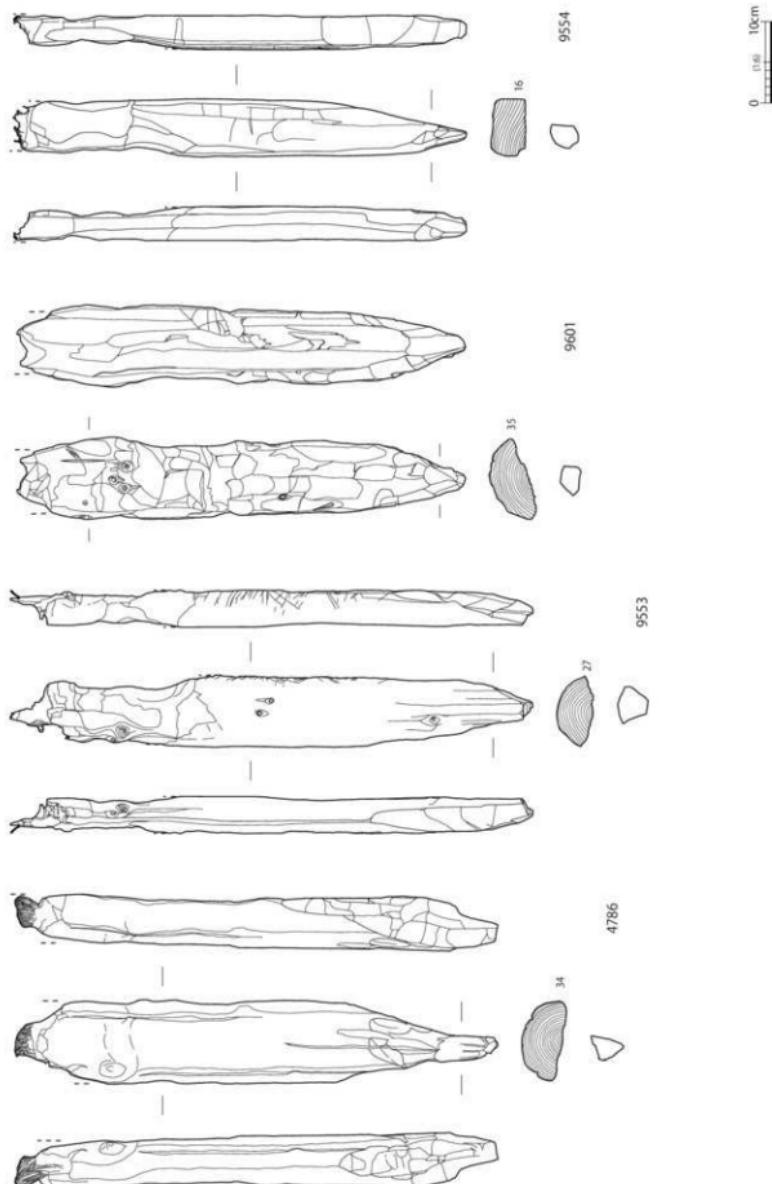


第IV-8-98図 2区 第7面 満(2S-764) 出土遺物2



第IV-8-99図 2区 第7面 溝(2S-764) 出土遺物3

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-100図 2区 第7面 溝(2S-764) 出土遺物4

は最下層に堆積した灰色系の礫から極細粒砂の単層となっており、2区中央部で検出された2S-763の状況とは異なっている。これは2S-824の西南端が水口となることから、上流部分と中下流部分で堆積環境が異なっていたことを示している可能性がある。

埋土中から多量の土器と木器が出土した。土器には壺、甕、器台等が見られ、乙亥正VI期からⅦ期頃のものと考える。木器には容器類、建築部材が見られ、8611、8612、8615、8617は同一個体となる指物の容器、8888はその形態から、花弁高杯の脚部と考えられるものである。(原田)

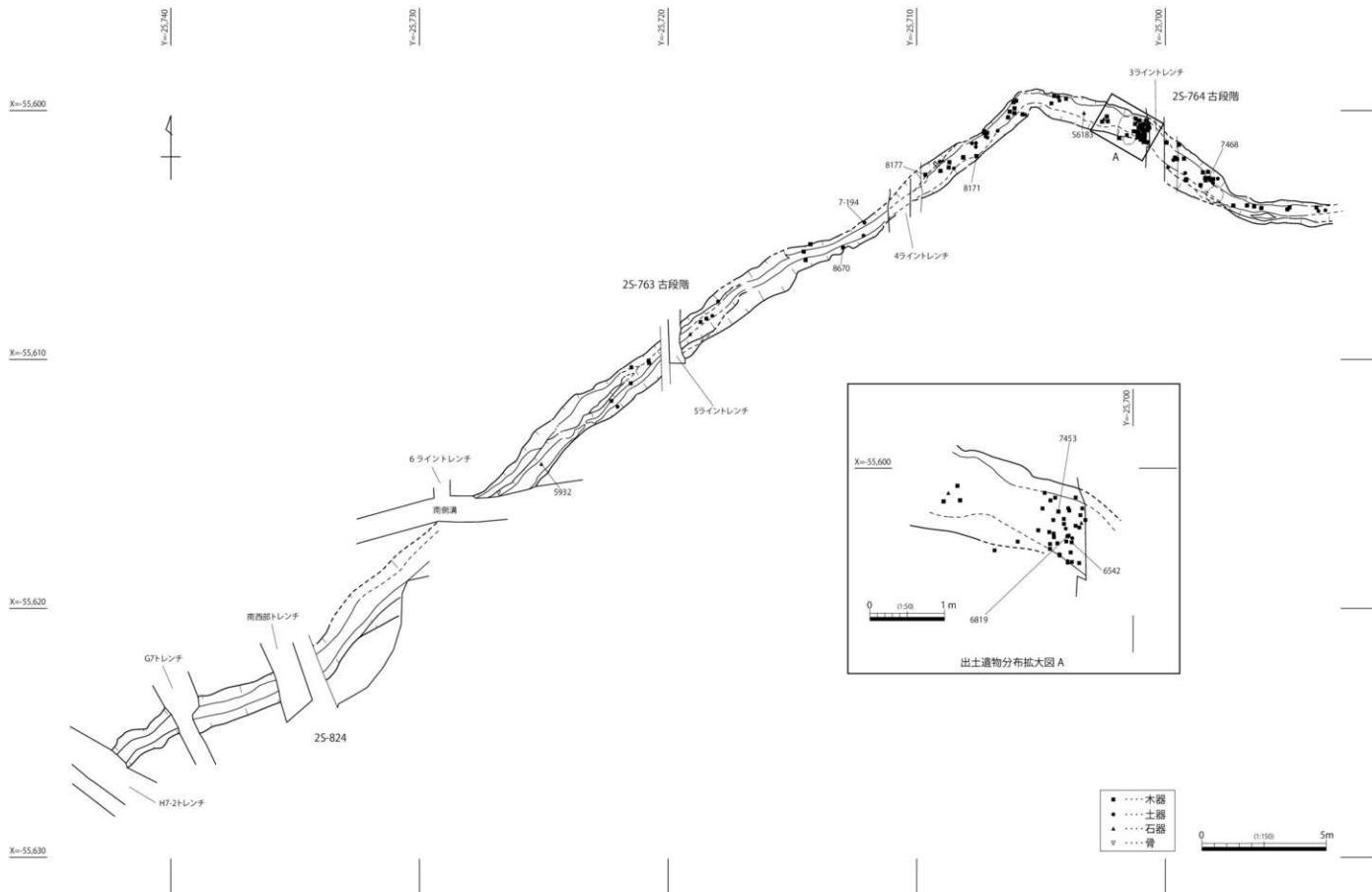
2 S-763・764古段階(第IV-8-101～115、117、123～142)

2 S-763(古)は、2区南西隅から北東方向に流れ、2 S-764(古)は4ライントレンチより約2.5m西側から南東方向に流れ、2 S-763(古)とY字形に合流する。合流後は南東方向に流れる。3区は未調査だが、2ライントレンチ断面でも確認できないことから、3区内には設置されなかつたか、上面の遺構による攪乱により消滅したと考えられる。2 S-763(古)・824の合流点までの延長は約46.5m、2 S-764(古)は約7.8m、合流点から下流は約13.2mあり、東側溝まで到達する。幅は、2 S-763(古)の上流側では約1.0m程度の幅があるが、合流点に向かって狭くなり約0.6mになる。一方、2 S-764(古)は約1.0mで、合流点から下流側も約1.0mである。深さは全体的に概ね約0.25mだが、5ライントレンチを挟んで10m程の区間は約0.55mと深くなる。底面の標高は、前後の区間と違和感なくなだらかに下っている。

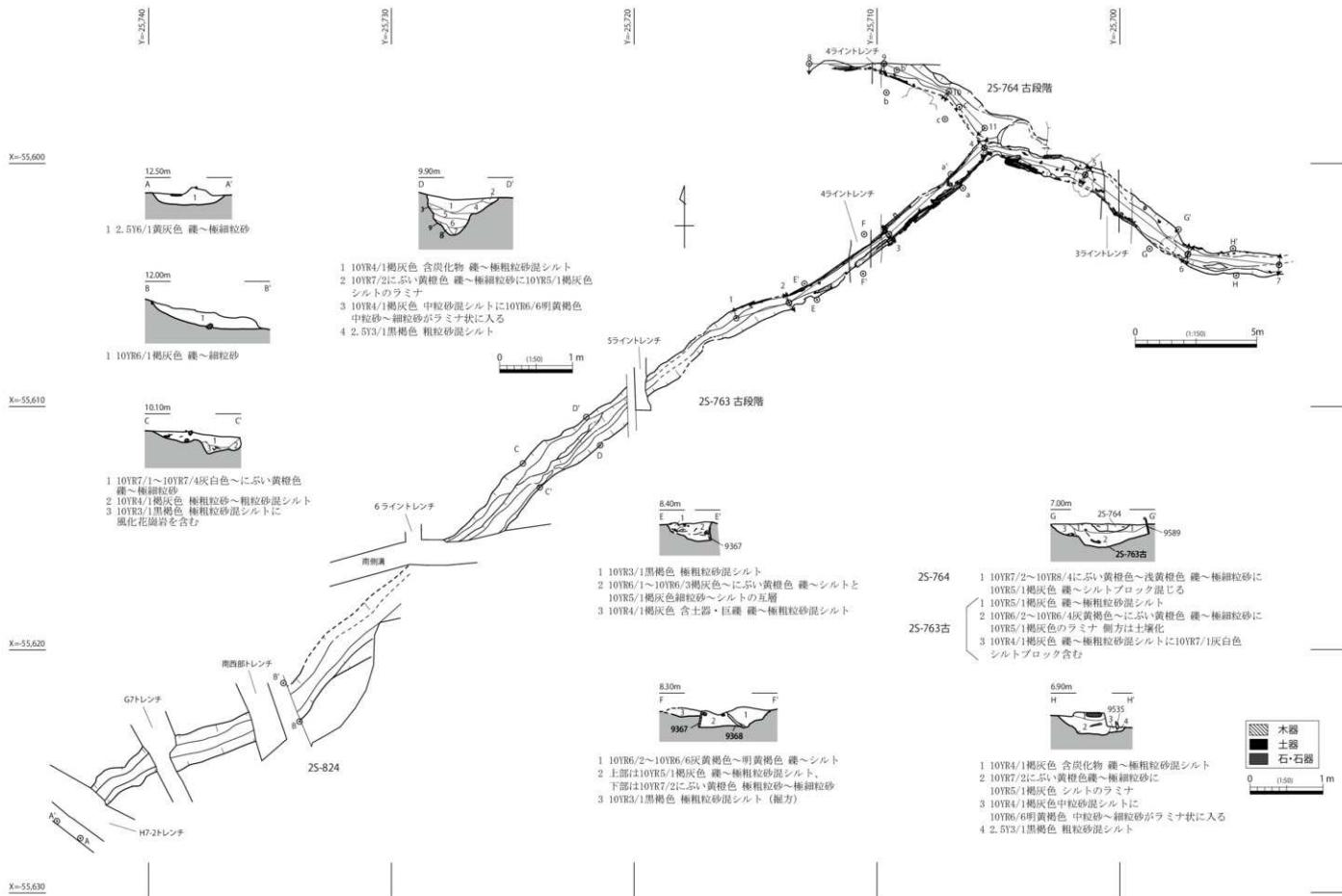
これらの溝は、新段階と同様に護岸を伴う箇所と、素掘りの箇所がある。2 S-764(古)は、合流点までは基本的に南岸に護岸を伴う。2 S-763(古)は4ライントレンチから東に約5mのあたりから合流点まで南北両岸に護岸を伴う。合流点から下流側は部分的に横板が残存する以外は、杭だけが残存する。2 S-763(古)の護岸は、立面ポイント1-2間(第IV-8-103図)は北岸のみで、南岸は杭の痕跡も認められなかった。南側は丘陵裾が接するため、あえて護岸を行わなかったのかもしれない。北側の横板は、長さ約0.7m、幅約0.15mの小型の板を2枚設置し、それぞれの中程を杭1本ずつで留めている。

2-3間(第IV-8-103図)の北岸の横板は長さ約4.7m、幅約0.2mの長い板材を用いる。残存する杭は4本あり、約0.4～1.0mの間隔で打ち込まれている。本来はもう1本あったと考えられるが、4ライントレンチで消滅した可能性が高い。南岸の横板は、小型の板2枚が設置されていた。2枚の横板の間は約1.3m間隔が空く。西側の板は長さ約0.7m、幅約0.15mである。東側の板は約1.6m、幅0.2mである。これら2枚の横板に伴うと考えられる杭はそれぞれ2本ずつあり、2枚の横板の間の空隙部分に1本ある。本来この空隙部分にも横板が設置されていたと考えられる。

3-4間(第IV-8-104図)の北岸は、2枚の横板が設置されていた。いずれも長さ約1.4m、幅約0.07mである。この2枚の横板の間には約1.7mの空隙がある。この空隙にも杭が残存することから、本来は途切れることなく横板が設置されていたと考えられる。これらの横板に伴う杭は、西側が2本で横板の両端を留めるように打ち込まれ、東側は3本の杭を約0.45m間隔で打ち込んでいる。南岸は長さ約1.3～20mの板材を中心に設置し、間を埋めるように長さ0.7m程度の短い板材を重ねて設置している。幅は、約0.05～0.16mと多少ばらつきはあるが、全体的に幅は狭い。杭は横板に対応して設置されており、西端の横板(9430)は2-3間と合わせて2本の杭で板の両端を留めていた。東隣りの横板は、約0.65～0.8m間隔で3本の杭で留めていた。その隣の横板は短い板材を複数枚使用してい

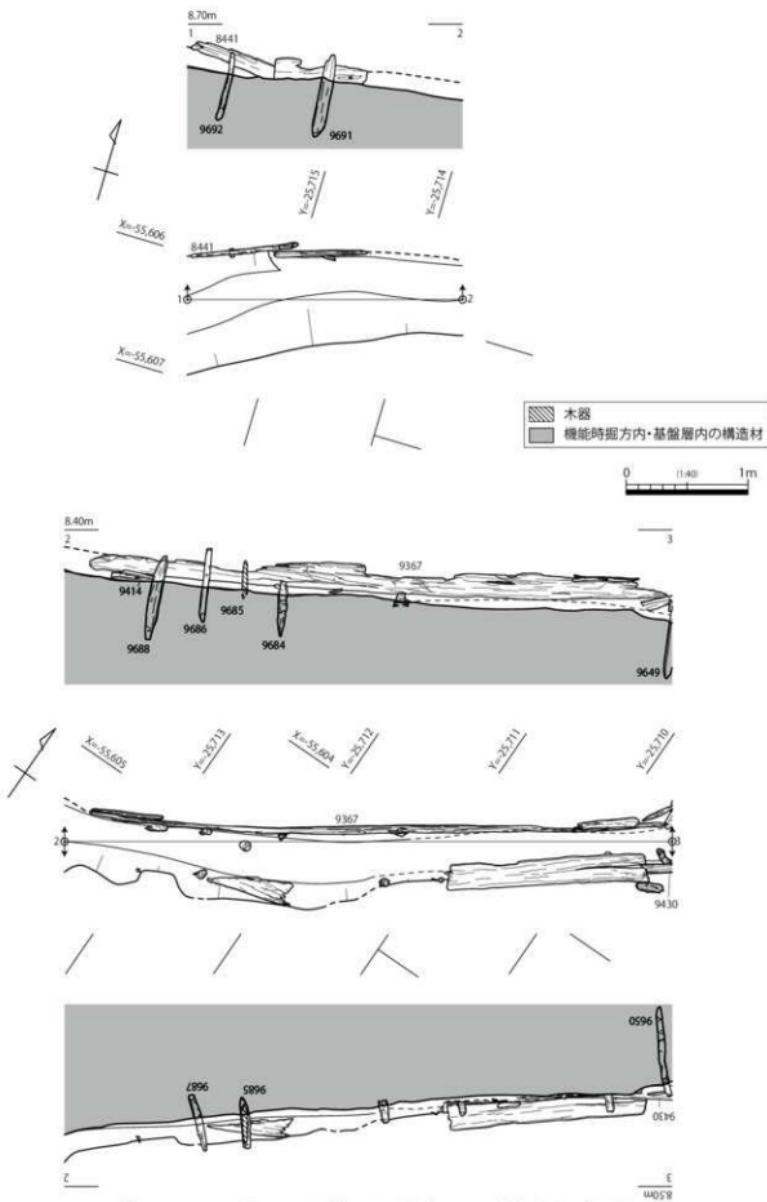


第IV-8-101図 2区 第7面 溝(2S-763古・764古・824) 完掘状況図及び出土遺物分布図

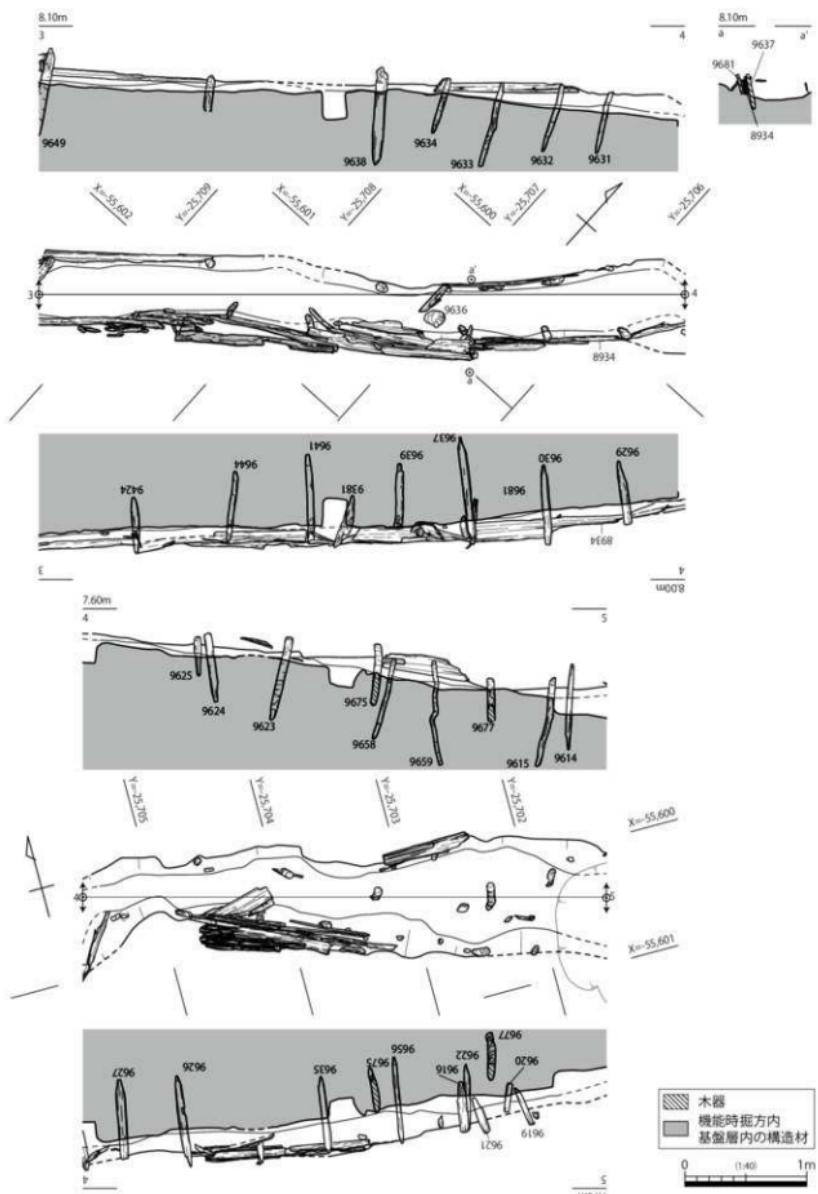


第N-8-102図 2区 第7面 溝(2S-763古・764古・824) 機能時平・断面図

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-103図 2区 第7面 溝(2S-763古) 平・立面図1



第IV-8-104図 2区 第7面 溝(2S-763古) 平・立・断面図2

るため、約0.3～0.6m間隔で3本、その隣は長い横板の両端と真ん中を約0.6m間隔で3本の杭で留めていた。

4-5間(第IV-8-104図)は横板の残存状態が良くない。北岸で検出した横板は1枚で、長さ約0.7m、幅約0.15mである。この横板に伴う杭は2本ある。これら以外にも5本の杭が北岸の護岸に伴う可能性がある。ただし、かなり近接して設置されたものもある上に、杭の並びがスムーズでない所もあるので、修繕などが行われていたか、新段階に伴う可能性が考えられる。北岸の杭の内、9625は鉄斧の柄を転用したもので、握りの方を打ち込んでいた。南岸の横板は、一か所で検出した。長さ約0.65m、幅約0.07m程度の板材を2枚並べて設置している。これらの横板の背後で複数枚の板材が重なって出土した。出土した範囲が概ね横板の範囲と重複することからこの溝に伴う可能性があると考えられる。本来掘方内に入れられていたものが、浸食を受けて露出したものと考えられる。横板に伴う杭は2本で、それぞれ横板の中央部に打ち込まれていた。北岸と同様に横板は伴わないが、南岸に沿って打ち込まれた杭が7本ある。これら以外にも、溝の内側に寄った場所で複数本の杭を検出した。補修などが行われたか、新段階に伴う可能性が考えられる。これらの杭の内、9621は楔、9677は垂木の先端部と考えられるものの転用である。

5-6間(第IV-8-105図)は、北岸で検出した横板は無い。杭は合計6本出土した。その内、西側で出土した1本はかなり内側に寄っている、東端で出土した1本はほとんど基盤層に打ち込まれていないので、古段階に伴うものではないと考えられる。これらを除いて3ライントレーナーの東側で出土した3本は、約0.8m間隔で打ち込まれていた。南岸で検出した横板は3枚で、2枚は長さ約0.9～1.0m、残りの1枚は約0.3mである。幅は、約0.5～0.1mである。これら以外の場所には横板は無い。西側の横板の前には3本の杭が近接して打設されていたが、横板との間に空隙がある。この横板には伴わない可能性が高い。東端の横板に伴う杭は2本あり、横板の西端と中央部の2か所に打設されていた。これら以外にもう1本出土したが、伴うものかどうか明確ではない。

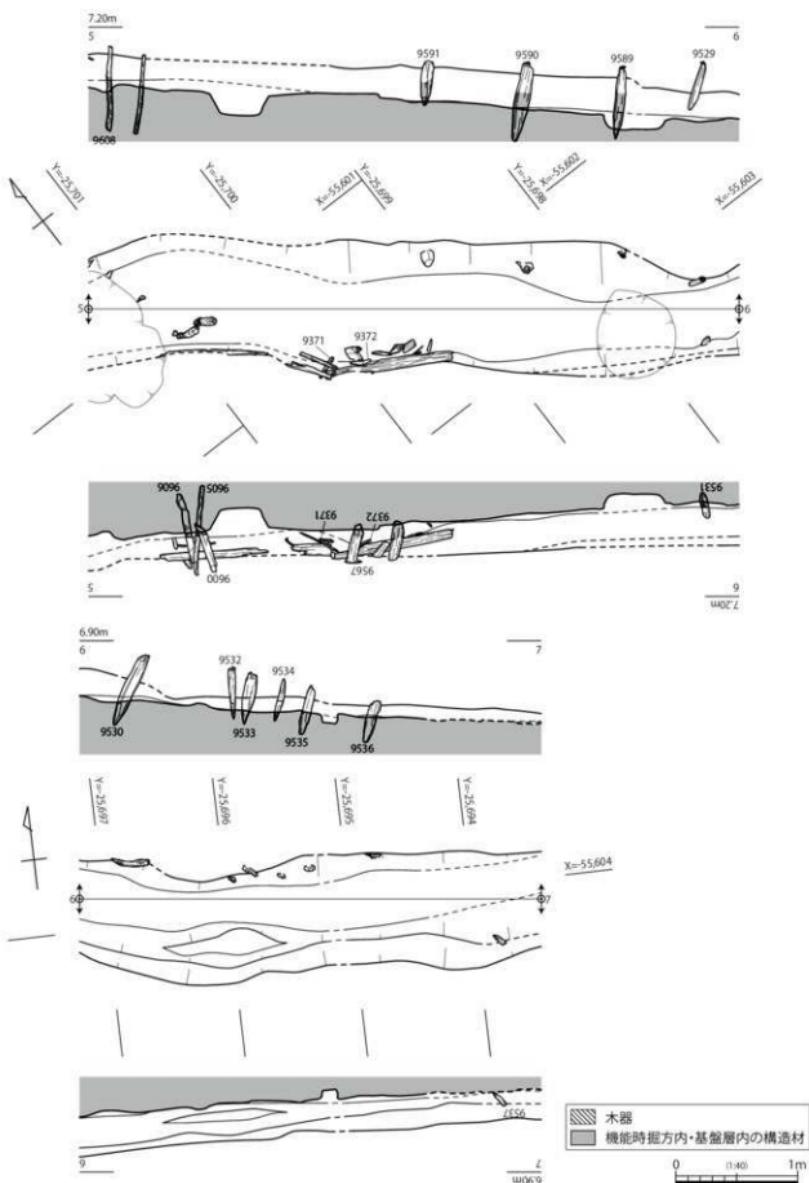
6-7間(第IV-8-105図)は、横板は出土せず、杭のみが出土した。北岸の杭は、合計6本あり、西側の間隔が約0.9mと広く、その後は0.1～0.25mと近接して打設され、再び約0.54mに広がる。南岸で出土した杭は1本だけである。護岸の機能とは異なり、何か別の目的で打設された可能性がある。

8-11間(第IV-8-106図)は2S-764(古)に該当し、南岸のみに護岸がある。北岸は杭の痕跡が無いことから、設置されなかったと考えられる。8-9間では横板を3枚検出した。溝の一一番内側の1枚が横板と考えられ、残りの2枚は、掘方内のものが露出していると考えられる。横板の長さは約0.95m、幅約0.06mである。両端が腐食して欠けているので、本来はもう少し長かったと考えられる。横板に伴う杭は2本で、約0.6m間隔で打設されていた。他に4ライントレーナーを挟んで2本の杭が、約0.2m間隔で打設されていた。

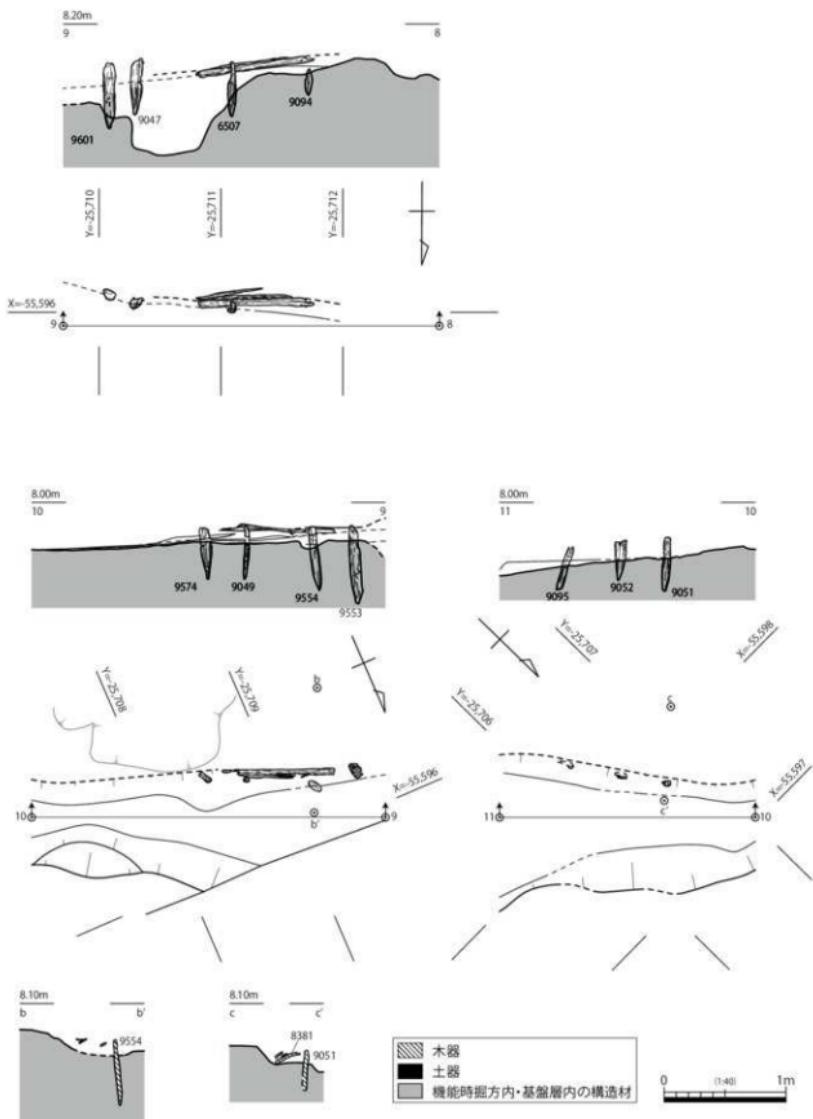
9-10間(第IV-8-106図)は、古段階に伴うと考えられる横板が1枚あり、内側に倒れて出土した。長さは約0.9m、幅約0.06mである。杭は4本あり、間隔は約0.35～0.54mである。

10-11間(第IV-8-106図)は、杭3本のみが伴うと考えられる。東端の杭(9095)は、新段階にも伴う可能性がある。これらの杭3本は、南岸に形成されたテラスの落ち際に打設されたもので、その後ろに横板が設置された可能性が高いと考えられる。杭の間隔は、約0.4～0.45mである。

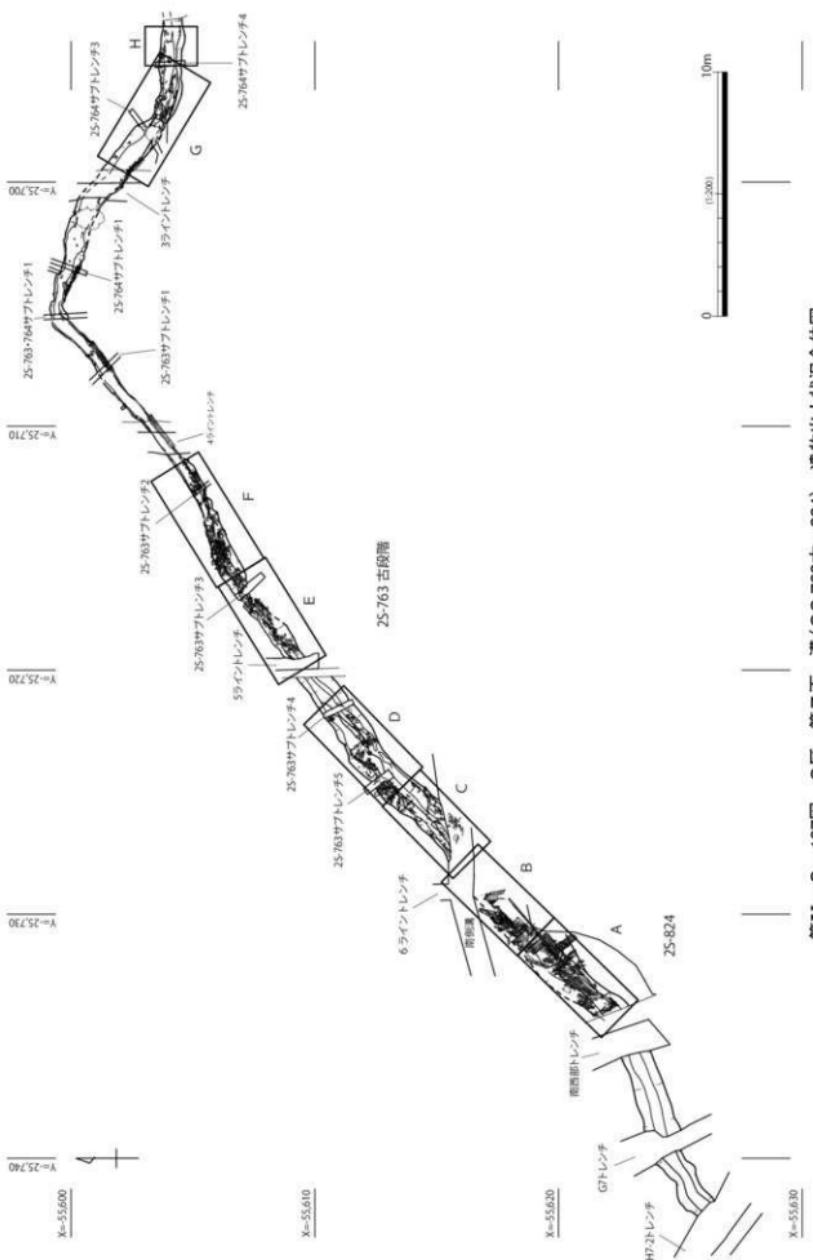
2S-763(古)は埋土中から、多くの遺物が出土した(第IV-8-107～115図)。2S-763(古)は、特に4ライントレーナーから西側の南側溝までの間に集中して土器や木器が出土した。5ライントレーナー



第IV-8-105図 2区 第7面 溝(2S-763古) 平・立面図3

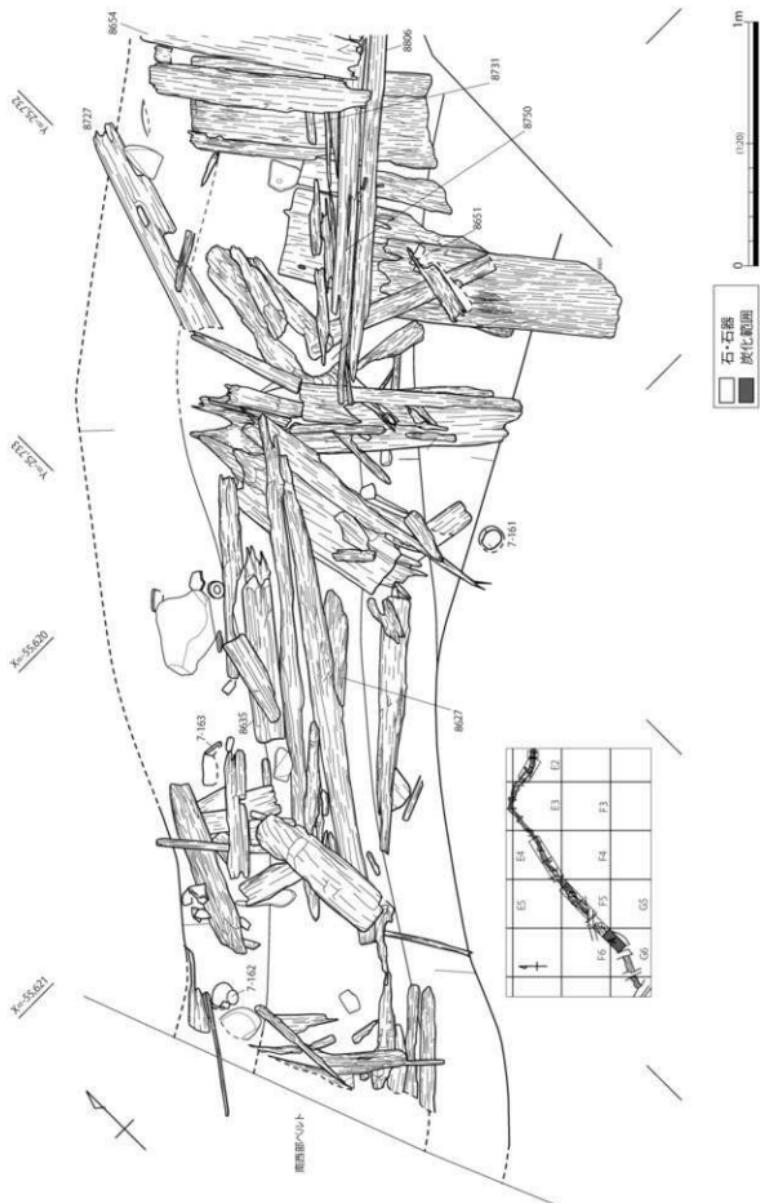


第IV-8-106図 2区 第7面 溝(2S-764古) 平・立・断面図4

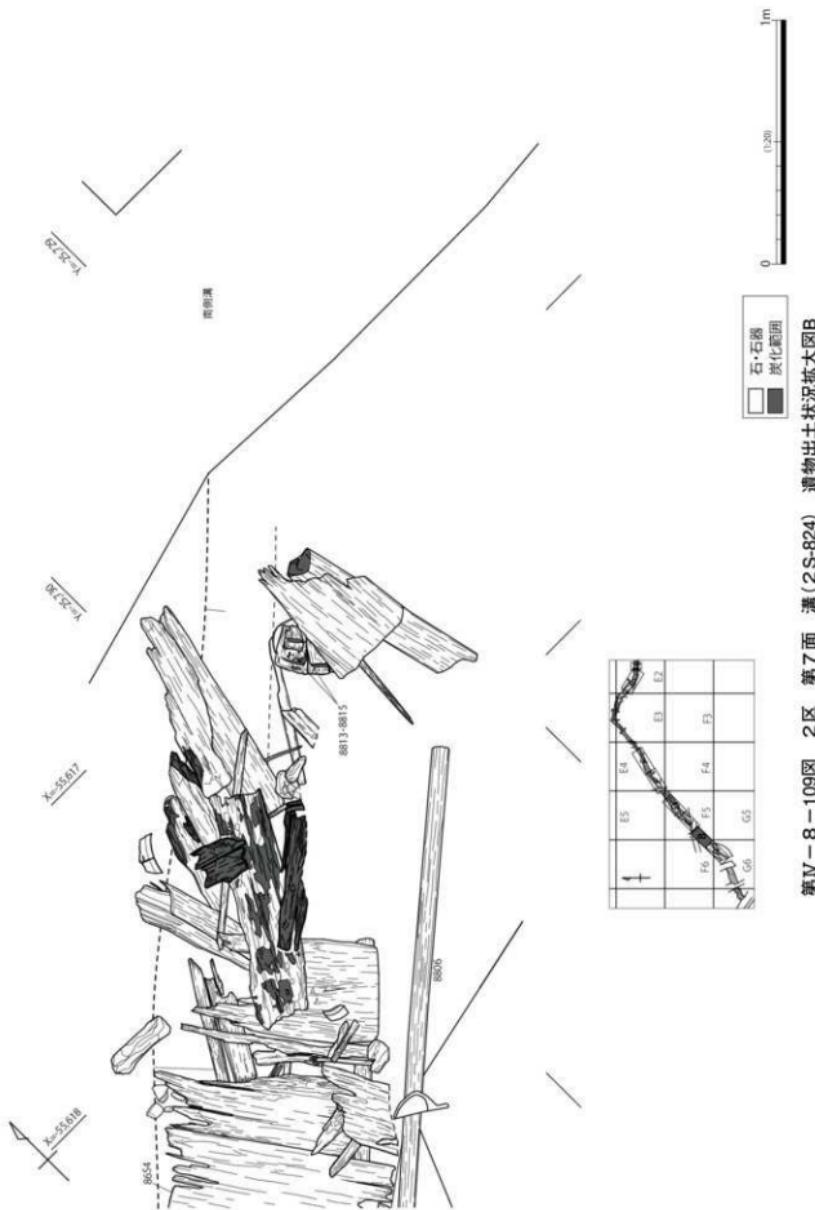


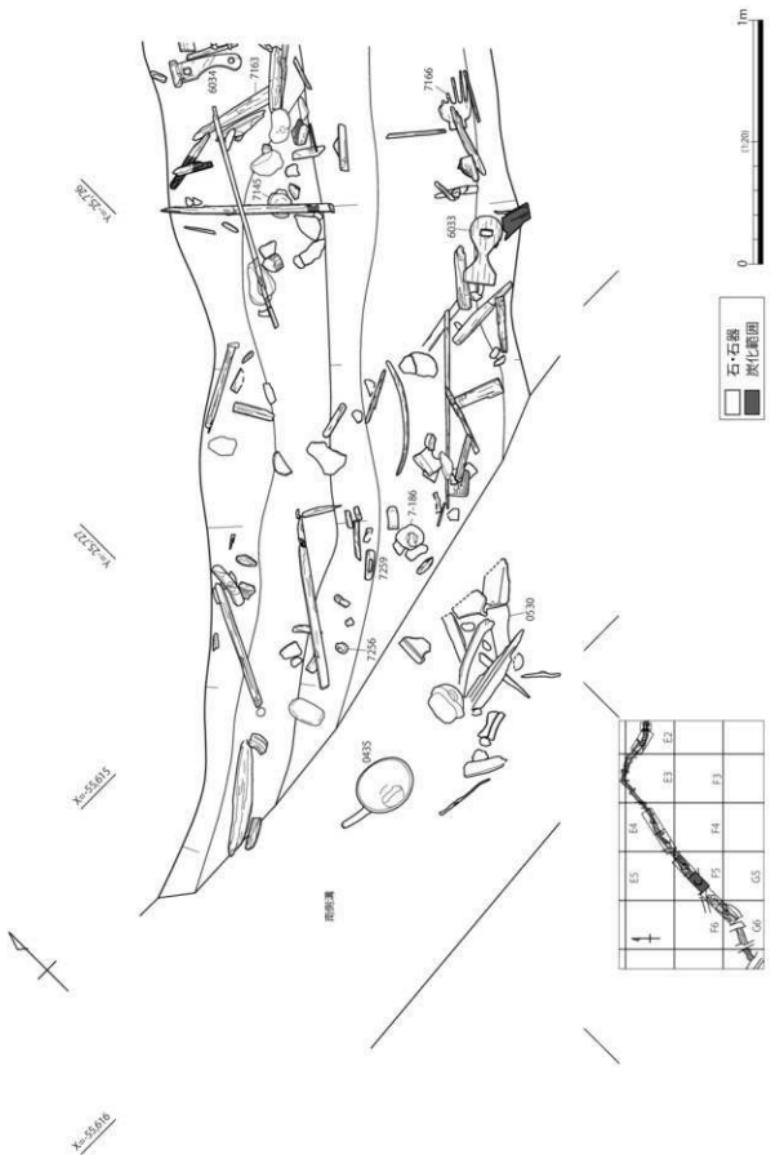
第N-8-107図 2区 第7面 溝(2S-763古・824) 遺物出土状況全体図

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

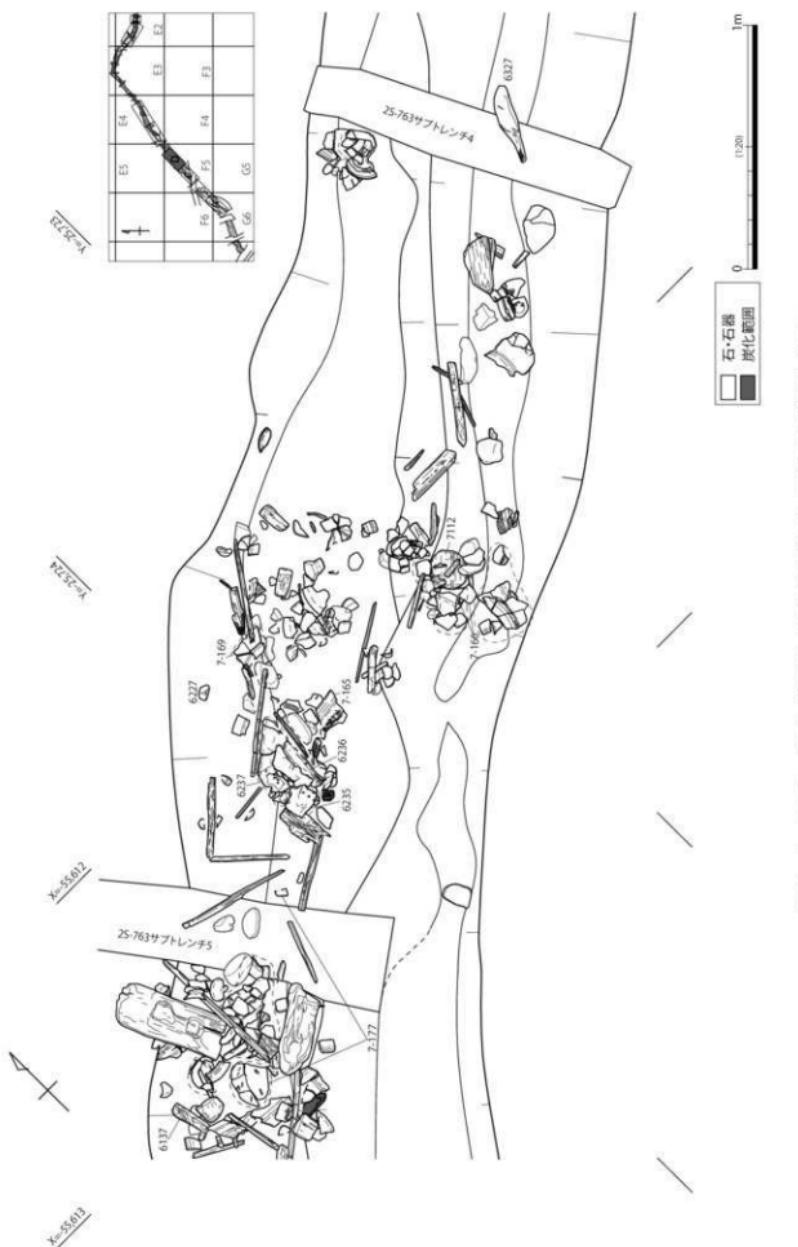


第IV-8-108図 2区 第7面 溝(2S-824) 遺物出土状況拡大図A





第N-8-110圖 2區 第7面 滿(2S-763古) 遺物出土狀況拡大図C

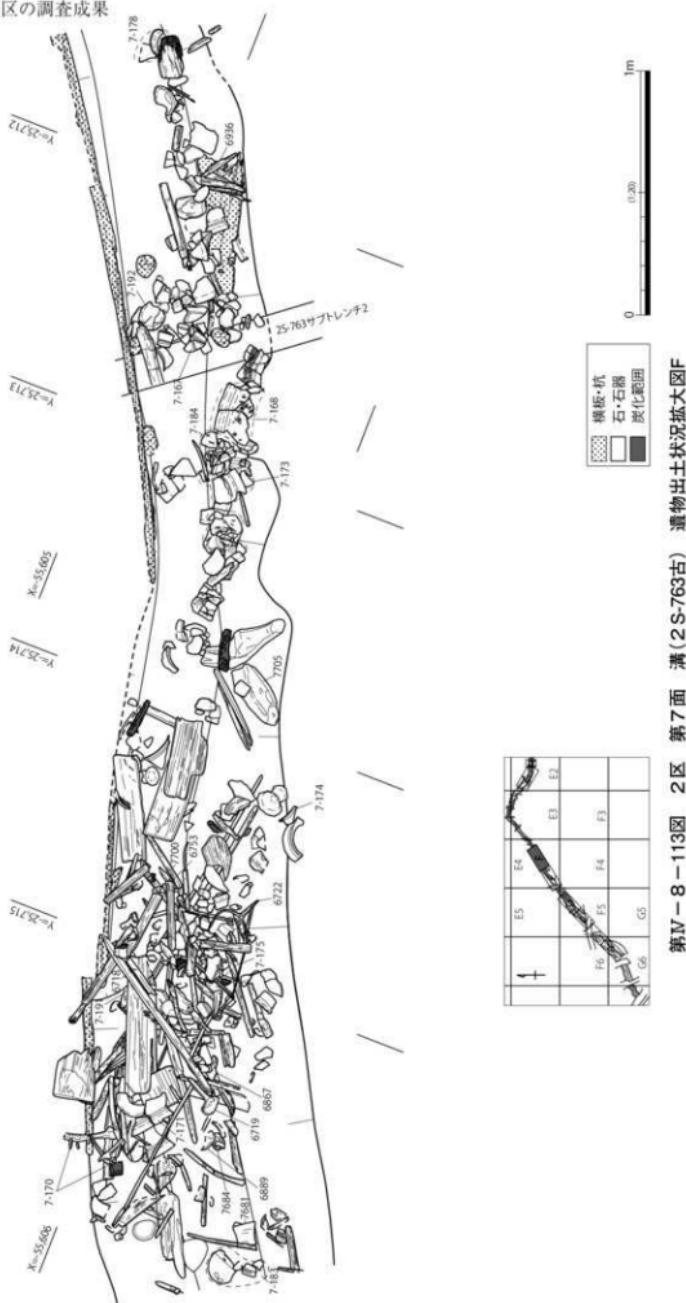


第IV-8-111図 2区 第7面 満(2S-763古) 遺物出土状況拡大図D

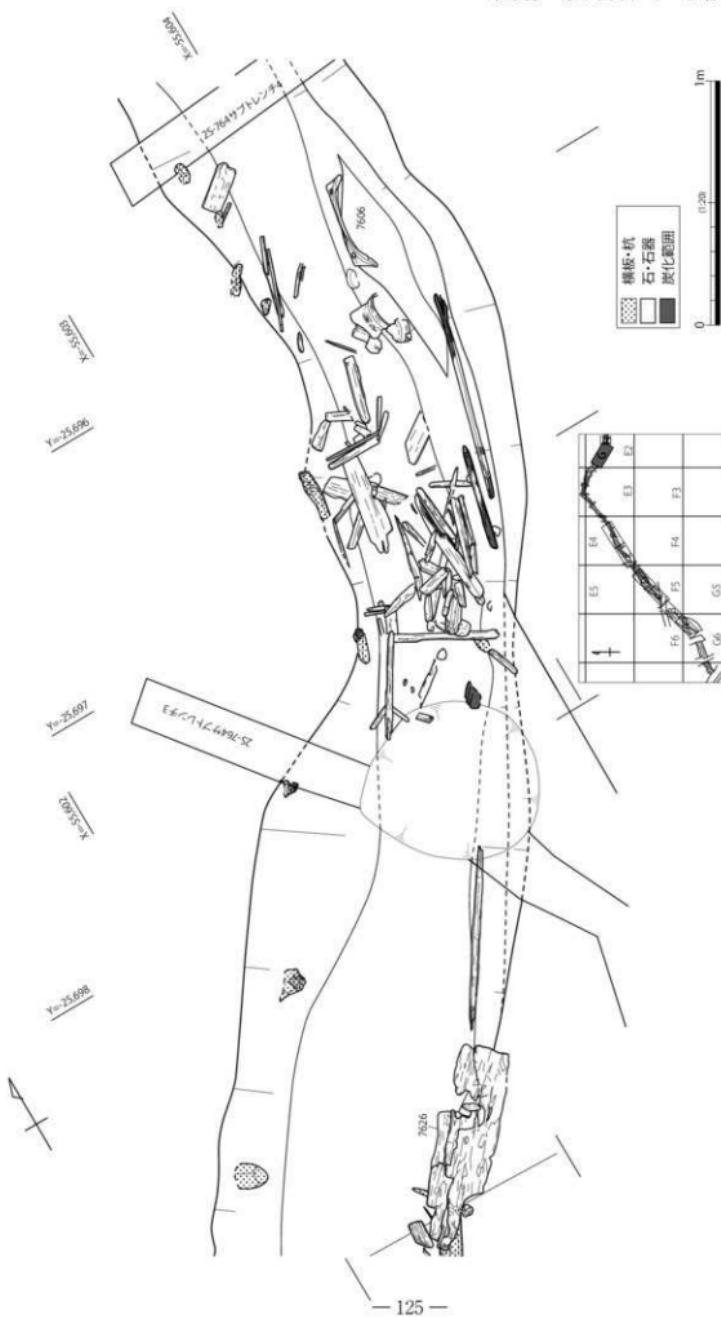
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



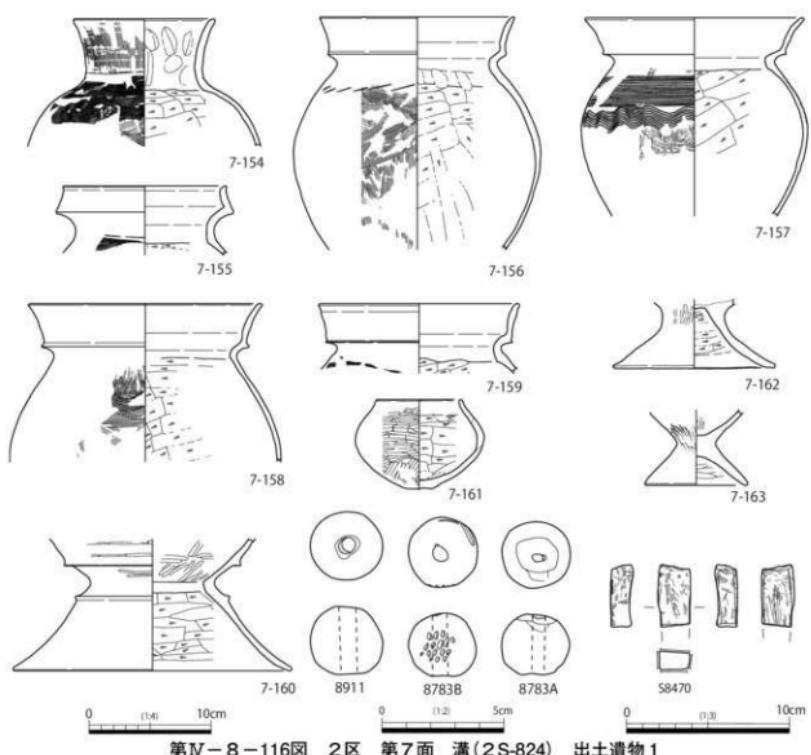
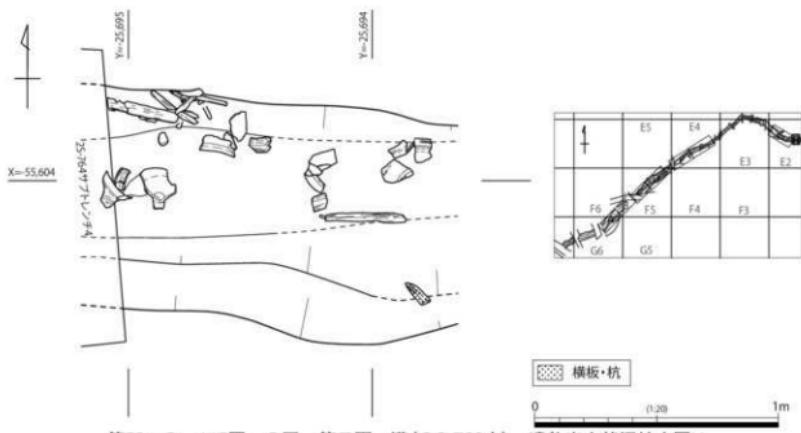
第Ⅳ章 2・3区の調査成果



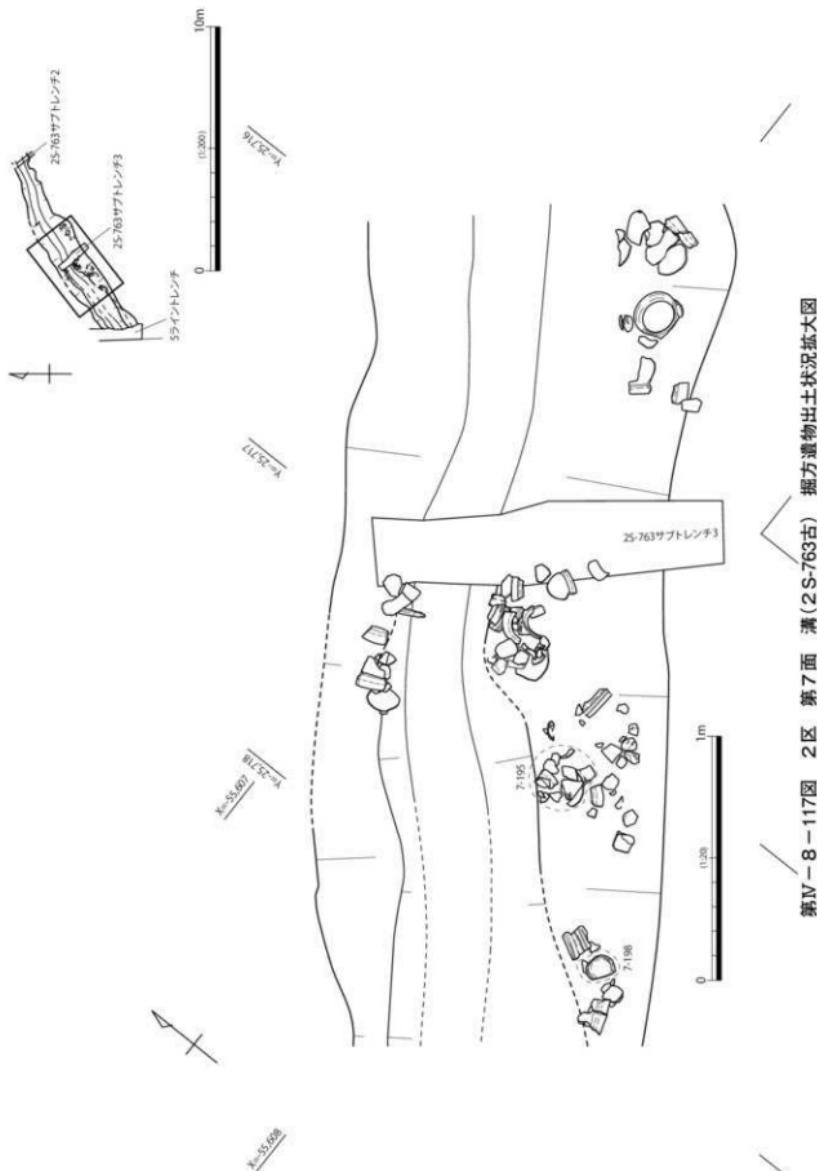
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



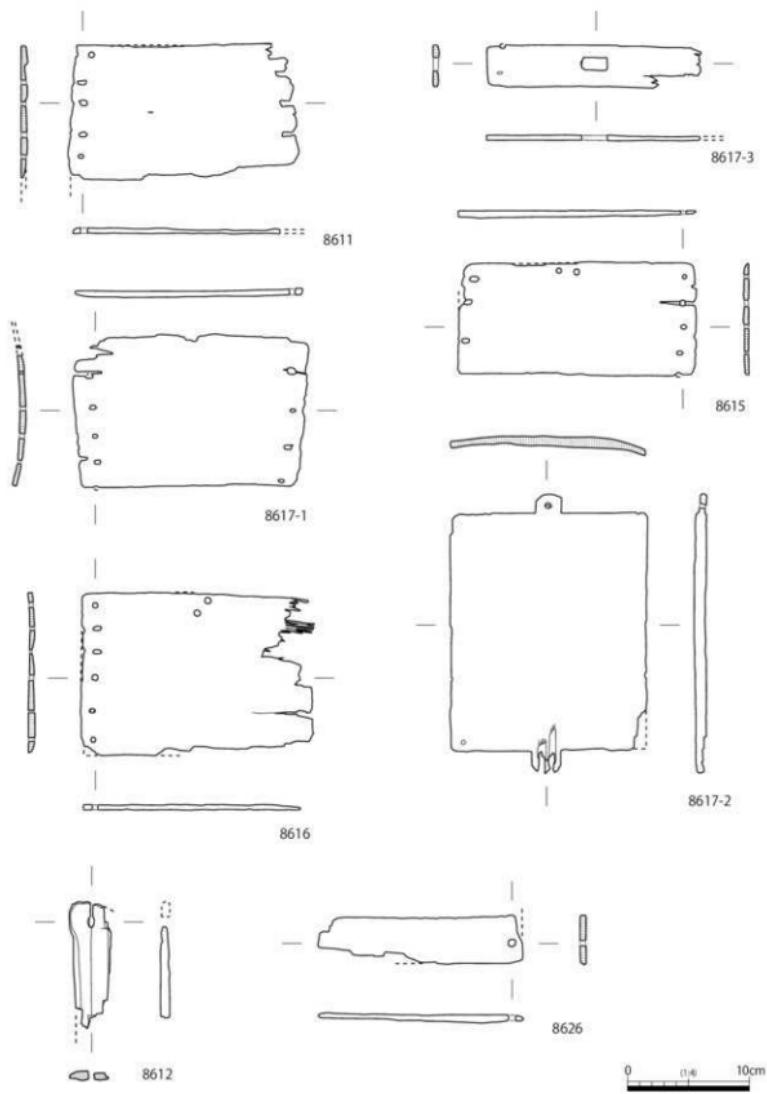
第M-8-114图 2区 第7面 满(2S-763古) 遗物出土状况拡大図G



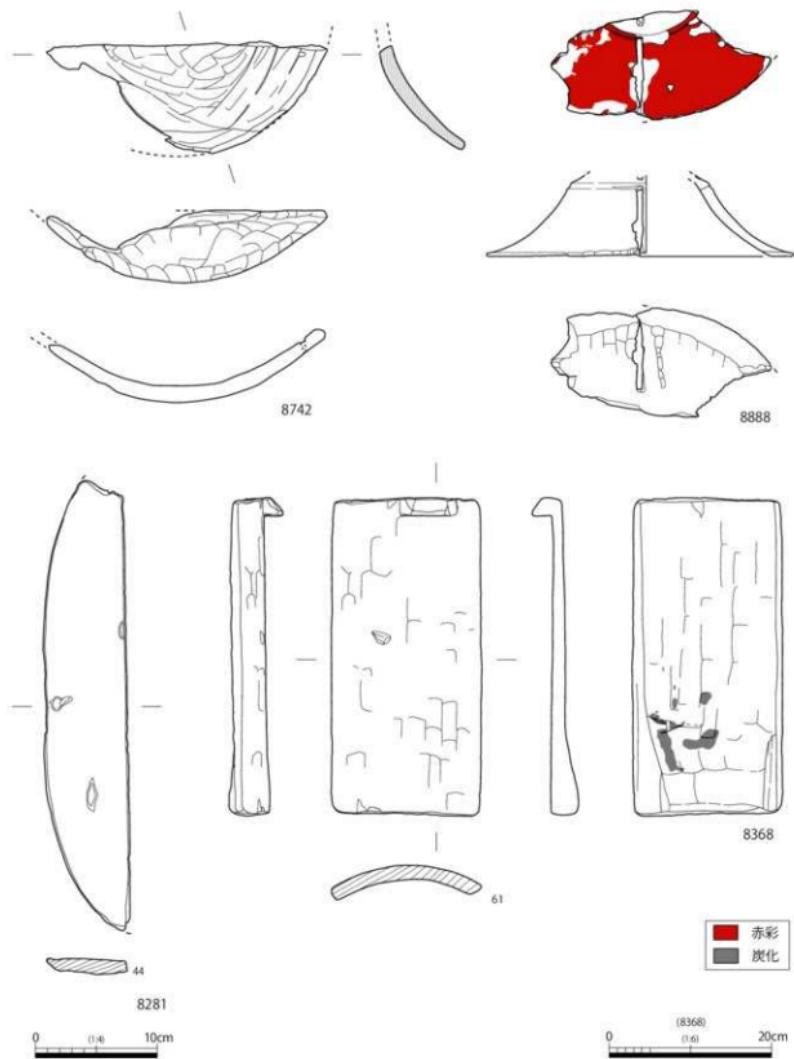
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



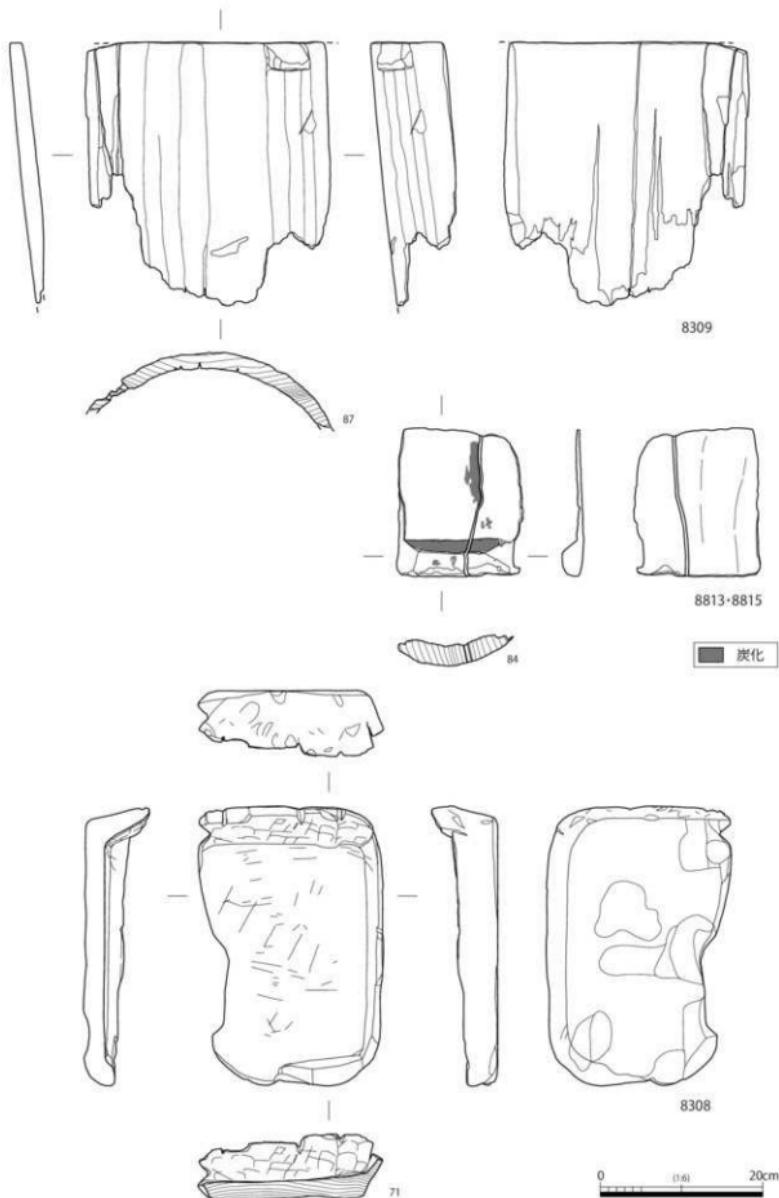
第N-8-117図 2区 第7面 溝(2S-763) 古 挖方遺物出土状況拡大図



第IV-8-118図 2区 第7面 溝(2S-824) 出土遺物2

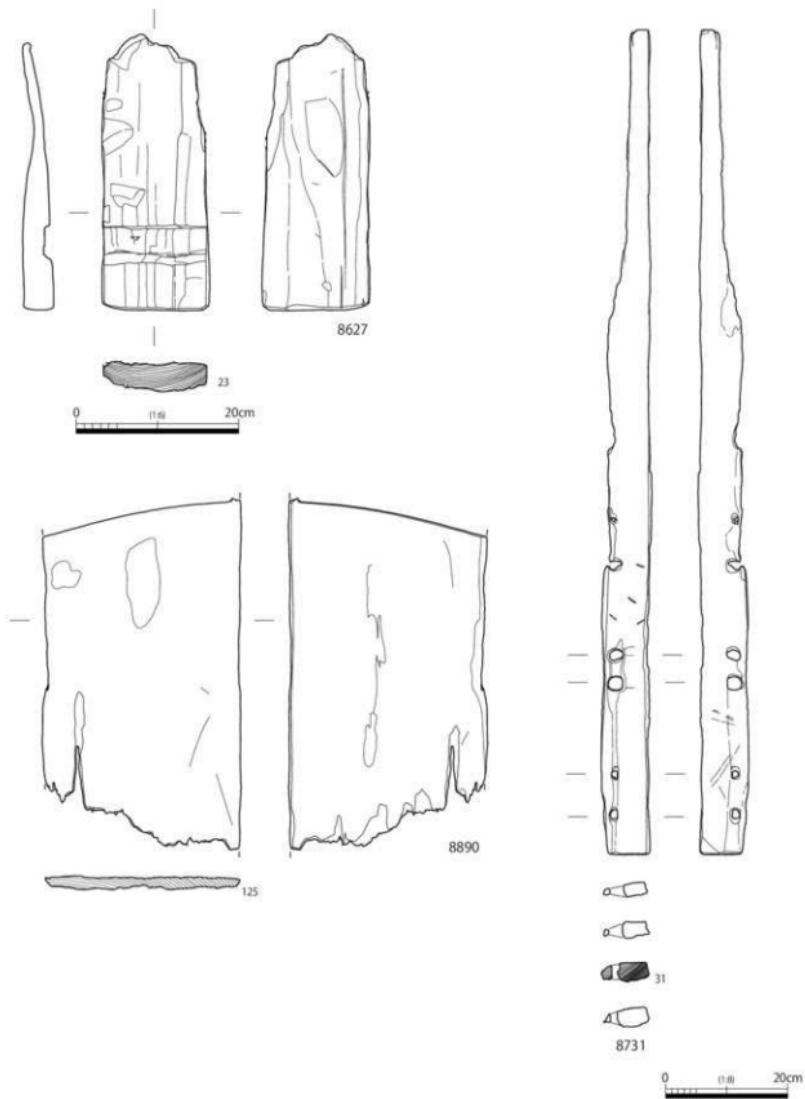


第V-8-119図 2区 第7面 溝(2S-824) 出土遺物3



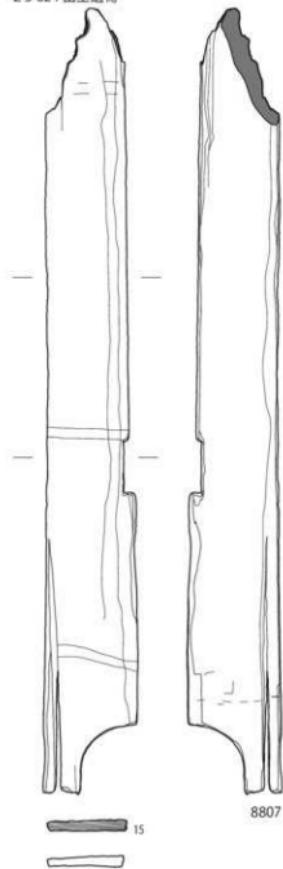
第IV-8-120図 2区 第7面 満(2S-824) 出土遺物4

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-121図 2区 第7面 溝(2S-824) 出土遺物5

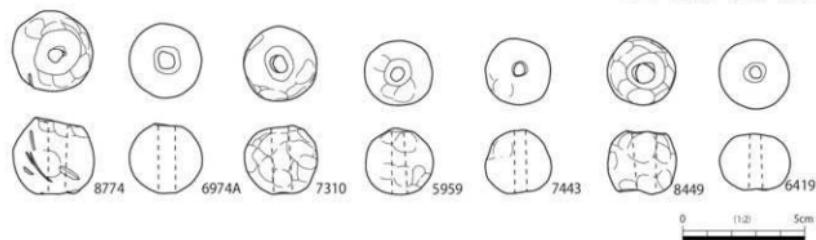
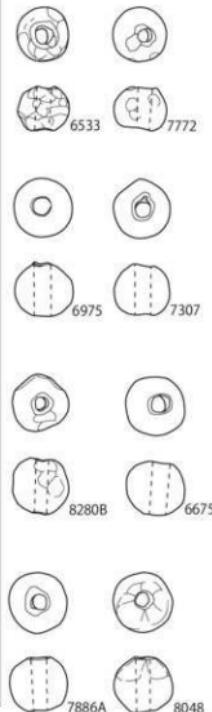
2S-824 出土遺物



■ 炭化

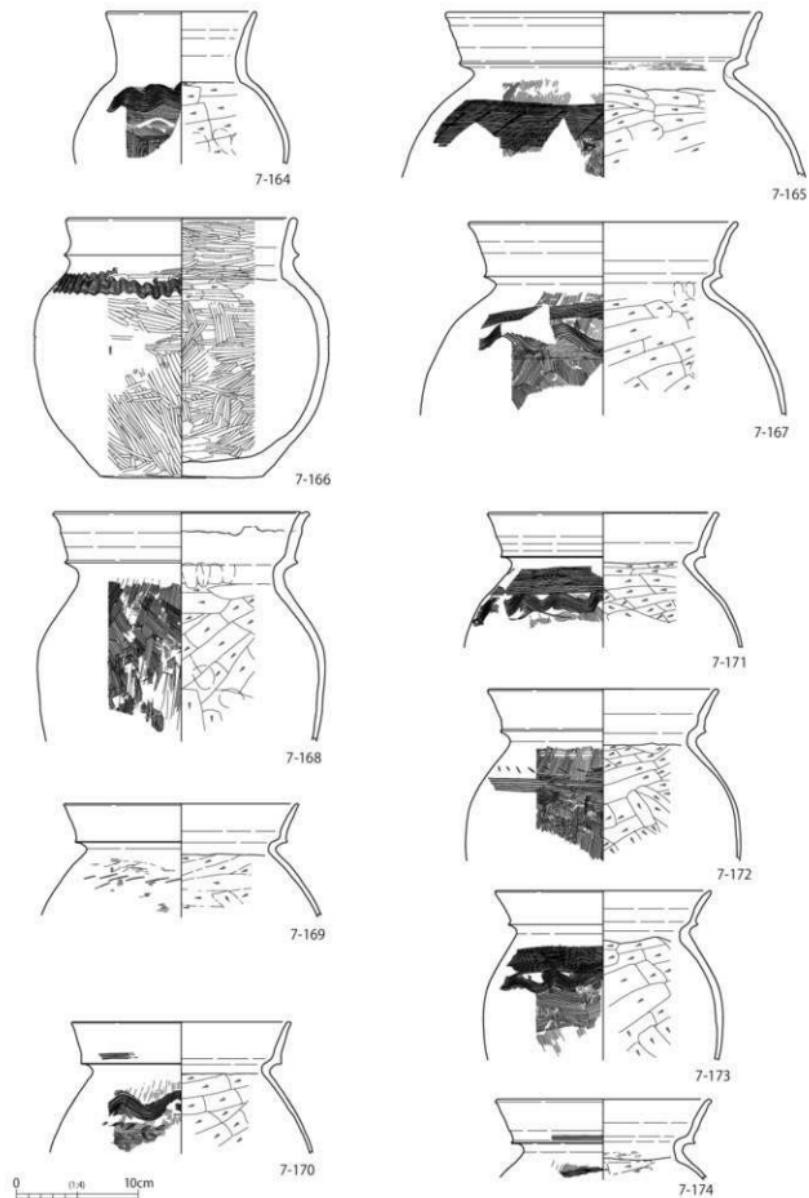
0 (1:10) 40cm

2S-763 出土遺物

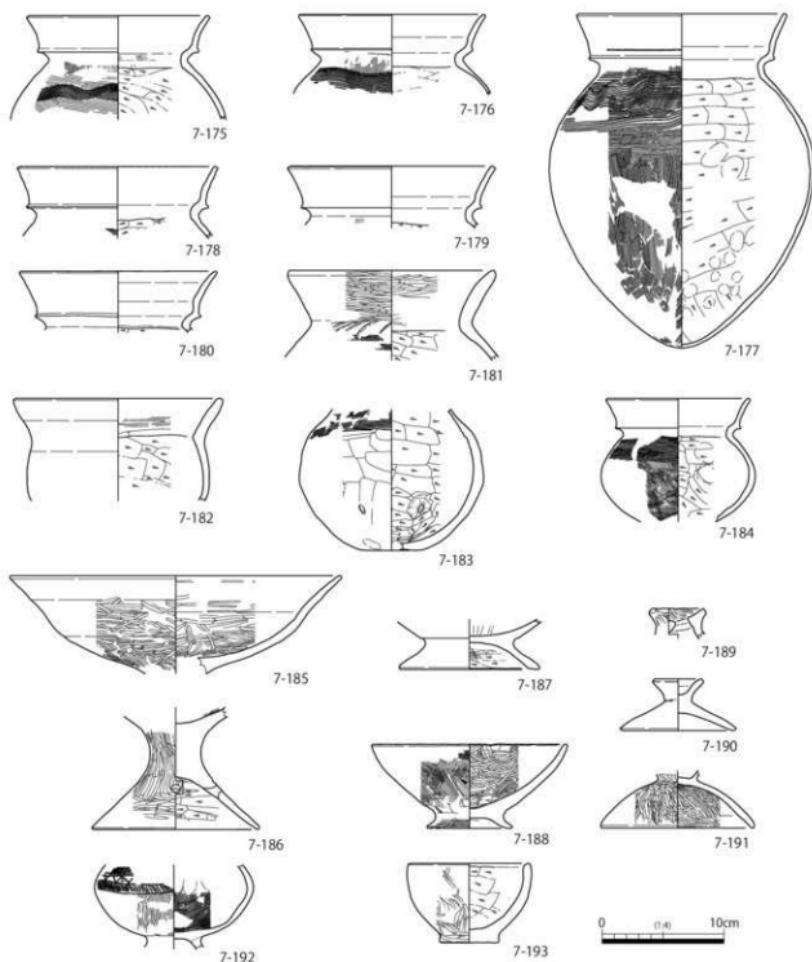


第IV-8-122図 2区 第7面 溝(2S-824) 出土遺物6及び溝(2S-763古) 出土遺物1

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

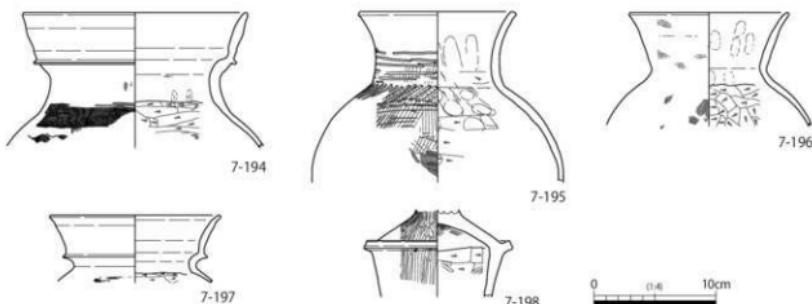


第IV-8-123図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物2



第IV-8-124図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物3

から南側溝の間(第IV-8-110、111)からは、底部に穿孔のある杓子、腰掛の脚、又鉢などの木器、複数の穿孔がある広葉樹の樹皮、甕などの土器片が出土した。遺物の出土状況は上層から下層まで、あまり偏りは見られない。平面的には、南側溝寄りは木器が多いが、2S-824で出土したような大型の板材は出土しなかった。隣接する4ライントレンチから5ライントレンチ間が最も遺物が集中して出土した場所である(第IV-8-112、113)。南側丘陵の張り出し部の裾にあたることから、土器や木器が多量に廃棄されていた。埋土上層から底面まで、遺物が折り重なって出土し、この場所は下位の遺構面まで遺物の出土量が非常に多く、継続的に遺物の廃棄が行われたと考えられるため、本遺構出



第IV-8-125図 2区 第7面 溝(2S-763掘方) 出土遺物

土の遺物には、下層の浸食によるものも含まれている。出土遺物は桶、蓋などの容器、アカトリ、たも棒などの漁労具、壺、甕、高坏などの土器が出土した。土器片は比較的大型の破片が近接して出土したが、ほぼ完形に復元できるものはほとんど無かった。下流側の東側溝から3ライントレーナーの間(第IV-8-114、115)では、棒状ないし板状の木器がまとまって出土した中に、腰掛の座板と考えられる製品が出土した。その他、3ライントレーナーから4ライントレーナーの間は、遺物が密集して出土しなかったことから、出土座標のみ記録して取り上げた木器が多数あり容器や底板が出土した。他には掘方内から匙なども出土した。

2 S-763(古)の埋土中から出土した土器は、直口壺(7-164)、平底甕(7-166)、複合口縁甕(7-165、167~180)、外反する単純口縁の甕(7-181、182)、高坏(7-185、186)、低脚坏(7-188)、台付葵飾壺の胴部片(7-192)、塊(7-193)、蓋(7-189~191)などがあり、概ね乙亥正VI~VII期頃のものと考えられる。なお、7-191は低脚坏の可能性もある。

掘方内からも同時期のものと考えられる土器が出土した。図化したのは、複合口縁壺(7-194)、直口壺(7-195、196)、複合口縁甕(7-197)、結合土器(7-198)である。7-198は、上端も下端も欠損しており、全体形がはつきりしないが、赤坂今井墳丘墓で結合土器として報告されていた資料に形態が類似するので、結合土器と考えた。ただし、赤坂今井墳丘墓の資料とは、胎土や色調が異なる。

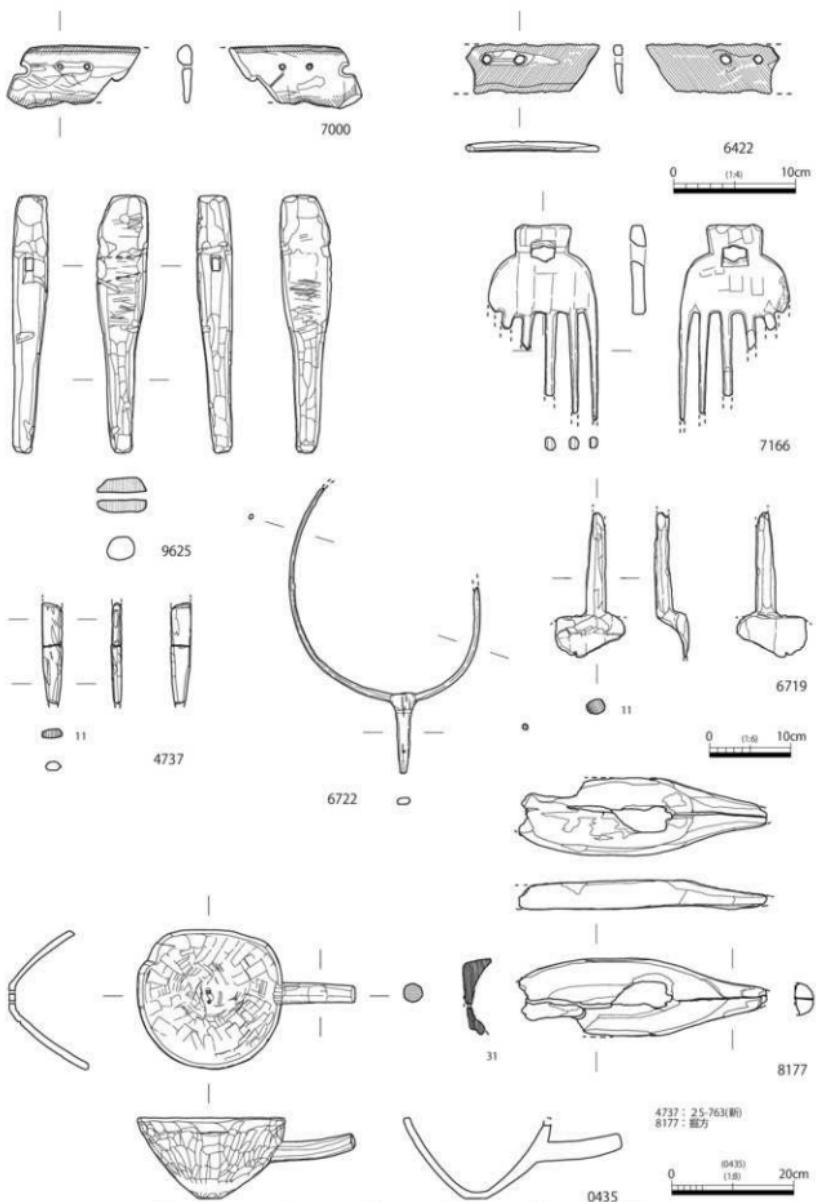
石器は、玉作り関連資料として、緑色凝灰岩製の分割片が出土した(S-5932)。上端分に施溝分割の痕跡が残る。S-7495、S-6183は伐採斧の破片で、前者は刃部、後者は刃部を大幅に欠損し、基部側も欠損していることから、楔などに転用された可能性もある。S-9068は砥石、S-7925は敲石である。

木器の農耕具は7000と6422が木包丁である。青谷上寺地遺跡の分類に依ると7000は紐孔間をつなぐ溝があり、左側に抉りがあるのでB3類、6422も同じくB類と考えられるが2類か3類かは不明である。7166は直柄又鋤である。方形の頭部に6本の歯が付く。両端の歯はほぼまっすぐ延びる。左側の3本の歯は根元近くまで欠損している。2 S-245の8652も同形態のものと考えられる。4737は2 S-763(新)から出土し、又鋤の歯の先端部付近と考えられる。9625は、斧直柄で護岸の杭に転用されていた。握りに対して銳角に方形の装着孔を穿ったものである。斧台前面の装着孔は2.9×1.1cmである。青谷上寺地遺跡では、同形態の斧は板状鉄斧のサイズとの比較から届柄の可能性が指摘されているが、本遺跡の方孔は青谷上寺地遺跡例よりも一回り小さく楔を使用すれば直接板状鉄斧を装着可能なサイズと考えられる。

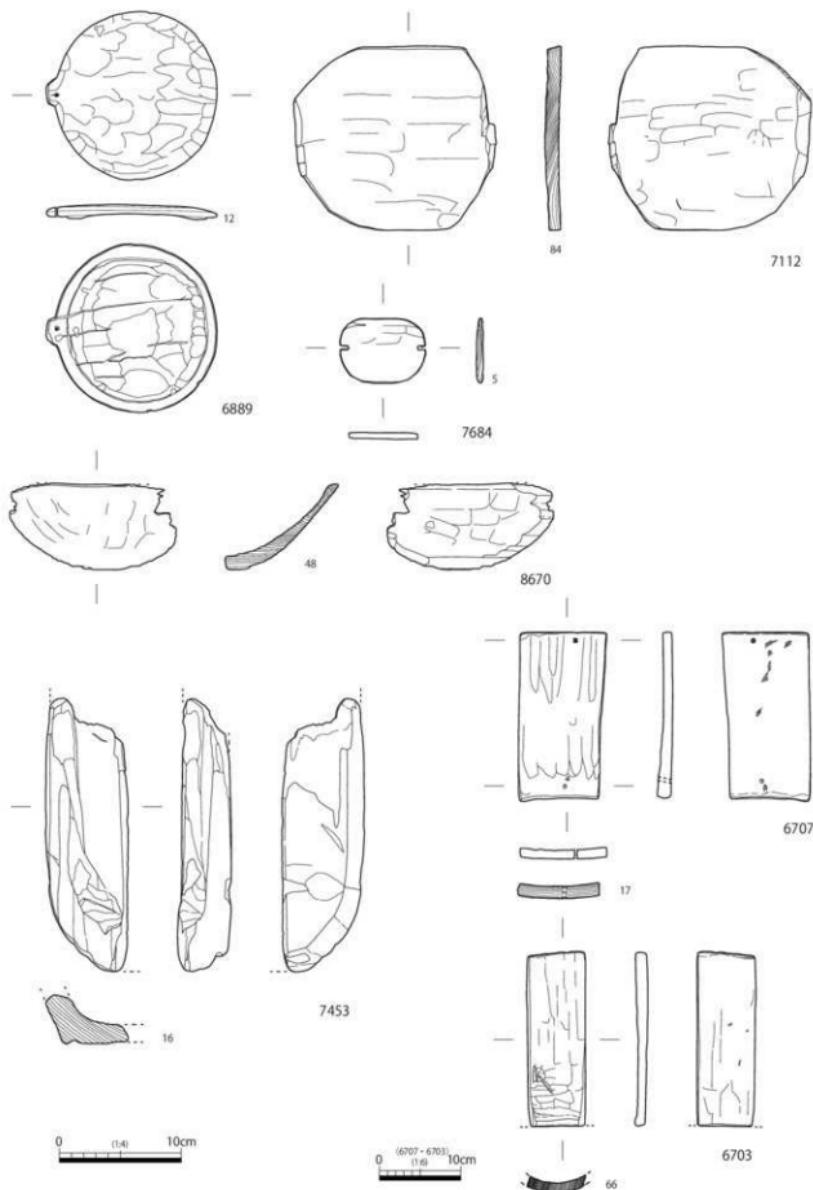


第IV-8-126図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物4

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査

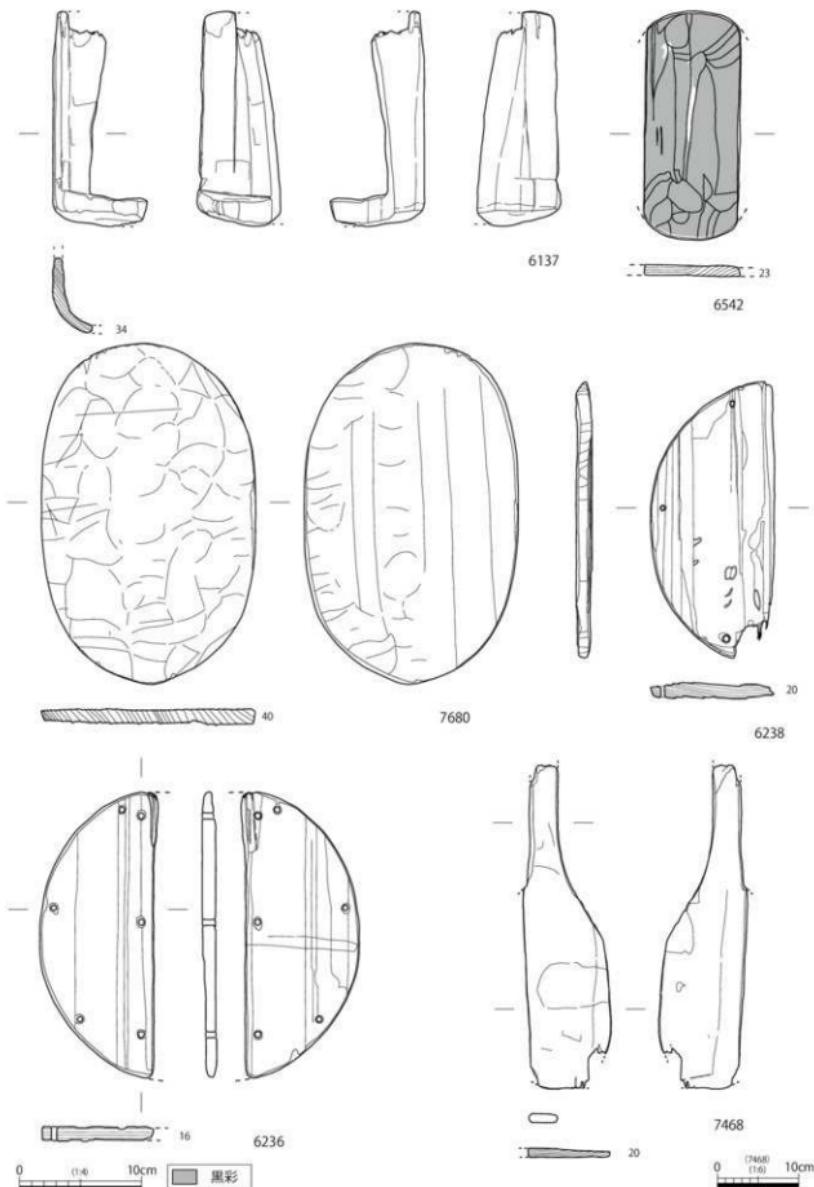


第N-8-127図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物5

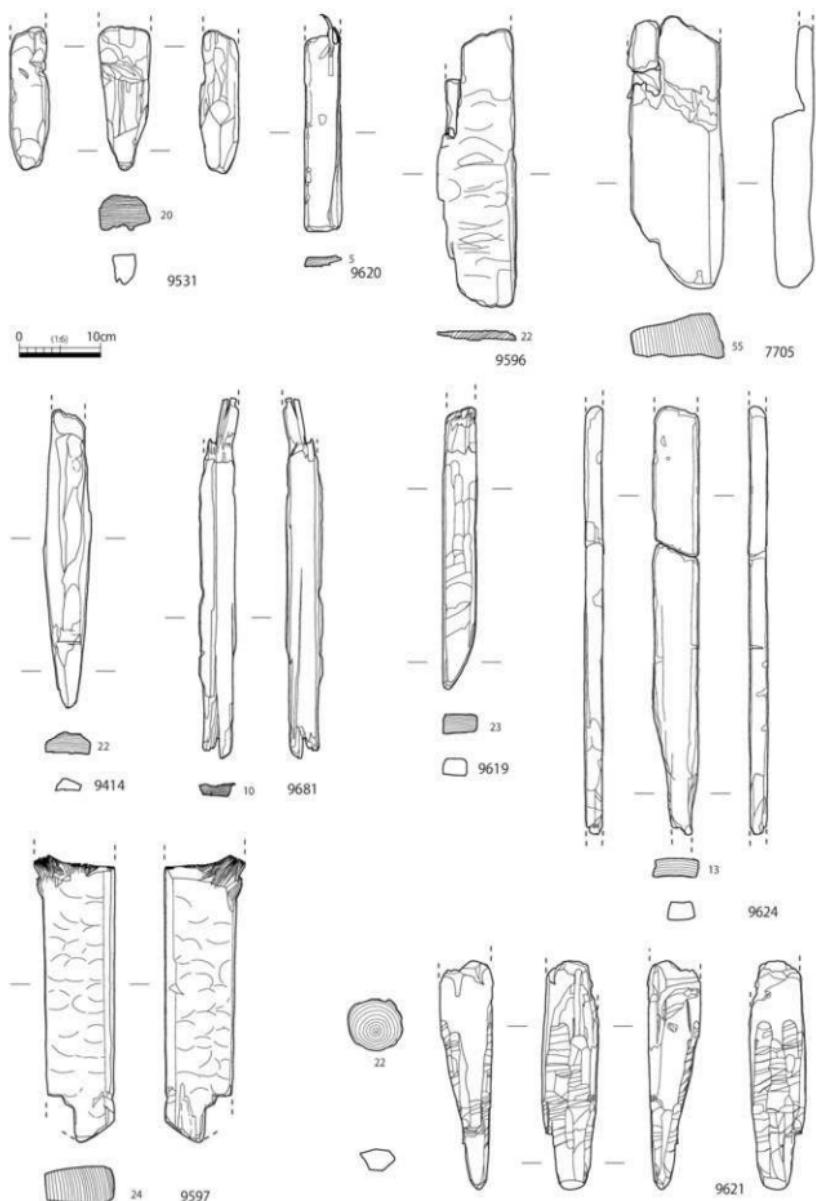


第IV-8-128図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物6

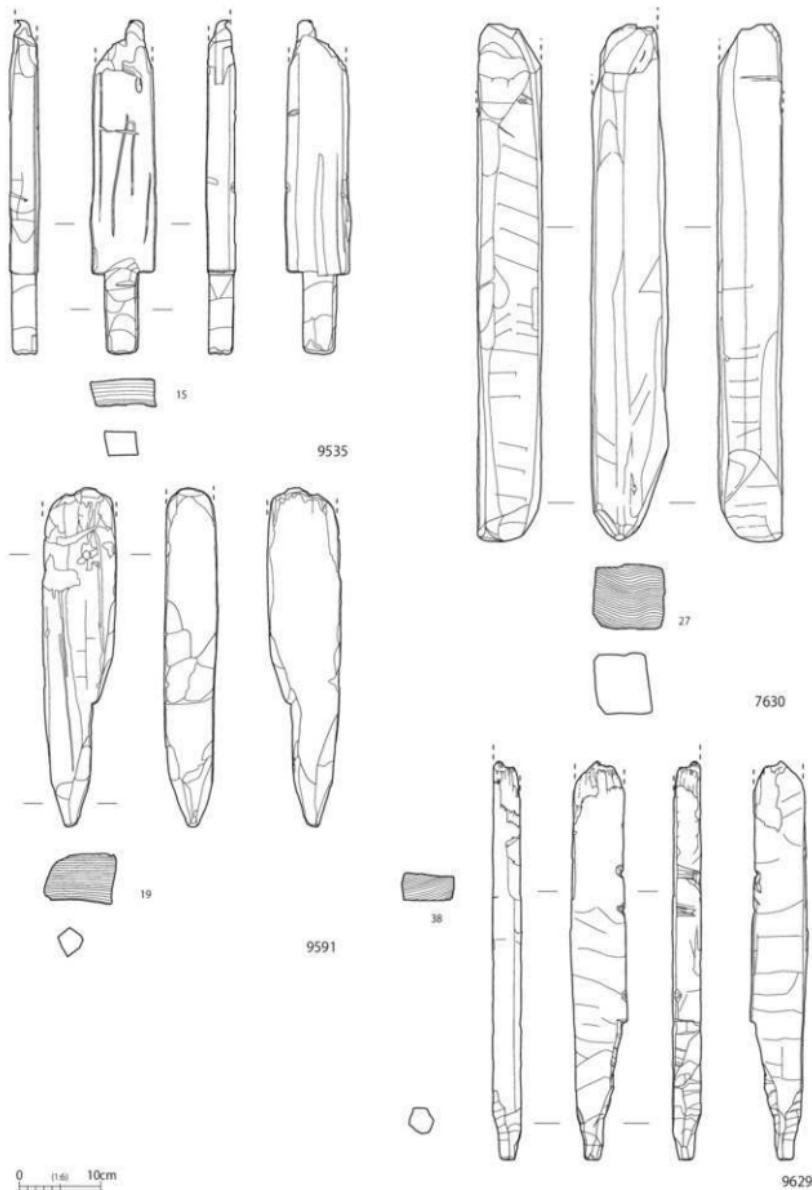
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



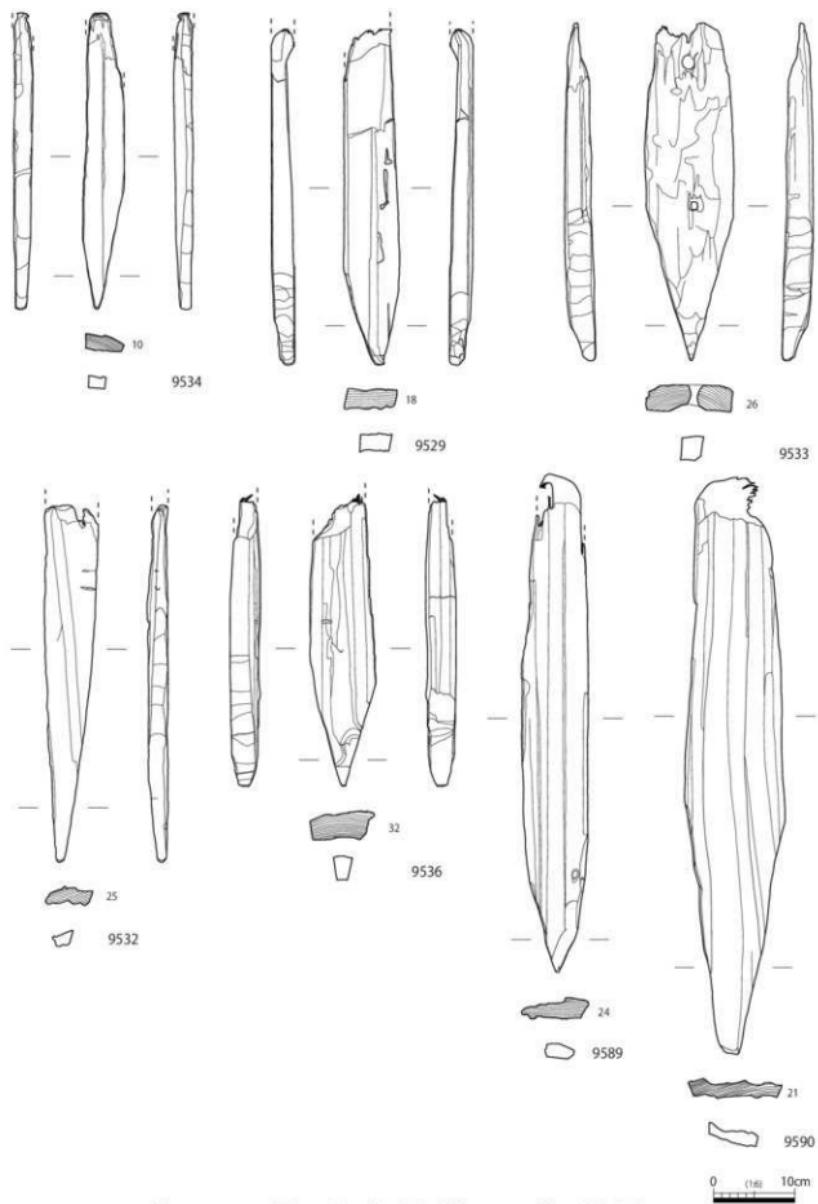
第IV-8-129図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物7



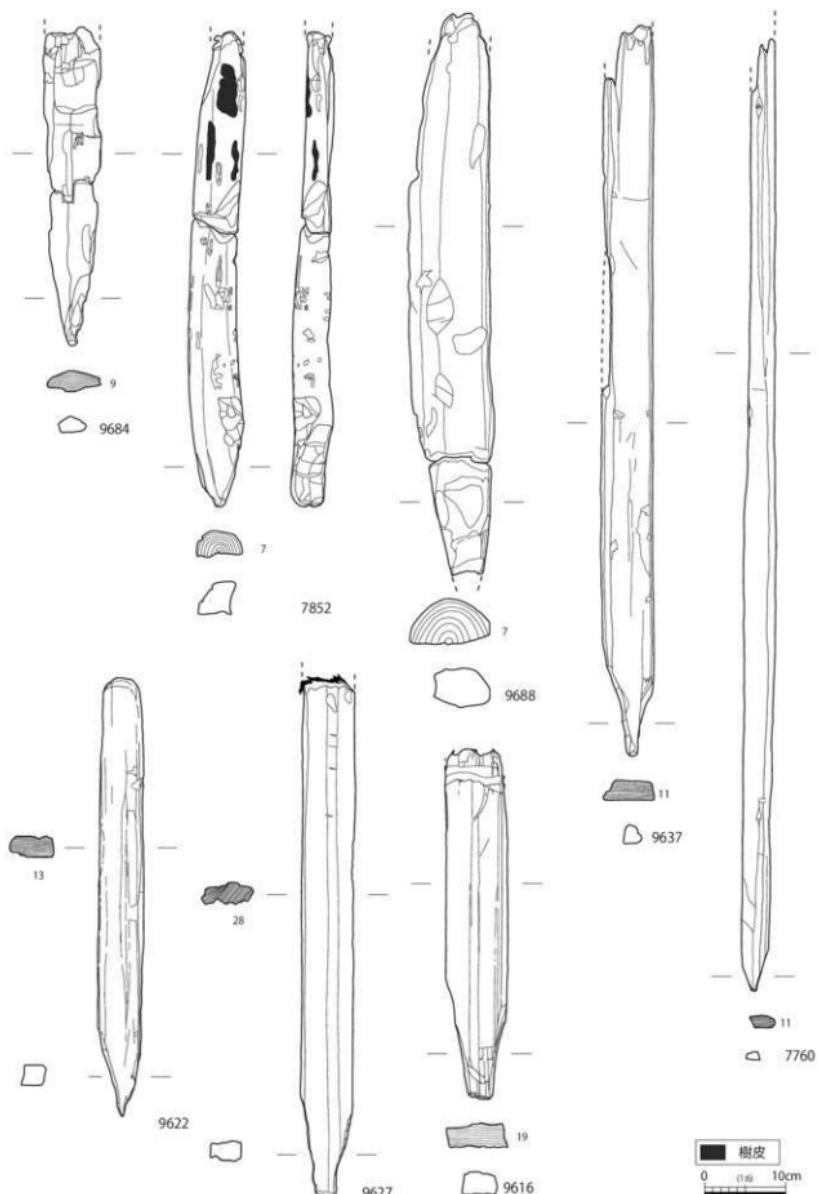
第IV-8-130図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物8



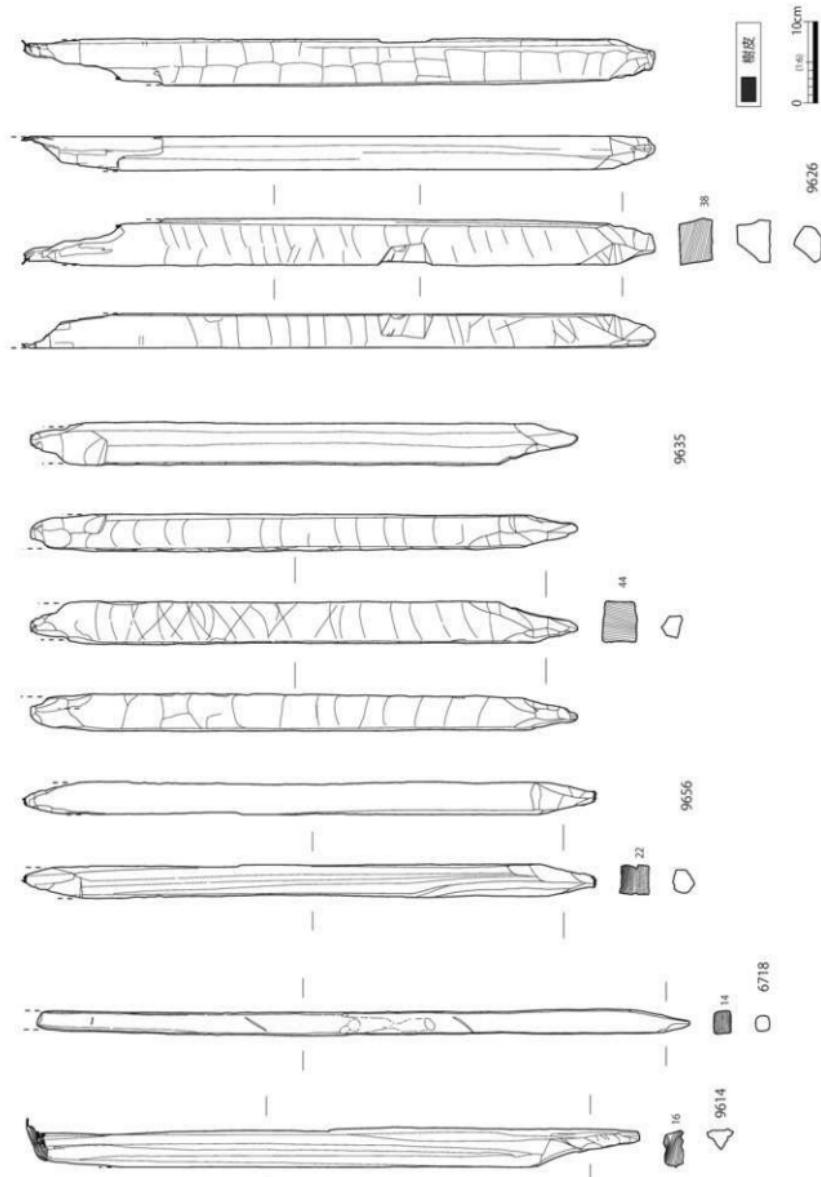
第IV-8-131図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物9



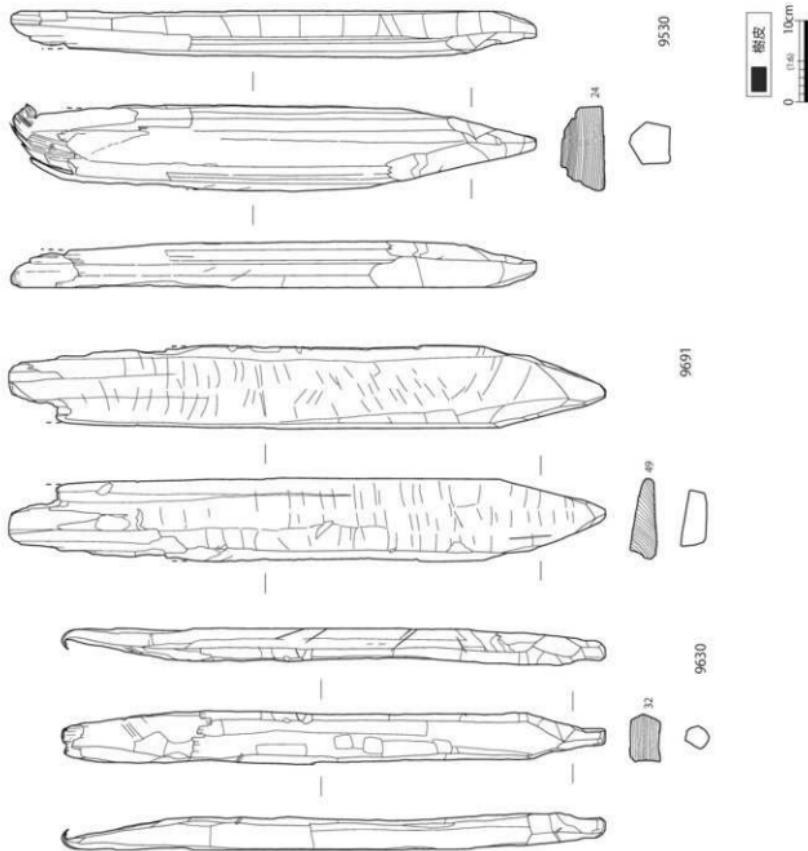
第IV-8-132図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物10



第IV-8-133図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物11



第IV-8-134図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物12

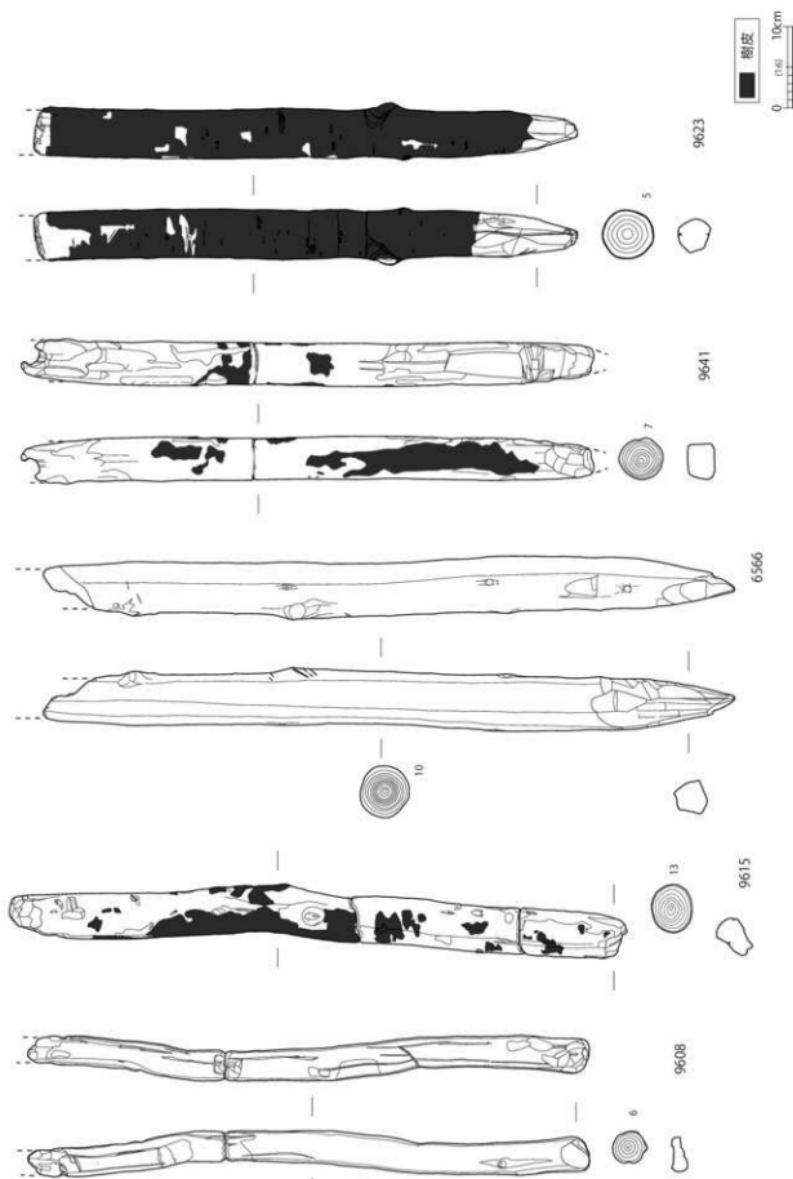


第IV-8-135図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物13

漁労具は6722のたも棒、6719のアカトリが出土した。

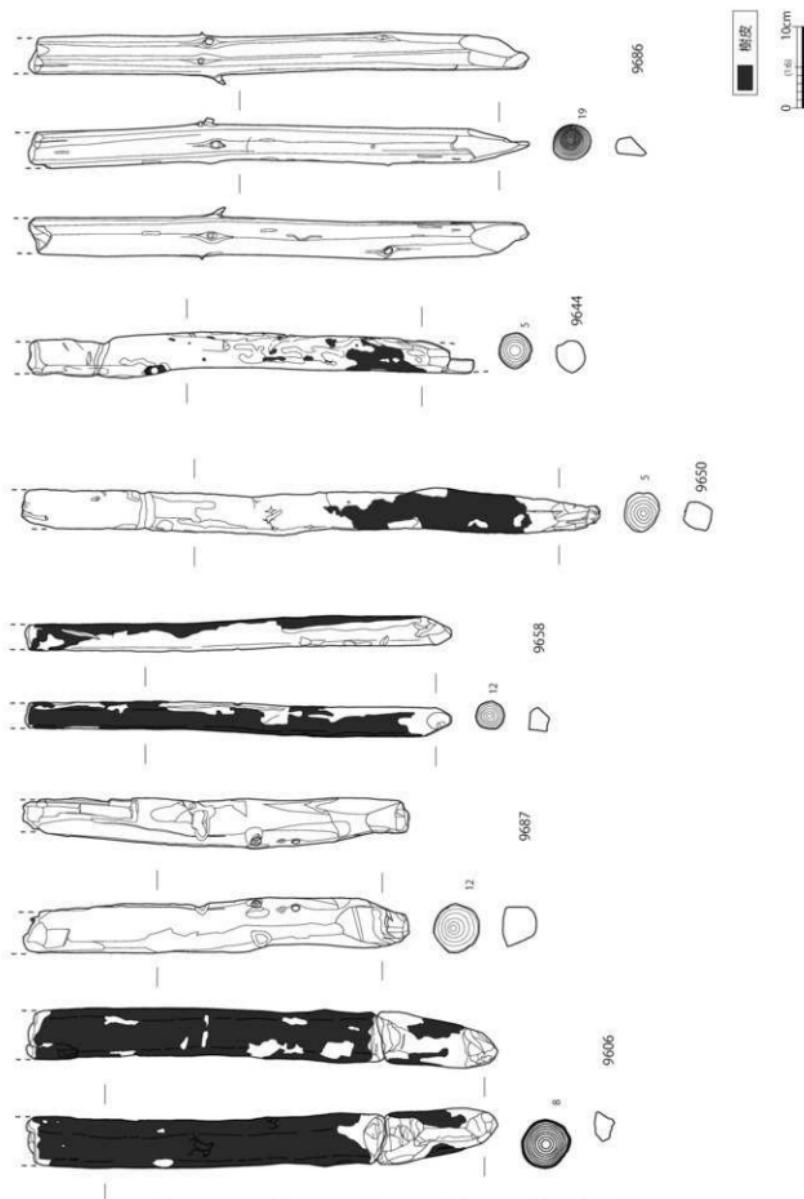
食事具は掘方から出土した8177の匙、0435の杓子がある。匙は柄を欠損している。身の横断面形は長方形で、内面の削り込みによるラインと外形があわない。外面の角を形成する前段階のものとすれば未製品と考えられる。杓子は、調査の初め頃に南側溝から出土したもので、出土位置とレベルから本造構に帰属すると考えられる。一本の削り物で、身は深い鉢形で柄は口縁より一段下がった位置に付く。底面には2つの円孔が貫通しており、水を入れても溜まらない。

容器蓋は6889、7112、7684がある。6889は円形の蓋の一ヵ所を外側に膨らませて円孔を穿つ。内面は縁を一段削り込んで身を受ける段を作り出す。7112は未製品かと思われる。7684は小判形の小型の板で欠損しているため抉りのように見えるが、両短辺際に穿った円孔である。蓋ではない可能性もある。8670は椀の破片と考えられる。7453は槽、6703と6707は桶、6137は大半を欠損しているので全体

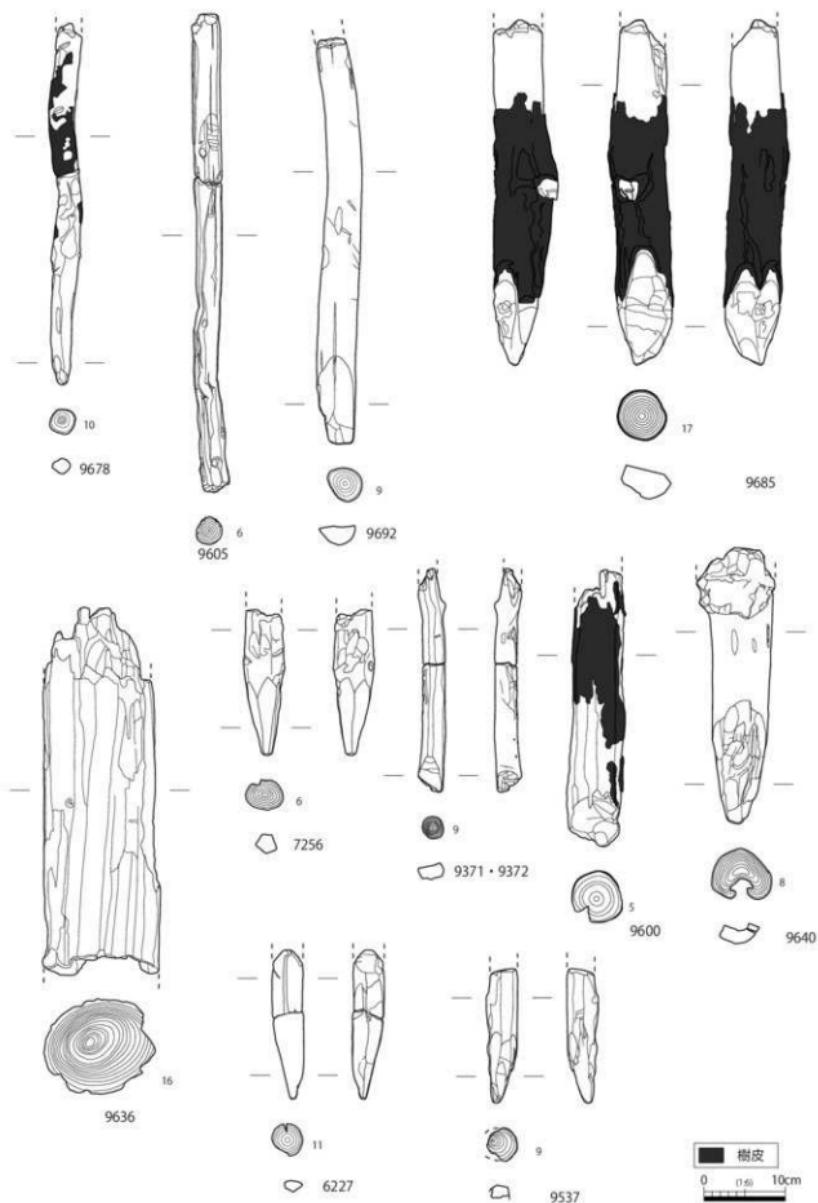


第IV-8-136図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物14

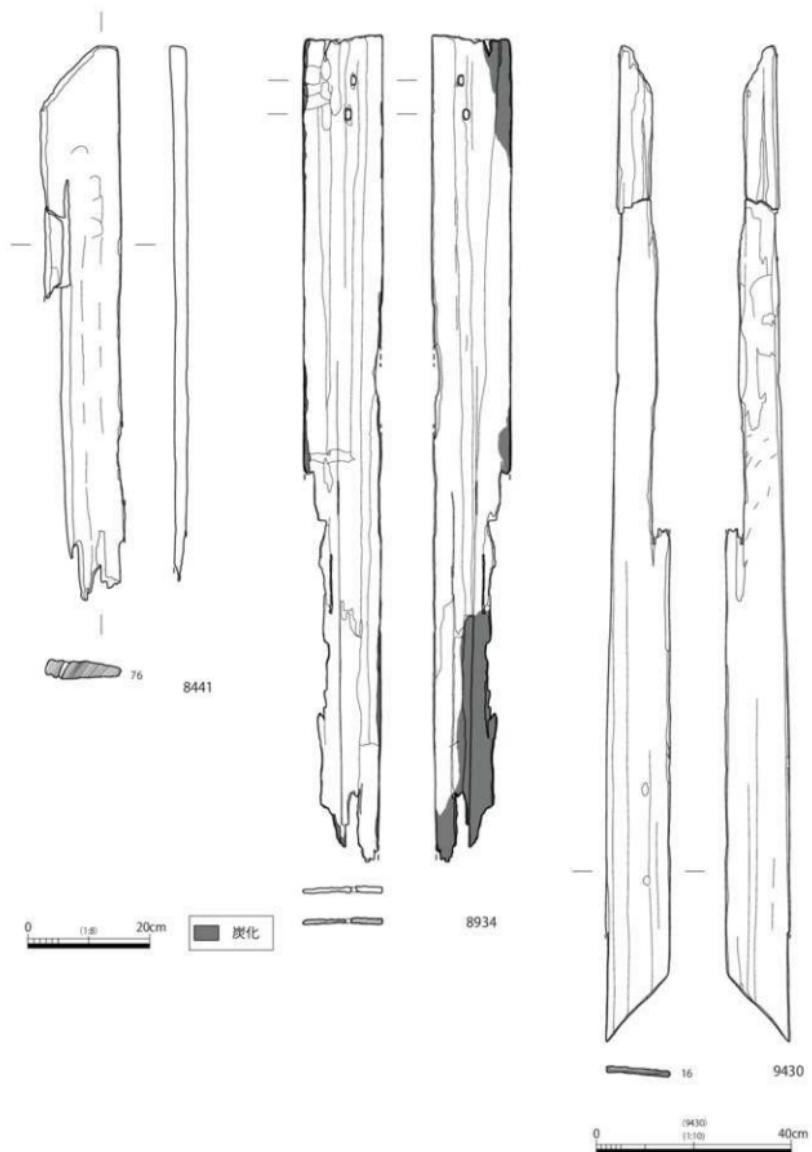
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



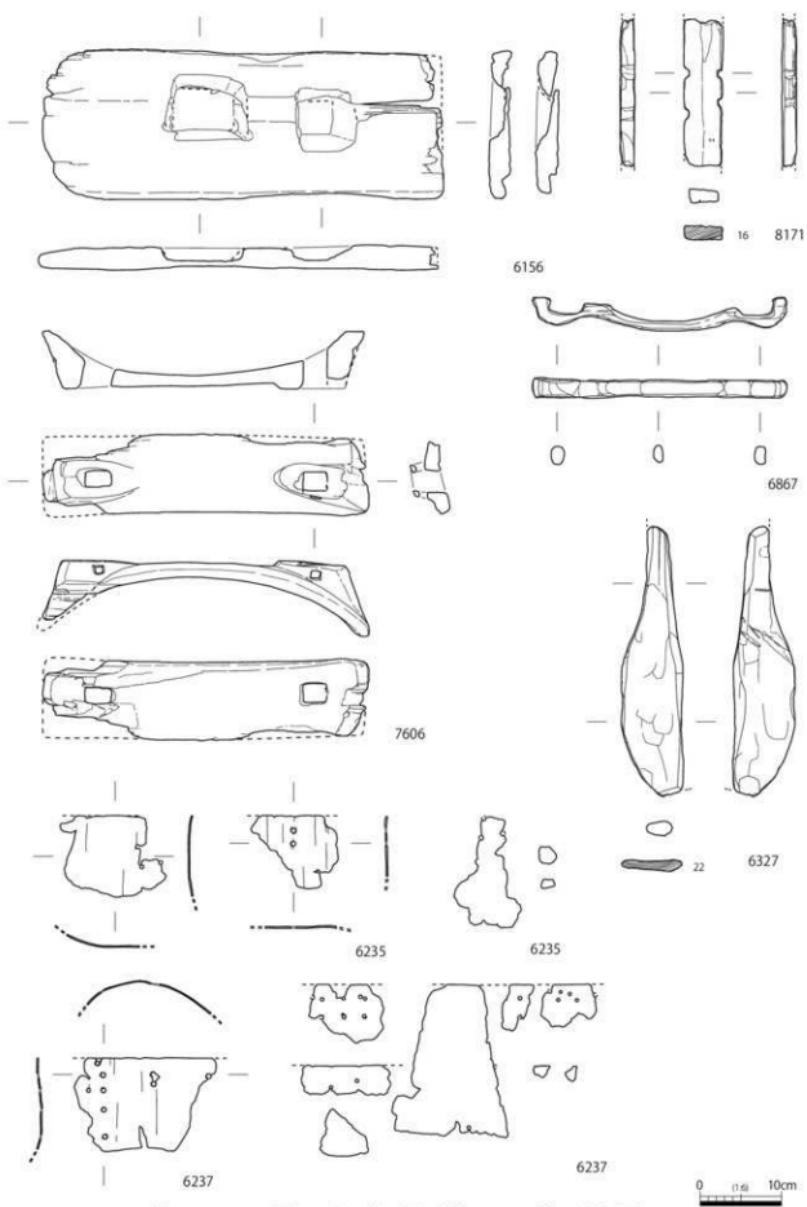
第IV-8-137図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物15



第IV-8-138図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物16

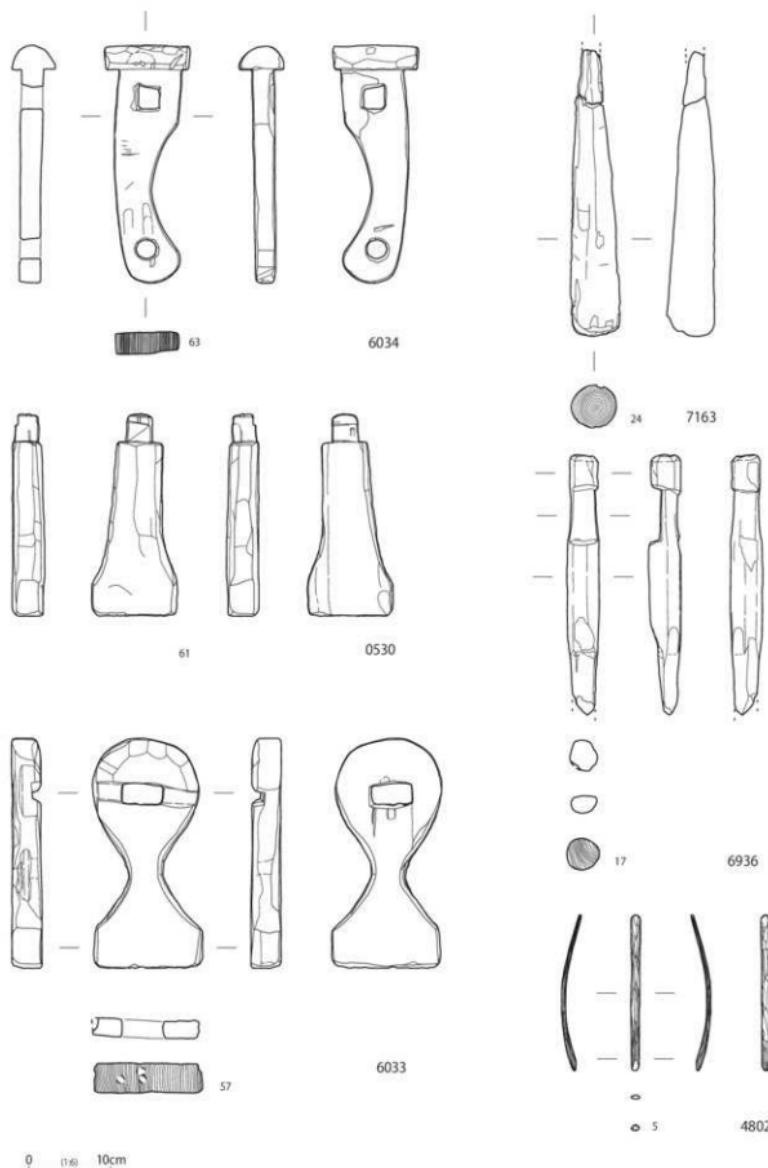


第IV-8-139図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物17

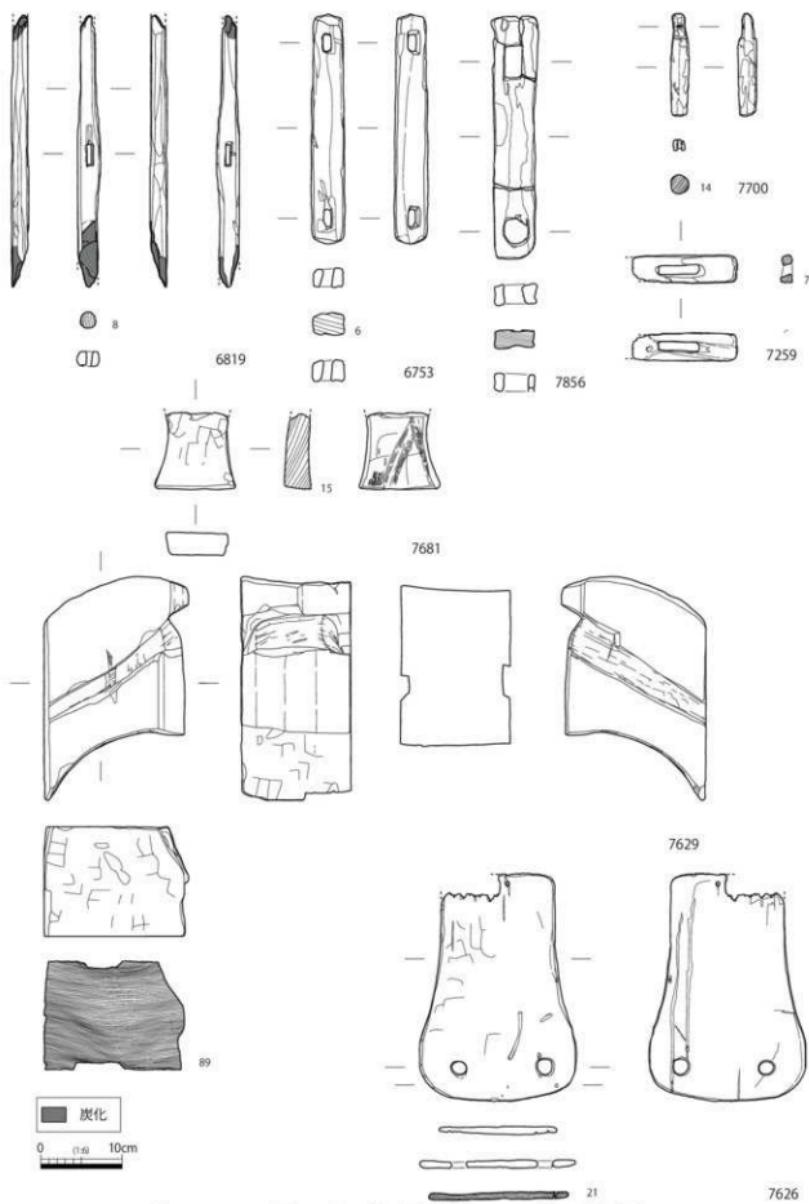


第IV-8-140図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物18

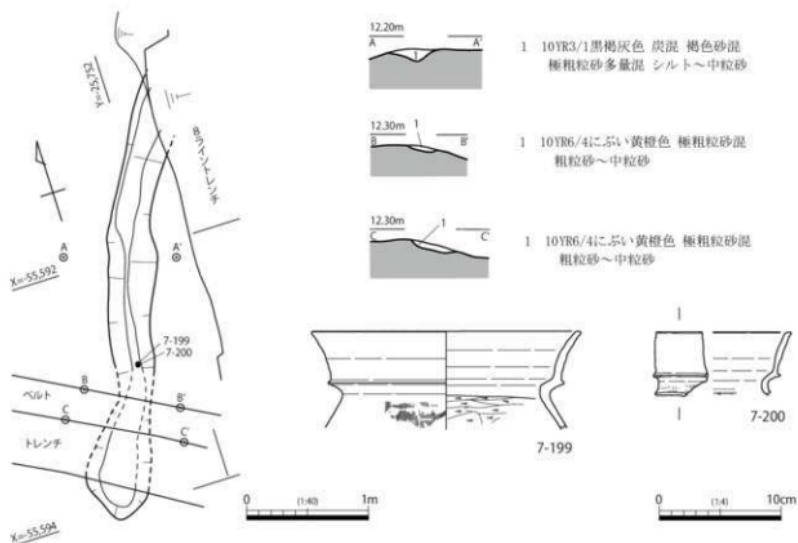
第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-141図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物19



第IV-8-142図 2区 第7面 溝(2S-763古) 出土遺物20



第M-8-143図 2区 第7面 溝(2S-883) 平・断面図及び出土遺物

形はわからないが刺り物の箱の可能性がある。6542、7680は底板、6238、6236は円形で縁に沿って円孔が穿たれている。底板ないし蓋と考えられる。7468は杓子形木器である。

杭は、横断面形を基にⅠ類)横断面円形の芯持ち丸太材、Ⅱ類)横断面半円形の半裁丸太材、Ⅲ類)横断面方形の分割材に分類できる。2S-245では横断面台形ないし三角形のⅣ類があったが、本遺構では見られない。9621は楔の転用品である。

建築部材は護岸材に転用された板材である。端部を斜めにカットした8441、9430は妻壁と考えられる。それぞれ約43°、47°の勾配でカットされている。8934は板材の端に孔が2つある。

6156は板材の中央部に2つの方形の窪みがある。8171は長方形の板材の両側辺に2つずつ台形状の欠き込みがある。7606は腰掛と思われる。座板の両端に方形孔が穿たれており、その孔に直交するよう側面から一回り小さい方形孔が穿たれている。別作りの脚を差し込んでいたものと考えられる。6867は棒材の両端をそれぞれ幅4cm程弧状に削り、中央部も同様に緩くカーブするよう弧状に削っている。6327の形は杓子形木器に似る。未製品の可能性がある。6235と6237は広葉樹の樹皮に円形の小孔を穿ったものである。6034は脚ないし栓と考えられる。半円筒形の頭部に軸部が付く。頭部寄りに方形孔、下端側に円形孔を穿つ。軸の中程は弧状に抉られている。0530と6033は指物の腰掛の脚である。7163は棒状品、6936は部材、4802は薄いへら状の木器である。6819は棒状品で両端部を欠損している。中央部は長方形の孔が穿たれ、横断面形は方形である。孔を抉んで両側は横断面円形である。棒の腕の可能性がある。6753は厚手の板材の両端附近に方孔を穿つ。7856も同様に両端部附近に孔を穿つが、一方が円形でもう一方が方形である。7700は棒材の先端を両側辺から一段細く削り込み、直交方向に円孔を穿っている。7259は長方形の材の中央に長方形の孔を穿つ。7681はくびれの緩いバチ形の板材で一端を欠損する。7629は厚みのある材の上端を丸く成形し、下端は弧状に削り込む。図の

25-781

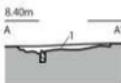
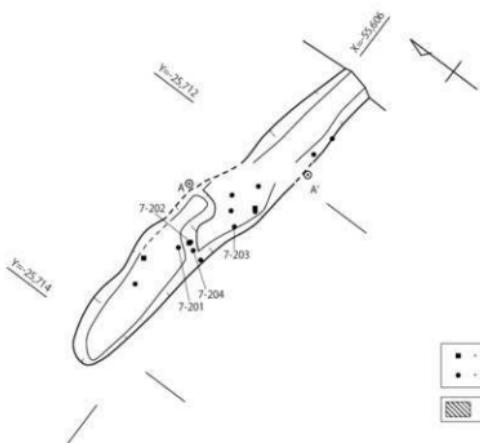


I 10YR6/1褐色灰色 繩～極粗粒砂混シルトに
7.5YR8/1灰白色 繩混シルトブロックを含む



I 10YR7/1灰白色 繩～極粗粒砂混シルトに
10YR8/1灰白色 繩混シルトブロックを含む

25-791



I 10YR7/2にぶい黄褐色 繩～極細粒砂

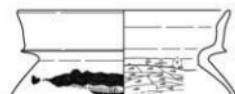
■ 木器
● 土器

木器

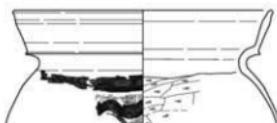
0 (1:40) 1m



7-201



7-202



7-203



7-204

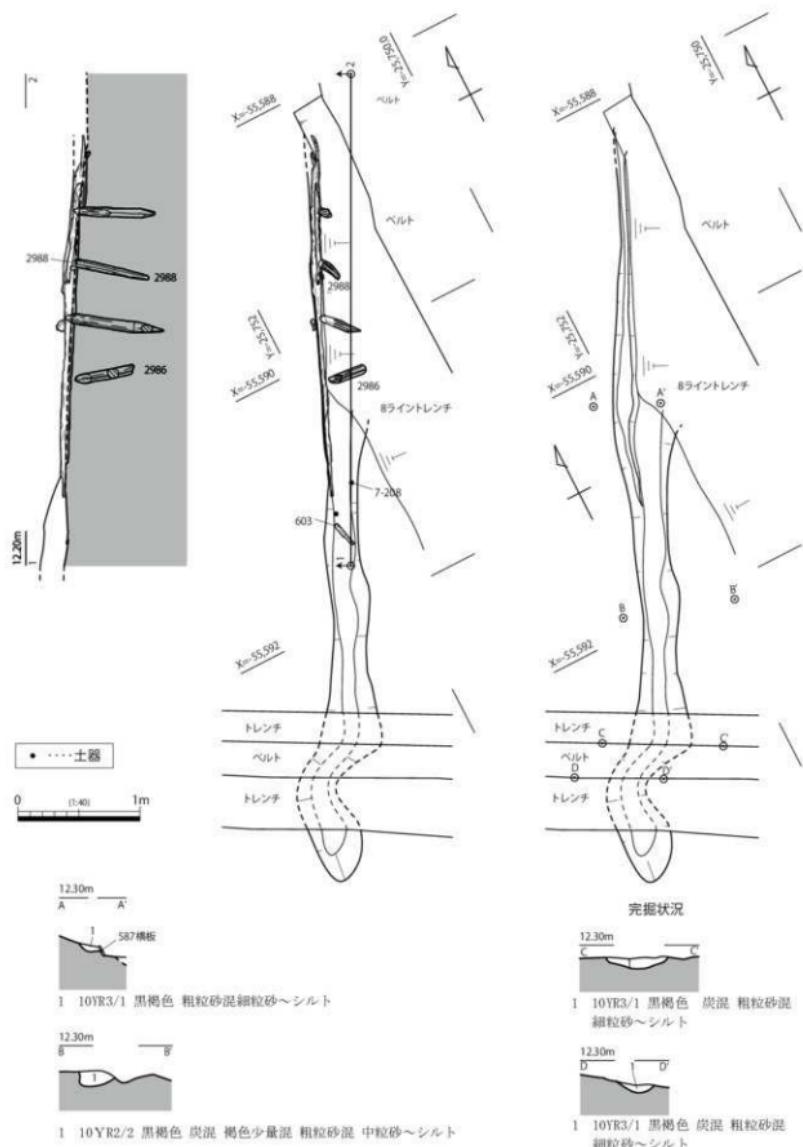


7-205

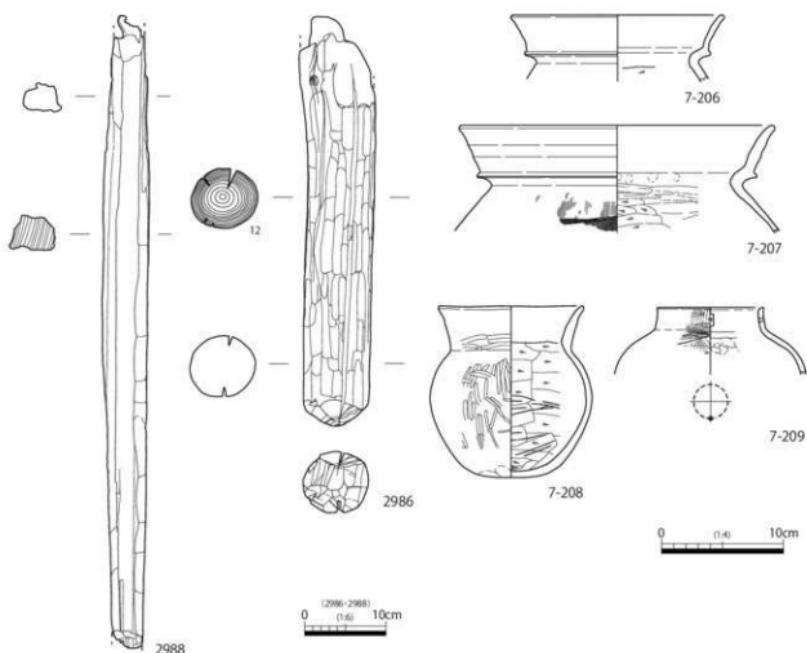
0 (1:40) 10cm

第IV-8-144図 2区 第7面 溝(2S-781、791) 平・断面図及び出土遺物

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-145図 2区 第7面 溝(2S-858) 平・断面図



第IV-8-146図 2区 第7面 溝(2S-858) 出土遺物

表面と裏面にはそれぞれ中央部に斜めに溝を彫り、側面で表裏両面の溝がつながる。丁寧に作られているが、用途は不明である。7626の平面形は隅丸台形で、中程から下端に向けて丸みを持って横に広がる。下端の両側に円孔を1つずつ穿つ。(馬路)

2 S-883(第IV-8-143図)

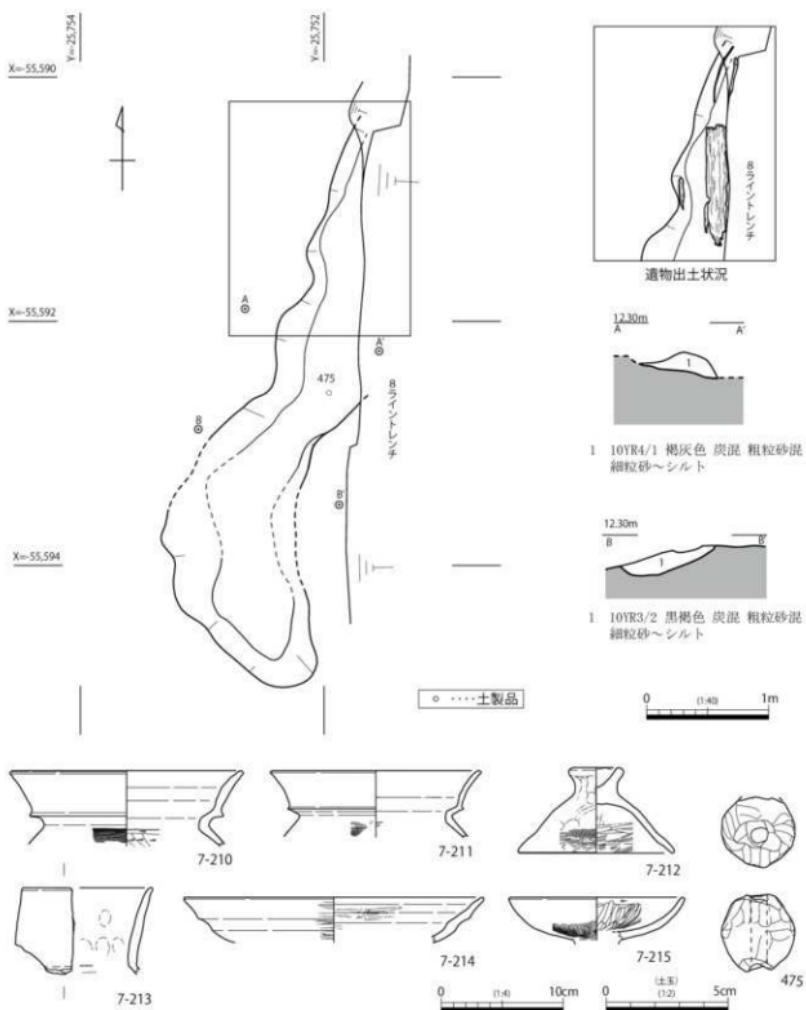
D 8グリッドで検出した南西-北東方向に伸びる溝である。後述する2 S-858を切る。長さ約3.1m、幅約0.3~0.4m、深さ0.05~0.14mの規模で検出した。底面は北東側に向か低くなる。埋土中から甕(7-199, 200)が出土した。乙亥正VIII~IX期頃の土器と考えられる。なお、本遺構を被覆するD 8グリッド付近のV-4層には、乙亥正VIII~IX期頃とみられる土器片を含む。(岡野)

2 S-781(第IV-8-144図)

F 3グリッドで検出したL字形に屈曲する短い溝で、検出延長は約1.5mで、幅は約0.34mである。埋土は約0.02mで非常に浅く、遺物は出土しなかった。(馬路)

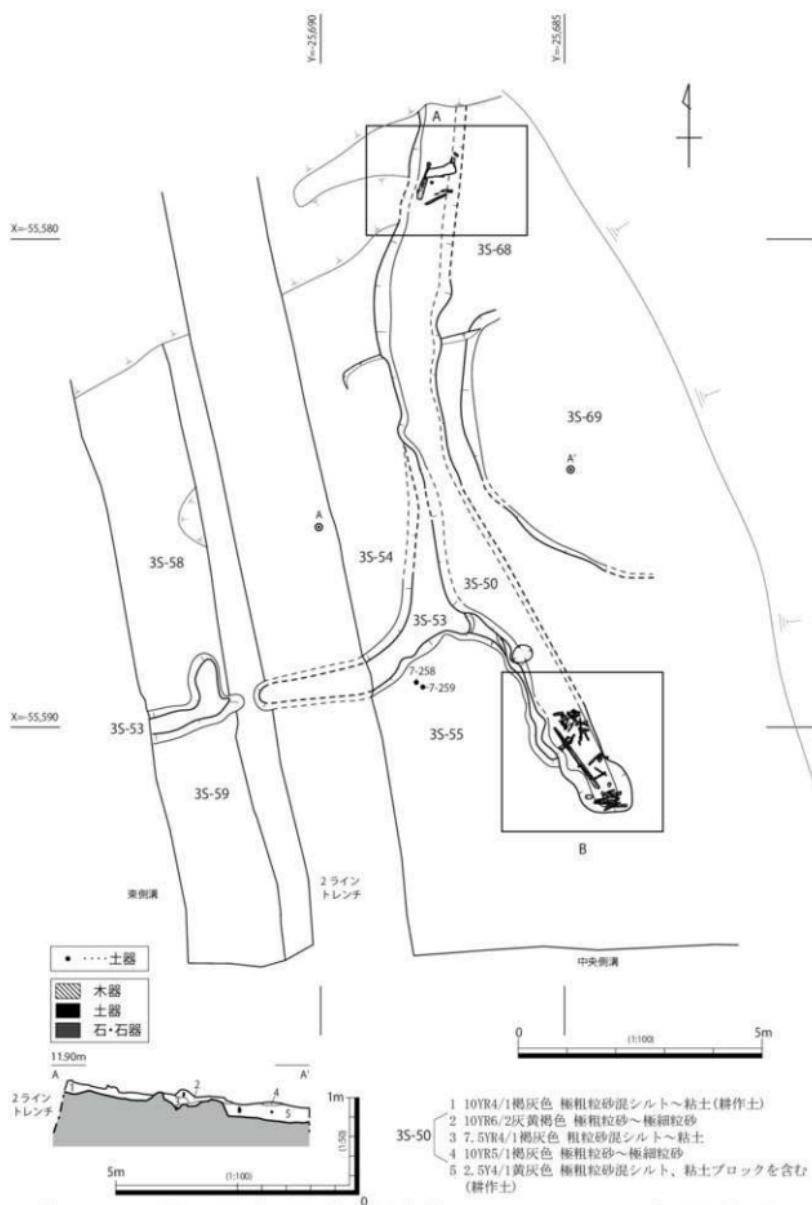
2 S-791(第IV-8-144図)

E 4グリッドで2 S-763と重複し、2 S-763よりも新しい。概ね東西に伸びる直線的な短い溝で、



第IV-8-147図 2区 第7面 溝(2S-895) 平・断面・遺物出土状況図及び出土遺物

延長約2.3m、幅約0.5、深さ約0.06mである。断面は皿形で、底面は東側に傾斜している。埋土は
にぶい黄橙色の砂層である。埋土中から出土した土器は、壺(7-201)、甕(7-202、203)、高坏(7-
204)、低脚坏(7-205)である。高坏は西伯耆・出雲系のものと考えられる。乙亥正VII-VIII期に
埋没したと考えられる。(馬路)



第IV-8-148図 3区 第7面 溝・擬似畦畔(3S-50・53~55・58・59) 平・断面図

2 S-858(第IV-8-146図)

D8グリッドで検出した南西-北東方向に伸びる溝である。2S-883に切られる。長さ約62m、機能時の幅約0.3~0.4m(掘方完掘時点での最大0.52m)、深さ0.02~0.18m程度で、底面は北東側に向かって低くなる。北西側の側面の一部には、横板と矢板による護岸がある。横板はかなり腐朽しているが、長さ2.9m、最大幅12cmの薄い板で、溝内側にはこの板を固定する4本の杭が打設されている。杭は、直径または一辺が5~9cm程度の丸太または芯去りの分割材で、外面は削肌部を除き手斧加工されている。

埋土中から甕(7-206、207)、壺(7-208、209)が出土した。乙亥正VII~VIII期頃の土器と推定される。(岡野)

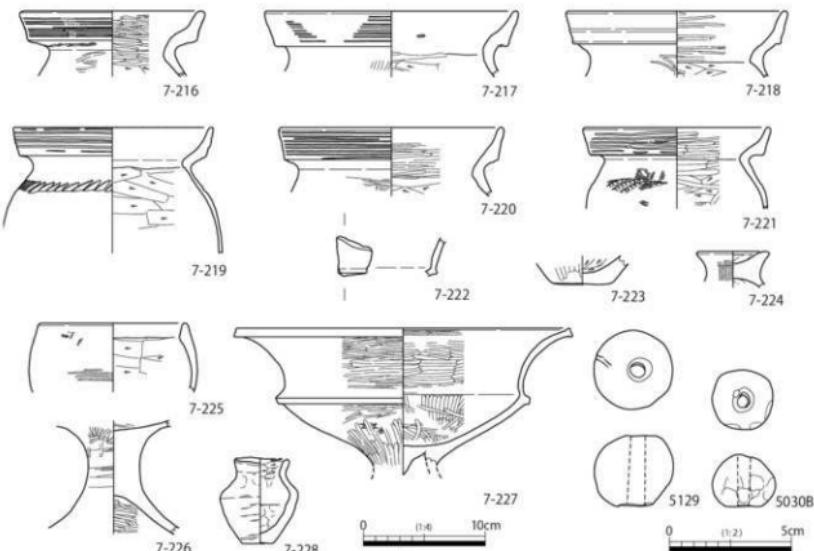
2 S-895(第IV-8-147図)

D8グリッドで検出した南西-北東方向に伸びる溝である。2S-858に切られる。平面は不定形であるが、長さ約4.6m、幅約0.6~0.9m、深さ0.03~0.14mの規模で検出された。

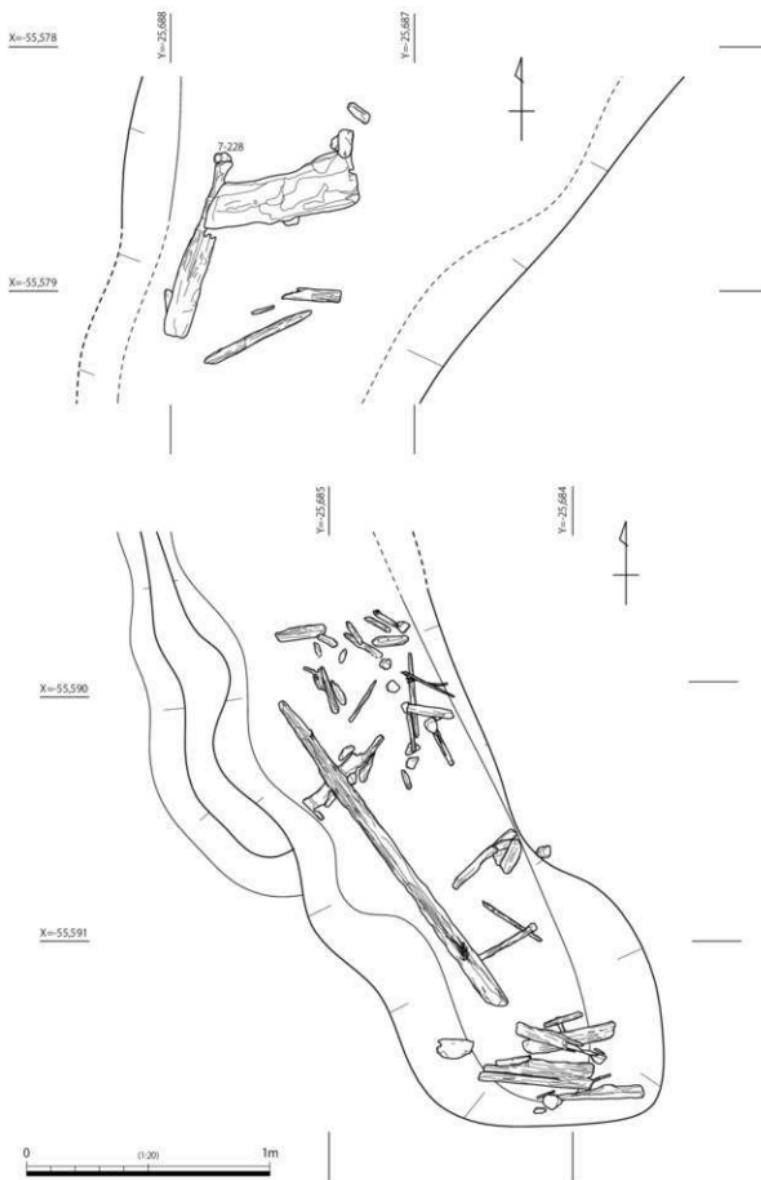
埋土中から、板、木片とともに、乙亥正VII~VIII期頃の特徴を有する甕(7-210、211)、高坏(7-214)、直口壺(7-213)、蓋(7-212)、土玉(475)が出土した。板は、長さ105cm、幅19.5cm、厚さ0.5cmのもので腐朽により加工痕は不明である。(岡野)

3 S-50・53(第IV-8-148~152図)

3区で検出した溝(3S-50)と疑似畦畔(3S-53)である。なお、溝は下位遺構面の3S-70と重複

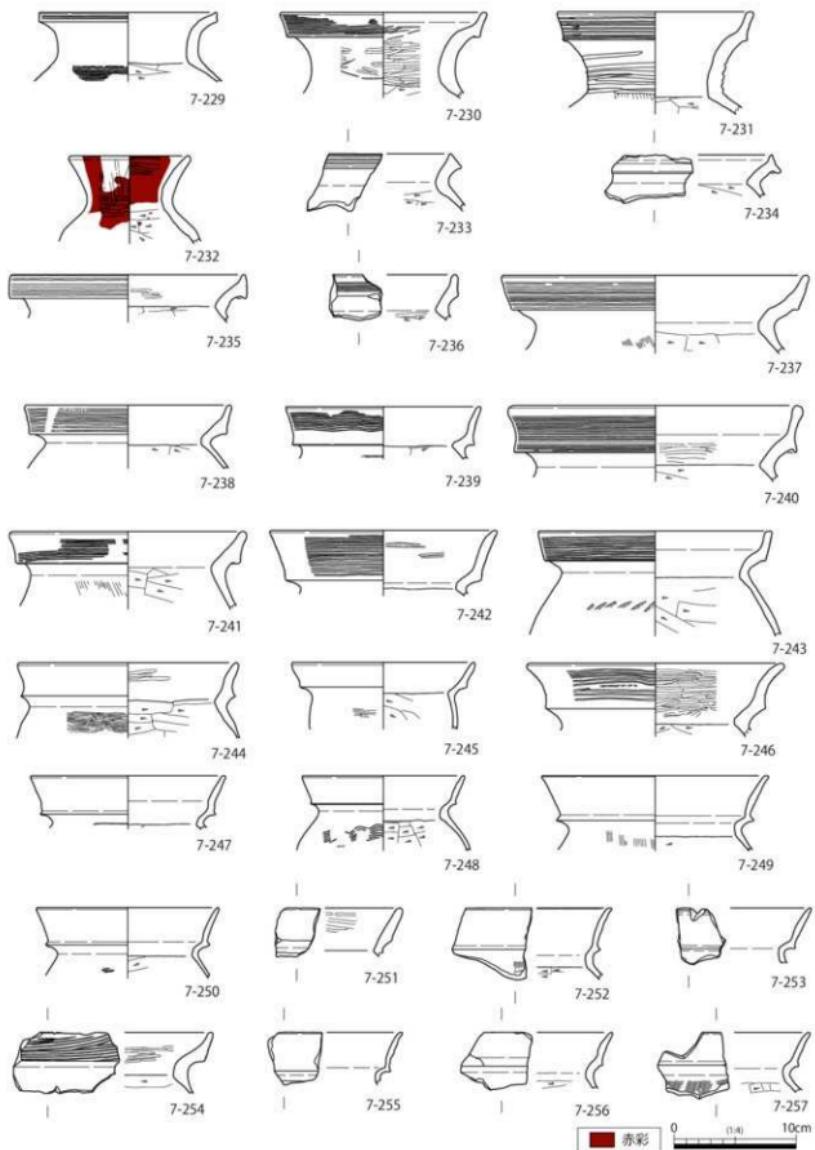


第IV-8-149図 3区 第7面 溝(3S-50) 出土遺物

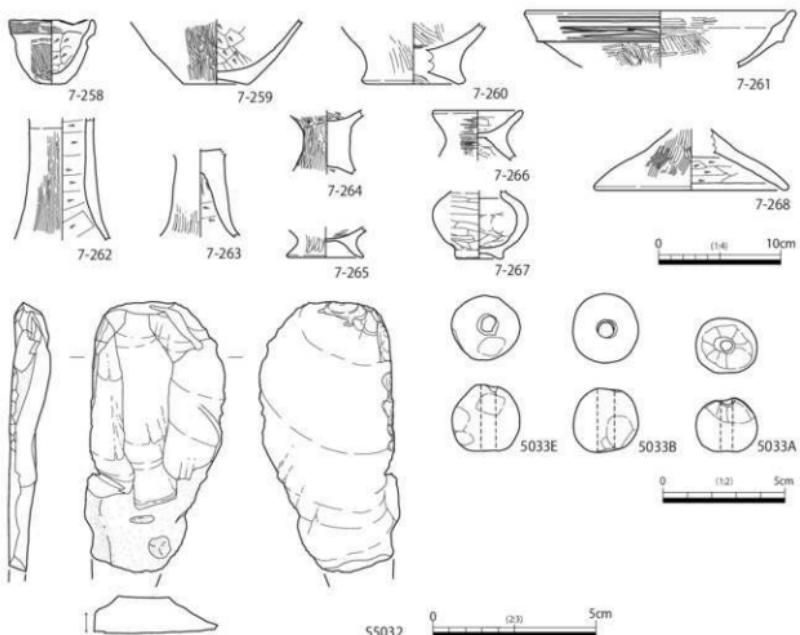


第IV-8-150図 3区 第7面 溝・擬似畦畔(3S-50) 遺物出土状況拡大図A(上)、B(下)

第8節 第7面(V-4・5層下面)の調査



第IV-8-151図 3区 第7面 耕作土(3S-54・55・59) 出土遺物 1



第IV-8-152図 3区 第7面 耕作土(3S-54・55・59) 出土遺物2

しており、北端の東岸部分と南半部の東岸部分は3S-70を誤って掘削してしまったものである。3S-50は南西から北に掘削された溝で、南北両端に向けてそれぞれ緩やかに下っている。南端は、明瞭な肩部が無くなり砂層が薄く広がって途切れる。検出した溝の延長は、約9.4m、幅は0.5m前後、溝の深さは約0.15mである。埋土は2層に細分でき、下層は褐灰色の粗粒砂混じりシルトから粘土で、上層は灰黄褐色の極粗粒砂から極細粒砂である。上層は、南東側へと薄く広がっており、最終的な埋没過程で標高の低い東側へ氾濫堆積が広がったと考えられる。

溝の東西両岸には基盤層が土手状に残っており、この土手の一部が東西に延びて、上面幅約0.2～0.3mの疑似畦畔の高まりを形成する。土手から西へ延びた後、2ライントレントベルト内で一度途切れ、約0.6mの水口が形成され、そのすぐ脇から北向きに疑似畦畔が延びるが、そこから先は検出できなかった。疑似畦畔の両側には約0.1mの厚さで耕作土がある。東岸の土手も西岸の疑似畦畔に対応するあたりで南から東に緩やかに曲がりながら疑似畦畔が延びるが、南側の肩部は検出できなかった。東側にも厚さ約0.15mの耕作土が残存した。溝内からは、部分的に加工された板状品や棒状品などが出土し、耕作土からは土器片が出土した。溝内からは乙亥正V期の土器片が多く出土したが、残存状態は悪いが乙亥正Ⅳ期頃の土器片(7-222)も出土しており、その時期に埋没したと考えられる。耕作土中からは乙亥正V～Ⅶ期と考えられる土器片が出土した。7-261は近畿北部系のものと考えられる。他に剥片(S5032)が1点出土した。左側面の一部に磨れた痕があり、蝶石器の一部だったと考えられる。(馬路)

第9節 第8面(VI層下面)の調査

1 VI層出土の遺物(第IV-9-1~9図)

VI層相当層から出土した土器は、壺(8-001~006)、甕(8-007~028)、高杯(8-029~032、035、037)、低脚杯(8-033~036)、器台(8-038~041)、瓶形土器(8-042)、蓋(8-043~049)などがある。壺は、乙亥正Ⅱ~VII期と時期幅がある。他の器種は概ね乙亥正V~VII期のものと考えられる。甕(8-028)は、長胴で胎土、色調が在地のものと異なり、西部瀬戸内でも周防灘周辺の弥生時代後半の土器の特徴を示す、搬入品と考えられる。高杯(8-037)は近畿北部系ないし北陸系のものと考えられる。

石器は、石皿(S07309)、砥石(S0101)、楔形石器(S0226)などが出土した。

木器は、8796がたも棒、4230は桶の破片で外面には縦に連続する山形の刻みがある。割れ面の内側と底板を受ける部分が削られて平らになっているので何かに転用したと考えられる。8306は赤彩された高杯で、口縁部に対になる紐孔突起がある。1185は杓子形木器、4726、4632、0351は蓋、1176は指物の部材の可能性があり、6087Aは把手状の部材である。1126、6087Cは横断面形が半円形の棒状の部材、5999Bは両端に頭部を作り出した部材である。0243は長方形の板材に方孔が2つある。6526、6087Bは転用杭、8307は梯子である(馬路)。

2 第8面の遺構(第IV-9-10~12図)

第8面では、3区で竪穴住居の周堤溝と考えられる遺構を検出した他、柱穴、土坑、溝を検出した。

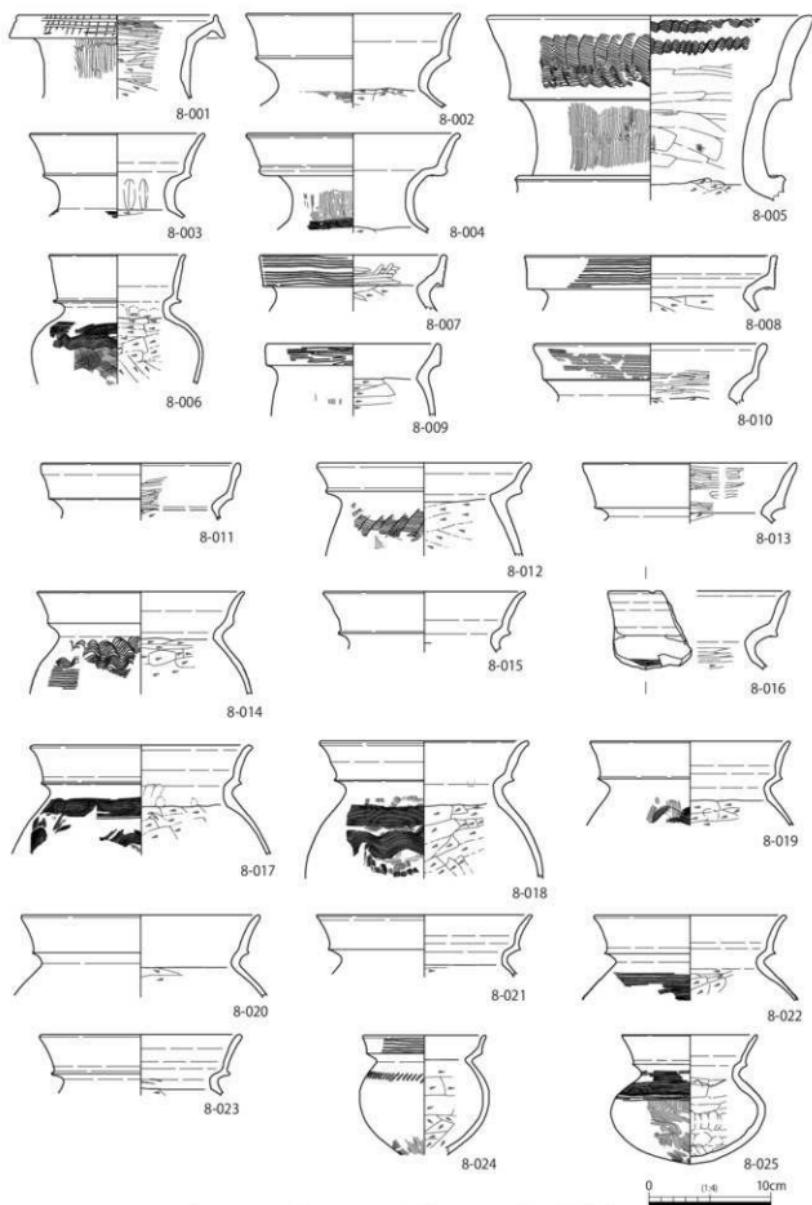
周堤溝

3 S-70(第IV-9-13~19図)

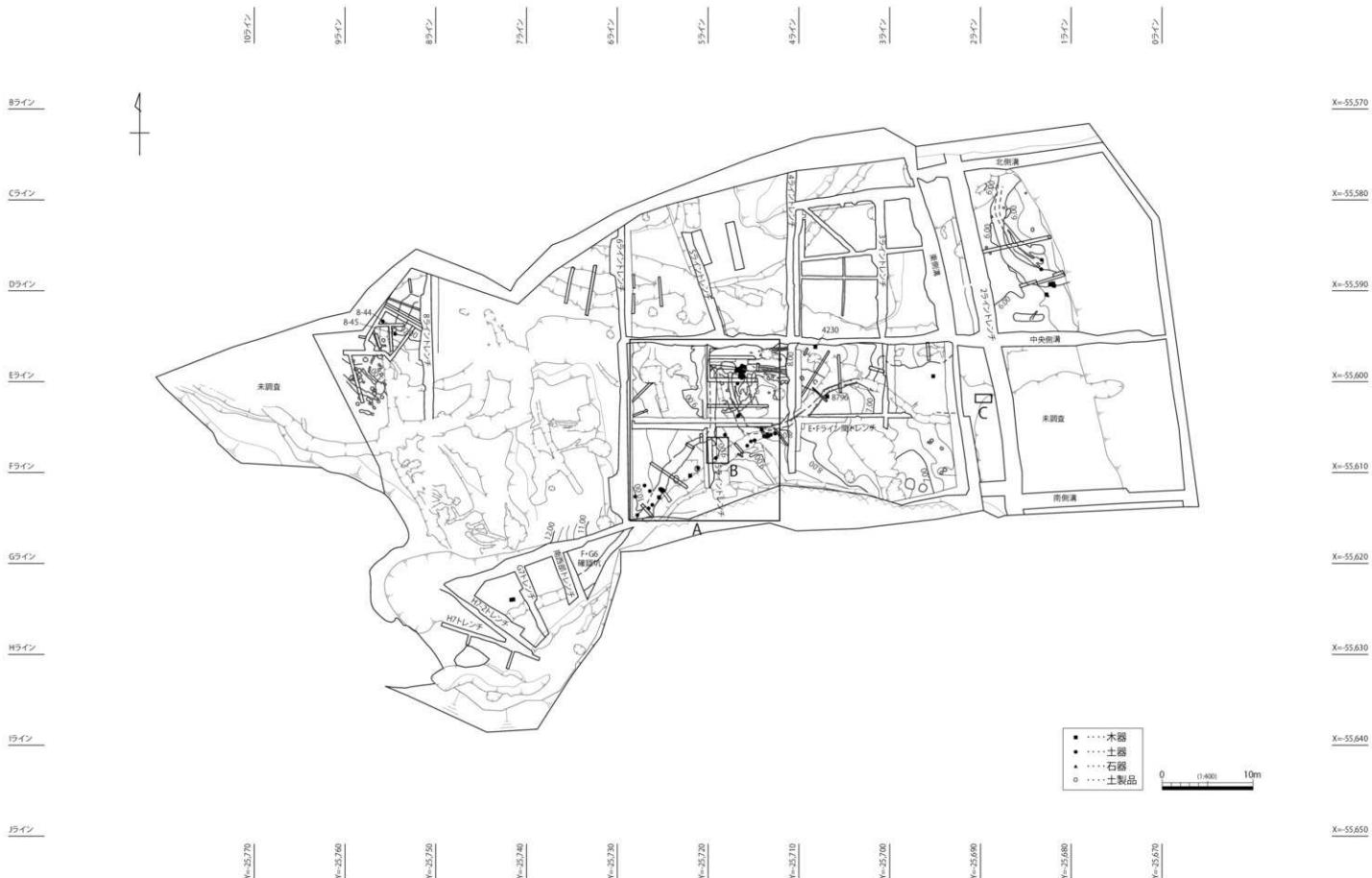
3区B・C1グリッドで検出した。東側の約1/3は近世以降の流路(3S-2)により消滅していた。検出した当初は、円墳の周溝の可能性を考えたが、出土遺物の時期から円墳の可能性は低く、下位遺構面で周堤溝と竪穴住居をセットで検出したことから、周堤溝であると判断した。ただし、周堤溝の内側で竪穴住居は検出できなかった。周堤溝から約2~3m離れて竪穴住居が掘削されたとすると、竪穴住居の大部分は近世以降の流路及び上位の遺構面に攪乱されて失われたと考えられる。

検出延長は約16mで、幅は中央部が1m程度で狭いのに対して、南端と北端にいくにしたがい1.8m程度まで広がる。断面形は概ね逆台形を呈するが、底面の東寄りが2段掘りになって一段深くなる。検出面からの深さは約0.2mである。埋土中からは、建築部材と考えられる長さ1m以上の棒状ないし板状の部材が多数折り重なって出土した。多くは、全体ないし部分的に炭化していた。建築部材以外には槽、膝柄、盾などが出土した。土器の出土量はあまり多くない。縄文土器(8-056)が1点出土したほかは、乙亥正IV~VII期の甕の口縁部(8-050~054)が出土したのみである。

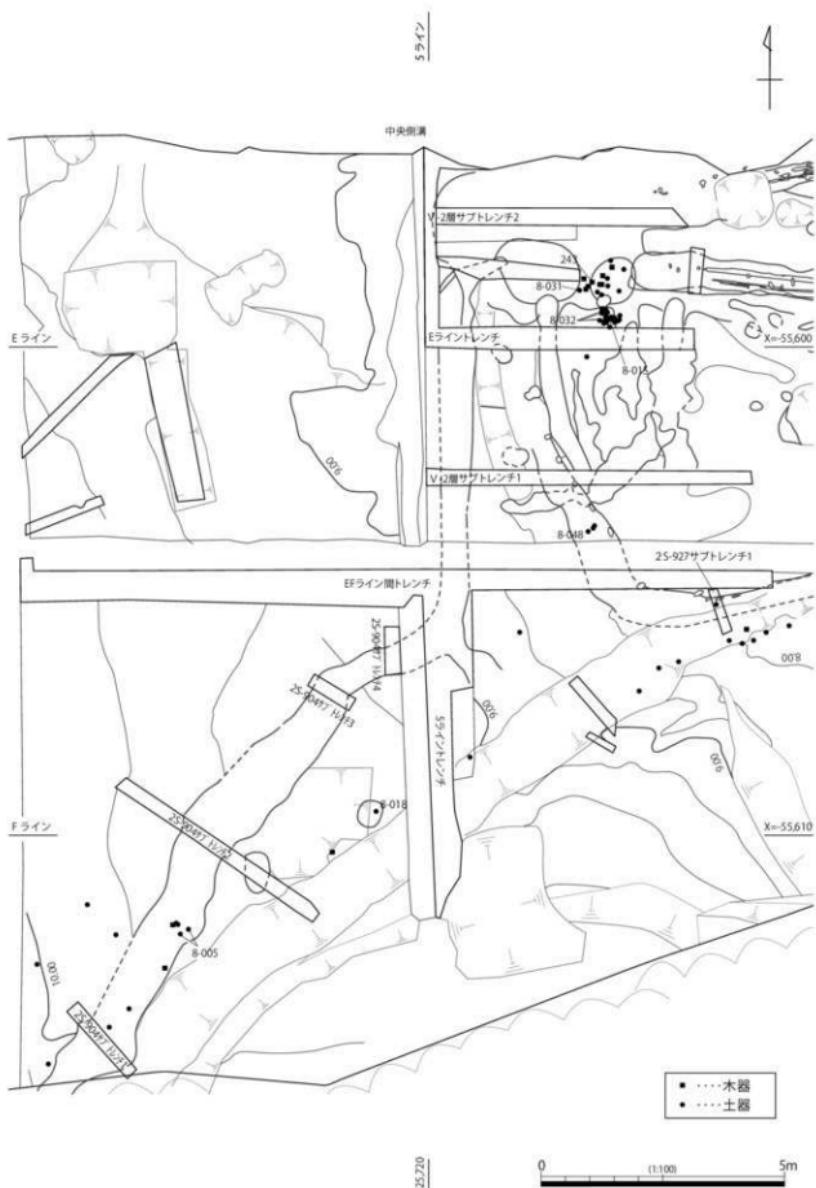
木器の膝柄(6429)は、斧台も柄も欠損しているが、袋状鉄斧を装着したと考えられる。樹種はサカキである。槽は大半を欠損しているが、小口側の立ち上がりと一続きに低い長方形の脚が削り出されている。盾の破片(6364)は、水銀朱が塗られている。ほかには、栓の破片と考えられるもの(6416)や、



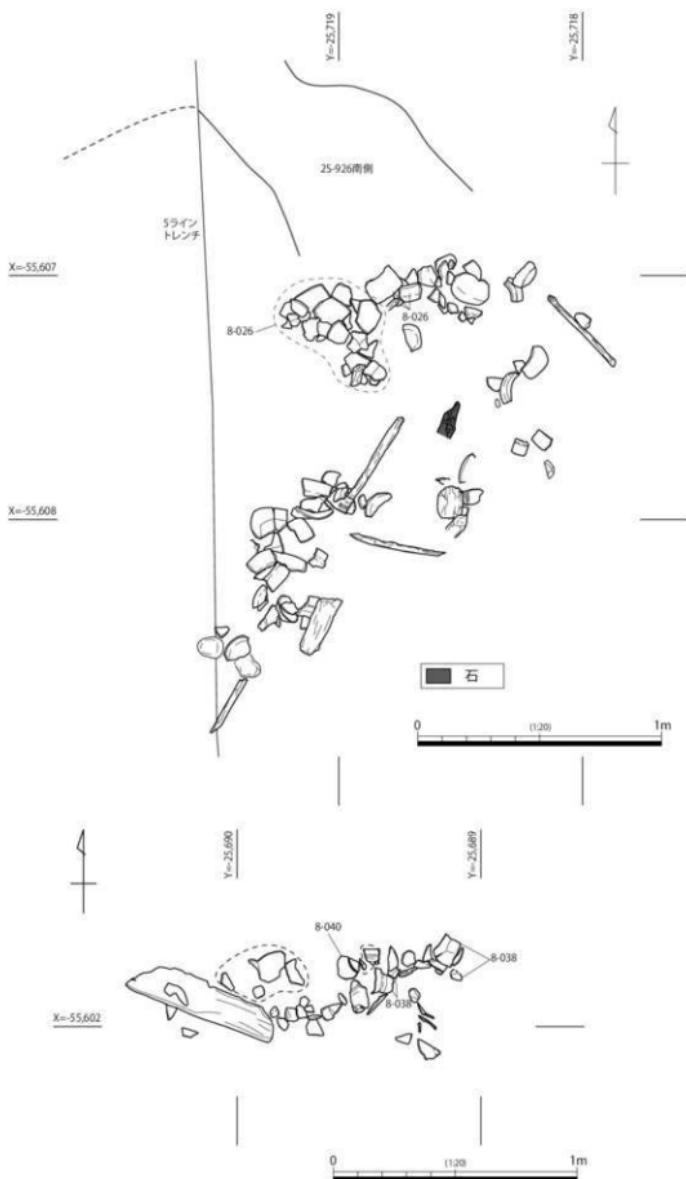
第IV-9-1図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物1



第IV-9-2図 2・3区 第8面 VI層出土遺物分布図

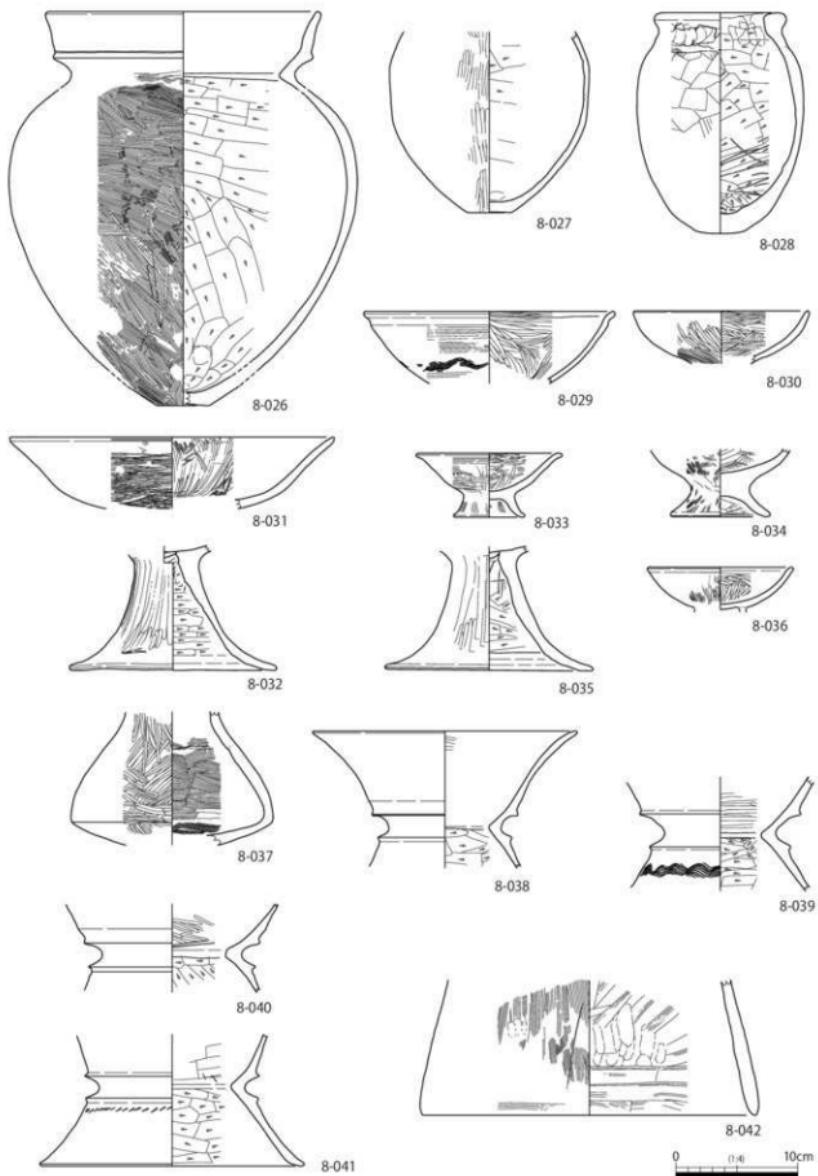


第IV-9-3図 2区 第8面 VI層遺物出土状況拡大図A

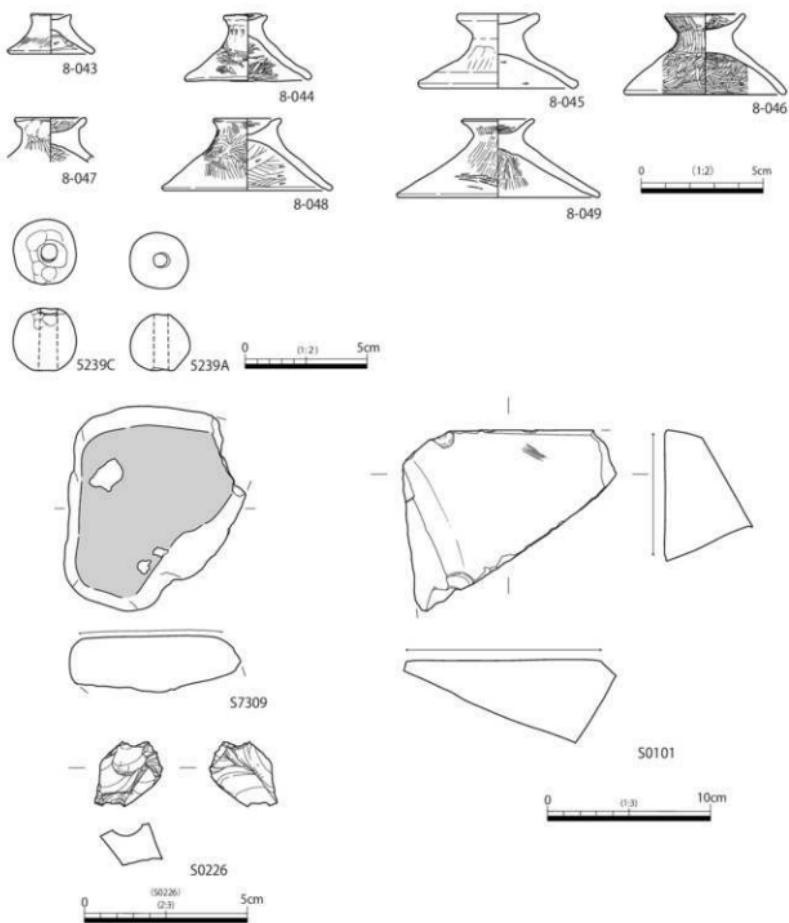


第IV-9-4図 2・3区 第8面 VI層遺物出土状況拡大図B(上)・C(下)

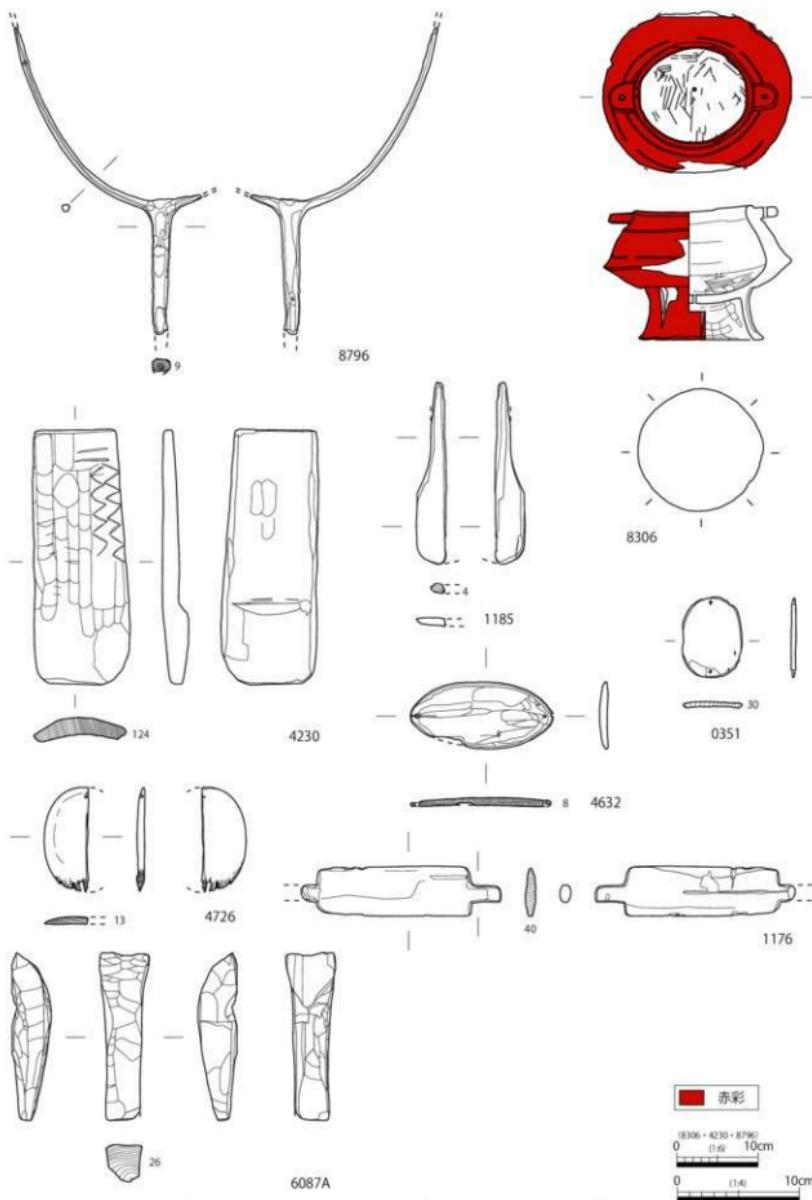
第9節 第8面(VI層下面)の調査



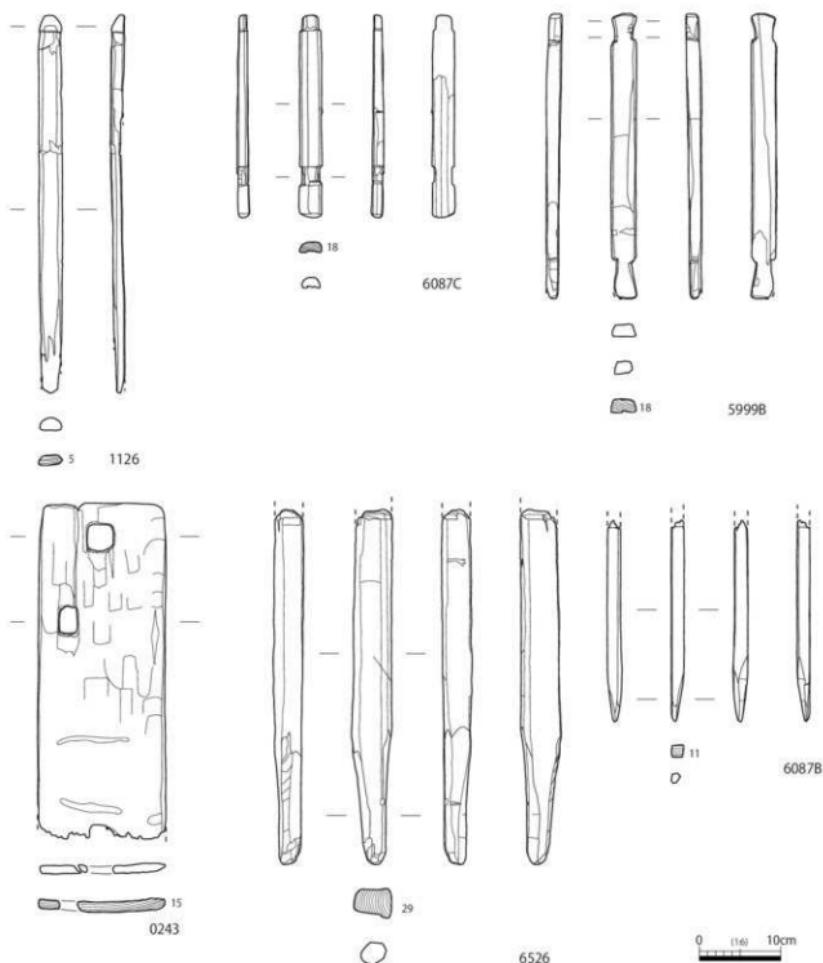
第IV-9-5図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物2



第IV-9-6図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物3



第IV-9-7図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物4

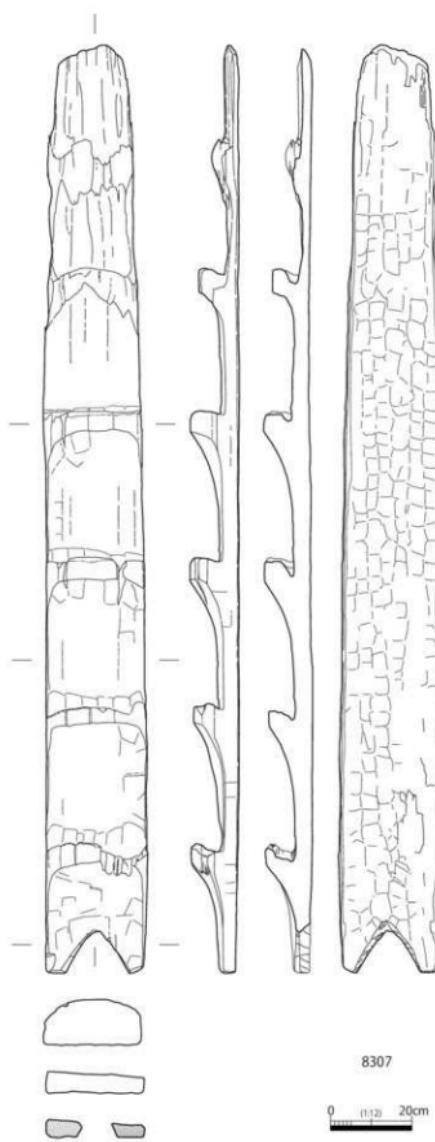


第IV-9-8図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物5

細い断面長方形の棒材の一端を杭状に尖らせたもの(6584、6643)、建築部材と考えられる板材(6641、7193)、柱材(6481)などと考えられる部材が出土した。(馬路)

3 S-103・104(第IV-9-20図)

3区C1グリッドで検出した。大半は3S-70と重複して失われており、南側部分の底面付近だけが残存する。周堤溝の南側半分は、北から3S-103、104、70の順に並び、中央部から北側が重複する。3S-103と104は北西に延びた後、重複するが、切り合い関係は明らかにできなかった。検出延長は



第IV-9-9図 2・3区 第8面 VI層 出土遺物6

3 S-103が約5.6m、104が約6.2mである。断面形はいずれも逆台形で、南端は浅い皿状を呈する。深さはいずれも数cmしかない。埋土中からは遺物はほとんど出土しなかったが、3 S-103の埋土中から出土した甕の口縁端部片(8-057)を図化した。乙亥正VII期頃のものと考えられる(馬路)。

柱穴

柱穴は、2・3区において、柱が残存するものと土層断面で柱痕を確認できたものを合わせて3基確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。

2 S-1078(第IV-9-21図)

D3グリッドとE3グリッドの境界、4ライントレンチの手前で検出した。2 S-901と重複しており、2 S-901掘削途中で礎板を検出した。本来は、2 S-901を切っていたと考えられる。平面形は南北に細長い楕円形で、残存部は長径約0.47m、短径0.38m、深さ0.18mある。断面形は、逆台形で、埋土は3層に分層できる。このうち下層に、下段の礎板となる厚手の材が4つ埋設されていた。何らかの部材を分割した転用材の端部を重ねて設置したために、上面は凹凸が生じており、その凹凸を均す目的で1層が入れられたと考えられる。上段の礎板は、そこで形成された平坦面に、丸太材の分割面を下に長軸を南北にして平行に並べられていた。この上段の礎板は、割れ面同士で接合するので、本来は直径約0.13mの1本の丸太材だったと考えられる。接合した材(2371・2372)は、芯去材で柱等の建築材として利用されていたものを短く分割してさらに、半裁して礎板に転用したと考えられる。

埋土中から礎板のほかには、乙亥正V期

の土器小片が出土したのみである(馬路)。

2 S-1254(第IV-9-21図)

E 3グリッドで検出した柱穴で、2 S-927の南岸の護岸に接して検出した。2 S-927の横板を留める杭の可能性も考えたが、他の杭とは規模も形態も異なること、地中部の深さも異なることから別遺構と判断した。上半分は、2 S-927に切られて埋土は残存せず、下半のみ調査した。平面形態は、正な円形で、直径は約0.24m、深さは0.24mである。断面形はコップ形で、柱は概ね掘方の中央部に設置されており、柱の末端部と掘方の底面はほぼ接する。埋土中から、柱以外に遺物は出土しなかった。柱(4827)は径約17cmで、芯持ち丸太材の外面全体を丁寧に加工している。(馬路)

土坑

土坑は、2・3区において合計67基を確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。これらの内の主だったものについてのみ、個別に報告する。

2 S-886、周辺の土坑(第IV-9-22、27~30図)

E 8グリッドに位置する貯蔵穴状の土坑2 S-886及び、周辺に分布する小土坑を報告する。

2 S-886の上層埋土は、2 S-1002・1003土坑(第8面の遺構)に切られる。長径1.45m、短径1.16m、深さ0.53mの規模で、平面は正な円形、断面は袋状を呈する。底面直上から甕(8-058、059)と台石状の礫が出土した。甕(8-059)は器形の7割程度、甕(8-058)は器形の半分程度が残存するものである。礫には使用痕は認められない。埋土中からは、甕(8-060、061)、高坏(8-063、064)、蓋(8-062)が出土した。甕の形状からみて、乙亥正VII期頃の遺構と推定される。

2 S-886周辺に分布する柱穴状の小土坑は、本来土坑同士や溝(第IV-9-81図)とのセット関係による構造物が存在したと思われるが、具体的な関係性は不明である。2 S-860から乙亥正VII~VIII期頃の特徴をもつ甕(8-074、075)、2 S-876から乙亥正IV~V期頃の甕(8-076)が出土した。(岡野)

2 S-903(第IV-9-23図)

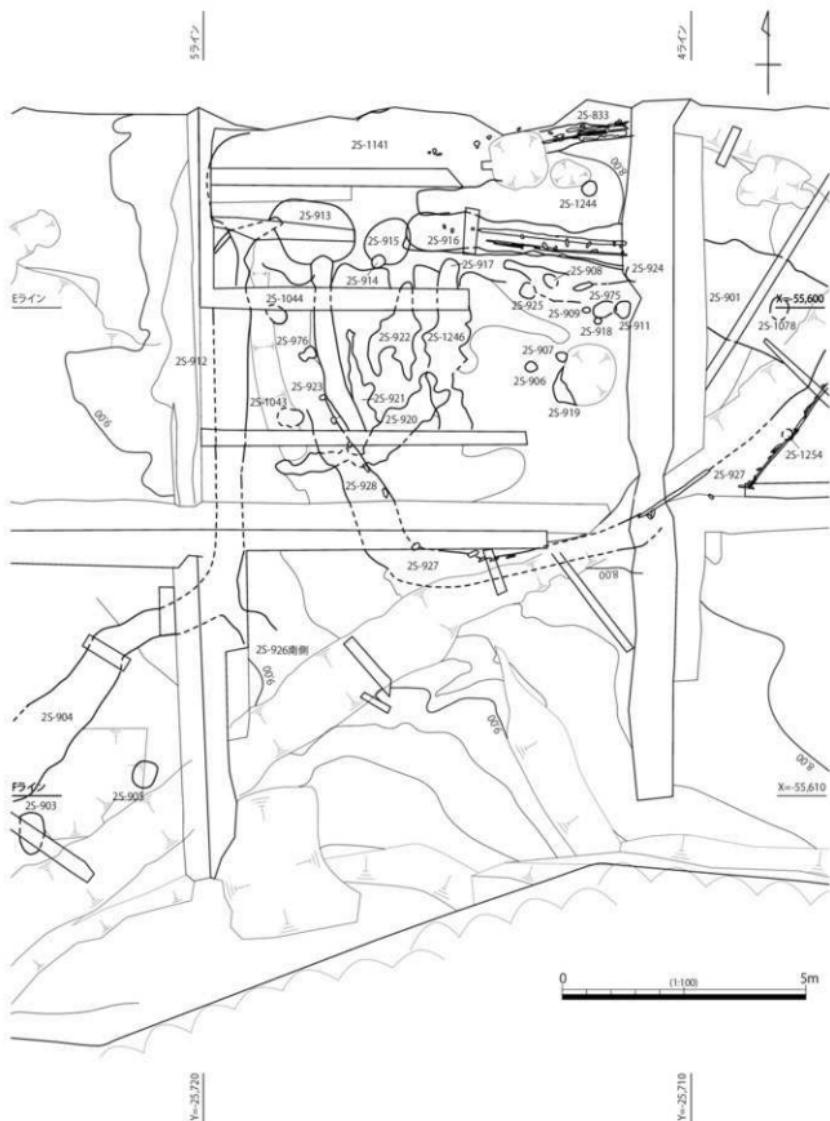
F 5グリッドで検出した。平面形は、南北に細長い梢円形で、断面は楕円形である。規模は、長径0.85m、短径0.51m、深さ0.19mである。埋土中には複数の木器が底面に突き刺された状態で直立して出土した。底面に掘方は確認できなかったので、突き刺したものと考えられる。これらの内、3956、3958の2点は、柱を縦に2分割したもので、分割面を向い合せにして南側が少し開いたハの字状に土坑の北端に設置されていた。この分割材のすぐ南側には、幅の狭い板材2点が突き立てられており、これらの4点の内側に直径0.2m程度の空間が形成されており、この部分に柱等が建てられていた可能性が考えられる。(馬路)

2 S-905(第IV-9-23図)

E 5グリッドで検出した。平面形は南北に細長い梢円形で、断面形は隅丸三角形で、底面南側が低く、北側に向かって緩やかに立ち上がる。規模は、長径0.58m、短径0.52m、深さ0.21mである。埋土中からは、甕の口縁部から胴部にかけての破片がまとめて出土した。8-065、066は乙亥正VII期の

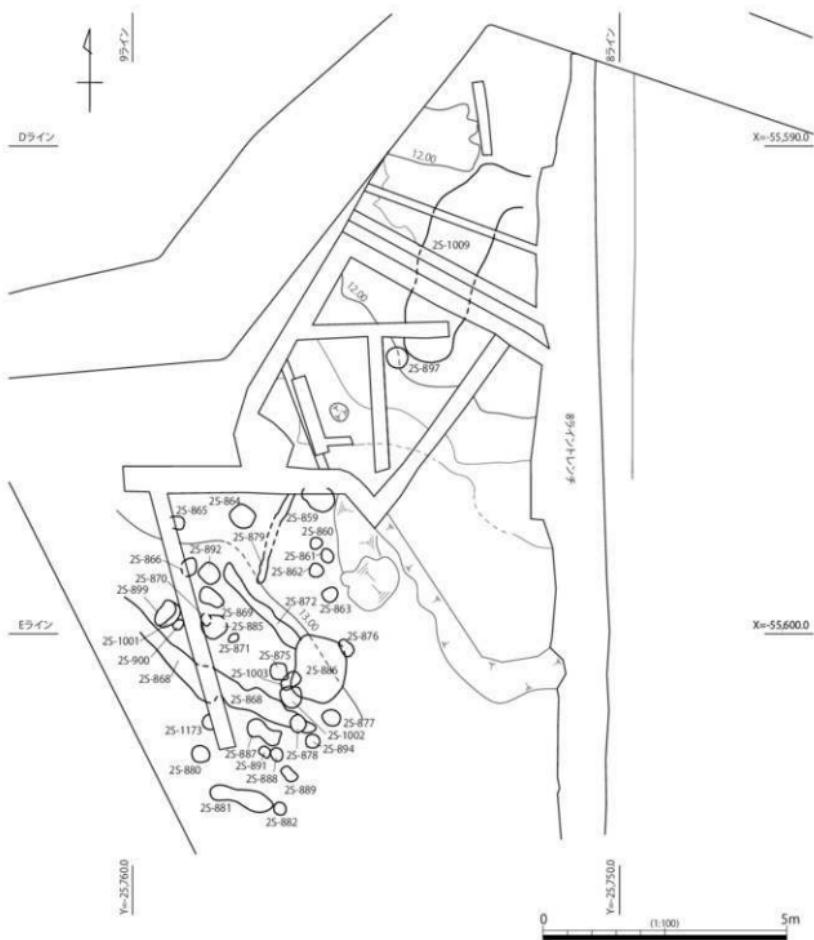


第IV-9-10図 2・3区 第8面 遺構配置図

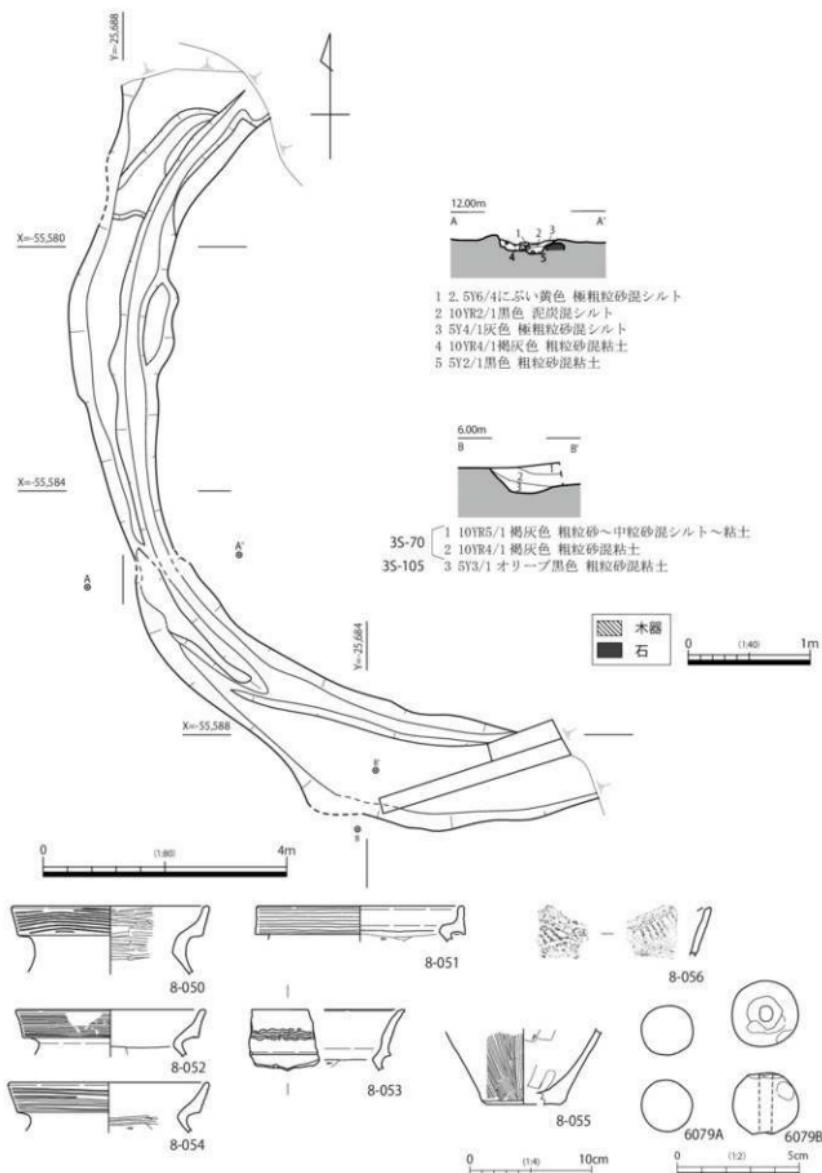


第IV-9-11図 2区 第8面 遺構配置図拡大図A

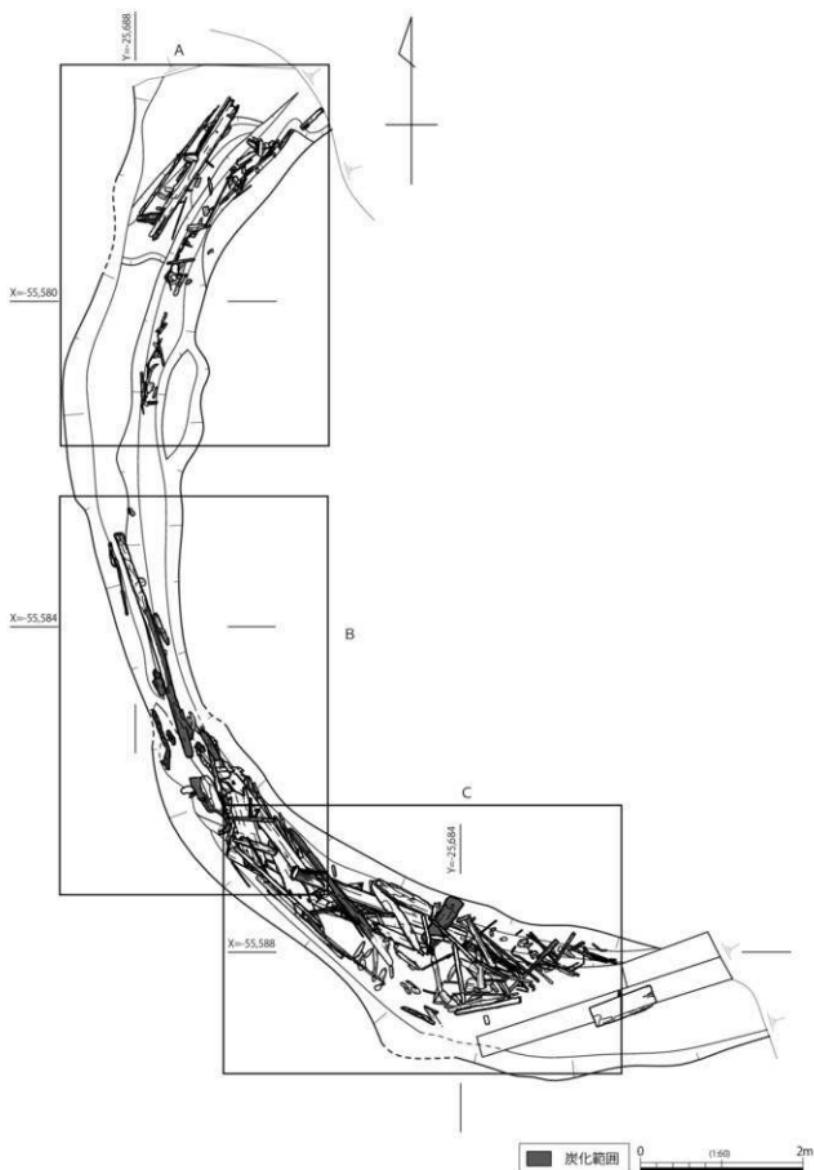
第IV章 2・3区の調査成果



第IV-9-12図 2区 第8面 遺構配置図拡大図B

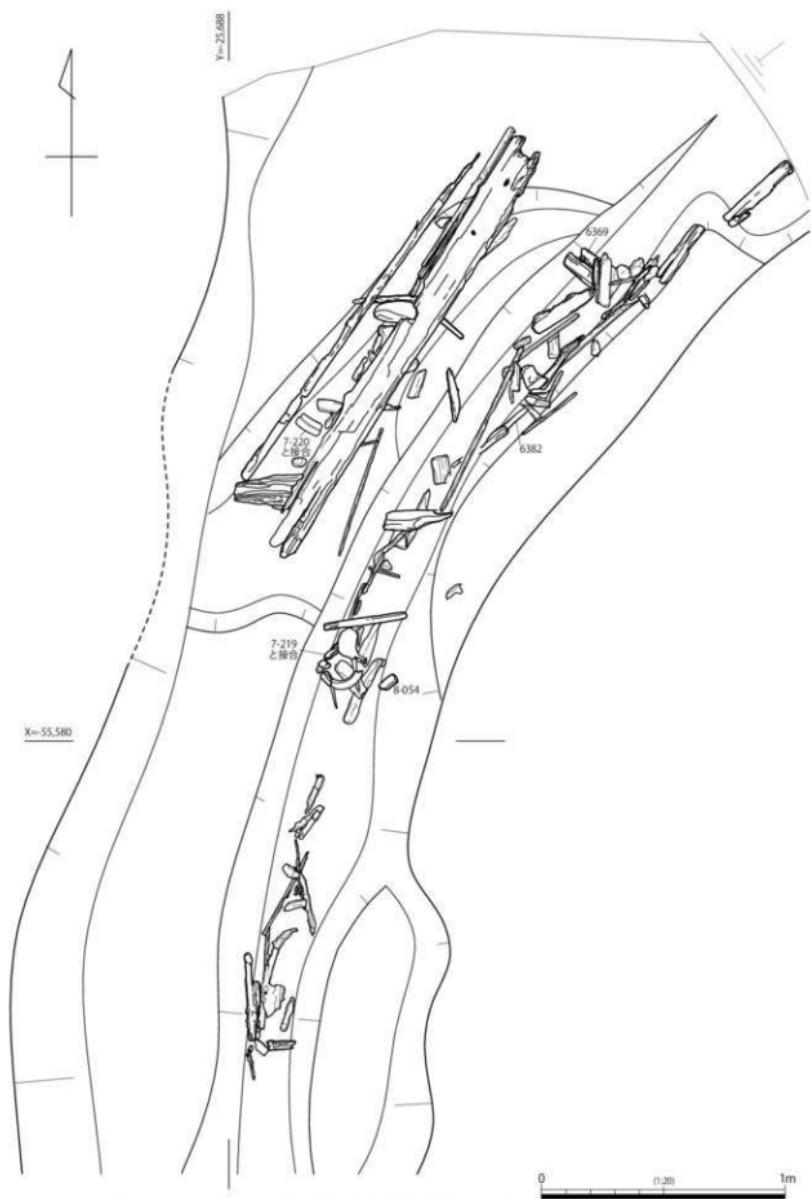


第IV-9-13図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 平・断面図及び出土遺物 1

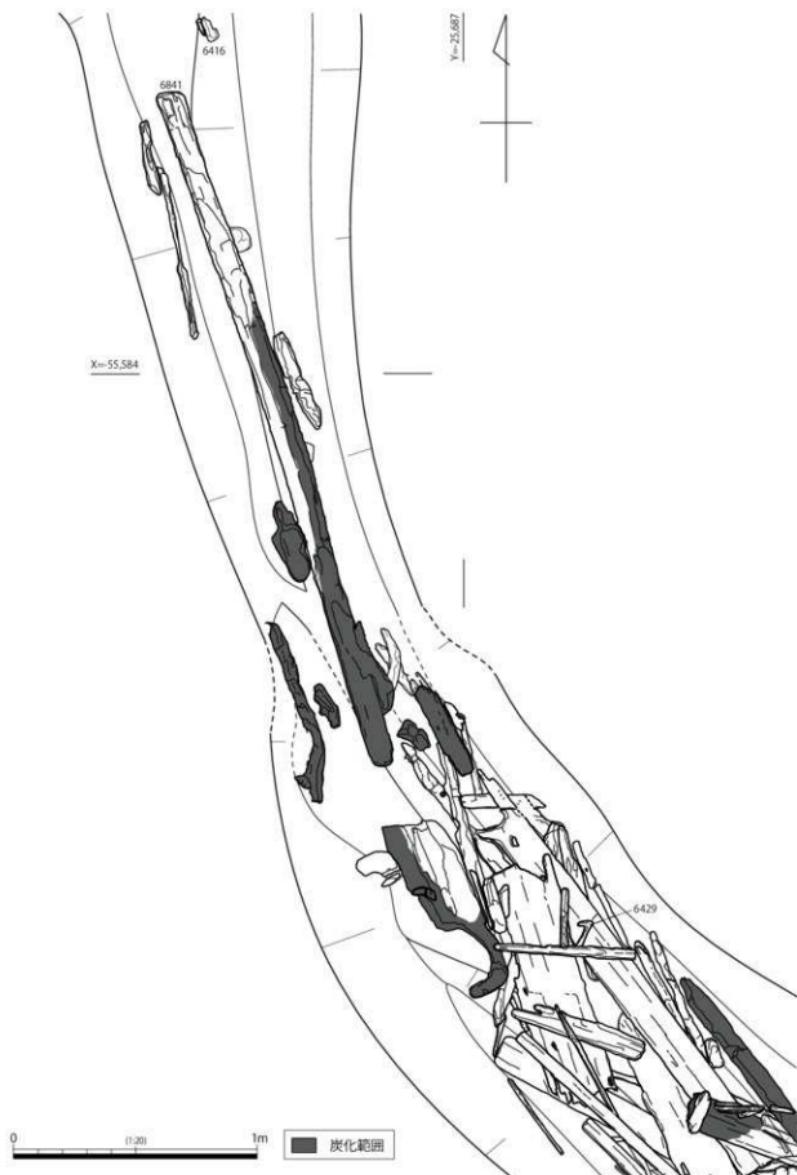


第IV-9-14図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況図

第9節 第8面(VI層下面)の調査

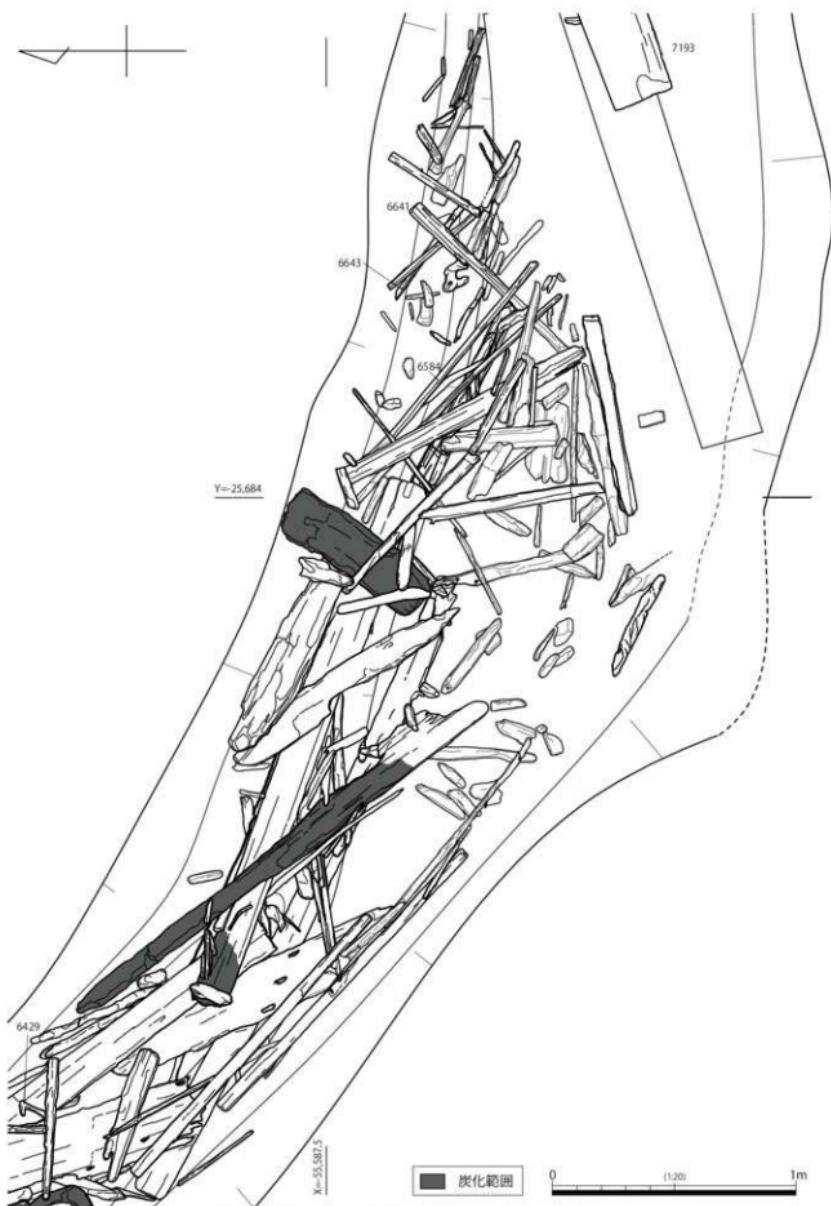


第IV-9-15図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図A

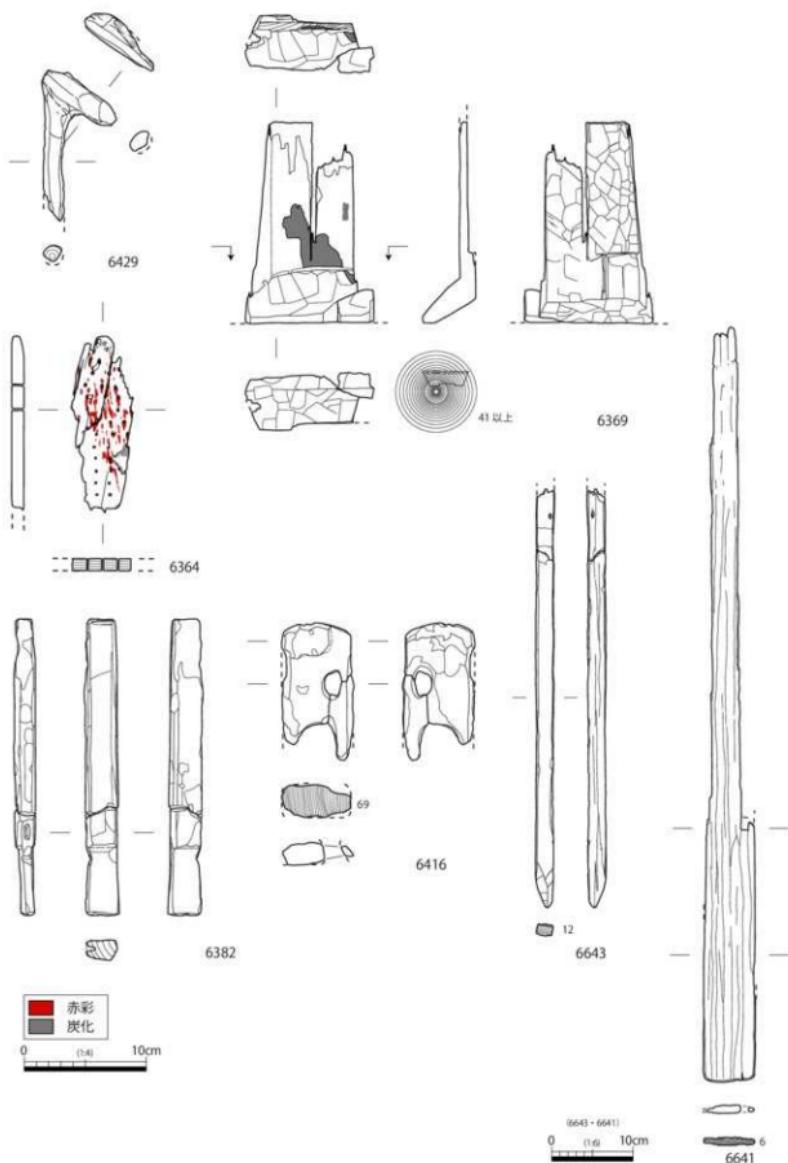


第IV-9-16図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図B

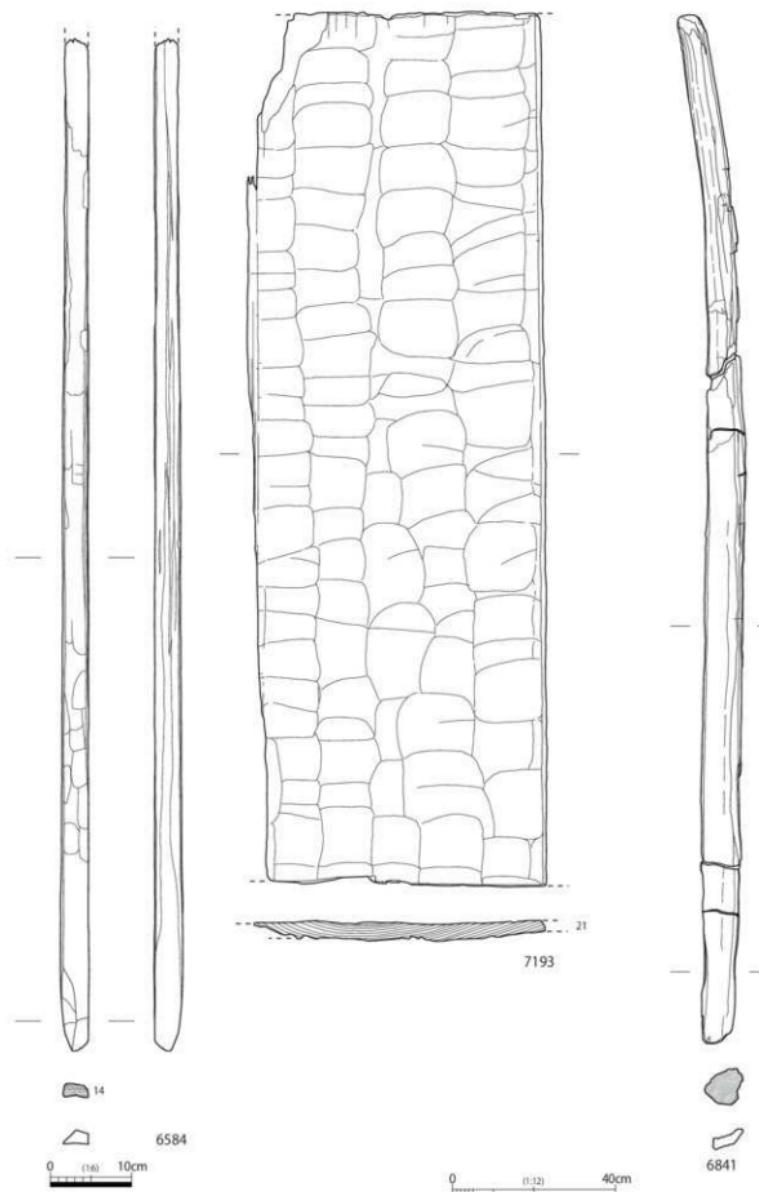
第9節 第8面(VI層下面)の調査



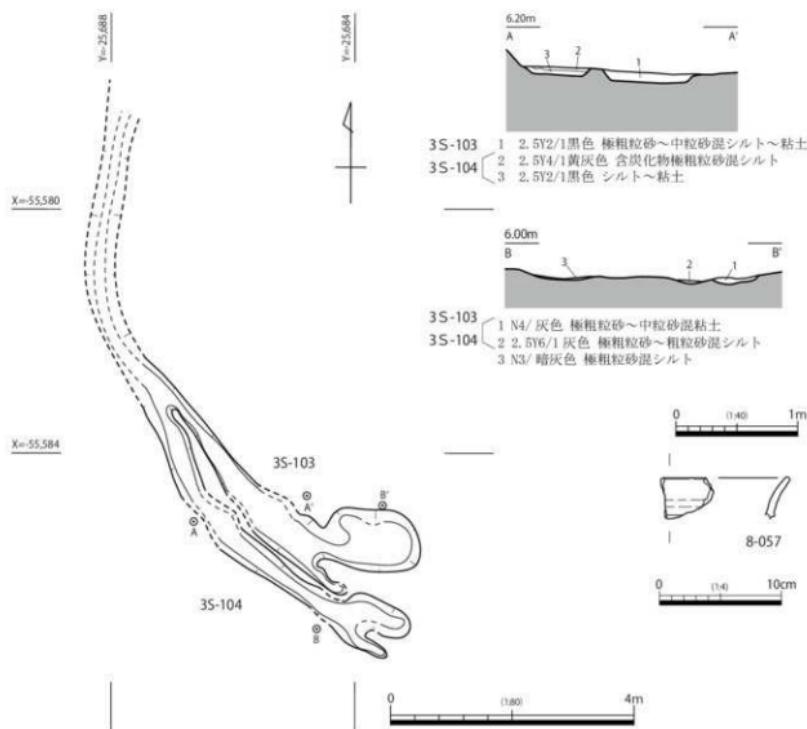
第IV-9-17図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 遺物出土状況拡大図C



第IV-9-18図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 出土遺物2



第IV-9-19図 3区 第8面 周堤溝(3S-70) 出土遺物3



第IV-9-20図 3区 第8面 周堤溝(3S-103、104) 平・断面図

ものと考えられる。(馬路)

2 S-913(第IV-9-24図)

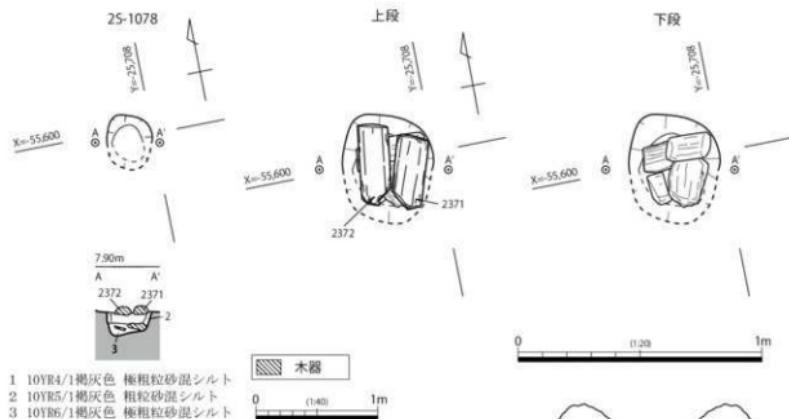
D 4グリッドで検出した。溝(2 S-912)に切られる。平面形は東西に細長い楕円形で、断面形は皿形である。規模は、長径1.5m、短径1.4m、深さ0.28mである。埋土中から乙亥正VII期頃の甕の口縁部片(8-067)が出土した。(馬路)

2 S-915(第IV-9-24図)

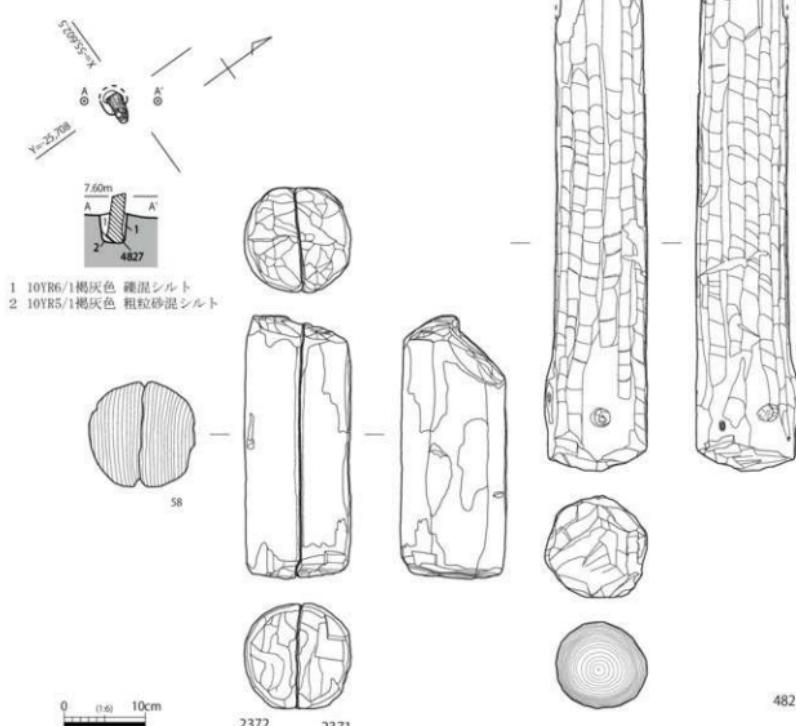
D 4グリッドで検出した。土坑(2 S-914)、溝(2 S-916)の西端と重複し、2 S-916よりも新しく、2 S-914よりも古い。平面形は北東側の幅が狭くなる卵形で、断面形は皿形である。埋土中から乙亥正VII期頃の甕の口縁部片(8-068、069)が出土した。(馬路)

2 S-1144(第IV-9-24図)

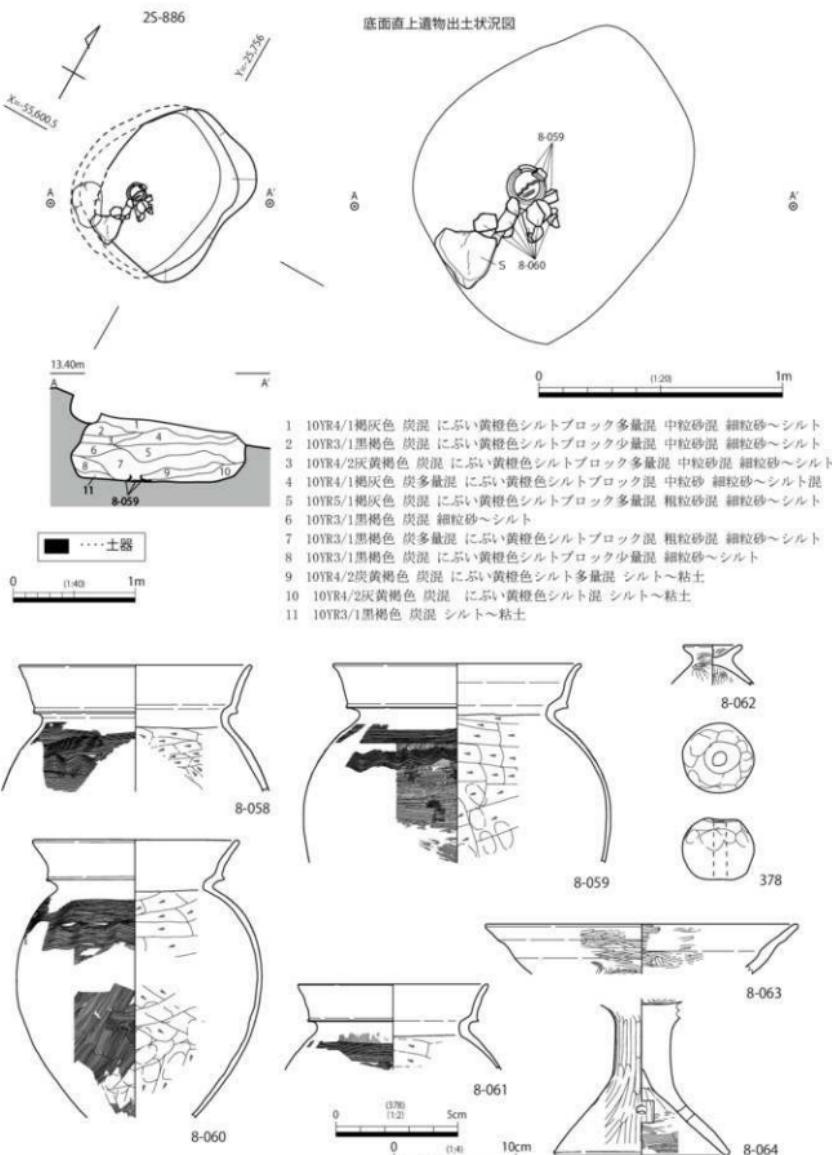
D 2グリッドで、第11面調査時に検出したが、出土した土器の時期が乙亥正VII期ごろと考えられる



2S-1254

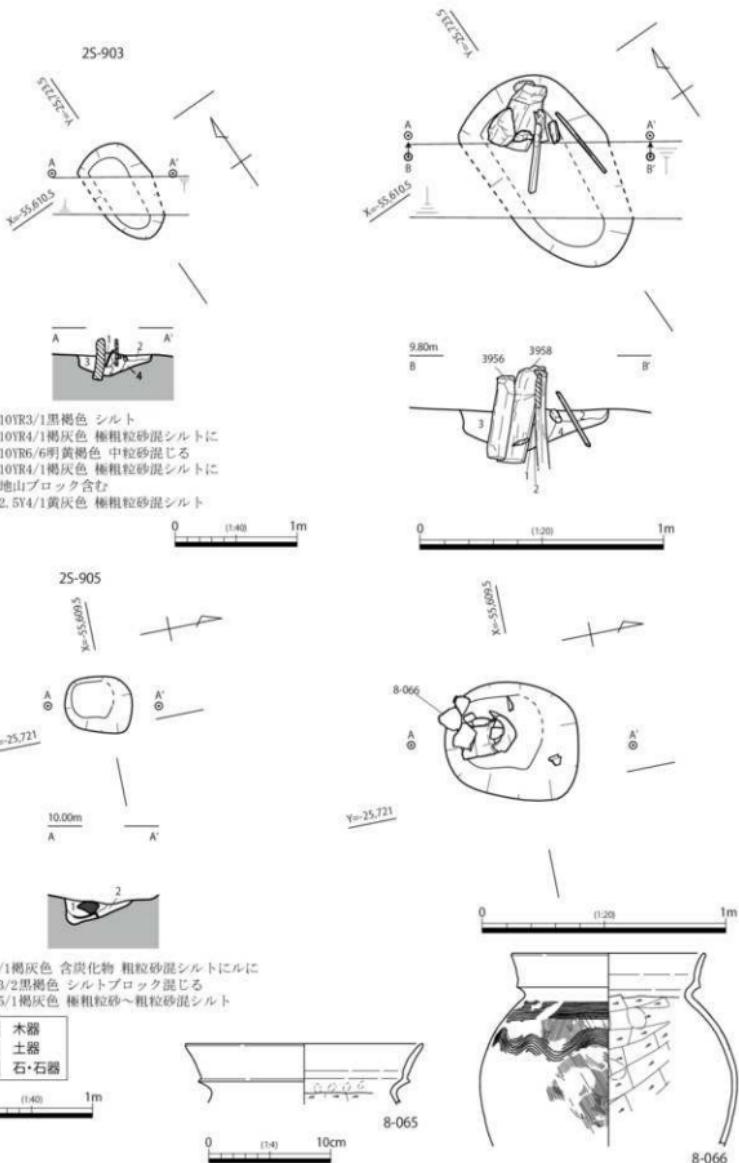


第IV-9-21図 2区 第8面 柱穴(2S-1078、1254) 平・断面図及び出土遺物

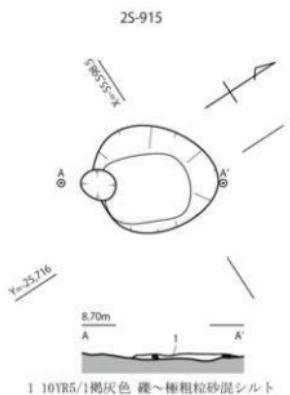
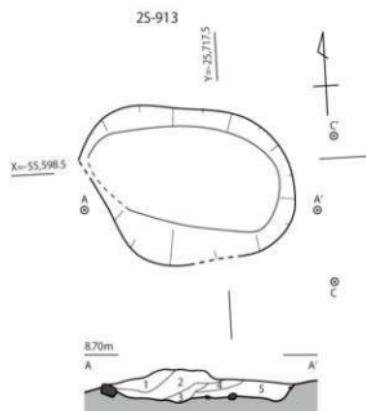


第IV-9-22図 2区 第8面 土坑(2 S-886)

平・断面図、底面直上出土遺物状況図及び出土遺物

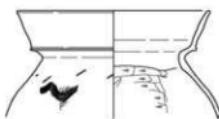
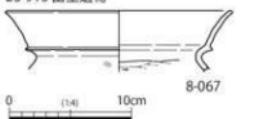


第IV-9-23図 2区 第8面 土坑(2S-903、905) 平・断面図及び出土遺物

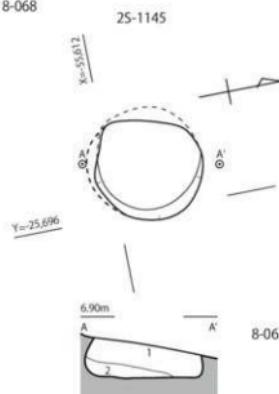
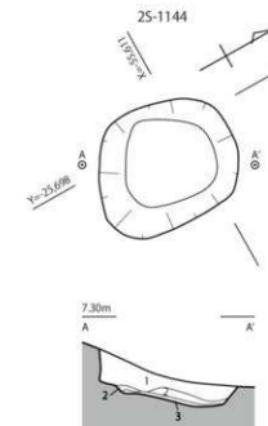
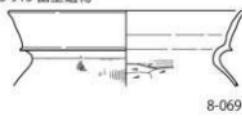


- 1 10YR6/3にぶい黄褐色 含巨礫 粘混シルト
- 2 53/ 暗色 含巨礫 粘混シルト
- 3 10YR6/4にぶい黄褐色 含巨礫 粘～極粗粒砂混シルトに
10YR5/1 暗灰色 シルトがラミナ状に入る
- 4 10YR4/1 暗灰色 粘～極粗粒砂混シルト
- 5 10YR3/1 黒褐色 粘～極粗粒砂混シルトに
10YR8/1灰白色 極粗粒砂混シルトブロックを含む

2S-913 出土遺物

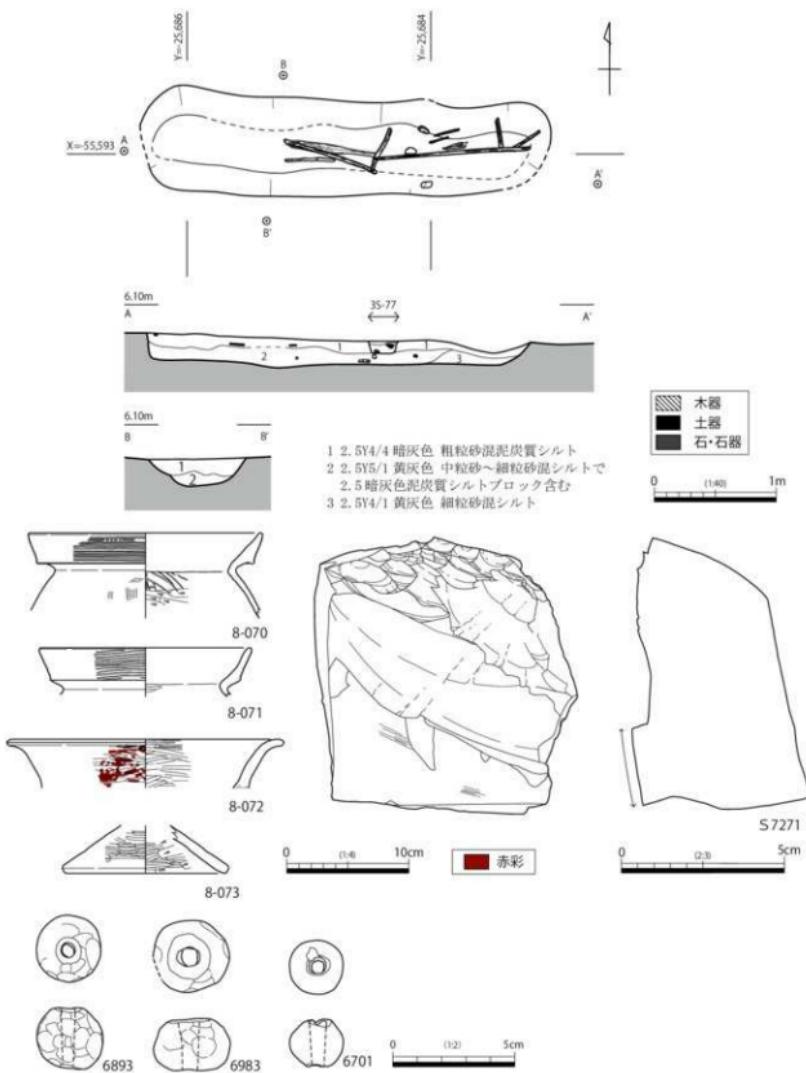


2S-915 出土遺物

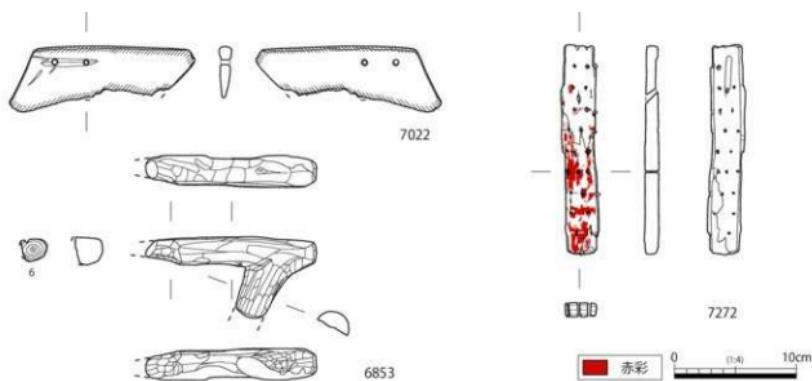


0 (1:40) 1m

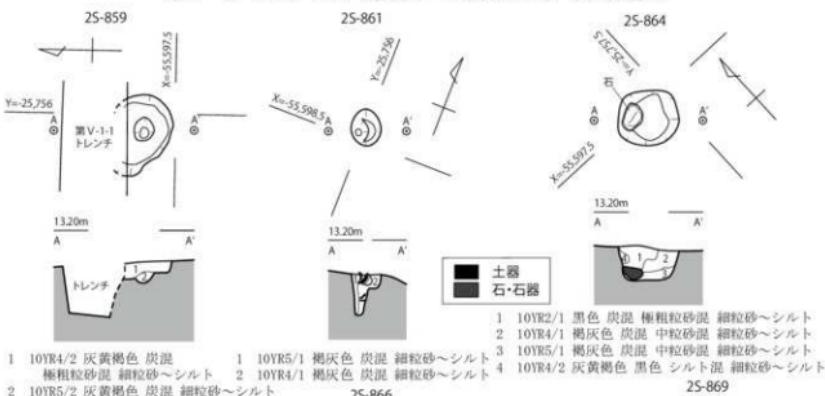
第IV-9-24図 2区 第8面 土坑(2S-913、915、1144、1145) 平・断面図及び出土遺物



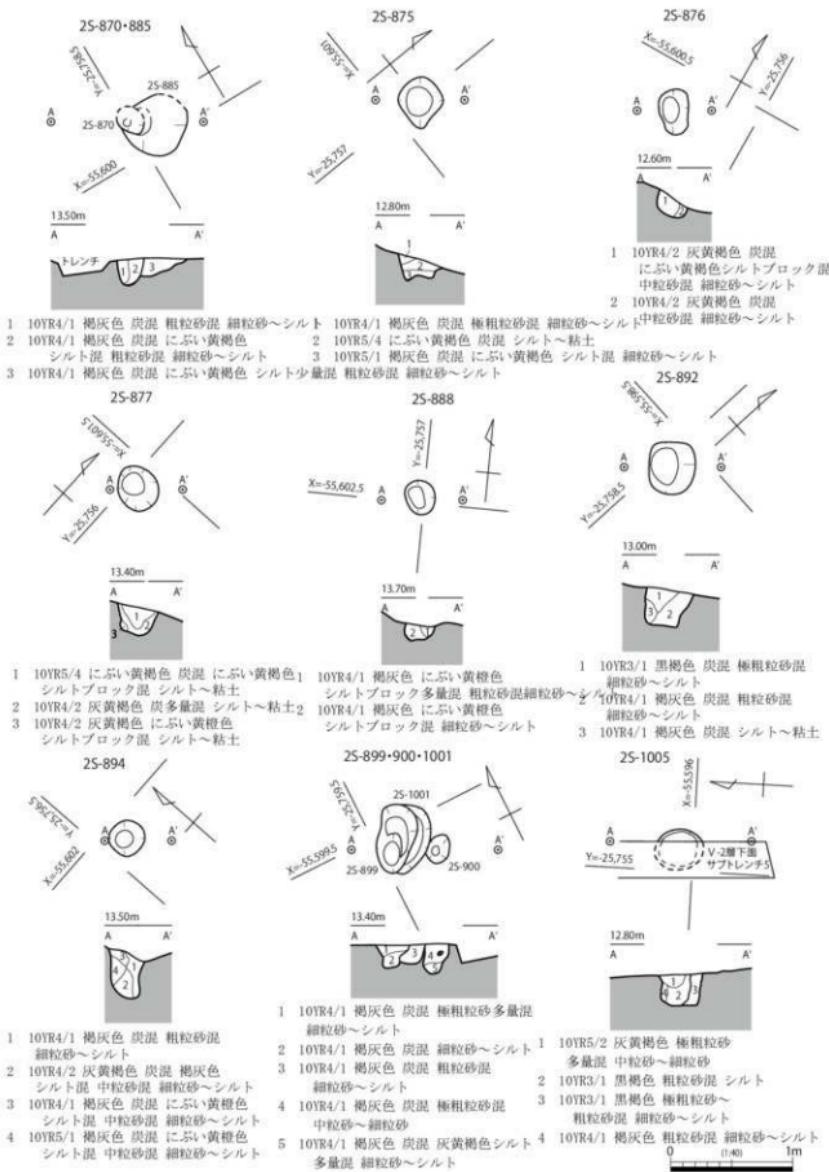
第IV-9-25図 3区 第8面 土坑(3S-76) 平・断面図及び出土遺物 1



第IV-9-26図 3区 第8面 土坑(3 S-76) 出土遺物2

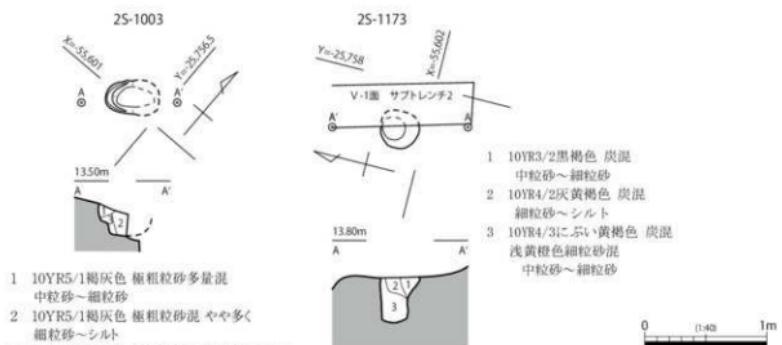


第IV-9-27図 2区 第8面 土坑(2S-859、861、864、865、866、869) 平・断面図

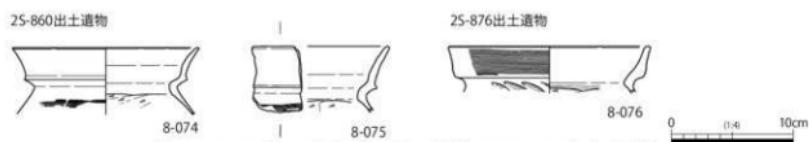


第IV-9-28図 2区 第8面 土坑(2 S-870・885、875、876、877、888、892、894、899・900・

1001、1005) 平・断面図



第IV-9-29図 2区 第8面 土坑(2S-1003、1173) 平・断面図



第IV-9-30図 2区 第8面 土坑(2S-860、876) 出土遺物

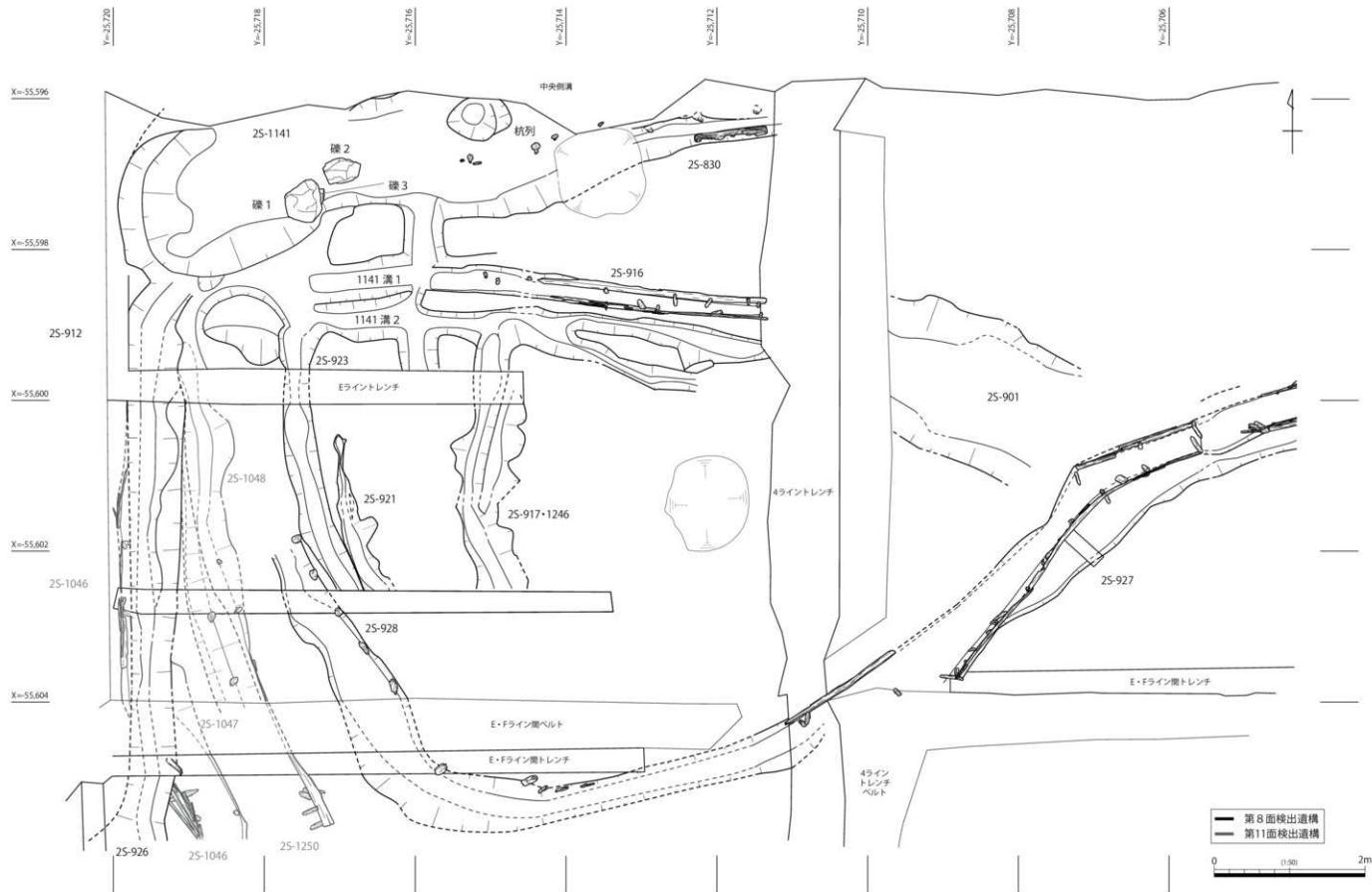
ため、第8面に帰属すると判断した。平面形は歪な隅丸方形で、断面形は逆台形だが、底面が北側に向かって傾斜している。規模は、長軸1.14m、短軸1.06m、深さ0.47mである。土器は小片のため図化できなかった。(馬路)

2 S-1145(第IV-9-24図)

D 2グリッドで、第11面調査時に検出した。埋土中から出土した遺物は、乙亥正V期のものだが、2 S-1144に近接して同一面で検出したことから、第8面に帰属すると判断した。平面形は円形で、断面形は袋状である。いわゆる、袋状土坑と考えられる。規模は、長径0.87m、短径0.8、深さ0.31mである。(馬路)

3 S-76(第IV-9-25図)

D 1グリッドで検出した。東側は、溝(3 S-77)と重複し、溝よりも古い。平面形は東西に長い隅丸長方形で、長軸方向の断面形は逆台形で、東側は底面から緩やかに外形して立ち上がり、西側は急角度で立ち上がる。短軸方向の断面形は、椀形である。規模は、長軸3.36m、短軸0.8m、深さ0.3mである。埋土中からは、主に乙亥正V期の壺の口縁部片(8-070、071)が出土した他、乙亥正VII期頃と思われる器台受け部の破片(8-072)が出土した。木器は、棒状品などが多く出土したが、袋状鉄斧を装着する膝柄(6853)、木包丁(7022)、水銀朱が赤彩された盾の破片(7272)を図化した。(馬路)



第IV-9-31図 2区 第8面 D・E 4グリッド構造群 平面図

D・E 4 グリッド遺構群(第IV-9-31図)

D 4 グリッドで検出した貯水池と考えられる大型土坑(2 S-1141)と関連する可能性が高い遺構群をまとめて報告する。調査当初は、それぞれ独立した個別遺構として調査を行っていたが、2 S-1141の調査が進むにつれて、D・E 4 グリッドで検出した溝及びそれらと接続する溝の多くが、2 S-1141と繋がっており、一体的な構造を有していた可能性が高いと考えた。E 4 グリッドの南北方向の溝5条(2 S-912、917・1246、921、923、928)の内3条は、北端が2 S-1141に接続し、D 4 グリッドの東西方向の溝3条(2 S-830、901、916)の内2条は、西端が2 S-1141に接続する。接続部での2 S-1141との切り合い関係が明確でない溝が多いが、2 S-923、917・1246は黒褐色シルトの埋土で埋没し、2 S-1141は砂層で埋没していることから、2 S-1141から流れ出る溝にあたる2 S-923などは、機能しなくなった後、一定期間が経過してから埋没したと考えられる。2 S-1141よりも最終的な埋没は遅かったと考えられる。南北方向の溝の流れは、底面の標高から2 S-912が南から北へ流れる以外は北から南へ流れたと考えられる。東西方向の溝は、西から東へ流れたと考えられる。

全体としての構造は、2区南西部の谷奥からの湧水が、溝2 S-904を北東に流れて、2 S-926に入つて北流し、2 S-1141に流れ込む。2 S-1141に溜まった水は、再び2 S-928や923などの溝を通って南流し、E・Fライン間トレントレンチ付近で屈曲して東向きに流下する。又は、2 S-1141の東側に接続する2 S-830と916を通り、2 S-901に接続して東に流れる。2 S-901は2 S-927へと繋がると考えられる。

2 S-1141(第IV-9-32～38図)

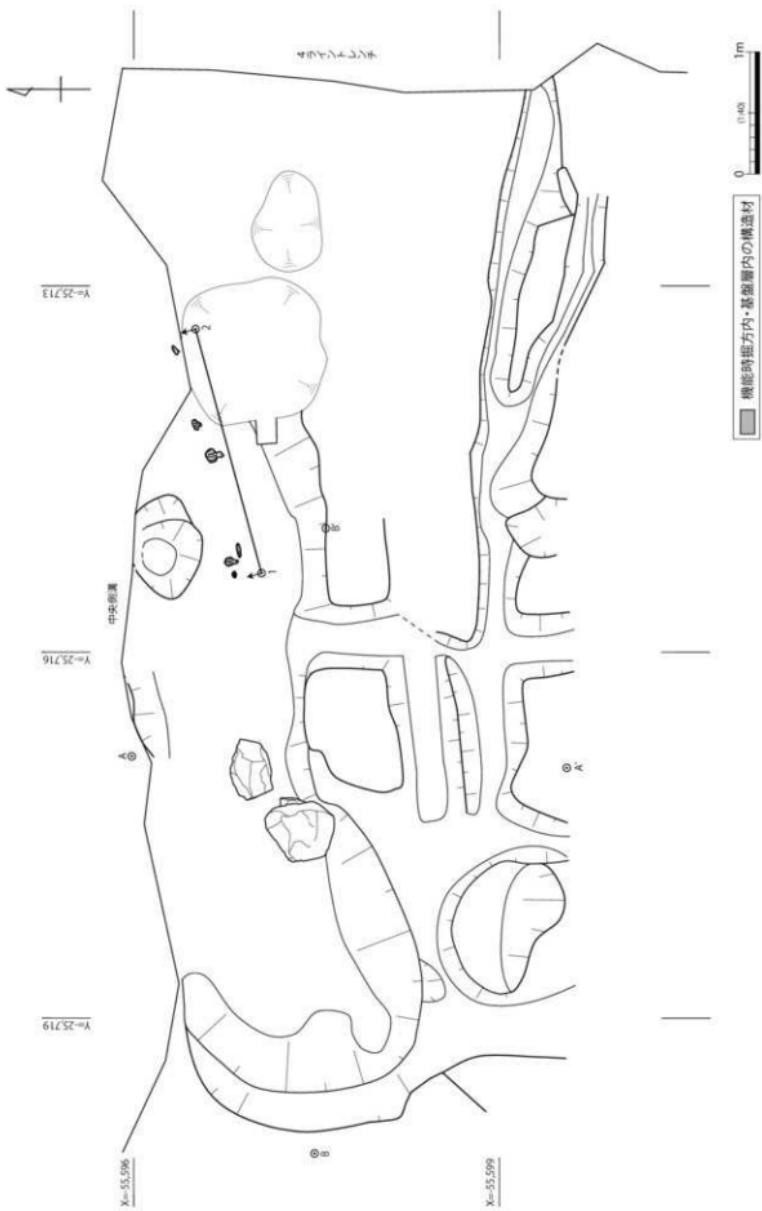
D 4 グリッドで検出した大型の土坑で、上述したように複数の溝が繋がる構造を有することから貯水池として機能したと考えられる。この貯水池が設置された場所は、1区から東向きに張り出した丘陵が緩やかに下った微高地にあたり、南北両側は谷地形で落ち込んでいる。

2 S-1141として調査を行った遺構は、土坑1基、溝2条、杭列1条、礫3個で構成され、複数あるものは、1141溝1・2、礫1～3と番号を付した。

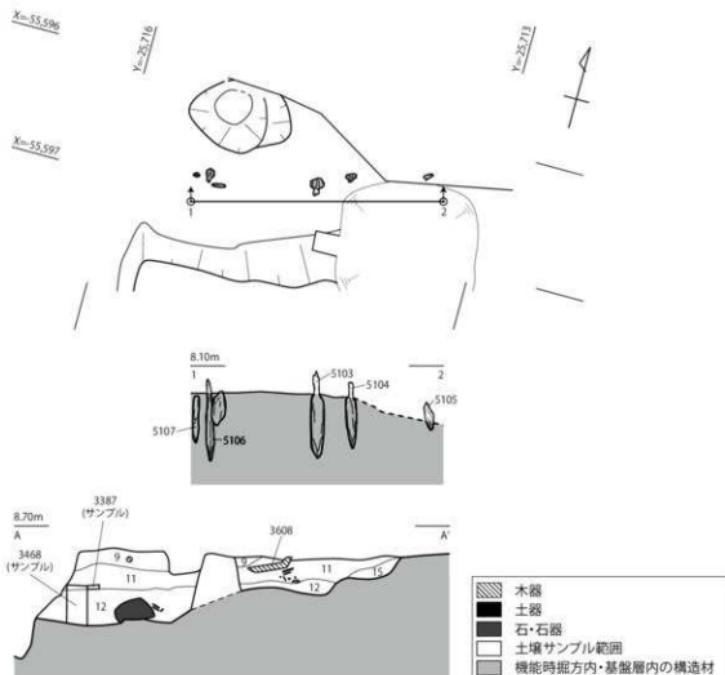
土坑部分の平面形は、隅丸長方形で、南側は幅約1.5m、深さ約0.3mのテラスを形成し、南北方向の溝に繋がる。西側は、南側からのテラスが幅約0.3mと狭まりながら繋がる。北側は、中央側溝により消滅しているが、中央側溝の断面を見る限り北側には広がらないから、北端は中央側溝内で収束していたと考えられる。規模は、東西約4.2m、南北は北端を推測すると4 m程度、深さ約0.6mと考えられる。

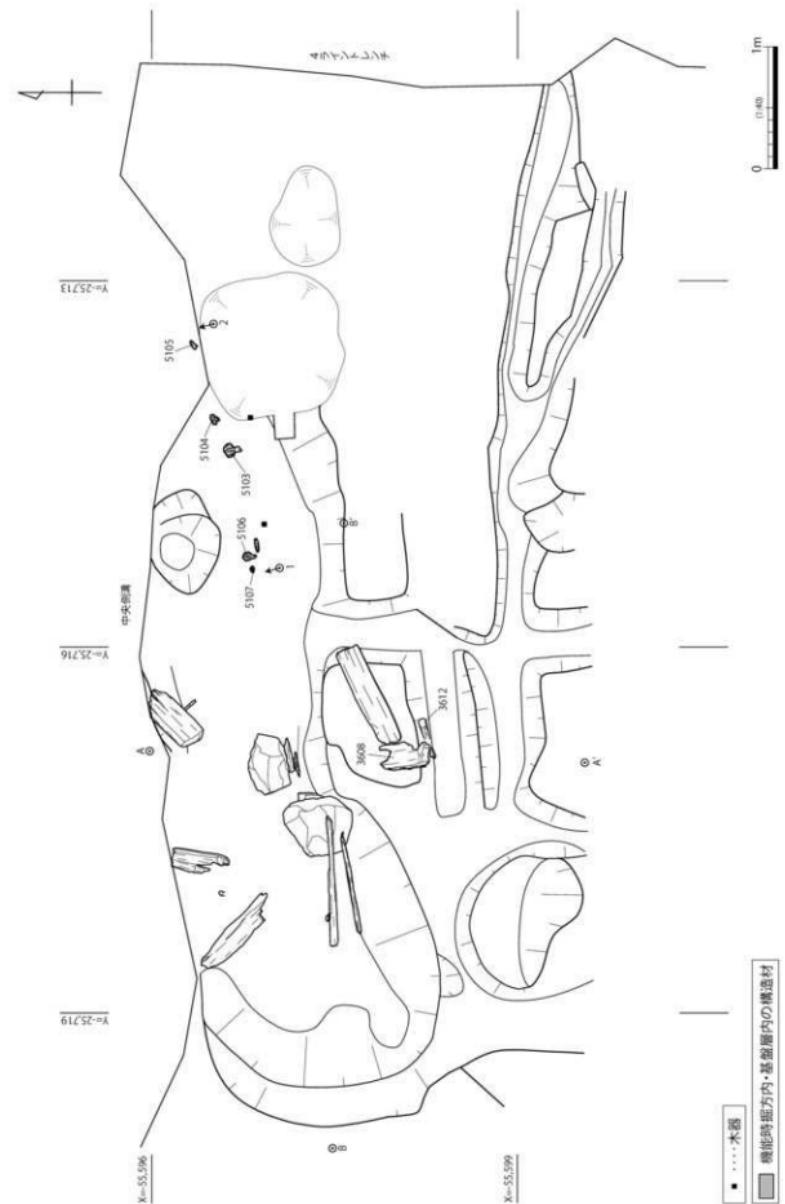
南側のテラス部分には、東西方向に浅い窪みが平行に2条ある。北側の1141溝1は2 S-916に繋がり、南側の1141溝2は2 S-916のすぐ南側を東に4ライントレントレンチまで延びる。4ライントレントレンチから東側は、2 S-901に繋がると考えられる。

2 S-916の北側で東西に並ぶ杭列を検出した。杭の間隔は一定せず西端では3本の杭がかなり近接して打設されている。複数回にわたる溝の構築に関わるのか、西端部分は何か護岸以外の機能があったのかもしれない。杭列は、2 S-830の北岸よりも若干北側に寄っていて、繋がらないと考えられる。杭列から約1.3m西側に離れて、一辺約0.5mの角礫が2つ、一辺約0.2mの板状の礫が1点ある。これらの礫1～3は、土坑底面に食い込んでいない。西側の礫1と底面との隙間には、転倒しないように一辺約0.2mの板状の礫3が挟まれていた。このような出土状況から、礫は自然に流れ込んだもので

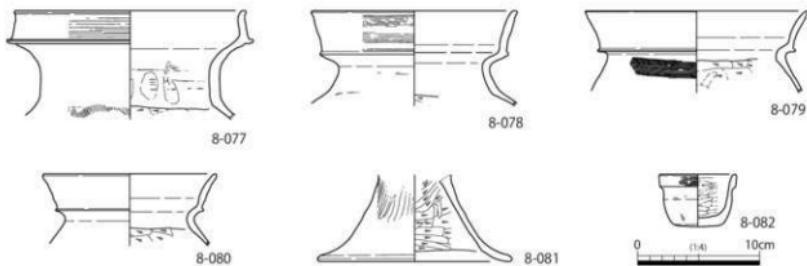


第N-9-32図 2区 第8面 土坑(2S-1141) 平面図

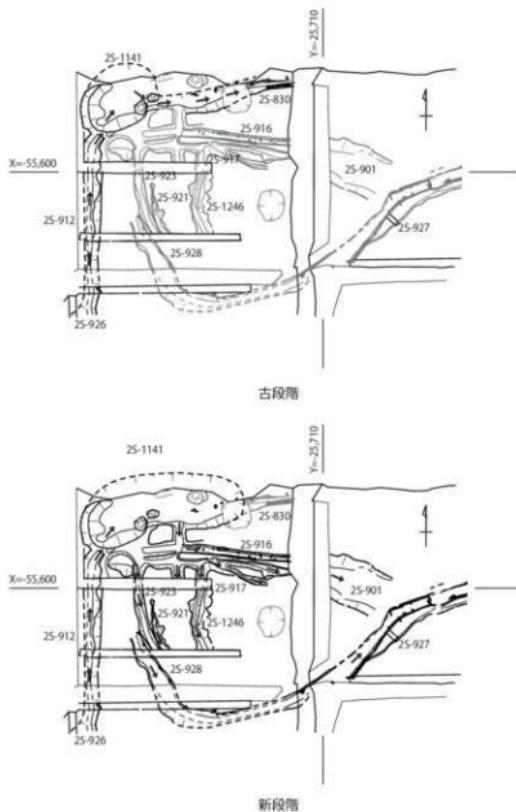




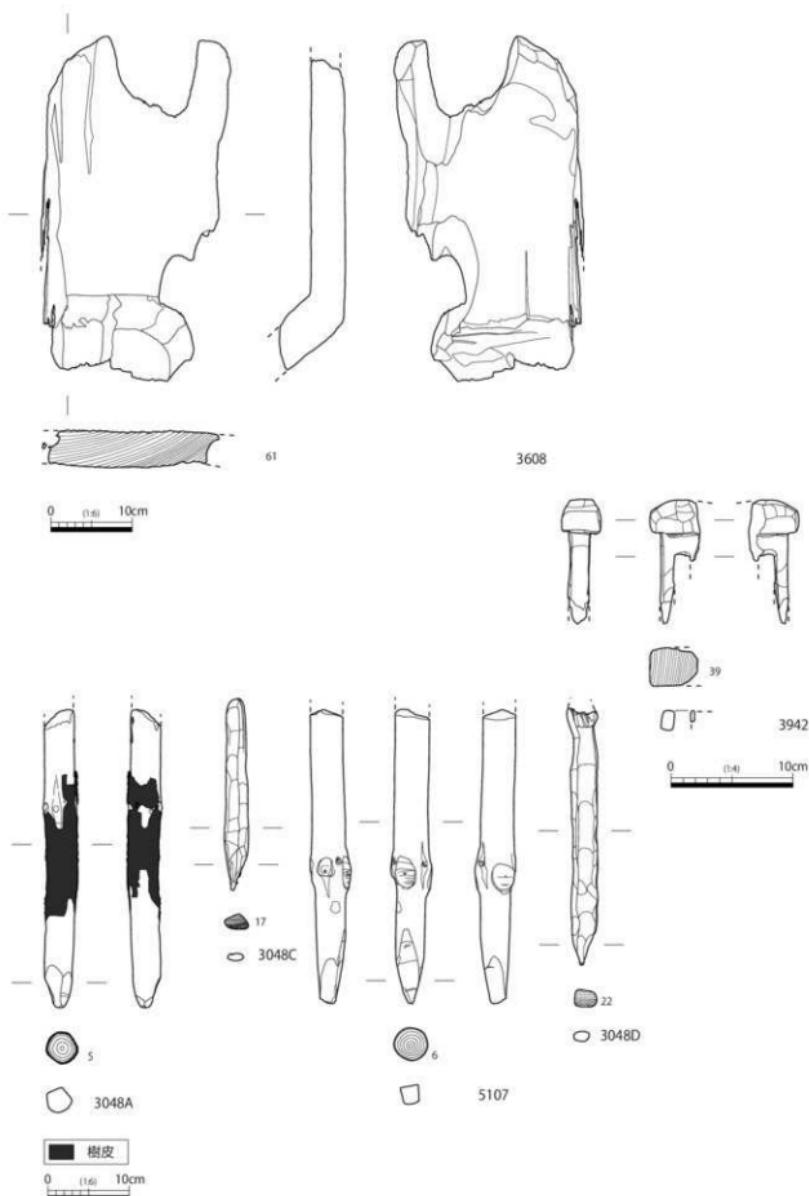
第IV-9-34図 2区 第8面 土坑(2S-1141) 遺物出土状況図



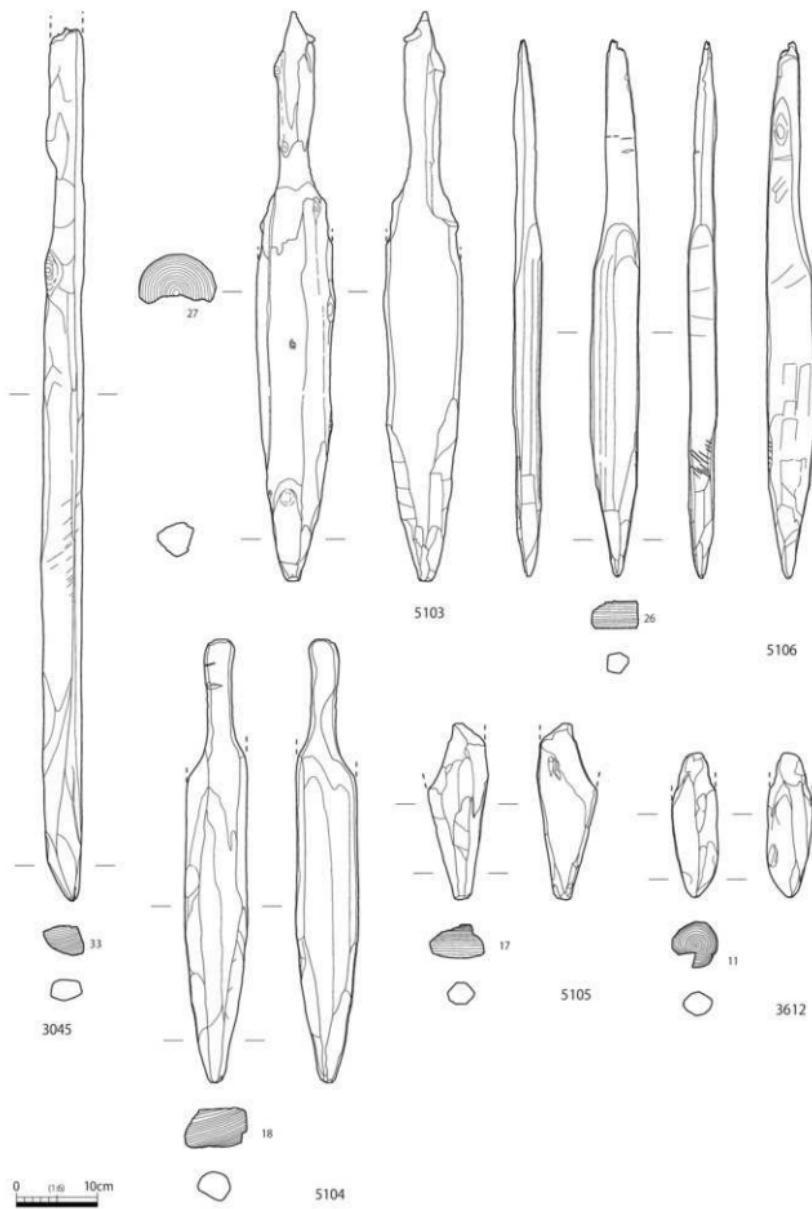
第IV-9-35図 2区 第8面 土坑(2S-1141) 出土遺物 1



第IV-9-36図 2区 第8面 D・E4 グリッド変遷模式図



第N-9-37図 2区 第8面 土坑(2S-1141) 出土遺物2



第IV-9-38図 2区 第8面 土坑(2 S-1141) 出土遺物3

ではなく、人為的に設置されたものと考えられる。礫1は、土坑部分の南側テラスの法面下端上にあり、礫2は南側テラスの法面下端との間を約0.2m空けて置かれていた。これらの礫と土坑南壁の法面でコの字形開まれた空間は、東に開口して、上面幅約0.3mの溝状を呈する。また、礫1と2の間は約0.2m離れて設置されていた。礫1の西側に流れ込んだ水は、この2つの礫の間を通って東の溝に流れていた可能性が考えられる(第IV-9-36図:古段階)。これらの礫と杭列が繋がって一体的な溝を形成していたとすると、礫2と杭列の北側部分はこの段階には掘削されていなかったと考えられる。

杭列と礫による溝と2S-830以外の溝は、全てテラス部分に接続している。テラス部分に接続する溝はおそらく土坑部分の上澄みが流れる仕組みだったと考えられるが、杭列と礫による溝の底面と土坑部分の底面のレベルはほとんど差がない。2S-912から流れ込んだ水はそのまま東に流れていたか、礫1と2の開口部か杭列部分で流水を調節していたかのいずれかだが、土坑を掘削した意味を考えれば後者の可能性が高いと考えられる。

ところで、杭列や2S-830とテラスに接続する2S-912以外の溝は、溝の底面と天端のレベル差があるため、同時には機能しなかったと考えられる。上述のように、礫2と杭列の北側部分が掘削されていない段階があったと仮定すると、テラスに接続する溝の方が新しいと考えらえる。その理由は、杭列部分にも土坑部分から続く砂礫層が堆積していたので、杭列による溝が機能しなくなつてから掘削されたと考えられるからである。また、杭列に使用された杭は、地上部は腐食して痩せ細っていたので、機能停止後、埋まるまで一定期間を経過していたと推測できる。

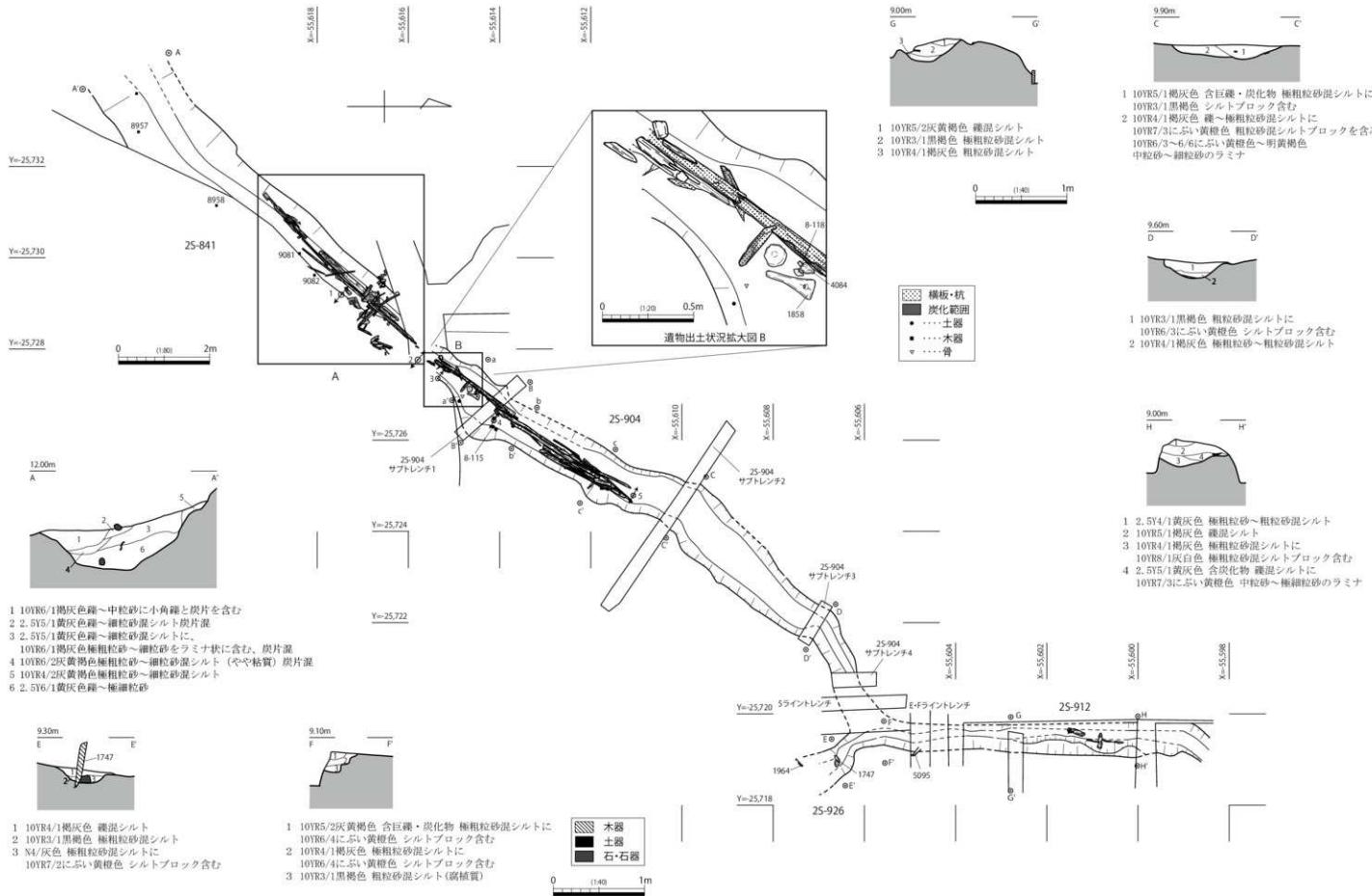
以上のように推測を含むが、当初の土坑は、東側を礫2のあたりまで、南側はテラスの北端あたりまでの規模だったと考えられる。そして、東側に何らかの水位調節構造を有する溝が接続していた可能性が高い。その後、杭列と2S-830が機能停止し、杭列部分も掘削して土坑を東へ拡張しつつ、南側テラスを設け、2S-916や2S-923といった溝が機能する段階へと変遷したと考えられる。埋土中から出土した土器(8-077～082)は、乙亥正V～Ⅶ期のものと考えられる。木器は、槽、栓、杭が出土した。槽(3608)は大半が破損している。栓(3942)は右半分が破損しているが、孔の形状は方形と考えられる。軸部と頭部には明瞭な加工による段差があり、軸部の断面形が方形であることから青谷上寺地遺跡のB2類に該当する。杭は、5103～5107が杭列として検出したもので、転用材と考えられる分割材のものと、丸太材、半截丸太材を用いるものがある。(馬路)

2S-841・904・912・926(第IV-9-39図)

2区南側の5ライン付近から西側で検出した。調査区南側丘陵と1区から東に向かって2区中央部に張り出した丘陵により形成された谷に形成された溝である。南側丘陵の裾を北東方向に流れ(2S-841・904)、5ライントレンチを超えたところで南から北へ流れる溝(2S-912・926)とT字形に合流する。南北方向の溝の北端は北東へ短く屈曲する。北東方向の溝の延長は、約22.3m、南北方向の溝の延長は、約9.1mである。北東方向の溝の幅は東側が狭く約0.7m、中央付近は約1.2m、西端では約1.8mとなる。南北方向の溝は、約0.7～0.8mの幅である。(馬路)

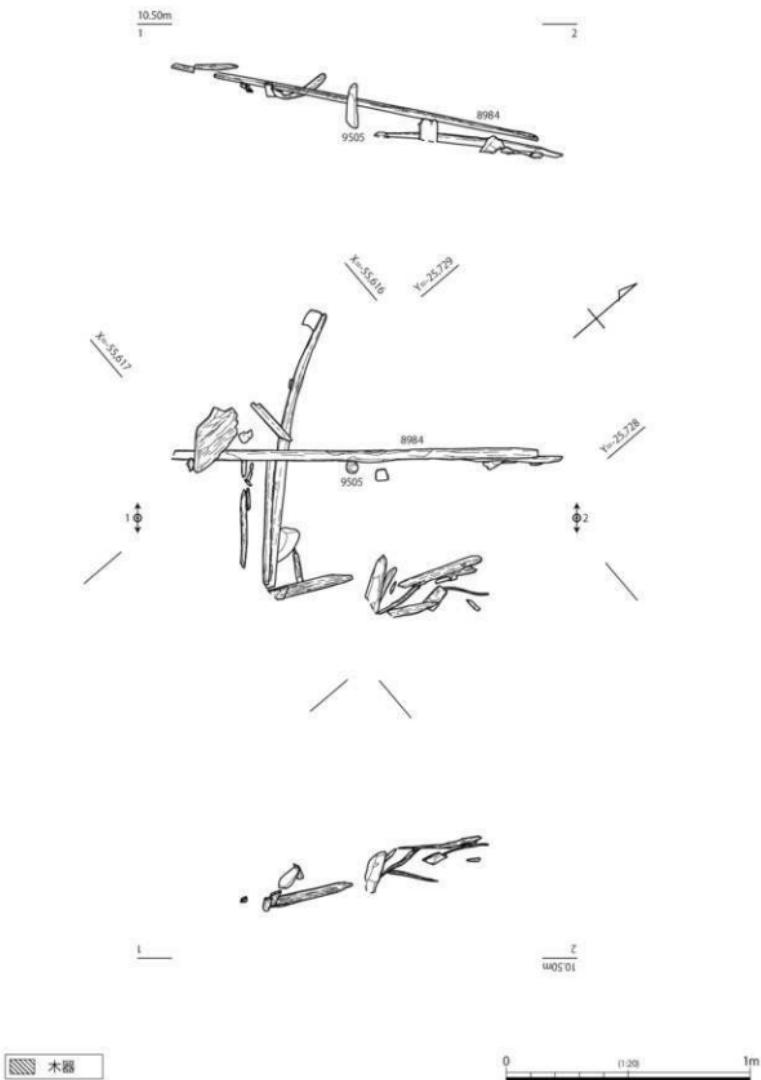
2S-841(第IV-9-40、41、43～51)

2区南西部F6・G6グリッドのVI層下面で検出した。検出面と走向から、2区中央部で検出された2S-904の上流部分にあたると判断した。また、H7-2トレンチの土層断面で、2S-841に該当す

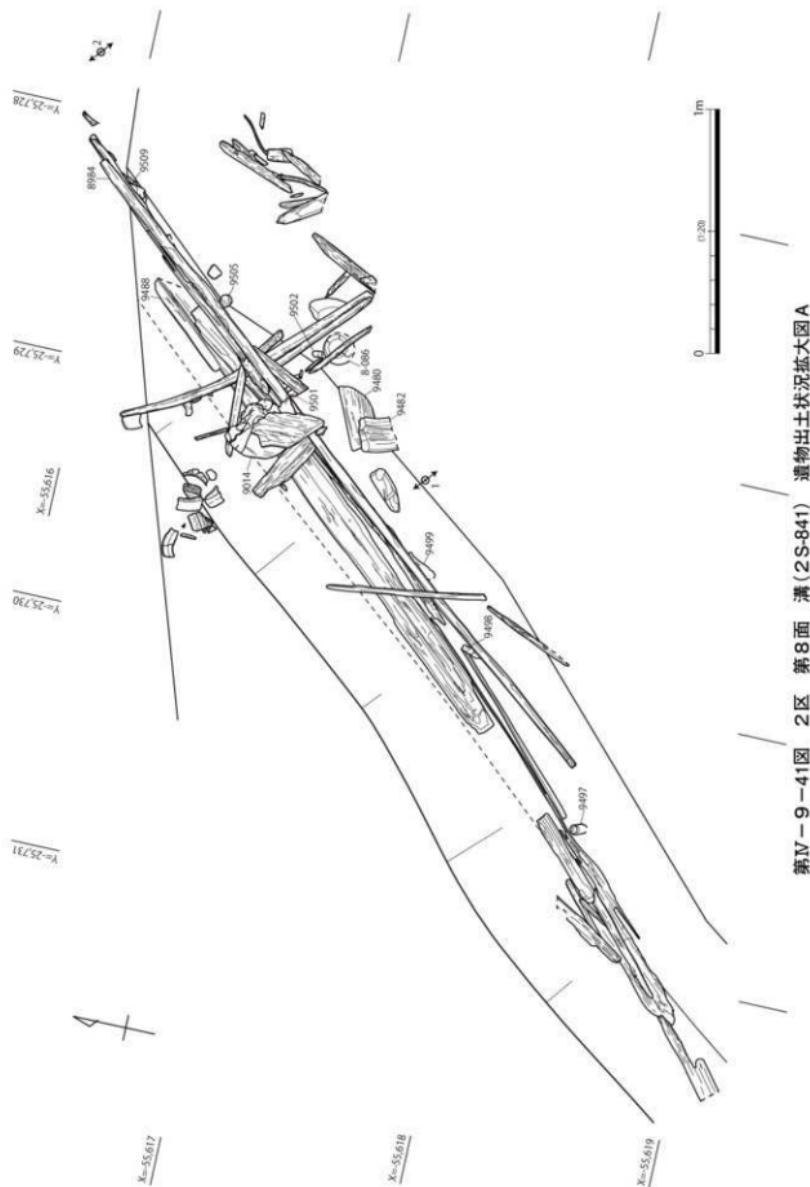


第IV-9-39図 2区 第8面 溝(2S-841・904・912・926) 平・断面図及び遺物出土状況図

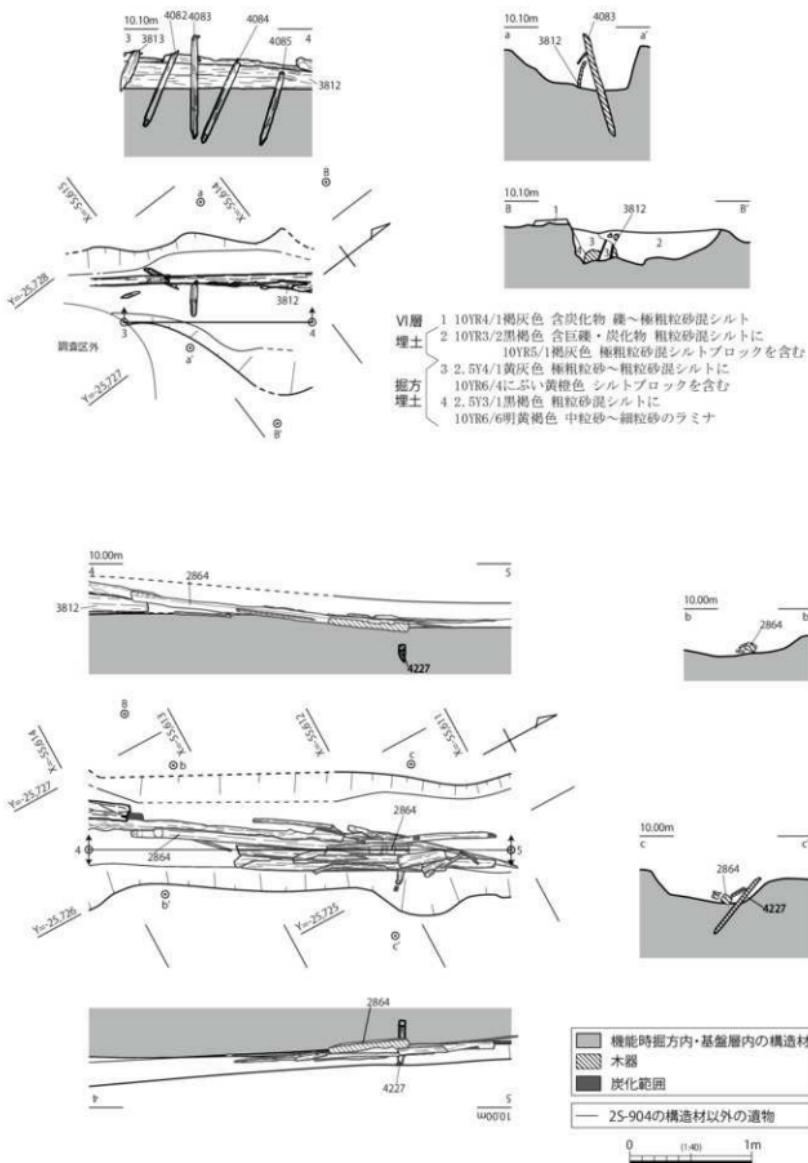
第9節 第8面(VI層下面)の調査



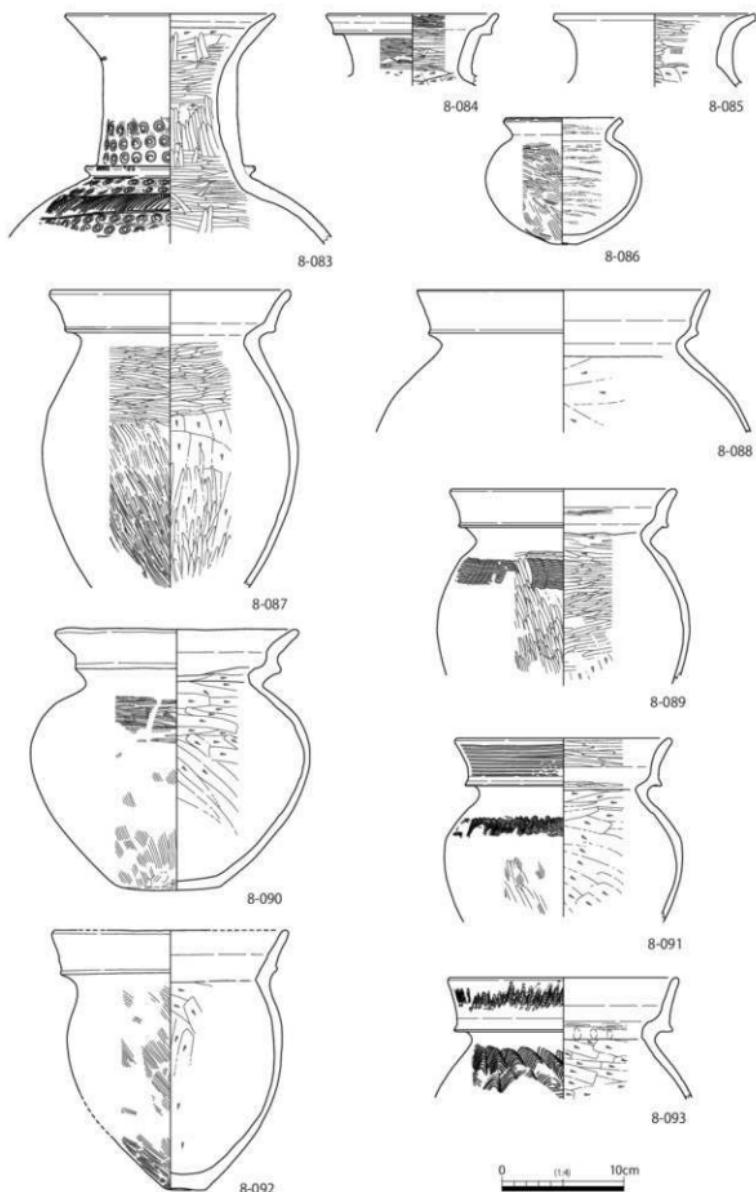
第IV-9-40図 2区 第8面 溝(2S-841) 遺物出土状況、1-2間平・立面図



第IV-9-4図 2区 第8面 溝(2S-841) 遺物出土状況拡大図A

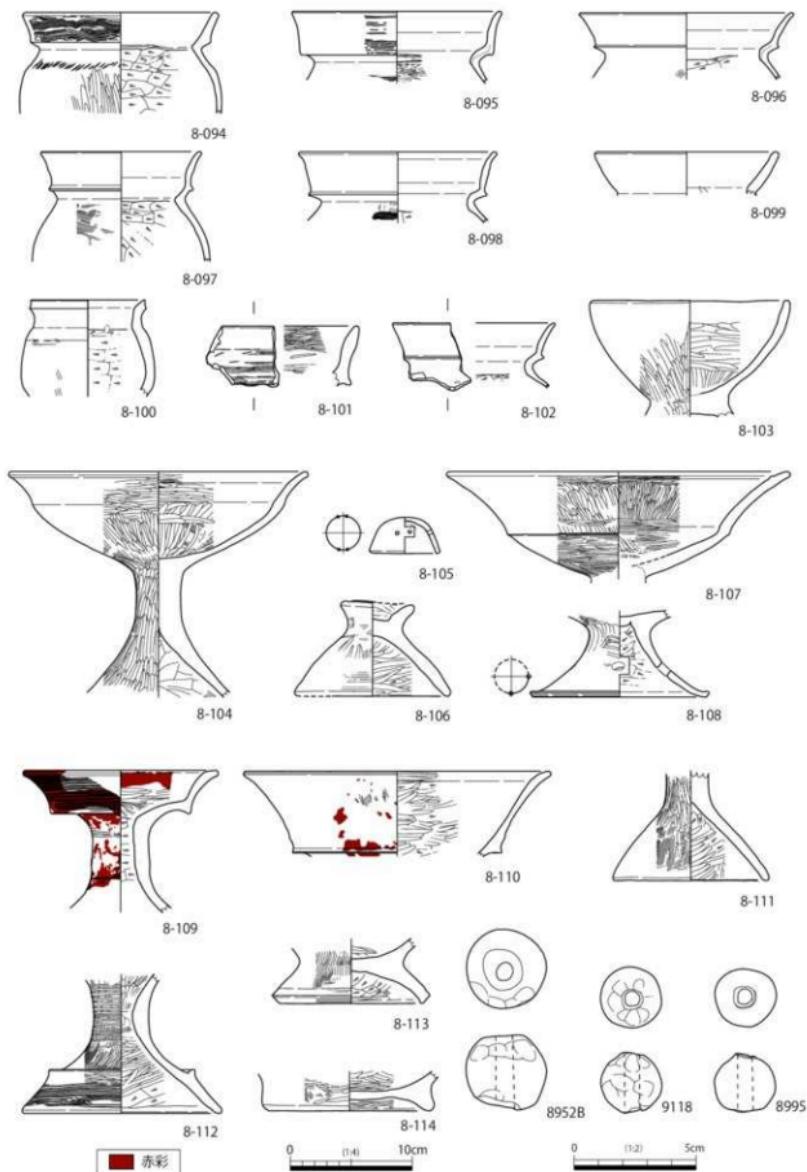


第N-9-42図 2区 第8面 溝(2S-904、912、926) 平・立・断面図

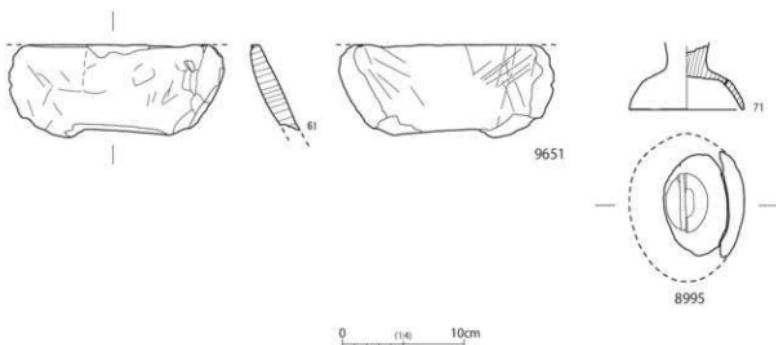
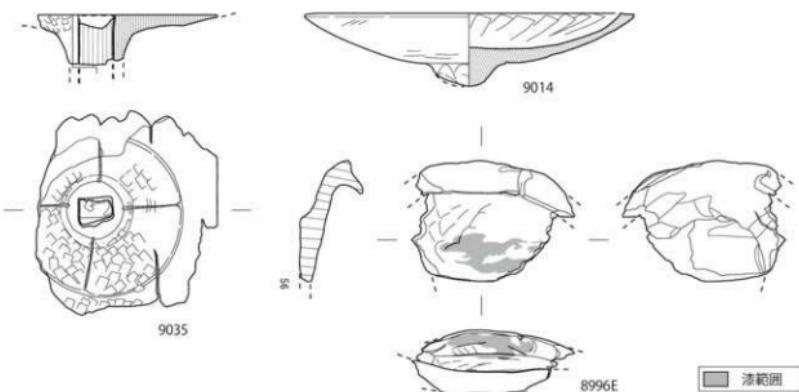
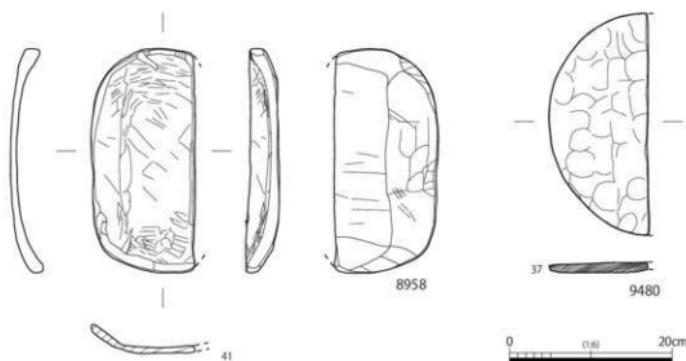


第IV-9-43図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物1

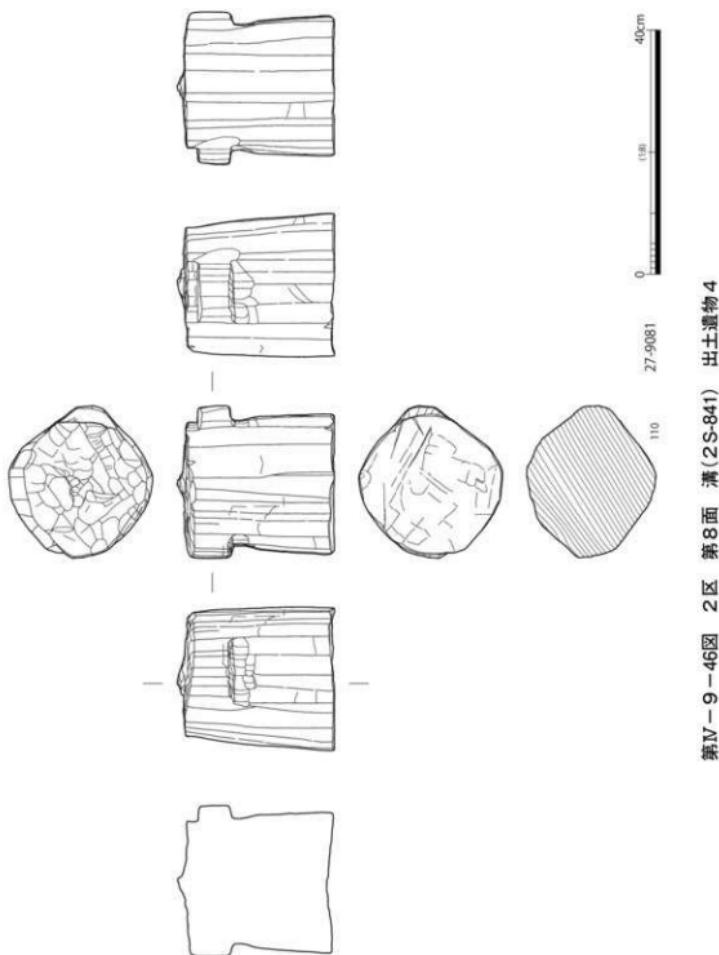
第9節 第8面(VI層下面)の調査

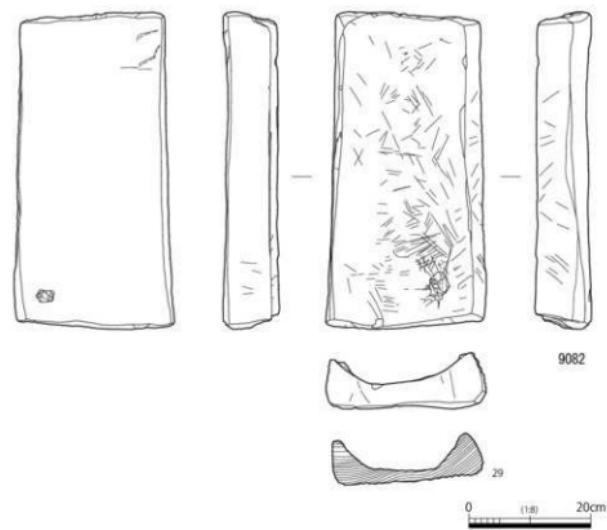
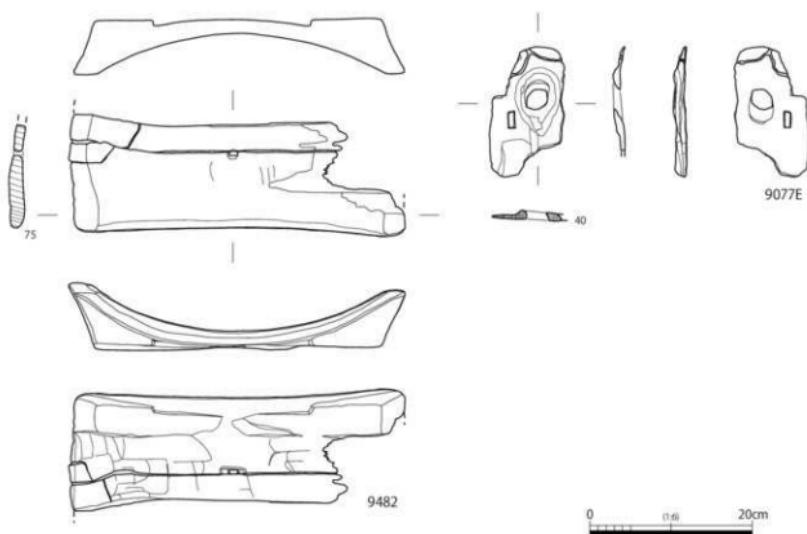


第IV-9-44図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物2



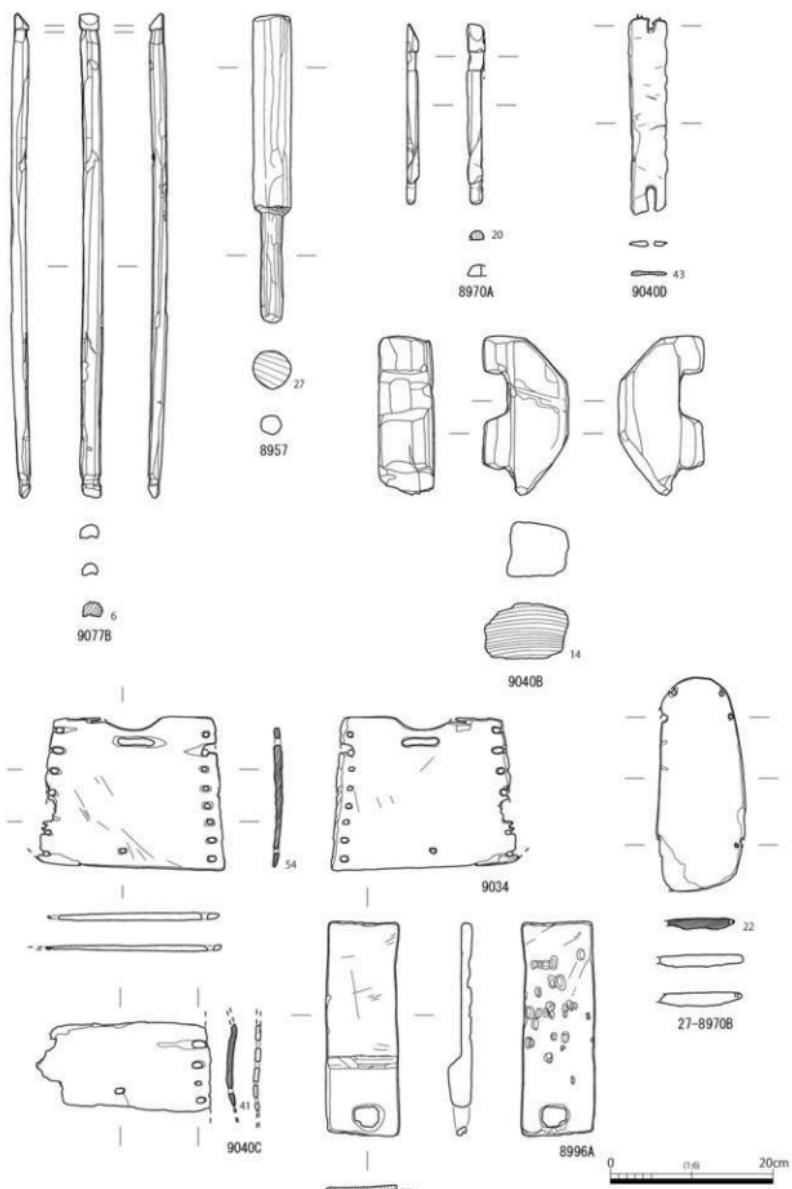
第IV-9-45図 2区 第8面 溝(2S-841) 出土遺物3



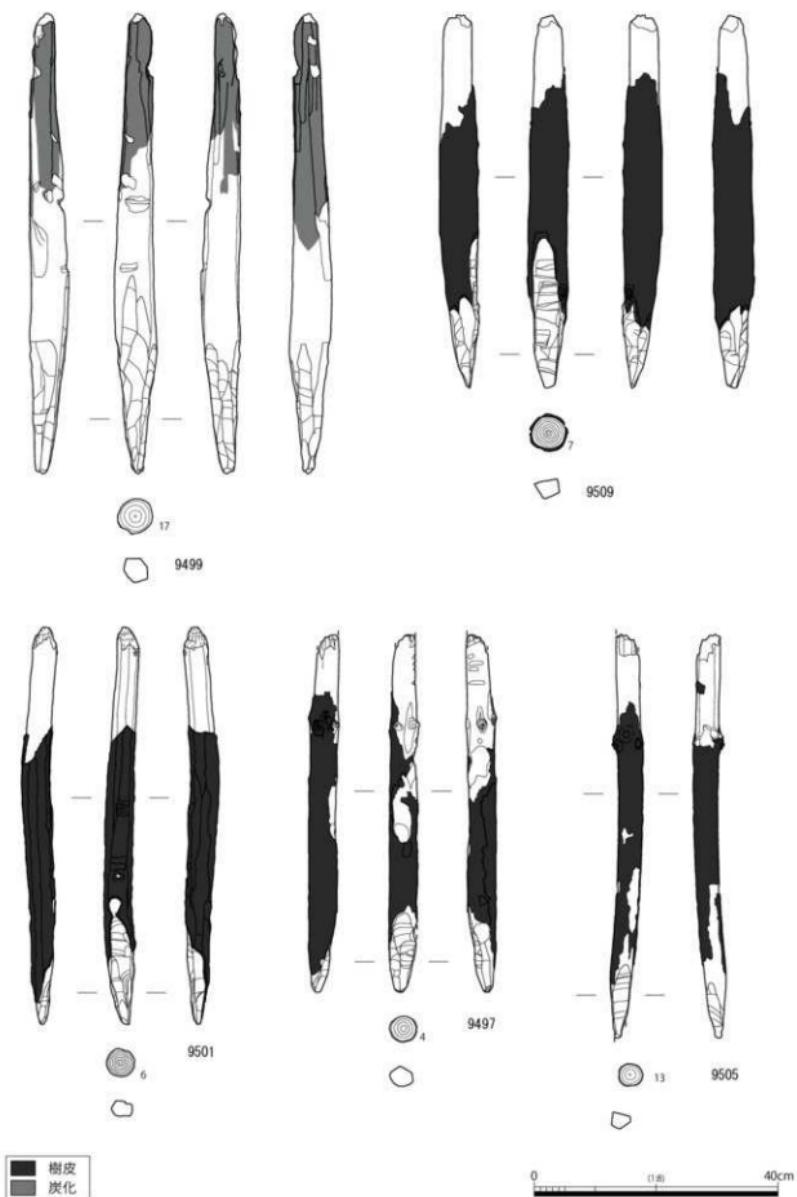


第IV-9-47図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物5

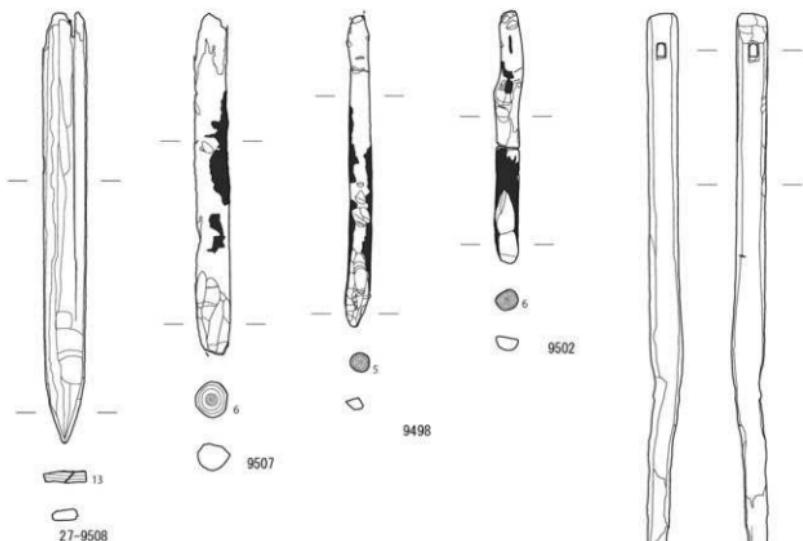
第9節 第8面(VI層下面)の調査



第IV-9-48図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物6



第IV-9-49図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物7

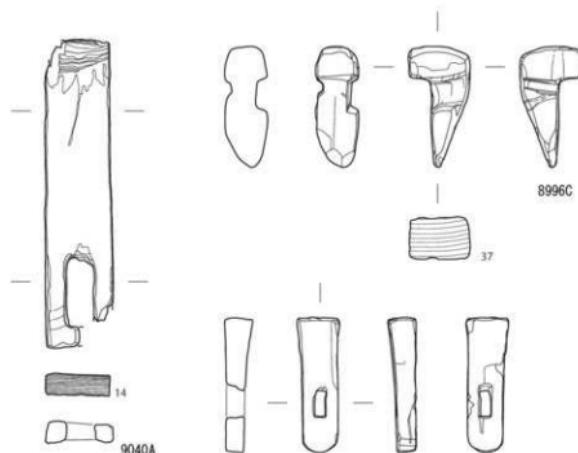


0 0.8 40cm

8996

CD

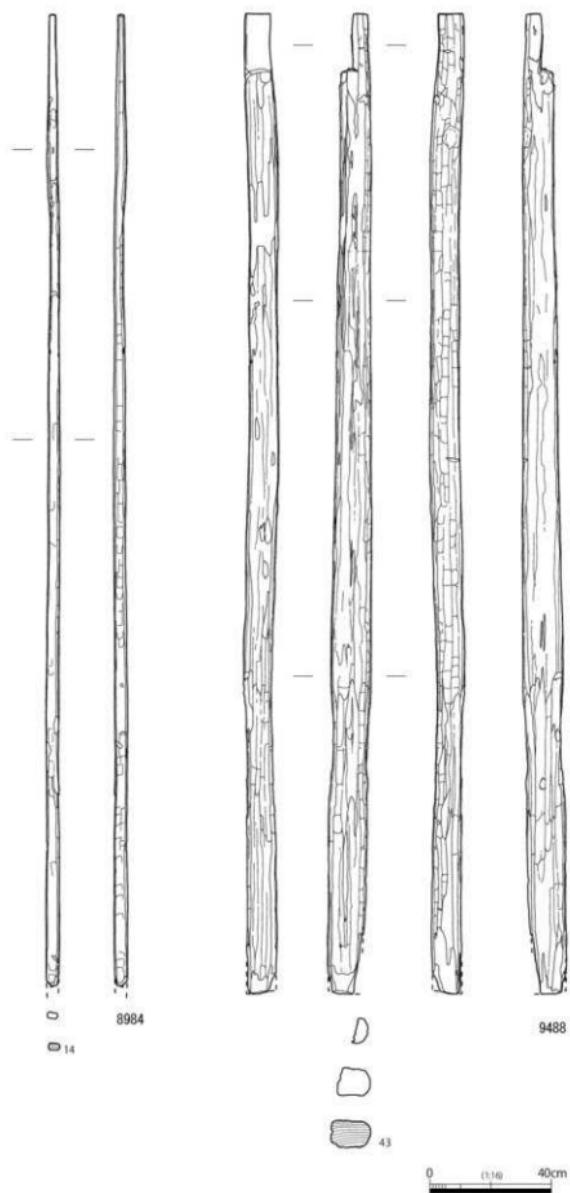
25



■ 樹皮

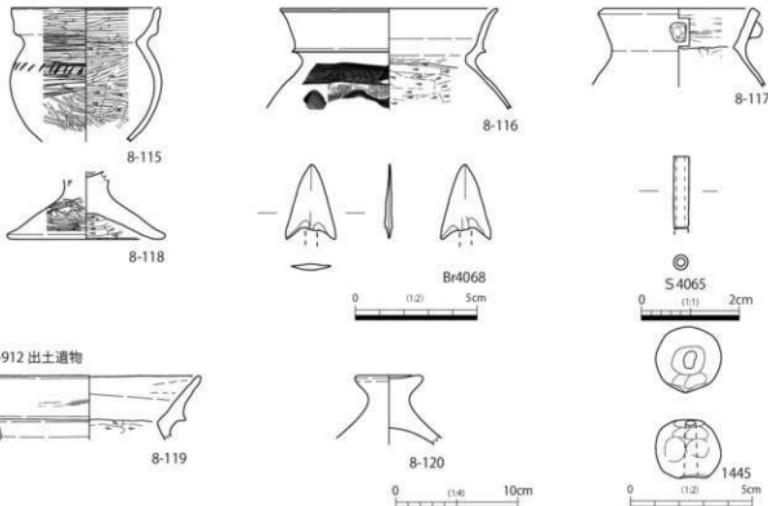
16 11 0 (16) 20cm

第IV-9-50図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物8



第IV-9-51図 2区 第8面 満(2S-841) 出土遺物9

2 S-904 出土遺物



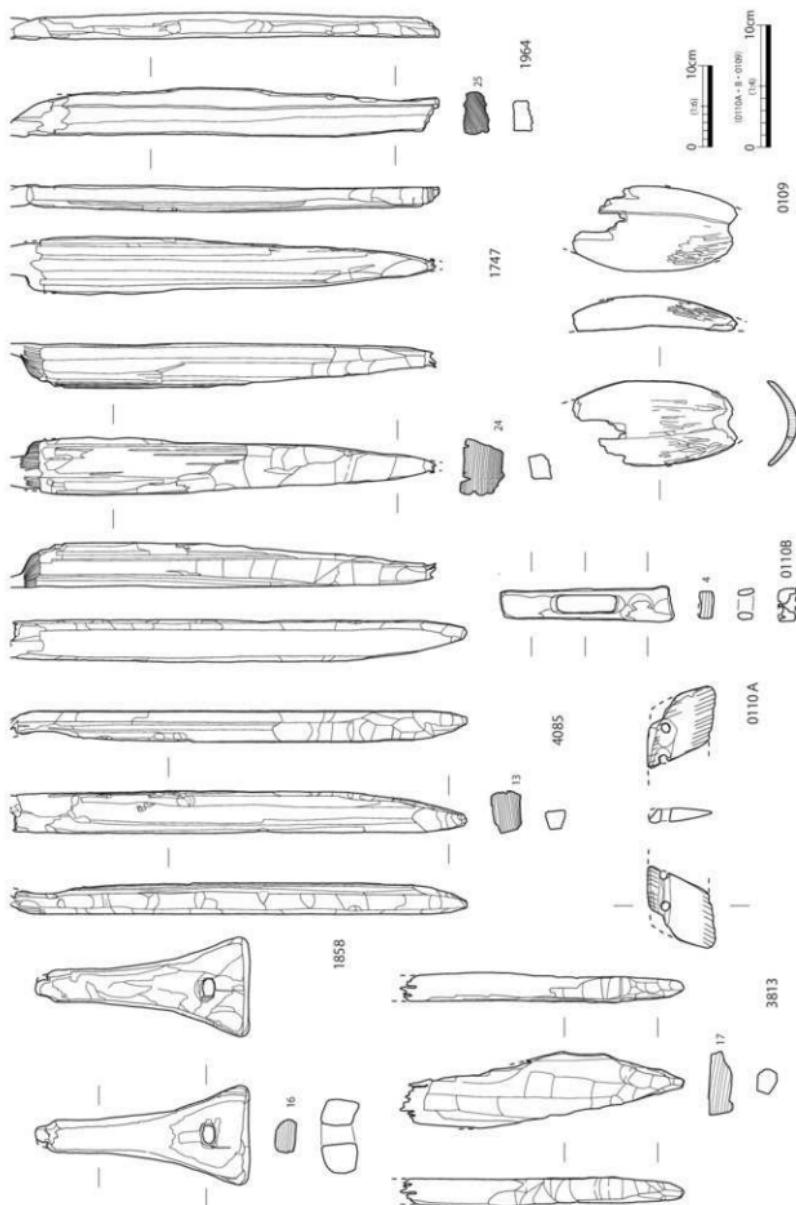
第IV-9-52図 2区 第8面 溝(2S-904・912・926) 出土遺物 1

る落ち込みが認められることから、上層で検出した2 S-824とはほぼ同じ走向で、更に上流へと続いていると考える。検出できた規模は直線距離で約8m、最大幅で約1.8m、深さ約0.5mを測る。埋土は礫から細粒砂を含む黄灰色から灰黃褐色シルトで、部分的にラミナ状を呈しており、最上層と最下層は礫から極細粒砂が堆積している。この2 S-841では、南側溝に接する部分で横板を杭で固定した護岸構造を確認している。本来の形状を保っていないが、護岸に用いられたと考える部材の出土状況から、長さ2m以上、幅20cm以上の板材を横板として用い、その内側を芯持材の先端を加工した長さ40cm以上の杭で固定する構造であったと考えられる。

埋土中から弥生時代後期から古墳時代前期の多量の土器と木器が出土した。土器には壺、甕、高杯、器台等が見られ、乙亥正V期からVII期の特徴を示している。木器には容器類、農具、雑具、杭、建築部材等が見られる。この内、容器類では、9035、9014が高杯の杯部で、9035は4弁の花弁高杯となる。8996Eは遺存状態が悪いが、その形状から台付の壺と考えられるものである。9081は削り抜き桶の未成品で、一方の把手はほぼ作り出されているものの、全体に粗い加工を施した時点の状態で出土したものである。この他にも、指物と考えられる9034、9040C、桶と考えられる8996Aなどがあり、8996Aには、外面に断面梢円形の棒状工具による乱雜な刺突が見られる。(原田)

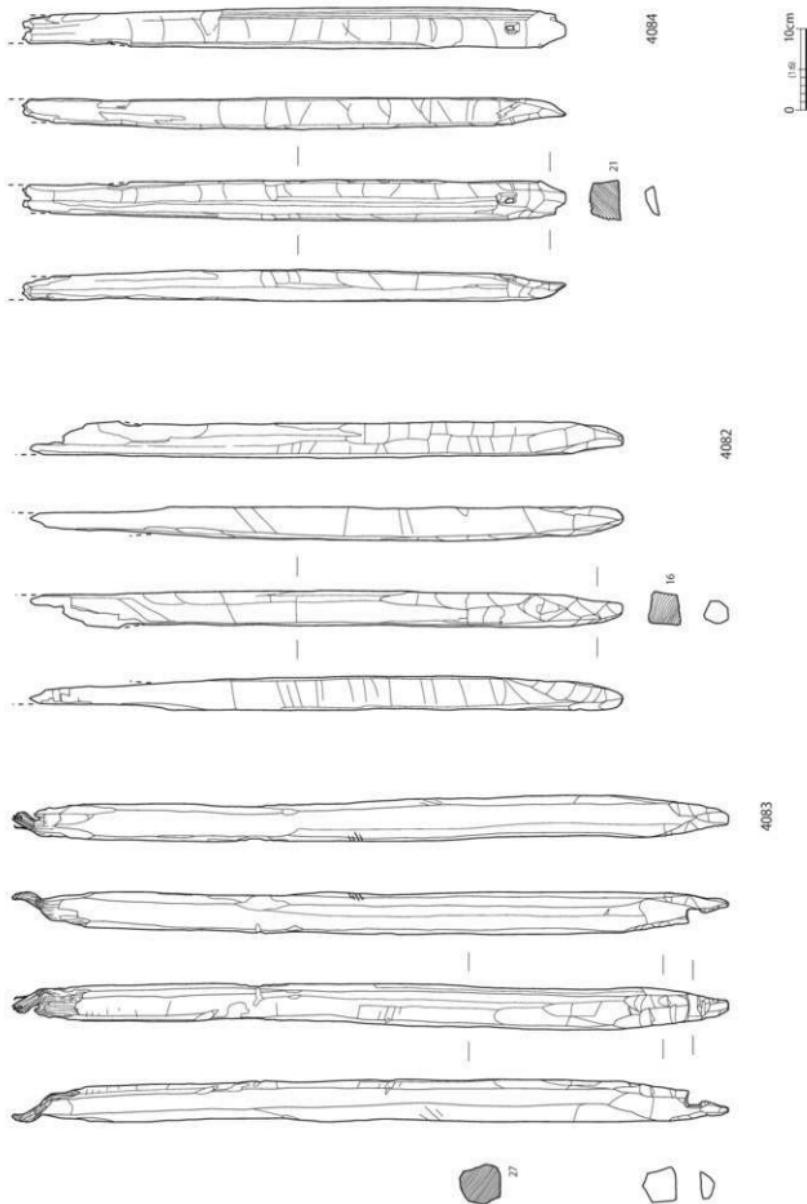
2 S-904・912・926(第IV-9-42、52~55)

2 S-904は、6ライントレンドから北東に約5m区間に護岸の痕跡が残っていた。ただし、掘方部分も同時に掘削して調査したため、機能時の状態は図化できなかった。埋土は砂礫混じりのシルトである。北岸の護岸は(立面ポイント3-4間)、建築部材の転用と考えられる長さ約2m、幅約0.2mの板材を設置し、その上に小型の板材の載せ、溝の内側に杭を打設して横板を固定したと考えられる。こ

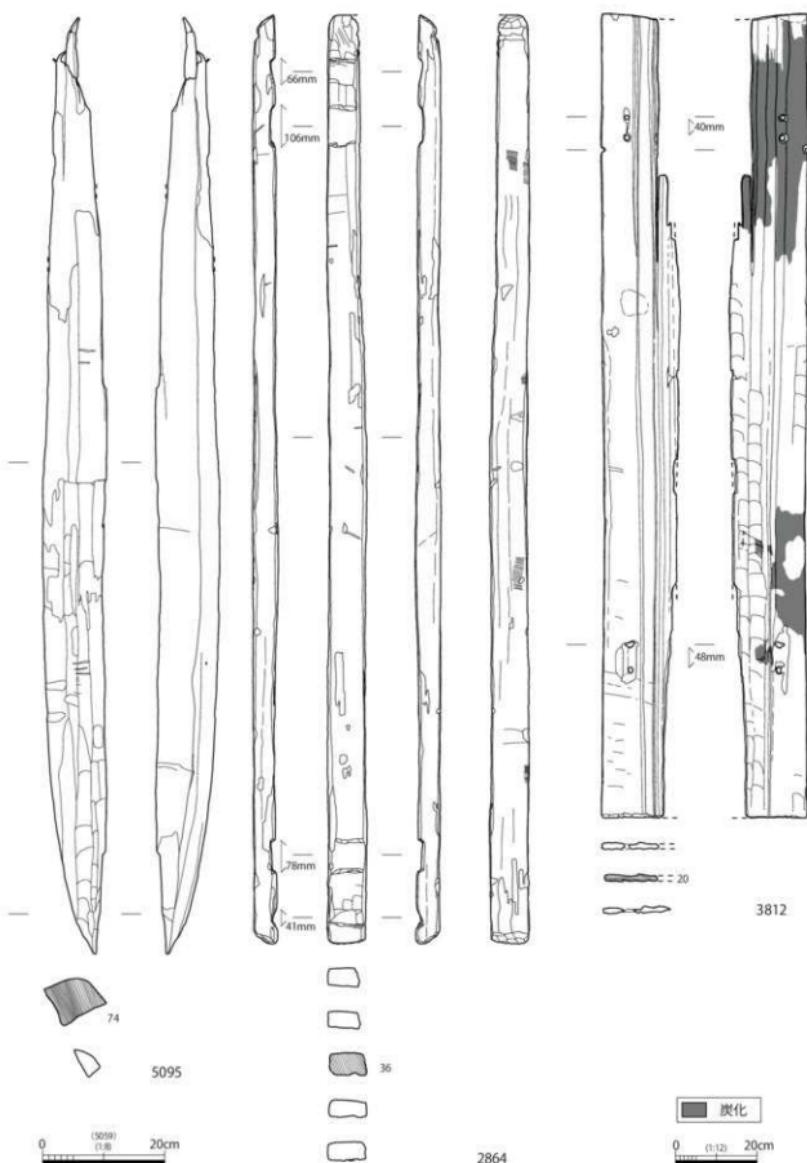


第IV-9-53図 2区 第8面 溝(2S-904・912・926) 出土遺物2

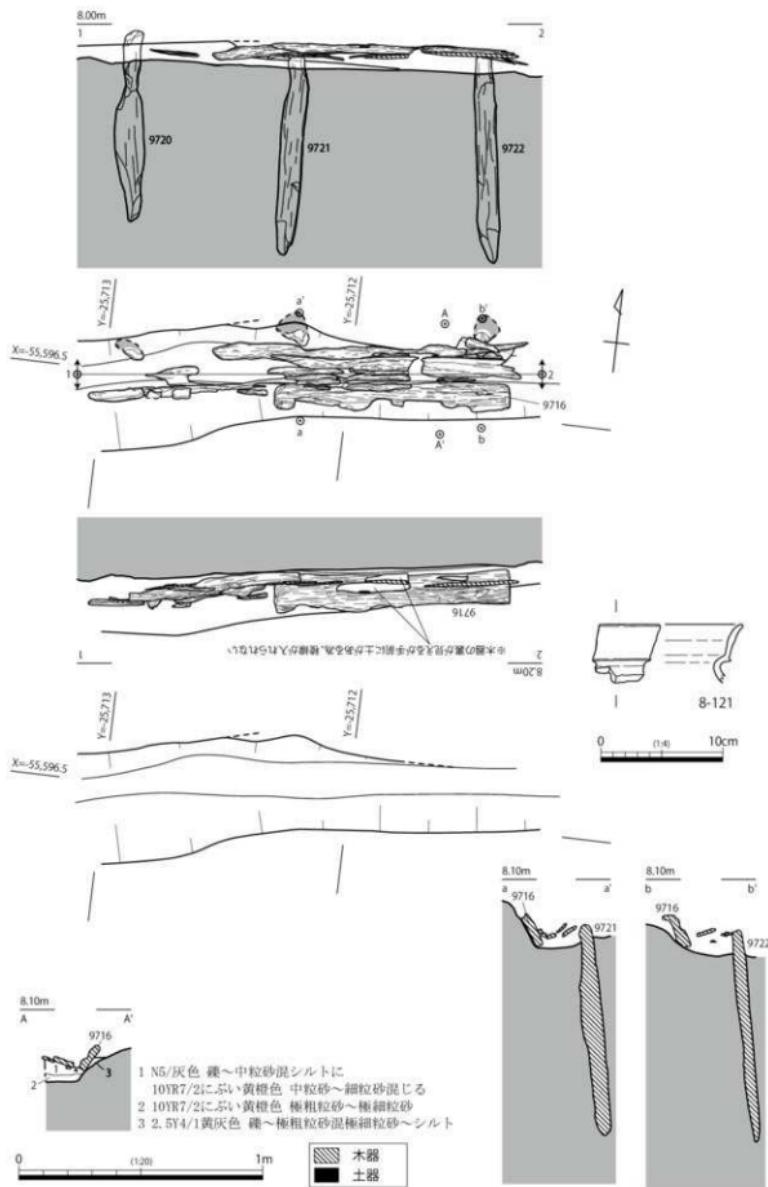
第9節 第8面(VI層下面)の調査



第IV-9-54図 2区 第8面 溝(2S-904・912・926) 出土遺物 3

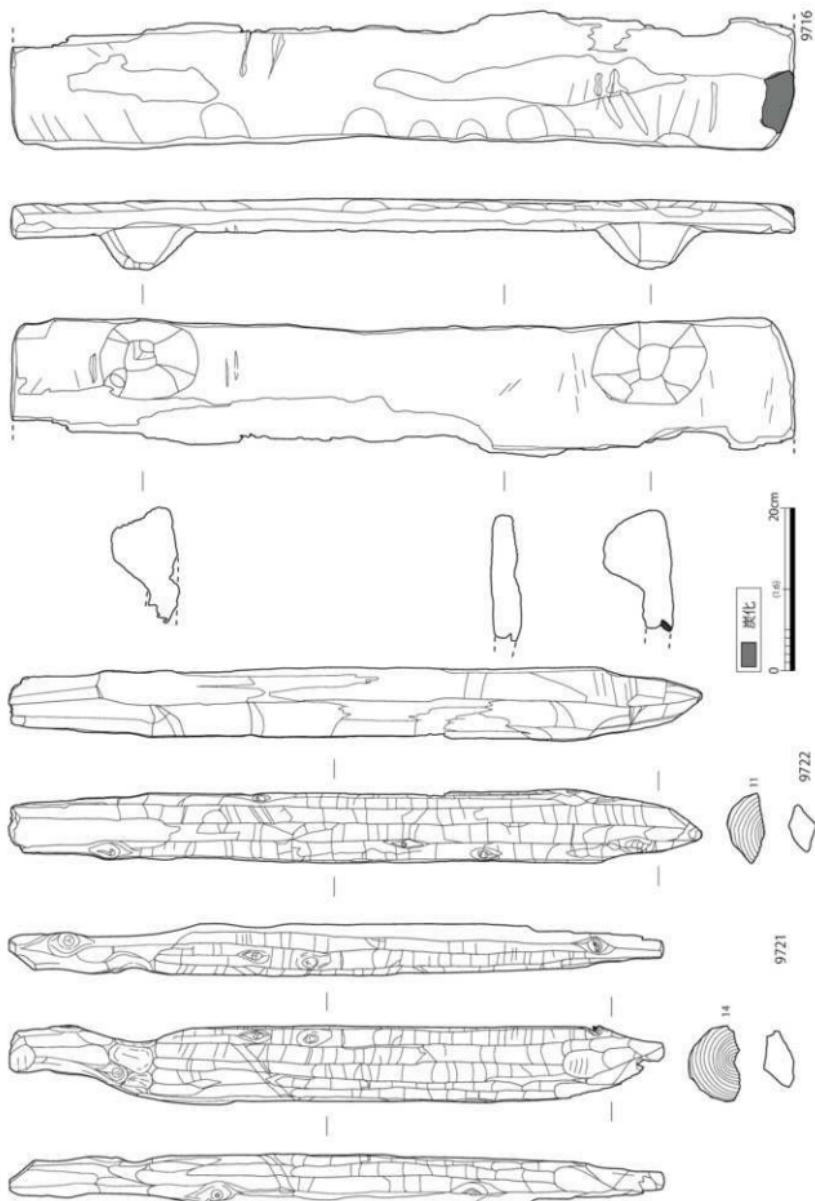


第IV-9-55図 2区 第8面 満(2S-904・912・926) 出土遺物4

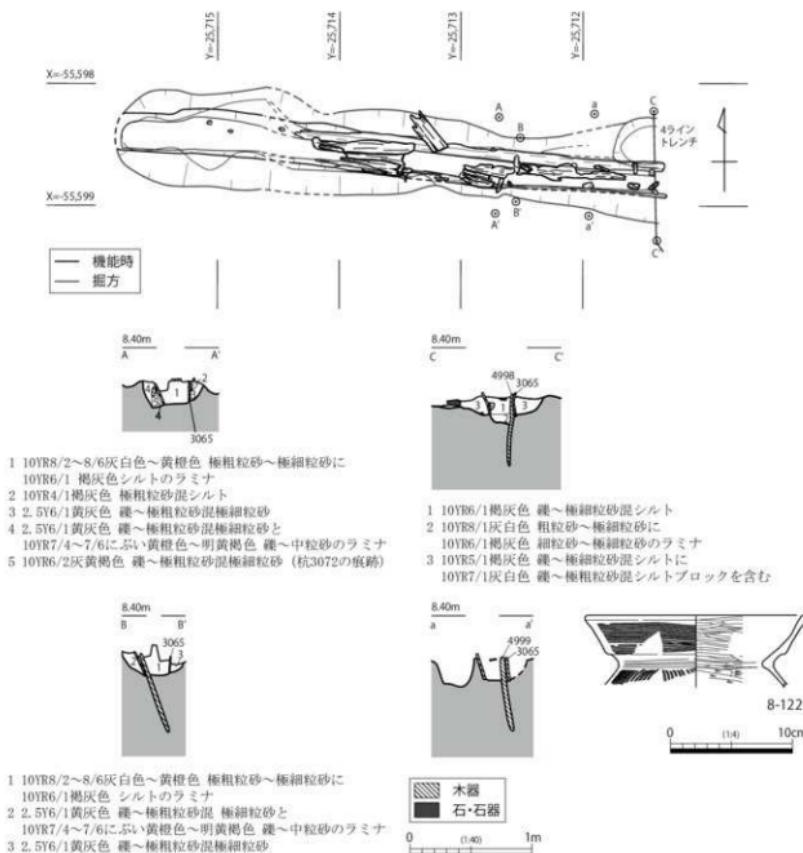


第IV-9-56図 2区 第8面 溝(2S-830) 機能時(上)及び完掘状況(下)

平・立・断面図及び出土遺物 1



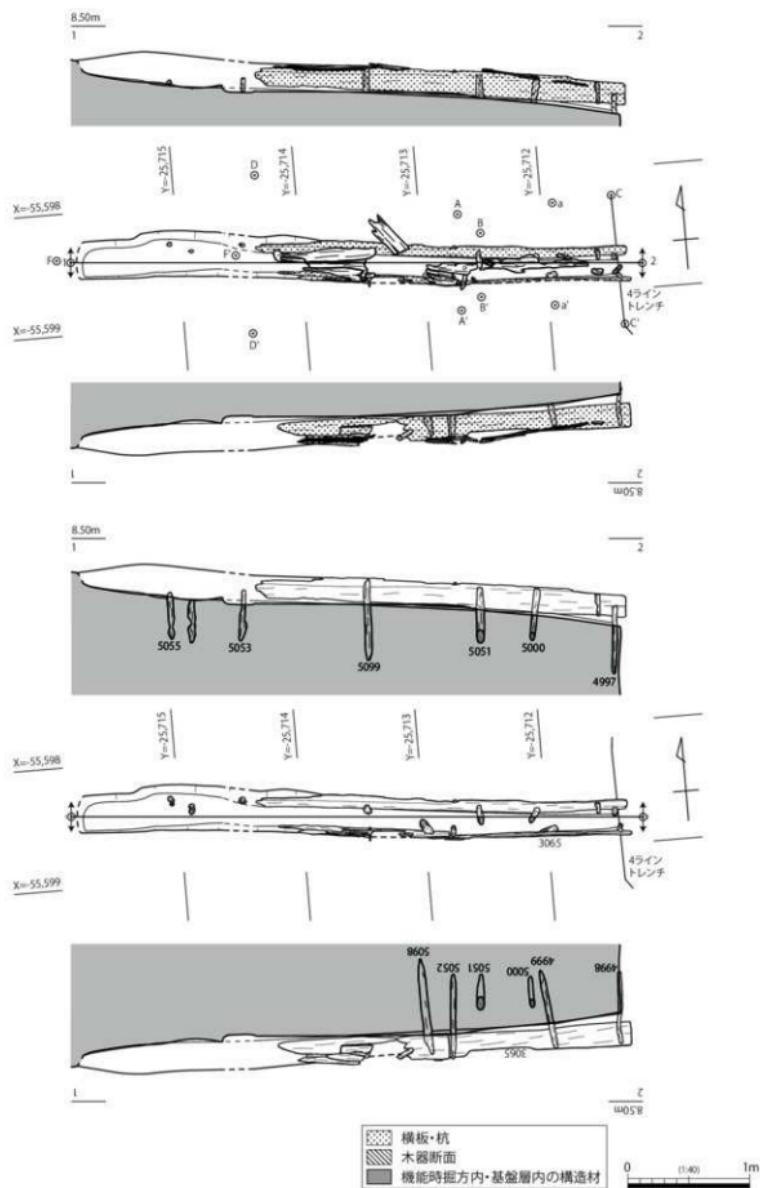
第IV-9-57図 2区 第8面 溝(2S-830) 出土遺物2



第IV-9-58図 2区 第8面溝(2S-916) 平・断面図及び出土遺物

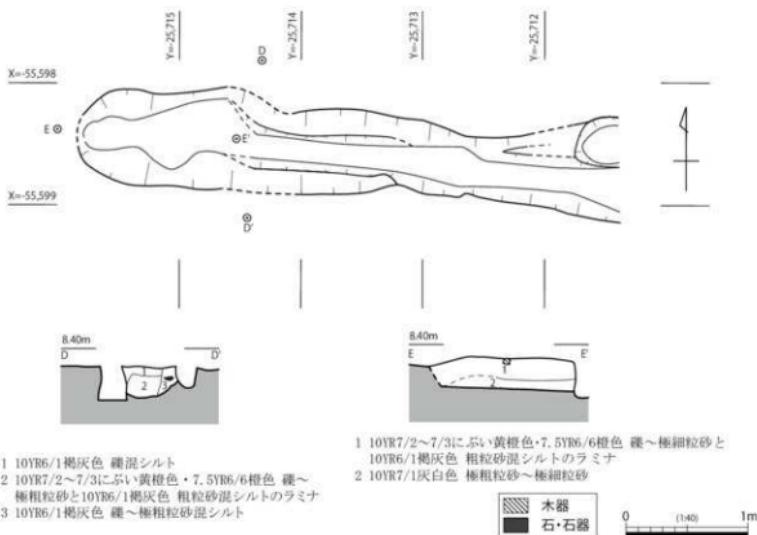
これらの横板に対して杭は4本確認したが、4083のみ打設の方向が他の3本と異なることと、横板との間に空隙が生じているので、後から補強の目的で打設された可能性がある。残りの3本は、概ね0.45~0.5m間隔で打設され、横板の中央部分のみ杭で留めたと考えられ、両端に杭は打設されていなかつた。南岸の護岸(立面ポイント4-5間)は、杭1本のみが打設されており、他は全て埋土中に廃棄された建築部材などである。杭と岸の間に横板は確認できなかった。南岸はすぐ南側に丘陵裾部が迫っていることから、当初から護岸をする意図はなかったと考えられる。打設された杭の機能はわからないが、護岸をする目的で打設されたものではない可能性が高い。

南北方向の溝(2S-912)には、護岸の痕跡は明瞭ではなかったが、2S-926部分には2本だけ杭が確認できた。ただし、南端で検出した1747は打ち込みが浅く、溝に伴うものかどうか明らかではない。底面の標高は、南から北に低くなり、北端で2S-1141に繋がっていたと考えられる。



第IV-9-59図 2区 第8面 満(2S-916)

遺物出土状況(上)・埋土完掘状況(下) 平・立面図



第IV-9-60図 2区 第8面 溝(2S-916) 堀方完掘状況 平・断面図

2 S-904から出土した遺物は、建築部材や腰掛の脚、ウ科の上腕骨などである。土器は、2 S-904と912から乙亥正V～VI期のもの(8-115～120)が出土した。また、埋土中から出土した土器が1点、第10面帰属の2 S-833出土土器(10-068)と接合した。石器は、管玉(S4065)が1点出土し、青銅器は鐵(Br4068)が1点出土した。管玉は下端を若干欠損している以外は、ほぼ完形である。銅鏡は、茎を欠損している。形態的な特徴は畿内で出土例が多いものに類似する。木器は、腰掛の脚(1858)、建築部材(2864、3812)以外は、杭が出土した。杭は、建築部材の転用材と考えられるもので、先端部以外にも転用前の加工痕が残り、枘穴が残るもの(4083、4084)もある。2864は、裏面の両端部を斜めにカットして、表面は両端にそれぞれ2か所の欠き込みがある。いずれの欠き込みも外側の方が、内側よりも欠き込み幅が狭い。裏面には、約43cm間隔に細い線状の擦痕がある。板材(3812)は、長さ約2m、幅約20cmで、両端部近くに方形の孔が2つずつ対になってある。孔と孔の間隔は4cmと4.8cmである。(馬路)

2 S-830(第IV-9-56、57図)

D 4 グリッドで、4 ライントレンチから西に約1.9mの長さで、中央側溝に平行に検出した。2 S-764と重複して切られる。4 ライントレンチ断面ではこの溝の痕跡は確認できないため、東へ続いたのかは不明である。検出した溝の延長は約4.0m、幅は約0.94m、深さは約0.15mである。杭と横板による護岸が行われているほか、溝の軸に沿って長さ0.4～1.2m、幅0.2m程度の板材が埋土上層から出土した。横断面(a'a'断面)ではV字形に両岸から中央部が凹むように落ち込んでいた。これらの板材は、単に廃棄されたものが流れただけの可能性も十分あるが、全てが同一個体ではないとしても、人々溝幅程度に幅のある板材だった可能性もある。その場合は、溝の蓋として架けられ

ていた可能性がある。

北岸の護岸は、横板を検出できなかったが、杭3本を検出した。本来横板を伴っていたと考えられるが、2 S-764の南岸部分と重複することから、2 S-764設営時に攪乱されたと考えられる。3本の杭は、約0.7m間隔で打設されていた。一方、南岸には杭が無く、横板のみを検出した。長さ約1m、幅約0.15m、厚さ約0.08mの板材で、長軸の両端付近に突起状の加工がそれぞれあり、鍛の未製品を転用したと考えられる。この横板は、下から上に外傾して、突起部分を岸側にして設置されており、この突起が岸に引っかかることで杭が無くとも内側に倒れ込み、ずり落ちないようにされていたと考えられる。埋土中から甕口縁部片(8-121)が出土した。乙亥正VII期のものと考えられる。木器は、護岸材の杭(9721, 9722)、横板に転用された鍛未製品(9716)を図化した。杭は、何れも表面全体に加工痕が残り裏面は削肌で加工されていない。柱などを半裁して転用したものと考えられる。鍛の未製品は隆起が2か所に削り出されている。隆起は片側に寄っているが、全体に腐食が著しく、転用に当たって溝の深さに合わせて幅の調整が行われた可能性もある。(馬路)

2 S-916(第IV-9-58、59図)

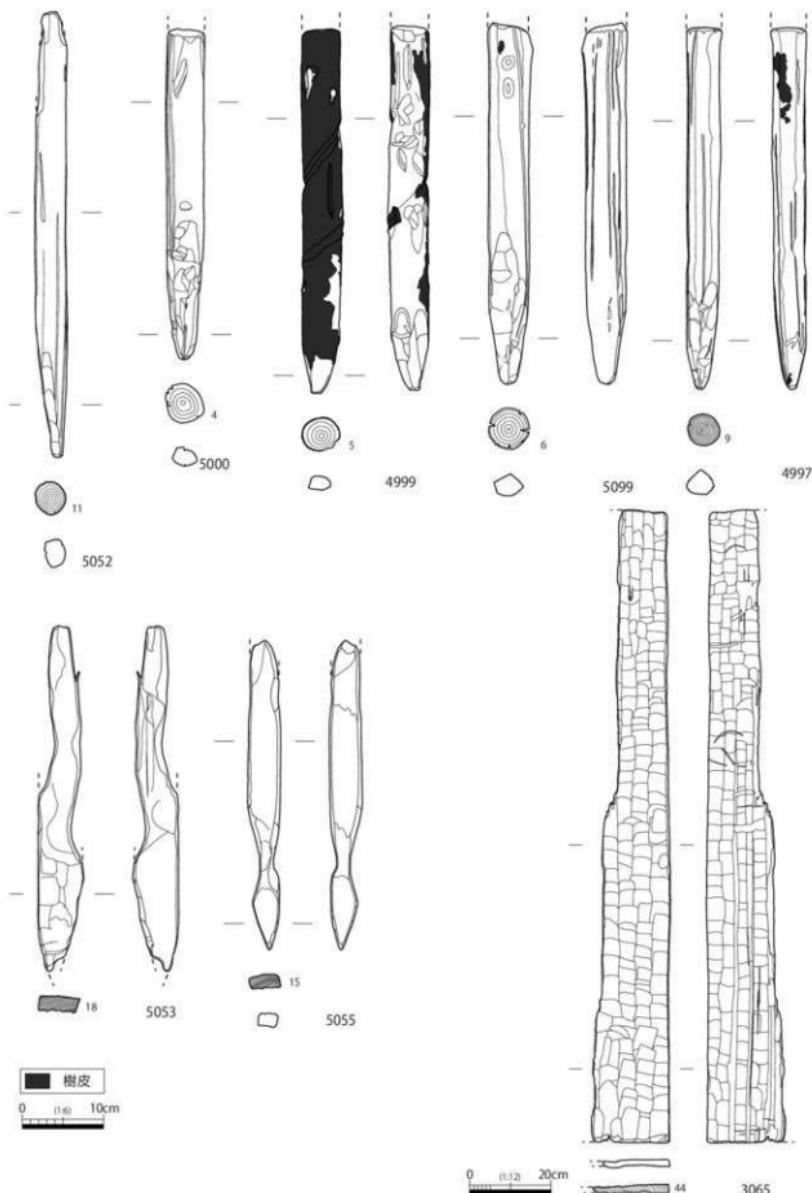
D 4グリッドで、西に約5mの長さで検出した。2 S-830から南に約2m離れて、概ね平行に掘削されていた。2 S-830と同様に、4ライントレンチ手前でちょうど護岸が途切れて、4ライントレンチから東には護岸は続かなかったが、4ライントレンチから東側は護岸の無い溝があり、これに接続すると考えられる。ただし、規模・構造が2 S-916とは明らかに異なるため、2 S-901として別に報告する。溝の規模は、延長約4.45m、幅約0.25～0.3m、深さ約0.2mである。機能部の断面形は逆台形状で、掘方部分は底面から緩やかに立ち上がる椀形である。溝の埋土は、極粗粒砂から極細粒砂で褐色シルトのラミナが認められる。

東端から西に約3mまでは横板と杭による護岸が設置されており、そこから西側約1.45mは北岸の底部付近に杭の痕跡が認められたが、横板は確認できなかった。ただし、平面、断面では南岸に極細い灰白色の粘土の帯が東側の横板から続くライン上に延びており、元々は護岸があったと考えられる。西端は2 S-1141に接続すると考えられる。DD'断面よりも西側部分は、検出時には認識できなかつたが、2 S-1141の調査において、上層掘削中に輪郭が明瞭になった。よって、2 S-1141の最終的な埋没よりも、2 S-916の方が早く埋没していたと考えられる。

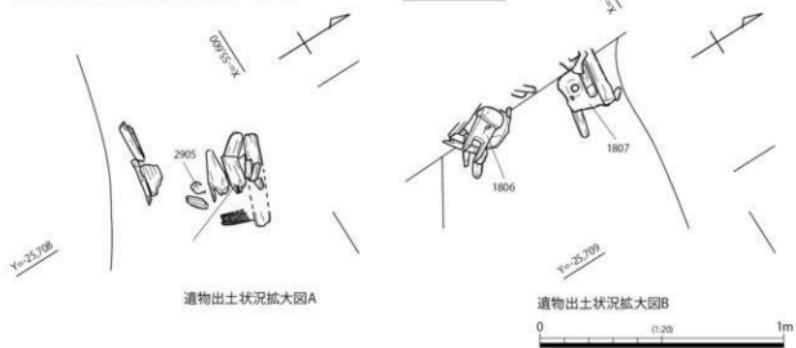
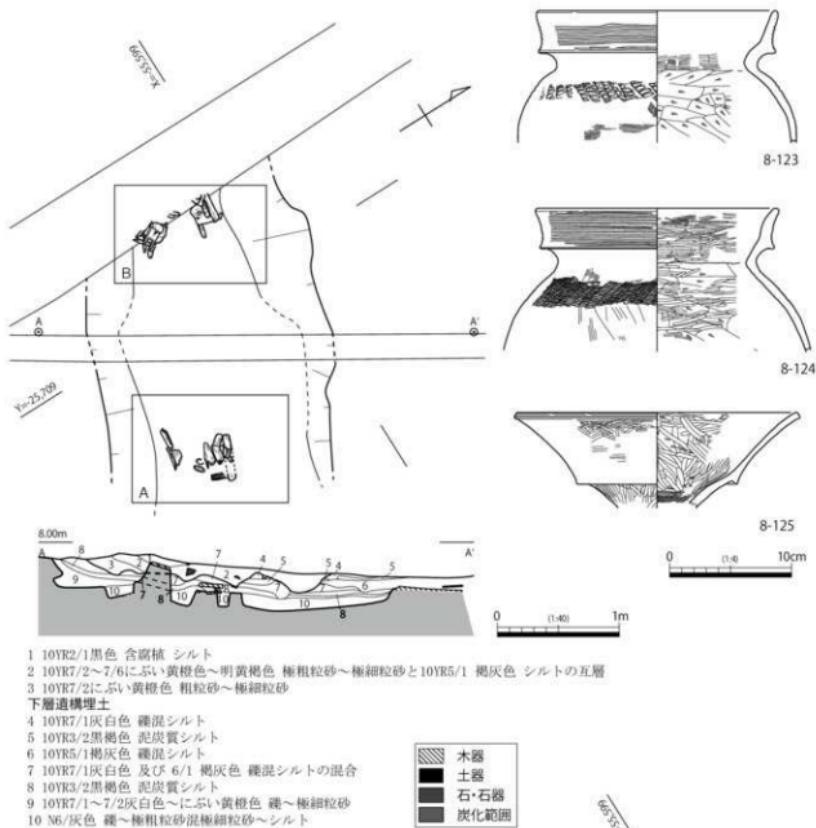
また、横板の無い北岸に残る杭は、溝底面から突き出した部分が腐食して大部分が無くなっていたことと、転用材と考えられる板目材を利用していった。このことは、横板の残存部に打設された杭が、底面より上部がしっかりと残っていたことや主に丸太材を用いるあり方とは明らかに異なるため、打設された時期が古いと考えられる。そのことから、西側部分の杭が打設されて一定期間が経過後に、東側部分が追加されたと考えられる。断面観察では、2時期に埋土が分かれる様子は確認できなかつた。南岸も北岸も掘方は地山に相当する地層から掘り込まれており、ほぼ同一場所での行われた作業で、流路の変更はほとんどなかつたと考えられる。

2 S-830と同様に埋土上層で、溝の軸に沿って板材を検出した。折れて、端部が腐食しているため、本来の長さと幅はいずれの材も不明だが、2 S-830と同様に蓋の可能性も考えられる。ただし、溝を横断して蓋を支える部材やその痕跡は確認できなかつた。溝の蓋であるとすれば、溝と同程度の幅の板材を横板ないし杭に直接載せる構造が考えられる。

第9節 第8面(VI層下面)の調査

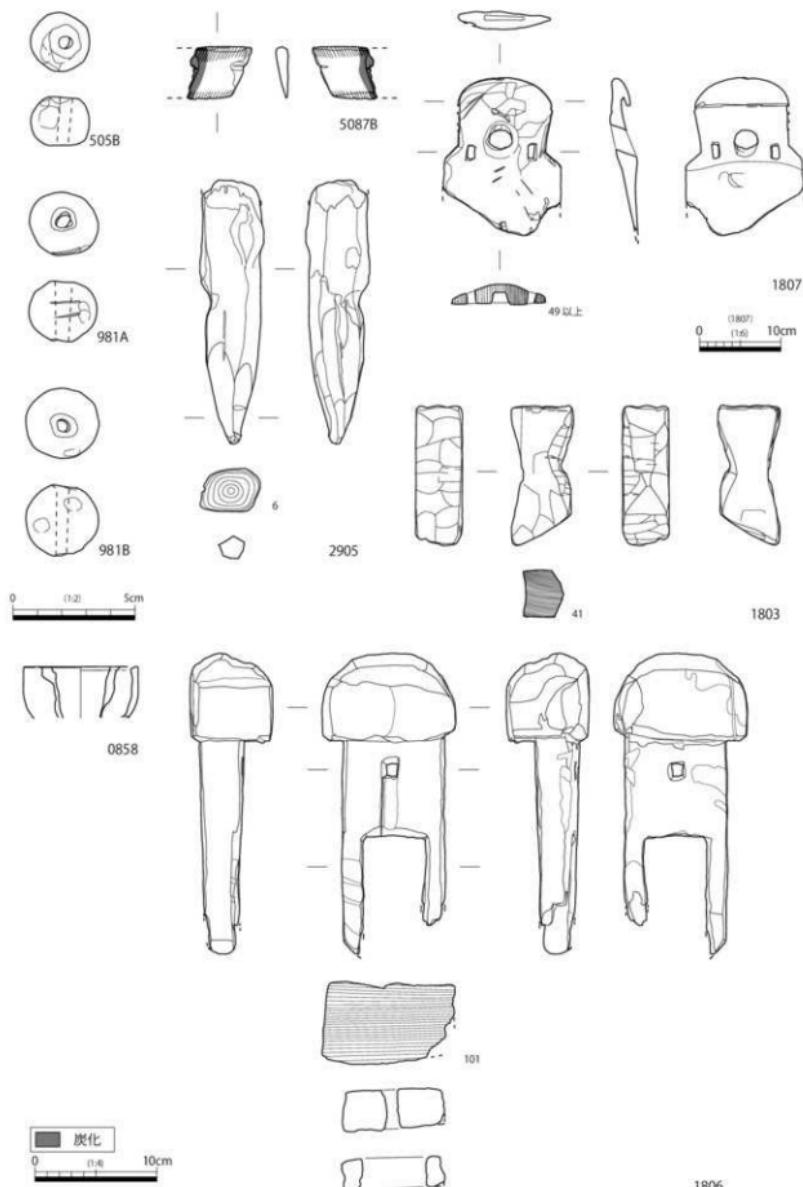


第IV-9-61図 2区 第8面 流路(2S-916) 出土遺物



第IV-9-62図 2区 第8面 溝(2S-901) 平・断面図、遺物出土状況拡大図及び出土遺物

第9節 第8面(VI層下面)の調査



第IV-9-63図 2区 第8面 溝(2S-901) 出土遺物

北岸の護岸は、長さ約3m、幅約0.2mの横板1枚を4本の杭で固定するものである。横板の西側部分が腐食して無くなっていることと、さらに3本の杭があるので、本来は溝の西端まで横板はあつた可能性が高いと考えられる。ただし、西端から2本目の杭は溝中央寄りに打設されており、横板の固定とは直接関係無いと考えられる。杭と杭の間隔は約0.45～1.0mで一定でない。しかし、横板の東端に合わせて打設された4997の杭に隣接する杭(5000)を除いた間隔は、東端の杭を基準に1本目、3～5本目の杭の間隔は約1.0～1.1mで一定である。2本目は補強の目的で打設されたものかもしれない。西端の7本目は、横板の西端に合わせて打設された可能性も考えられる。

南岸の護岸は、長さ約2.9m、幅約0.2mの横板1枚を4本の杭で固定するものである。横板の東端は4ラインレンチ部分で終わって、東側には続かない。西側部分は腐食して無くなっているが、平面及び断面で横板の続きを灰白色の極細い粘土の帶で確認できるので、横板が延びていたか、あるいは他の材による護岸があったと考えられる。しかし、北岸に打設された杭4本は、溝の東側半分に偏つておらず、西側半分では杭の痕跡を確認できなかった。杭は、横板の東端に合わせて打設されており、北岸と同様の構造である。ただし、杭の間隔は、東側から順に約0.56m、0.8m、0.2mとなり、一定でない。

埋土中から出土した遺物は少なく、甕の口縁部片、護岸材を図化した。甕の口縁部片(8-122)は乙亥正V期のもので、遺構の埋没時期を示すものではないと考えられる。護岸材は杭と建築部材を転用した横板を図化した。杭は横断面形が円形の芯持ち丸太材で樹皮が残存するものと横断面方形の転用材がある。建築部材(3065)は表裏両面に加工痕が顕著である。厚さ約2cmで比較的薄いので、壁材に用いられたと考えられる。(馬路)

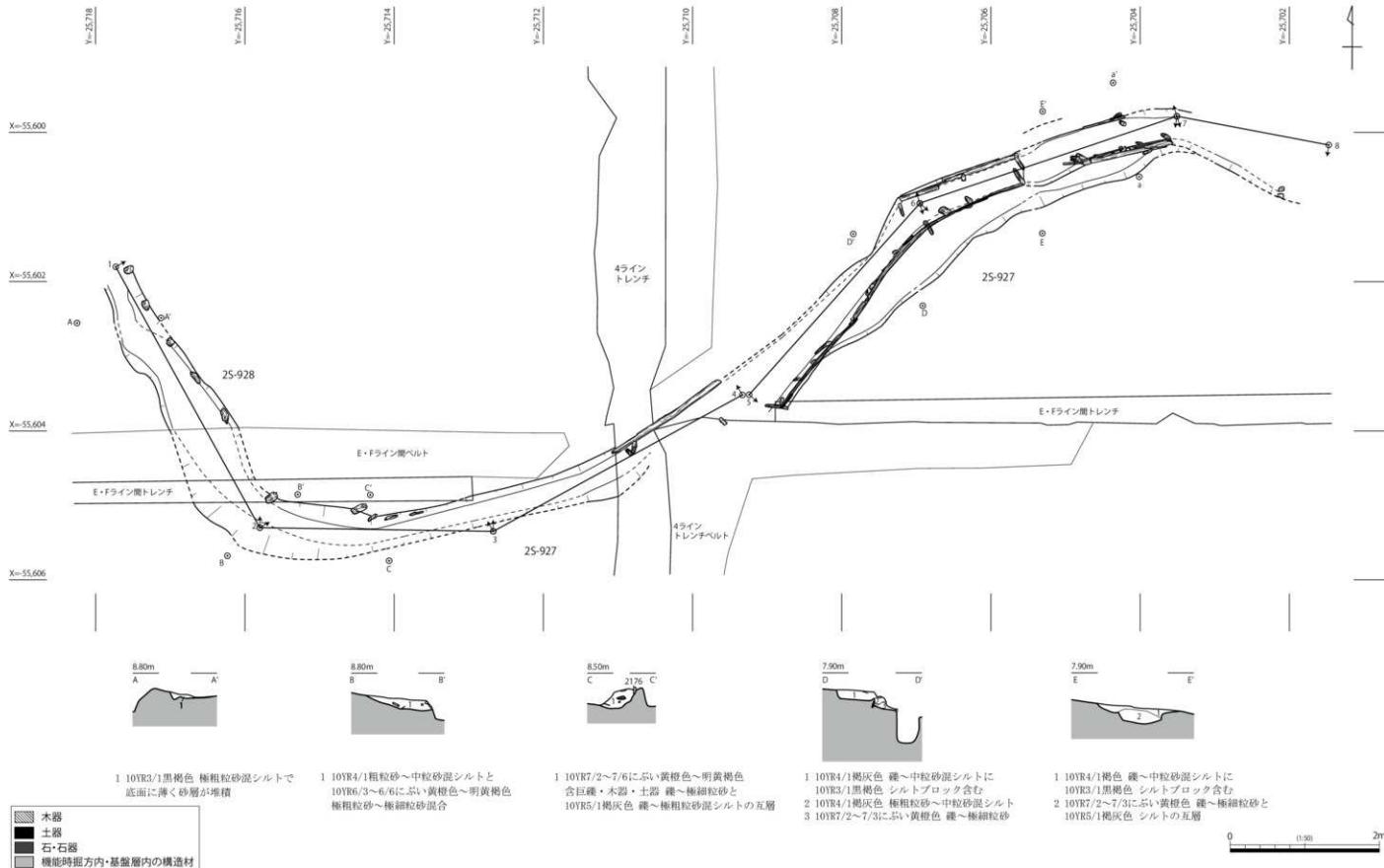
2 S-901(第IV-9-62図)

D3グリッドで検出した素掘りの溝で、4ラインレンチから2S-927の間で検出した。西側は、2S-916から繋がり、東側は2S-927に繋がると考えられる。検出延長は約2.4m、幅は約2.0m、深さは約0.47mである。断面形は概ね皿形を呈するが、底面は凹凸がある。レンチで確認した断面では、重複して存在する下層の溝ないし流路があり、その間に土壌層(4、7層)の上面までを埋土とした。底面にある4つの凹みの幅が約0.3mで、2S-916の溝幅が0.25～0.3m程度であることを考慮すると、1回の溝ではなく、複数回にわたる溝の痕跡だったと考えられる。断面で明確な切り合い関係を把握できなかったが、南端の3層が埋土の最下層に相当するから、南端が最も古い段階だったのは確かである。埋土中から出土した、乙亥正V～VI期の甕(8-123、124)、器台(8-125)を図化した。

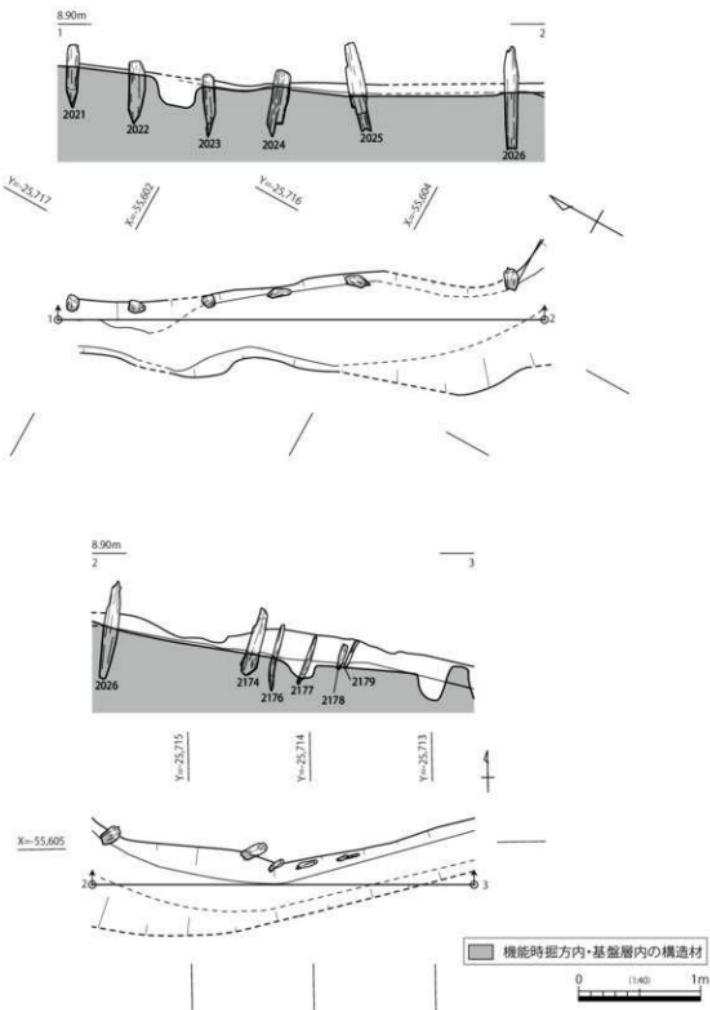
農工具は木包丁(5087B)の破片がある。紐孔をつなぐ溝があるので青谷上寺地遺跡の分類のB類と考えられる。1807は直柄平鋤で刃部を欠損する。柄孔よりもやや下に左右一对の方孔を持つ。前面頭部にも袋状の泥除け装着装置を有する。

1803は木錐、0858は椀、1806は栓である。山形の頭部に断面方形の軸部が付き、青谷上寺地遺跡の分類ではB2類に該当する。下端は欠損し、方孔が穿たれる。頭部と孔の間には一辺約1.5cmの方孔を穿つ。出土時にはこの孔には別材が嵌まっていたが、保存処理の過程で脱落してしまった。2905は杭である。芯持ち丸太材の一端を尖らせる。(馬路)

2 S-927・928(第IV-9-64～75図)

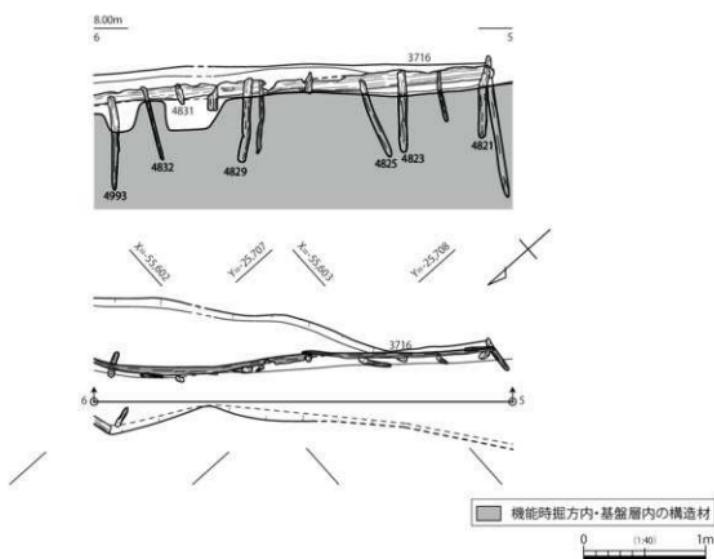
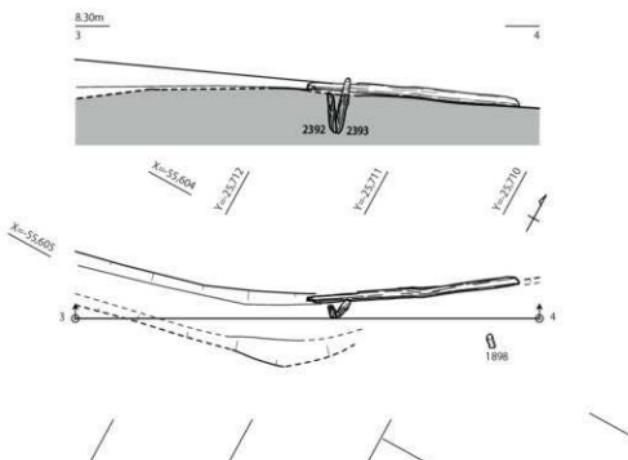


第IV-9-64図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 平・断面図



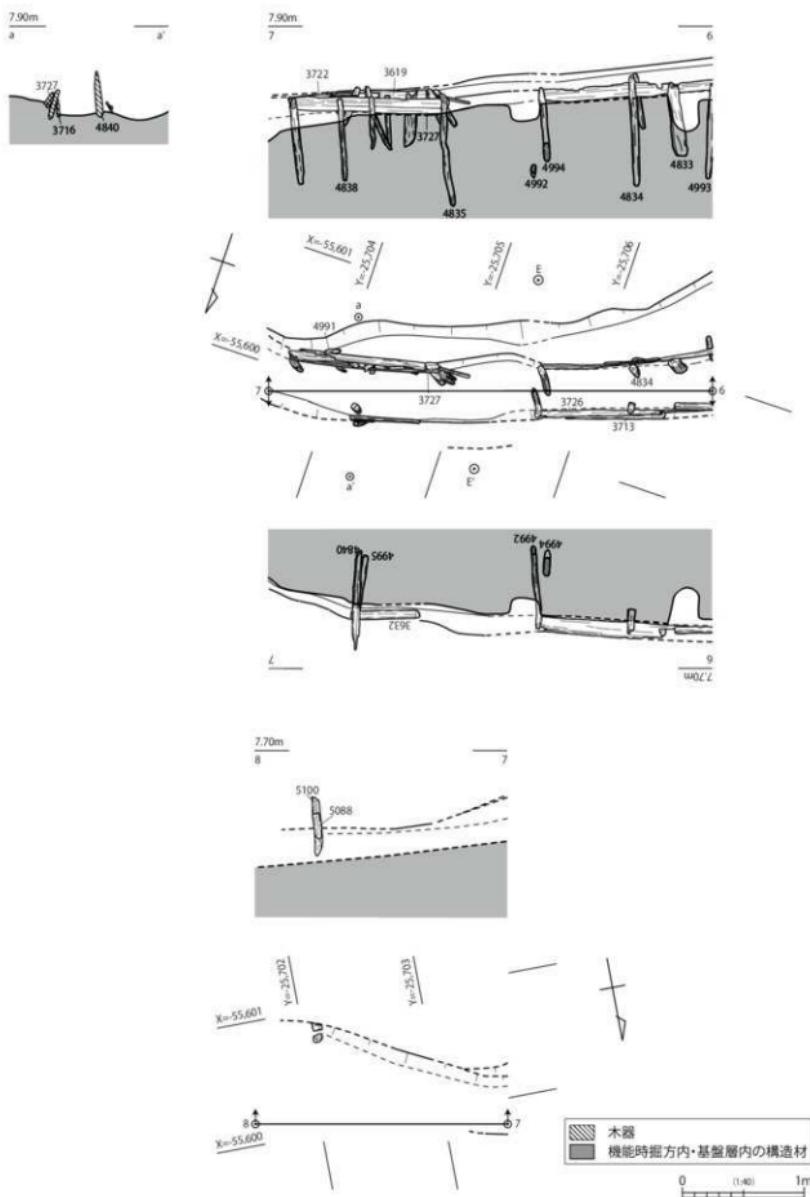
第N-9-65図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 平・立面図1

3ラインから5ラインの間で検出した一部に護岸を伴う溝で、E4グリッド内を2S-1141から南向きに流れる部分を2S-928、東へ屈曲してからを2S-927と呼び分けたが、一続きの溝である。規模は、検出延長約19.8m、幅約0.4～0.8m、深さ約0.27mである。また、E3グリッドでは、2S-927と素掘りの溝が切り合っていたが、同時に掘削して調査を行った。素掘りの溝の方が新しく、護岸のある部分よりも南側を流れている、この部分でのみ南岸の肩部を検出できた。北岸の肩部は、平面で



第IV-9-66図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 平・立面図2

第9節 第8面(VI層下面)の調査



第IV-9-67図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 平・立・断面図3

は確認できなかつたが、E E' 断面の1層が対応すると考えられるので、幅は約1.1m程度の溝だつたと考えられる。埋土は、砂礫混じりのシルトである。4ライントレーナー断面ではこの溝に対応する埋土は認められなかつたことから、西側の状況は不明である。

2 S-928の埋土は薄く残存するだけだつた。A A' 断面では底面付近に薄く砂層が堆積していたが、基本的には黒褐色のシルトで埋没していた。埋没の最終段階には、流れが停滞していたと考えられる。東岸のみ杭列があつたので、東岸には護岸があつたと考えられる。西岸では護岸の痕跡を確認できなかつた。東岸で検出した杭は、6本である。杭の間隔は約0.53～0.63mで概ね一定間隔で打設されていた。

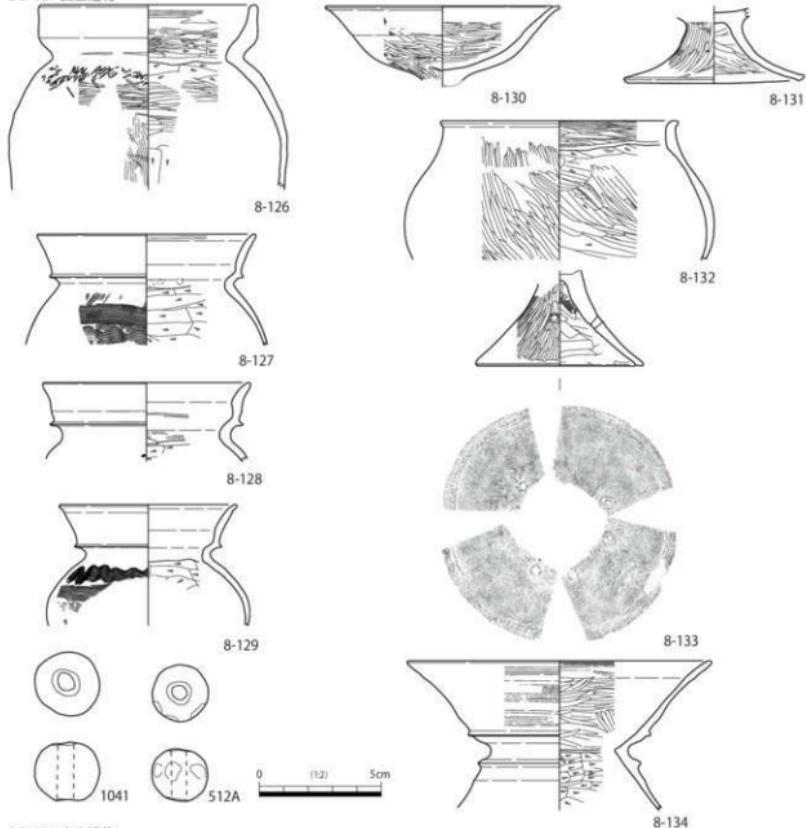
続く2 S-927は、E 4グリッドで、上面の2 S-763と重複するため、南岸は残存しなかつた。4ライントレーナーまでの間は北岸に杭が5本打設されていて(立面ポイント2・3間)、西側の杭3本(2174、2176、2177)は、しっかりと打ち込まれていたが、残りの2本は細く短い杭で、打ち込みが浅く護岸のためのものかどうか定かでない。4ライントレーナーで検出した横板と2177の杭の間は護岸が無かつたと考えられる。立面ポイント3・4間では、4ライントレーナーで横板と杭2本(2392、2393)が出土した。横板は長さ約1.7m、幅約0.08mの細い板材である。杭は、2本とも4ライントレーナー内で近接して打設されていた。この横板に対して、杭はこの一か所しか確認できなかつた。続く立面ポイント5・6間の北岸では、護岸の痕跡は確認できなかつたが、南岸は横板と護岸が認められる。南岸は長さ約1.57m(3716)と約2mの横板があり、いずれも幅0.13m程度の幅の狭い板材で、背後からの土圧でやや内側に傾いていた。この内、東側の横板は、ちょうど立面ポイント6付近で屈曲し北東から東北東へと向きが変わる。立面ポイント5・6間の南岸は、横板(3716)の西端が南北方向へ開いており、北岸のラインとスムーズに繋がらない。4ライントレーナー付近で屈曲する可能性もあるが、4ライントレーナー断面で確認した埋土の位置は北岸とほぼ平行になり、やはり横板(3716)とはスムーズにつながらない。横板(3716)の西端の延長上は、南側丘陵の地山の張り出し部があり、この張り出し部の方から別の溝が接続していたと考えられる。

杭は12本検出した。西端には、横板を挟むように溝の内側と外側に杭が2本打設されていた。西から6本目、9本目、10本目の3本は打ち込みが浅い。杭と杭の間隔は約0.25～0.47m程度で、最も狭いところは0.11m程度である。杭と杭の間隔はあまり一定しないように見えるが、横板の両端を留めるために打設された杭とそれに隣接する杭の間隔はやや広く、横板の中央部をとめる杭の間隔は、それよりも狭く0.3m程度という一定の規則性がある。

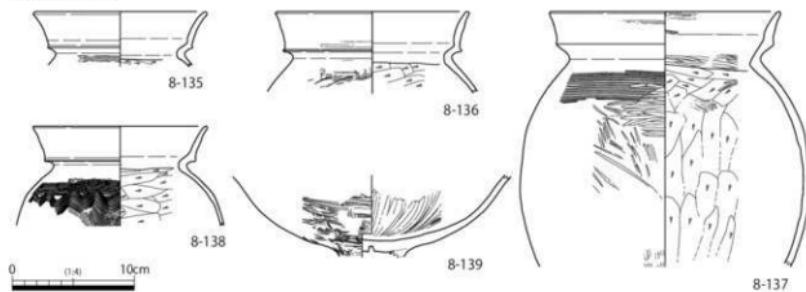
立面ポイント6・7間は、途中でとぎれるが南北両岸で横板が残存した。南岸の横板は西側の立面ポイント5・6間から続く長さ約3.0mの横板が1枚あり、その東端から約0.75m離れて、長さ約1.3mの横板1枚(3727)があり、その背後で長さ約0.7m(3619、3722)の横板を2枚検出した。溝の内側の横板(3727)と外側の横板(3619、3722)は前後2列に平行に並び、間に杭が打設されていた。内側の横板に伴う杭は、隣接する横板に伴う杭と同程度の深さまで打ち込まれているので一連の施工によると考えられる。外側の横板の天端は内側の横板よりも若干底面からの高さが高く、伴う杭の打ち込みは内側よりも浅いので、後から補修ないし補強の目的で打設された可能性が高い。一連の内側の横板に伴う杭は8本ある。西側の横板に伴う杭は、横板の東端を留める杭(4994)とそれに隣接する杭(4834)との間隔が約0.7mと広い以外は、5・6間と同様に横板の中央部は約0.3m間隔で打設されている。東側の横板の内、内側の横板に伴う杭は4本あり、横板の両端を留める杭(4839、4835)とそれに隣接す

第9節 第8面(VI層下面)の調査

2S-927 出土遺物



2S-928 出土遺物



第IV-9-68図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 出土遺物

る杭の間隔は広いが、横板中央部を留める杭2本の間隔はそれよりもやや狭い。外側の横板に伴う杭は5本あり、東端には横板の背後に1本杭(4991)があるが、伴うものかどうか明確ではない。横板に伴う杭は、約0.1～0.2m間隔で打設されていた。

北岸の横板は合計4枚ある。西側から2枚目(3726)と3枚目(3713)は、前後に重なっていた。溝の外側の板(3713)の方が長さ幅共に短く、内側の板にはほぼ隠れてしまい、杭も伴わない。設置された目的はよくわからない。西端の横板は長さ約0.55m、2枚目の横板は長さ約1.2mで、約1m間を空けて、長さ0.56mの横板がある。いずれの横板も幅は0.1m前後の細い板材である。これらの横板に伴う杭は4本である。西端の横板は、斜めに外側に倒れた状態で出土し、原位置を保っていない。おそらく、横板の西端を留める杭が立面ポイント5-6間に1本だけしかなかったためと考えられる。その東隣の横板に伴う杭は、2本である。横板中央部に打設された杭は短く、打ち込みの深さも浅いが、横板の東端を留める杭(4992)はしっかりと打ち込まれていた。ただし、横板の西端を留める杭は無かった。東端の横板に伴う杭は2本あり、横板の東端を内側(4840)と外側(4995)から挟むように打設されていた。

立面ポイント7-8間は、護岸があったかどうかはっきりしないが、南岸に1か所だけ杭を前後に打設した場所がある。

埋土中からは、比較的多くの遺物が出土した。2S-927と928から出土した土器は、乙亥正VI～VII期のものを中心に甕(8-126～129、8-135～138)、高坏(8-130～133、139)、器台(8-134)を図化した。このうち、乙亥正VI期と考えられる甕(8-126、137)はそれぞれ杭の断面内と清掃中に出土した土器である。高坏脚部(8-133)は内面に布の压痕が残る。

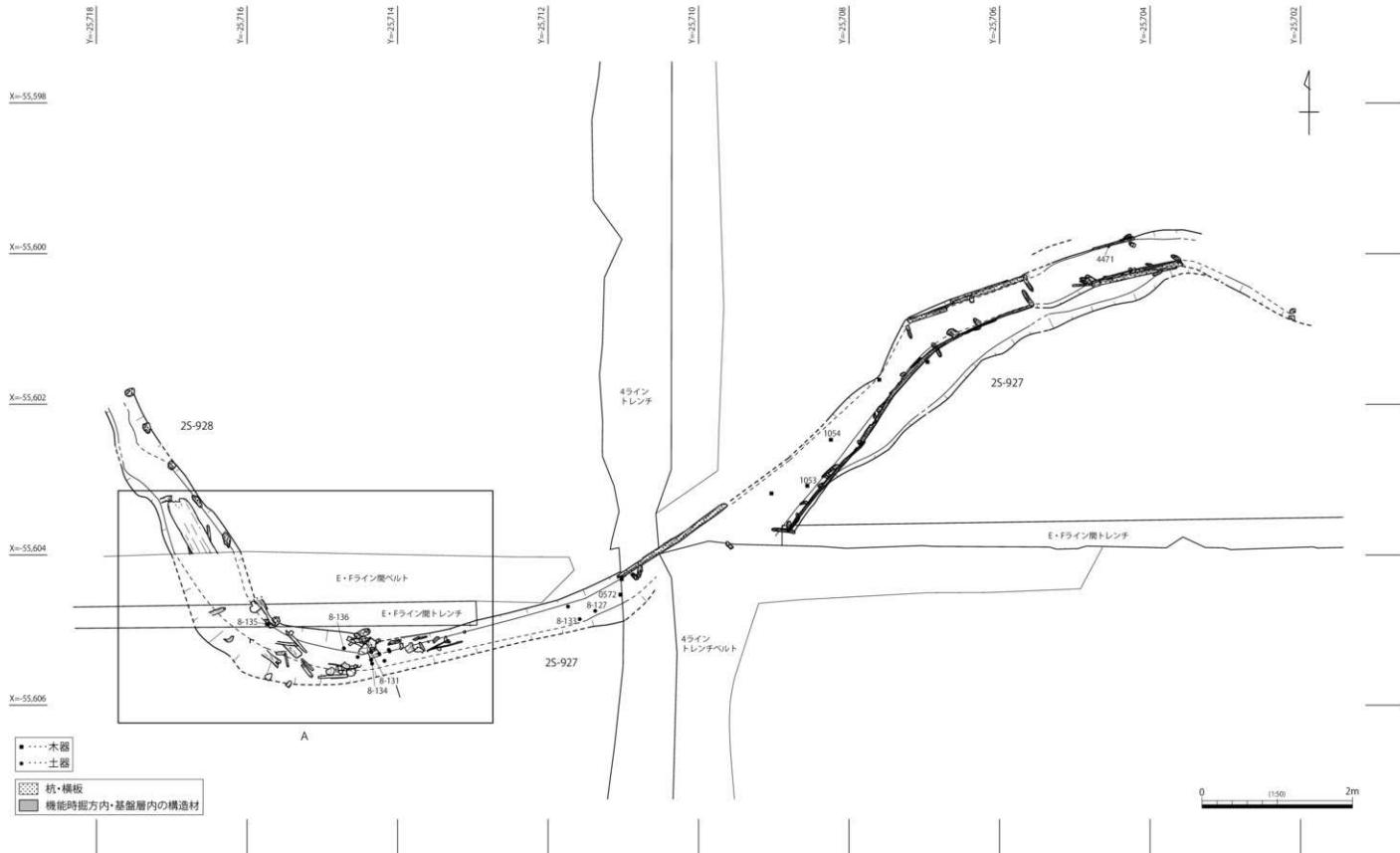
木器の農工具は木包丁(1050)が出土した。紐孔をつなぐ溝がある。青谷上寺地遺跡の分類ではB類に該当する。1053は紡錘車の未製品かと思われる。軸を通す孔が僅かな凹みとして残っている。容器(1054)は高杯の杯部と考えられる。内外面ともに赤彩されている。内面は赤彩の下に薄く黒色を呈する部分があり、黒彩の後に赤彩をしたものと考えられる。0572は底板と考えられる。4471は用途不明で、上半分を欠損している。残存部の下端中央部は台形状に抉られて、両端が脚状になる。杭は芯持ち丸太材のものと横断面方形の分割材がある。芯持ち丸太材の4833と2174は下端を尖らせず、平坦に加工しており、径も他の杭より太いことから、柱材をそのまま転用したものと考えられる。0920は先端が片刃状に扁平に削り出されており、楔の転用と考えられる。2174と4833を除くと年輪数が数本から10本程度のものが利用される一方、転用材は20～100本以上のものが利用されている。(馬路)

2 S-921(第IV-9-76図)

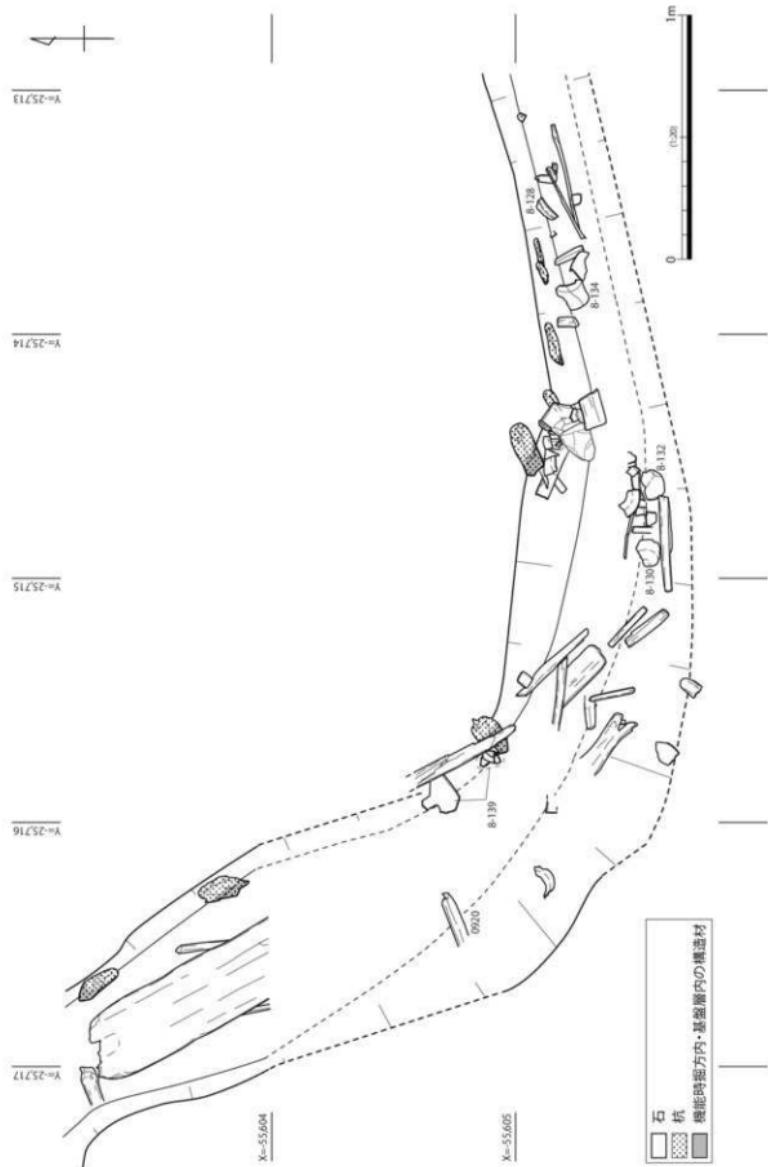
E 4グリッドで検出した素掘りの溝で、北側は削平されて細くなり2 S-1141の手前で途切れる。2 S-923と西側の肩部が重複し、2 S-923の方が新しい。検出延長は約2.2m、幅はA A'断面部で約0.26mである。上部が削平されていると考えられるため、深さ約0.05mと浅く、断面形は皿形である。埋土は暗灰色シルトである。埋土中から遺物は出土しなかった。(馬路)

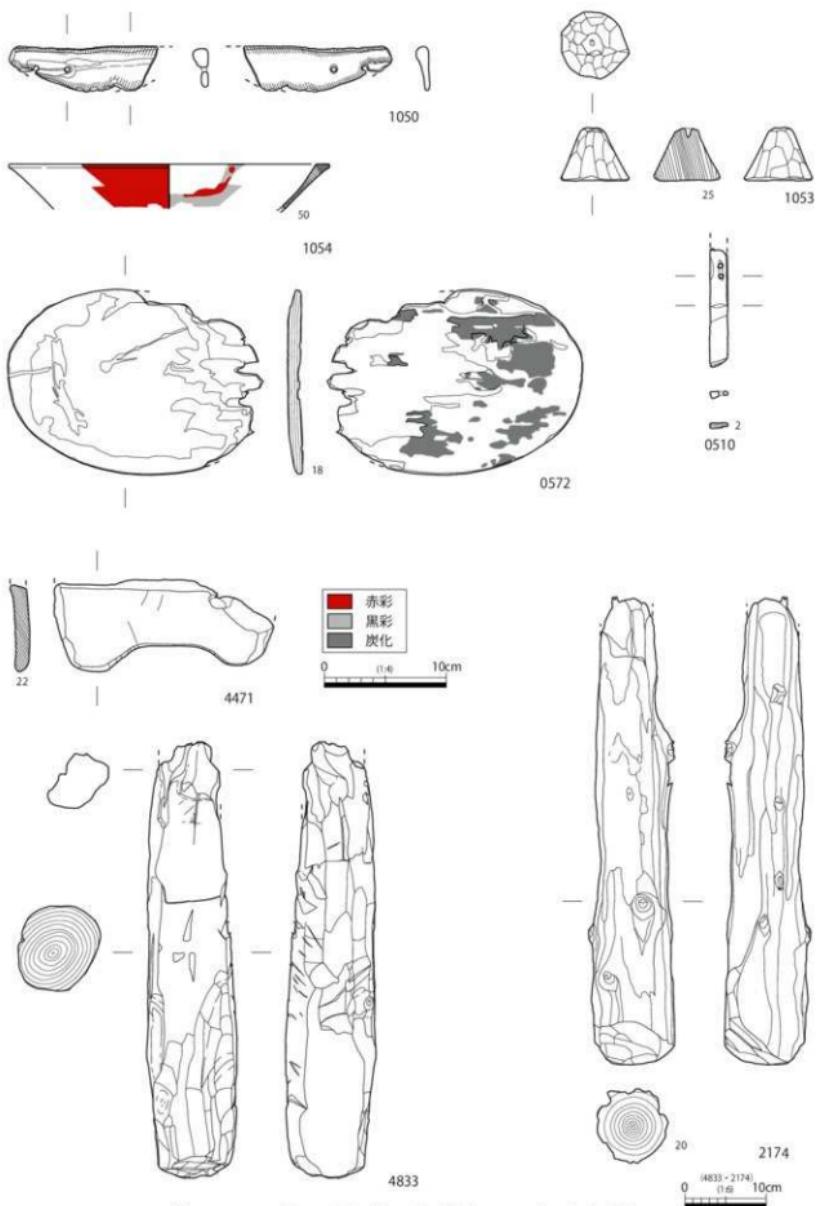
2 S-917・1246(第IV-9-76図)

D・E 4グリッドで検出した素掘りの溝である。当初は、Eライントレンチまでしか検出できていなかったため、Eライントレンチを境に遺構番号が異なるが一続きの溝である。検出延長は約3.7m、

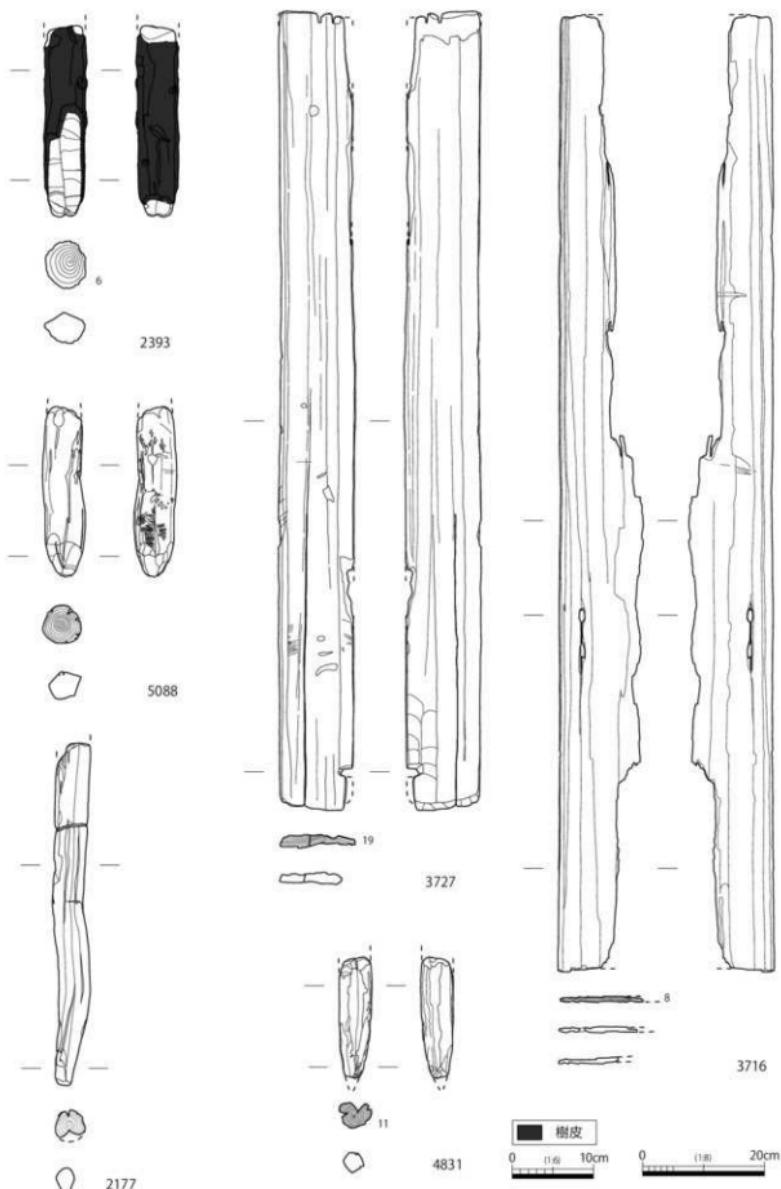


第IV-9-69図 2区 第8面 溝(2S-927・928) 遺物出土状況図

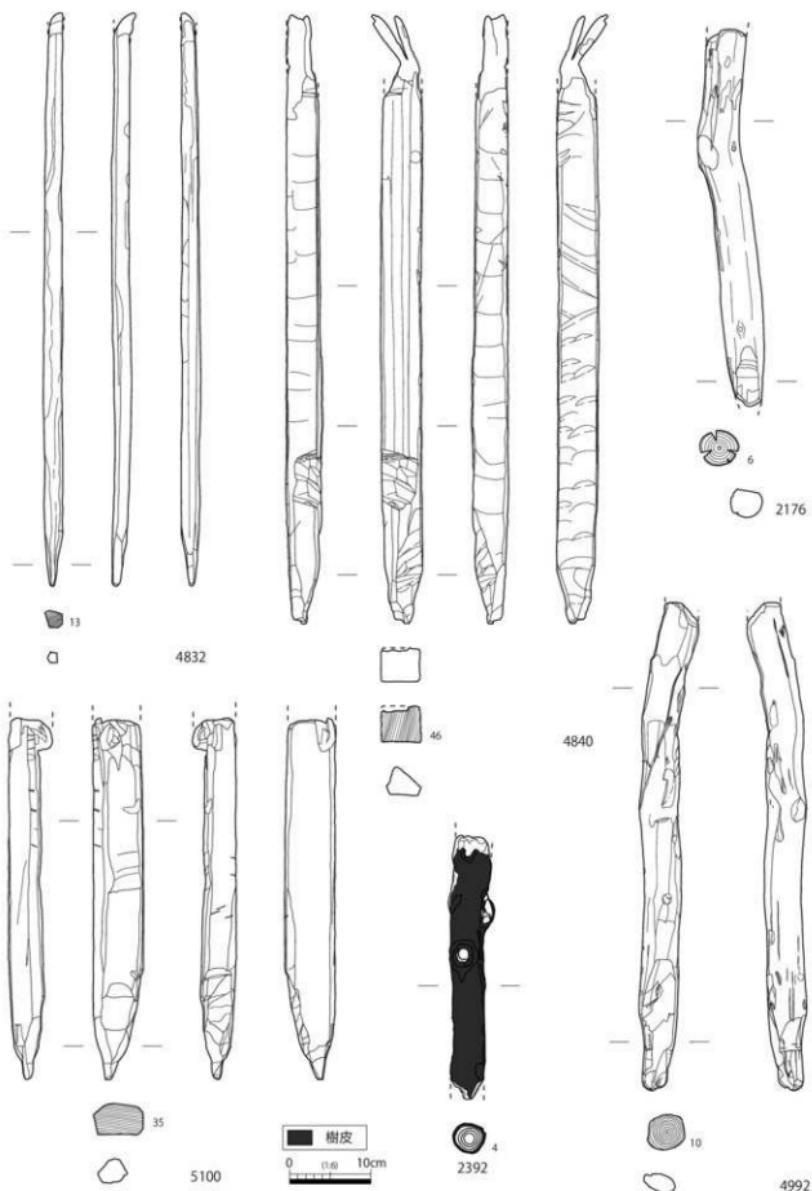




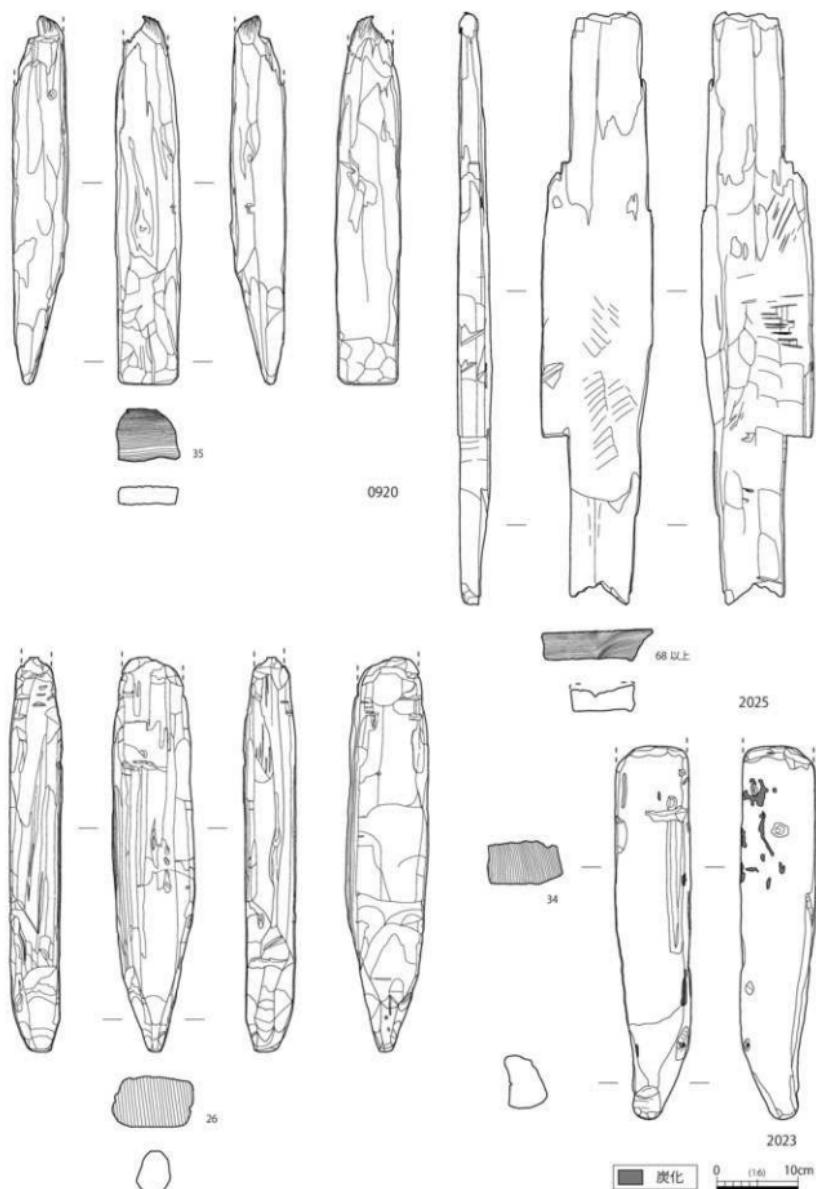
第N-9-71図 2区 第8面 溝(2S-927) 出土遺物 1



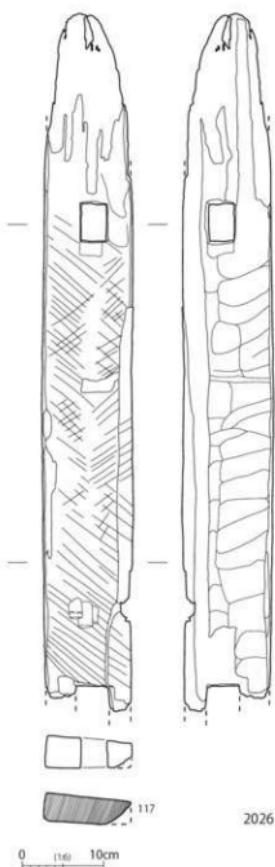
第IV-9-72図 2区 第8面 満(2S-927) 出土遺物2



第IV-9-73図 2区 第8面 満(2S-927) 出土遺物3



第IV-9-74図 2区 第8面 満(2S-928) 出土遺物 1



第IV-9-75図 2区 第8面

溝(2S-928) 出土遺物2

幅は広狭があり約0.4～0.7m、深さは約0.2mである。断面形は皿形ないし椀形である。埋土下層は砂層が堆積しているが、上層は砂礫混じりのシルトが堆積して埋没していた。埋土中からは柱(4472)と考えらる木器が出土した。土器は乙亥正V期の壺の口縁部片(8-140)が出土した。(馬路)

2 S-923(第IV-9-77図)

D・E 4グリッドで検出した素掘りの溝である。検出延長は約38m、幅は約0.43m、深さは約0.14mである。断面形は皿形ないし椀形で、埋土上層は黒褐色を呈しており、2 S-1141の埋没後に埋没したと考えられる。埋土中からは、板状ないし棒状の木器5点が一か所からまとまって出土し、少し南側に離れて板材の隅部2か所に穿孔された木器(1392)が1点出土した。

土器は、乙亥正VII期の壺の口縁部片(8-141、142)が出土した。木器(1048)は、身とするには尖底となり安定しないので、蓋と考えられる。0823は多角形の頭部に軸部が付く。軸部は欠損していて孔を確認できないが、栓と考えられる。1392は平面台形で、中ほどから下端にかけて緩やかに広がる。下側の両端には円孔がある。片側には3孔、もう一方は欠損しており1孔が残存する。1396は、断面方形の棒材の中ほどで片側に膨らませて幅を広げて円孔を穿つ。形態は2 S-245の8691や5055に類似する。(馬路)

3 S-77(第IV-9-79図)

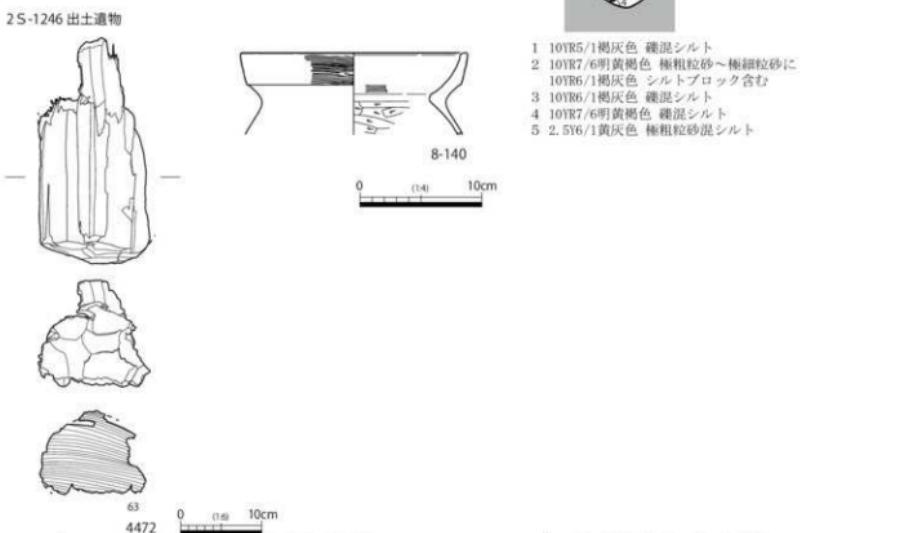
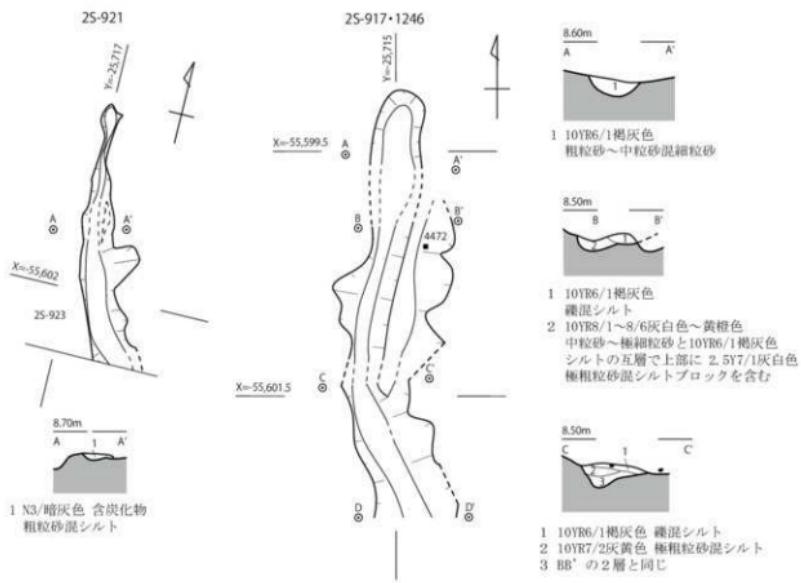
3区で検出した溝である。検出延長は約12m、幅は約0.28m、深さは約0.1m、断面形は長方形である。図化できる遺物は無かった。(馬路)

2 S-1009(第IV-9-80図)

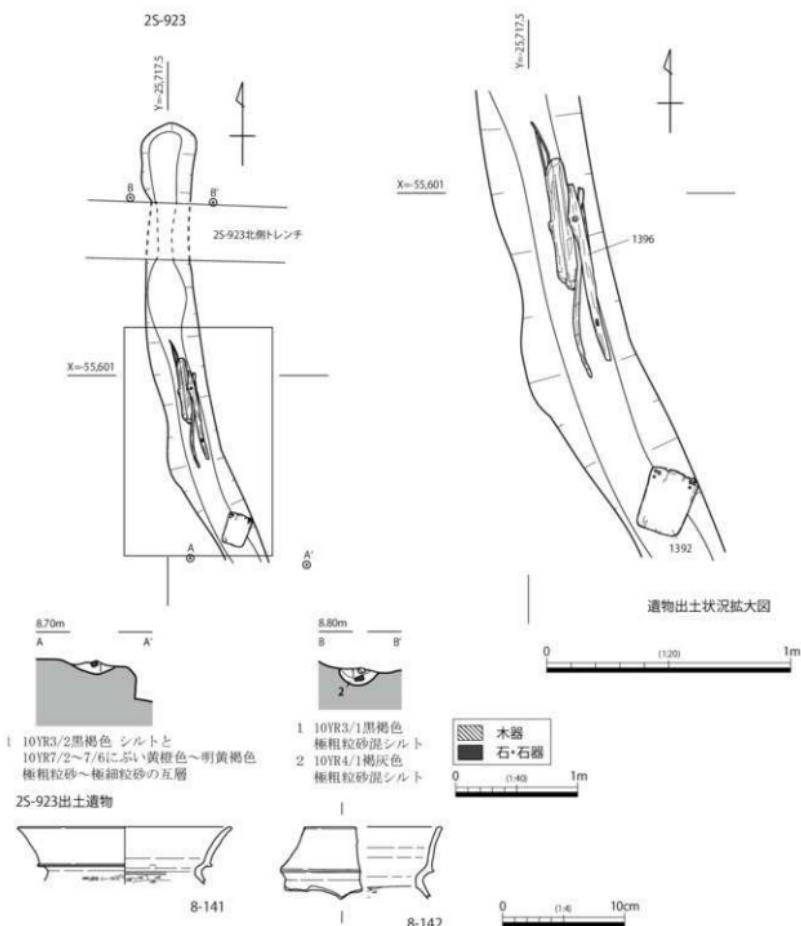
D 8グリッド北側に位置する溝である。幅0.67～1.28m、深さ0.05～0.29mの規模で検出し、北側で平面L字状に屈曲する。底面は北側が僅かに低い。埋土中から壺(8-143)が出土した。乙亥正VII期頃の土器と推定される。(岡野)

2 S-868(第IV-9-81図)

D 8・E 8グリッドに位置する溝である。現場段階では、トレンチから東側は2 S-873として調査した。北西～南東方向へ伸びる溝で、幅約0.30～0.50m、深さ0.05～0.18m程度の規模で検出した。底面はほぼ水平をなす。埋土中から乙亥正VII期頃の特徴を有する壺(8-144)が出土した。(岡野)



第IV-9-76図 2区 第8面 流路(2S-921、917・1246) 平・断面図及び出土遺物



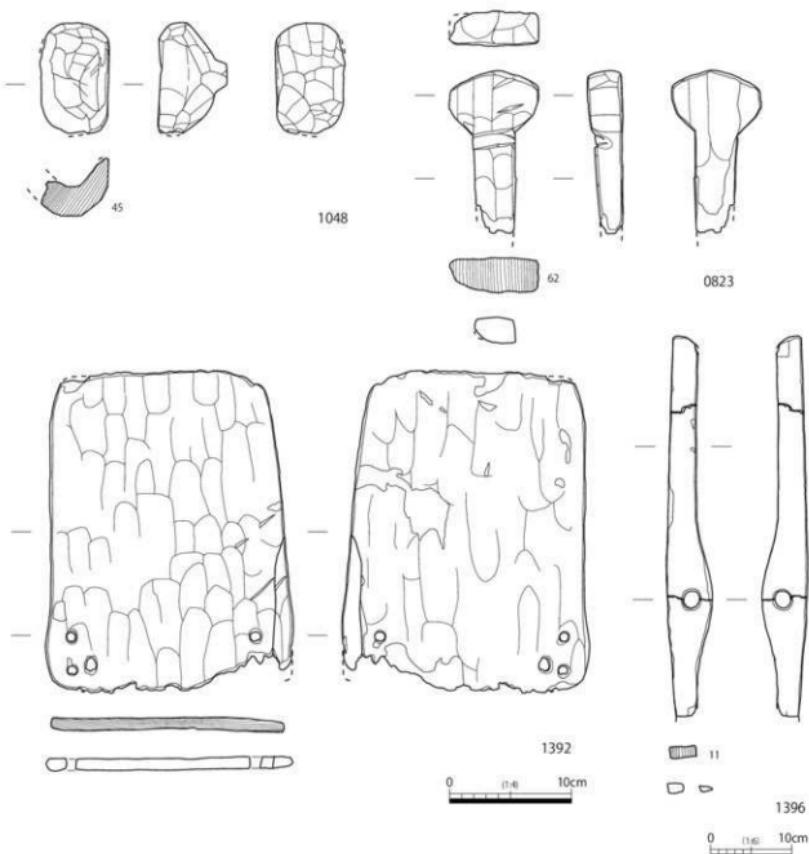
第IV-9-77図 2区 第8面 流路(2S-923) 平・断面図及び出土遺物

2 S-872(第IV-9-81図)

D 8・E 8グリッドに位置する。2 S-868とはほぼ平行する溝である。南東側の2 S-886土坑との前後関係は不明である。長さ22m、幅0.16～0.33m、深さ0.02～0.06mの規模で検出した。底面はほぼ水平である。埋土中から土器細片が出土した。(岡野)

2 S-879(第IV-9-81図)

D 8グリッドに位置し、北東～南西方向に伸びる溝である。中央付近を2 S-890土坑で切られているが、長さ約19m、幅約0.1～0.16m、深さ0.05～0.09m程度の規模で検出した。底面は北東側がや



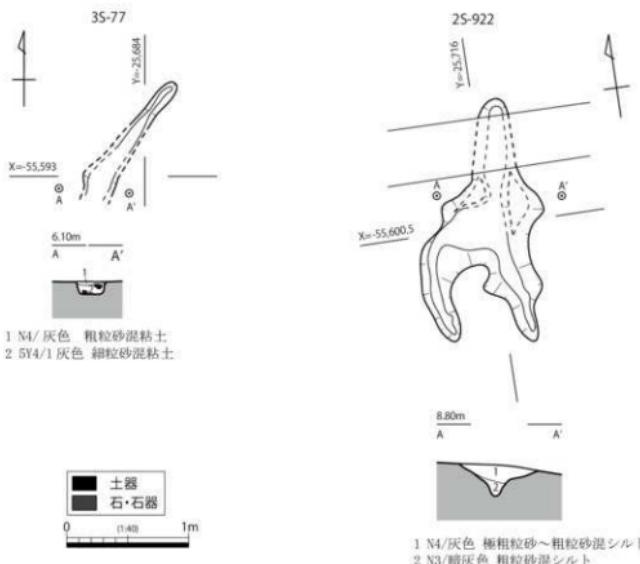
第IV-9-78図 2区 第8面 溝(2S-923) 出土遺物

や高い。埋土中から土器小片が出土している。(岡野)

落ち込み

2 S-922(第IV-9-79図)

D・E 4グリッドで検出した落ち込みである。北端は、2 S-1141につながるように見えるが、溝というよりも平面形は不定形に広がり、断面形も上半部は皿状で下半部が細く下垂する漏斗状である。埋土中からは、乙亥正三～V期頃の土器片が出土したのみで、図化したものはない。(馬路)



第IV-9-79図 2・3区 第8面 溝・落ち込み(3S-77、2S-922) 平・断面図

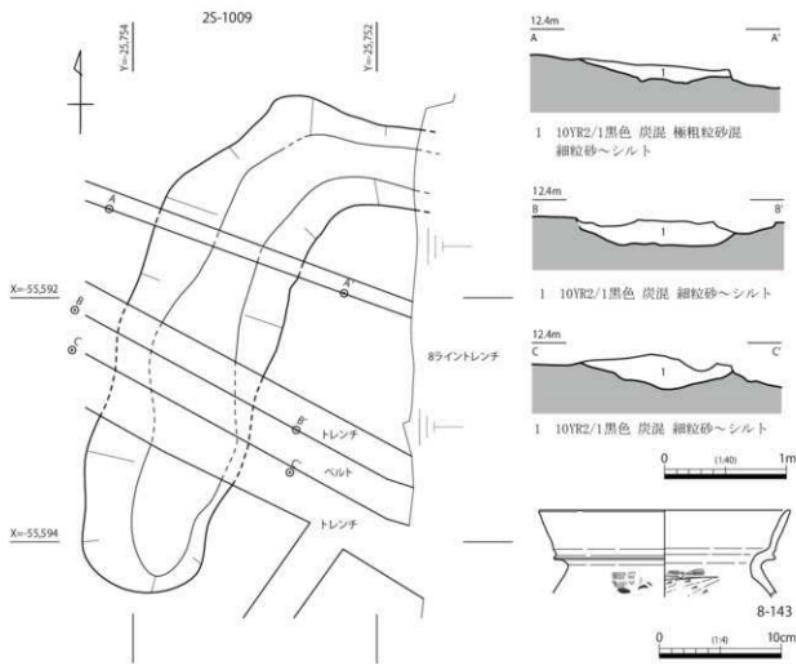
流路

2 S-902(第IV-9-82、83、85、86図)

E 2・3グリッドで検出した流路である。ほぼ、東側溝から3ライントレンチの間に収まり、北側は上面の流路により削平され、南側はE・Fライン間トレンチで途切れて、それより南へは広がらない。

埋土は、下層にシルトが薄く堆積し、それより上位は礫～細粒砂が堆積する。3ライントレンチのすぐ西側に流路の肩があり、その際に杭が1本打設されていたが、この流路に伴うものかどうかは明らかでない。2 S-927などの西側の溝ないし流路につながる可能性が高い。

埋土中からは、比較的多くの遺物が出土した。土器は、乙亥正VI～VII期のものと考えられる壺(8-145)、甕(8-146、147)、台付装飾壺(8-148)、高壺(8-153)などが出土した。木器の農工具は木包丁(0411A)がある。紐孔部は欠損して残存しない。武器は盾(0364、0403A、0404)が出土した。0364と0404は赤彩がある。木目に沿った部分は赤彩が剥がれていた。0539は槽の破片、0405、0444、0628は底板である。0405と0444は表面を黒彩している。0632は棒材の両端部を一回り細く横断面円形に加工した部材である。中央部は断面方形である。9272は、緩く湾曲した棒材の両端を細く尖らせた製品である。下端は杭状に荒く加工されているが、それ以外の部分は非常に丁寧に加工されている。先端に向けてやや細くなり、木錘状の段とくびれを作り出す。先端には円孔が穿たれている。0564は梯子、0403Bは杭、5101と9292は板材である。9292は側辺に穿孔を穿つ。建築部材と考えられる。

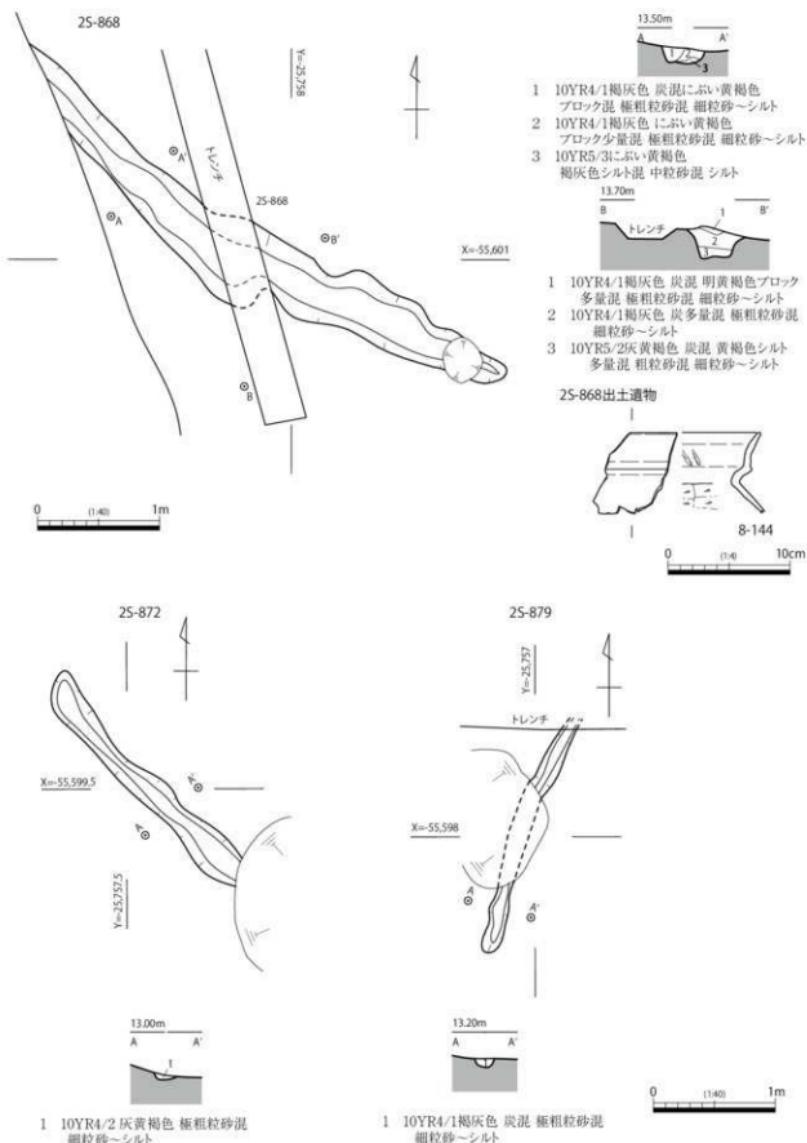


第IV-9-80図 2区 第8面 溝(2S-1009) 出土遺物

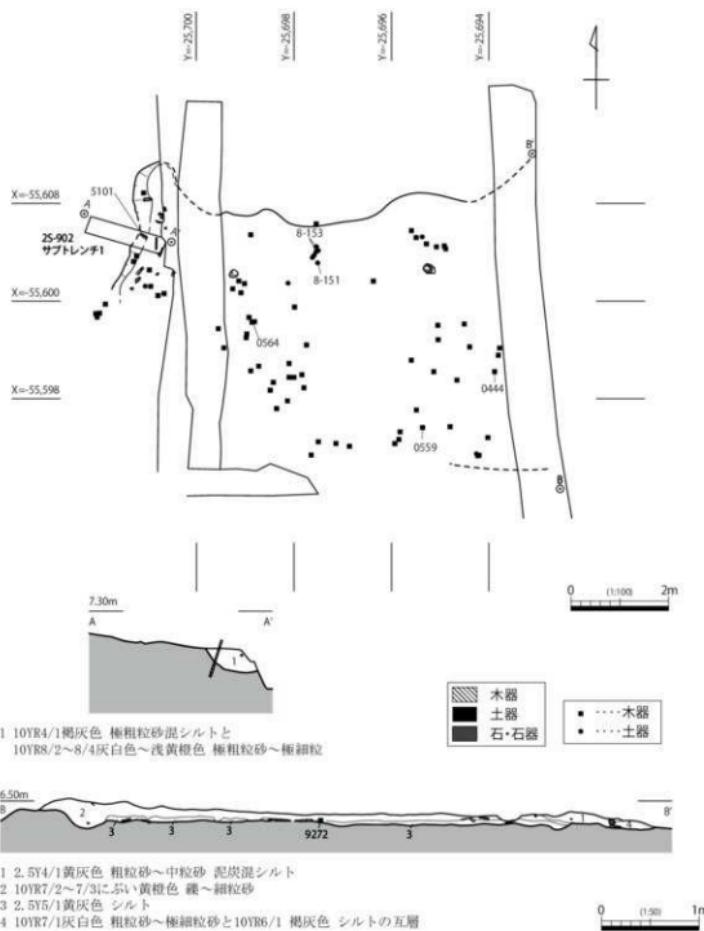
0559は衣笠である。幹を軸にして、4方に伸びた枝を腕とする。図右側の腕木は完存する。青谷上寺地遺跡にも同形態のものが複数出土している。(馬路)

2 S-920(第IV-9-84図)

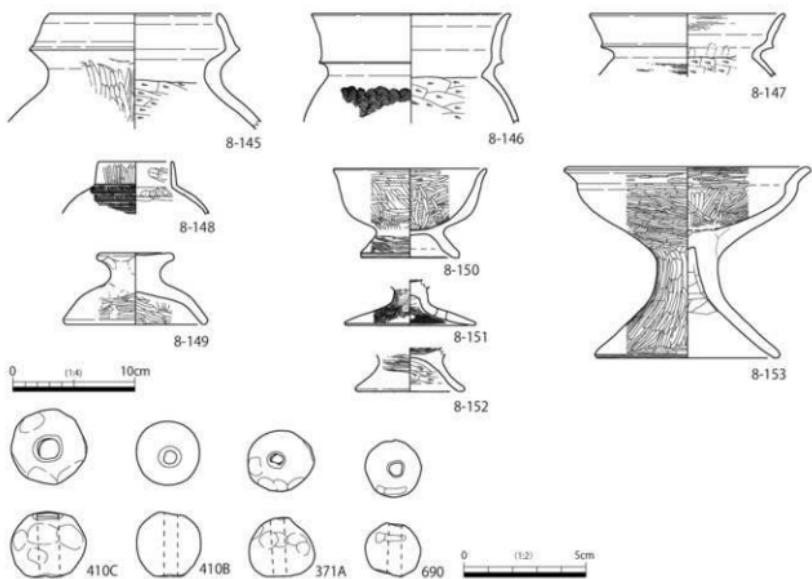
E 4 グリッドで検出した流路で、2 S-928、921、1246の溝を横断して東西に流れる。上流、下流共にこの流路につながる流れは検出できず、不明である。溝からの溢流の可能性が考えられる。検出延長は約4m、幅約0.7mで、底面は凹凸があり断面形も不定形である。埋土から乙亥正VII期の甕の口縁部片(8-154)が出土した。(馬路)



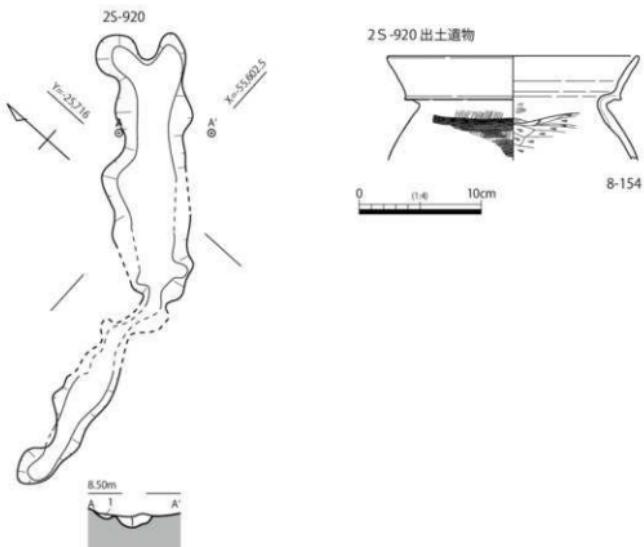
第IV-9-81図 2区 第8面 溝・流路(2S-868、878、879) 平・断面図及び出土遺物



第N-9-82図 2区 第8面 流路(2S-902) 平・断面図



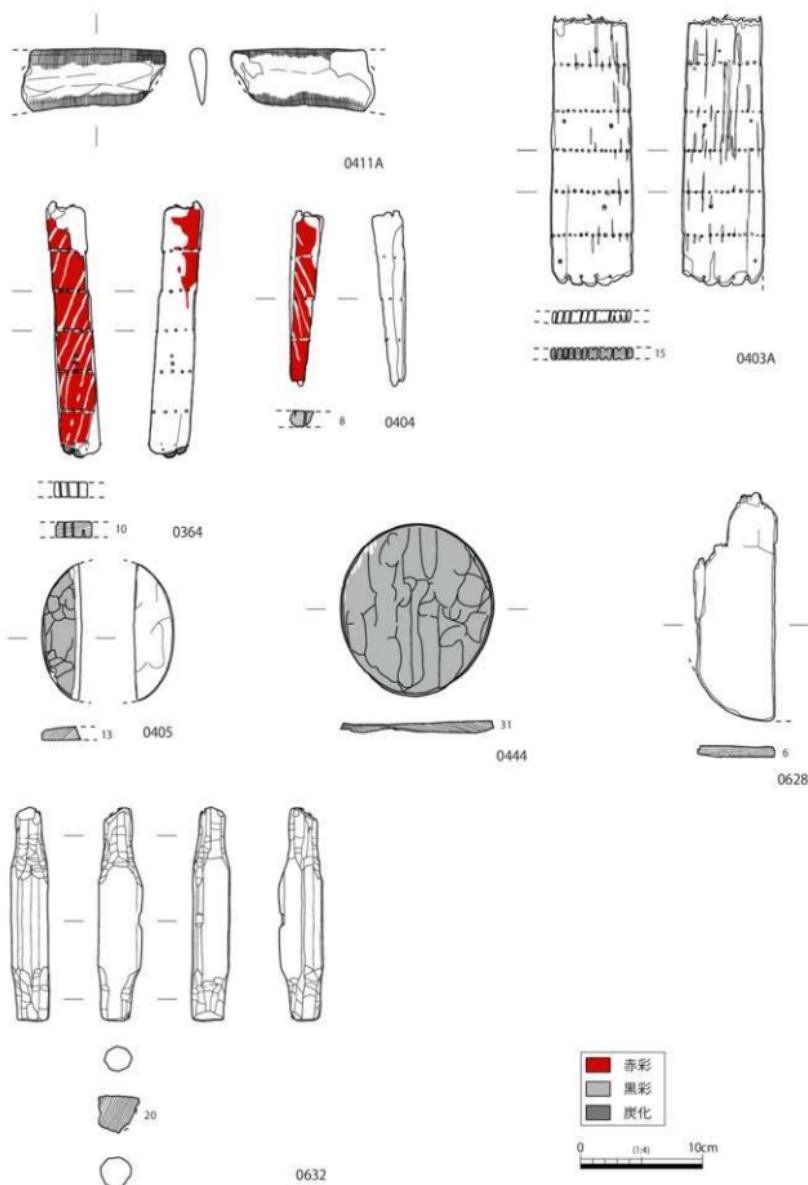
第IV-9-83図 2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物 1



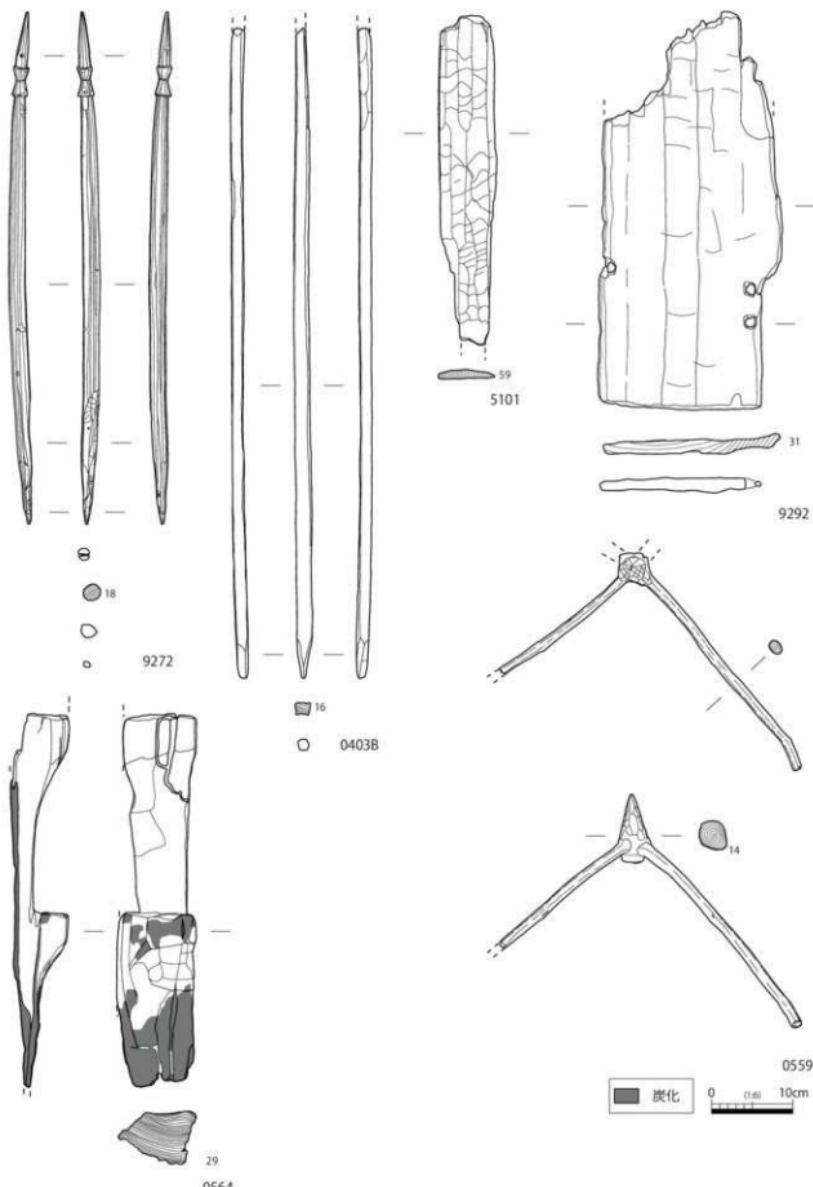
1 10YR8/2灰白色 繩～細粒砂に
10YR6/1褐色 シルトのラミナ

第IV-9-84図 2区 第8面 流路(2S-920) 平・断面図及び出土遺物

第9節 第8面(VI層下面)の調査



第IV-9-85図 2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物2



第IV-9-86図 2区 第8面 流路(2S-902) 出土遺物3

第10節 第9面(VII層下面)の調査

1 VII層出土の遺物(第IV-10-1~4・6図)

VII層相当の包含層からは、壺(9-001~003)、甕(9-004~018)、高坏(9-022~024)、結合土器(9-025)や蓋(9-026、027)、低脚坏(9-028)、器台(9-029~031)、甑形土器(9-032)、甑(9-033)が出土した。石器は3区から安山岩製の石鍬(S7196)が1点出土した。木器は、全体に炭化した小型工具の柄頭(7053)と考えられる破片が出土した。上端は欠損している。上端から下端に向けて徐々に幅が広くなり、図の表面右下の方がやや広がる。表面には、欠損部の直下には細い3条の突帯が作り出され、下端側にも2条の突帯が作り出されている。容器類は、底部又は蓋の破片(6630)が出土した。長径8.8cmと小型の楕円形で、2本1対で側面から8か所、合計16本の目釘があったと推測できる。青谷上寺地遺跡にも、ヒゴを編んだもので外周を覆い目釘で固定したとされる類似品がある。6630もヒゴなどで外周が覆われていたのかもしれない。1394は花弁高杯の杯部の破片で、外面は赤彩、内面は黒彩する。小片のため、全体形はわからないが、花弁の装飾が2つ大きく残存し、左端に3枚目の花弁の端がわずかに認められる。これらの花弁の大きさと位置関係から、5弁の装飾だったと復元できる。内面には加工痕が明瞭に残存する。2186は底板で、一部炭化している。1262は平面形が台形の板材で、指物の箱ないし箱形の部材と考えられる。両側縁には欠き込みがあり、右側縁には穿孔が3か所ある。1181は中心部に径約1cmの軸が残存する。1189は、多枝付木製品である。細身の横柾状の軸部の柄と身の境目辺りに4本の枝が等間隔に差し込まれている。1259Bと1181は紡錘車と考えられる。1259Bは、2S-927の1053と同様に紡錘車の未製品の可能性がある。6616は断面方形の厚みのある材の上端左寄りに柄状の部分が作り出されている。1256と1259Aはそれぞれ何かの部材と考えられる。2181は板材に樹皮を通す長方形の孔を2つ開けて、樹皮を4重に巻いている。板材と樹皮の間には隙間があるので、幅約1cmの別材を繫縛していたと考えられる。表裏両面に別材が付いていたのか、片面だけかはわからなかった。(馬路)

2 第9面の遺構(第IV-10-5・7~71図)

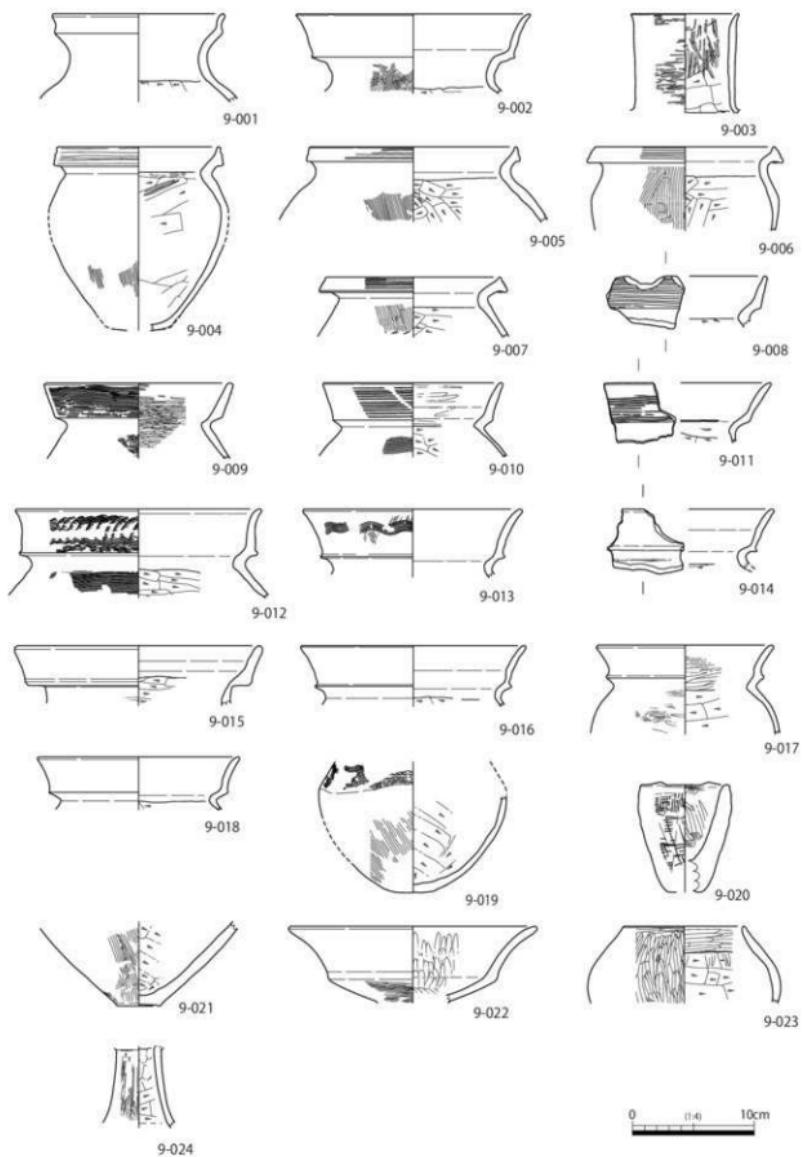
この遺構面では、竪穴住居、周堤溝、柱穴、土坑、溝、流路、落ち込みを検出した。

竪穴住居

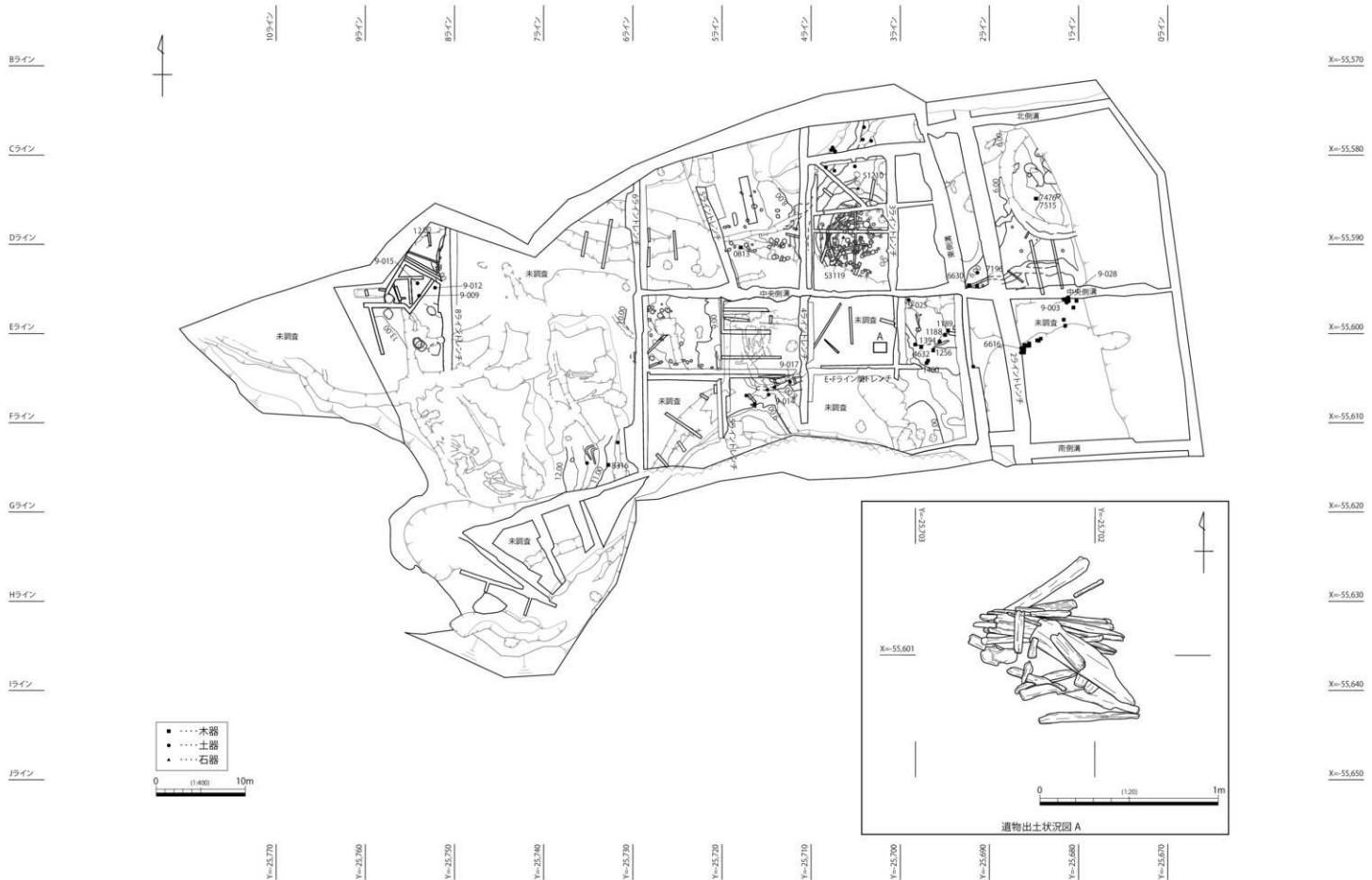
2 S-1155(第IV-10-10~30図)

C3及びD3グリッドにおいて、VII層下面で床面を検出した竪穴住居である。舌状に張り出す安定した地盤上の東に緩やかに傾斜する斜面部に構築され、南側を流路(2S-299)に削平されている。複数回の建て替えが認められるが、ここではVII層下面の遺構として一括して扱う。

建物は少なくとも5ないし6時期に分かれており、乙亥正V期からVII期に相当する土器が出土していることから、弥生時代後葉から古墳時代前期にかけて、ほぼ同位置で建て替えられたものであると考える。なお、床面が検出できたに留まったことに加え、複数の小穴をはじめとした遺構が同時に検出されたことから、各時期の建物とも主柱穴の特定を含め

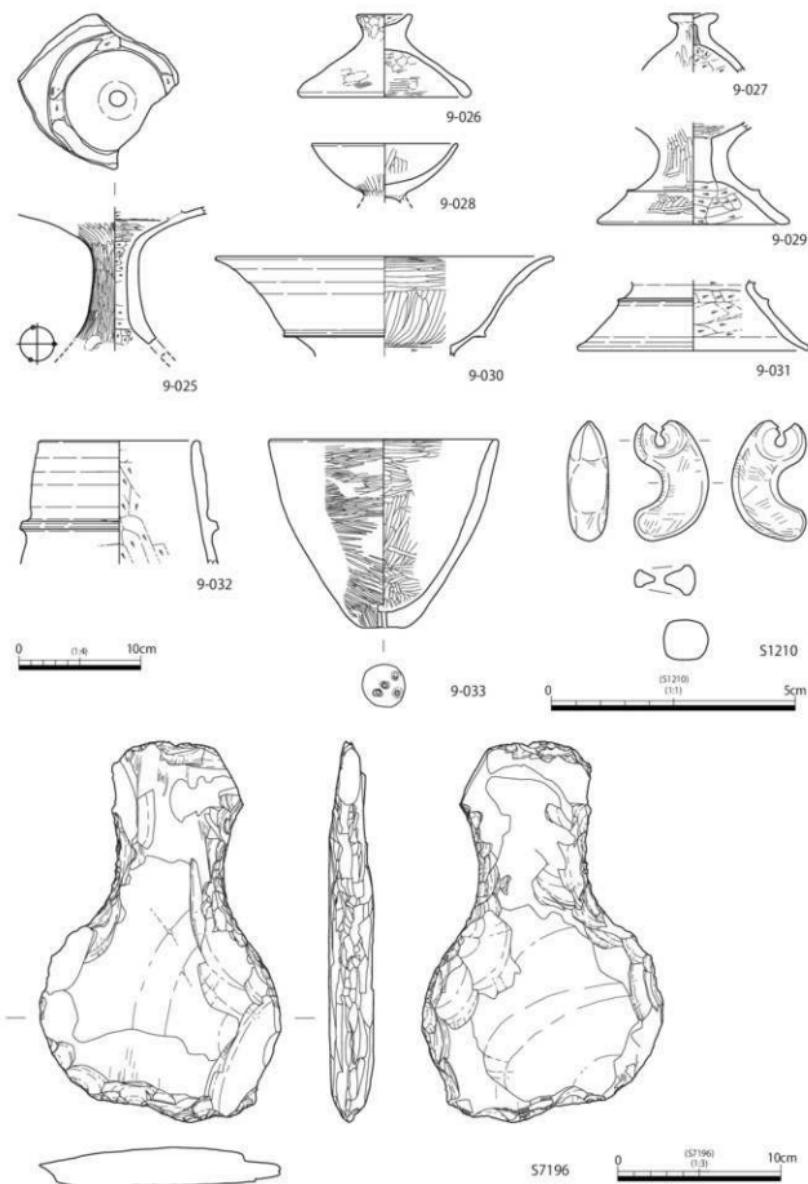


第IV-10-1図 2区 第9面 VII層出土遺物1

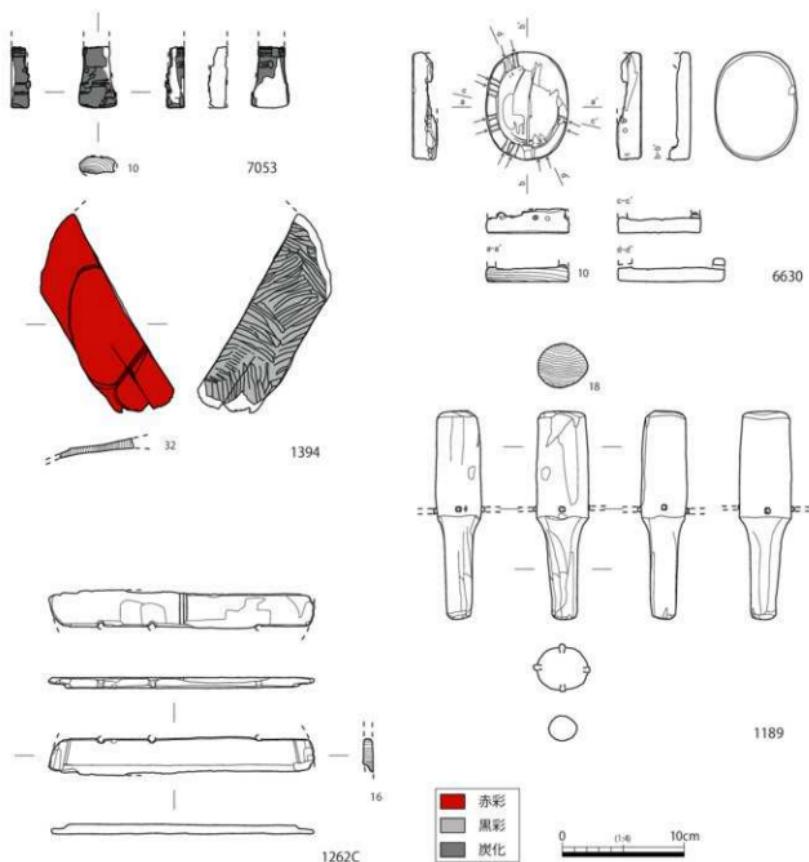


第IV-10-2図 2・3区 第9面 VII層出土遺物分布図

第10節 第9面(VII層下面)の調査



第IV-10-3図 2区 第9面 VII層出土遺物2



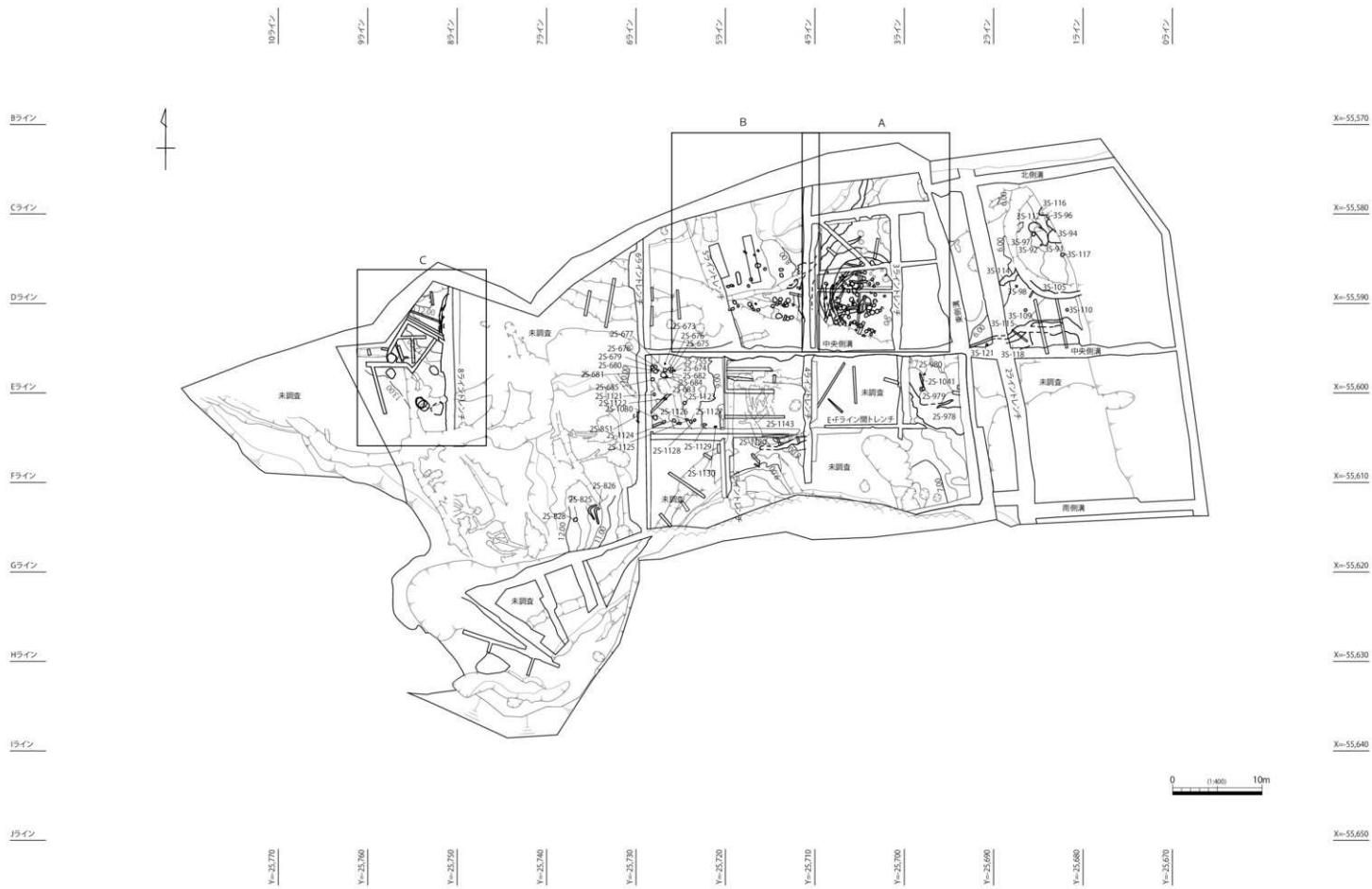
第IV-10-4図 2区 第9面 VII層出土遺物3

個々の遺構全ての時期特定には至っていない。よって、貼床、周壁溝等遺構の切り合い関係から各建物の形態と新旧関係を判断し、各時期の建物に確實に付随すると考える遺構を除き、時期の特定ができるない遺構は、時期幅を考慮し、重複する形で遺構図に掲載し、小穴については土坑として個別図面を掲載する。

以下に各時期の建物について、新しい物から順に記載する。

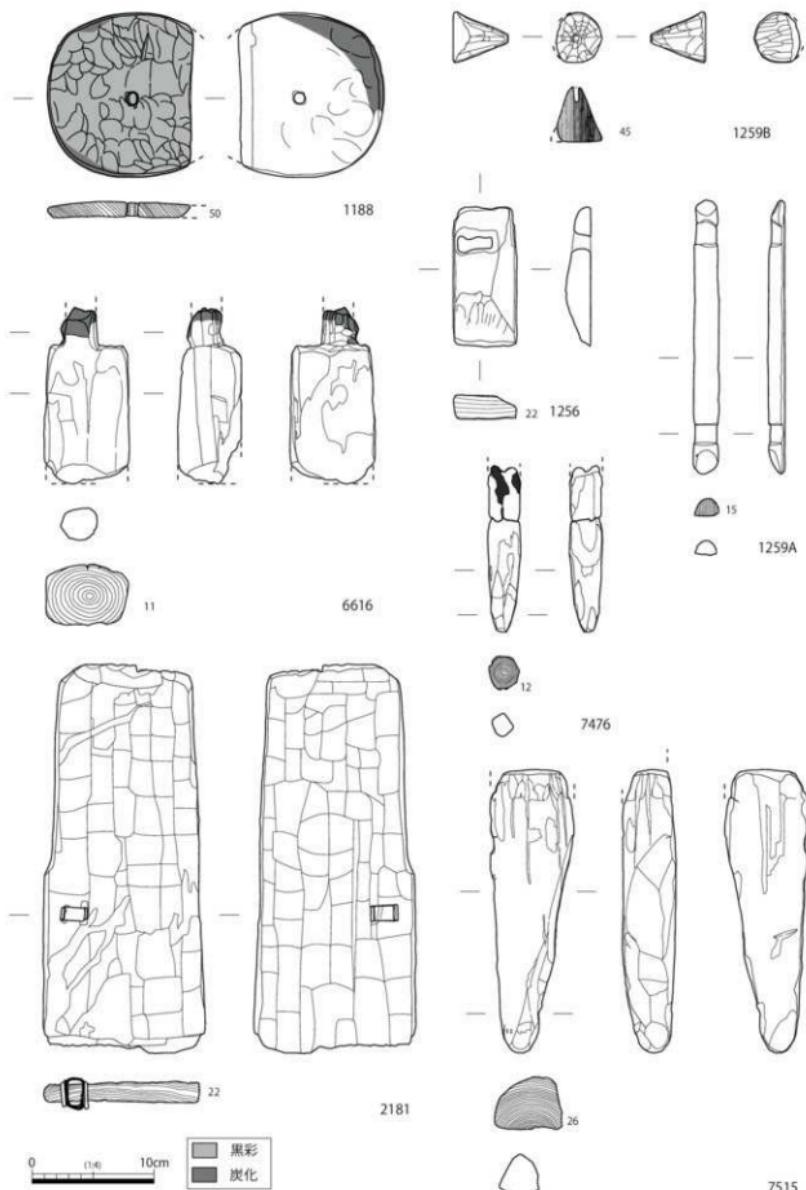
A段階

当該建物に確實に付随したものとして、周壁溝と貼床の一部を確認した。周壁溝の在り方から方形に近い平面形を呈していたと想定されるが、一部分の検出に留まっているため、規模を含め様相を明らかにし得ない。確認できた周壁溝は、幅約0.15～0.25m、深さ約0.05mで、褐色の貼床が残存



第IV-10-5図 2・3区 第9面 遺構配置図

第10節 第9面(VII層下面)の調査



第IV-10-6図 2区 第9面 VII層出土遺物4

する。当該建物に確實に付随する周壁溝からは時期の特定に至る遺物は出土していないが、検出できた各遺構で出土した最新相の遺物は乙亥正VII期に相当している。

B段階

当該建物に確實に付隨したものとして、周壁溝と周壁溝から住居中央に向けて延びる溝及びその延長線上に位置する土坑を確認した。この土坑については中央ピットとしての機能を果たしていたと判断される。周壁溝の在り方から多角形の平面形を呈しており、長軸は約5.5m程度あったものと判断される。確認した周壁溝は、幅約0.15～0.25m、深さ約0.05～0.12m。中央ピットに向けて延びる溝は、幅約0.12～0.2m、深さ約0.06mをそれぞれ測る。中央ピットは平面形が隅丸長方形、断面形は2段の皿状を呈し、長軸約1.3m、短軸約0.82m、深さ約0.17mを測る。埋土は黒色系を主体とし、灰黄褐色、黄橙色の地山に近いシルトをブロック状に含んでいる。出土した土器は乙亥正V・VI期に相当している。

C段階

B段階と同様に、当該建物に確實に付隨したものとして、周壁溝と周壁溝から住居中央に向けて延びる溝及びその延長線上に位置する土坑を確認した。この土坑については中央ピットとしての機能を果たしていたと判断され、それぞれの遺構がB段階の物と比して規模が大きいことから、当該建物を縮小してB段階の建て替えを行ったものと考えられる。周壁溝の在り方からの多角形に近い平面形を呈しており、長軸は6m以上あったものと判断される。周壁溝は、幅約0.15～0.35m、深さ約0.1～0.12m。中央ピットに向けて延びる溝は、幅約0.25～0.37m、深さ約0.06～0.12mをそれぞれ測る。中央ピットは不整形な平面形を呈し、断面形は逆梯状をなすが、底面3か所にピット状の落ち込みが見られる。長軸約1.8m、短軸約1.05m、深さ約0.32～0.42mを測る。埋土は黒褐色系と灰黄褐色系を主体に6層に分層される。なお貼床の一部を周壁溝に沿う形で確認している。出土した土器は乙亥正V・VI期に相当している。

D段階

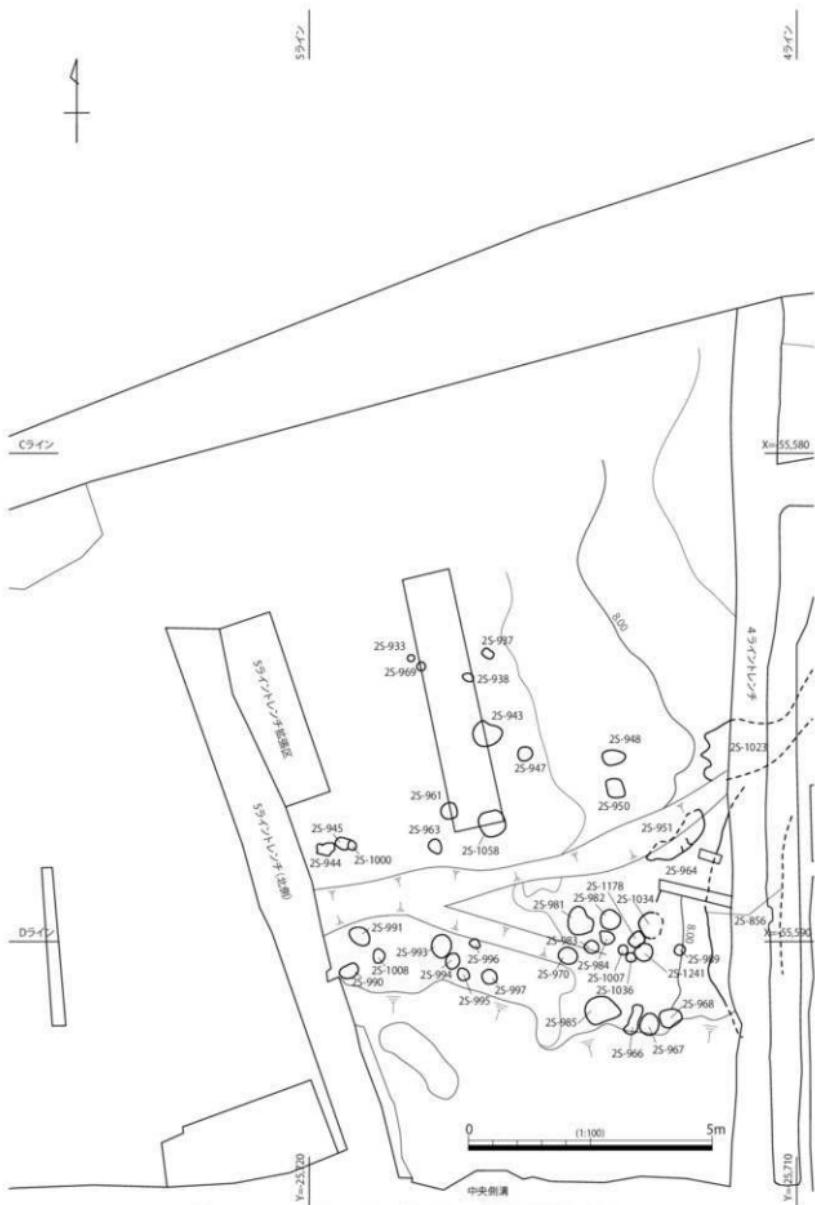
切り合い関係から前述の各段階より古く、幅広の周堤溝を伴う時期をD段階とした。周堤溝は楕円形を呈し、長軸、短軸とも約8m以上、確認できた幅は約0.6～1.35m、深さ約0.12mを測る。南側の一部で貼床を確認したが、周壁溝等が確認できておらず、周堤溝に沿う形で施されていることから、住居床面の貼床ではなく、住居構築の際の整地層として捉えられるべきものと考える。出土した土器は乙亥正V・VI期に相当している。

E段階

D段階の周堤溝に切られる形で検出した溝等については、それぞれの前後関係が不明なためE段階としてまとめた。形態から周壁溝と周堤溝であると考えられ、北側で確認した周壁溝は、幅約0.15～0.2m、深さ約0.04m。西側で確認した周壁溝は、幅約0.12～0.25m、深さ約0.05mを測り、周堤溝と考えられるものは、幅約0.5～0.75m、深さ約0.1mを測る。それぞれに伴う形で出土した遺物はないが、いずれも弥生時代後期後葉の範疇に収まる建物と考える。(原田)

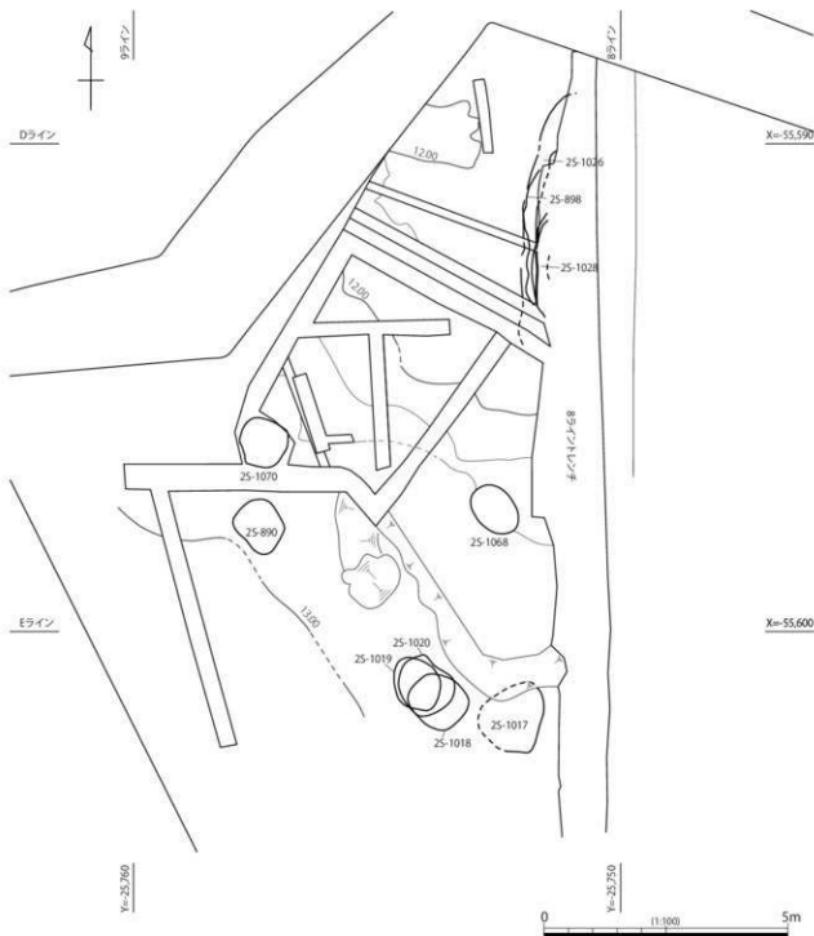


第N-10-7図 2区 第9面 遺構配置図拡大図A

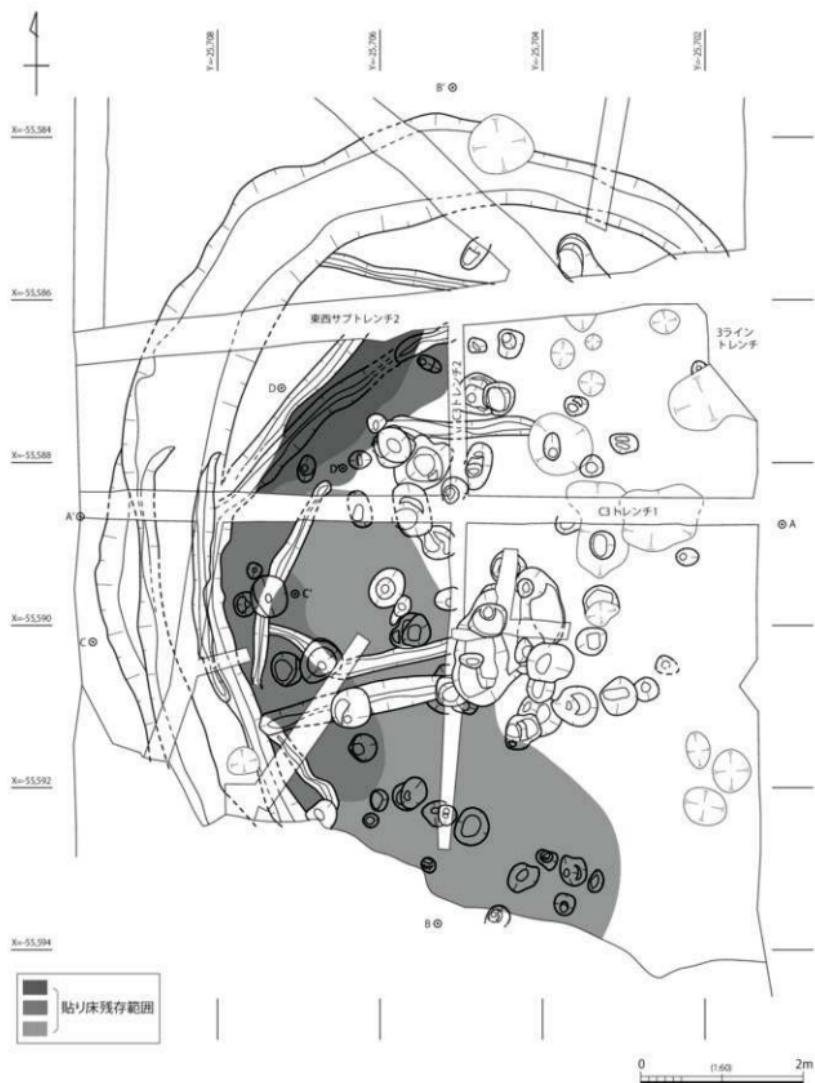


第IV-10-8図 2区 第9面 遺構配置図拡大図B

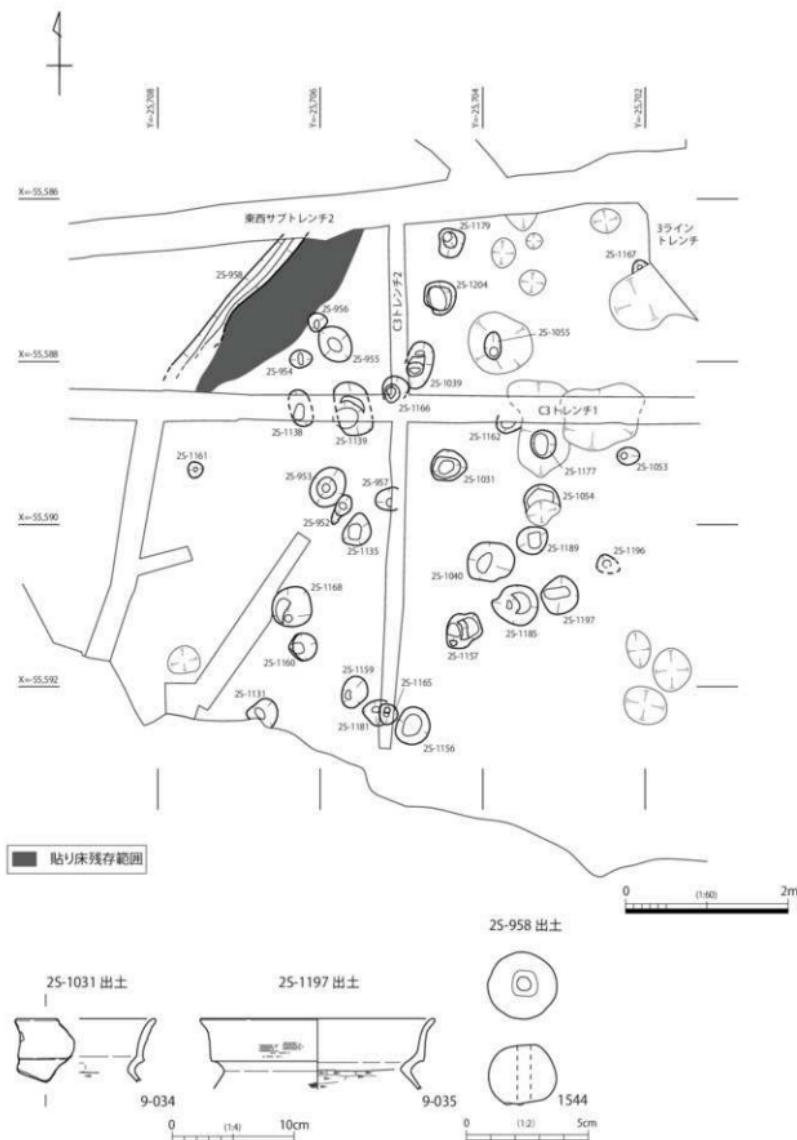
第10節 第9面(VII層下面)の調査



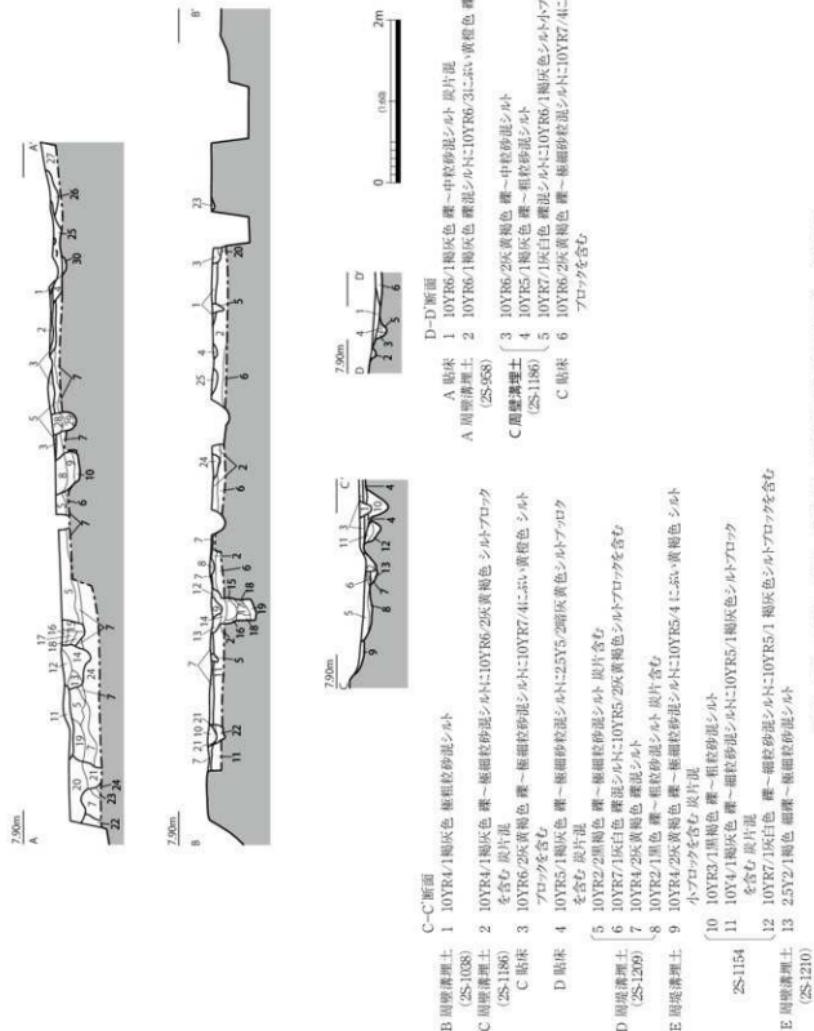
第IV-10-9図 2区 第9面 遺構配置図拡大図C



第IV-10-10図 2区 第9面 竪穴住居(2S-1155) 統合平面図



第IV-10-11図 2区 第9面 竪穴住居(2S-1155) A段階平面図及び出土遺物



A-A'断面

C 周壁溝埋土 1 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに10YR6/2灰黄褐色シルト小ブロックを含む 炭片混
(2S-1186)

C 貼床 2 10YR6/2灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルトに10YR7/4にぶい黄橙色シルトブロックを含む

D 貼床 3 10YR5/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む 炭片混

2S-959 4 2.5Y5/2暗灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルトに10YR5/1灰色シルト小ブロックを含む

E 床面 5 2.5Y5/2暗灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

地山 6 2.5Y4/1黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

7 2.5Y3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト

8 10YR3/1黑褐色 繼~粗粒砂混シルト 炭片混

2S-1139 9 10YR4/1褐色灰色 繼~粗粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む

10 2.5Y2/1黑色 繼~粗粒砂混粘土

2S-1164 11 10YR2/1黑色 繼~粗粒砂混シルトに10YR7/3にぶい黄橙色シルト小ブロックを含む 炭片混

12 10YR3/1黑褐色 繼~粗粒砂混シルトに10YR7/3にぶい黄橙色シルト小ブロックを含む

2S-1163 13 10YR5/1褐色灰色 繼~粗粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む

14 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト

15 10YR4/1褐色灰色 繼~細粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む

2S-1162 16 10YR5/2暗黃褐色 繼混シルト

17 10YR5/1褐色灰色 繼~粗粒砂混シルト

18 10YR3/1黑褐色 繼~粗粒砂混シルト

地山 19 2.5Y5/1黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

20 10YR5/2暗黃褐色 繼混シルト 炭片混

21 10YR3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

22 10YR4/2灰黃褐色 繼~粗粒砂混シルト 炭片混

23 2.5Y4/2暗灰黃褐色 繼混シルト

地山 24 2.5Y3/2黑褐色 繼~極細粒砂混シルト

2S-959 25 10YR2/1黑色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

2S-1209 26 10YR4/2灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルトに10YR5/4にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む 炭片混

地山 27 10YR7/4L5a/1黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

2S-1138 28 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト炭片混

29 10YR3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト炭片混

2S-1210 30 2.5Y3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト

B-B'断面

C貼床 1 10YR6/3L5a/5b/1黄橙色 繼~極細粒砂混シルト 上層に10YR5/2灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルトが堆積

地山 2 2.5Y5/2暗灰黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

2S-1186 3 10YR3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

2S-960 4 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

擾乱 5 7.5Y4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに10YR4/1褐色シルトブロックを含む

地山 6 2.5Y3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルト

D貼床 7 10YR5/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む 炭片混

B住居床面溝 8 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに10YR5/2灰黃褐色シルト小ブロックを含む 炭片混

(2S-1151)

C住居床面溝 9 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに10YR5/2灰黃褐色シルト小ブロックと

10YR7/4にぶい黄橙色シルト小ブロックを含む 炭片混

(2S-1152) 10 10YR5/1褐色灰色 繼~粗粒砂混シルト

地山 11 10YR7/4にぶい黄橙色 繼~極細粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む

12 10YR5/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト

13 10YR5/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルトに10YR4/1褐色シルトブロックを含む

14 10YR3/1黑褐色 繼~粗粒砂混シルト

15 10YR2/1黑色 繼~粗粒砂混シルト

16 2.5Y3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルトに10YR2/1黑色シルトブロックを含む

17 10YR3/2黑褐色 繼~極細粒砂混シルト

18 10YR3/2黑褐色 繼~極細粒砂混シルトに2.5Y5/2暗灰黃褐色シルトブロックを含む

19 2.5Y4/1黃褐色 繼~極細粒砂混シルト

2S-1186 20 10YR3/1黑褐色 繼~極細粒砂混シルトに10YR6/3にぶい黄橙色シルトブロックを含む

2S-1165 21 10YR3/1黑褐色 繼~粗粒砂混シルト

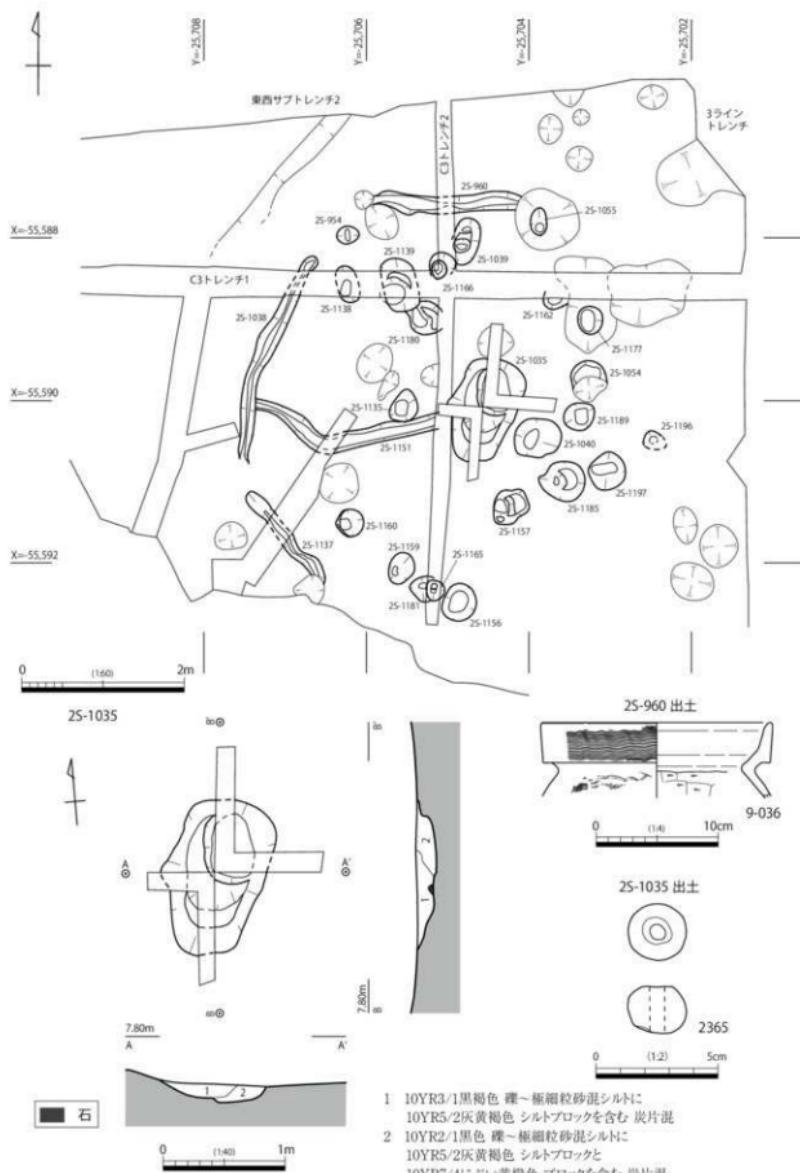
22 10YR4/1褐色灰色 繼~粗粒砂混シルト

2S-1208 23 10YR4/1褐色灰色 繼~中粒砂混シルトに10YR5/3にぶい黄褐色中粒~極細粒砂を含む

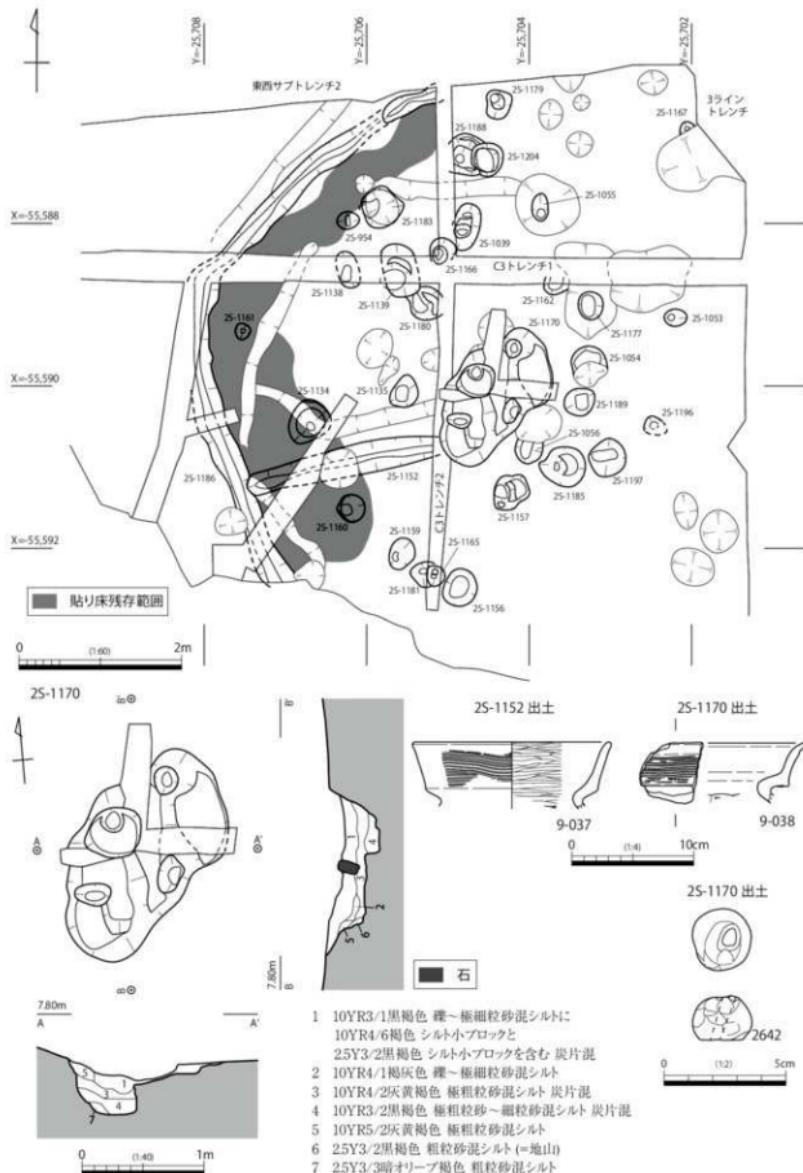
2S-1180 24 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

2S-1182 25 10YR4/1褐色灰色 繼~極細粒砂混シルト 炭片混

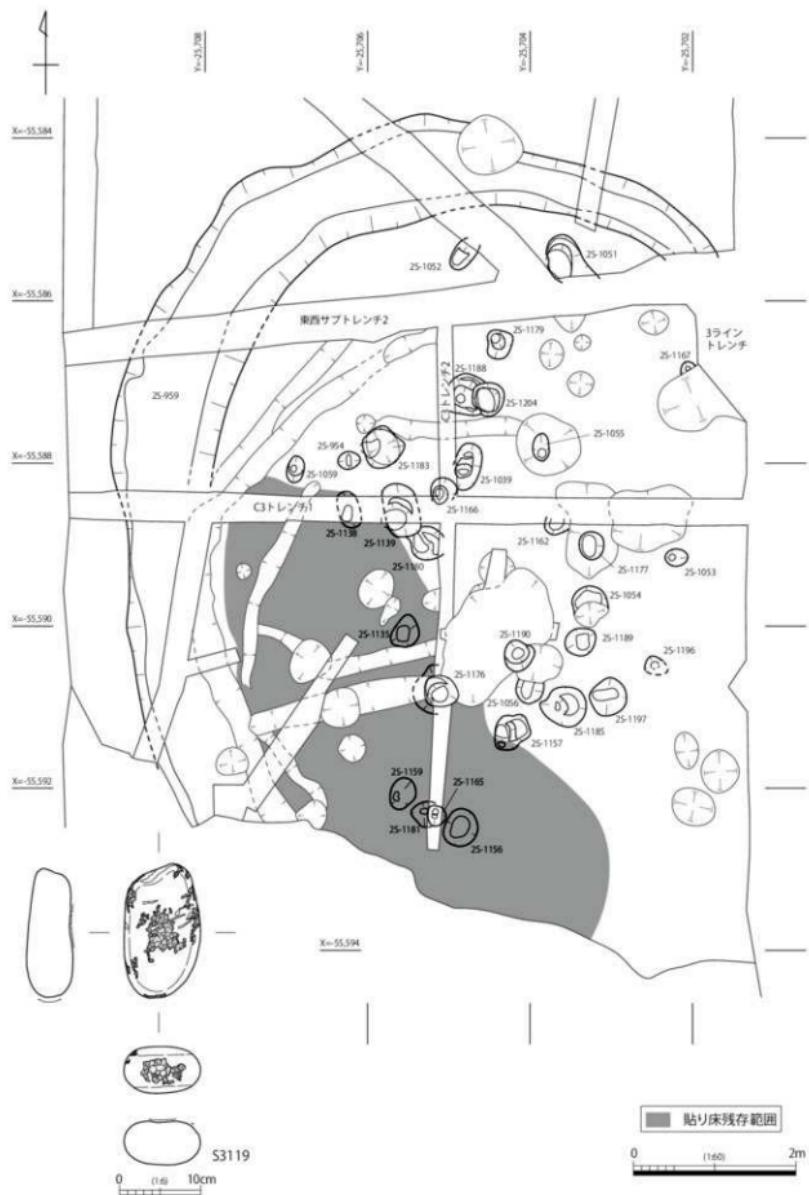
第IV-10-13図 2区 第9面 積穴住居(2S-1155) 断面図註記



第IV-10-14図 2区 第9面 竪穴住居(2S-1155) B段階平面図及び出土遺物

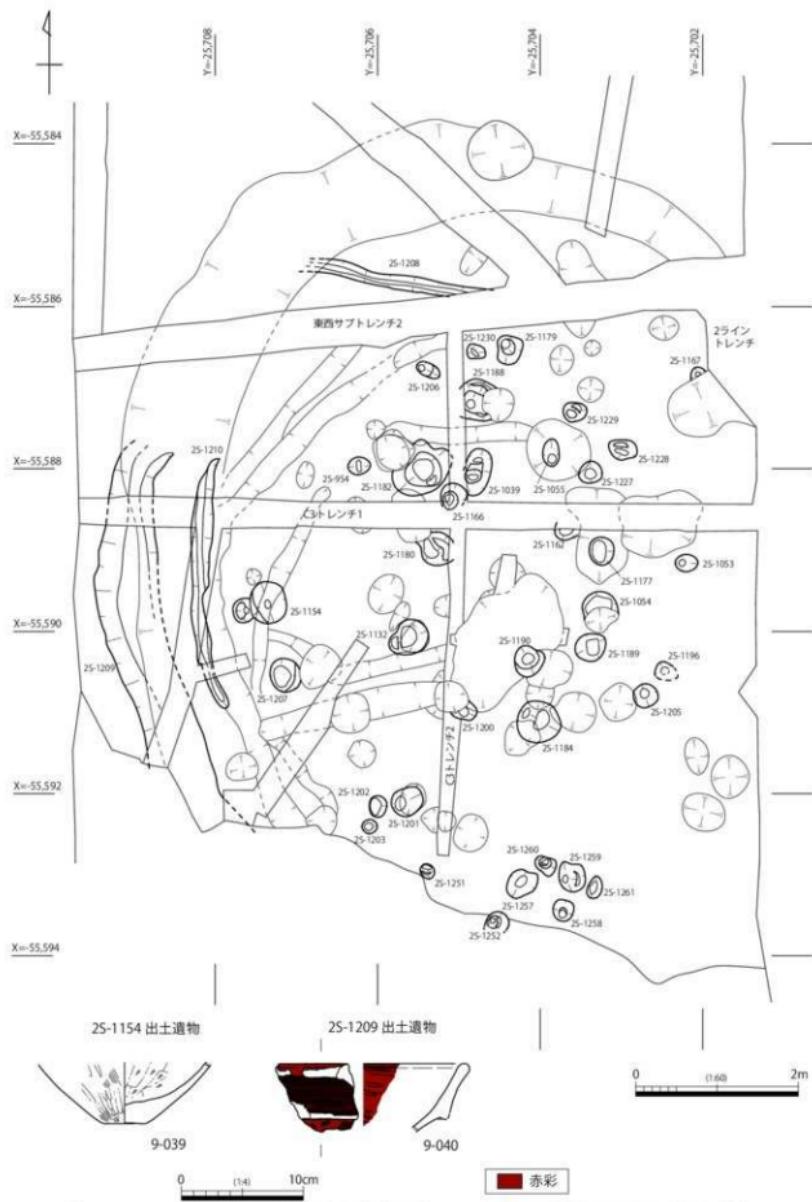


第IV-10-15図 2区 第9面 積穴住居(2S-1155)C 段階平面図及び出土遺物

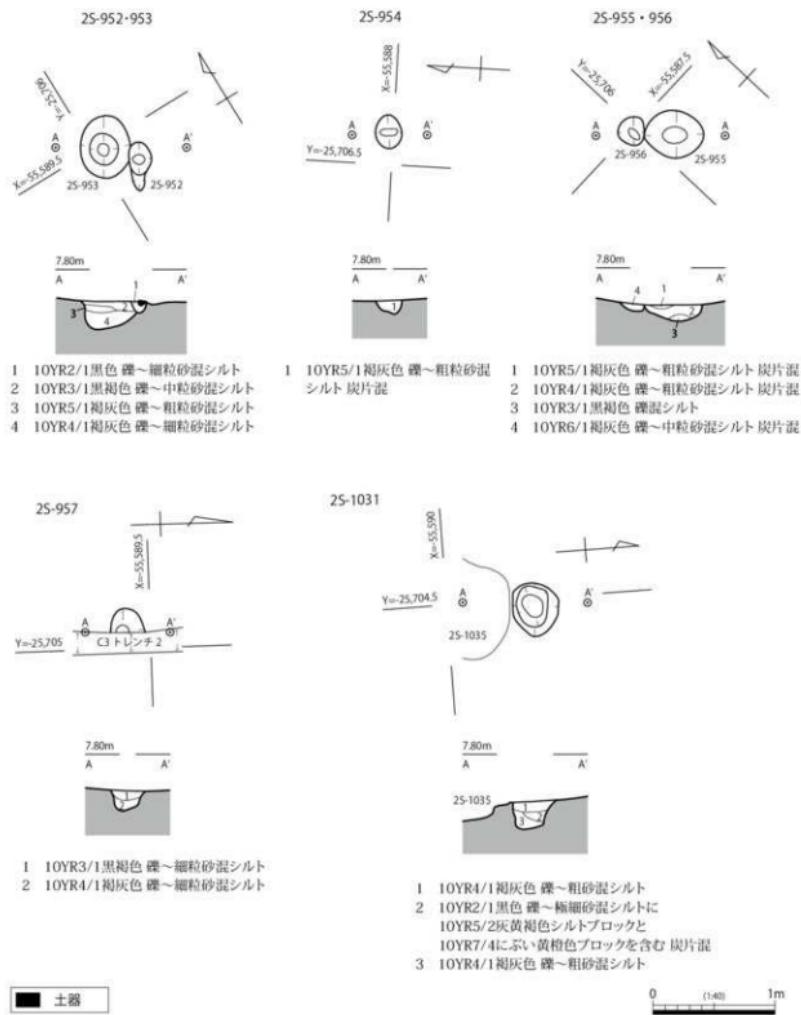


第N-10-16図 2区 第9面 竪穴住居(2S-1155) D段階平面図及び出土遺物

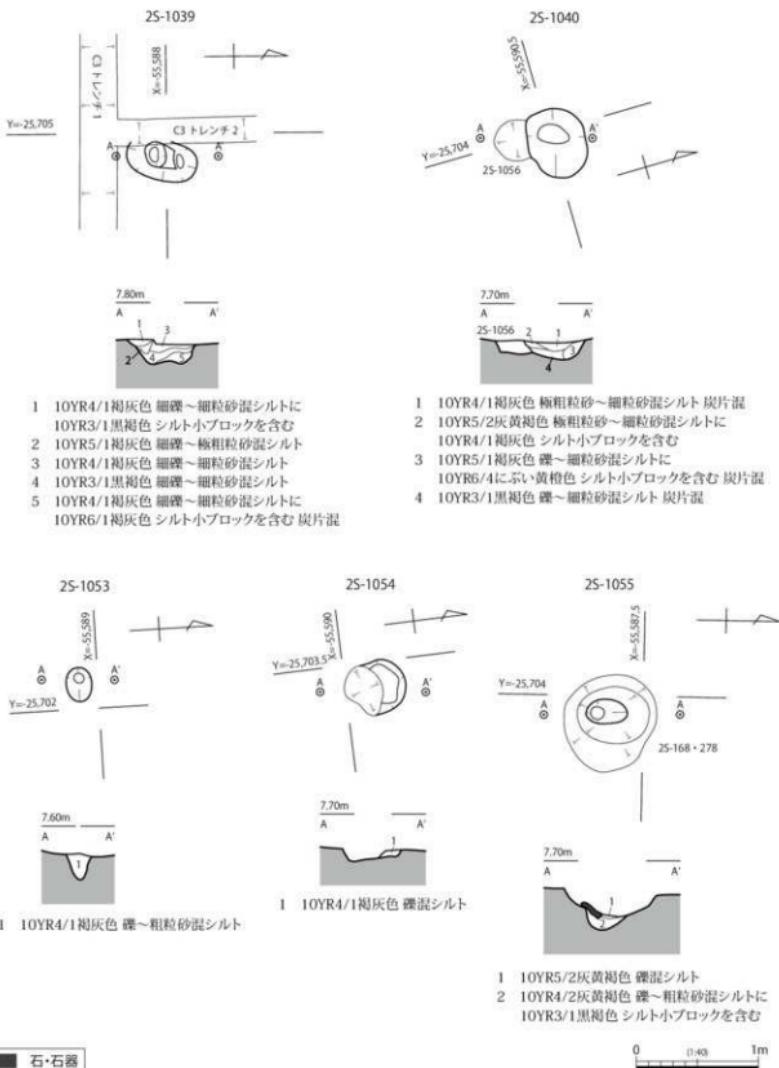
第10節 第9面(VII層下面)の調査



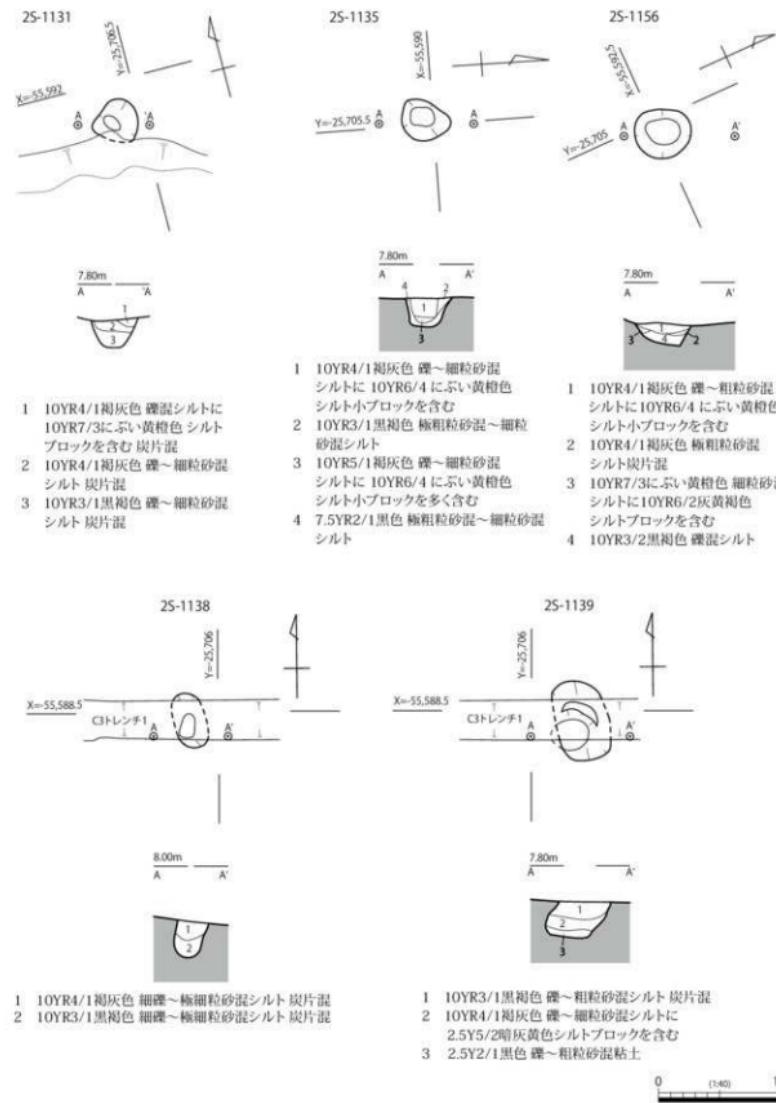
第IV-10-17図 2区 第9面 穂穴住居(2S-1155) E段階平面図及び出土遺物



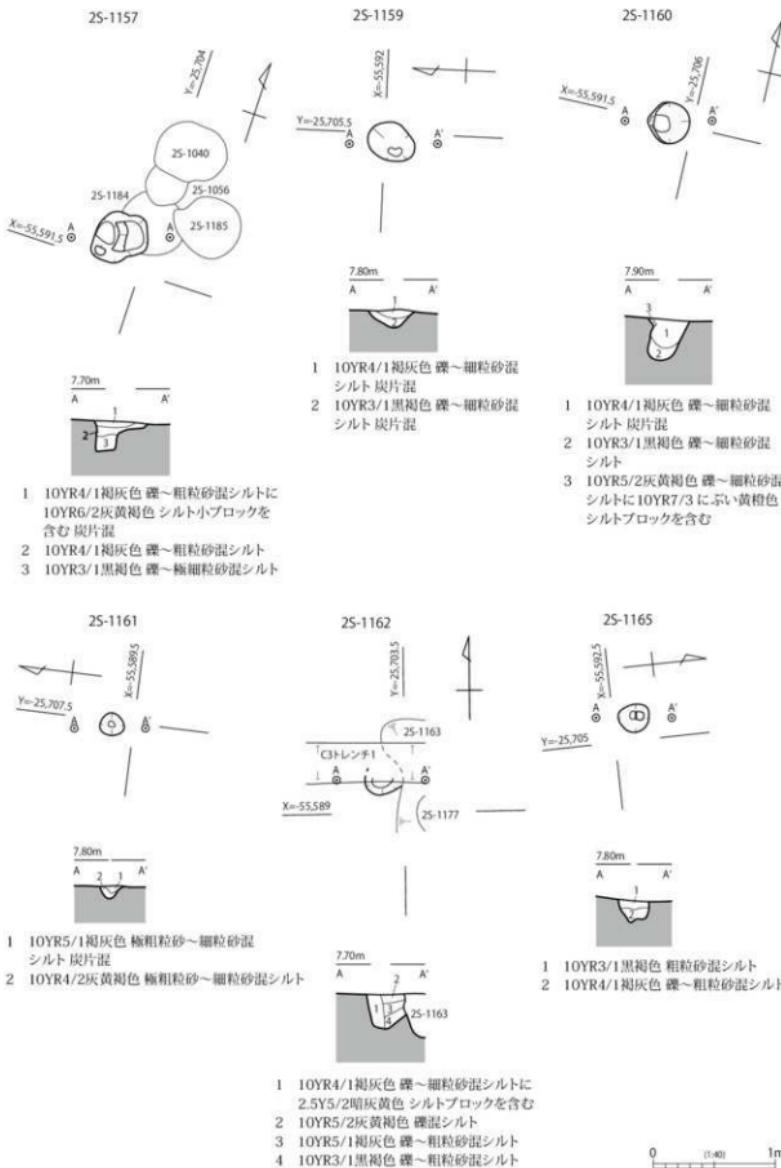
第IV-10-18図 2区 第9面 2 S-1155内及び
周辺土坑(2 S-952・953、954、955・956・957、1031)平・断面図 1

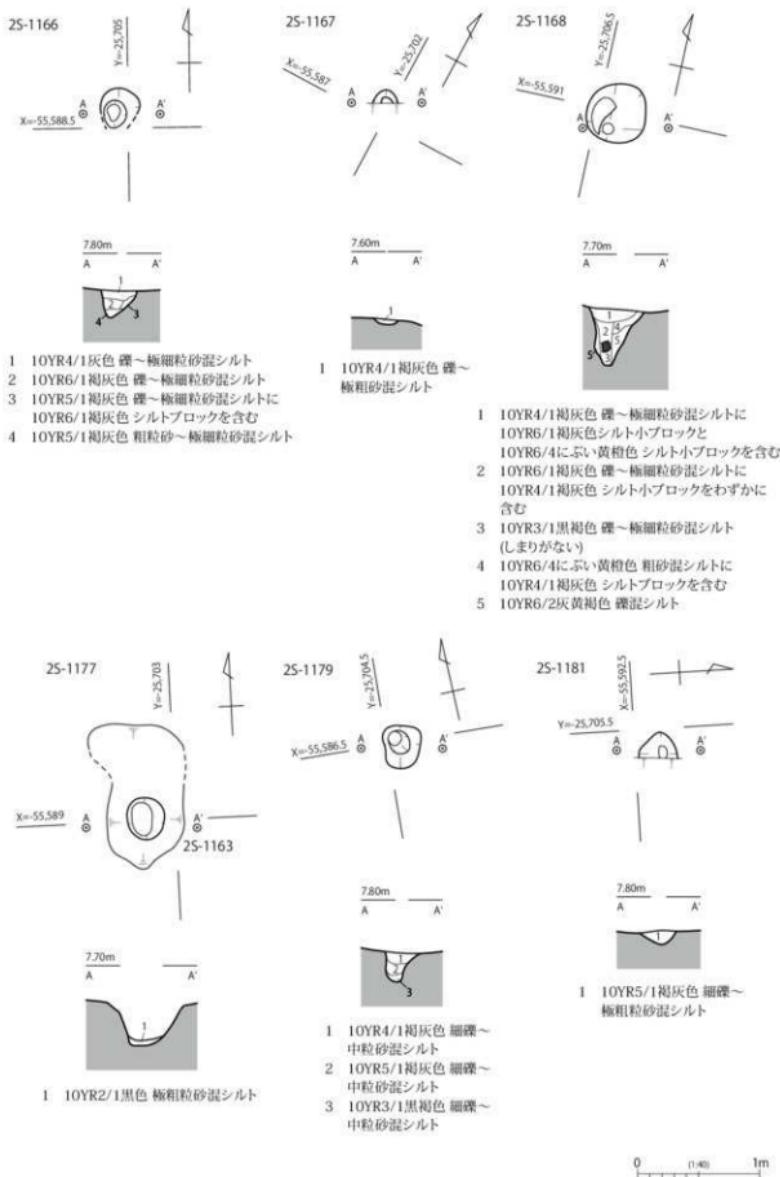


第IV-10-19図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1039、1040、1053、1054、1055)
平・断面図2

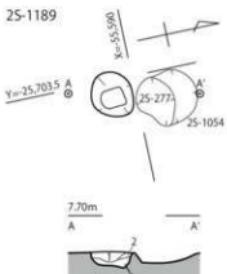
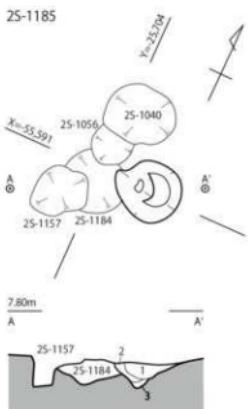


第IV-10-20図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1131、1135、1138、1139、1156)
平・断面図3



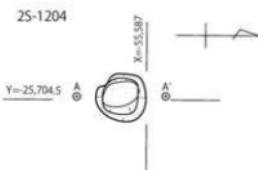
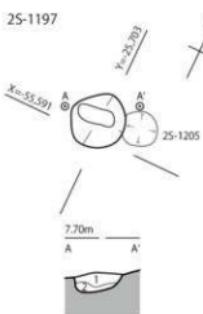


第IV-10-22図 2区 第9面 2S-1155内及び
周辺土坑(2S-1166、1167、1168、1177、1179、1181)平・断面図5



- 1 10YR5/1 褐灰色 粘～極細粒砂混シルトに 10YR7/3にぶい黄橙色 シルトブロックを含む
- 2 10YR4/1 褐灰色 粘～極細粒砂混シルト
- 3 10YR5/2 灰黄褐色 粘～極細粒砂混シルト

- 1 10YR3/1 黒褐色 極粗粒砂混シルト 壊片混
- 2 10YR5/2 灰黄褐色 粘～極粗粒砂混シルト
- 3 10YR3/2 黒褐色 細粒砂混シルト



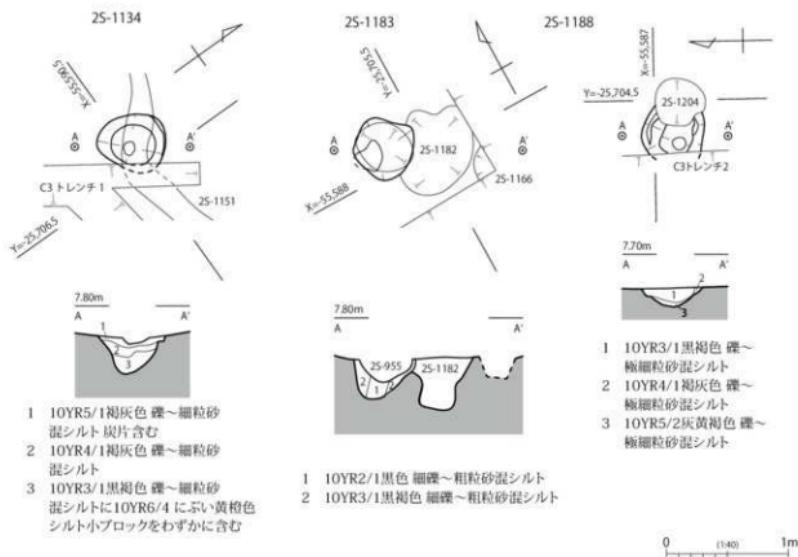
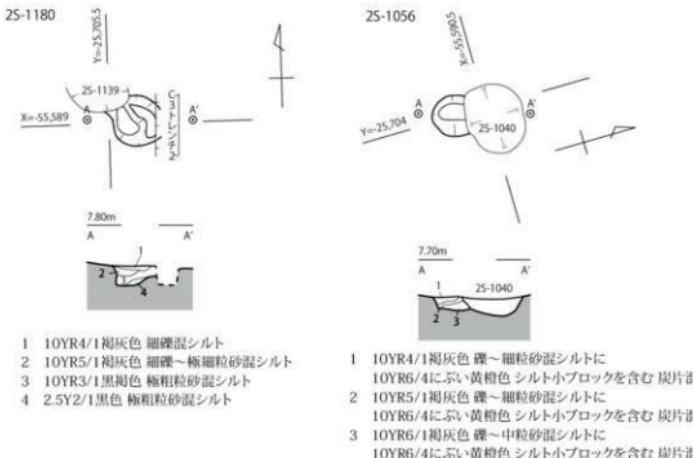
- 1 10YR4/2 黄褐色 粘～極細粒砂混シルトに 10YR3/1 黑褐色 シルト 小ブロックを含む 壊片混
- 2 10YR4/2 灰黄褐色 粘～極細粒砂混シルト

- 1 10YR5/1 褐灰色 粘～極細粒砂混シルトに 10YR7/3にぶい黄橙色 シルトブロックを含む 壊片混
- 2 2.5Y4/1 黄灰色 粘～粗粒砂混シルト

- 1 10YR3/1 黑褐色 粘～極細粒砂混シルト 壊片混
- 2 7.5YR2/1 黑色 粘～粗粒砂混シルト

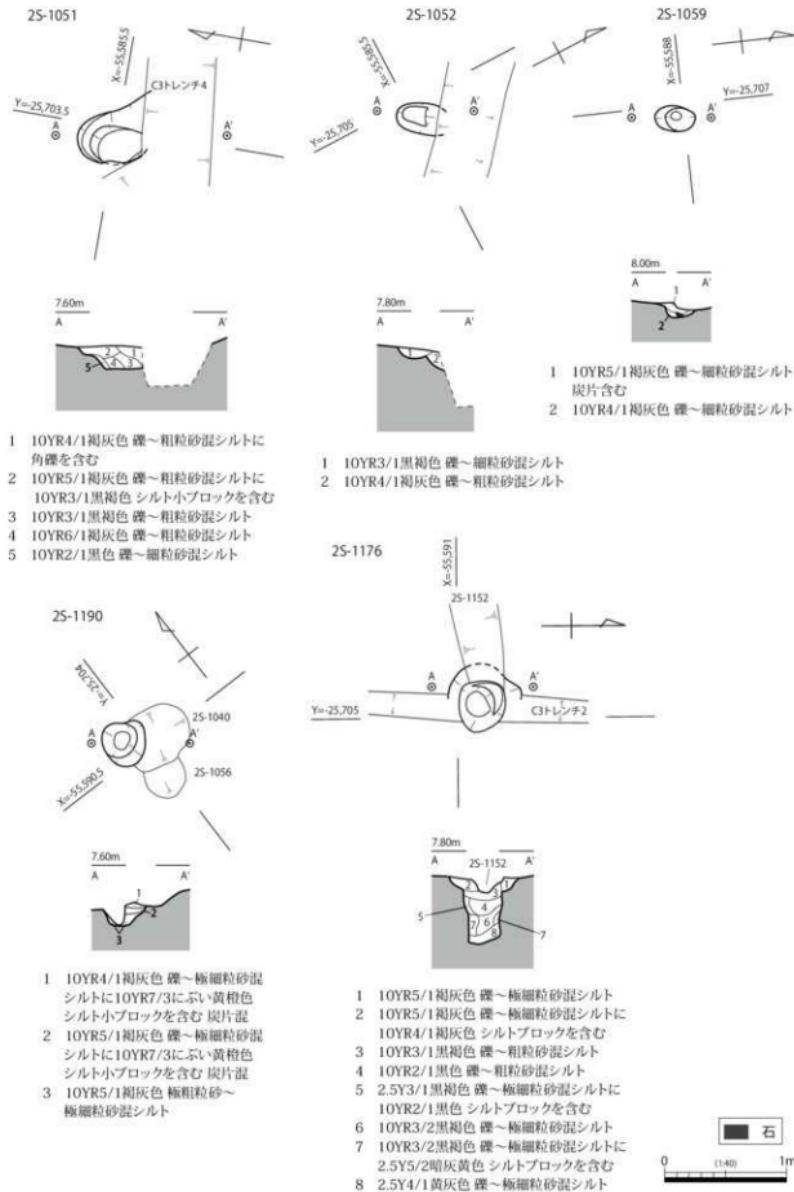
0 (1.40) 1m

第IV-10-23図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1185、1189、1196、1197、1204)
平・断面図6



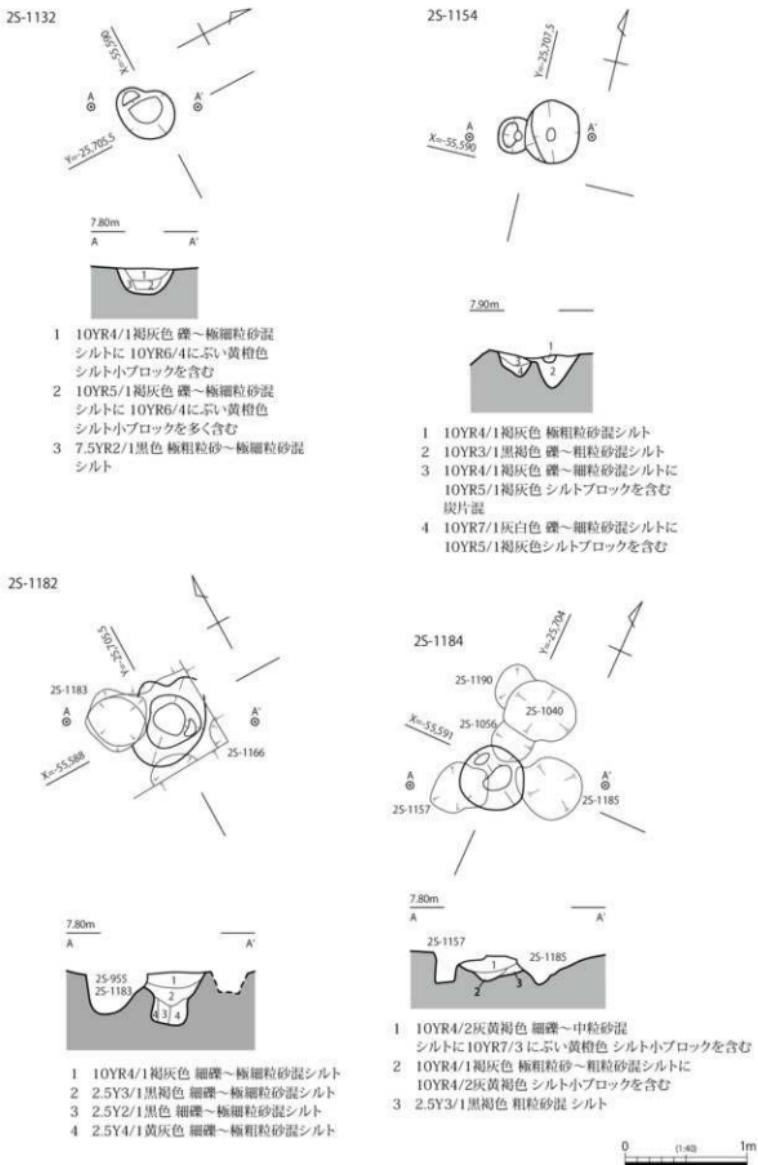
第IV-10-24図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1056、1134、1180、1183、1188)

平・断面図7

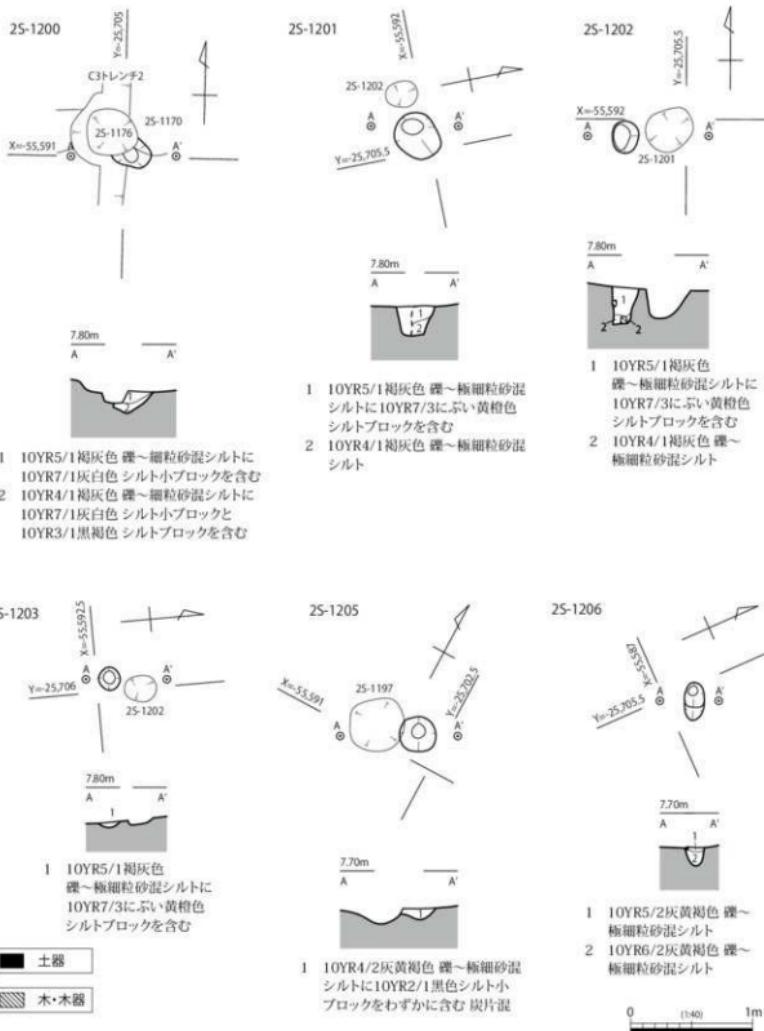


第IV-10-25図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1051, 1052, 1059, 1176, 1190)

平・断面図8

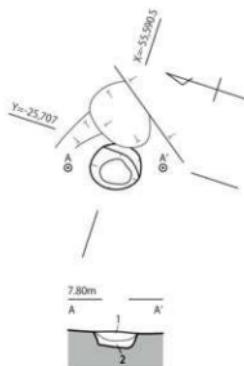


第IV-10-26図 2区 第9面 2S-1155内及び周辺土坑(2S-1132、1154、1182、1184)
平・断面図9

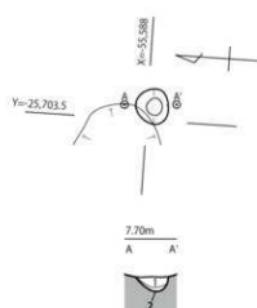


第V-10-27図 2区 第9面 2S-1155内及び
周辺土坑(2S-1200、1201、1202、1203、1205、1206) 平・断面図10

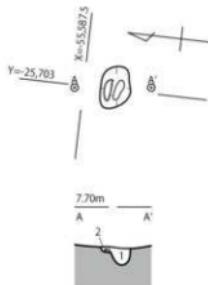
2S-1207



2S-1227



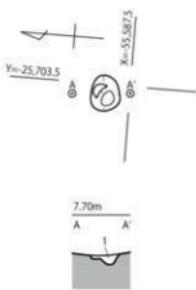
2S-1228



- 1 10YR2/1 黒色 繼～粗粒砂混シルト
2 10YR4/2 灰黄褐色 繼～粗粒砂混シルト

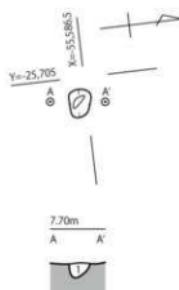
- 1 10YR5/2 灰黄褐色 繼～粗粒砂混シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルト小プロックを含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色 繼～粗粒砂混シルトに10YR7/3にぶい黄褐色シルト小プロックを含み
～φ3cmの礫混

2S-1229



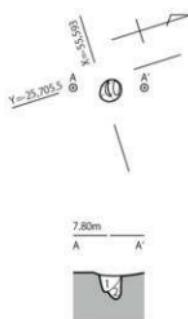
- 1 10YR2/1 黒色 繼～粗粒砂混シルト

2S-1230



- 1 10YR5/2 灰黄褐色 繼～粗粒砂混シルト

2S-1251



- 1 10YR3/1 黑褐色 繼混シルト
2 10YR4/1 褐灰色 繼～粗粒砂混シルト



0 1m

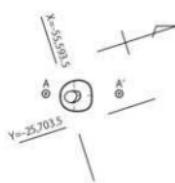
第N-10-28図 2区 第9面 2S-1155内及び

周辺土坑(2S-1207、1227、1228、1229、1230、1251) 平・断面図11

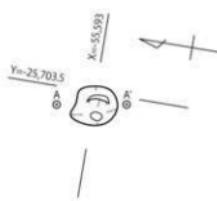
25-1252



25-1258



25-1259

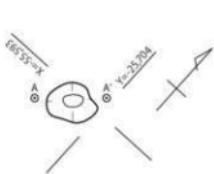


- 1 10YR5/1褐色～細粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む
- 2 10YR6/1褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む
- 3 10YR5/2灰褐色岩～極細粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む

- 1 10YR5/2灰褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR4/1褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR6/3にぶい黄褐色岩～極粗粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む
- 2 10YR6/3にぶい黄褐色岩～極粗粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルト小ブロックを含む

- 1 10YR5/2灰褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR4/1褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR4/1褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR2/1黒色シルト小ブロックを含む

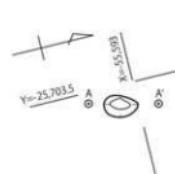
25-1257



25-1260



25-1261



- 1 10YR4/1褐色岩～極粗粒砂混シルト
- 2 10YR4/1褐色岩～極細粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルトブロックを含む
- 3 10YR5/2灰褐色岩～極細粒砂混シルトに
10YR7/3にぶい黄褐色シルトブロックを含む
- 4 2.5Y5/2暗灰黄色中粒砂～極粗粒砂混シルトに
2.5Y4/1黄褐色シルトブロックを含む

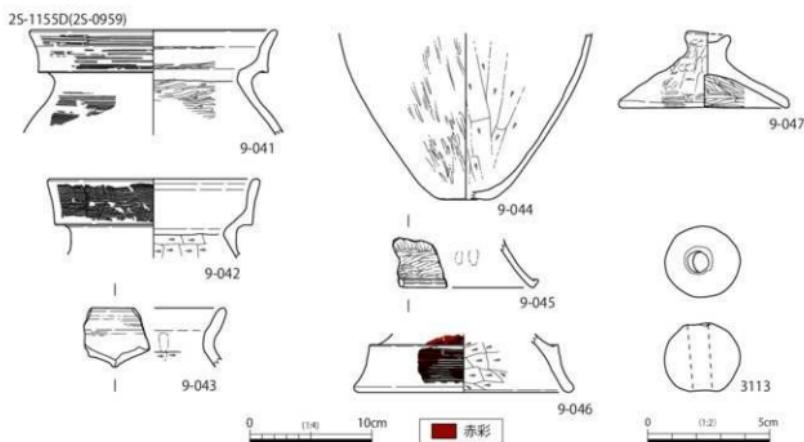
- 1 10YR6/1褐色岩～中粒砂混シルトに
10YR3/3暗褐色岩～中粒砂混シルトに

1. 10YR4/1褐色岩～
細粒砂混シルト

0 (140) 1m

第IV-10-29図 2区 第9面 2S-1155内及び

周辺土坑(2S-1252、1257、1258、1259、1260、1261)平・断面図12



第IV-10-30図 2区 第9面 積穴住居(2S-1155) D段階出土遺物

3S-105(第IV-10-31図)

3区において3S-70の調査後、3S-70の南側肩部から中央側溝にかけて堆積する土壌層を掘削してから検出した。溝の大半は3S-70と重複しており、検出できたのは南側から西側である。南側の肩部は3S-70と重複していて、本来は概ね3S-70と同様に円形の周堤溝だったと考えられる。西側の肩部は、3S-70の底面と同一面で検出したため、機能時の肩部はもう少し西寄りにあったと考えられる。検出延長は約8.7m、幅約0.8m、深さ約0.4mである。

埋土の大半は3S-70により失われているが、南西側肩部から底面にかけて灰色及びオリーブ黒色をしたシルト層が堆積していた。埋土中から、土器と種実が出土した。土器は、小片で乙亥正Ⅲ～Ⅳ期の壺(9-048)と甕(9-049、050)の小片が出土した。埋没過程で流れ込んだものと考えられ、同一遺構面の他の遺構と概ね同一時期のものと考えられる。(馬路)

柱穴

柱穴は、2・3区において、柱や礎版が残存するものと土層断面で柱痕を確認できたものを合わせて9基確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。

2S-675・676(第IV-10-32図)

D5グリッドで検出した。2S-675の東端部を切って掘られたものである。平面形は円形、断面形はコップ形で中央部に柱痕が確認できる。長径0.3m、短径0.28m、深さ0.34mである。柱痕の幅は約0.1mである。埋土中からは乙亥正Ⅲ～Ⅴ期と考えられる土器の小片が出土したのみだが、2S-676の埋土中から乙亥正Ⅴ期の甕の口縁部片(9-051)が出土した。(馬路)

2 S-677(第IV-10-32図)

D 5グリッドで検出した。平面形は東側にやや広がった円形で、断面形はコップ形である。底面の西端から検出面の中央部に向けて斜めに柱痕がある。長径0.41m、短径0.38m、深さ0.4mである。柱痕の幅は約0.15mである。埋土中からは乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した。(馬路)

2 S-678(第IV-10-32図)

D 5グリッドで検出した。平面形は円形で、南東部を除いてテラスが形成されて、底面中央部を囲むように二段掘りになっている。一段深くなった部分に柱を設置していた可能性が高いと考えられる。長径0.34m、短径0.33m、深さ0.31mである。埋土中からは乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した。(馬路)

3 S-112(第IV-10-32図)

C 1グリッドで検出した。平面形は円形で、径は約0.14m、深さ0.27mである。規模が非常に小さく木器の周間に若干掘方が見える程度だったため、検出時は杭が打設されているものと考えたが、出土したのは杭というよりは、末端部を平坦に加工しているので柱と考えられる。柱(7475)は径約9cmの芯持ち材である。(馬路)

2 S-950(第IV-10-33図)

長径0.4m、短径0.34m、深さ0.38mの柱穴で、底部に礎板2枚と石を置く。礎板の一部には欠き込み状の加工がみられることから転用材とみられる。柱材、土器は出土していない。(岡野)

2 S-970(第IV-10-33図)

長径0.41m、短径0.37m、深さ0.28mの柱穴で、底部に礎板(2460)を置く。2460は長さ27.5cm、幅18cm、厚さ2.8cmの板で、裏面の一部に手斧痕の他は割肌、両端部は切断する。表面(上面)に長軸15cm、短軸9cm程度範囲で木肌の荒れが観察され、柱の圧痕と推定される。柱材は検出されていない。なお、本遺構の土層断面は土層の崩壊により主な特徴のみ記載したものである。土器は出土していない。(岡野)

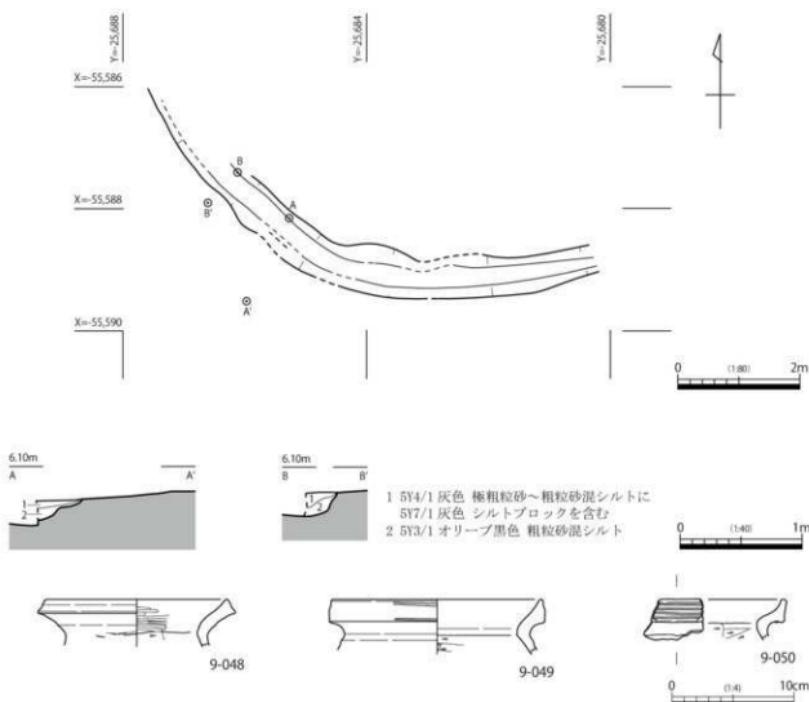
2 S-1008(第IV-10-33図)

長径0.4m、短径0.37m、深さ0.17mの柱穴で、底部付近に礎板3枚を置く。柱材、土器は出土していない。(岡野)

土坑

2・3区の土坑の規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。これらの内の主だったものについてのみ、個別図面を掲載した。なお、竪穴住居2 S-1155内とその周辺で確認したものについては、全ての図面を2 S-1155の関連遺構として掲載(前掲)している。

2 S-1178(第IV-10-36図)



第IV-10-31図 3区 第9面 周堤溝(3S-105) 平・断面図及び出土遺物

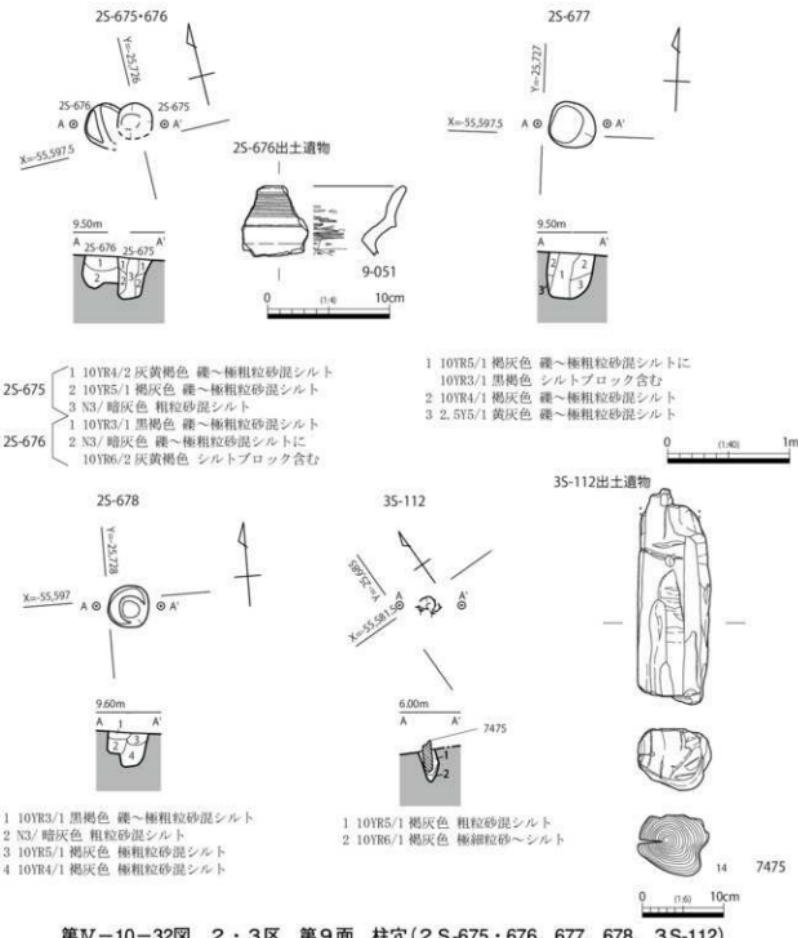
長径 0.33 m、短径 0.30 m、深さ 0.09 m の土坑である。底面から側面にかけて幅 1 ~ 1.5 cm、長さ 5 ~ 10 cm 程度、厚さ 1 mm 程度の木片が遺構に貼り付いた状況で出土した。木片の方向はランダムで、編む、あるいは織った状況ではない。樹種は針葉樹と推定される。その他の遺物は出土していない。(岡野)

2S-1163・1164(第IV-10-40図)

C3グリッドVII層下面で検出した土坑状の落ち込みで、2S-1163を掘り込む形で2S-1164を検出している。また、2S-1163はピット2S-1162と切り合い、底面でピット2S-1163を検出している。検出した平面形はいずれも不整形で、2S-1163は長軸1.18m、短軸0.7m、深さ約0.36m、2S-1164は長軸1m、短軸0.74m、深さ0.08mを測る。埋土は黒色から褐灰色のシルトで、2S-1163最下層を除き、地山の小プロックを含んでいる。遺物は出土しておらず、上層から掘り込まれていた可能性も否めないが、それぞれの遺構との切り合い関係から、いずれも弥生時代終末期以降のものと考える。(原田)

2S-1019(第IV-10-41・42図)

E8グリッドで検出した土坑である。後述する2S-1018・1020と切り合っており、新しい順から

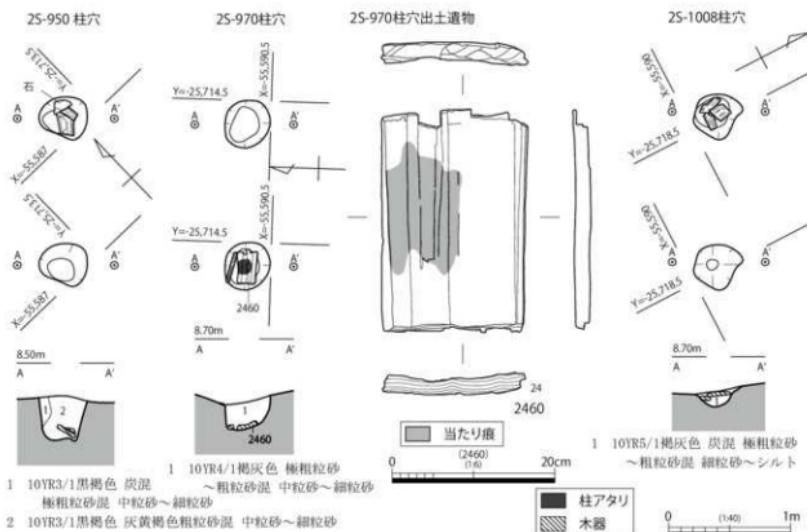


第N-10-32図 2・3区 第9面 柱穴(2 S-675・676、677、678、3S-112)
平・断面図及び出土遺物

2 S-1019→1018→1020である。長径1.18m、短径0.94m、深さ0.22mで、平面は不整な円形、断面は概ね逆台形状をなす。埋土中から乙亥正VI期頃とみられる器台(9-060)が出土した。(岡野)

2 S-1018(第IV-10-41・42図)

E 8 グリッドで検出した土坑で、北西側を2 S-1019に切られ、下部の2 S-1020を切って構築されている。長軸1.26m、短軸1.20m、深さ0.24mで、平面はほぼ円形、断面の一部が袋状をなす。埋土中から、乙亥正VI～VII期頃とみられる甕(9-058)、高坏(9-059)が出土した。(岡野)



第IV-10-33図 2区 第9面 柱穴(2 S-950、970、1008) 平・断面図及び出土遺物

2 S-1020(第IV-10-41・42図)

E 8グリッドで検出した土坑で、上部を先述の2 S-1018・1019に切られる。長軸1.25m、短軸1.15m、深さ0.34mで、平面は不正な円形、断面の一部は袋状をなす。埋土中から乙亥正VI期頃とみられる甕(9-066)、壺(9-067)が出土した。(岡野)

2 S-1017(第IV-10-41・42図)

E 8グリッドで検出した土坑である。最大規模は、長径1.45m、短径1.35m、深さ0.36mで、平面は不整な形状、断面は一部袋状をなす。埋土から乙亥正VI～VII期頃とみられる甕(9-053～055)、脚部(9-056、057)が出土した。(岡野)

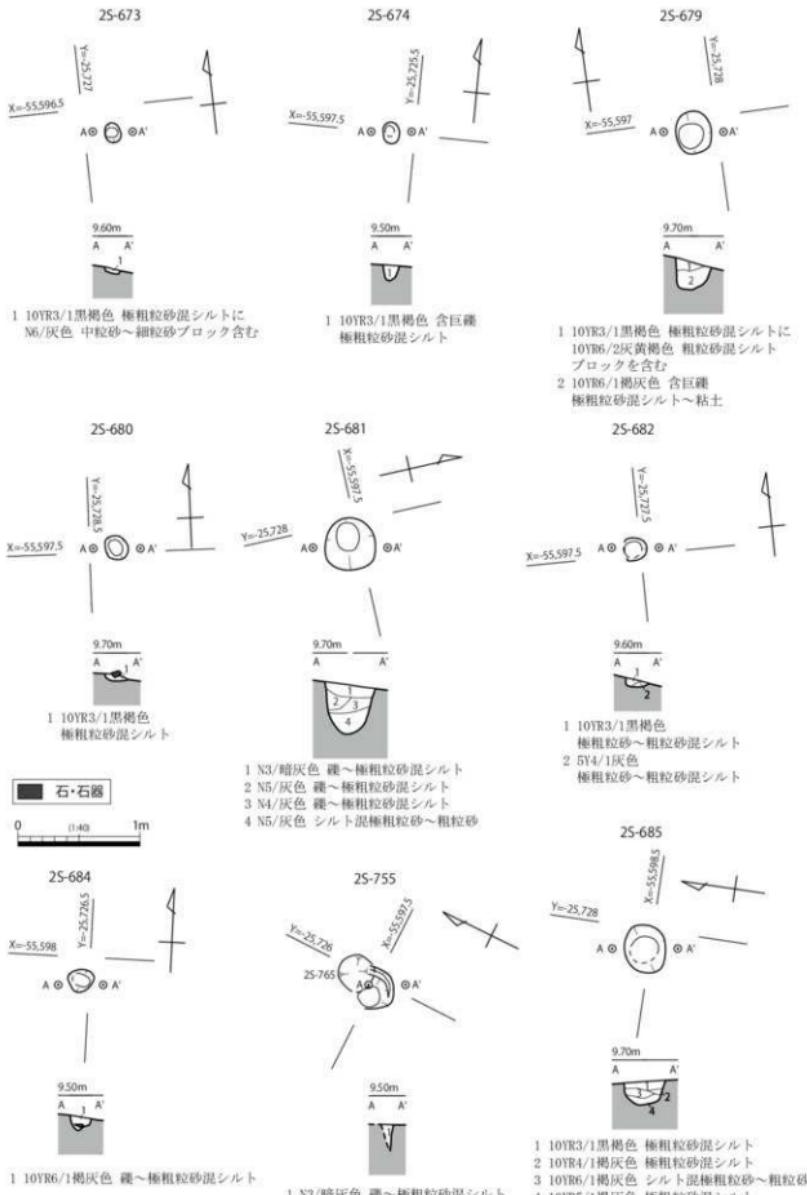
2 S-851(第IV-10-43図)

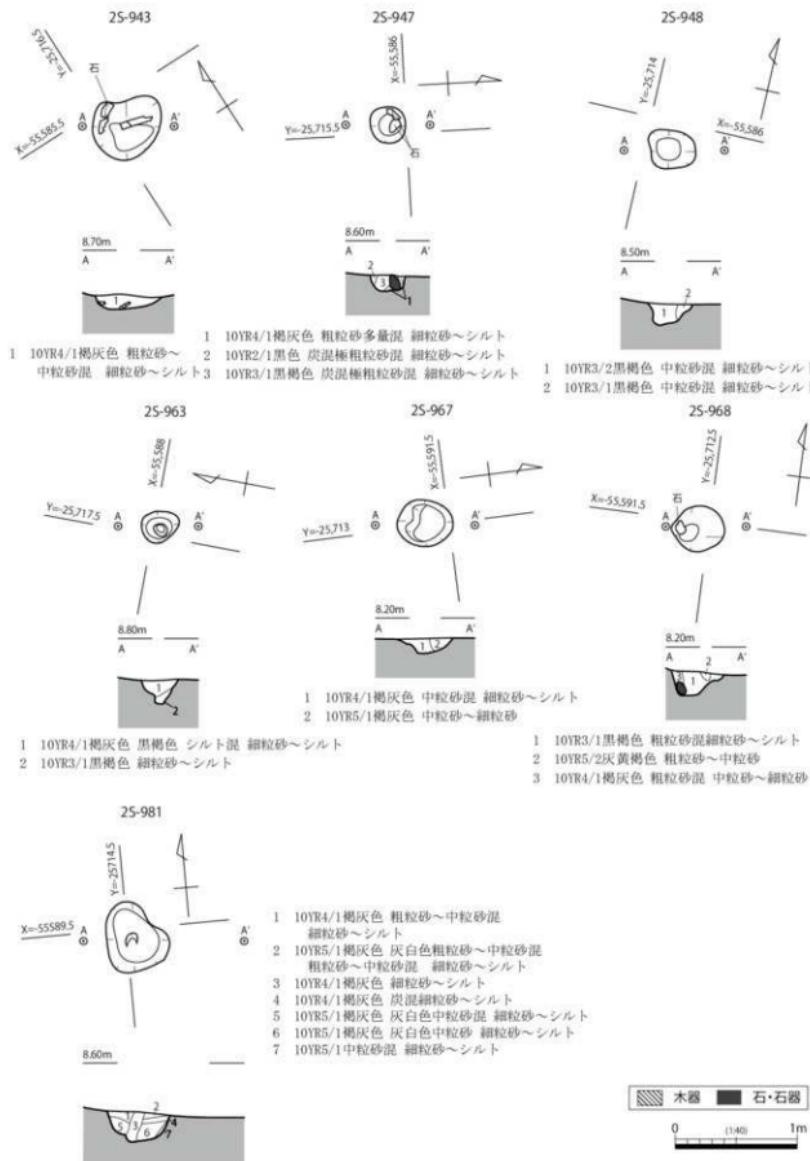
E 6グリッドで検出した土坑である。遺構中央を6ライントレチで削平され、西側の一部のみを検出したほか、6ライントレチに断面の一部が残る。長軸1.15m、短軸0.20mの規模で検出されたが、本来は直径1.2m程度の底面を有する断面袋状の土坑と考えられる。断面観察からは、袋状の壁面は内部に厚さ10cm程度の埋土が埋没した状態で直上の基盤層が崩落(A-A'断面11・12層)したとみられ、遺構平面図は崩落土を除去した状態の図面である。底面から乙亥正VII期頃のほぼ完形に復元できる甕(9-068)、埋土中から長さ35cm、幅17cm、厚さ1cm程度の腐食した板が出土した。(岡野)

2 S-1068(第IV-10-44図)

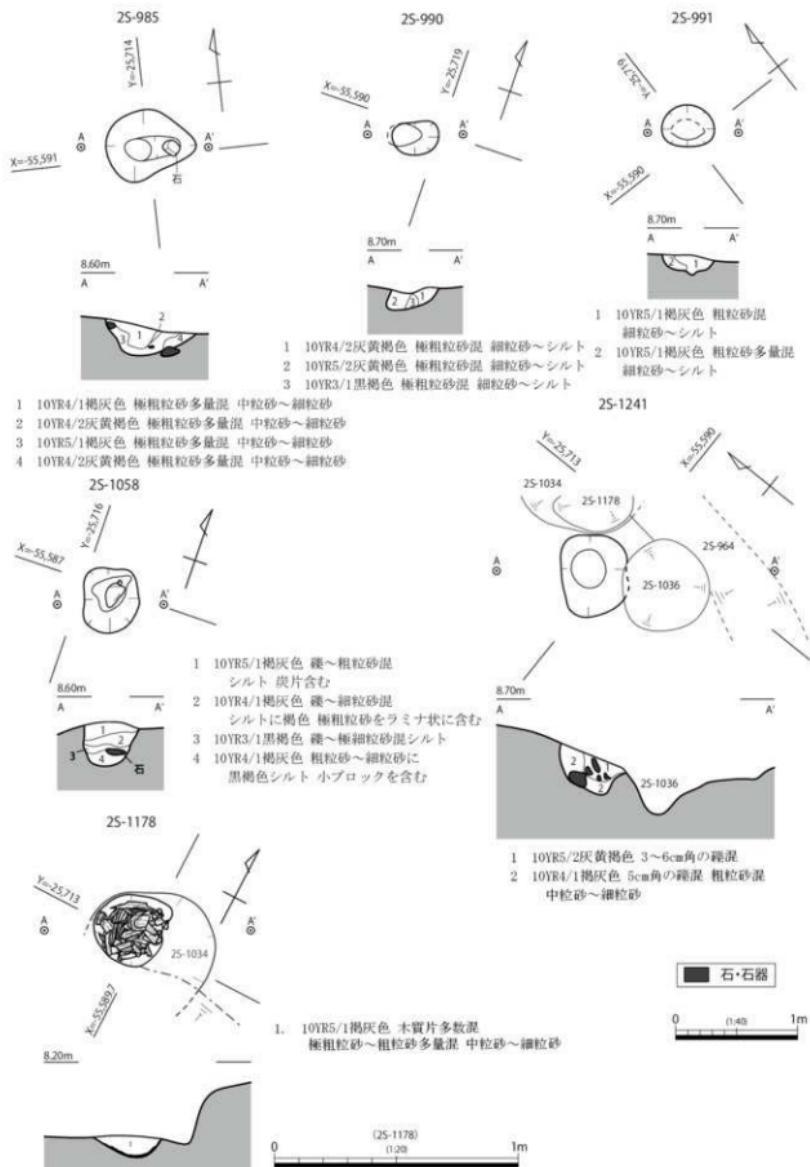
D 8グリッドで検出した土坑である。長径1.12m、短径0.80m、深さ0.20mで、平面形は梢円形

第10節 第9面(Ⅶ層下面)の調査



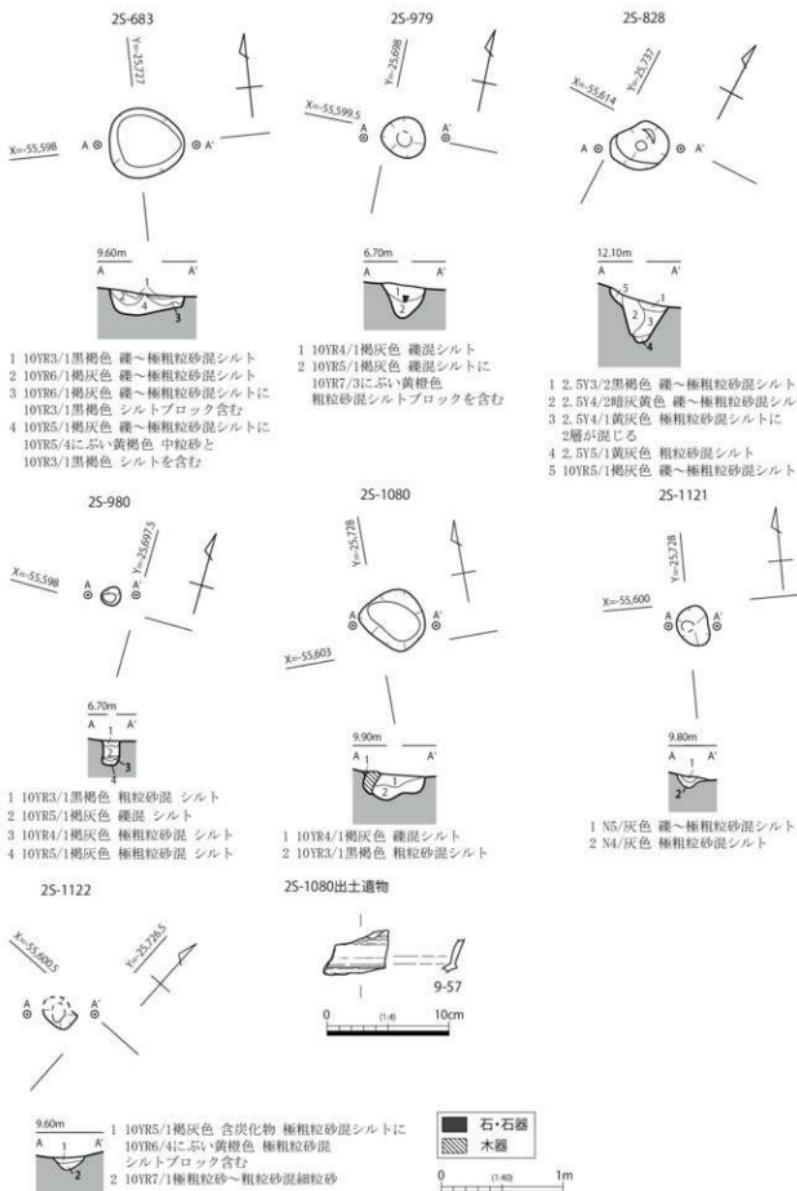


第IV-10-35図 2区 第9面 土坑(2S-943、947、948、963、968、981) 平・断面図



第N-10-36図 2区 第9面 土坑(2S-985、990、991、1058、1178、1241) 平・断面図

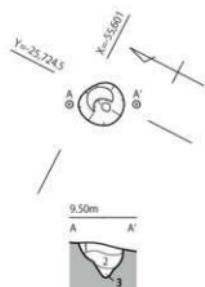
第IV章 2・3区の調査成果



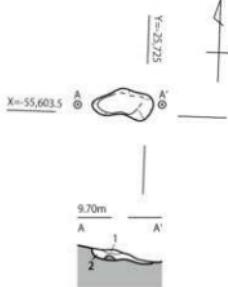
第IV-10-37図 2区 第9面 土坑(2S-683、828、979、980、1080、1121、1122、1123)
平・断面図及び出土遺物

第10節 第9面(Ⅶ層下面)の調査

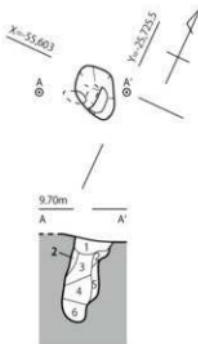
25-1123



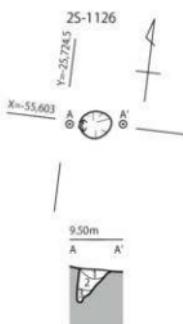
25-1125



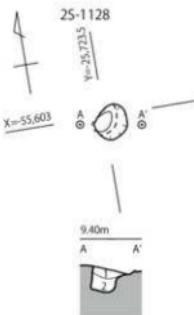
25-1124



25-1126



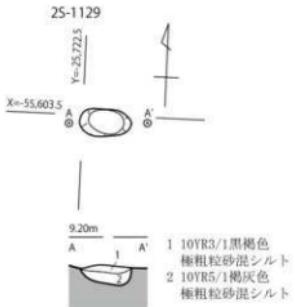
25-1128



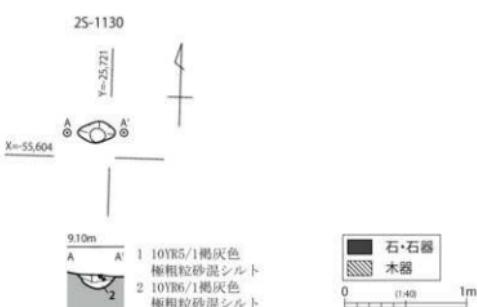
25-1127



25-1129

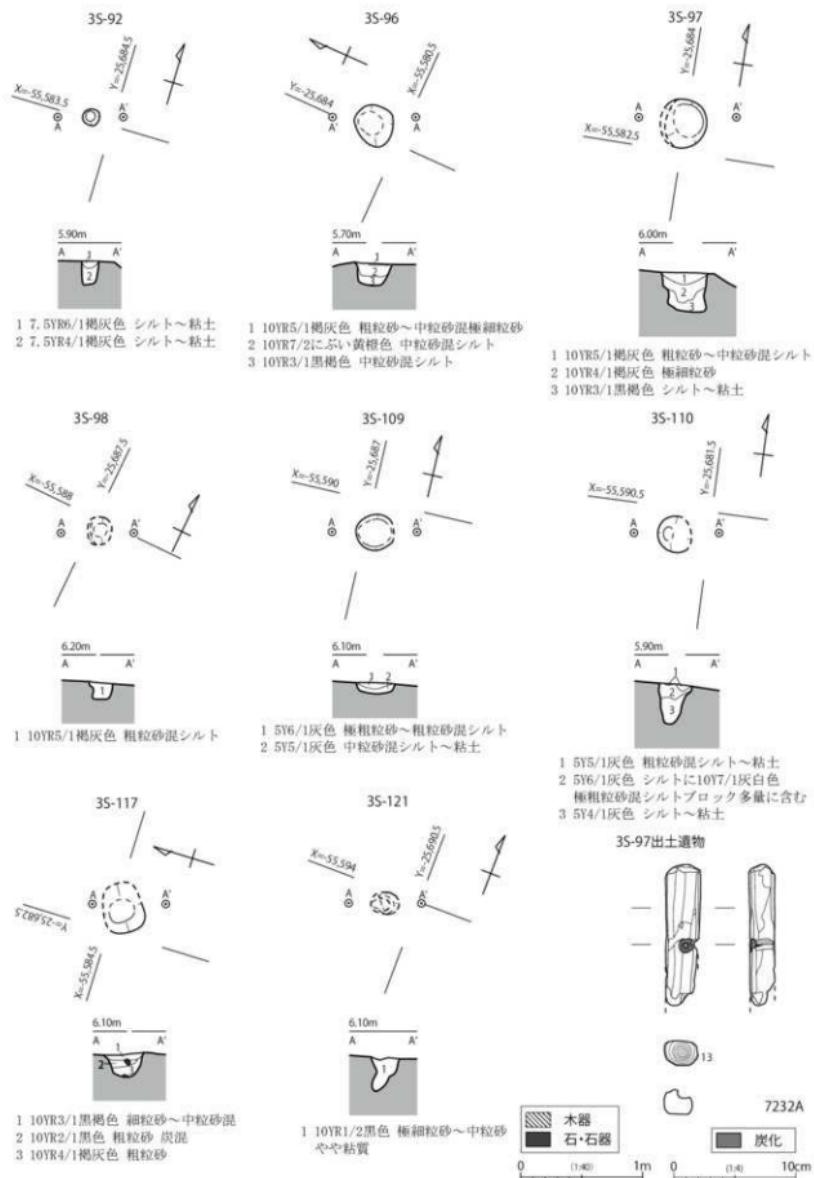


25-1130



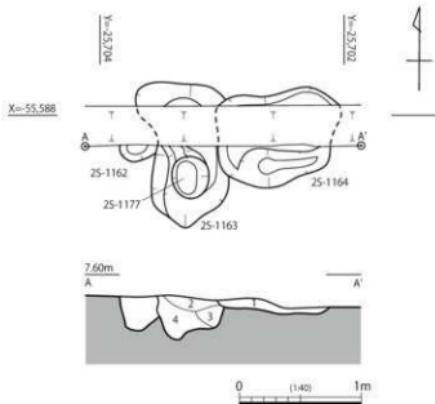
第IV-10-38図 2区 第9面 土坑(2 S-1124、1125、1126、1127、1128、1129、1130)

平・断面図

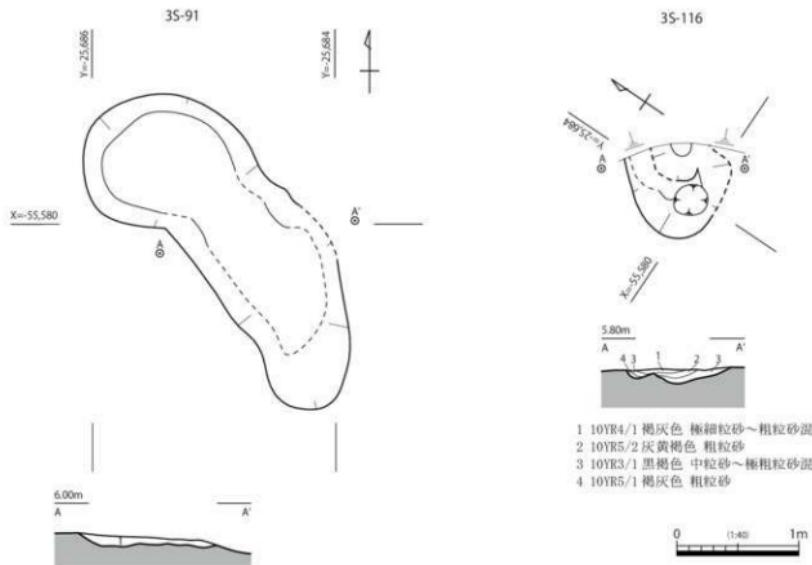


第IV-10-39図 3区 第9面 土坑(3 S-92、96、97、98、109、110、112、117、121)
平・断面図及び出土遺物

25-1163・1164土坑

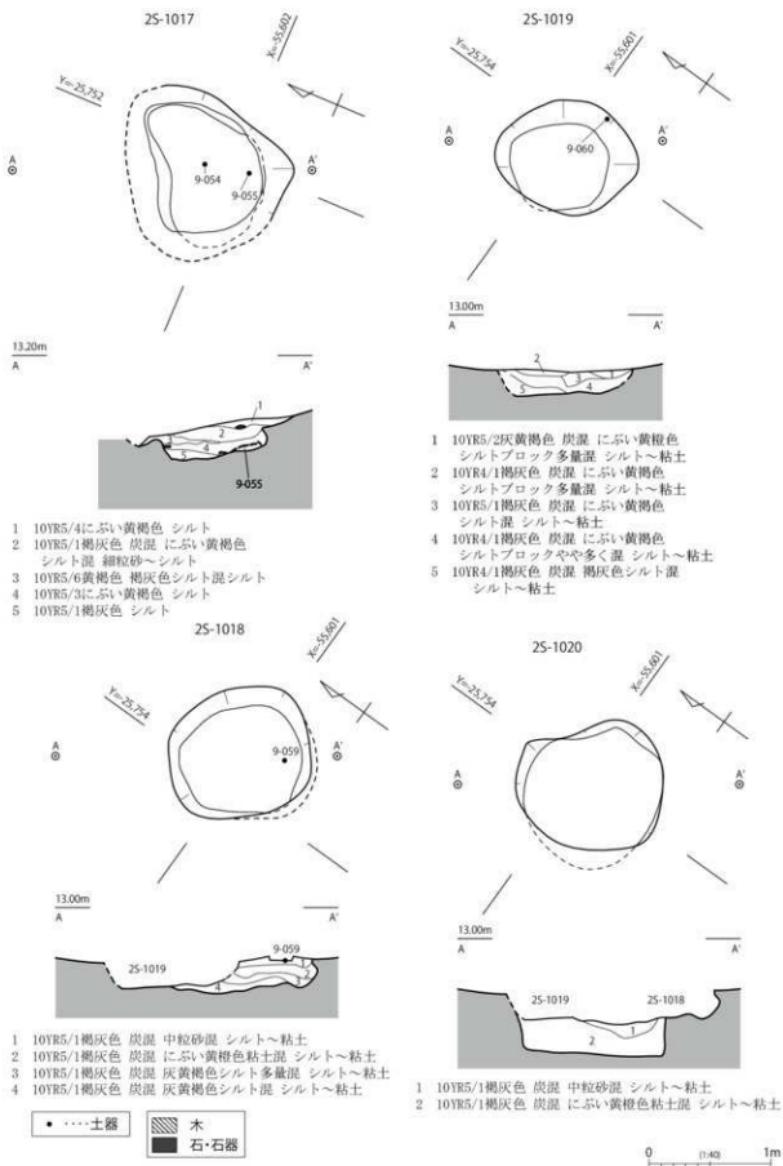


- 1 10YR2/1 黒色 糜～粗粒砂混シルトに10YR7/3 にぶい黄橙色シルト小ブロックを含む 炭片混
- 2 10YR3/1 黒褐色 糜～粗粒砂混シルトに10YR7/3 にぶい黄橙色シルト小ブロックを含む
- 3 10YR5/1 暗灰色 糜～粗粒砂混シルトに2.5Y5/2 暗灰黄色シルトブロックを含む
- 4 10YR4/1 暗灰色 糜～極粗粒砂混シルト



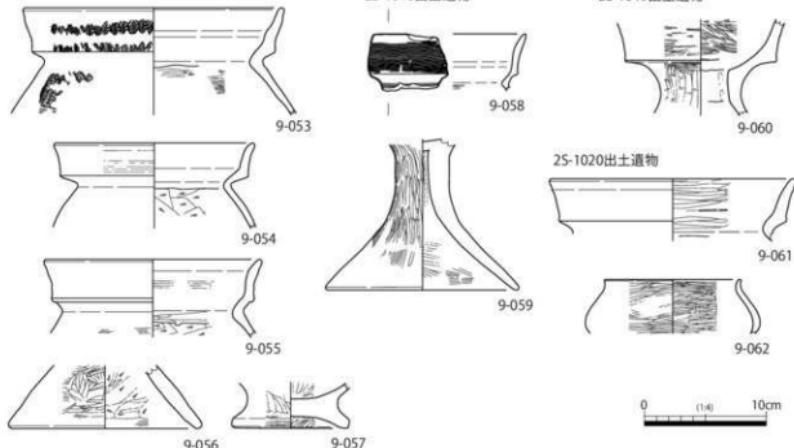
- 1 10YR4/1 暗灰色 極粗粒砂～粗粒砂混細粒砂

第IV-10-40図 2・3区 第9面 土坑(2S-1163・1164、3S-91、116) 平・断面図



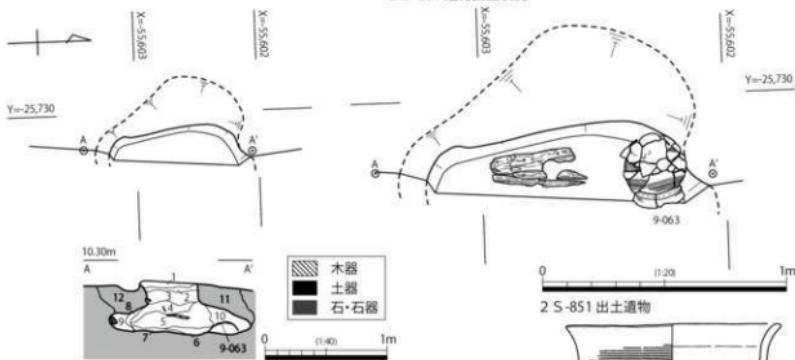
第IV-10-41図 2区 第9面 土坑(2 S-1017～1020) 平・断面図

2S-1017出土遺物



第IV-10-42図 第9面 土坑(2S-1017～1020) 出土遺物

2S-851 遺物出土状況



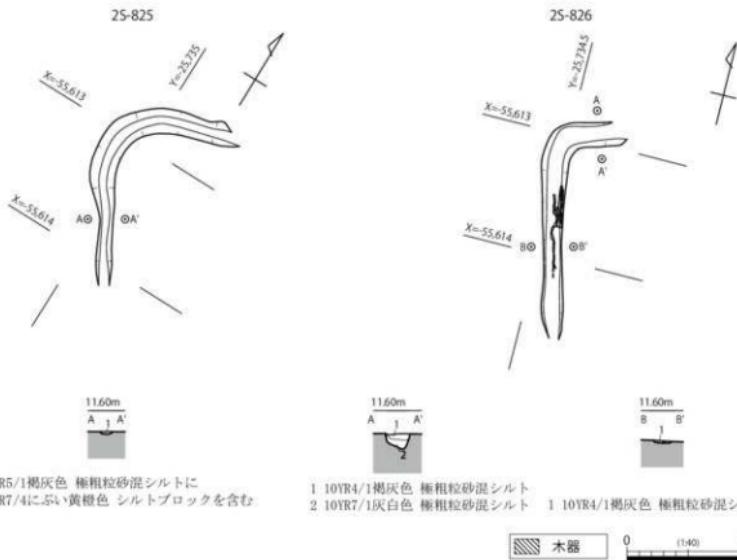
1. 7.5YR5/2灰褐色 7.5YR7/1明褐色灰色混 極粗粒砂～粗粒砂混シルト～粘土
2. 7.5YR5/4にぶい褐色 7.5YR6/2灰褐色混 極粗粒砂混細粒砂～シルト
3. 7.5YR5/1褐色灰色 7.5YR6/1褐色灰色混中粒砂～細粒砂
4. N5/灰色 2.5GY8/1灰色多量混 極粗粒砂～粗粒砂混シルト～粘土
5. N4/灰色 灰混 2.5G8/1灰色混 極粗粒砂混細粒砂～シルト
6. N4/灰色 灰混 粗粒砂混細粒砂～シルト
7. N4/灰色 灰混 2.5YR4/4にぶい赤褐色混 粗粒砂混細粒砂～シルト
8. 7.5YR4/3褐色 灰混 2.5YR4/4にぶい赤褐色混 粗粒砂混細粒砂～シルト
9. 5YR4/4にぶい赤褐色 粗粒砂混細粒砂～シルト
10. N4/灰色 灰混 5YR4/4にぶい赤褐色 灰混 7.5YR7/6橙色 極粗粒砂混細粒砂～シルト
11. 2.5YR5/6赤褐色 粗粒砂混中粒砂～シルト 7.5YR7/1明褐色
極粗粒砂～シルト(崩落土)
12. 7.5YR6/2灰褐色 極粗粒砂混中粒砂～細粒砂 7.5YR7/2明褐色
極粗粒砂～シルト(崩落土)



第IV-10-43図 2区 第9面 土坑(2S-851) 平・断面図及び出土遺物

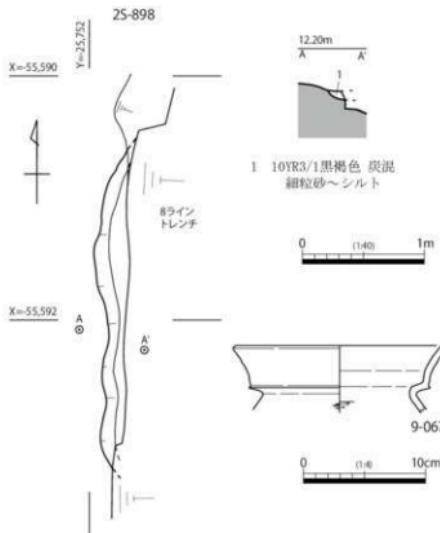


第IV-10-44図 2区 第9面 土坑(2S-890、1068、1070) 平・断面図及び出土遺物



第IV-10-45図 2区 第9面 土坑(2 S-825、826) 平・断面図

を呈する。埋土中から乙亥正VI～VII期頃の壺(9-064)が出土した。(岡野)



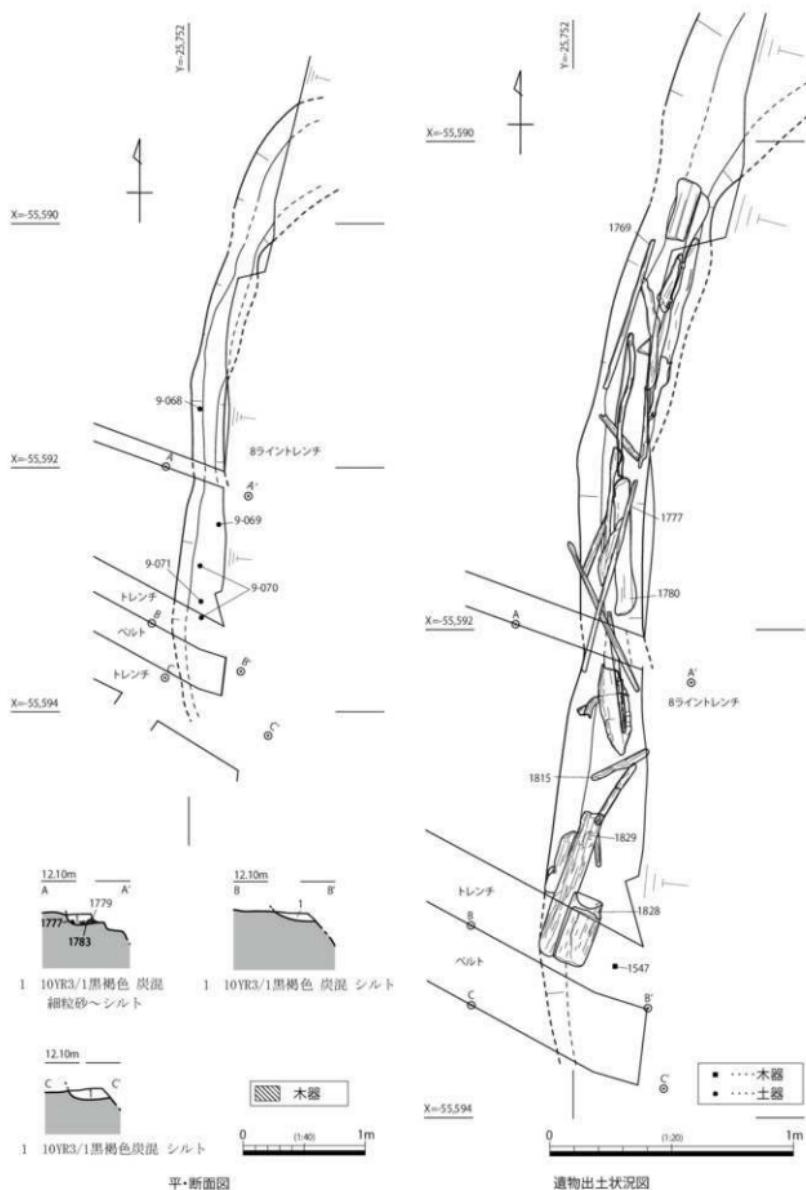
第IV-10-46図 2区 第9面 溝(2 S-898) 平・断面図

2 S-1070 (第IV-10-44図)

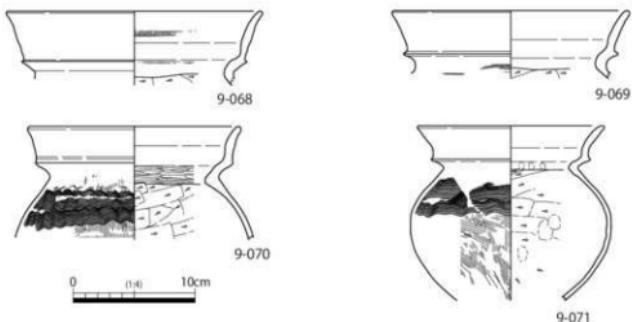
D 8グリッドで検出した土坑である。2 S-1265溝(第11面検出遺構)の埋土を切って構築される。長軸1.33m、短軸1.17m、深さ0.45mで、平面は不整な円形、断面は袋状をなす。埋土中から乙亥正VI～VII期頃の壺(9-065)が出土した。(岡野)

2 S-890 (第IV-10-44図)

D 8グリッドで検出した土坑である。長軸1.12m、短軸0.94m、深さ0.53mで、平面は不整な円形、断面は袋状をなす。底面には基盤層に含まれる自然木が露出する。埋土中から器形の8割程度が復元できる壺(9-066)が出土した。乙亥正VI～VII期頃の土器とみられる。(岡野)



第IV-10-47図 2区 第9面 溝(2S-1026) 平・断面図及び遺物出土状況図



第IV-10-48図 2区 第9面 溝(2 S-1026) 出土遺物1

溝

2 S-825、826(第IV-10-45図)

F 6グリッドで逆L字形の2条を入れ子状態で検出した。溝の南側から東側には谷があり、この谷に面した位置にある。標高の低い南側と東側では溝の続きを検出できなかった。2 S-825の検出延長は約2.2m、幅約0.23m、深さ約0.02m、断面形は皿形で埋土は褐灰色シルトである。2 S-826の検出延長は約2.2m、幅約0.2m、深さはA' A'断面で約0.13m、B' B'断面で約0.02mである。断面形は深い方は椀形、浅い方は皿形である。埋土は褐灰色シルトで、深い方の断面では下層に灰白色シルトが堆積していた。また、2 S-826は底面から東側の肩部に、2本の木が張り付いていた。1本は溝の中央部を南北に、もう一方は東側肩部に接して南北に細長く伸びていた。中央部の方は、細くうねつていて、加工品ではなく、蔓か根の可能性が高い。もう片方は、細く薄い板材と考えられるが、機能等は不明である。いずれの埋土中からも乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土した。(馬路)

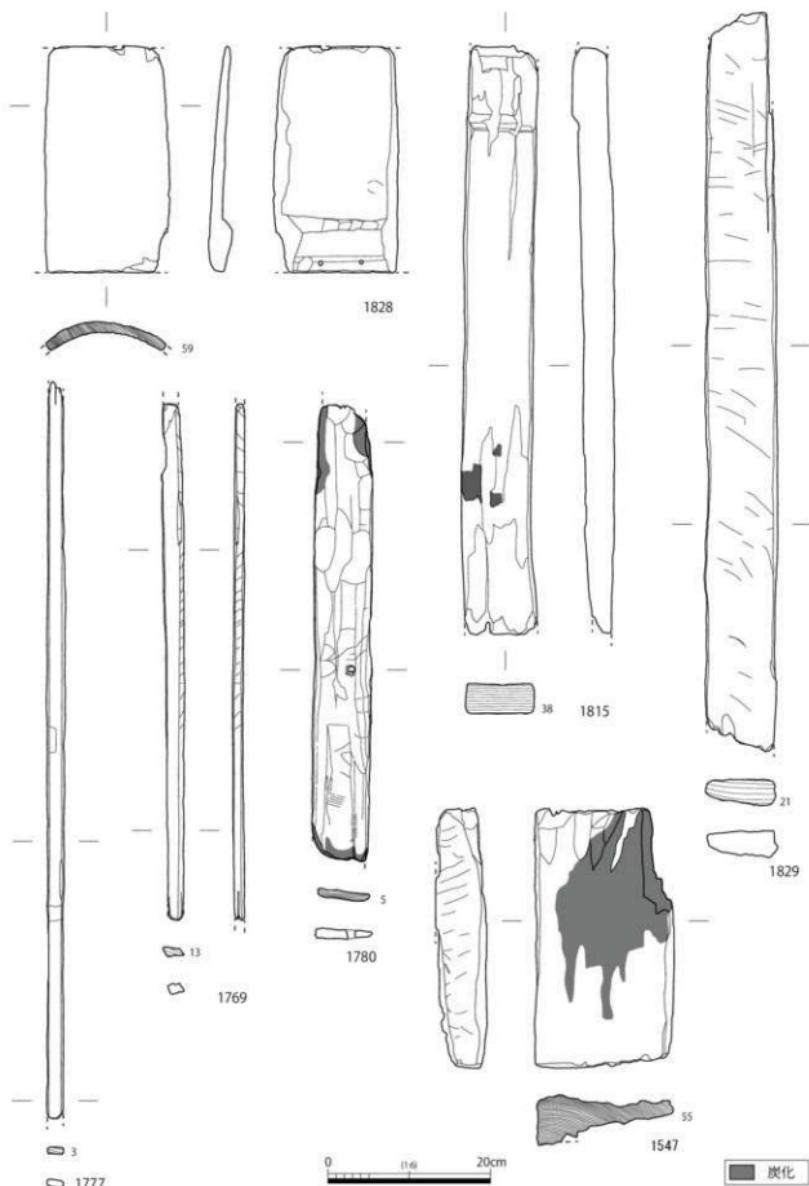
2 S-898(第IV-10-46図)

D 8グリッドで検出した溝である。後述する2 S-1026、1028溝の上層にあたる。東側へ緩くカーブする溝であるが、8ライントレーナにより削平され、南北方向約26mの規模で、溝の西側側壁のみを検出した。溝幅は不明であるが、下層の2 S-1026、1028ともほぼ同様の溝と考えられることから、0.3m程度の幅と推定される。埋土中から、甕(9-067)が出土した。乙亥正VII～VIII期頃の土器と推定される。(岡野)

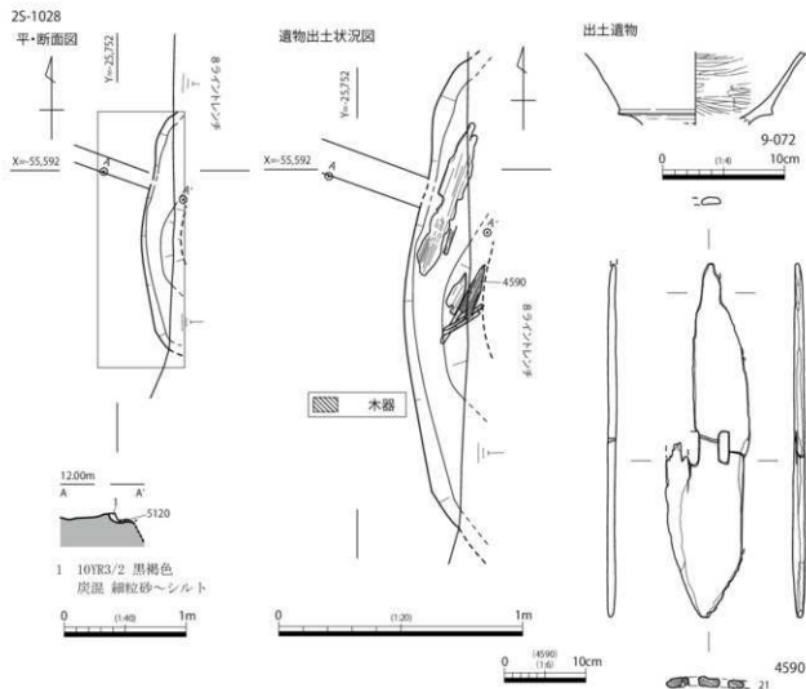
2 S-1026(第IV-10-47～49図)

D 8グリッドで検出した。2 S-898の下層、後述する2 S-1028の上層にあたる。8ライントレーナに削平されているが、土層観察用ベルト部を含めて長さ4.8m、幅約0.3m程度、深さ0.04～0.13mの規模で、東側へ向け緩やかにカーブする平面形をなす。8ライントレーナ土層断面の24層(第IV-1-9図)に相当するとみられ、半径4m程度の円弧状をなすとみられる。下層の2 S-1281と類似する。

埋土中から乙亥正VII期頃の特徴を有する甕(9-068～071)と伴に多数の木器が出土した。直径



第IV-10-49図 2区 第9面 溝(2 S-1026) 出土遺物2

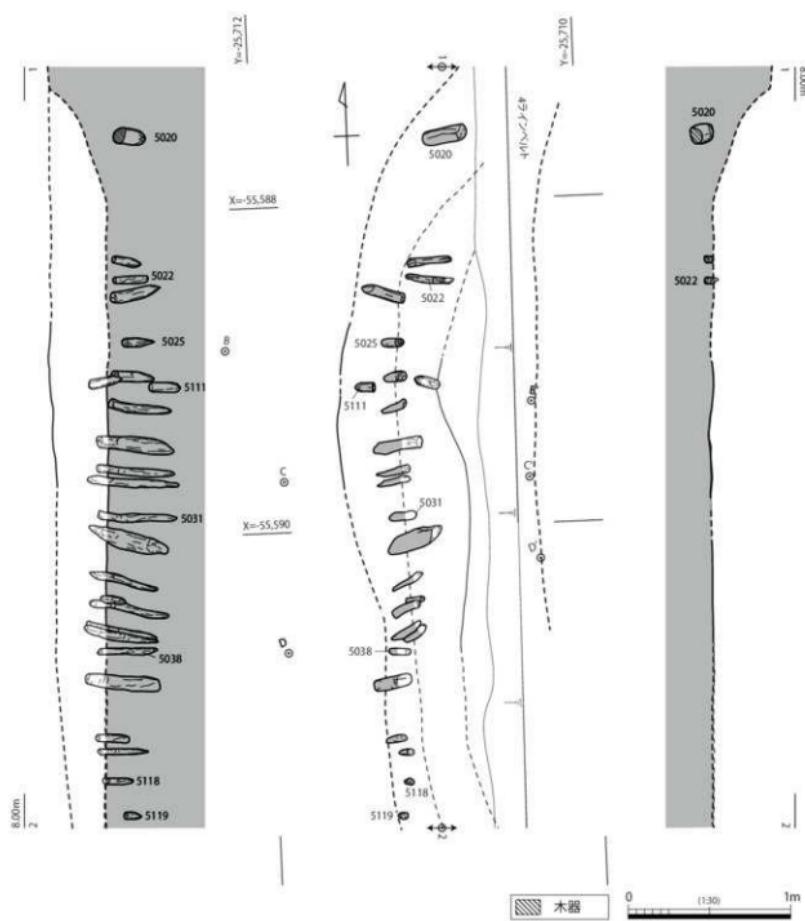


第IV-10-50図 2区 第9面 溝(2S-1028) 平・断面図及び出土遺物

3～5 cm程度、長さ50～70 cm程度の樹皮付自然木数本、幅2～3 cm、厚さ1 cm前後、長さ60～90 cm程度のへぎ板状の分割材(1777、1769)のはか、建築部材(1815、1829、1547)、桶(1828)などが、溝の長軸方向に沿って出土した。自然木の中には端部の切断痕がみられるものもある。棒状の分割材は、削割のものが多いが、1769は右側面のみ手斧痕がある。1777は主軸の直交方向に幅2 cm程度の圧痕がある。1780、1815、1547など、実測外を含めて一部は炭化している。桶1828の底部には底板の痕跡がみられ、目釘は中折れした状態である。(岡野)

2 S -1028 (第IV-10-50図)

D 8 グリッドで検出した。2 S-1026より古い遺構である。8 ライントレンチで切られているが、南北方向約1.9mの規模、幅は概ね0.3m程度と推定され、深さは0.02～0.09m、東側に緩くカーブする平面形を呈する。埋土中から器台(9-072)、組合せ平鋤あるいは祭祀具(4590)、板等の部材が出土した。組合せ平鋤は、平面が柳葉形をなし、身の中央に長方形の着柄孔が2か所ある。樹種はスギである。図化しなかった部材は、長さ65 cm、最大幅12 cm、厚さ1 cm程度の腐朽顯著な板、棒状の木片などである。乙亥正VII期頃の特徴をもつ器台(9-072)が出土している。(岡野)

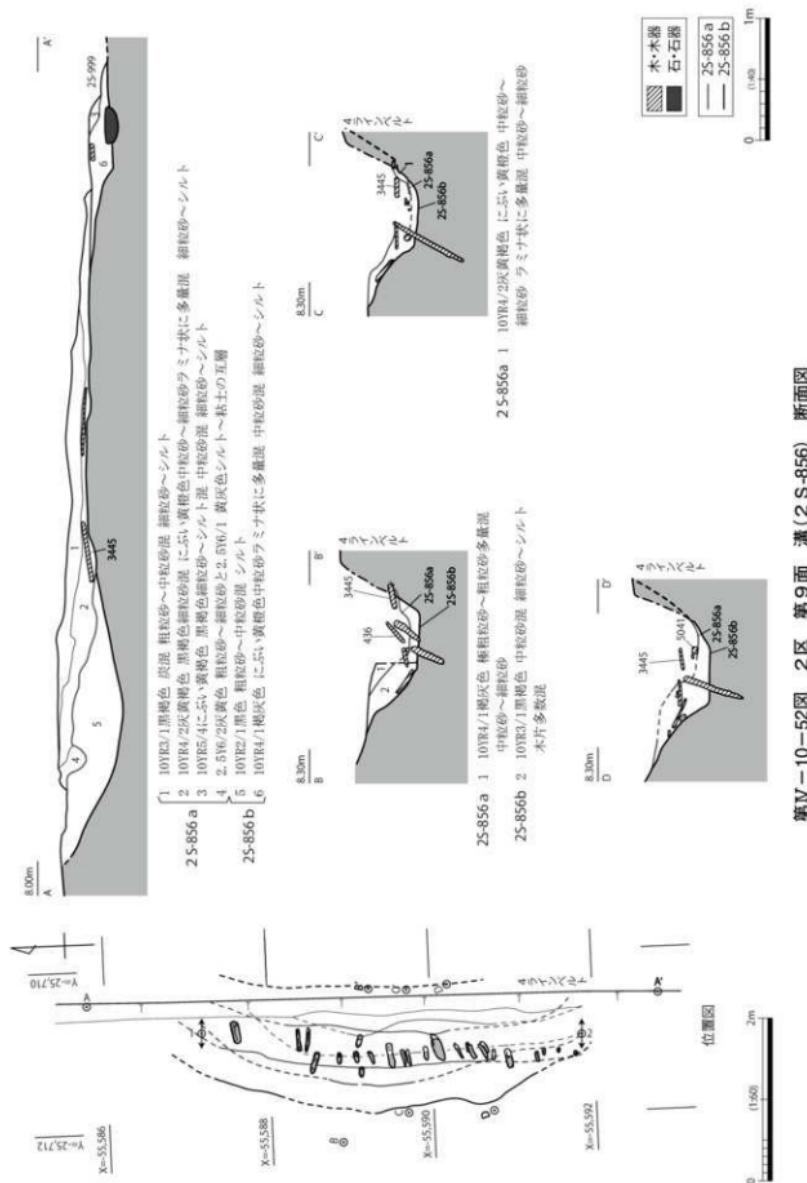


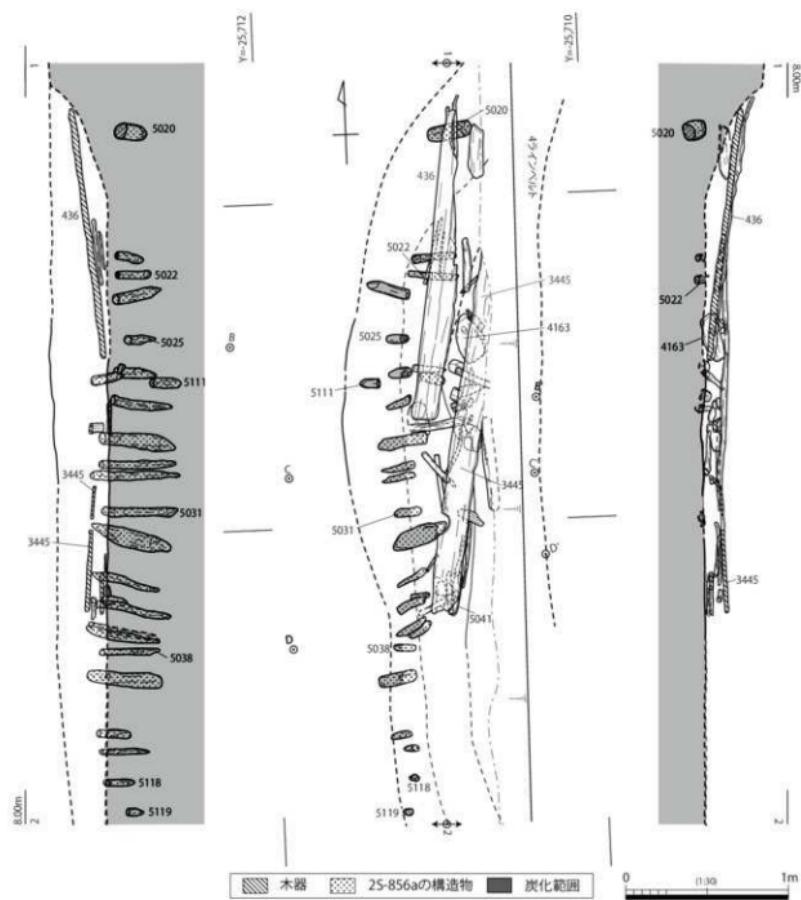
第IV-10-51図 2区 第9面 溝(2S-856 a) 平・立面図

2S-856 (第IV-10-51 ~ 56図)

C 4、D 4グリッドで検出した南北方向へ伸びる溝で、主に4ライントレンチ内で検出した。トレーニチから南東側は2S-180（第4面の流路）、2S-999（第5面の流路）に削平されており残存せず、北東側は調査できていない。溝は二段階に分かれており、調査順に2S-856 a → 2S-856 bとした。

2S-856 aは、推定部を含めて、幅0.8~1.2m、深さ0.35~0.40m程度である。溝内の西側壁面は杭と矢板で護岸されていたとみられ、25本の杭が検出された。全てが芯持丸太で、直径3~6cm程度の比較的細い材が多用されている。樹種は5031がアカガシ、5038がスダジイであり、大半が広葉樹である。打設ピッチは概ね10~20cm程度である。ほぼ重複する杭もあるため、補強あるいは



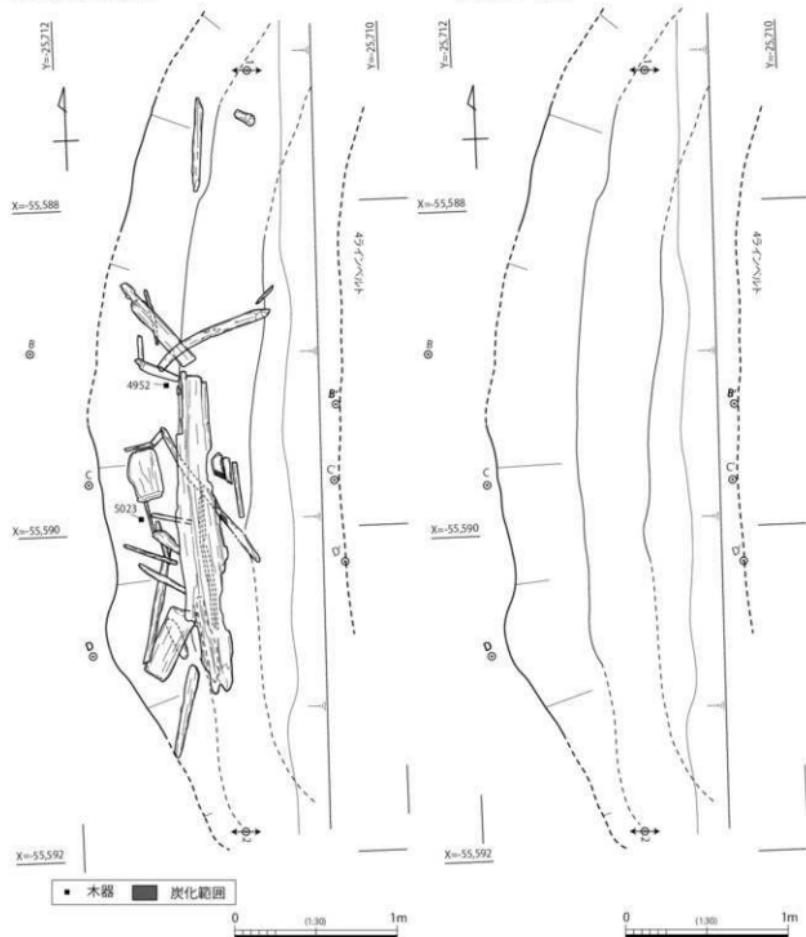


第IV-10-53図 2区 第9面 溝(2S-856a) 溝内遺物出土状況図

は追加打設されたものもあるようだ。杭の残存部分は、いずれも打設・埋没していた部分とみられ、大半が溝内側へ倒れ込んだ状態で検出された。組み合わせていたであろう横板は抜き取られたと考えられる。トレンチ内での検出のため、南北両端部の造構上端ラインの大部分は推定線となるが、杭列の検出状況、4ライントレンチ土層断面からみると、溝の走向は杭列付近がほぼ南北方向の直線に近く、両端部で緩やかに屈曲し東側へ向かうと推定される。なお、4ライントレンチの北東側は調査できていないが、2S-959（周堤溝）の外側に向かうと推定され、2S-959と同様の周堤溝であった可能性もある。4ラインベルト東側のトレンチでは杭の痕跡は全く見られないので、溝の西端部のみを護岸していたと推定される。

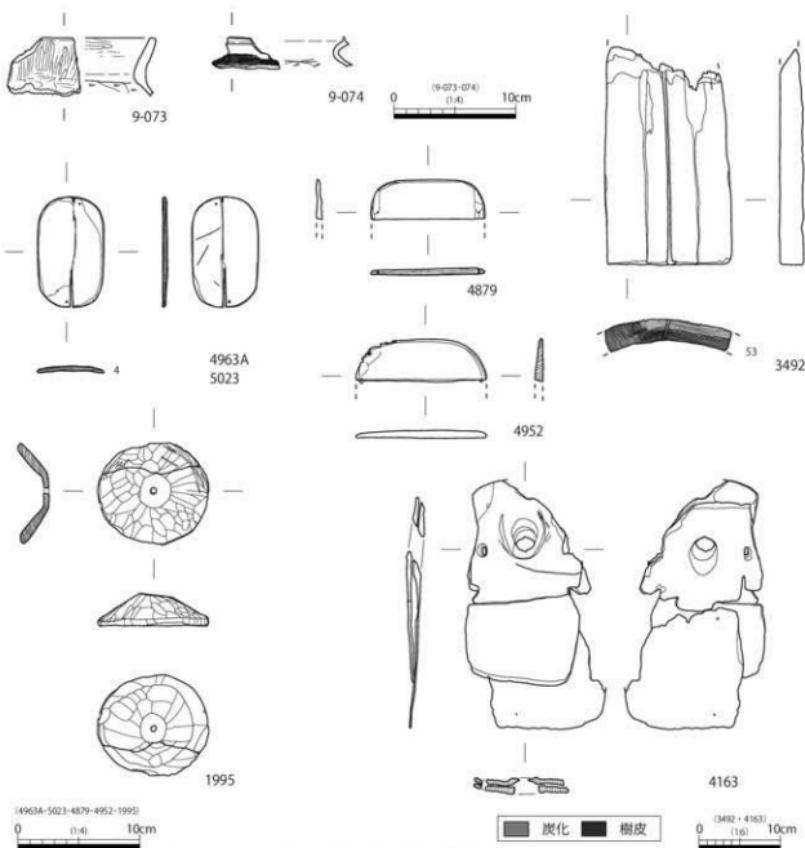
2S-856a の溝埋土中からは、甕(9-073, 074)、泥除付の平鉗(4163)、建築部材(3445)が出土した。

2S-856b遺物出土状況図



第IV-10-54図 2区 第9面 溝(2S-856 b) 溝内遺物出土状況及び遺構平面図

壺(9-074)は先端が欠損するものであるが、複合口縁部の鋭く突出する稜や胴部上端の直線文などからみて、乙亥正VII～VIII期頃の土器とみられる。平鉢は、身と泥除板が樹皮で縛られた状態で出土したもので直柄鉢(青谷上寺地遺跡分類D類)とみられる。身は上半が緩やかに広がり、下半部は三角形の切り込みを有するもので、柄孔は円形である。柄孔の左右には泥除けを装着するための方孔があり、身の上部前面には、泥除を装着する返りが作り出されている。出土時は泥除が返りに装着され、身の方孔には縛ったための樹皮が巻かれた状態であった(保存処理により樹皮部分は剥落し、現状では身と泥除は分離している)。身の樹種はアカガシである。建築部材3445、0436は埋土の上層で出土

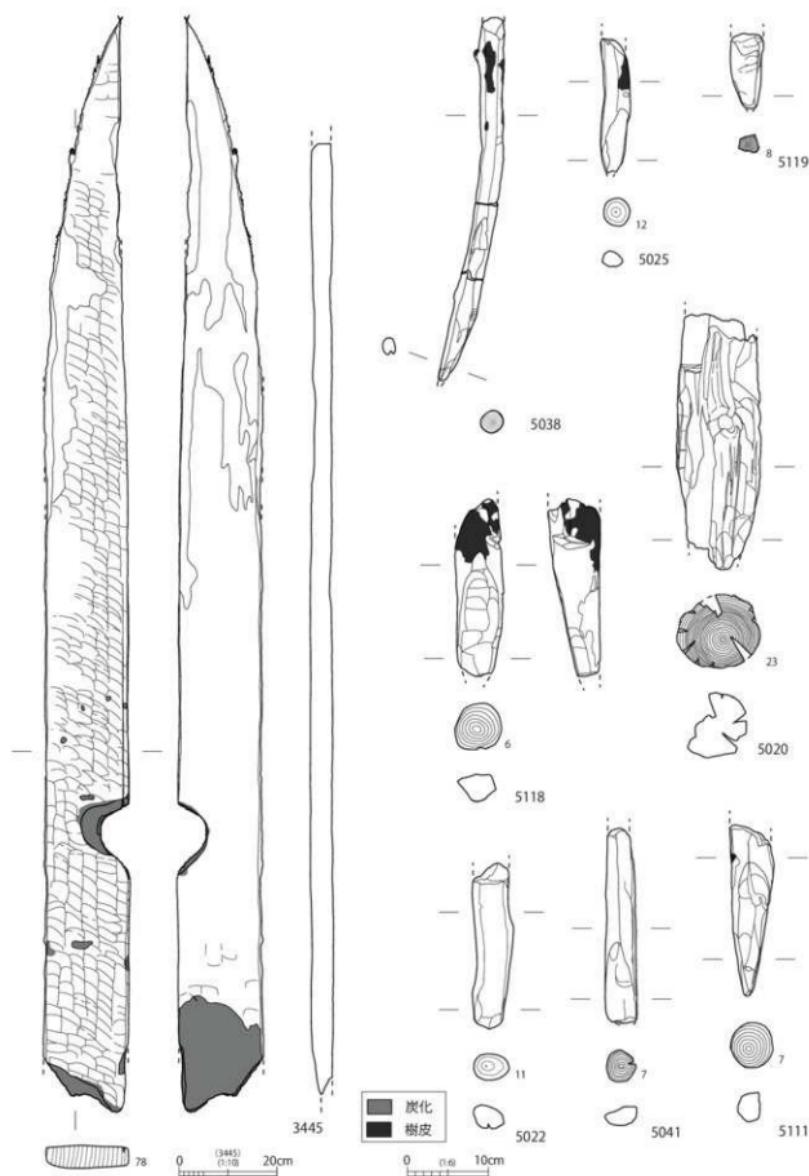


第N-10-55図 2区 第9面 溝(2S-856) 出土遺物1

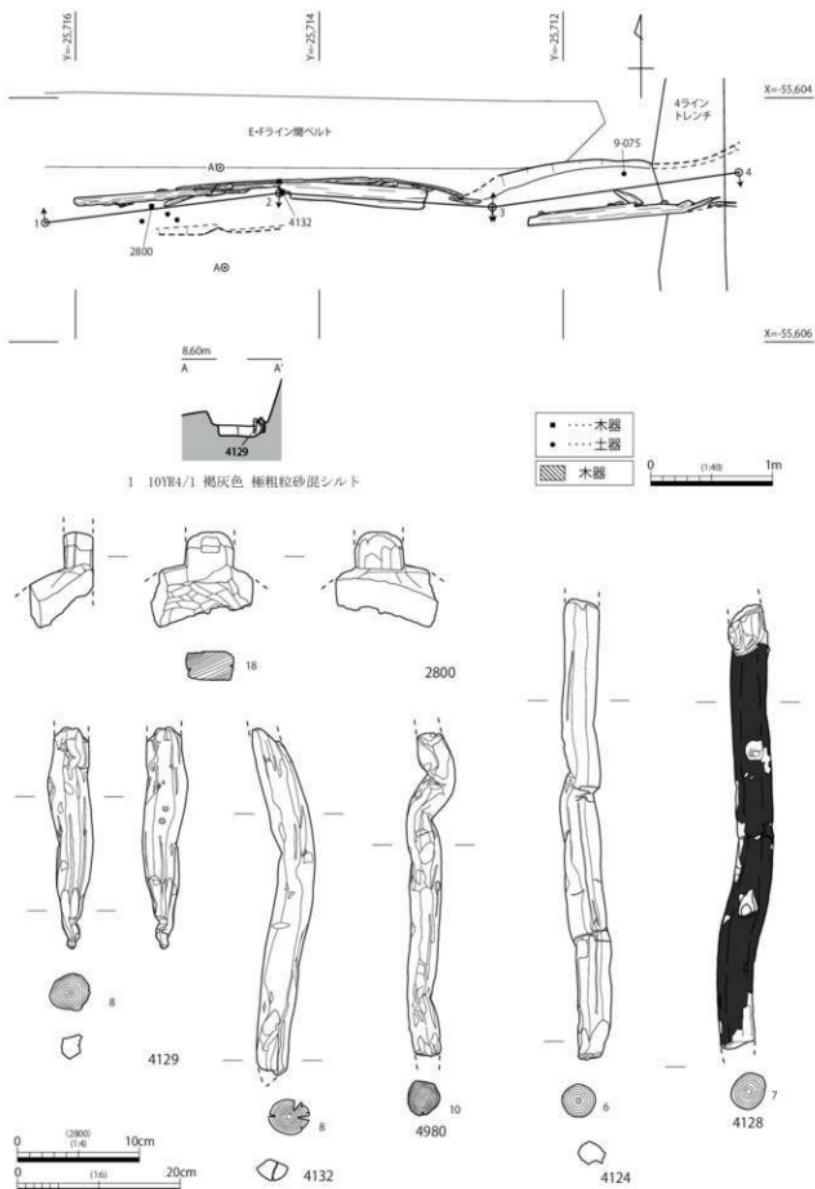
したもので、杭が溝内側へ倒れ込んだ上から出土したことから、溝が機能を失い埋没しつつある状況の中で投棄されたと考えられる。3445は、長さ214.9 cm、幅17.8 cm、厚さ4.7 cmの部材で、上端部は調査都合による切断、下端部は焼損である。表裏側面とも手斧痕がみられ、側面の一部には柱状の部材をはめ込む仕口があり、周辺部が炭化する。ほぼ隣接、平行して出土した0436は、実測図化できていないが、長さ約191 cm、幅約21 cm、厚さ約1 cmの板で一端は欠損、表裏に手斧痕が残る。

2S-856 bは、856 aより一回り大きな溝で、推定部を含めて、幅1.3 ~ 1.5m、深さ約0.4 ~ 0.5mである。護岸施設はなく、素掘りと考えられる。東側に向かって緩やかにカーブしており、856 aと同様に4ライントレンチ東側の住居に伴う周堤溝の可能性がある。埋土中から、蓋(4963A-5023・4879・4952)、用途不明品(1995)、板状品(3492)、長さ約190 cm、幅約20 cm、厚さ約1 cmの大型の板の他、板状の木片、芯持丸太が複数出土している。蓋(4963-5023)はスギ、両端部に小孔をもち、端部は緩やかに面取されている。用途不明品(1995)は、カヤ製で直径約9 cmの円錐台形を呈し、

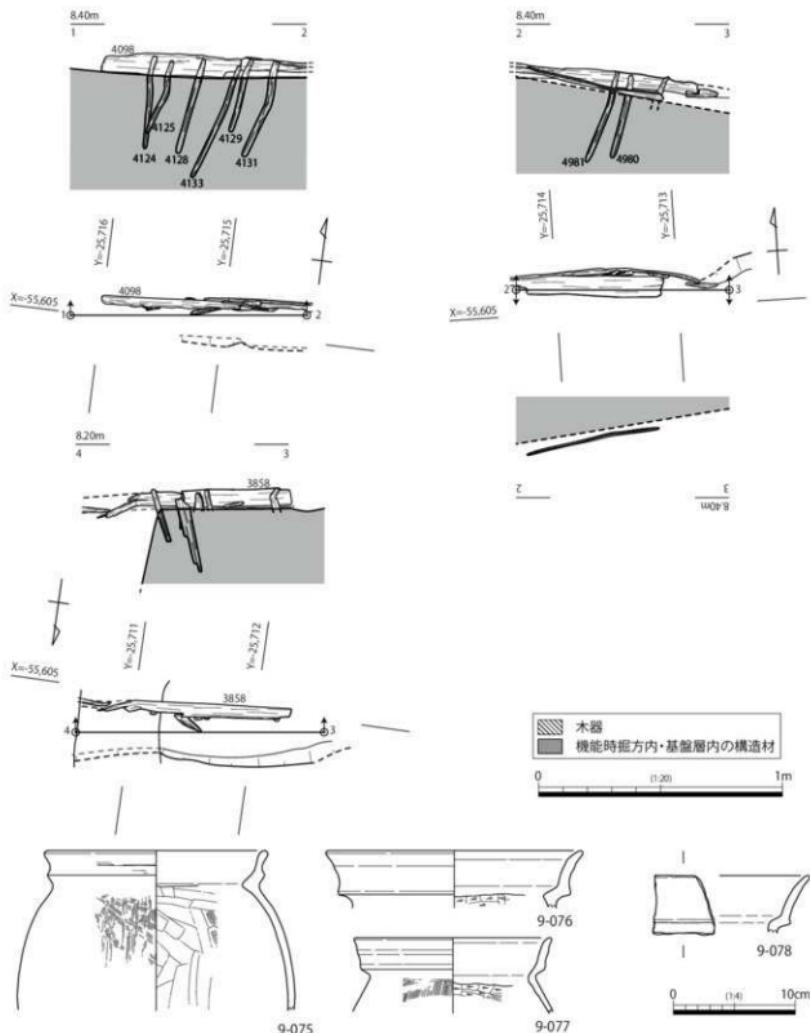
第10節 第9面(VII層下面)の調査



第IV-10-56図 2区 第9面 満(2 S-856) 出土遺物2



第IV-10-57図 2区 第9面 溝(2S-1143) 平・断面図、出土遺物分布図及び出土遺物 1



第IV-10-58図 2区 第9面 溝(2S-1143) 平・立面図及び出土遺物2

内部を繰り抜く。中央には直径約2mmの穿孔がある。大型の板は腐朽が著しく表裏の状況は不明である。芯持丸太材には先端を杭状に加工したものも含む。2S-856bの埋土から土器は出土していない。
(岡野)

2S-1143(第IV-10-59・60図)

E 4 グリッドで E・F ライン間トレンチ内で検出したため、調査後に 4 ライントレンチ断面の層序関係に基づいて帰属面を確定させた。溝は、調査区南側の丘陵と 2 区中央部の微高地に挟まれた谷の中を西から東に流れるように掘削されていた。検出延長は約 5.5m、幅約 0.4m、深さ約 0.14m である。溝の西側は上面の 2 S-927 などにより消失し、4 ライントレンチ以東は未調査である。南北両岸の一部に護岸を伴う。立面ポイント 1・3 間は北岸のみ護岸が残存する。横板は 3 枚検出した。西端の横板(4098)は長さ約 1.1m、幅約 0.2m で、この横板に一部重複して残り 2 枚の横板がある。この 2 枚はさらに前後に重なり内側の横板は溝内に倒れ込んでいた。内側の横板は長さ約 1.9m、外側の横板は長さ約 2.5m である。杭は、1・3 間で 9 本出土した。打設された間隔に規則性は認められず、杭の両端を留めるということもない。ただし、杭に利用された材は、直径約 6 cm の樹皮付の丸太材ないし半裁丸太材を用いるという点が共通する。

3・4 間は南岸のみに護岸があり、横板 1 枚に、杭 5 本が出土した。横板は、4 ライントレンチ断面に統一しており、検出した部分の長さは約 1.6m である。杭は、下層の溝に伴うものが混在している可能性がある。北岸の杭に比べて素材や長さに統一性が無い。

埋土は 1 層で、埋土中から土器、木器が出土した。土器は、乙亥正 VI～VII 期頃の壺の口縁部片(9-075～078)が出土した。木器は、アカトリ(2800)が 1 点出土した。ほかには護岸材に利用された杭と建築部材がある。杭は、芯持ち丸太材を利用した杭(4129、4132、4980、4124、4128、4131、4981)と半裁丸太材を利用した杭(4131)がある。いずれも樹皮が残存し、先端部のみ加工している。建築部材の 3858 は厚さ約 1.3 cm の薄い板材で隅の一カ所を欠き込む。4098、4099、4100 は厚さ約 3～4 cm の板材で、4099、4100 は短軸方向に湾曲し、片側辺に方形の欠き込みがある。欠き込みの間隔は 4099 が約 44～54 cm、4100 が約 34～40 cm である。(馬路)

流路

2 S-1023(第IV-10-61・63図)

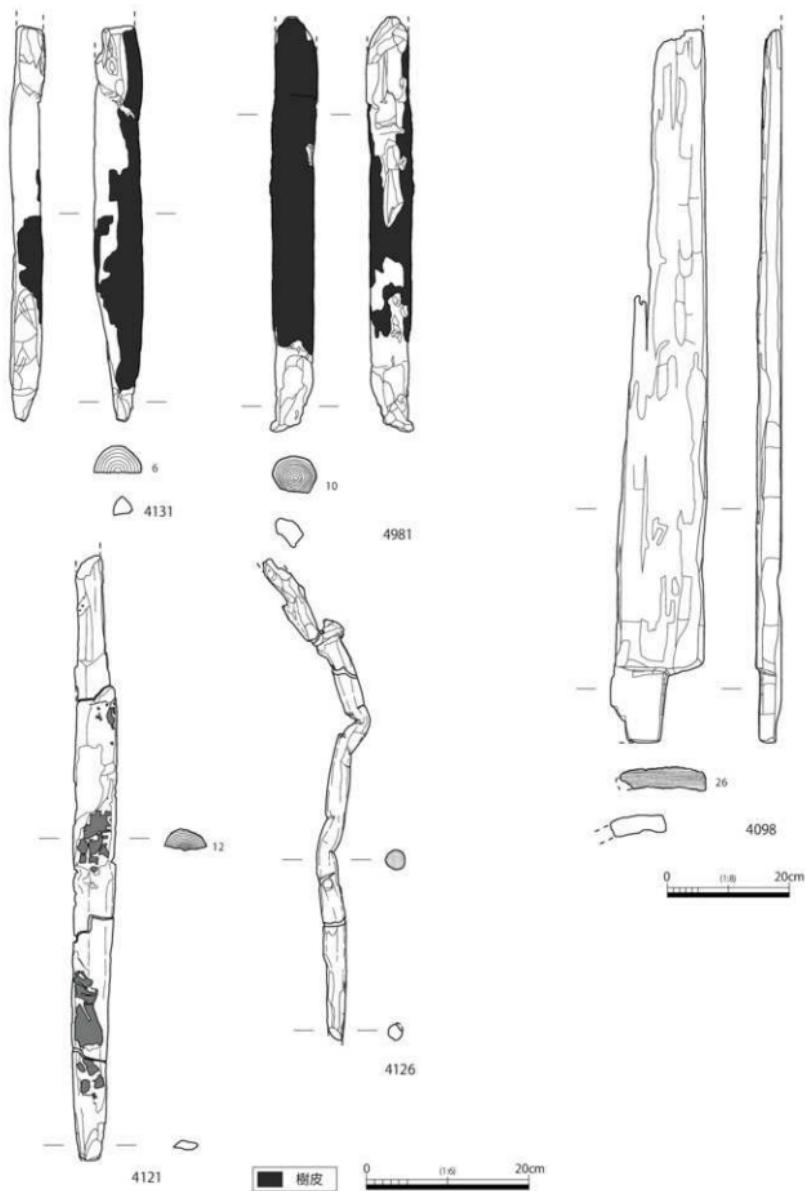
B 3、C 3、C 4 グリッドで検出した。2 S-245(第 7 面の溝)に切られる。南西から北東方向へ向かう溝で、長さ約 13m、幅 0.60～1.00m 程度、深さ 0.04m～0.17m の規模で検出した。底面は北東側が低い。埋土は、極粗粒砂から細粒砂とシルトの互層をなし、流水により埋没したと推定される。埋土中から、壺(9-079)、甕(9-080～82)、土玉(1688A・1241)が出土した。(岡野)

2 S-1024(第IV-10-61図)

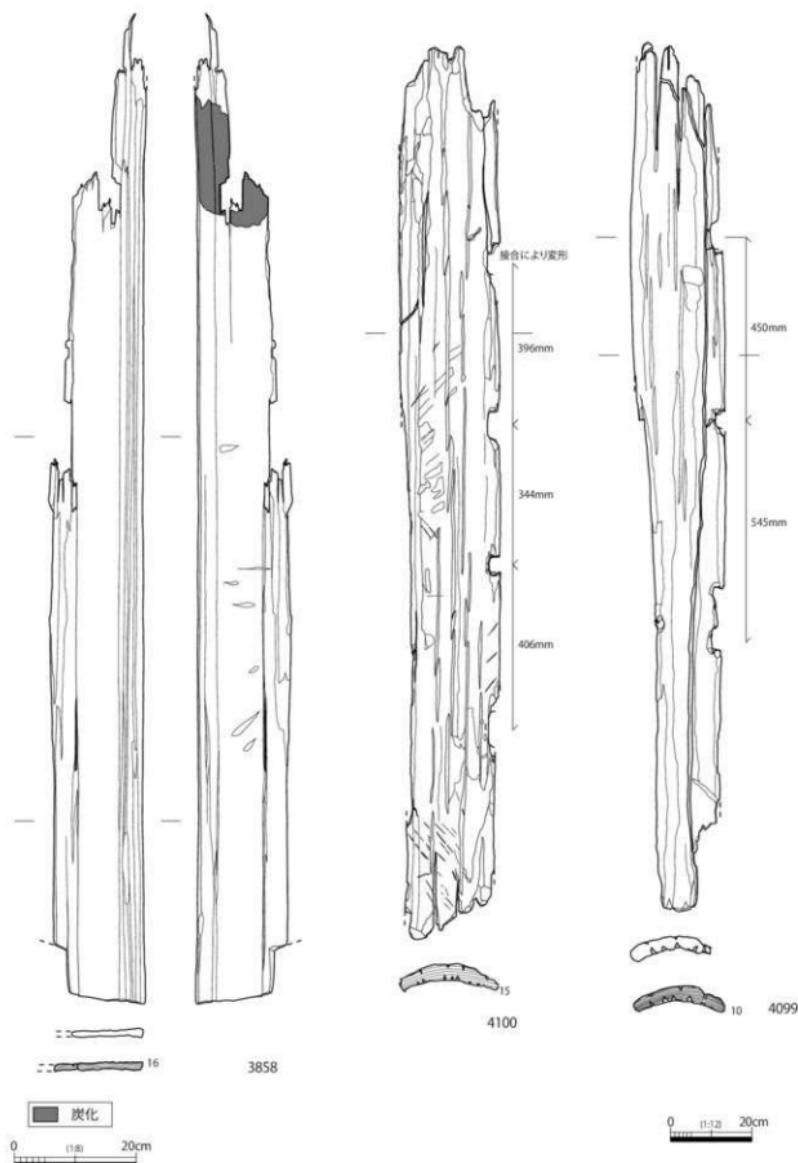
C 3 グリッドで検出した。北東～南西方向へ伸びる溝で、延長約 1.5 m、最大幅 0.35 m、深さ約 0.05 m の規模で検出した。南西側では過掘削により検出できなかった。遺物は出土していない。(岡野)

2 S-951(第IV-10-62・63図)

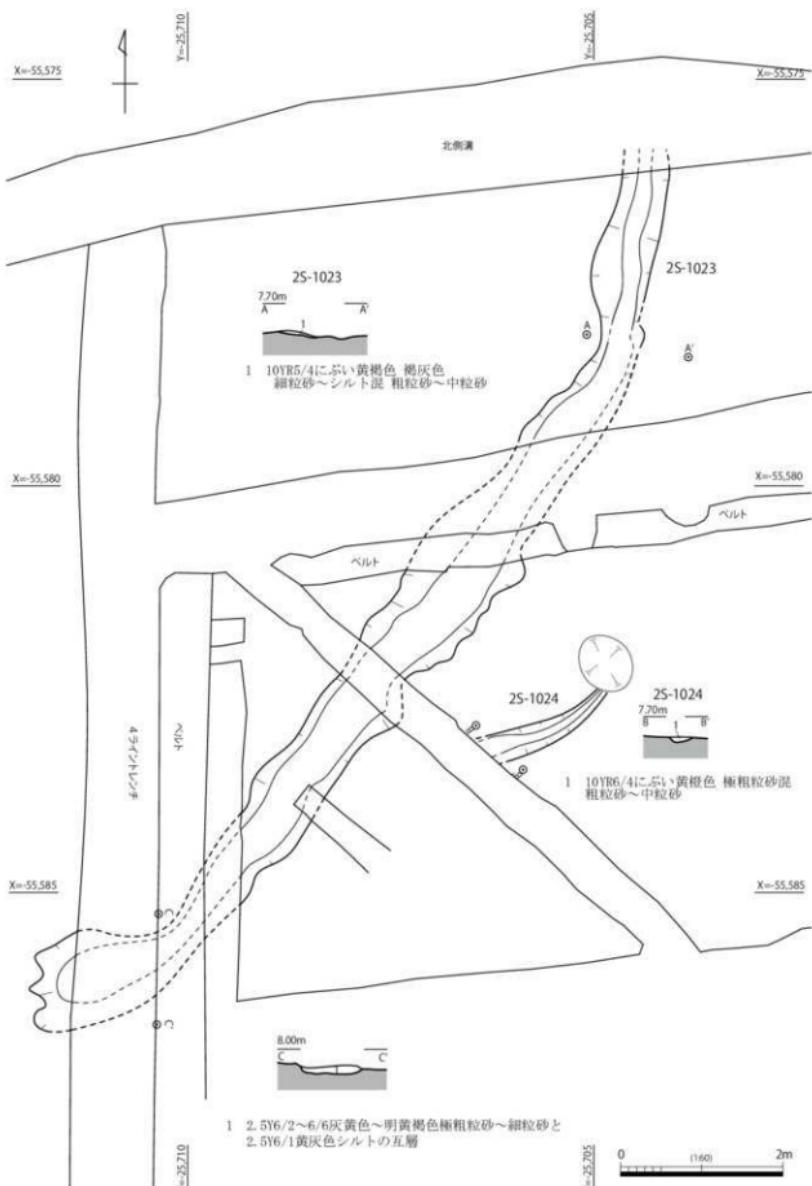
C 4 グリッドで検出した。2 S-245(第 7 面の溝)に削平されており、長さ約 1.4m、幅約 0.5m の規模で検出した。埋土が極粗粒砂から中粒砂であることから、本来は溝が流路で、流水により埋没したと考えられる。埋土中から、甕(9-083、084)、底部(9-085)、とともに、農具の未製品(3450)、及び板状品(3451、3453)が出土した。3450 は、長さ 25.6 cm、幅 19 cm、厚さ 3.8 cm のもので、ほぼ全面が手斧加工を施す。形状や厚みからみて又鋤の未製品かもしれない。3451 の板は、表裏とも手



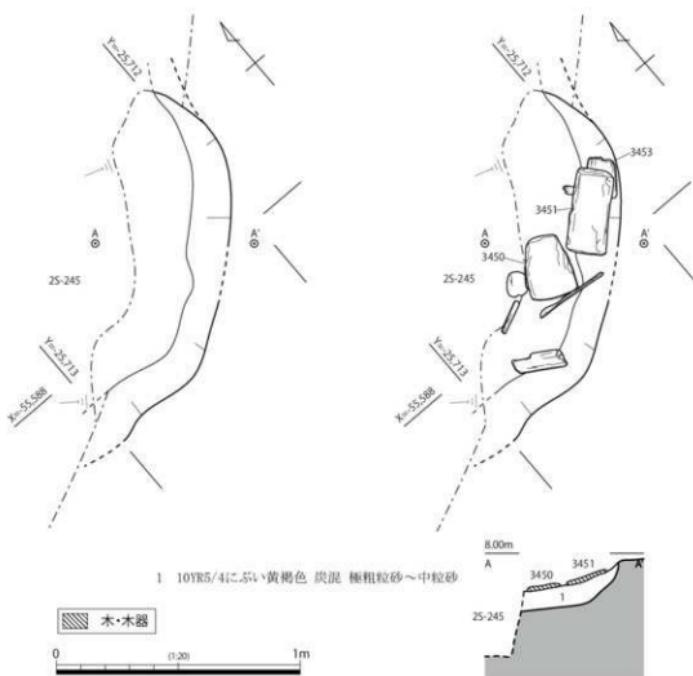
第IV-10-59図 2区 第9面 溝(2S-1143) 出土遺物3



第IV-10-60図 2区 第9面 溝(2S-1143) 出土遺物4



第IV-10-61図 2区 第9面 流路(2 S-1023, 1024) 平・断面図



第IV-10-62図 2区 第9面 流路(2S-951) 平・断面図

斧加工を施すもので、側面の一部は炭化する。板(3453)は、表裏とも割肌で方孔を有する。(岡野)

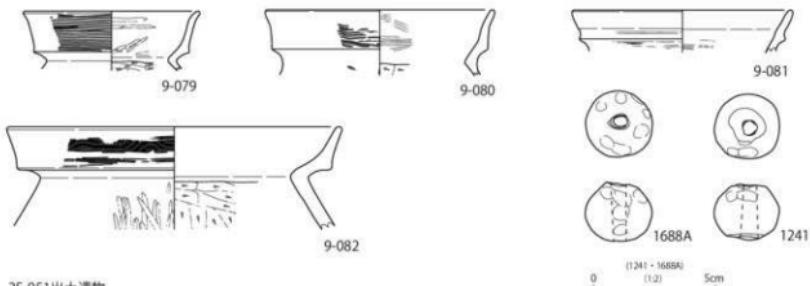
2 S-978(第IV-10-64・65図)

主にE2グリッドで、東側溝から3ライントレントンの間で検出した。北西から東に湾曲しながら流れる流路である。3ライントレントン以西は未調査、東側溝以東も未調査である。2ライントレントン断面の37層に繋がる可能性がある。検出延長は約8.2m、幅は西側が狭く約0.5m、東側にかけて広がり約3.1mである。深さは、東側が深くて約0.4mである。断面形は西側では椀形、東側では幅が広がるので皿形になる。埋土は、砂層とシルト層の互層で、遺物を多く包含する。木器は、1492が田下駄と考えられる。孔は2つしか残存しないが、残りの2孔は欠損部に掛かっている。1444はほぼ完形の剣形である。1551は紡錘車の未製品、1514は把手である。上端は紐で緊縛するための抉りがある。下端は欠損しているので形状は不明である。1493は横断面方形の棒材の一端を削って一回り細く成形するが、先端は尖らせない。杭として利用されたのかもしれない。1506は杭である。

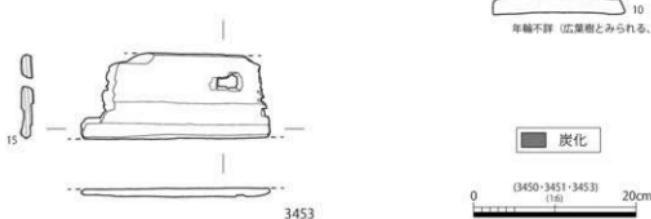
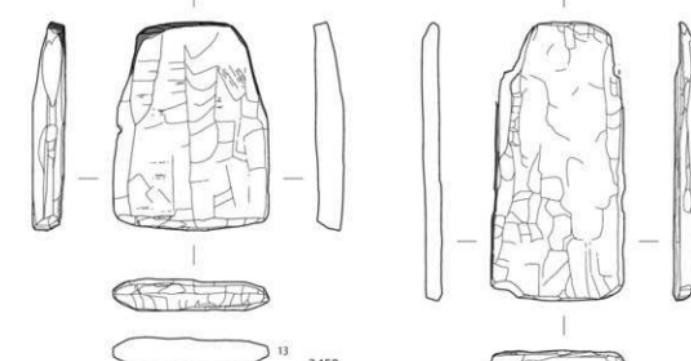
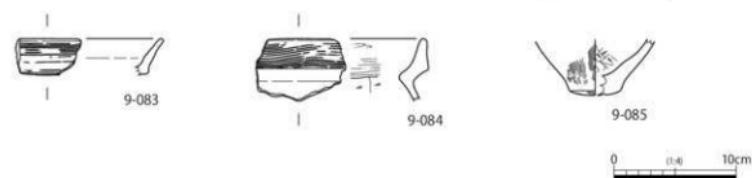
土器は、乙亥正V期の甕(9-087、088)が出土した。3区の3S-40の下面の流路から出土した土器(9-089~093)がこの流路と同一流路の可能性が高いと考えられるが、そこから出土した土器は、乙亥正VII期頃のものがあり、同一遺構面の他遺構の時期を勘案しても、乙亥正VII期頃に埋没したと考

第10節 第9面(VII層下面)の調査

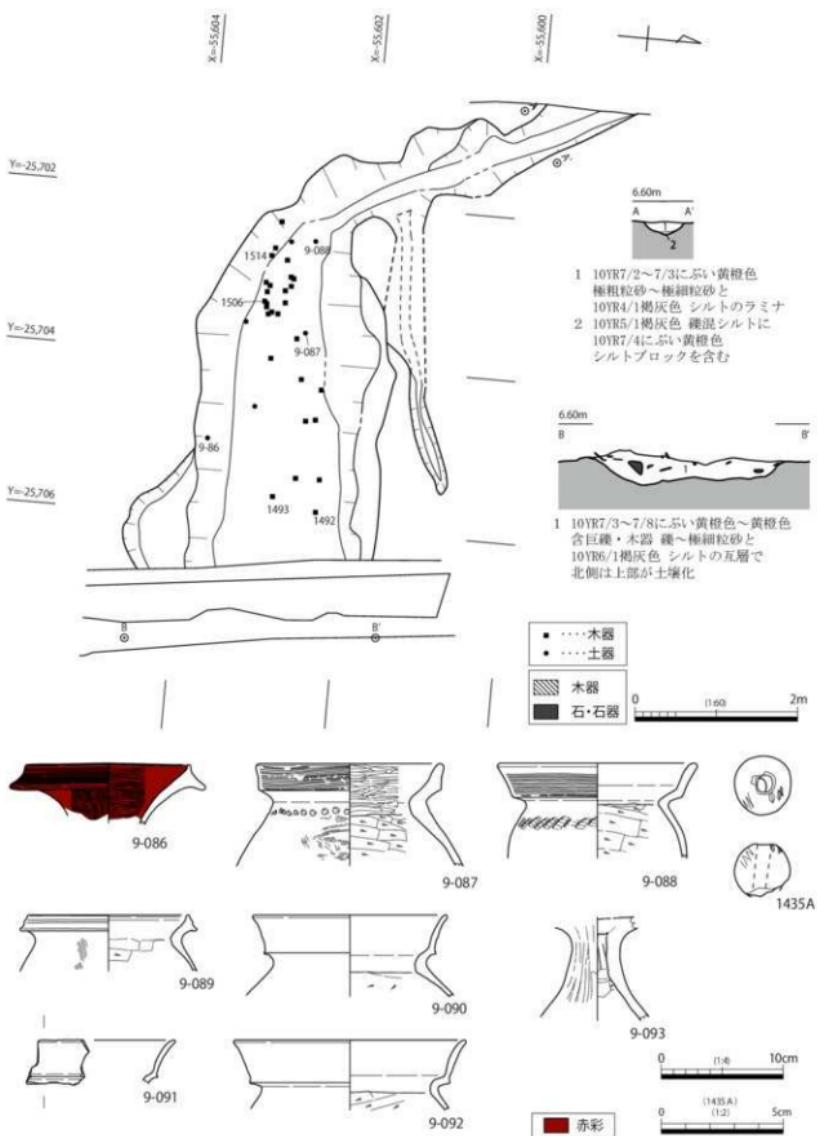
2S-1023出土遺物



2S-951出土遺物

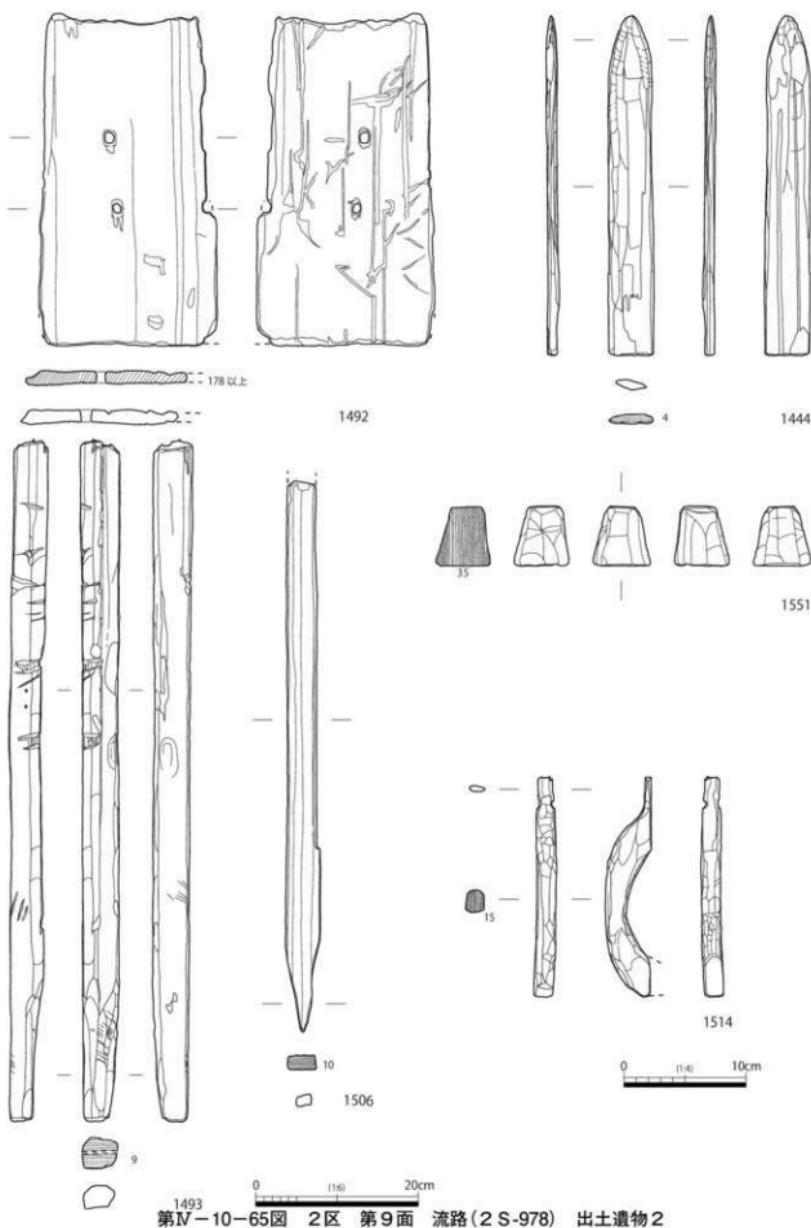


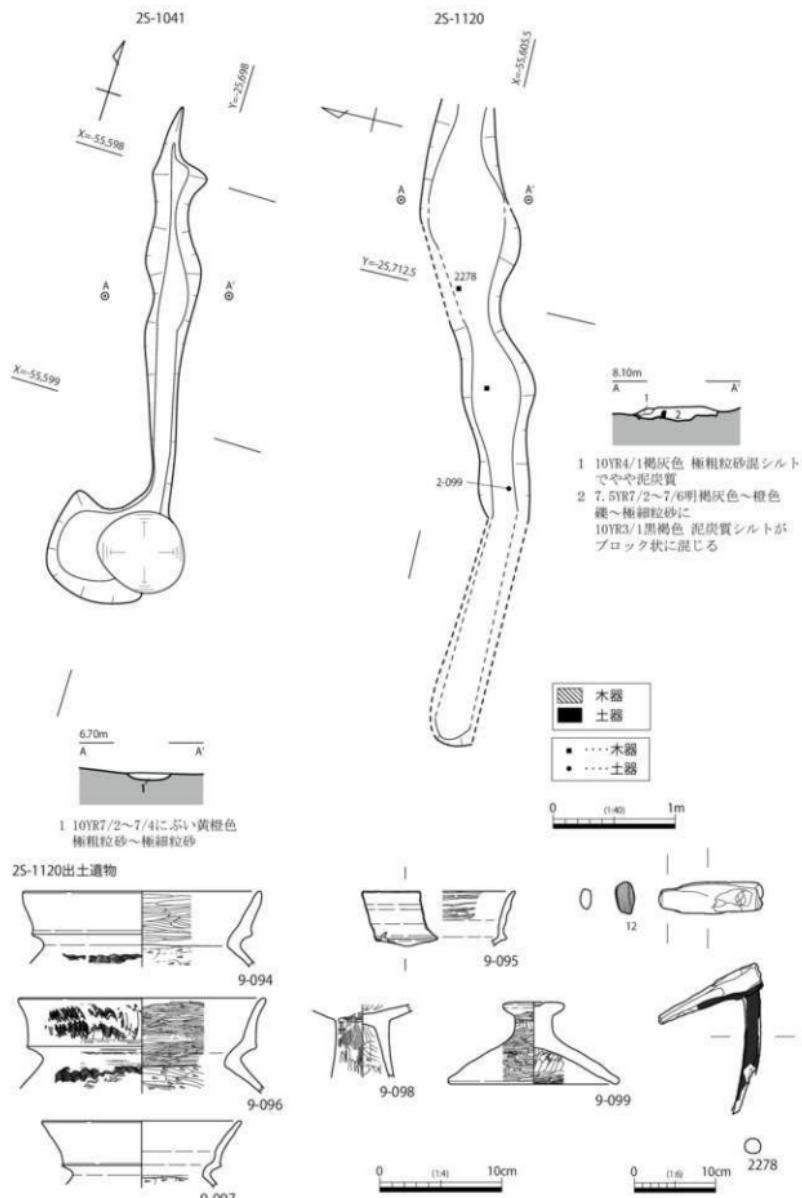
第IV-10-63図 2区 第9面 流路(2S-951、1023) 出土遺物



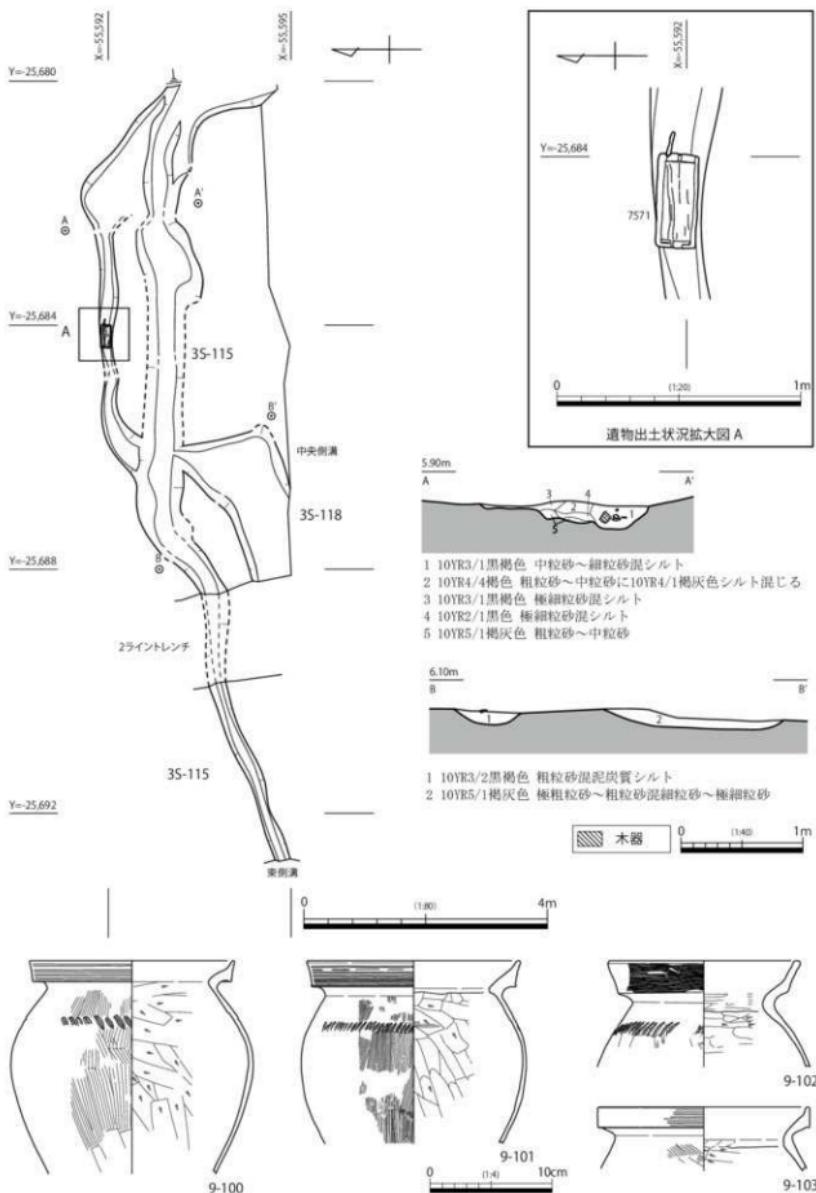
第IV-10-64図 2区 第9面 流路(2S-978) 平・断面図及び出土遺物 1

第10節 第9面(VII層下面)の調査

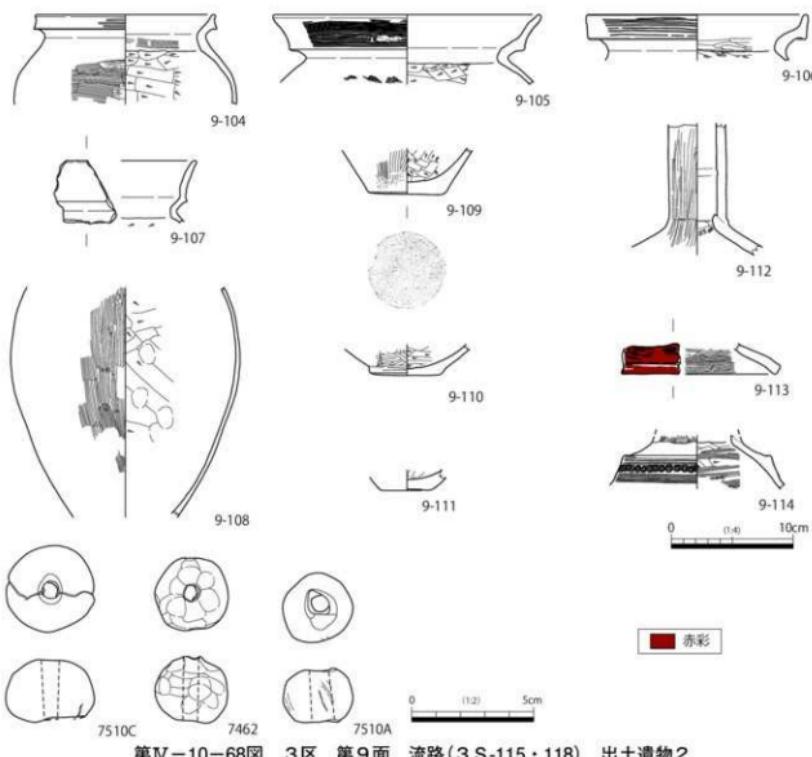




第N-10-66図 2区 第9面 流路(2S-1041、1120) 平・断面図及び出土遺物



第IV-10-67図 3区 第9面 流路(3S-115・118) 平・断面図及び出土遺物 1



第IV-10-68図 3区 第9面 流路(3 S-115・118) 出土遺物2

えられる。(馬路)

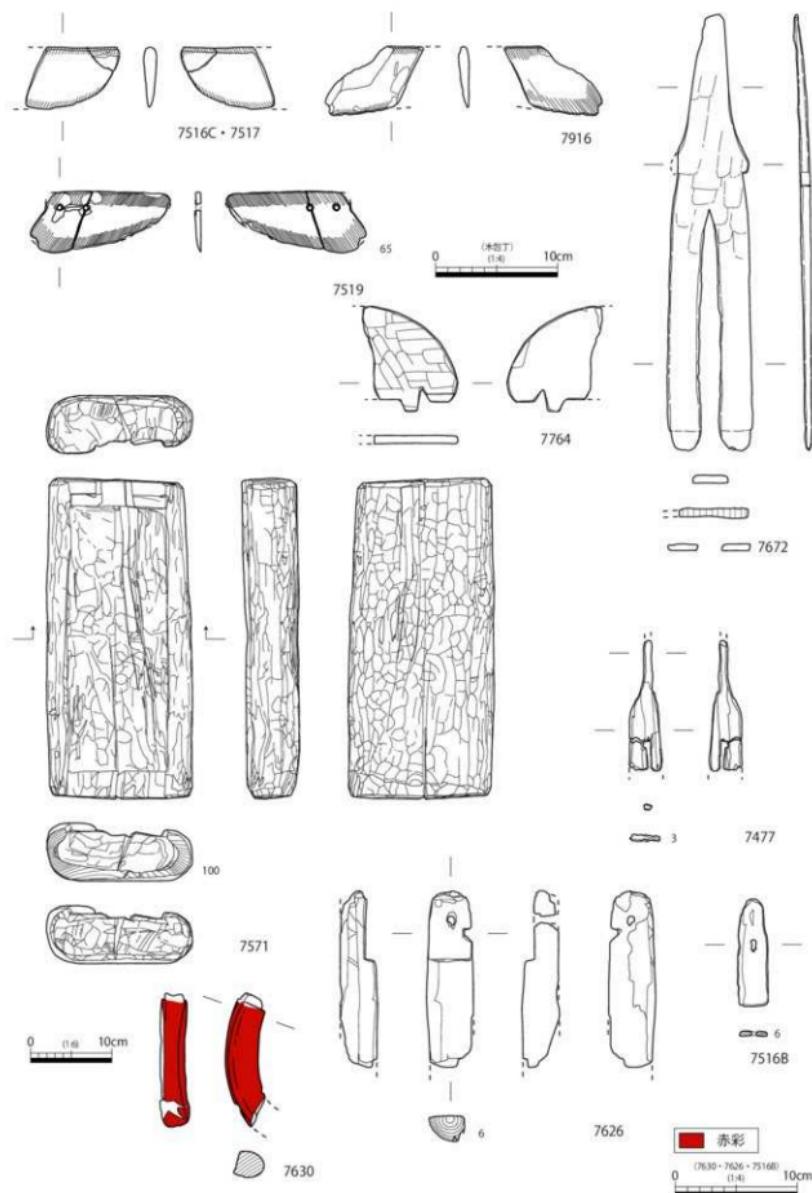
2 S-1041(第IV-10-66図)

E 2グリッドで検出した北から南に流れる流路で、南端が2 S-978に繋がる可能性が高い。検出延長は約4.2m、幅約0.4~1.0mである。上面は削平されていたと考えられるため、検出面からの深さは浅く、約0.06mである。埋土は砂層で、遺物は出土しなかった。(馬路)

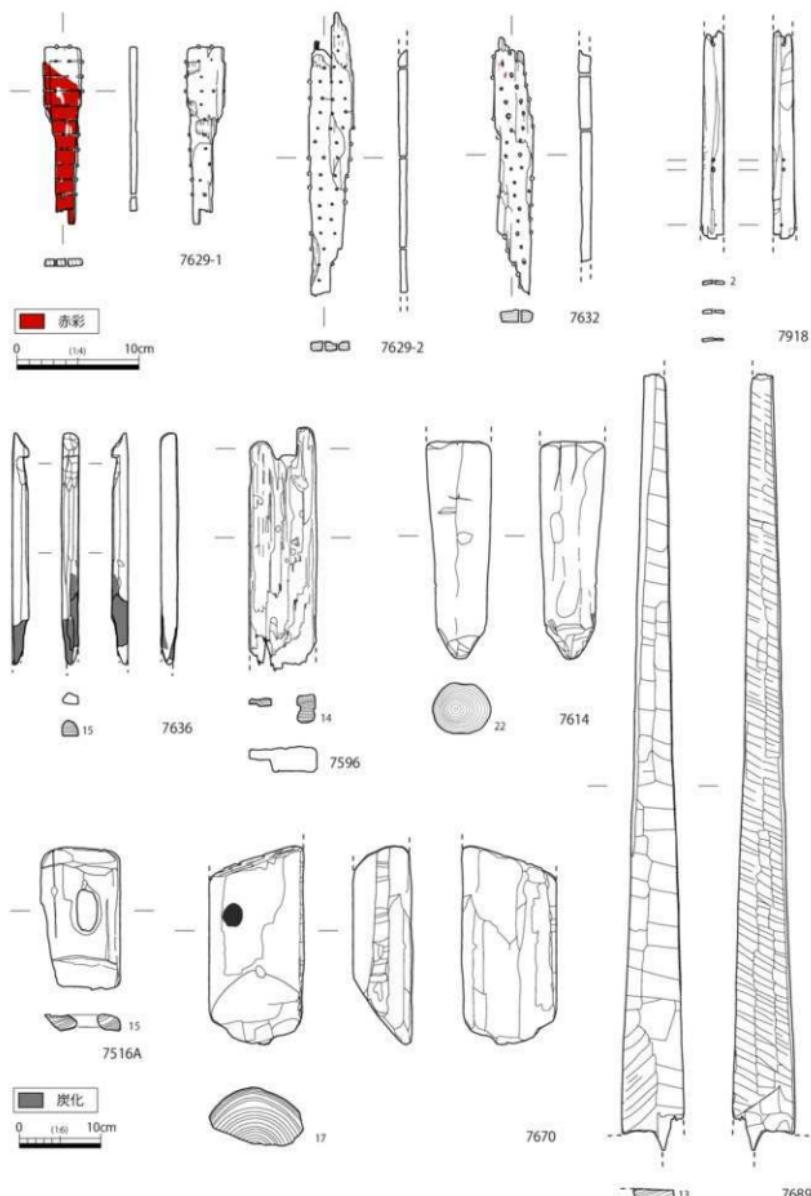
2 S-1120(第IV-10-66図)

E 4グリッドで検出した。概ね2 S-1143と平行に西から東へと流れる流路である。西端は本来さらに西側に延びていたと考えられるが削平されて残存しなかった。東側は、4ライントレーナー以東が未調査である。検出延長は約8.0m、幅約2.3m、深さは約0.45mである。埋土は2層あり、上層にやや泥炭質なシルトが堆積し、下層は砂層である。埋土中からは木器と土器が出土した。木器は櫛柄(2278)で、下半が欠損し、柄から斧台にかけて樹皮が残存する。土器は乙亥正VI~VII期と考えられる甕(9-094~097)、高坏(9-098)が出土した。(馬路)

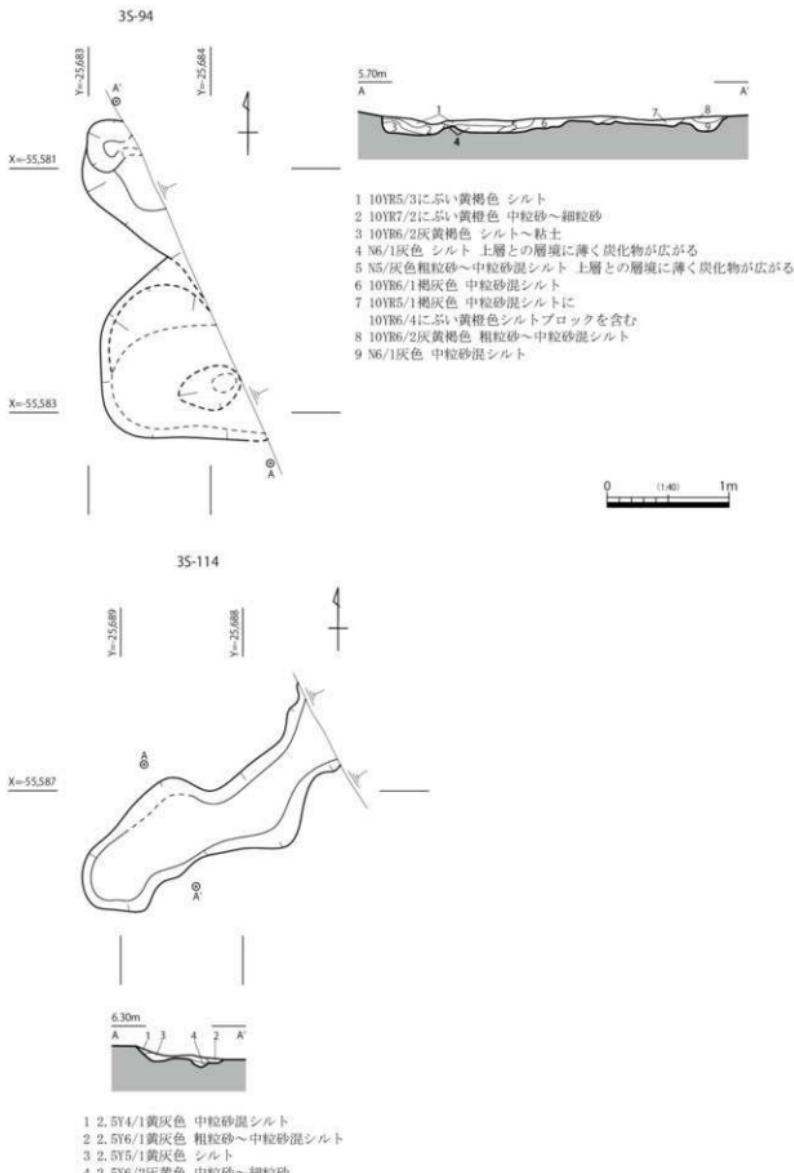
第10節 第9面(VII層下面)の調査



第IV-10-69図 3区 第9面 流路(3S-115・118) 出土遺物3



第IV-10-70図 3区 第9面 流路(3S-115・118) 出土遺物4



第IV-10-71図 3区 第9面 落ち込み(3S-94、114) 平・断面図

3 S-115・118(第IV-10-67・68図)

E 1グリッドで検出した流路である。北側を3 S-115、南側を3 S-118とした。3 S-118は蛇行しながら西から東へ流れるため、概ね直線的に流れる3 S-115と2ライントレンチの約2m東側で交差して、3 S-115に切られる。なお、交差地点から東側は全て3 S-115として調査を行った。検出延長は約13.3m、幅はAA'断面で約1.4m、深さは約0.2mである。埋土は、褐灰色から黒色の砂層で、比較的多くの遺物が出土した。

木器は、蓋が付くと考えられる剣物箱(7571)がある。図の下端から蓋を差し込み、上端側は身の小口を1段深く掘り込んで蓋受けを作り出している。7630は水銀朱で赤彩された部材で、端部を一回り小さく加工して柄を作り出して別材と組み合う。柄を上向きに図化したが、上下逆の場合は、容器の飾りの可能性も考えられる。樹種はイヌノキである。第11面の2 S-840からも類似した部材が1点出土している。農工具は木包丁(7516C・7517、7916、7519)、曲柄叉鍬(7672)、直柄横鍬(7764)が出土した。7519の木包丁は紐孔をつなぐ溝があり、左端に抉りを伴うもので青谷上寺地遺跡の分類ではB3類である。武器は、盾の破片(7629-1・2、7632、7918)が出土した。7629-1は水銀朱で赤彩されていた。7629-1・2、7632はモミ属である。ほかには、建築部材と考えられるもの(7596、7689)や杭(7614、7670)、杓子形木器(7477)、部材(7626、7516A・B、7636)が出土した。出土した土器は乙亥正II～VII期の壺(9-104～107)、高坏(9-112、113)、器台(9-114)を図化したが、乙亥正VII期頃と考えられる壺の口縁部の小片があり、埋没時期はこの時期と考えられる。(馬路)

落ち込み

3 S-94(第IV-10-71図)

C 1グリッドで検出した。第1面で検出した流路に東側を切られており、西側部分しか残存しない。平面形は不定形で、底面も凹凸がある。埋土の大半はシルト層だが、南半部分には一部で砂層が堆積する。また、炭化物が薄く層状に広がる部分も見られた。機能などは不明である。遺物は乙亥正III～V期と考えられる土器片が数点出土したのみである。(馬路)

3 S-114(第IV-10-71図)

C 1グリッドで検出した。東側は3 S-105に切られ、西側は2ライントレンチの手前で途切れ。検出延長は約2.43mで、幅は約0.72mである。底面は凹凸があり、埋土最下層に砂層が堆積する。上層はシルト層である。遺物は出土しなかった。(馬路)

第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査

1 VII・IX層出土の遺物(第IV-11-1・3・4図)

調査範囲が限られるため、出土遺物はそれ程多くはない。土器は壺(10-001～003)、甕(10-004～020)、高環(10-024、028)、器台(10-029)、鉢(10-023、031)などが出土した。土器の多くは概ね乙亥正V～VI期のものと考えられる。石器は敲石(S1535)を図化した。木器は2186が底板、1877Bが杭である。(馬路)

2 第10面の遺構(第IV-11-5～99図)

基本層序では、VII層下面及びIX層下面で検出した遺構面である。この遺構面では、竪穴住居、柱穴、土坑、溝、流路、落ち込みを検出した。

なお、本面ではD8グリッド周辺の遺構が密に重複することから、遺構の切り合い関係や層序を示すトレーナー土層断面図(第IV-11-8・9図)を合わせて参照されたい。

竪穴住居

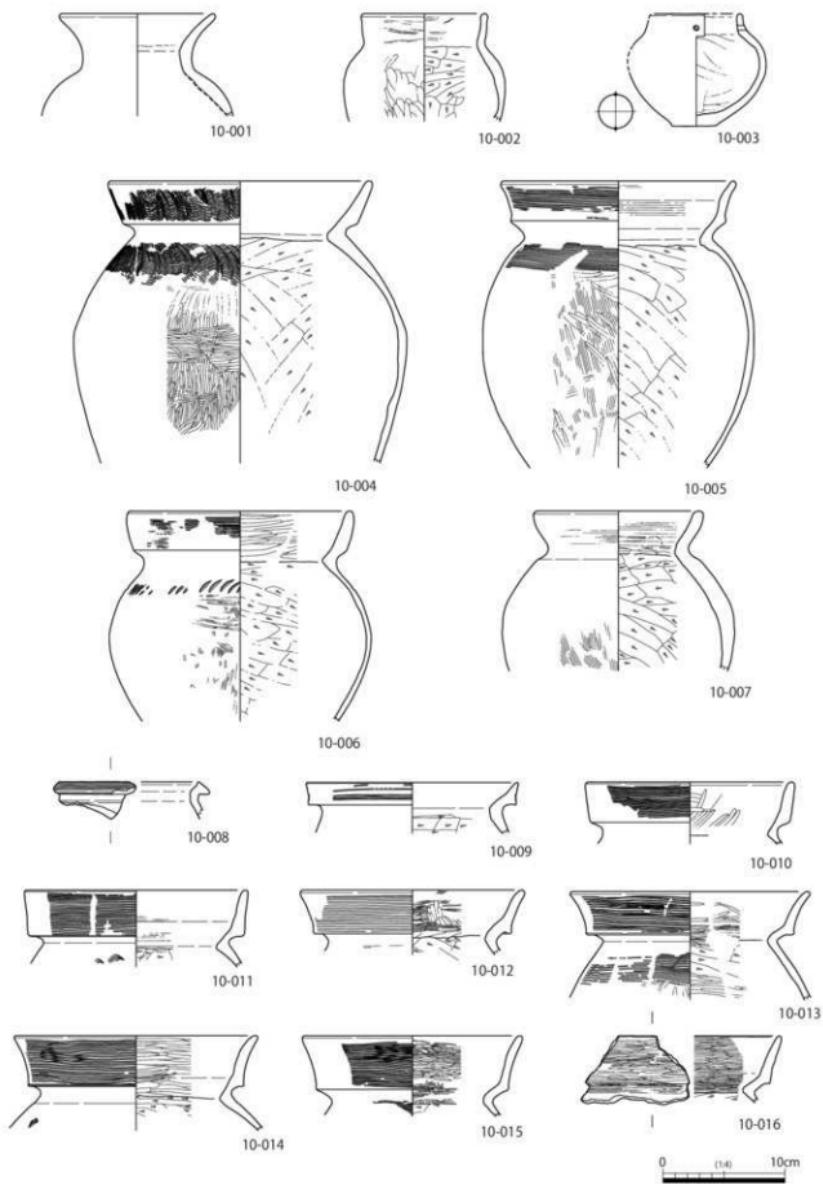
3 S-122、123、128、130(第IV-11-8～10図)

主にD1グリッドを中心に検出した遺構群で、通常検出される竪穴住居部分(3S-122)に、周堤溝(3S-123、130)と溝(3S-128)が一体となって一つの遺構を構成していると考えられるので、まとめて報告する。なお、竪穴住居と周堤溝の間には複数のピットが認められるが、それら一つ一つが竪穴住居に伴うものかどうか判断がつかなかったので、ここでは別遺構として報告することにした。

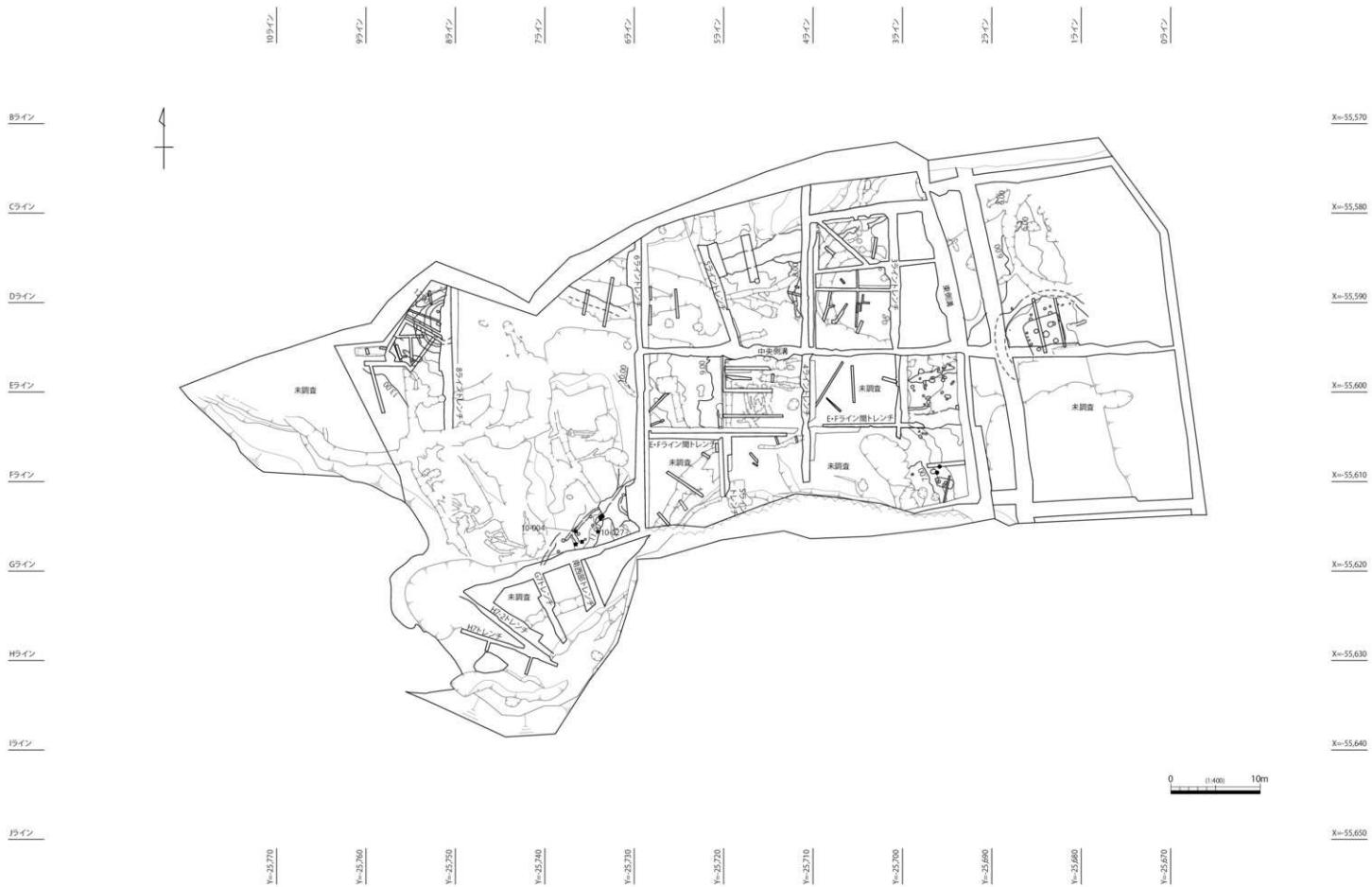
竪穴住居の平面形はやや隅の丸い方形である。規模は長辺4.24m、短辺4.07mで、床面積は約12.7m²、検出面から床面までの深さは0.14mである。床面の南西隅のみ貼床を平面で検出できた。A A'断面では床面全体に貼り床層があると考えられるので、本来は広範囲に貼り床があったと考えられる。A A'断面では周壁溝埋土(6層)の上に貼床層の8層が乗っており、周壁溝は貼床を貼る前に掘削して、埋められていたと考えられる。壁材を設置した後で、貼床をしたと考えられる。主柱穴は5か所あり、柱痕の確認できるものは無かった。主柱穴の規模はそれぞれ、P 2は長径0.62m、短径0.54m、深さ0.08m、P 3は長径0.42m、短径0.3m、深さ0.1m、P 4は長径0.5m、短径0.42m、深さ0.12m、P 5は長径0.52m、短径0.48m、深さ0.24m、P 6は長径0.44m、短径0.36m、短径0.08mである。この内P 2とP 3は切り合っており、P 2の方が新しい。柱のみ建て替えたか、同時に2本が機能したかは不明だが、P 3よりもP 2の方が柱通りは良い。また、いずれの柱穴も一般的な竪穴住居の柱穴に比べて深さが非常に浅いのが特徴である。

柱穴間距離はP 2・P 5が2.01m、P 3・P 5が2.03m、P 5・P 6が2.07m、P 6・P 4が2.06m、P 4・P 2が1.81mである。竪穴住居の中央には、中央ピット(P 1)が1基ある。中央ピットの規模は、長径0.68m、短径0.66m、深さ0.18mである。埋土は黄灰色シルトで穴の中ほどには泥炭質シルト層が薄く堆積していた。

西側の周壁溝内で小さい土坑を3基(P 7～9)、周壁溝の途切れた所でその3基より一回り大きい

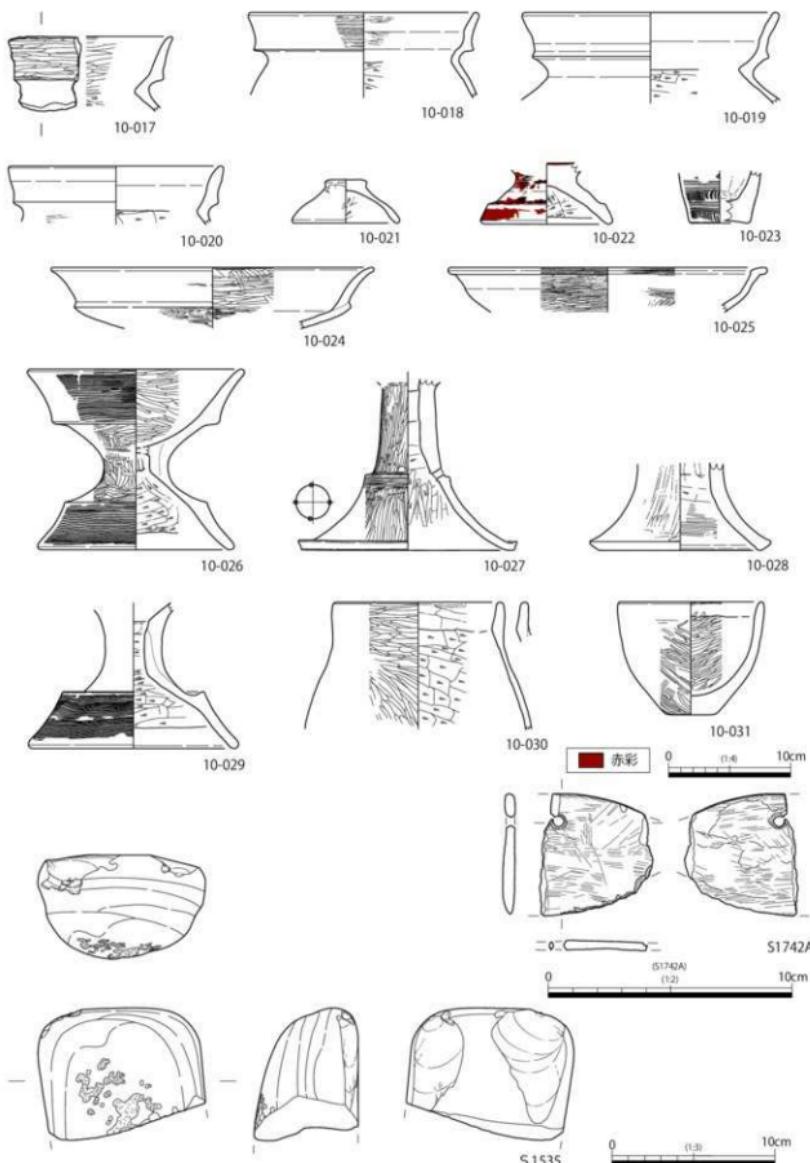


第IV-11-1図 2・3区 第10面 VII・IX層出土遺物1

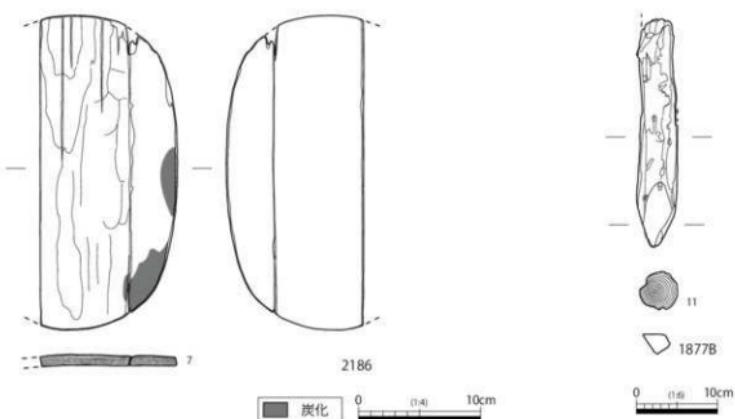


第IV-11-2図 2・3区 第10面 VII・VIII層下面出土遺物分布図

第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



第IV-11-3図 2・3区 第10面 VII・IX層出土遺物2



第N-11-4図 2区 第10面 VII・X層出土遺物3

土坑1基(P10)を検出した。P7～9の規模は、長径約0.2m、深さ約0.1m、P10の長径は約0.3m、深さ約0.1mである。これらの土坑の間隔は、概ね0.4～0.5mである。壁板を固定するためのものと考えられる。

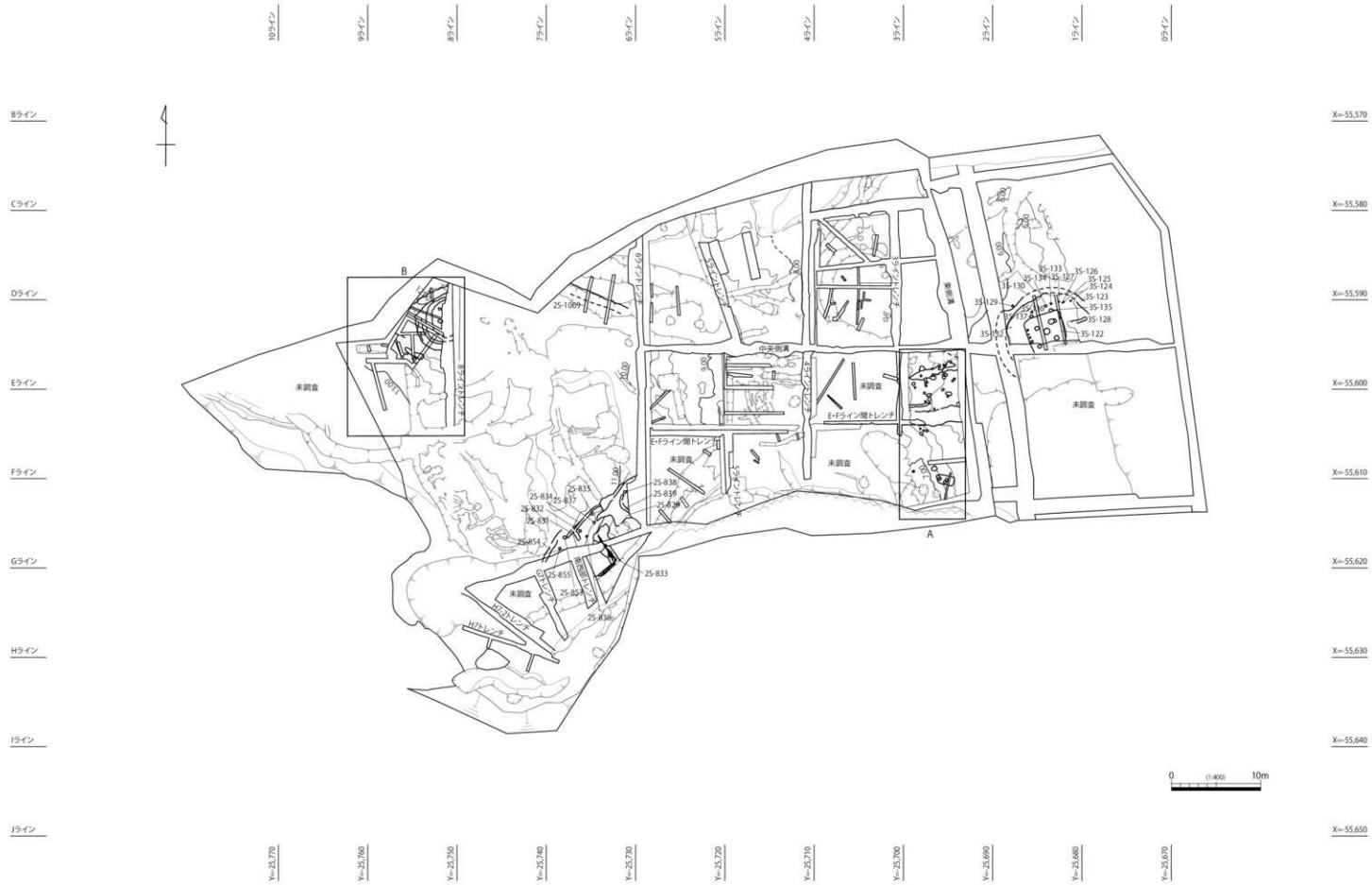
竪穴住居の周囲を円形に囲むように周堤溝が巡る。北側の一部は上面の周堤溝に切られ、西側は2ライントレンチにより失われている。南側は未調査範囲に入るため、面的な調査は実施しなかったが、南側にも続いていることはC C'断面から明らかである。周堤溝と竪穴住居の間は、断面では周堤と考えられるような盛り土の痕跡は認めらなかった。周堤溝の内径は推定で約9.9m、断面を記録した部分の幅は約1.0m、検出面からの深さは0.23～0.41mで、深さに差はあるが、底面の標高は概ね水平である。

また、竪穴住居の東側から周堤の間で東西方向の溝(3S-128)を1条検出した。竪穴住居から周堤溝へと繋がる溝が検出された例もあることから、竪穴住居に伴う可能性が高いと考えられる。検出延長は、約1.78m、幅は0.34mである。

竪穴住居及び周堤溝の埋土からは、乙亥正Ⅲ期の甕(10-032～035)が出土した。3S-128からは、乙亥正Ⅶ期と考えられる甕の口縁部(10-036)が出土した。竪穴住居の平面形を考慮すると、乙亥正Ⅶ期のものと考えられる。(馬路)

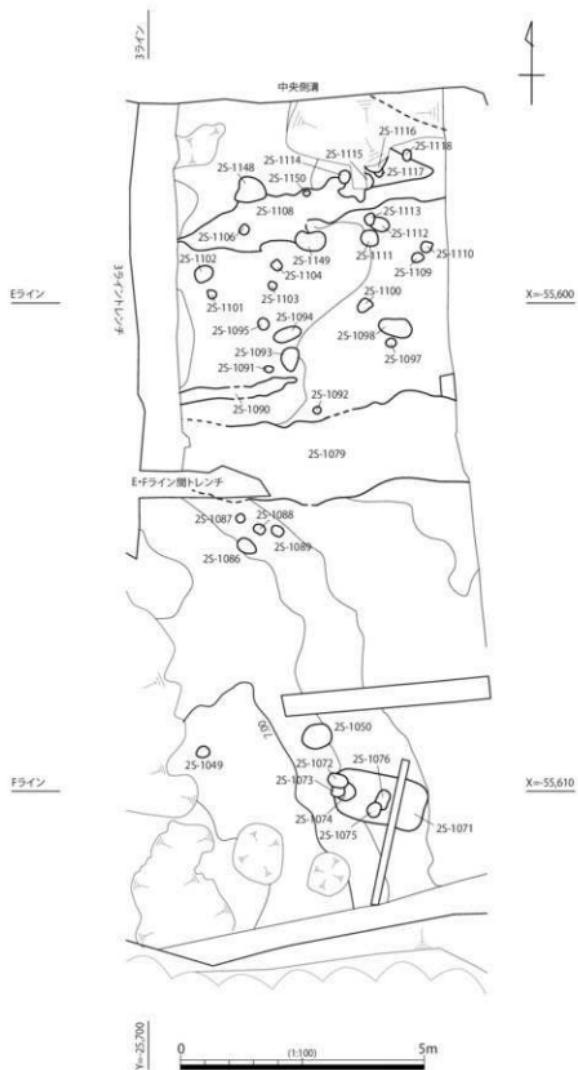
2 S-1281(第IV-11-11図)

D8グリッドで検出した。南北約5.0mの範囲で検出された遺構である。8ライントレンチから東側は調査できていない。周囲の検出面より溝で囲まれた内部が低い竪穴住居状を呈するが、プランが円形で周壁直下の溝も幅広であるなど、本遺構が構築された乙亥正Ⅶ期前後の一般的な竪穴住居とは異なる様相を呈することや、調査範囲が遺構の一部のみであることから竪穴状遺構とした。床面検出面から床面までの深さは最大0.08mであるが、西側の遺構上端ラインは、2S-1262床面で検出し

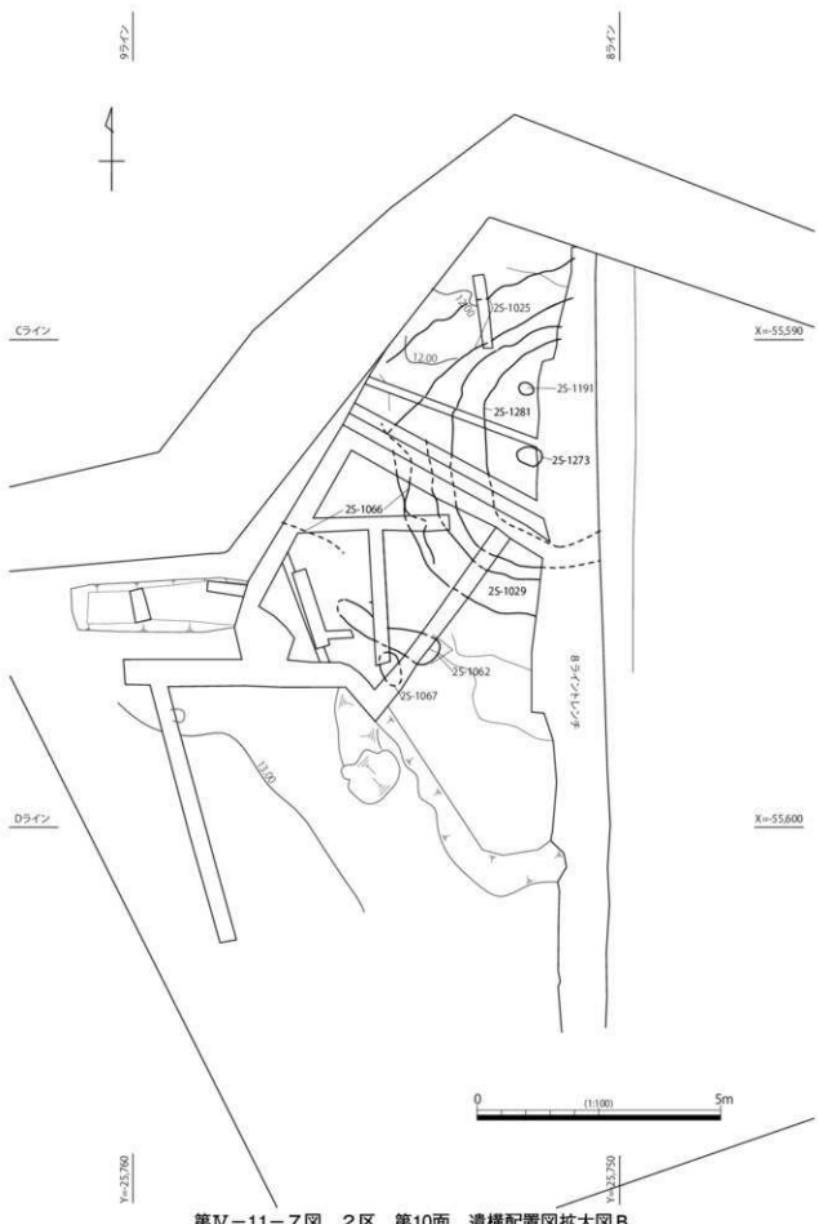


第IV-11-5図 2・3区 第10面 遺構配置図

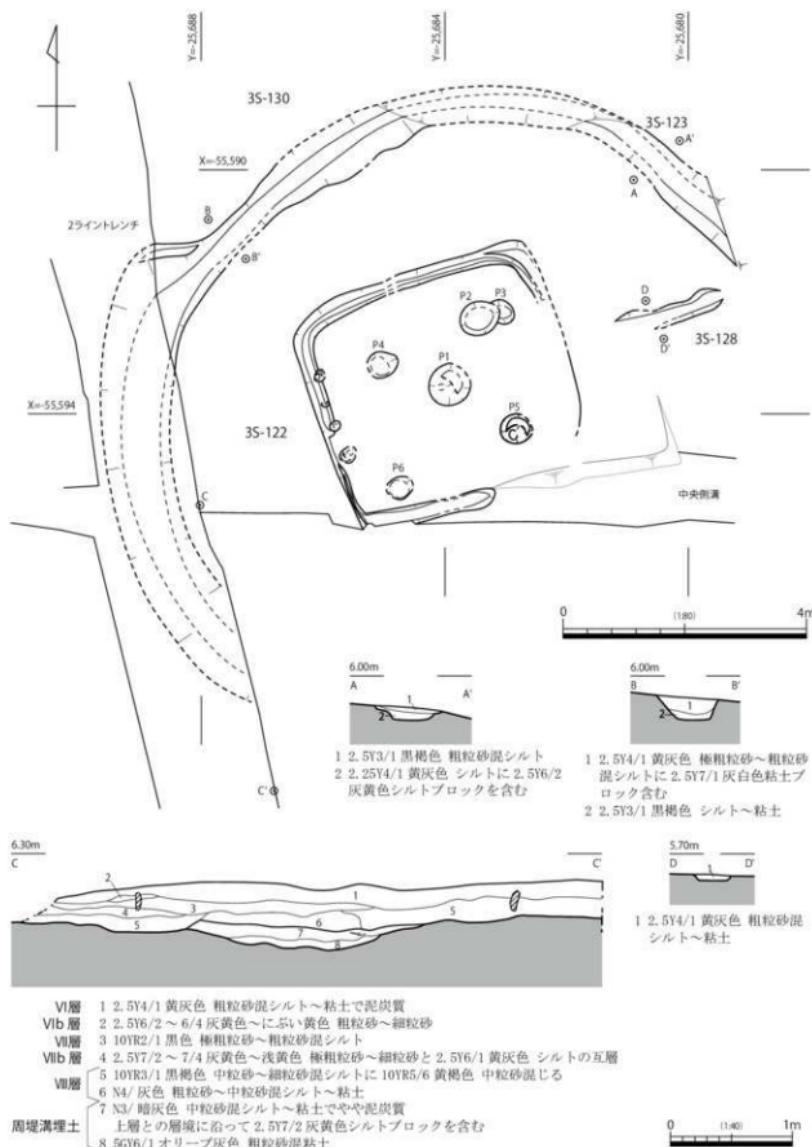
第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



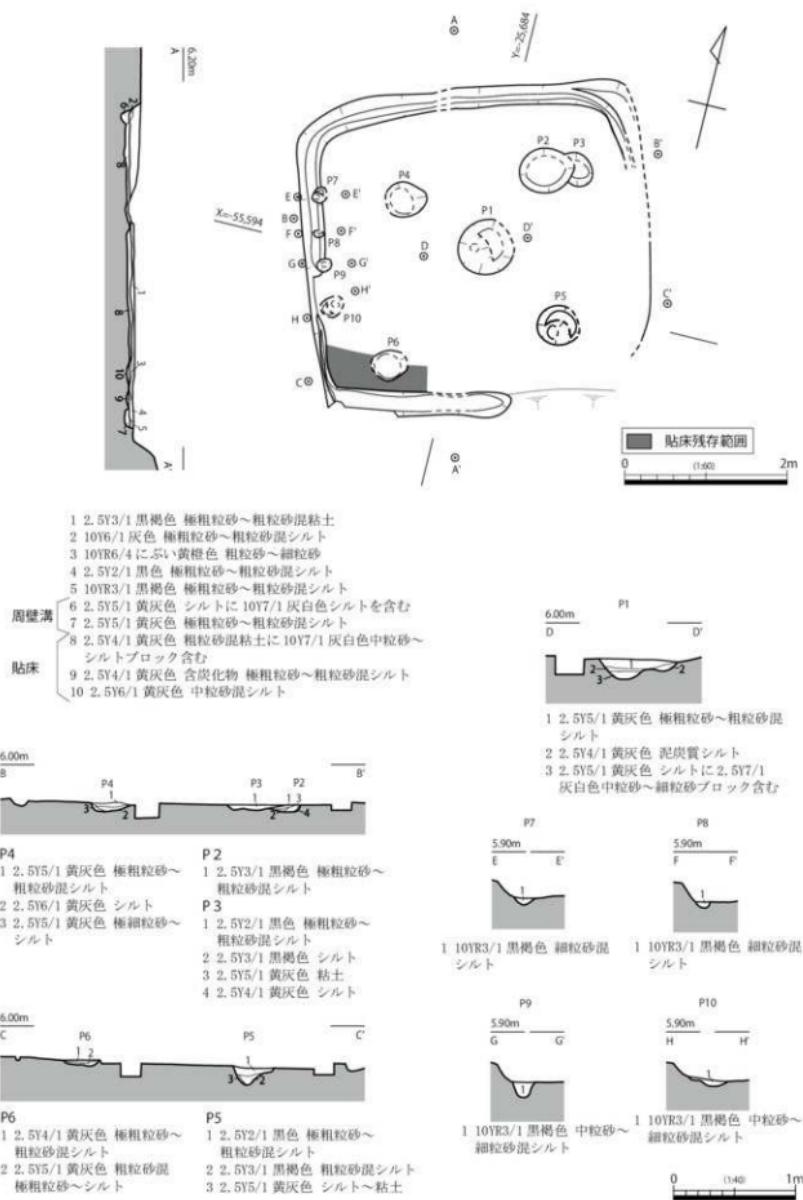
第IV-11-6図 2区 第10面 遺構配置図拡大図A



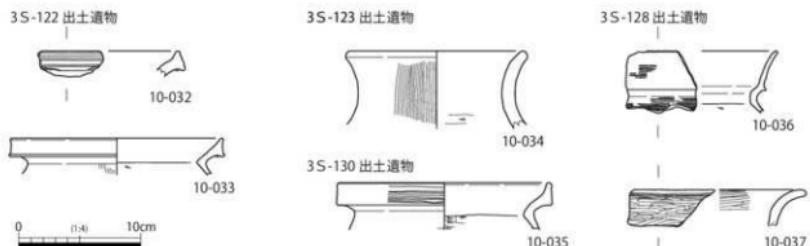
第IV-11-7図 2区 第10面 遺構配置図拡大図B



第N-11-8図 3区 第10面 穫穴住居(3S-122, 123, 128, 130) 平・断面図



第IV-11-9図 3区 第10面 積穴住居(3S-122) 平・断面図



第IV-11-10図 3区 第10面 穫穴住居(3S-122、123、128、130) 出土遺物

たラインであり、本来はさらに1層上の5層上面(土層断面AA')で検出できる遺構とみられ、その場合は約20cmとなる。なお、掘削時は溝状遺構(2S-1027)としていたが、溝の内側の検出面レベルが低いことに加えて、貼床状の床面や柱穴が検出されたことから、竪穴状の遺構と判断し全体を2S-1281とした。

土層断面AA'の4層、及びBB'の3層は貼床とみられる。周壁直下の溝は、幅0.34m～0.70m程度と竪穴住居の周壁溝としてはかなり幅広である。床面からの深さは約0.10m～0.15m、溝底のレベルは北端部付近が標高約11.65m、南端部付近が11.80m、その他は概ね標高11.75m程度である。床面のレベルは、標高11.85m前後である。

床面からは、柱穴2S-1191、1273を検出した。2S-1273からは直径約8.5cm、長さ約51cmの腐朽顯著な柱材(5115、第IV-12-22図に掲載)が出土した。なお、これらの柱穴は、本遺構かさらに古い2S-1262(第11面、第IV-12-19図)のいずれかに伴うものと推定されるため、両遺構の図面に掲載している。

竪穴及び溝埋土中から乙亥正VI期頃の特徴をもつ壺(10-038)、甕(10-039～041)、蓋(10-042)、及び木器数点、礫が出土した。木器は長さ90cm程度の細い棒状の部材や板状の木片である。(岡野)

柱穴

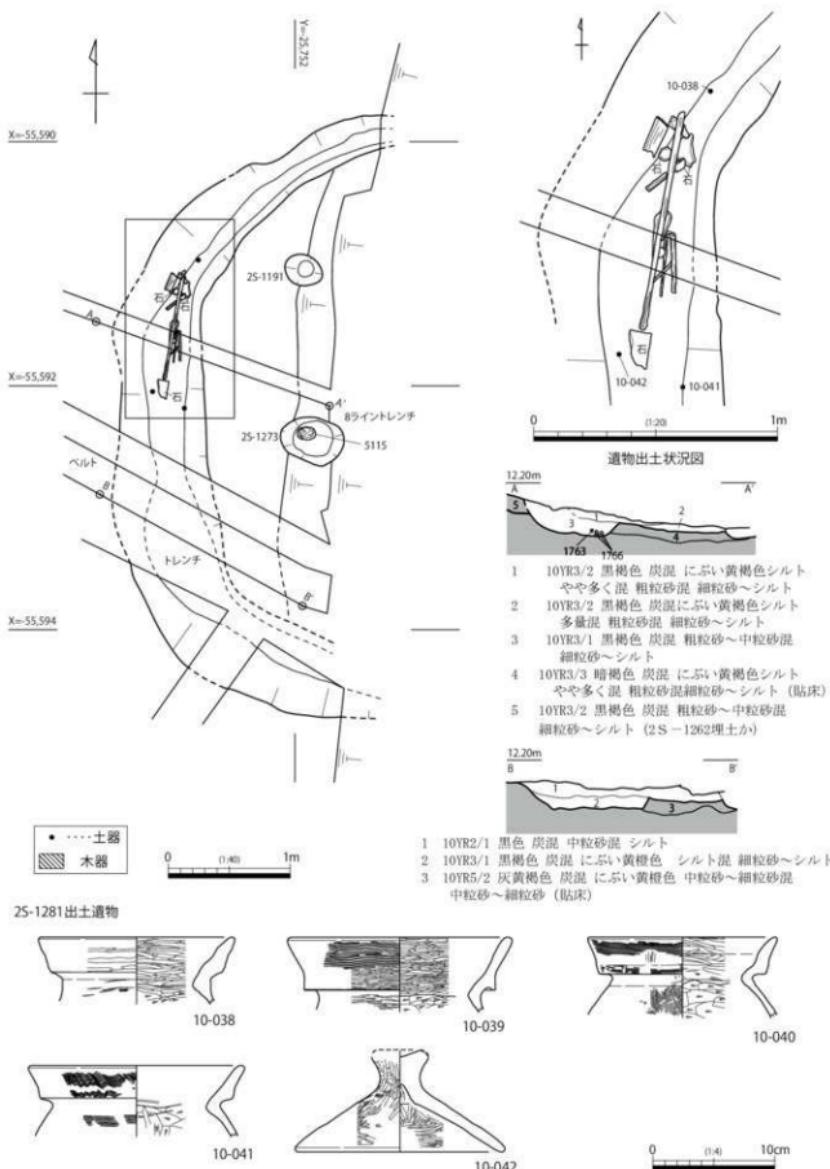
柱穴は、2・3区において、柱が残存するものと土層断面で柱痕を確認できたものを合わせて7基(竪穴住居に関連するものを除く)確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。

2S-1086(第IV-11-12図)

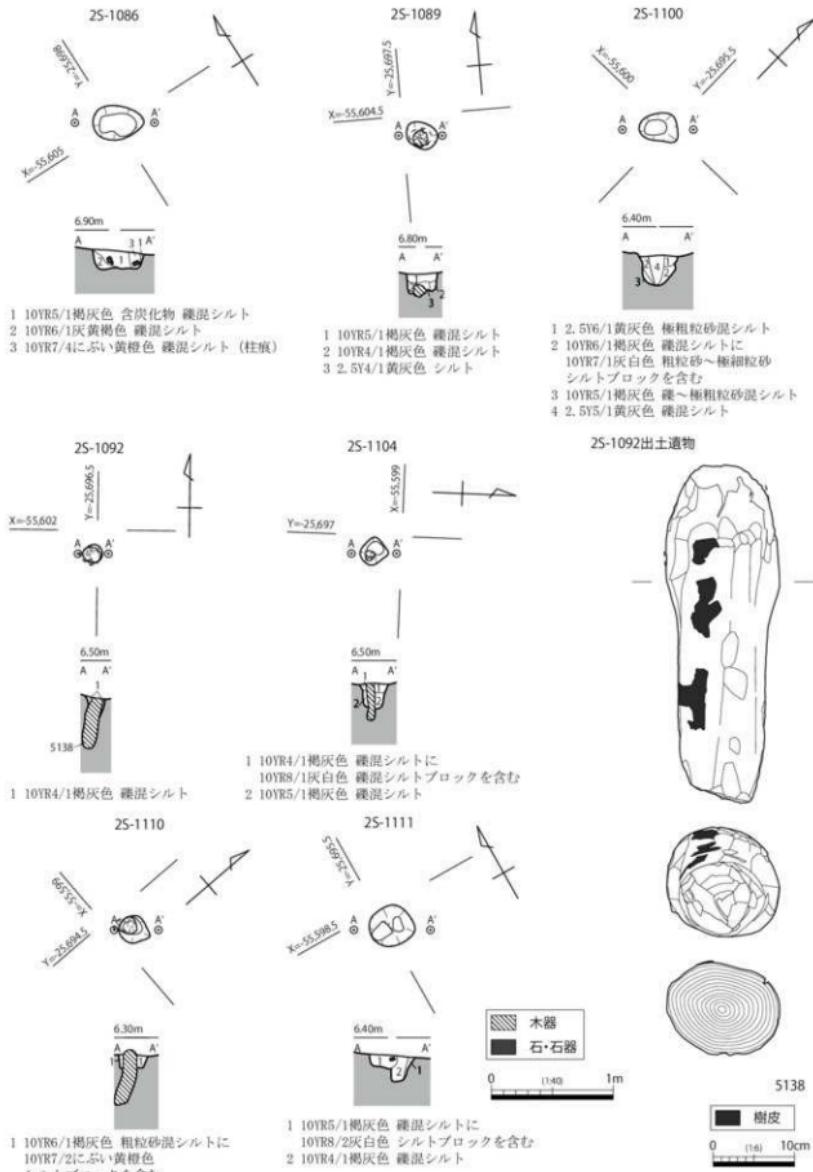
E2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.42m、短径0.27、深さ0.16mである。断面形は隅丸長方形である。柱は南東端に寄せて設置されていたようで、幅約0.1mの柱痕がある。埋土中からは乙亥正III～V期と考えられる土器の胴部片が出土した。(馬路)

2S-1089(第IV-11-12図)

E2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.26m、短径0.2m、深さ0.17mである。断面形は箱形で、中央部に柱根が残存する。遺物は出土しなかった。(馬路)

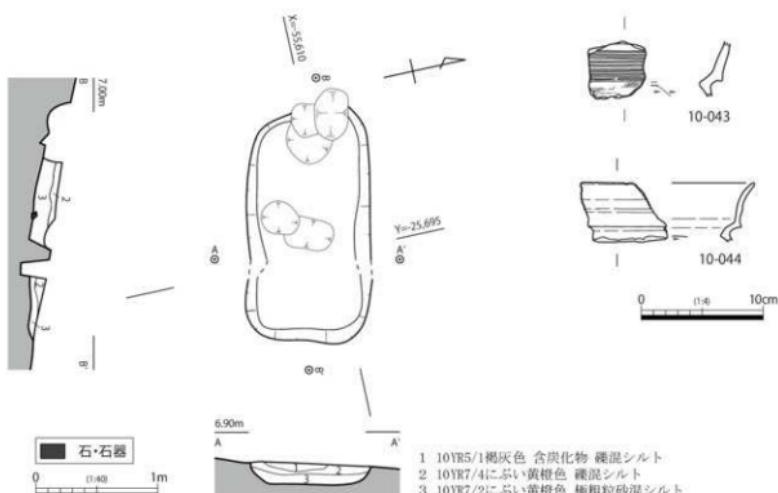


第IV-11-11図 2区 第10面 竪穴状遺構(2S-1281) 平・断面図、及び出土遺物



第IV-11-12図 2区 第10面 柱穴(2 S-1086、1089、1100、1092、1104、1110、1111)

平・断面図及び出土遺物



第IV-11-13図 2区 第10面 土坑(2S-1071) 平・断面図及び出土遺物

2S-1092(第IV-11-12図)

E 2グリッドで検出した。平面形は円形で、径0.16～0.17mである。径約13cmの柱根が残存し、掘方底面よりも、約0.25m深くまで刺さっていた。柱(5138)の先端部は、杭のように尖銳に加工されているわけではなく、柱の両側の基盤層が打設の際に下に押されて沈み込んだような状態は確認できなかったので、打ち込まれてはいないと考えられる。残存する底面から下の掘方は、柱とほぼ同じ規模だったので、土器小片が出土した。(馬路)

2S-1100(第IV-11-12図)

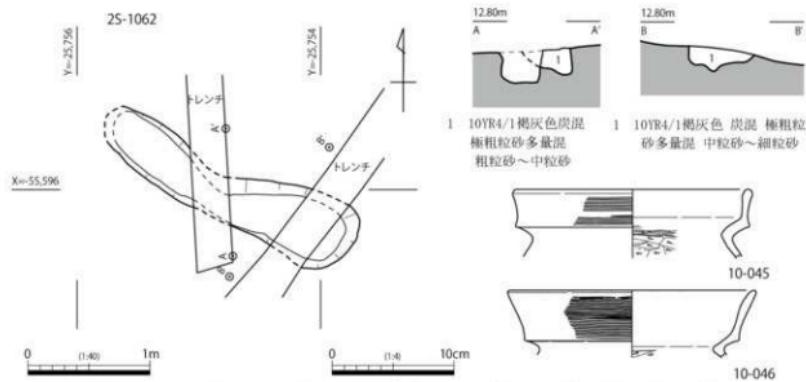
D・E 2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.32m、短径0.25m、深さ0.25mである。断面形は楕円形で、中央部に幅約0.13mの柱痕がある。遺物は出土しなかった。(馬路)

2S-1104(第IV-11-12図)

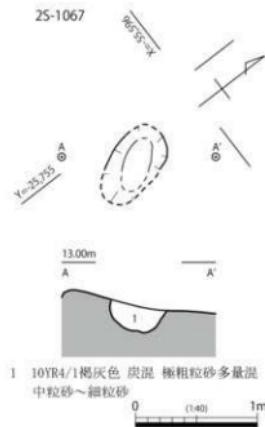
D 2グリッドで検出した。平面形は隅丸方形で、一辺0.23m、深さ0.21mである。断面形はコップ形である。南東壁よりに柱根が残存する。柱根は幅約0.07mで、末端部は掘方底面よりも約0.1m深くにある。底面を柱と同規模に掘って設置したと考えられる。遺物は出土しなかった。(馬路)

2S-1110(第IV-11-12図)

D 2グリッドで検出した。平面形は楕円形で、長径0.26m、短径0.23m、深さ0.12mである。断面形は逆台形である。柱は南西壁寄りに設置されており、幅約0.1mの柱根が残存する。柱根の末端部は掘方底面よりも約0.3m深くに設置されていた。埋土中から遺物は出土しなかった。(馬路)



第IV-11-14図 2区 第10面 土坑(2 S-1062) 平・断面図及び出土遺物

第IV-11-15図 2区 第10面
土坑(2 S-1067) 平・断面図

E・F 2グリッドで検出した平面形が長方形の土坑である。長辺1.92m、短辺1.01m、深さ0.27mである。断面形は浅い椀形で、埋土は褐色ないしにぶい黄褐色のシルトである。遺物は、乙亥正V期及びVII期の甕の口縁部(10-043、044)が出土した。(馬路)

2 S-1062(第IV-11-14図)

D 8グリッドで検出した。2 S-1063、1065(第11面の溝)より新しい土坑で長軸約2.1m、幅0.36～0.55m、深さ0.15～0.20mを検出した。遺物は出土していない。(岡野)

2 S-1111(第IV-12図)

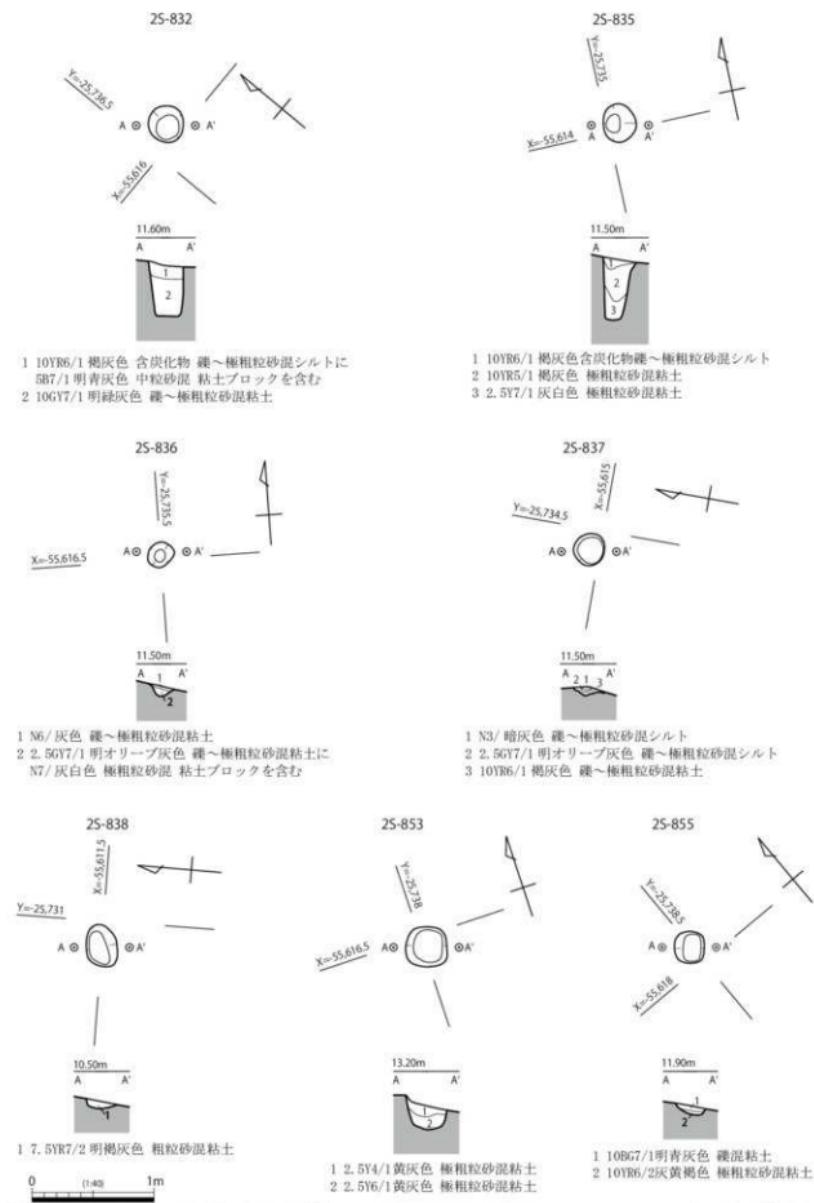
D 2グリッドで検出した。平面形は円形で、長径0.38m、短径0.35m、深さ0.23mである。掘方は、テラスがある西側は二段掘りになっていて、掘方中央よりもやや東側が最も深くなる。その部分に柱が設置されたと考えられ、幅約0.1mの柱痕がある。埋土中から遺物は出土しなかった。(馬路)

土坑

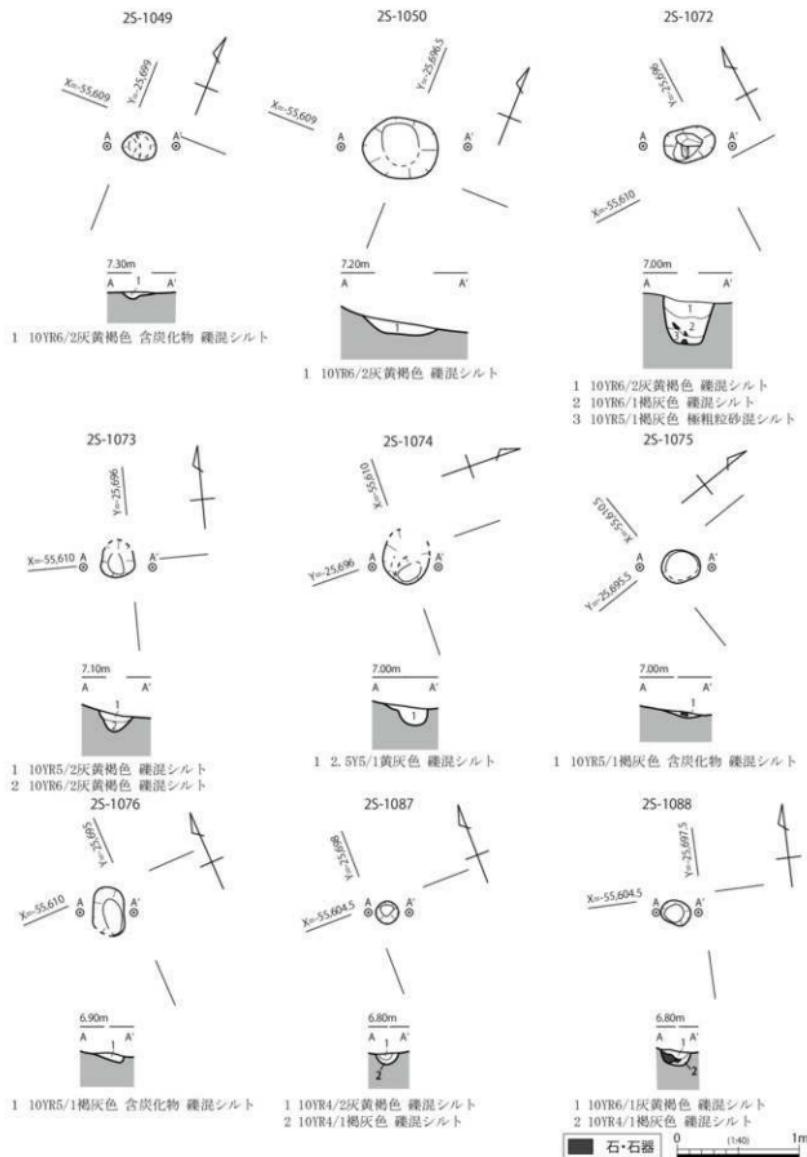
土坑は、2・3区において合計53基(堅穴住居に関連するものは除く)を確認し、規模等は一覧表(第VI-1-1表)にまとめた。これらの内の主だったものについてのみ、個別に報告又は遺構図、遺物実測図を掲載する。2 S-1072、1073、1095、1148からは乙亥正IV～V期の甕の口縁部片が出土した。(馬路)

2 S-1071(第IV-11-13図)

E・F 2グリッドで検出した平面形が長方形の土坑である。長辺1.92m、短辺1.01m、深さ0.27mである。断面形は浅い椀形で、埋土は褐色ないしにぶい黄褐色のシルトである。遺物は、乙亥正V期及びVII期の甕の口縁部(10-043、044)が出土した。(馬路)

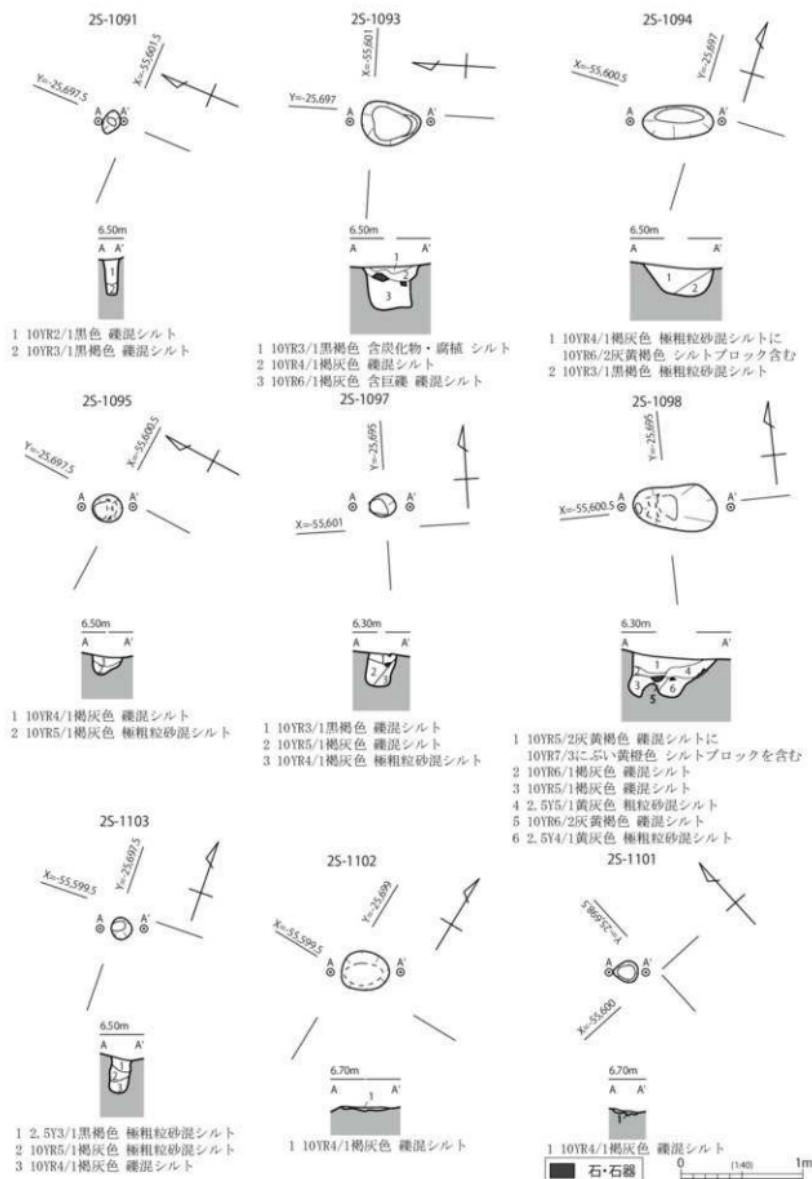


第IV-11-16図 2区 第10面 土坑(2S-832、835、836、837、838、853、855) 平・断面図

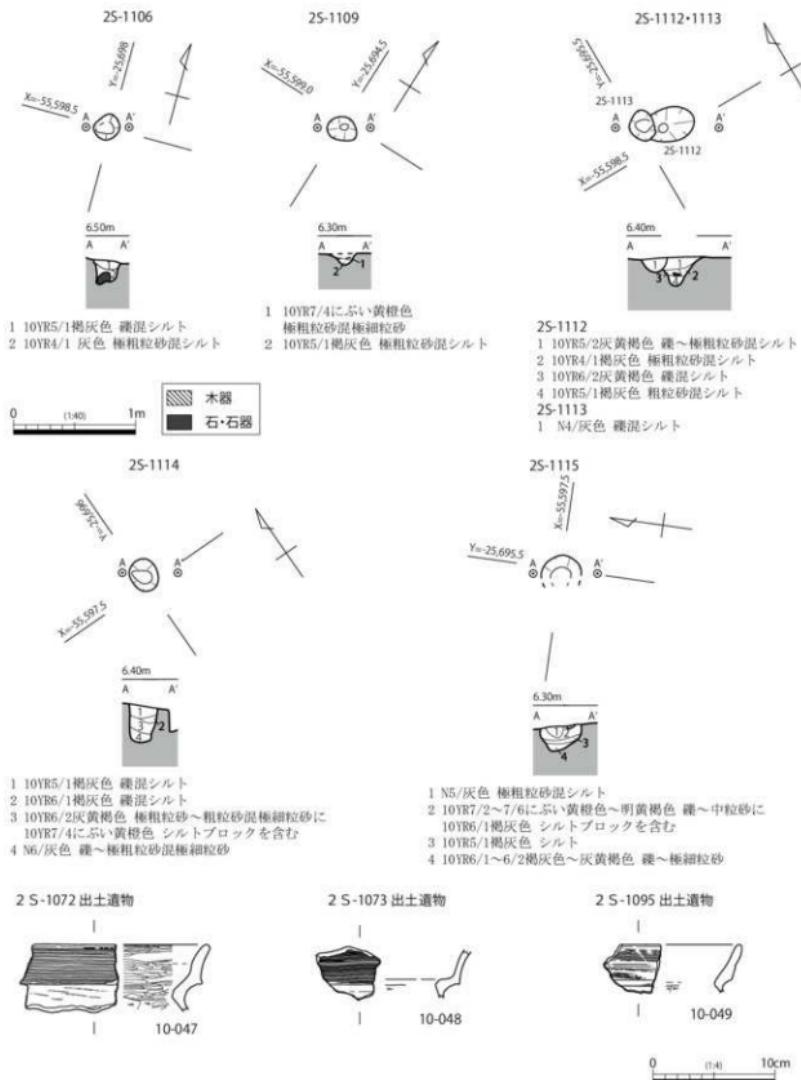


第IV-11-17図 2区 第10面 土坑(2S-1049、1050、1072、1073、1074、1075、1076、1087、1088)平・断面図

第IV章 2・3区の調査成果

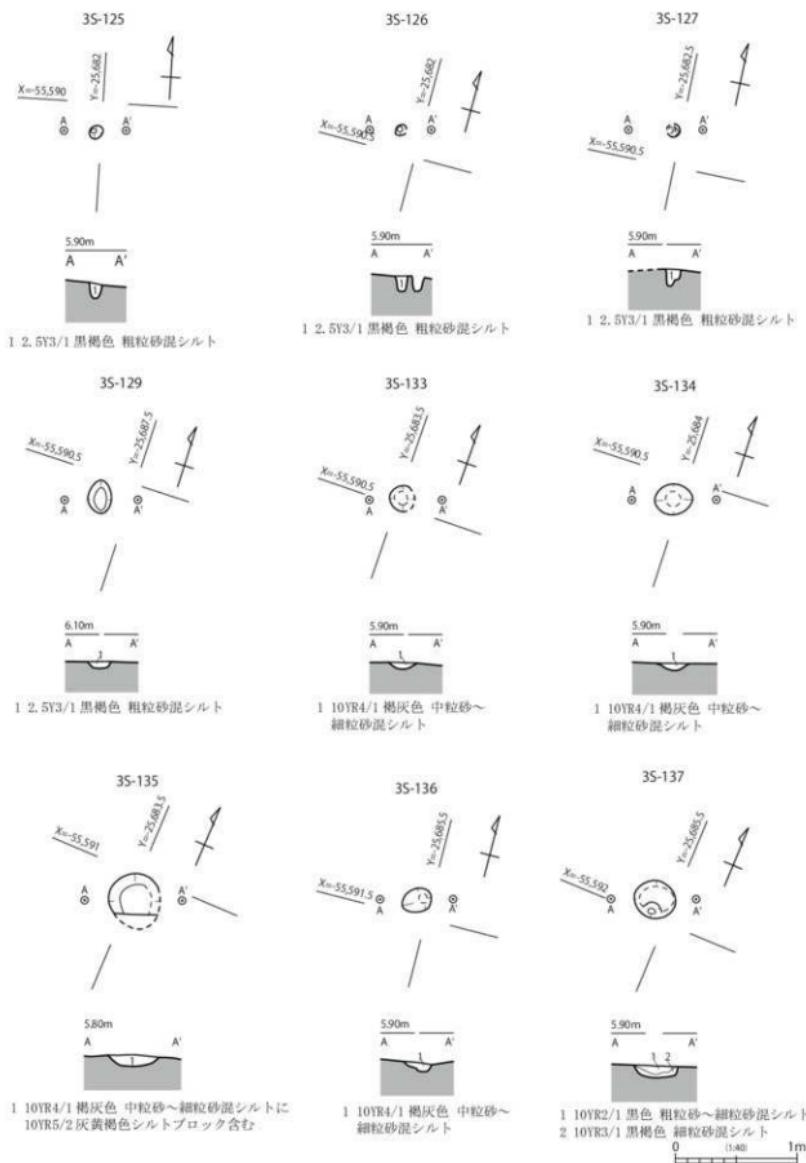


第IV-11-18図 第10面 2区 土坑(2 S-1091、1093、1094、1095、1097、1098、1101、1102、1103) 平・断面図

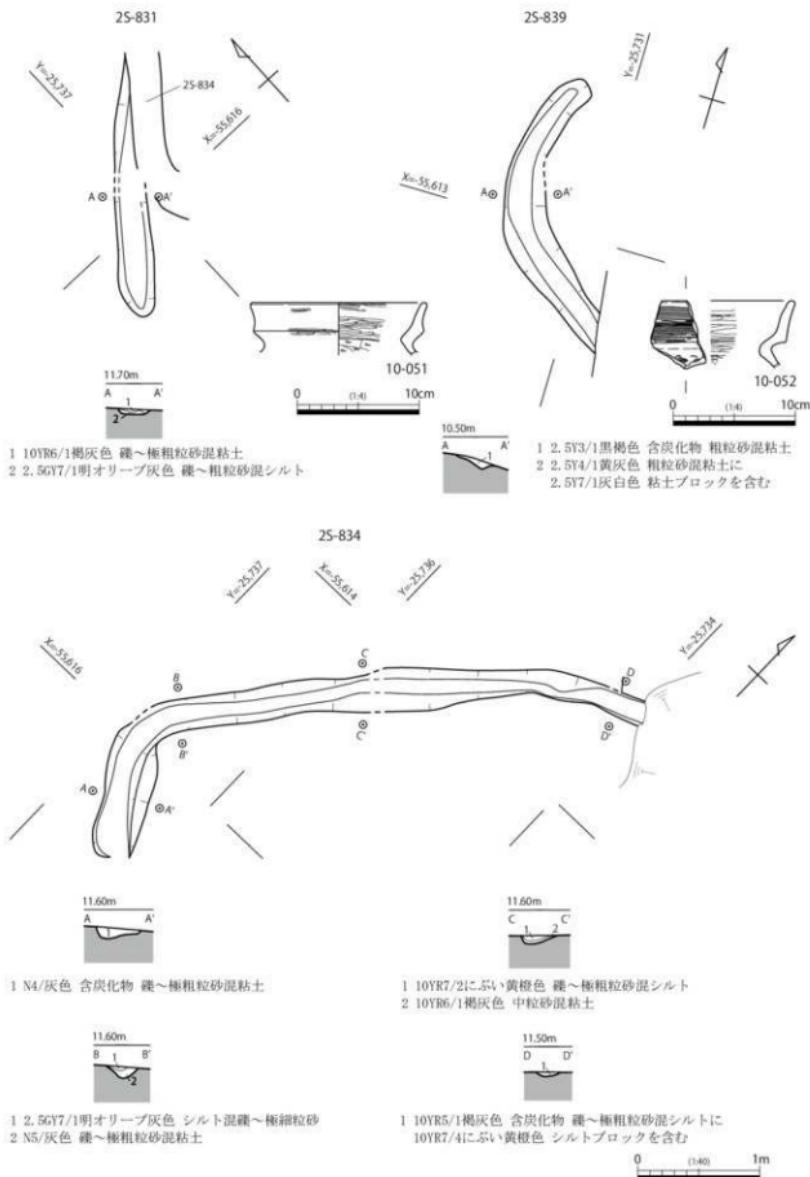


第IV-11-19図 2区 第10面 土坑(2S-1072、1073、1095、1106、1109、1112+1113、1114、1115)
平・断面図及び出土遺物

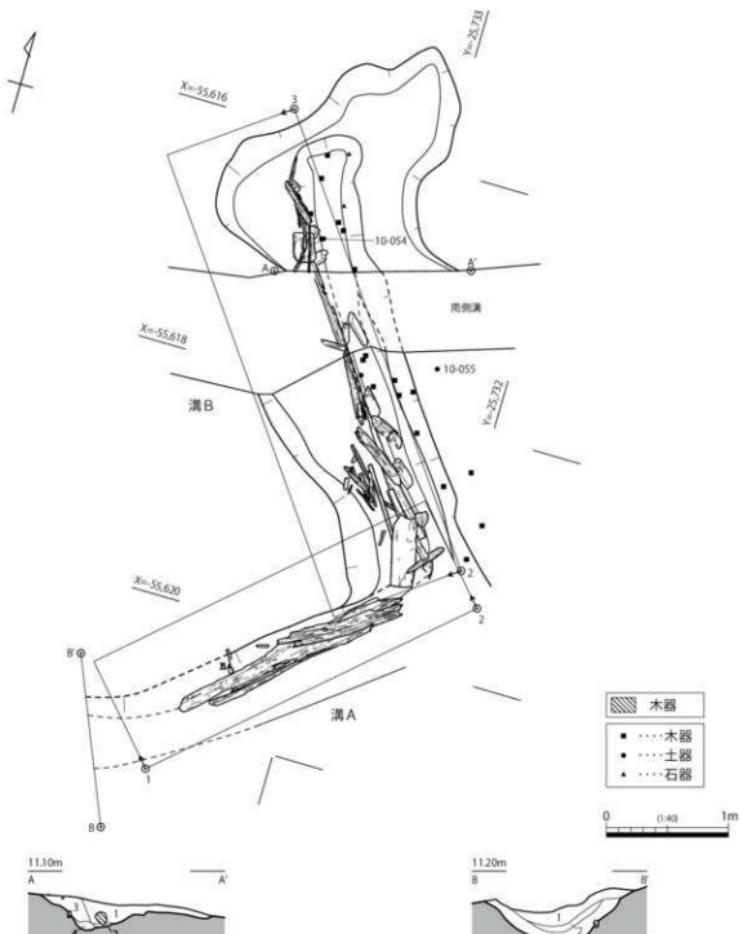




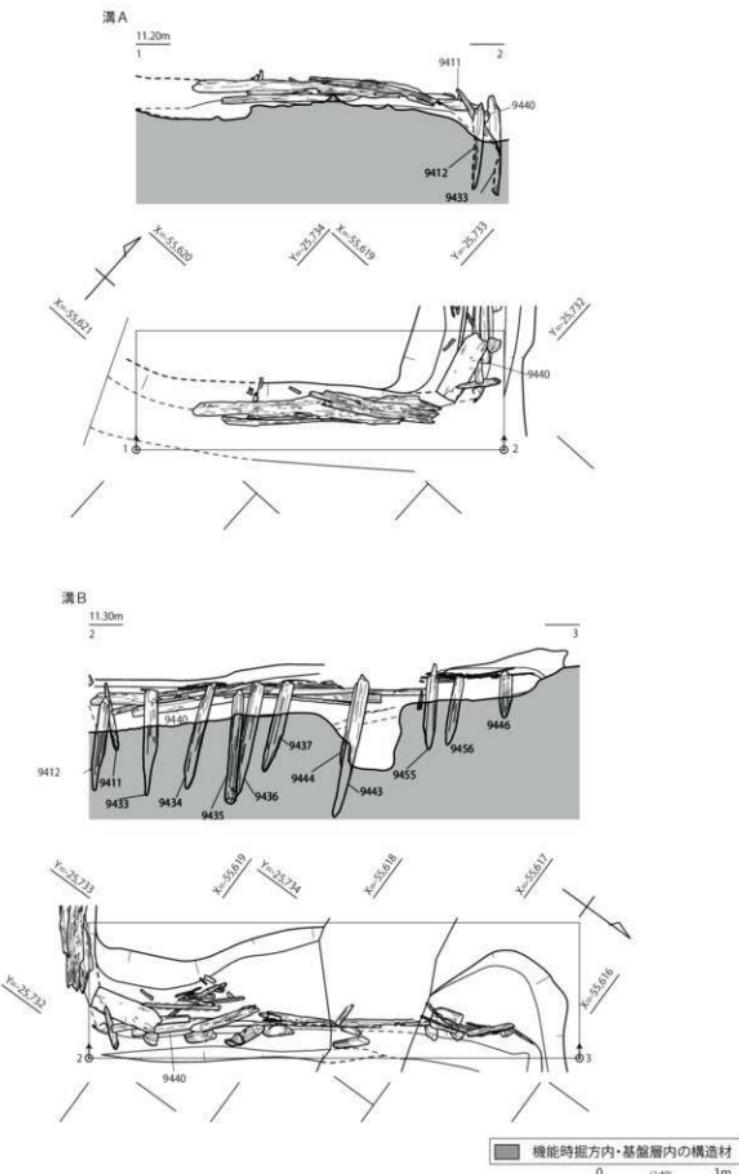
第IV-11-21図 3区 第10面 土坑(3 S-125～127、129、133～137) 平・断面図



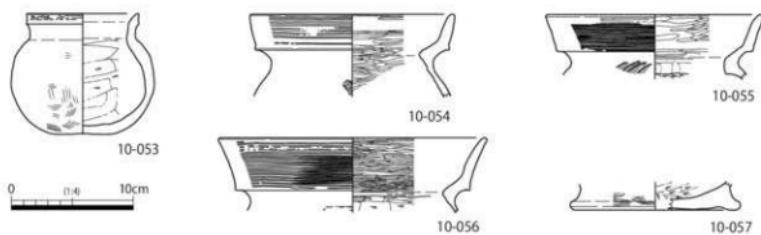
第IV-11-22図 2区 第10面 溝(2 S-831、834、839) 平・断面図及び出土遺物



第IV-11-23図 2区 第10面 溝(2S-833) 平・断面図及び出土遺物分布図



第IV-11-24図 2区 第10面 溝(2S-833) 平・立面図



第IV-11-25図 2区 第10面 溝(2S-833) 出土遺物 1

溝

2 S-831(第IV-11-22図)

F 6グリッドで2 S-834に切られた状態で検出した。溝の南西側にある谷に面して、南西から北東方向に掘削された溝である。残存部の延長は約2.17mで、幅約0.3m、深さは0.05mと浅い。埋土は、シルト～粘土である。埋土中から乙亥正V期の甕の口縁部(10-051)が出土した。(馬路)

2 S-834(第IV-11-22図)

F 6グリッドで検出した。2 S-831と同様に、谷に南面して、南西から北東方向に掘削された溝である。南西端は南東方向に折れ曲がり、L字形を呈する。竪穴住居の周壁溝の可能性も考えられるが、この溝に明らかに伴う柱穴や土坑は検出できなかった。延長は約5.28m、長い方の辺は約0.4mである。幅は、約0.2～0.37mで、北東ほど狭い。埋土はシルト～粘土で、埋土中からは土器小片が出土したのみである。(馬路)

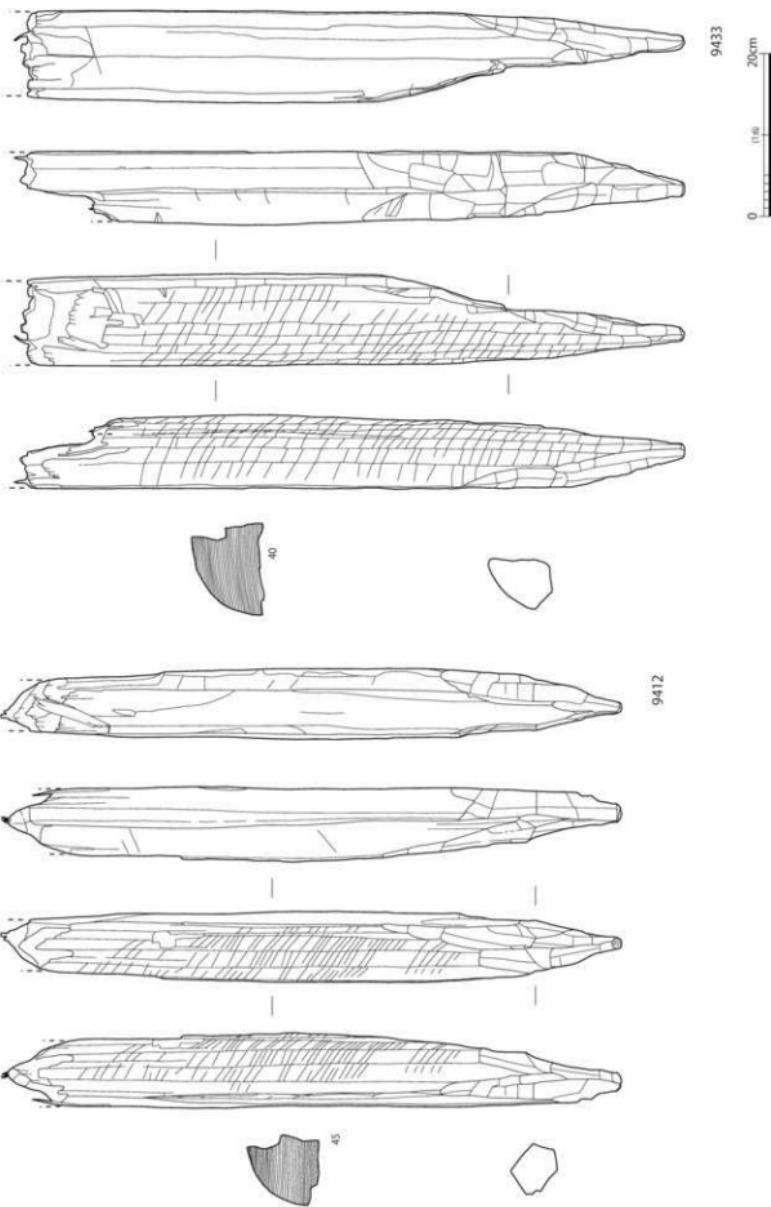
2 S-839(第IV-11-22図)

F 6グリッドの6ライントレンチ際で検出した。溝は概ね南北方向に掘削されているが、西側に膨らみくの字形を呈する。南端は6ライントレンチに切られる。検出延長は2.43m、幅は0.38m、深さは0.12mである。埋土中からは、乙亥正V期の甕の口縁部片(10-052)が出土した。(馬路)

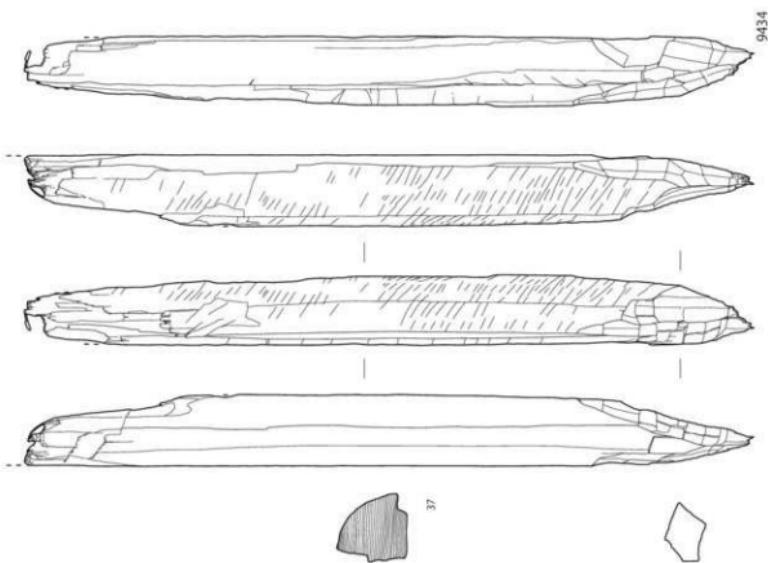
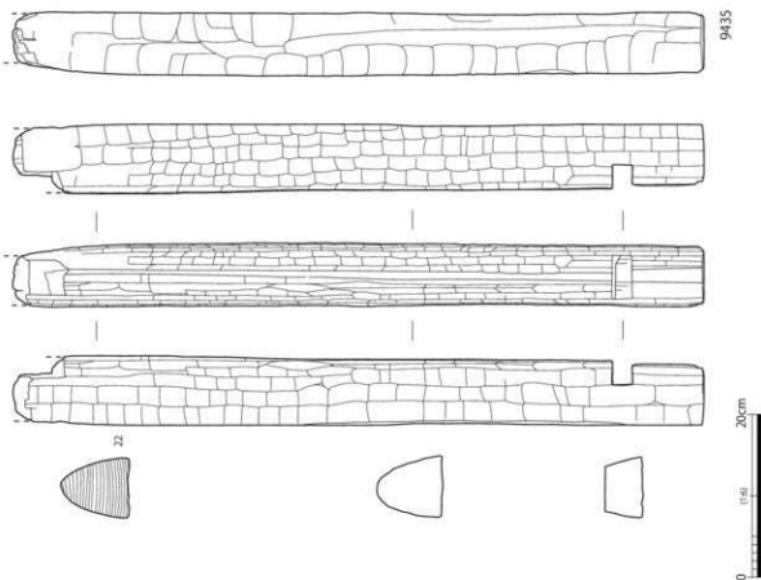
2 S-833(第IV-11-23～31図)

F・G 6グリッドで検出した。谷の中を南西から北東方向に掘削された溝(溝A)に、谷に面した法面の下端を谷の中心に向けて北西から南東に掘削された溝(溝B)が合流する。溝Aは南西部トレンチの西側と合流地点から北東側は未検出である。溝Aの延長は約3.3m、幅約0.67m、深さ0.45mである。断面形は楕円形で、埋土は黄灰色ないし褐灰色シルトである。埋土中から長さ約2mの板材が出土した。杭は伴っておらず、護岸ではなく廃棄されたものと考えられる。

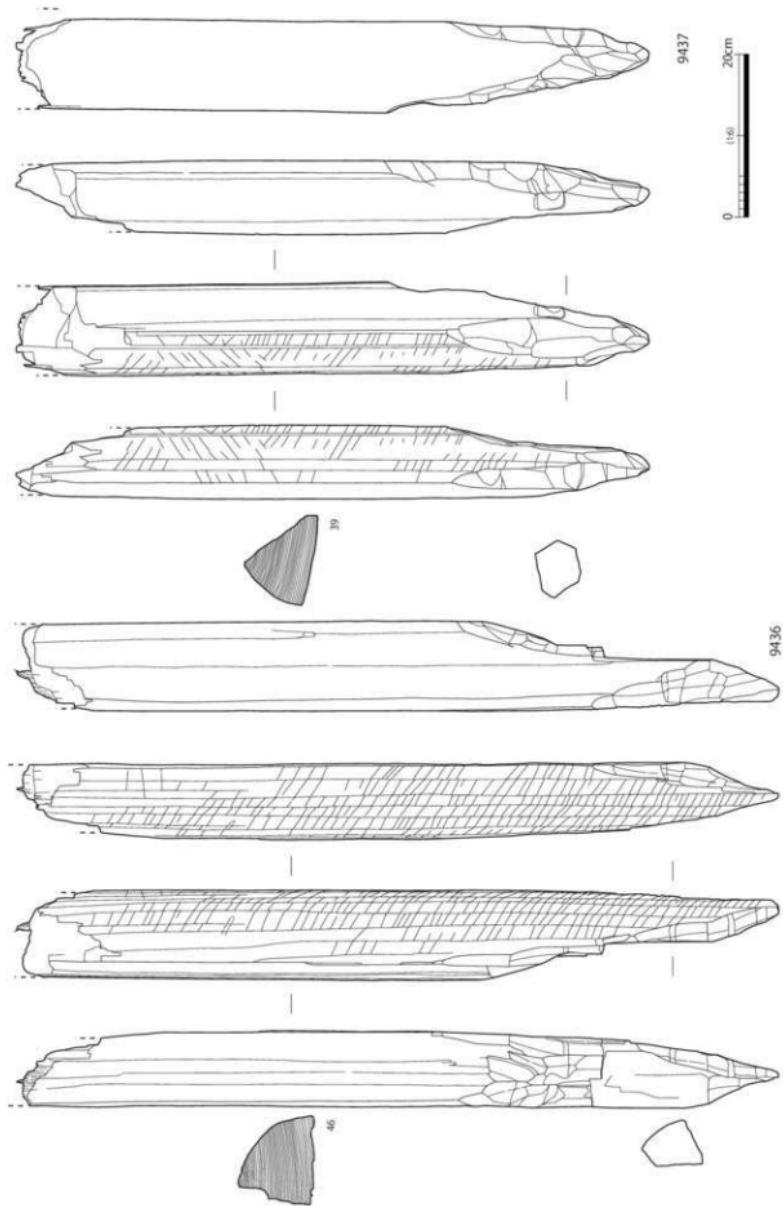
溝Bは、西側にのみ護岸を伴う。護岸は、比較的幅の広い掘方を伴い、横板は幅0.1m前後の細い板材を前後に重なるように設置していた。南側溝を挟んだ北側は、AA'断面部分で掘方は確認できるが、それ以外では確認できず、黒褐色の溝埋土(1層)が不定形に広がっていた。法面下端にできたたわみの中に谷の中心部に向けて排水するために設けた溝と考えられる。埋土は腐食を多く含むこと



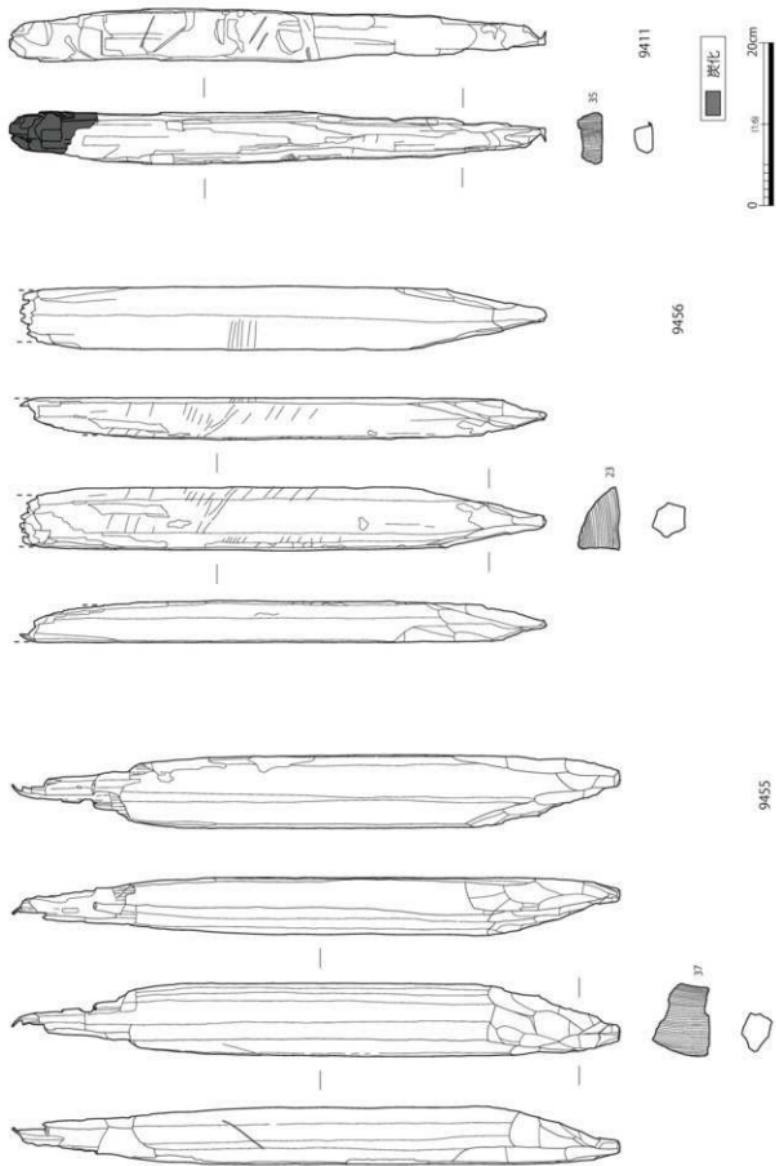
第N-11-26図 2区 第10面 溝(2S-833) 出土遺物2



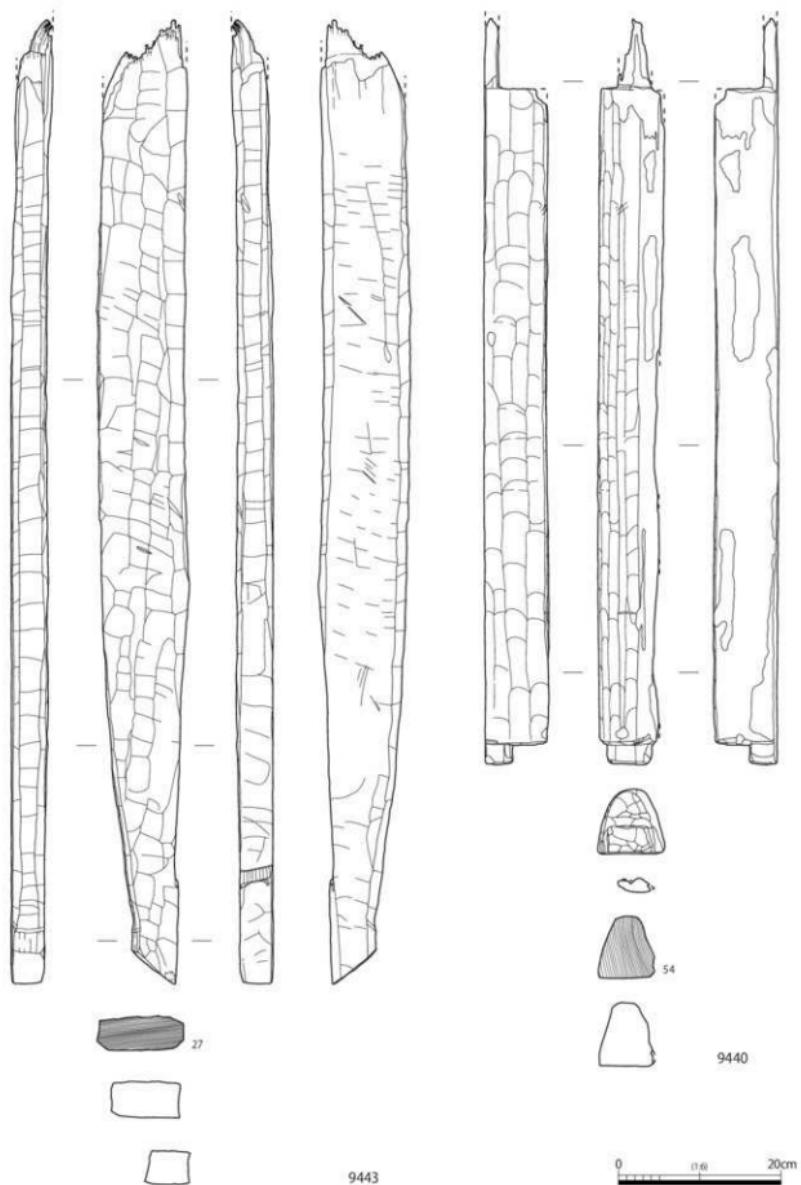
第IV-11-27図 2区 第10面 溝(2 S-833) 出土遺物3



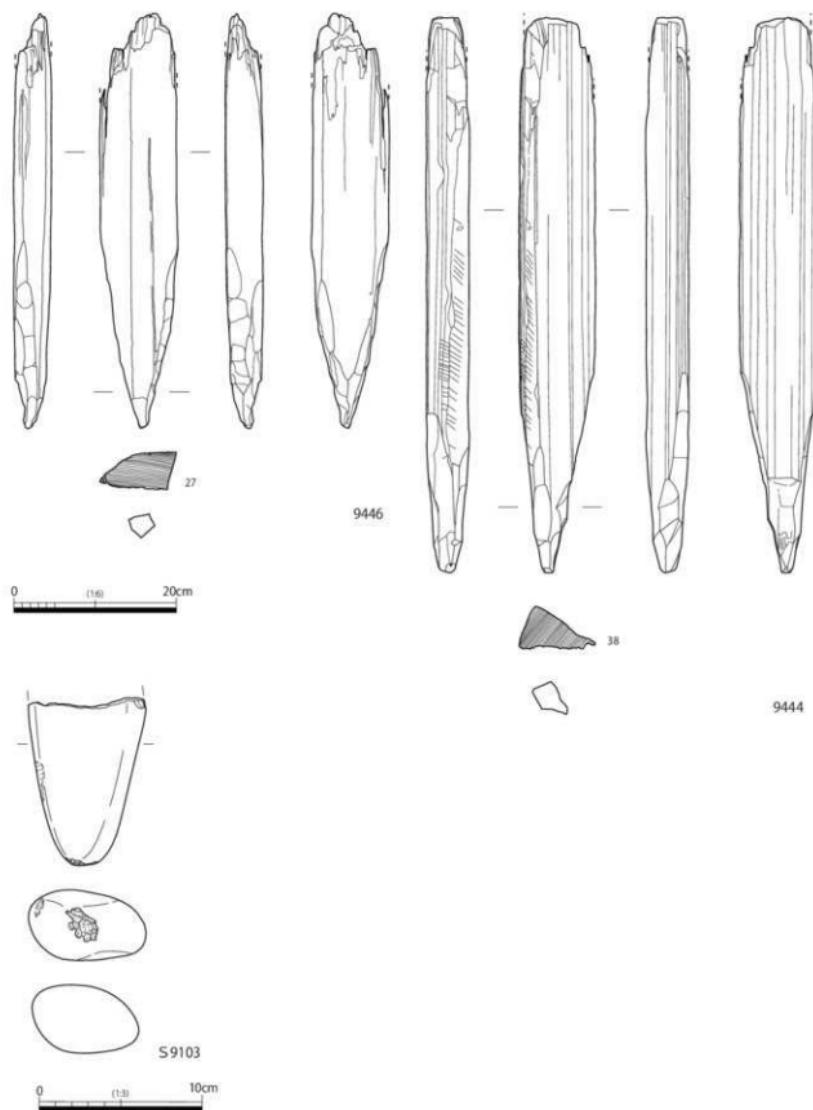
第N-11-28図 2区 第10面 溝(2S-833) 出土遺物4



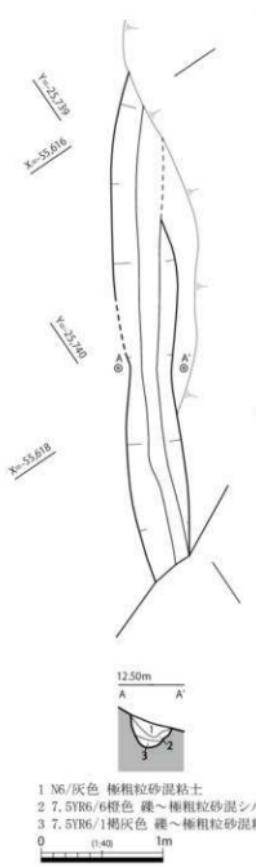
第IV-11-29図 2区 第10面 満(2 S-833) 出土遺物5



第IV-11-30図 2区 第10面 溝(2 S-833) 出土遺物6



第IV-11-31図 2区 第10面 溝(2S-833) 出土遺物7



第IV-11-32図 2区 第10面 溝(2)

S-854) 平・断面図

2 S-1025 (第IV-11-33～35図)

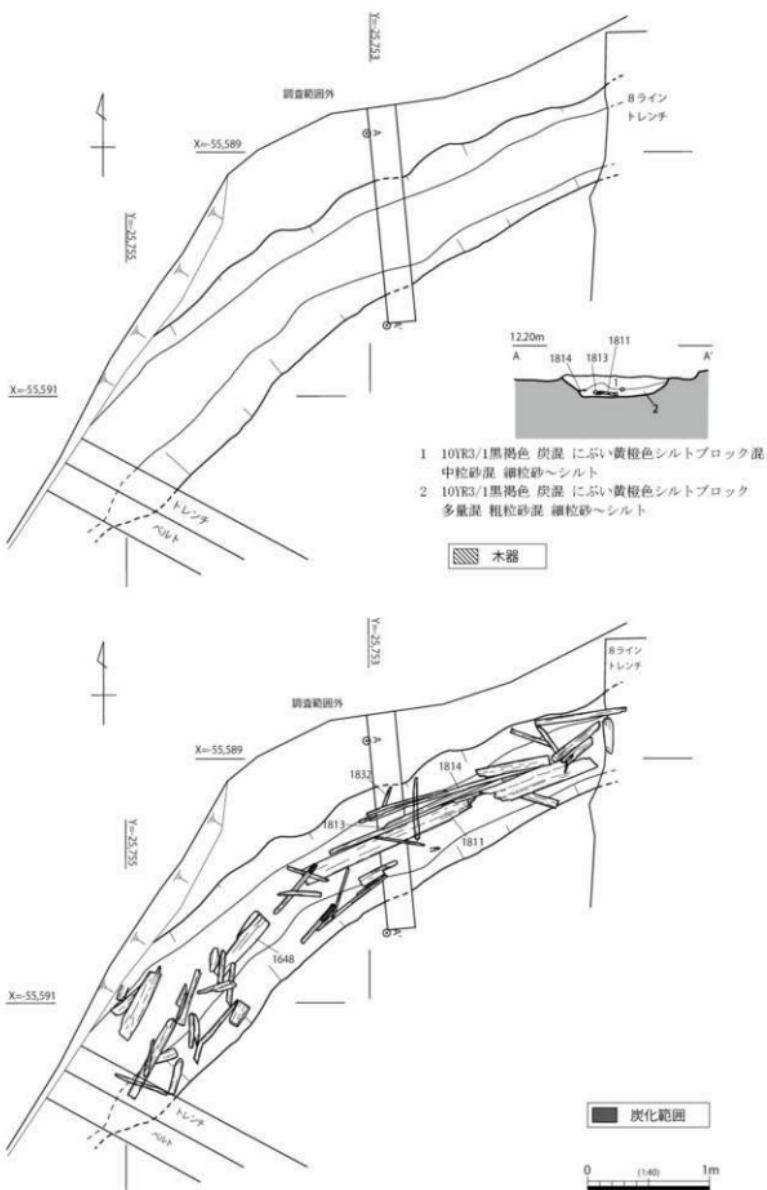
C 8・D 8グリッドで検出された、南西から北東方向へ向かう溝である。下層にはほぼ同様の走向の溝2 S-1030がある。幅0.64～1.00m、深さ0.06～0.23m、延長約5.2mの範囲で検出した。底面は南西側端部が高く、標高約12.2m、北東側端部が約11.5mである。埋土中から乙亥正V期頃の特徴を有する壺(10-058)、鉢(10-059)、台石(S1588)と併に、建築部材とみられる木器が多数出土した。台石(S1588)は、上面及び左側面に磨痕がある。壁板とみられる板(1811)は、表裏を手斧加工し、2個セットの方孔が3か所開けられ、一端には切欠きを施す。建築材とみられる板(1648)は両端部に欠き込みを施すもので、表面は割肌、裏面の加工状況は不明である。へぎ板(1813)の上部には、主軸と直交方向に幅2cm程度の部材圧痕がある。割肌状であるが一部手斧痕がある。へぎ板(1814)

から、あまり流れの無い湿地状態だったと考えられる。掘方等を除く溝の規模は、長さ約3.7m、幅約0.3m、深さ約0.23mである。護岸に用いられた杭は、北端のものが長さ約0.4mで、そこから徐々に長くなり、南側溝から南側では約1.0mになる。地山に近い側ほど杭の長さも、打ち込む深さも短く、谷の中心部ほど長い杭を深く打ち込んで設置している。杭は、横板の両端を押さえるように打設されていたと考えられるが、横板の長さにばらつきが大きく、横板同士の重複幅も一定しないため、間隔が0.2～0.6mと一定ではない。杭は、転用材が多く用いられていた。それらの中には、柱などの建築部材を分割したと考えられるものがあり、横断面形は概ね隅丸三角形、隅丸台形、方形のものがある。三角形のものは2面は割肌で比較的平坦である。残りの1面には手斧による切削痕が平行に多数残存し、やや丸みを帯びる。9435は、断面形は隅丸三角形で、丸みを帯びた頂点の部分に仕口がある。9443は横断面形が方形のもので、ほぼ全面に加工痕があり、分割材ではない。埋土中からは、乙亥正V期の壺(10-053)、壺口縁部(10-054、056)が出土した。底部の破片(10-057)は第8面の2 S-904出土のものと接合する。石器は敲石(S9103)が1点出土した。(馬路)

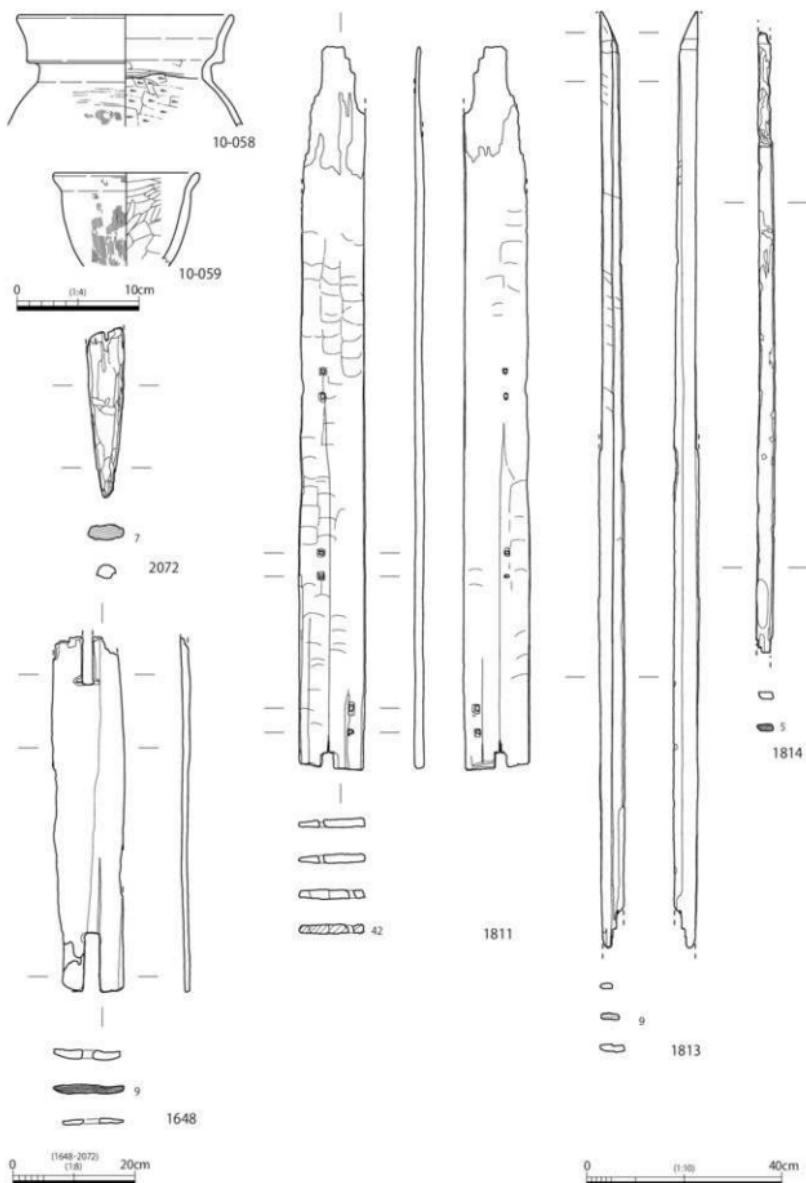
2 S-854(第IV-11-32図)

F 6グリッドで2 S-831、834から若干南西に離れて、これらの溝と平行に検出した。溝の南端は南側溝で切られる。延長は3.7m、幅0.52m、深さ0.27mである。埋土はシルト～粘土で、遺物は乙亥正III～V期の小片のみである。(馬路)

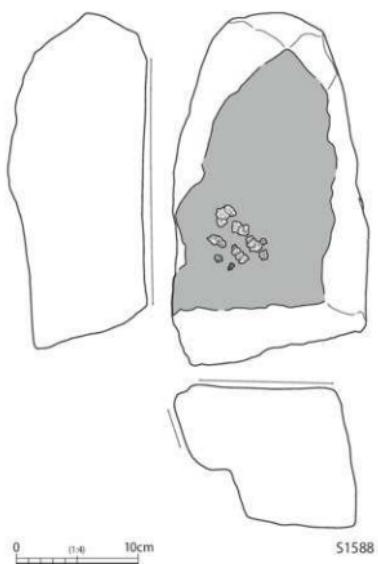
第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



第IV-11-33図 2区 第10面 満(2S-1025) 平・断面図、遺物出土状況平面図



第IV-11-34図 2区 第10面 溝(2 S-1025) 出土遺物 1



第IV-11-35図 2区 第10面
溝(2 S-1025) 出土遺物2

推定部を含めて2.8m程度、南東側では1.6m程度であるが、肩部を含めて遺構の形状は明瞭ではない。深さは最大約0.30m、底部は南側より北側が10cm程度低い。埋土中から乙亥正VI期頃の特徴を有する壺(10-060)、甕(10-061)、小型壺(10-062)、蓋(10-063)、敲石(S2036)、及び板状の部材(2077、2086)が出土した。このほか、長さ1.4m、幅16cm程度の薄い板や直径1~2cmの細い木舞状の部材等出土しているが、残存状況が悪く図化していない。(岡野)

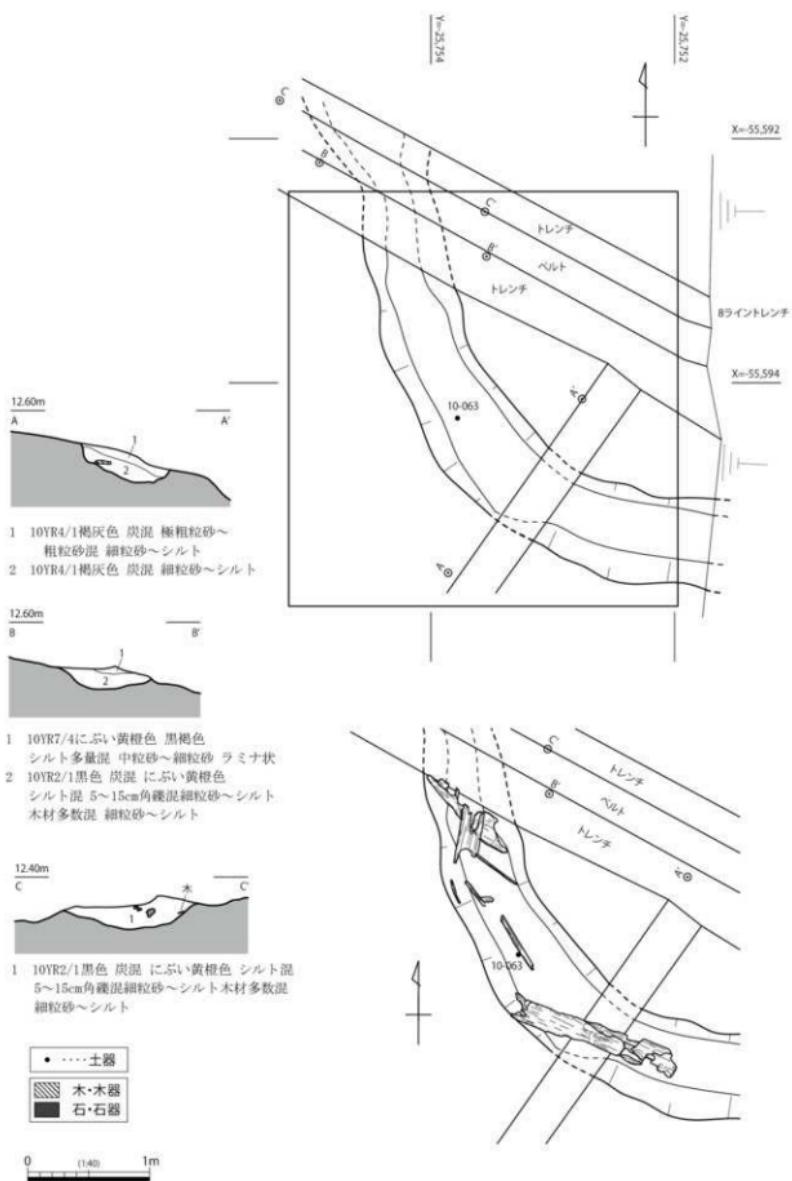
木器の多くは腐朽が顕著であり、加工痕などの残存も悪く、器種認定し難い遺物も多い。図化したものは、木包丁(2849)、断面方形の棒状材(2837、2842)、盤(2848、3195)である。木包丁(2849)は、紐孔を短い溝で結ぶタイプのもので、樹種はヤマグワである。木舞状のへぎ板(2837、2842)は全面削肌状を呈す。盤(2848)はスギ製で、平面は円形、皿状の身に方形の台が付く。口縁の一端には盛上がりがあり、上部に長方形の枘孔が作り出されており、飾り耳か把手を装着するためのソケットと考えられる。一部は炭化する。盤(3195)は、平面長方形の身に方形の台と把手が付く。一端は欠損するが、島根県三田谷I遺跡の類例(島根県教育委員会2000『三田谷I遺跡Vol.3』)からみると、把手は片側のみのようだ。スギ製である。(岡野)

2 S-1029 (第IV-11-36・37図)

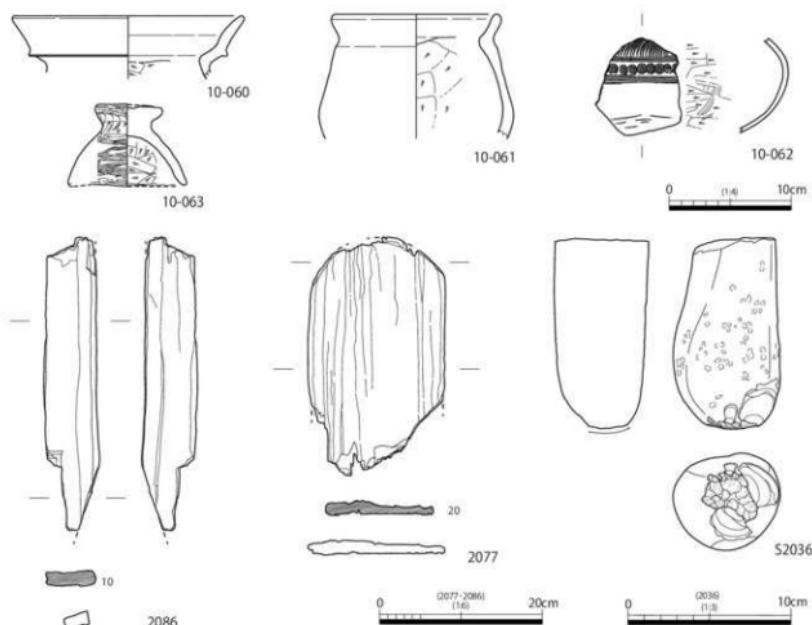
D 8グリッドで検出した溝である。北側を2 S-1025、上部を2 S-1009(第8面の溝)に切られる。平面形は北から東へ緩やかに弧を描く。幅0.70~0.78m、深さは最大0.26mである。溝底のレベルは概ね標高11.9~12.0mである。埋土中から、乙亥正VI~VII期頃の特徴を有する壺(10-060)、甕(10-061)、小型壺(10-062)、蓋(10-063)、敲石(S2036)、及び板状の部材(2077、2086)が出土した。このほか、長さ1.4m、幅16cm程度の薄い板や直径1~2cmの細い木舞状の部材等出土しているが、残存状況が悪く図化していない。(岡野)

2 S-1066 (第IV-11-38~41図)

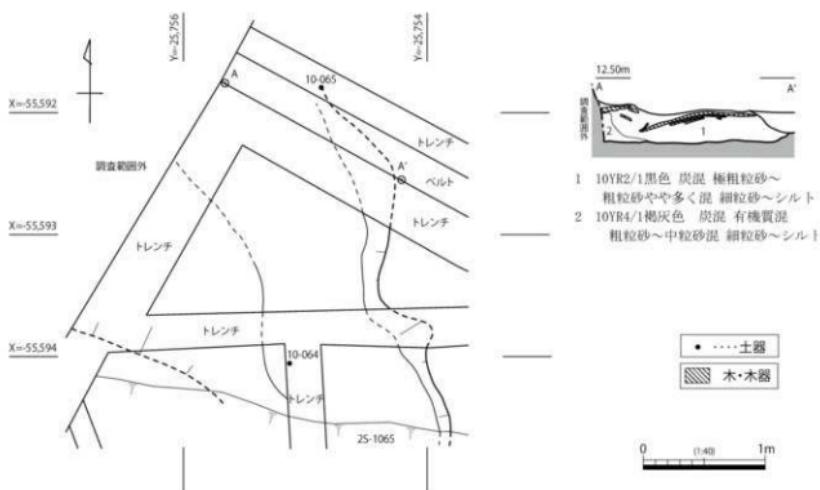
D 8グリッドで検出した。幅は北西側が広く、



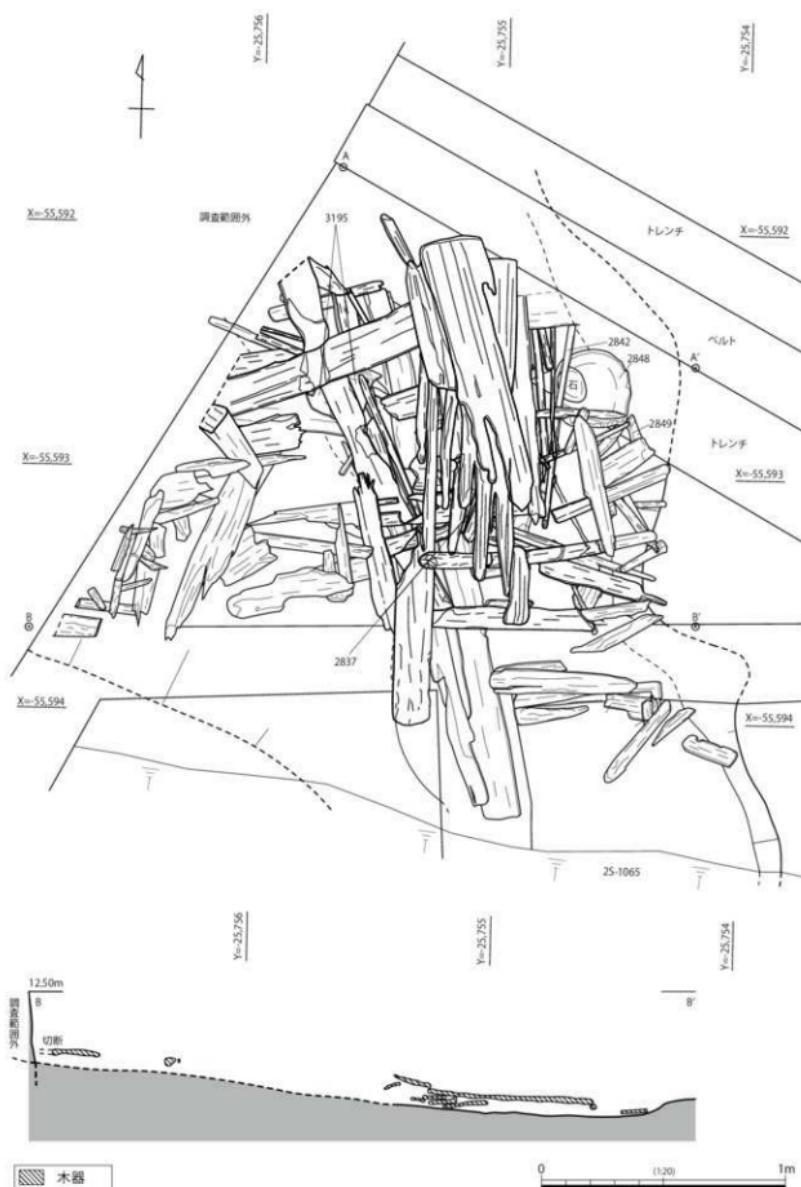
第IV-11-36図 2区 第10面 溝(2 S-1029) 平・断面図、遺物出土状況平面図



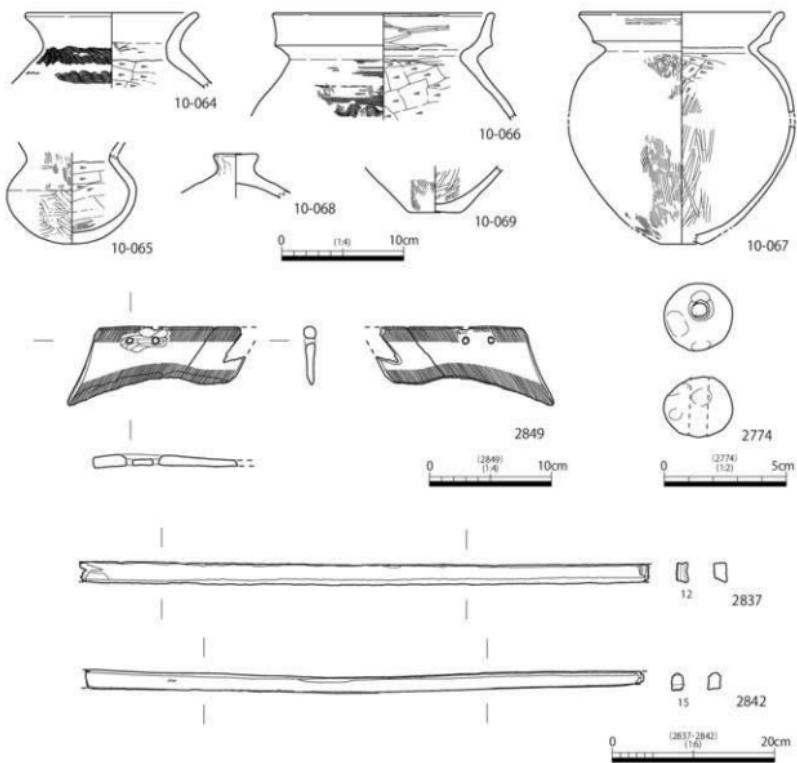
第IV-11-37図 2区 第10面 溝(2S-1029) 出土遺物



第IV-11-38図 2区 第10面 溝(2S-1066) 平・断面図



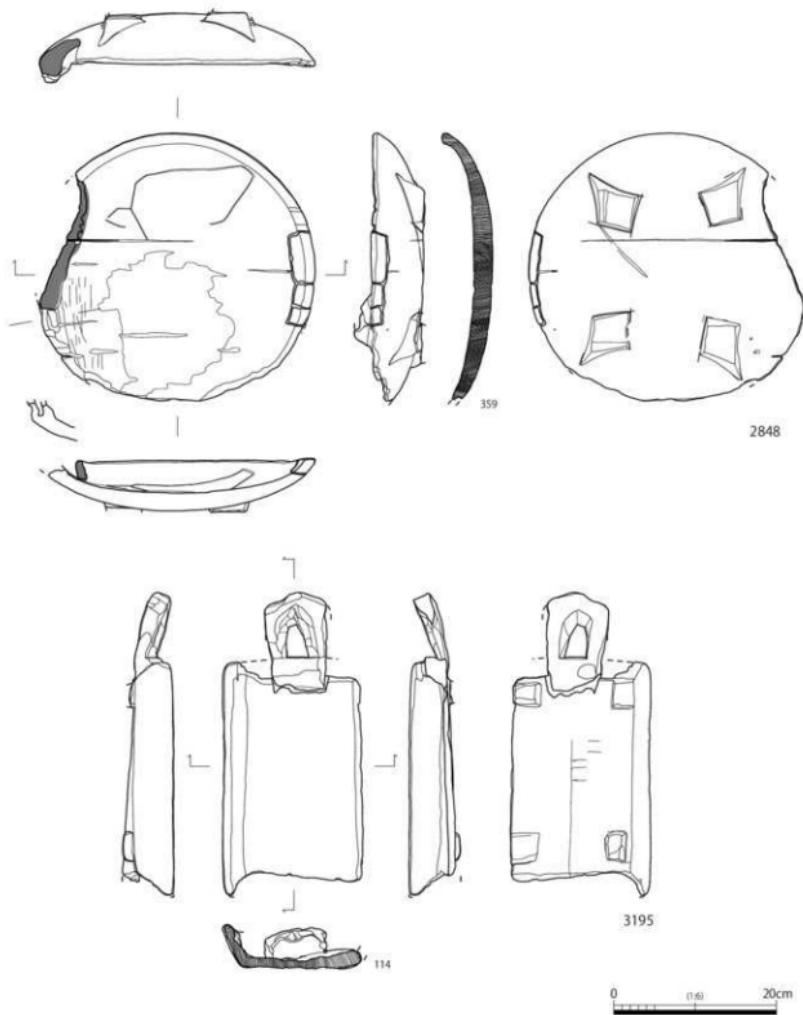
第N-11-39図 2区 第10面 溝(2 S-1066) 遺物出土状況平・断面図



第IV-11-40図 2区 第10面 溝(2S-1066) 出土遺物1

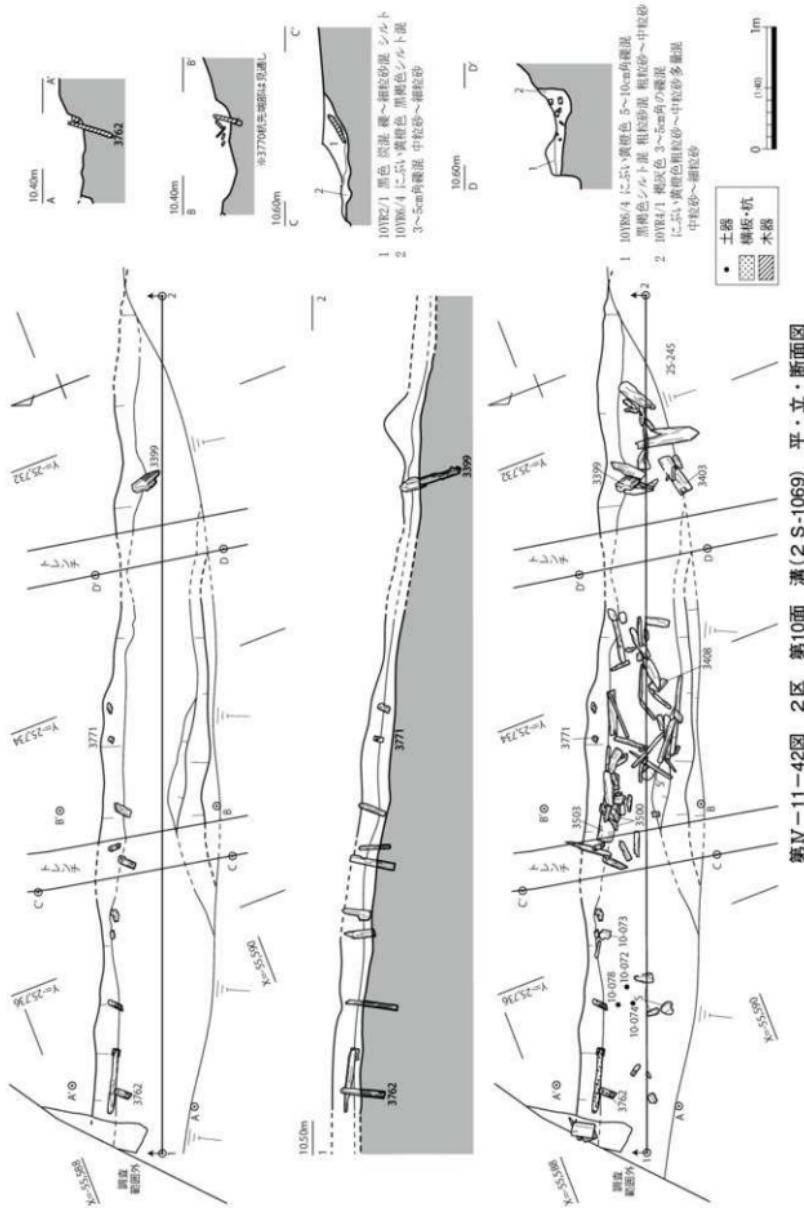
2S-1069(第IV-11-42~44図)

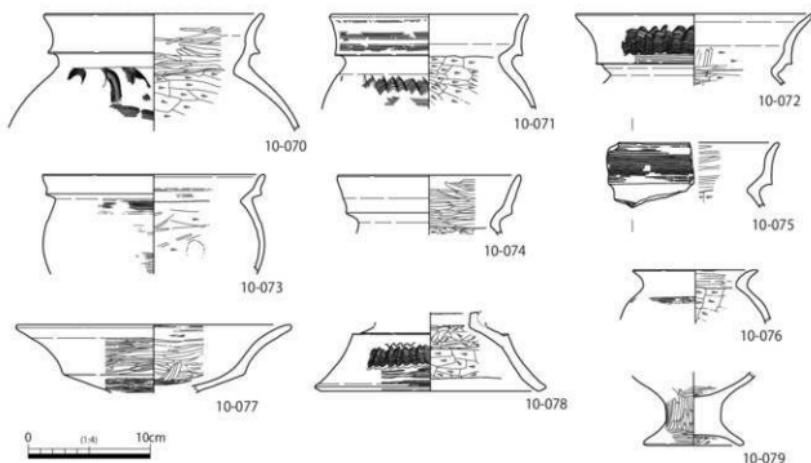
C、D 6グリッドに位置する。北西から南東方向へ向かう溝である。南西側を2S-245に切られており、6ライントレーナーから東側は残存しない。長さ7.3m、深さ0.07~0.16mが残存する。南北側の上端ラインは残存しないが、概ね幅1m程度の溝とみられる。北東側のみ11本の杭がみられることから、横板による護岸が存在したとみられる。横板は抜き去られており、杭も打設深度が浅いものが多いため、本来の位置を保持していない杭もあると思われる。南西側の護岸の痕跡はなく、本来存在しなかったか、あるいは2S-245構築時に撤去されたことが考えられる。埋土中から土器、木器が出土した。甕(10-070~076)、高坏(10-077)、器台(10-078)、脚部(10-079)は乙亥正VI~VII期頃の特徴を有する土器である。木器は、桶(3403、3408)、蓋(3509)、杭(3399、3762、3771、3500)、板(3503)を図化した。桶(3403)は、内部の底板位置から上部が炭化する。桶(3409)には脚が付く。杭(3399)は枝の根元が残る自然木の端部を杭状に加工したもので、杭(3762、3771)は、欠き込みや納穴からみて転用材である。板(3503)は、長さ56.4cm、幅14.5cm、厚さ2.1cmの板で、上下端部は荒く切断される。(岡野)



第IV-11-41図 2区 第10面 溝(2 S-1066) 出土遺物2

第11節 第10面(VIII・IX層下面)の調査





第IV-11-43図 2区 第10面 溝(2 S-1069) 出土遺物 1

流路

2 S-1079(第IV-11-45～50図)

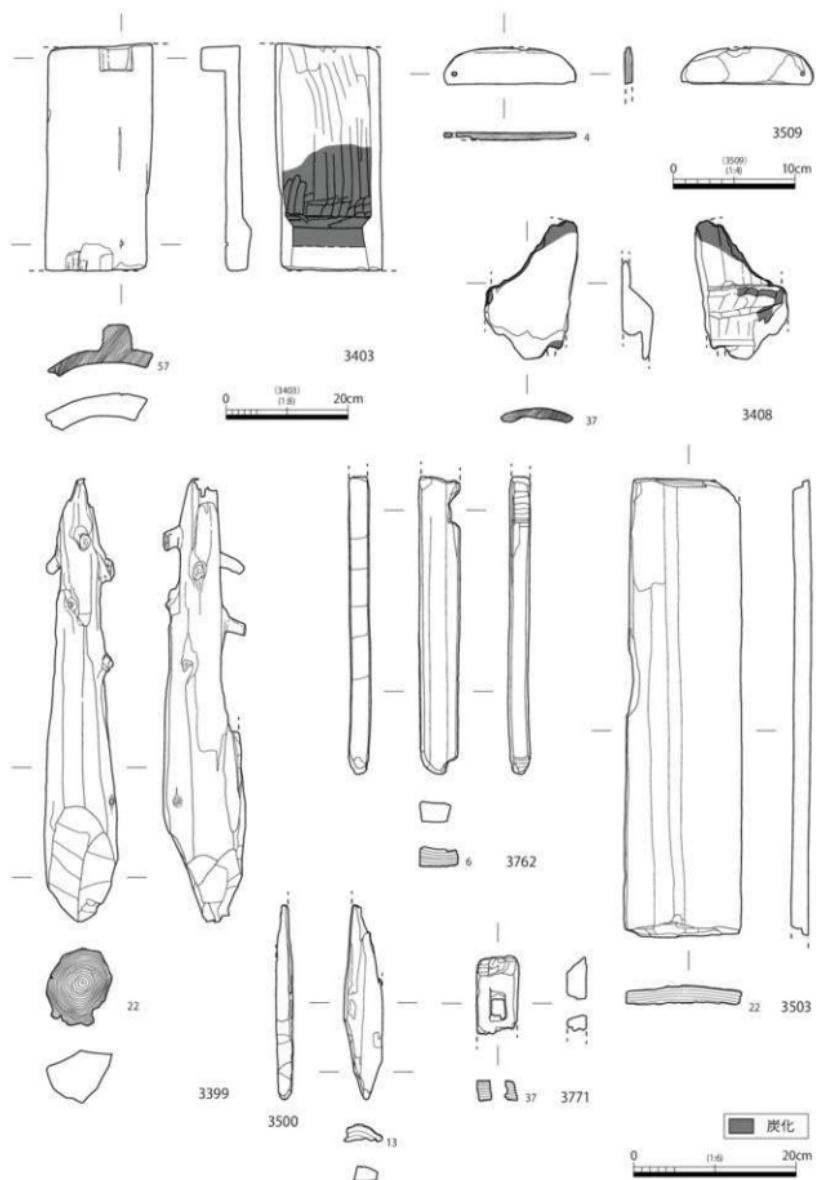
E 2グリッドで検出した流路で、3ライントレント以西と東側溝以東は未調査である。検出延長は、約5.6m、幅は1.8m前後である。AA'断面のあたりから東側は、底面が浸食されていて、東側溝断面にはこの浸食により深くなった流芯のみが確認できる。断面ベルトを挟んだ流路の幅から考えると、上層部分は、第9面の2 S-978により擾乱を受けて無くなつたと考えられる。埋土中からは木器と土器が多く出土した。

土器の壺(10-080)は、外面にスタンプ文を施す。他には、甕(10-081～085)、高坏(10-086、087)、器台(10-089)を図化した。

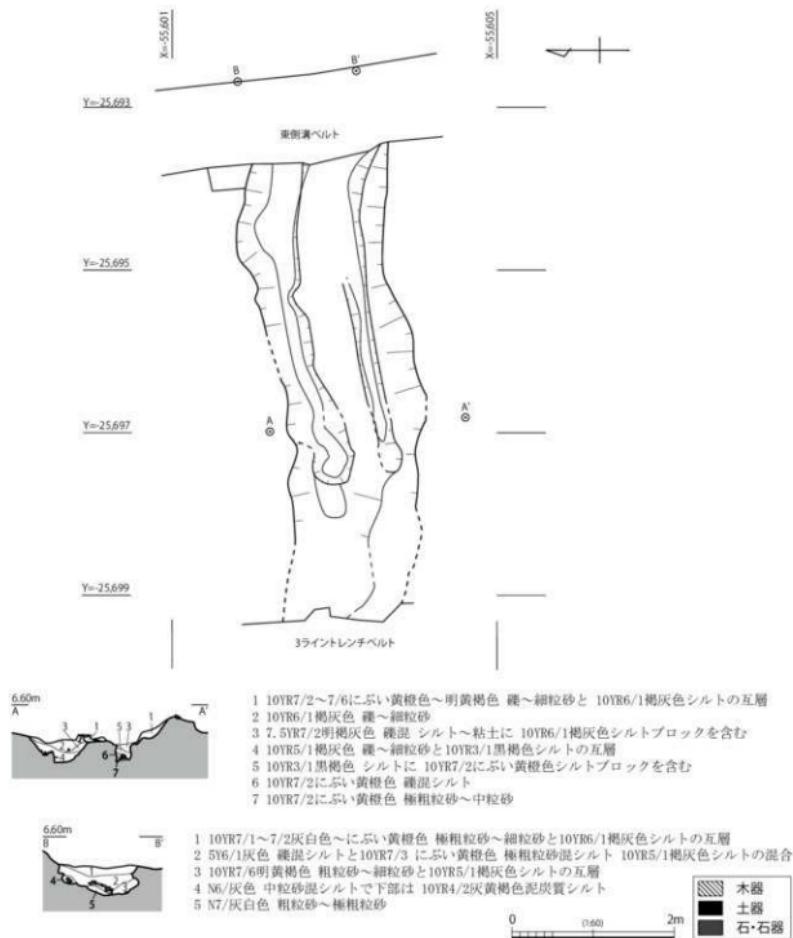
木器の農工具は、木包丁(3745)が出土した。刃部が無く紐孔も無いので、未製品と考えられる。ただし、幅が短く、このまま加工して製品として使用できたかどうかは疑問がある。3390は器種不明である。平面形は方形で、身の中程に柄が取り付く。身の下端は両刃に加工されている。2207は農具形あるいは組み合わせ式の平鋤と考えられる。ただ平鋤とするには中央部に開けられた半月形の孔が大きすぎて実用品とは考えにくい。3389は杵の先端部と考えられる。3391は直柄又鍬である。頭部は山形に作り出され、歯は3本と考えられる。外側の歯はやや湾曲してのびる。3141は紡錘車かと考えられる。3316は蓋、3826は蓋ないし底板の未製品かと思われる。3613は底板である。3598Bは長方形の材の中央部に長方形の孔がある部材、2249は横断面半円形の棒材で、両端部の近くを約2.5cm幅で一回り細く加工している。

建築部材は厚さ2cm前後の板材である。3586、3969、3588は材の両端部を斜めにカットしたもので妻壁板と考えられる。勾配は、3586が49°、3969が48°、3588が58°と49°である。3598Cと3825の一端はカーブを描くように斜めにカットした材で、3598Cは中央部に孔がある。3384、3606、3828は長方形の板材で、3828は長側辺に孔が並ぶ。3598Aは、板材の一端を斜めにカットし、側辺に抉りを入れたものである。

第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



第IV-11-44図 2区 第10面 溝(2 S-1069) 出土遺物2



第IV-11-45図 2区 第10面 流路(2 S-1079) 平・断面図

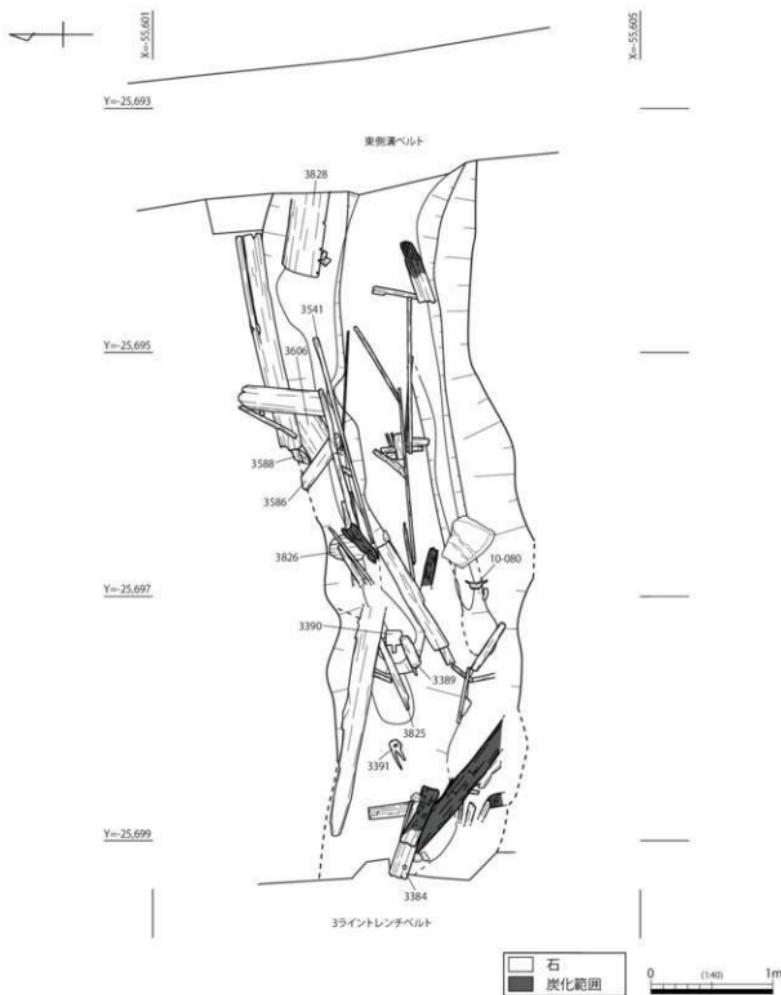
れる。3474、3541は小舞と考えられる細長く薄い板材である。

なお、3ラインレンチベルト付近では、一部下面に帰属すると考えられる遺物も露出して取り上げてしまったものがあるが、出土状況を図化したものは本遺構に帰属すると考えられるものである。土器は、乙亥正V～VI期の壺、甕、高杯、器台が出土した。(馬路)

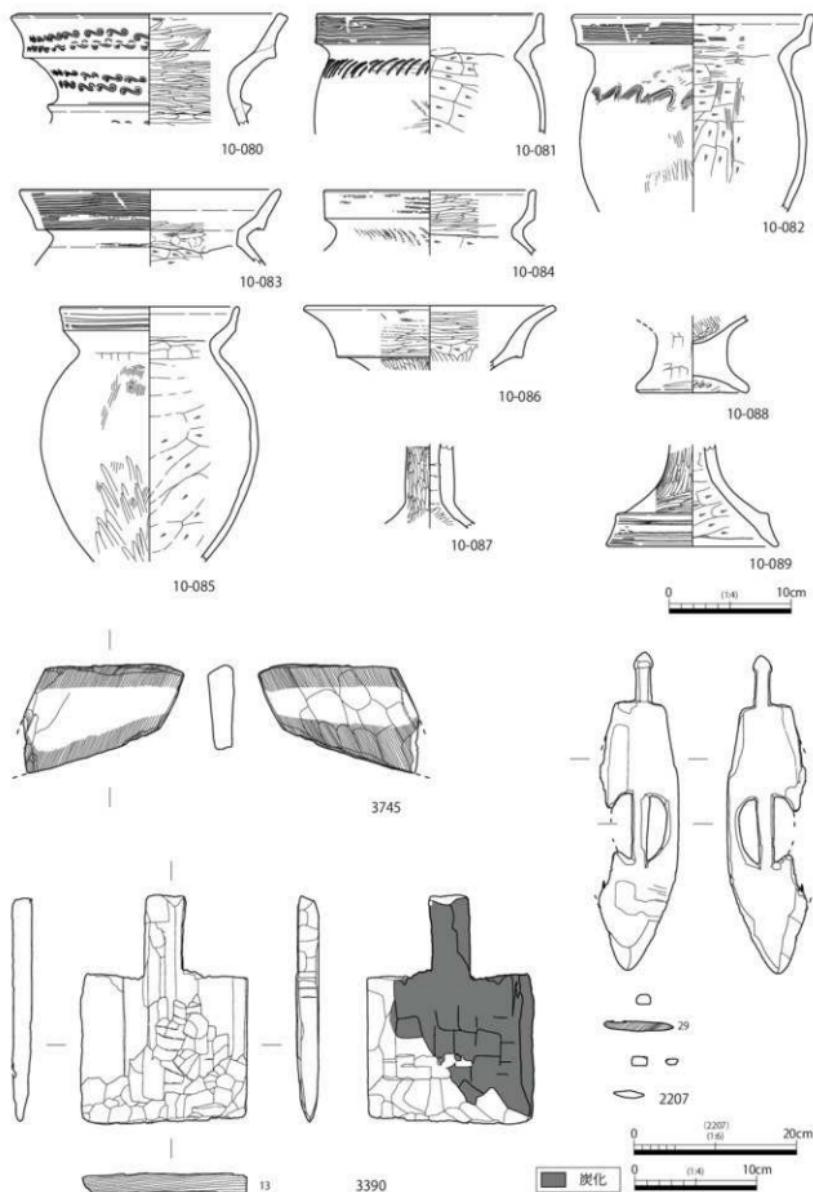
2 S-1090(第IV-11-51図)

E 2グリッドで検出した。2 S-1079の約0.5m北側を西から東に流れる。検出延長は約2.4m、幅は

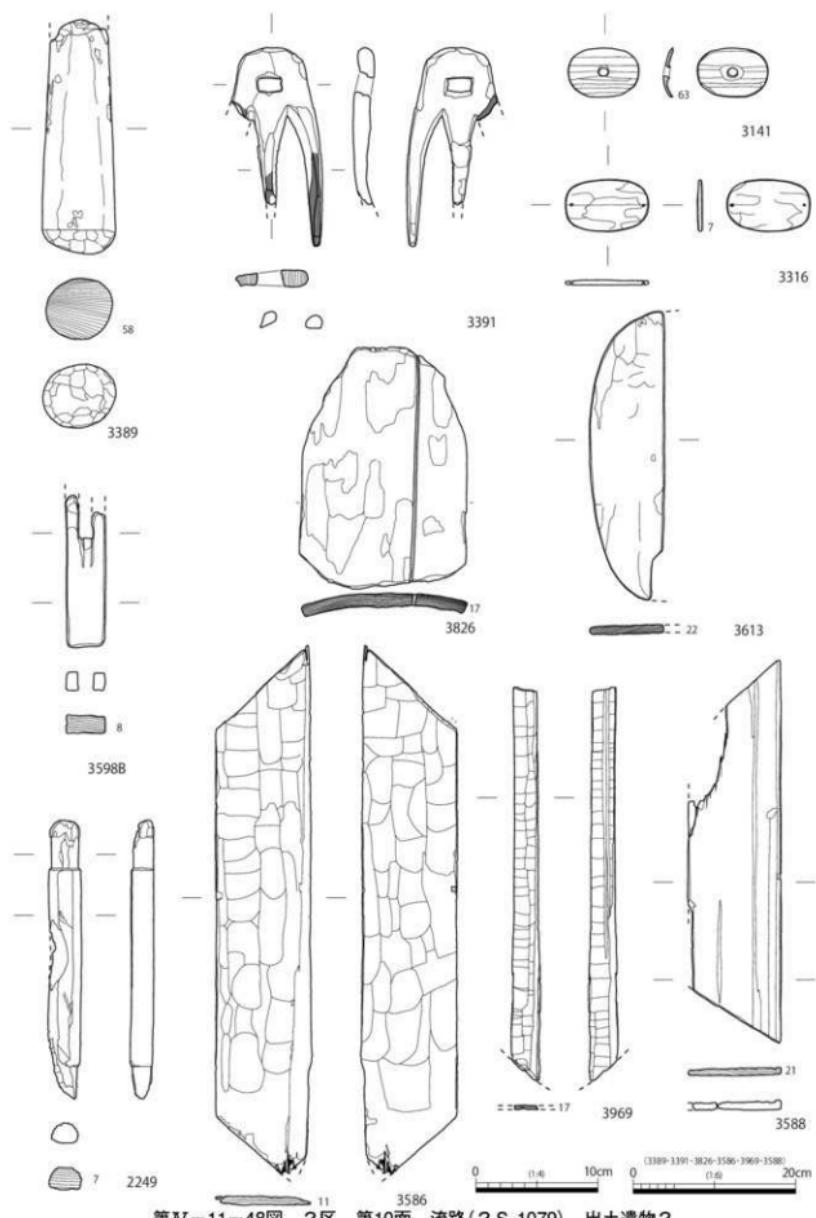
第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



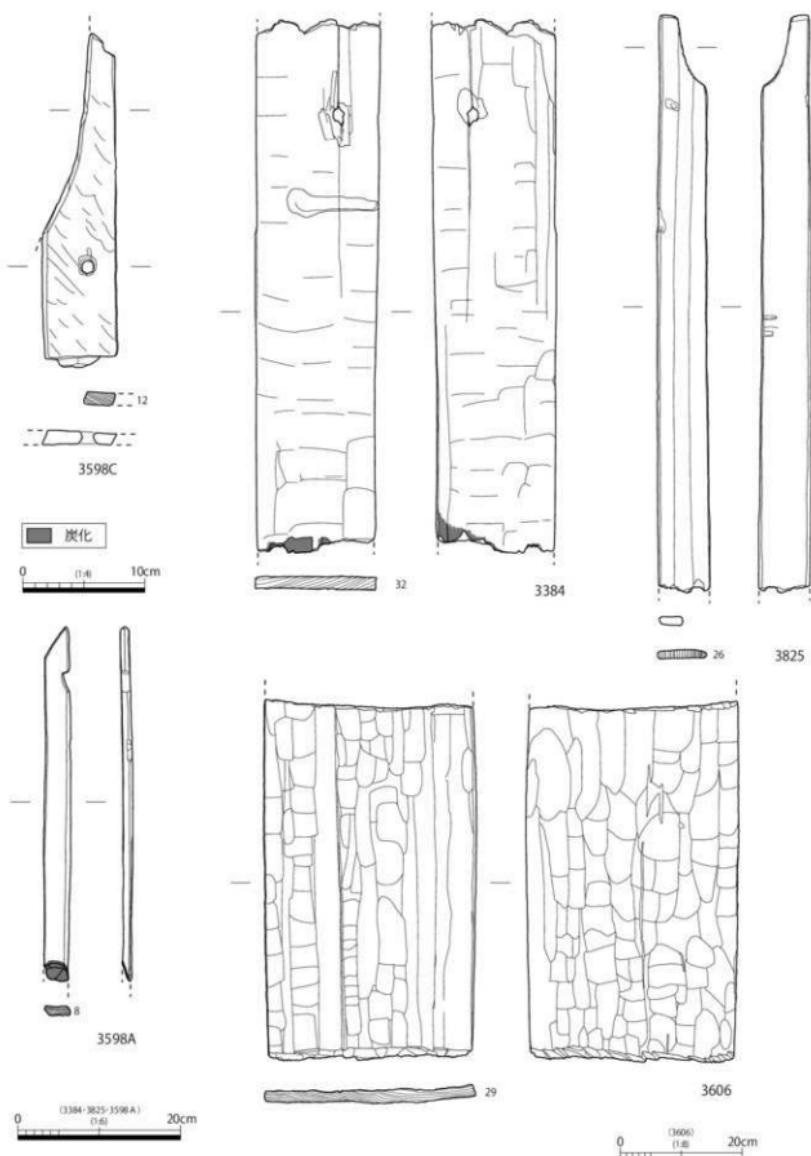
第IV-11-46図 2区 第10面 流路(2 S-1079) 遺物出土状況図



第IV-11-47図 2区 第10面 流路(2S-1079) 出土遺物1

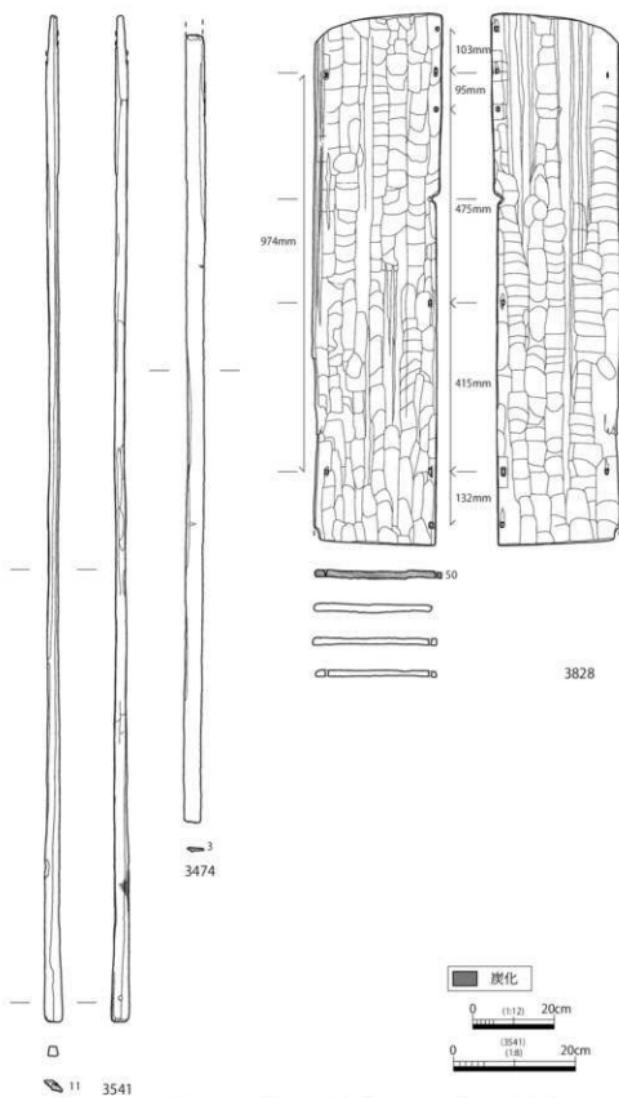


第IV-11-48図 2区 第10面 流路(2S-1079) 出土遺物2

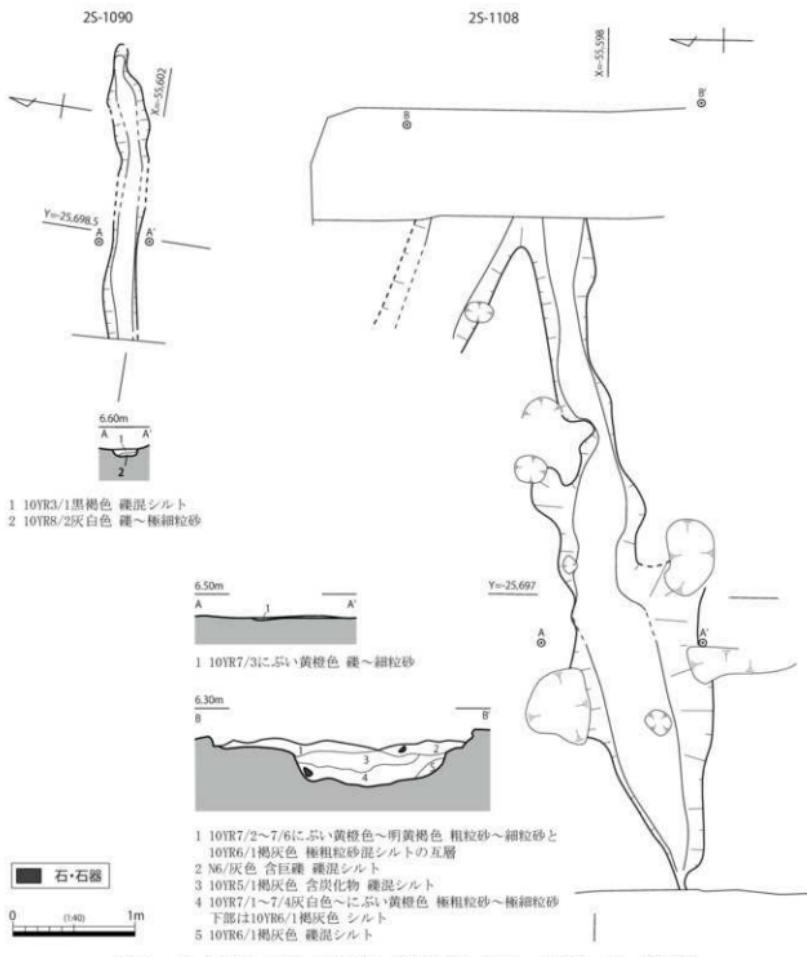


第IV-11-49図 2区 第10面 流路(2S-1079) 出土遺物3

第11節 第10面(VII・IX層下面)の調査



第IV-11-50図 2区 第10面 流路(2S-1079) 出土遺物4

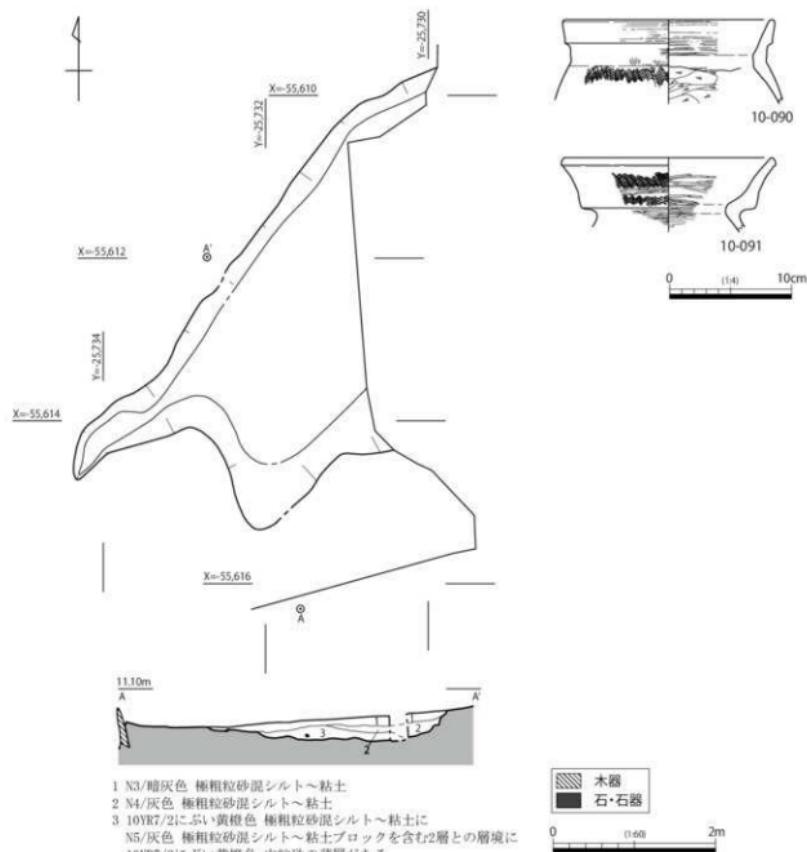


第IV-11-51図 2区 第10面 流路(2S-1090、1108) 平・断面図

約0.27m、深さは0.06mと浅い。埋土上層は黒褐色のシルト層で、下層は砂層である。遺物は乙亥正Ⅲ～V期の土器小片が出土したのみである。(馬路)

2 S-1108(第IV-11-51図)

D 2グリッドで検出した。中央側溝に沿って西から東に流れる流路で、3ライントレンチ側は薄く砂層が広がり、底面はわずかに窪むだけだった。東に行くにしたがって深くなり、東側溝断面では、約0.37mの深さになる。東側溝ベルトの手前で、北西から流れる流路と合流する。検出延長は約56m



第IV-11-52図 2区 第10面 落ち込み(2S-829) 平・断面図及び出土遺物

である。埋土中から土器は出土しなかったが、木器が出土した。図化した遺物はない。(馬路)

落ち込み

2 S-829(第IV-11-52図)

F6グリッドで検出した不定形な落ち込みで、地形の傾斜に沿って西から東に落ち込む。6ライントレント手前で収束するようで、6ライントレントの壁面では確認できない。西側では幅約0.5mと細く、東に約1.5mのあたりから幅約4mに急激に広くなる。埋土は、シルトないし粘土で3層に分層できる。埋土中からは、土器と木器が出土した。図化したのは乙亥正VII期の壺である。(馬路)

第12節 第11面(X層下面)の調査

1 X層出土の遺物(第IV-12-1~5、7図)

遺物は主にE4グリッドを中心に2S-840の谷の上部にあたるところでまとまって出土した。図化したのは、壺(11-001~007、009~011)、甕(11-008、012~030)、高坏(11-031)、器台(11-032、033)、蓋(11-034~036)である。石器は黒曜石製のスクレイパー(S8246)が出土した。

木器は農具の組合せ平鋤(9512)が出土した。後面中央部に柄を差し込む方孔を穿つが、前面まで貫通しない。3618は指物腰掛の脚、8358は桶、3513Aは棒材の両端に頭部を作り出したもので、布巻き具ないし経巻き具と考えられる。1903は建築部材、9510は丸い棒材を先端に向けて平たく削り、先端部付近に円孔を1つ穿つ。何かの部材と考えられる。9513Bは丸い棒材の側面に長方形の欠き込みをして、長軸方向に2つ円孔を穿ち、別材を挿入する。欠き込みを挟んで両側には挿入した別材に直交する方孔から円孔を穿っている。何の部材かはわからなかった。

2 第11面の遺構(第IV-12-6、8、9図)

基本層序では、X層下面で検出した遺構面である。この遺構面では、竪穴住居、土坑、溝、谷を検出した。

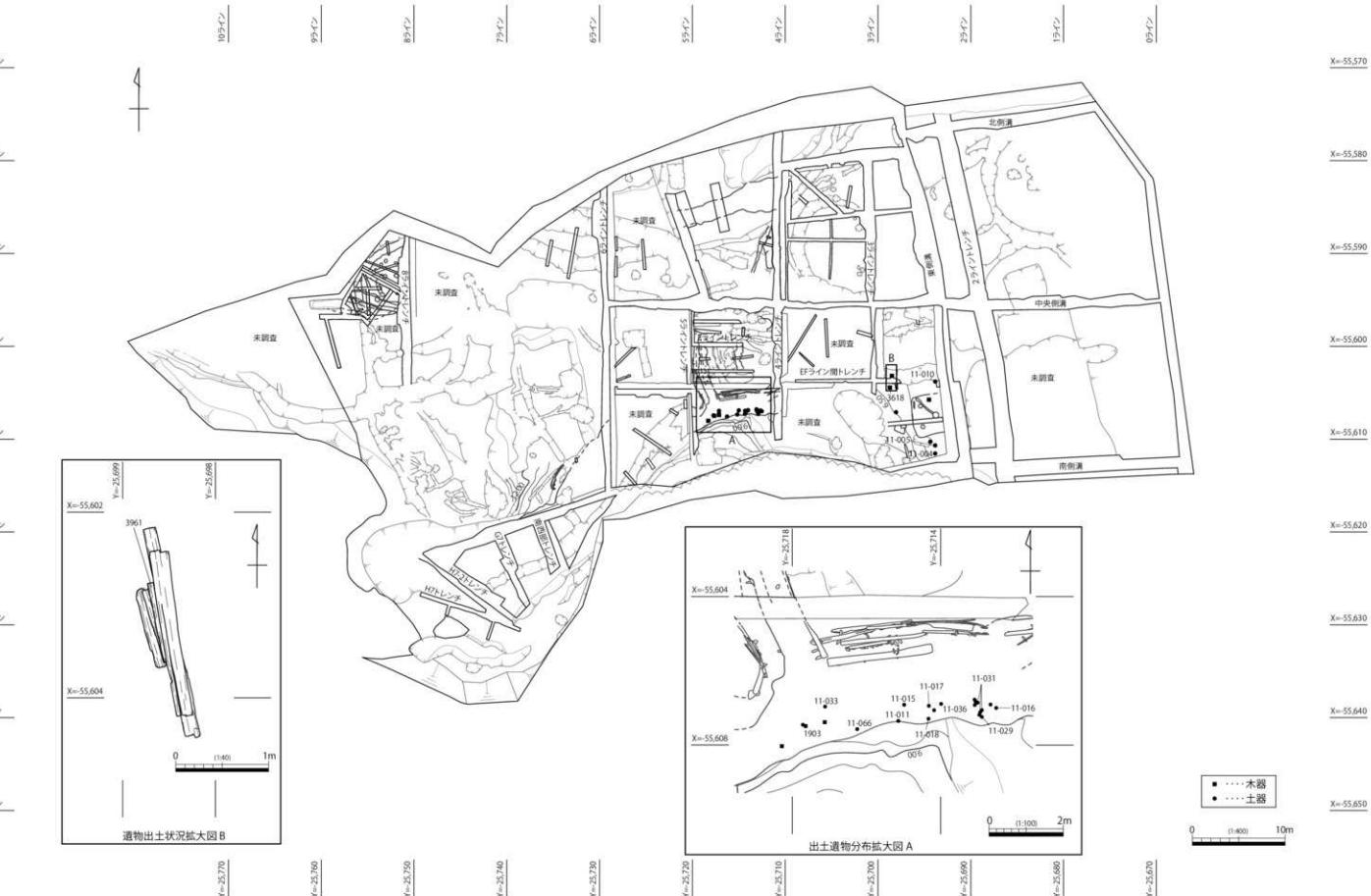
竪穴住居

2 S-1147(第IV-12-10~16図)

E2グリッドで検出した。X層と遺構埋土との区別がつきにくく、南側部分は床面近くまで掘削してしまったため、南側の上端はやや住居内側に湾曲した状態になってしまった。また、北壁の東側半分も同様に床面まで包含層として掘削したため、範囲は推定である。東側の周壁は東側溝ベルト内にあると考えられる。平面形は隅丸方形の4本主柱の竪穴住居で、炭化材が出土することから焼失住居と考えられる。規模は、一辺約4.1m、残存部の床面積は12.5m²(推定約16.3m²)である。床面までの深さは、AA'断面では約0.07mである。検出した主柱は3つで、残りの1か所は東側溝ベルト内にあると考えられる。主柱(P1)と主柱(P2)間の距離は約2.2m、P2・P3間の距離は約2.2mである。

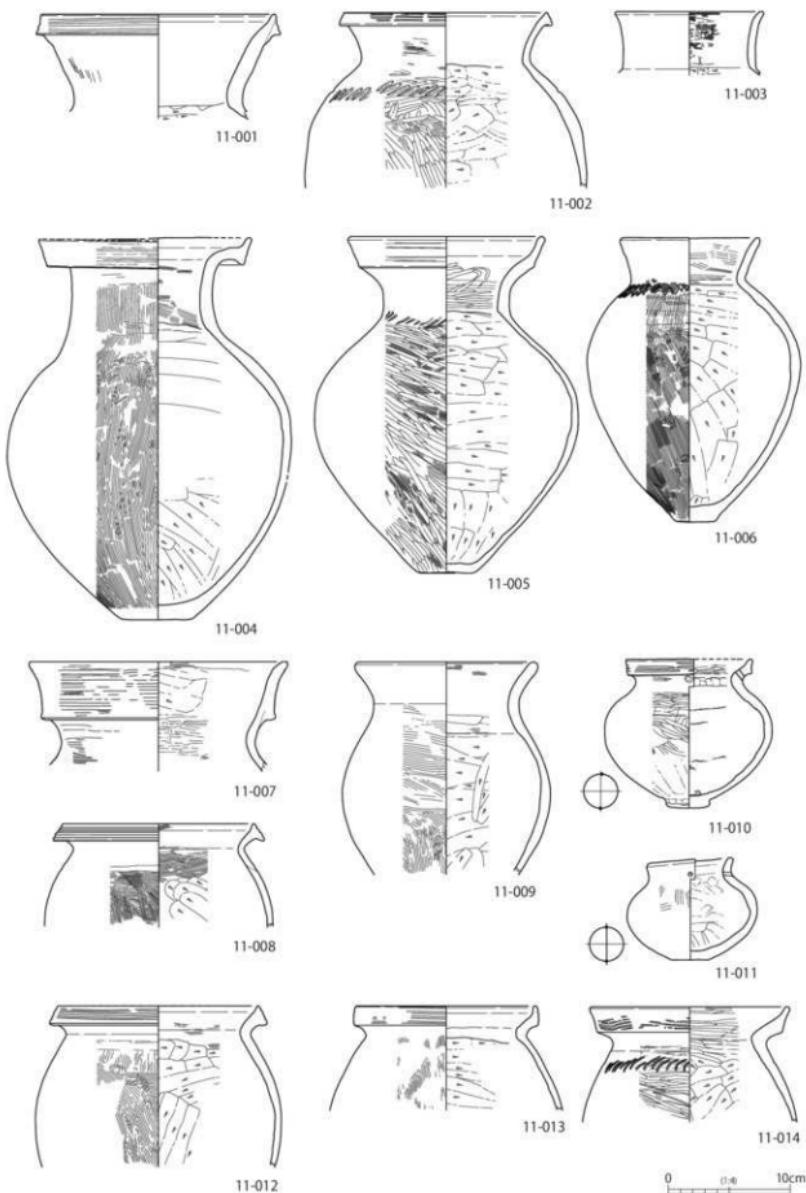
埋土は6層に分層でき、炭化物や礫を多く含む1~3層が埋土に相当する。AA'断面では4~5層、BB'断面では4~6層が貼床層である。床面直上で出土した板材や炭化材を覆うように1~3層は堆積し、1、2層はBB'断面では住居外の山側からなだらかに住居内に流れ込んだ状況を呈する。この部分の、周壁の立ち上がりは低く、住居西側の周壁に沿って倒れた長さ約3mの板材は、出土状態では表面は炭化していないが、裏面から東側の縁が炭化しており、被熱後に倒れた状態を呈する。また、西壁近くにしか、焼失した際の炭化材がほとんど出土しなかった。これらの状況から、焼失後に炭化材の片づけと埋め戻しが行われたと考えられる。西側周壁沿いの板材は、周壁に用いられた壁材と考えられ、埋め戻しの際に内側に倒れたと考えられる。周壁の上部もその際に崩された可能性が高いと考えられる。

床面は3層の貼床が行われており、機能時の床面を検出できたのは北西部のみで、他の部分は検

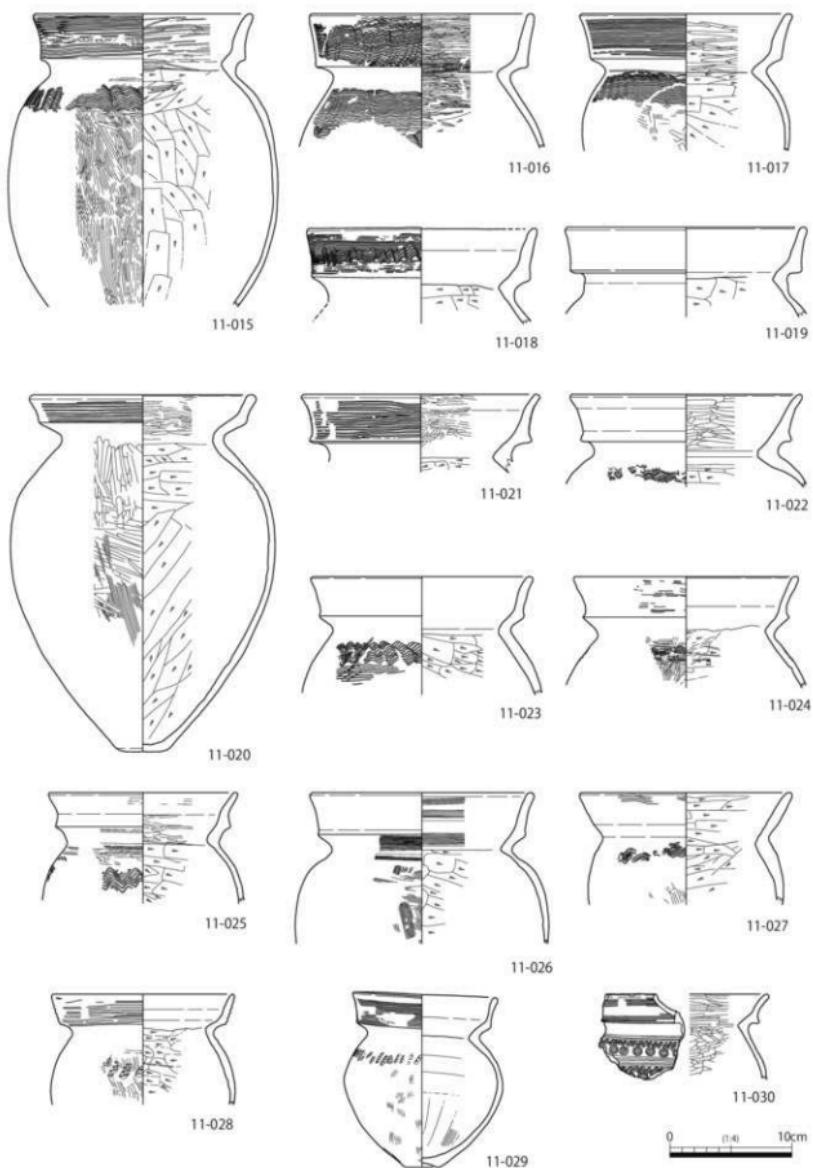


第IV-12-1図 2区 第11面 X層出土遺物分布図及び遺物出土状況図

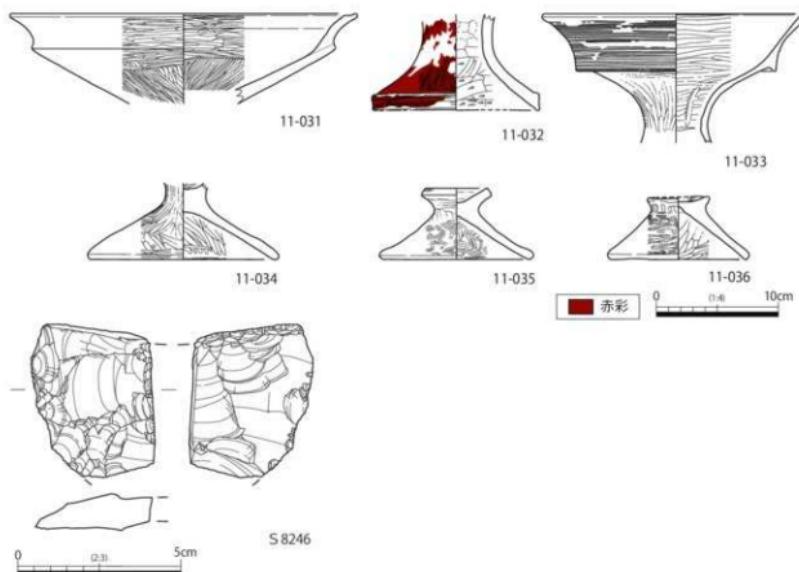
第12節 第11面(X層下面)の調査



第IV-12-2図 2区 第11面 X層出土遺物 1



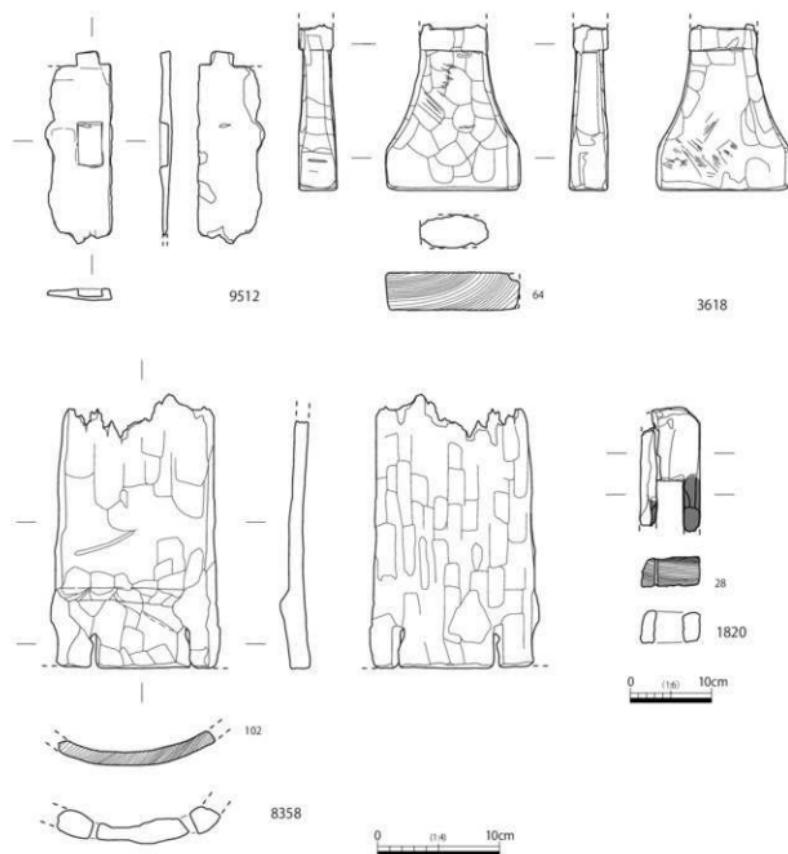
第IV-12-3図 2区 第11面 X層出土遺物2



第IV-12-4図 2区 第11面 X層出土遺物3

出時に床面を若干掘削してしまったため、貼床の途中で中央ピット(P4)などの遺構を検出した。埋土相当層を掘削し、原位置を留めない遺物を取り上げた後、壁材と床溝を覆う板材などを検出した。床溝は2条検出した。その内1147溝1は、住居北西隅から中央ピットに接続するように掘削されていた。もう一方の1147溝2は住居北西隅から、西壁に沿って約0.78mの長さで掘削されていた。埋土は、細礫～シルトないし砂層である。2S-1147溝1は溝を横断するように細い棒材を約0.5～0.7m間隔で4本設置し、その上に、2枚の板材の長軸をそろえて載せて蓋をしている。1147溝1a(蓋材)は、中央ピット側の1147溝1b(蓋材)の上に若干重複させて載せている。1147溝1は北西端の幅が広くやや膨らむことから、それに合わせて、蓋材も幅0.15m程度の板材の北西端のみ一辺約0.25mの方形に大きくなっている。1147溝2は、細い棒材1本を溝の北側に寄せて設置するのみで、南側には棒材は設置せず、板材を載せて溝に蓋をしている。中央ピットの平面形は円形で、底部の北よりも一段深く2段掘りになる。埋土は有機質富み、砂～シルト層である。1147溝1a、1b共に樹種はスギである。

北壁と北西隅部の周壁には、板材と杭を用いた壁材が残存していた。北壁の東半分から板材は出土せず、杭のみが出土した。北壁西側半分から北西隅部にかけては、板材と杭が残存していた。北壁は長さ約12mの板材を横長にして用い、その前に杭が5本設置されていた。これら北壁に打設された杭は、貼床からわずかに先端部が見えるだけのもののが多かった。北西隅部は小割した幅の狭い板材を6枚縦長に用い、各板材を前後に重複させながら設置し、杭3本を設置して留めている。これらの板材は下側を貼床に埋めて設置されており、床面より上に露出していた部分は炭化しているが、貼床内に埋まっていた部分は炭化していなかった。これら以外には、西壁沿いに倒れこんだ板材が壁材だったと考えられるほか、杭や板材は検出されなかった。壁板の設置方法として、壁材の下部を貼床に埋

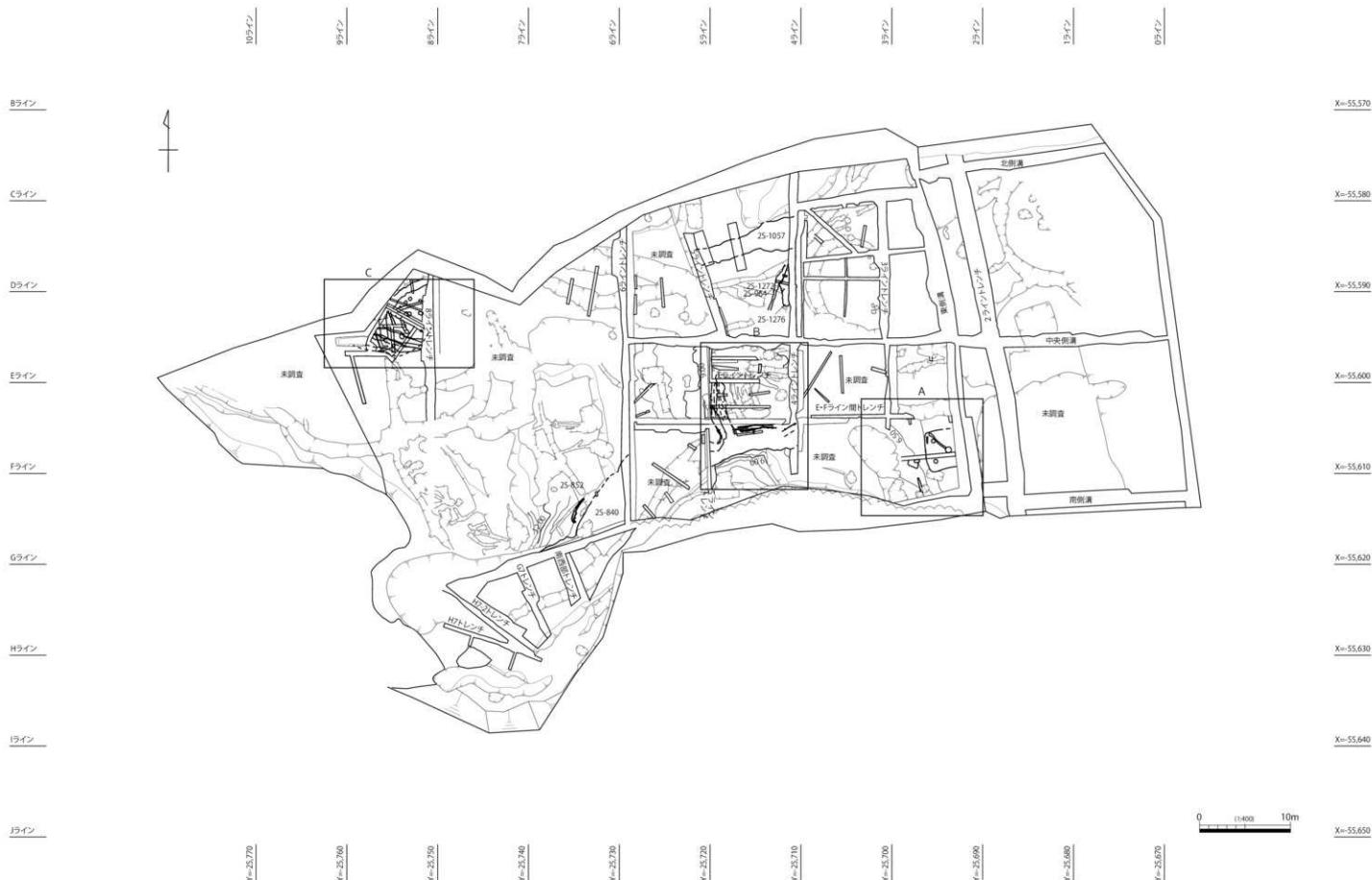


第IV-12-5図 2区 第11面 X層出土遺物4

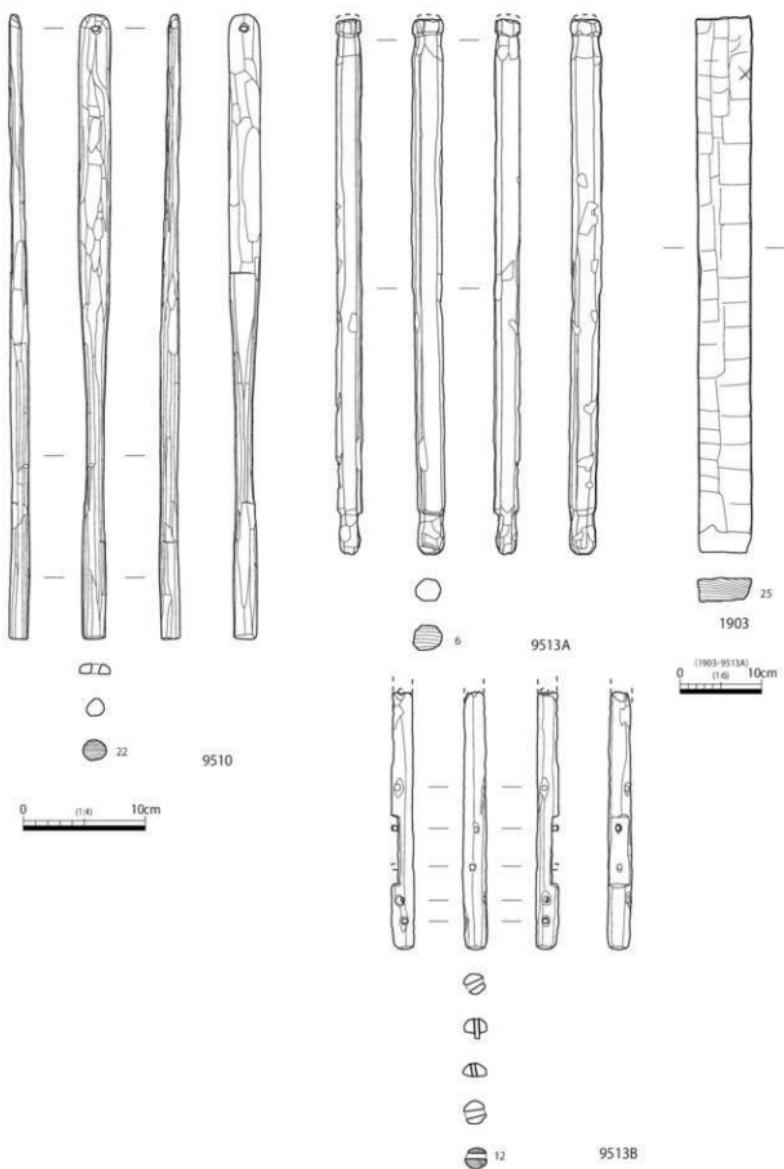
めて固定することが重視されたとすれば、杭の打設は省略された可能性もある。杭は横断面方形の分割材のもの(4111、4117)と、樹皮の残る芯持ち丸太材(4118、4112、4113、4115)がある。

主柱穴は、3基検出したが、1基は大部分が東側溝ベルト内にあるため、2基のみ調査を行った。いずれにも柱が残存し、床面から数cm突き出ていた。柱は残存長約0.9m、直径約0.2mである。柱穴の掘方は、貼床下にあり、掘方は直径約0.45m、深さ約0.8mである。P1は底面を一段深く、柱の径にあわせて掘り下げて設置されていた。主柱はいずれもクスノキである。

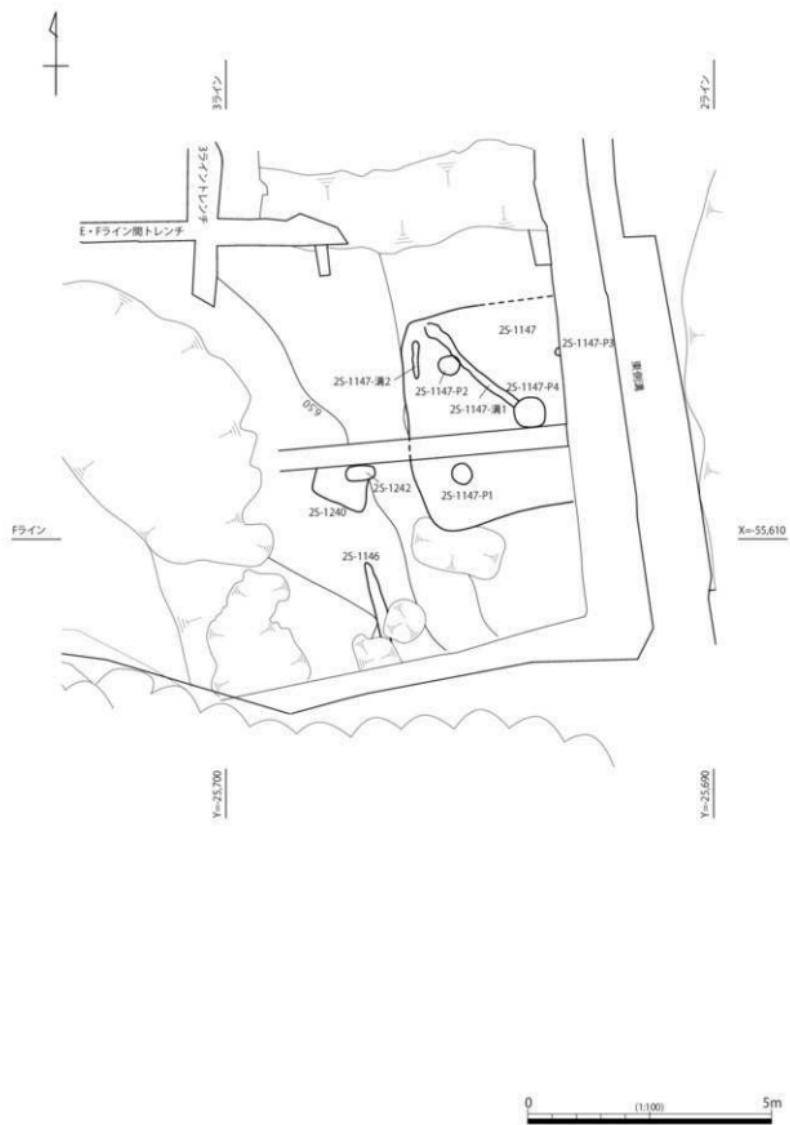
埋土中から出土した遺物は多くない。乙亥正IV～V期の土器小片で、器台1点(11-039)と甕2点(11-037、038)を図化した。遺構が埋め戻されたと考えられることから、遺構の時期を直接示すものではないが、X層下面に帰属することと、住居の平面形態から考えて、乙亥正V～VI期のものと考えられる。ほかに、貼床と断割から木包丁(4120、3940)が1点ずつ出土した。(馬路)



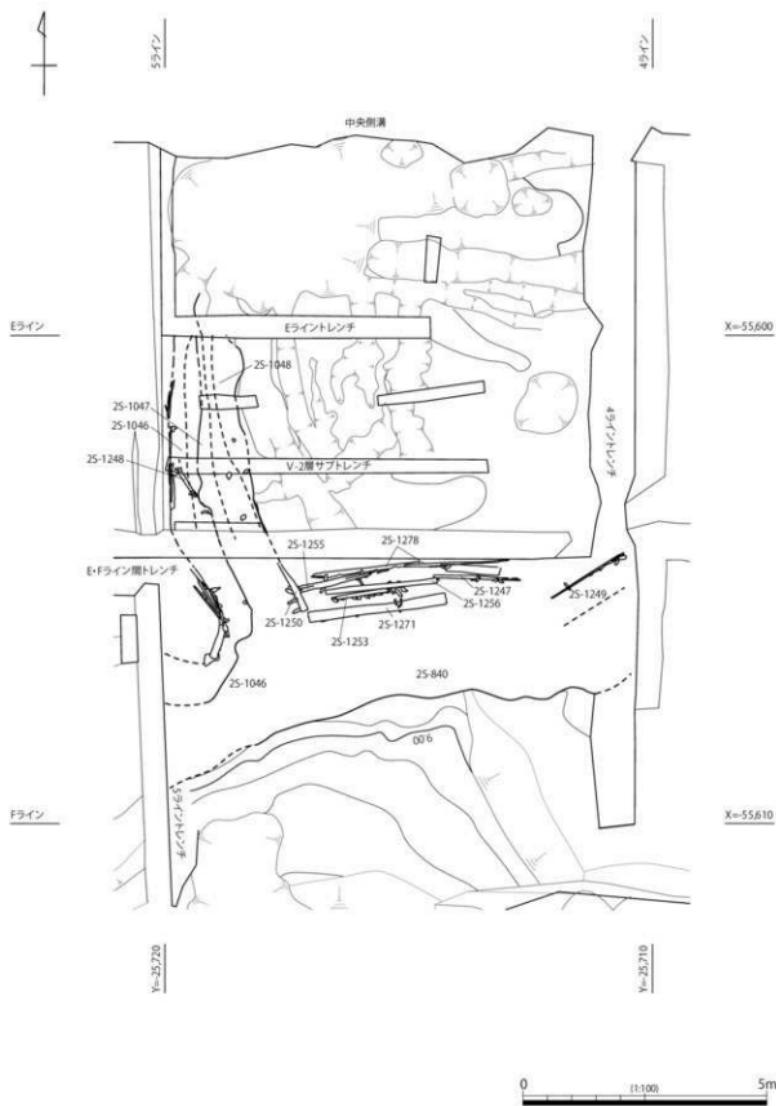
第IV-12-6図 2区 第11面 遺構配置図



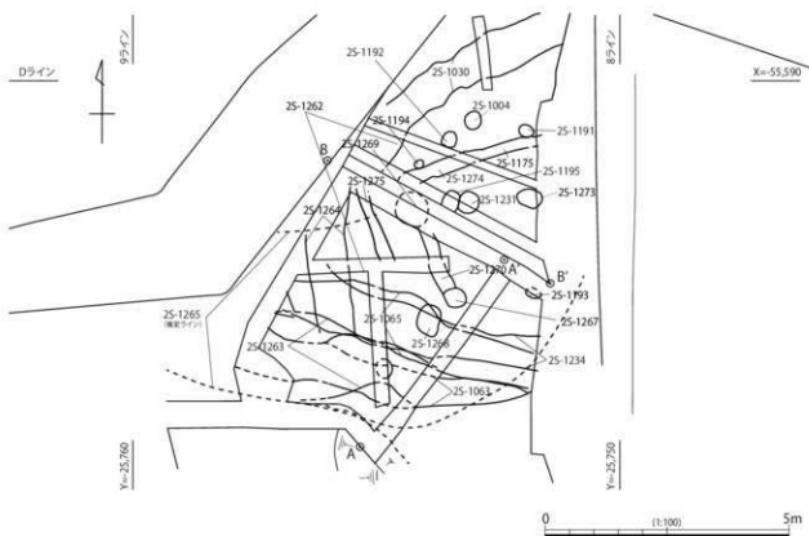
第IV-12-7図 2区 第11面 X層出土遺物5



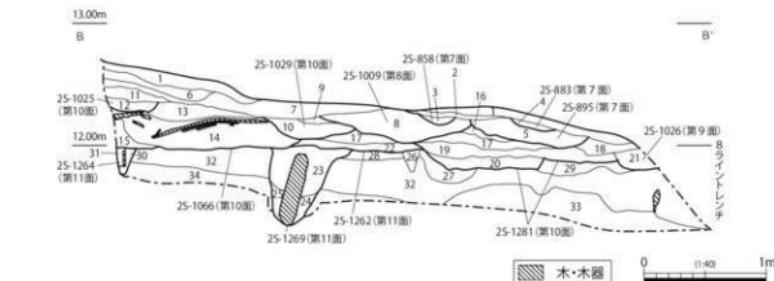
第IV-12-8図 2区 第11面 遺構配置図拡大図A



第IV-12-9図 2区 第11面 遺構配置図拡大図B

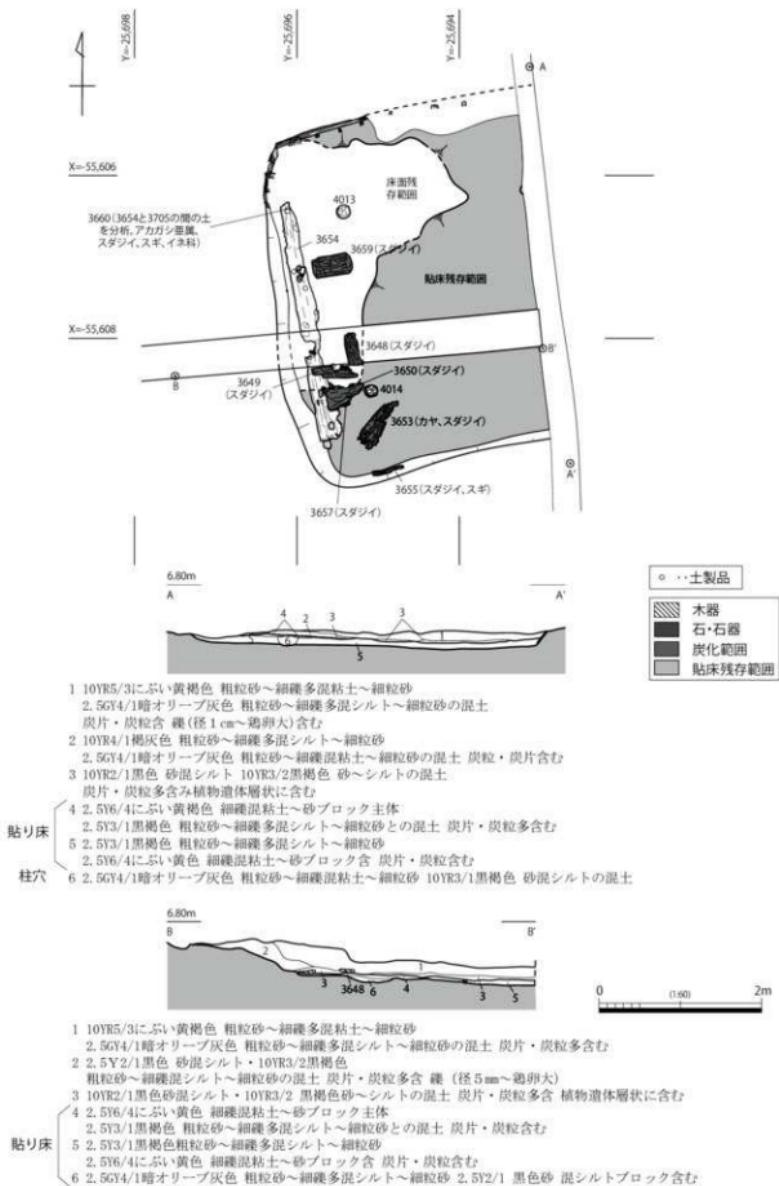


第IV-12-10図 2区 第11面 遺構配置図拡大図C及び土層断面図1

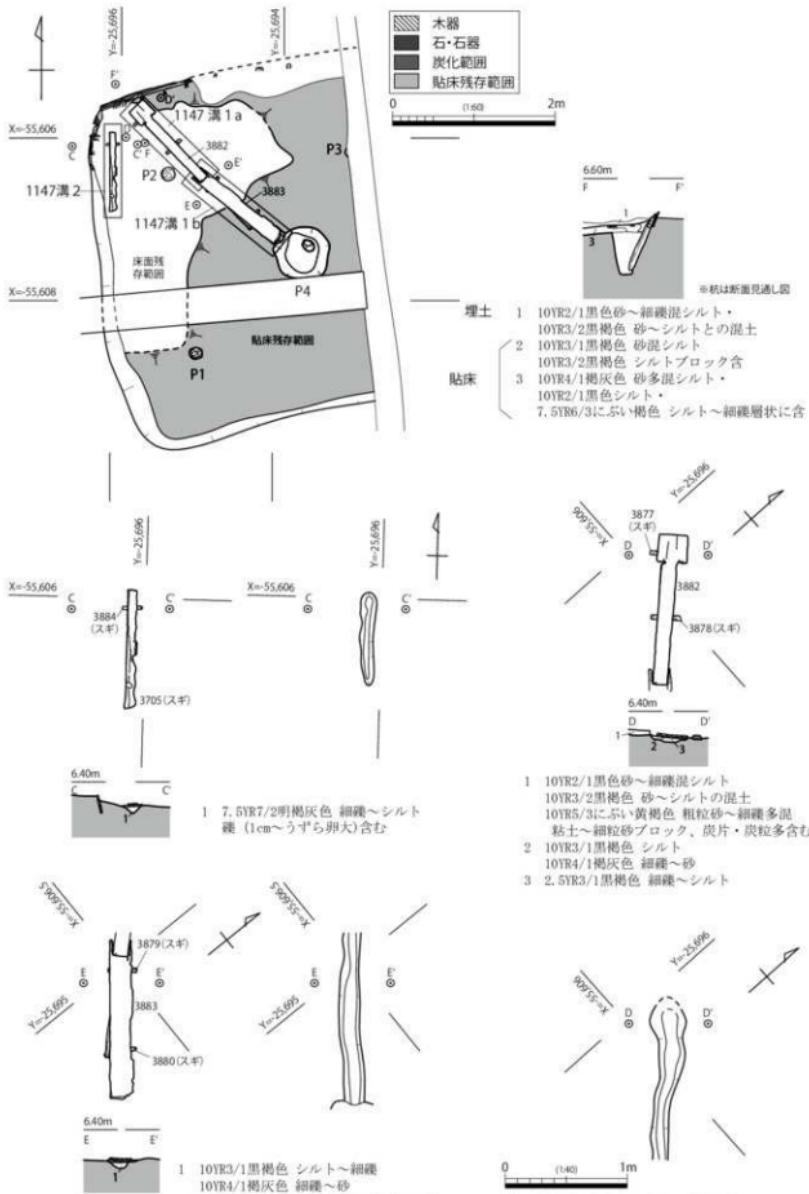


- | | |
|-----------|---|
| V-4層 | [1 10YR6/3にぶい黄褐色 炭混 浅黃褐色 シルトブロック混 極粗粒砂～粗粒砂混 細粒砂～シルト
2 10VR3/1黒褐色 炭混 シルト～粘土
3 10VR3/1黒褐色 炭混 粗粒砂混 細粒砂～シルト
4 10YR6/4にぶい黄褐色 極粗粒砂混 粗粒砂～中粒砂
5 10VR3/1黒褐色 炭混 粗粒砂混 細粒砂～シルト
6 10VR3/1黒褐色 炭混 にぶい黄褐色 中粒砂混 細粒砂～シルト
V-4層 |
| VII層 | [7 10VR3/2黒褐色 炭混 にぶい黄褐色 シルトブロック混 極粗粒砂混 細粒砂～シルト
8 10VR2/1黒色 炭混 細粒砂～シルト
25-1009 |
| 25-1029 | [9 10VR7/4にぶい黄褐色 黑褐色 シルト多量混 中粒砂～細粒砂 ラミナ状
10 10YR2/1黒色 炭混 にぶい黄褐色 シルト混 5～15cm角礫混 細粒砂～シルト 木材多数混 細粒砂～シルト
11 10YR5/1褐色 炭混 にぶい黄褐色 中粒砂～細粒砂混 細粒砂～シルト |
| 25-1025 | [12 10VR2/1黒色 炭混 細粒砂～シルト
13 10VR3/1黒褐色 炭混 にぶい黄褐色 中粒砂混 細粒砂～シルト
25-1066 |
| VII層 | [14 10YR2/1黒色 炭混 極粗粒砂～粗粒砂やや多く混 細粒砂～シルト
15 10YR4/1褐色 炭混 有機質混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
16 10YR5/2灰褐色 炭混 黑褐色 シルト混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
17 10YR5/2灰褐色 炭混 黑褐色 シルト混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
18 10YR4/1褐色 炭混 灰褐色 中粒砂～細粒砂混 粗粒砂混 細粒砂～シルト
19 10VR2/1黒色 炭混 中粒砂混 シルト
20 10YR3/1黒褐色 炭混 にぶい黄褐色 シルト混 細粒砂～シルト
25-1026 |
| VII層 | [21 10YR3/1黒褐色 炭混 シルト 木材含
22 10VR3/1黒褐色 炭混 細粒砂～シルト
25-1262 |
| 25-1269 | [23 10YR4/1褐色 炭混 にぶい黄褐色 粗粒砂～中粒砂混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
24 10YR3/1黒褐色 炭混 有機質混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
25 10YR3/1黒褐色 炭混 にぶい黄褐色シルト少量混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
26 10YR3/1黒褐色 炭混 シルト
27 10YR4/1褐色 炭混 にぶい黄褐色 中粒砂～中粒砂多量混 粗粒砂～中粒砂混 細粒砂～シルト
28 10YR7/4にぶい黄褐色 炭混 褐灰色シルト多量混 中粒砂～細粒砂
29 10YR5/2灰褐色 炭混 にぶい黄褐色 中粒砂～細粒砂混 中粒砂～細粒砂
30 10YR5/1褐色 灰褐色 粗粒砂～中粒砂多量混 中粒砂～細粒砂
31 10YR6/2灰褐色 粗粒砂～中粒砂多量混 中粒砂～細粒砂
32 10YR6/3にぶい黄褐色 炭混 褐灰色 細粒砂～シルト混 粗粒砂混 中粒砂～細粒砂
33 10YR6/3にぶい黄褐色 褐灰色 細粒砂～シルト混 粗粒砂混 中粒砂～細粒砂
34 10YR3/1黒褐色 炭混 細粒砂～シルト |
| 25-1262貼床 | |
| 25-1264 | |

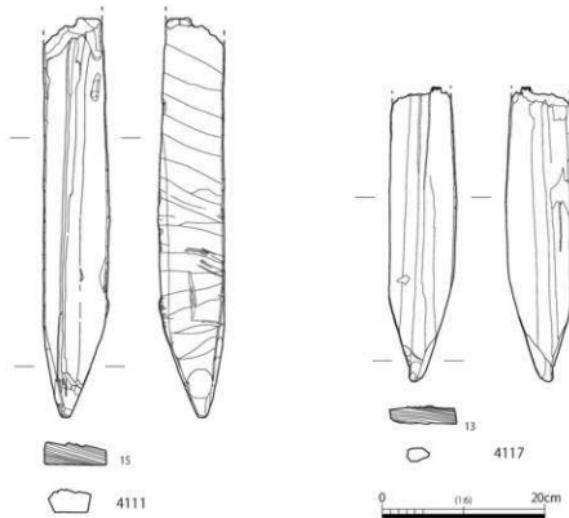
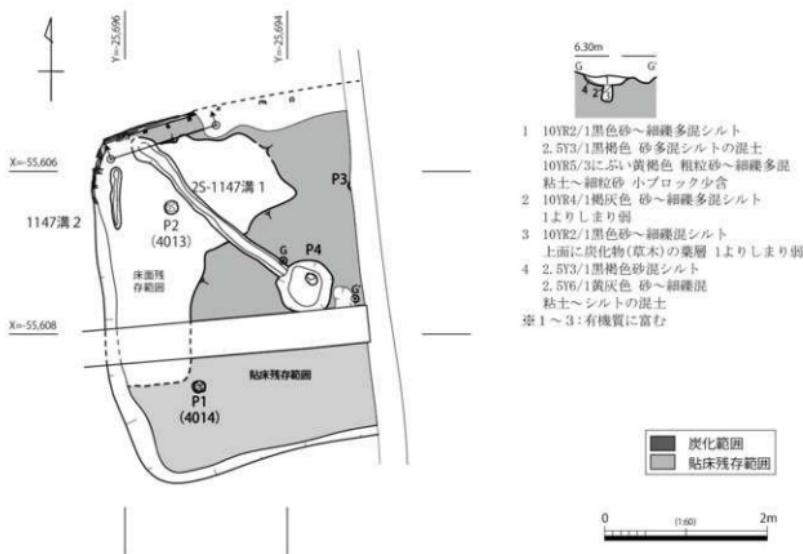
第IV-12-11図 2区 第11面 遺構配置図拡大図C 土層断面図2



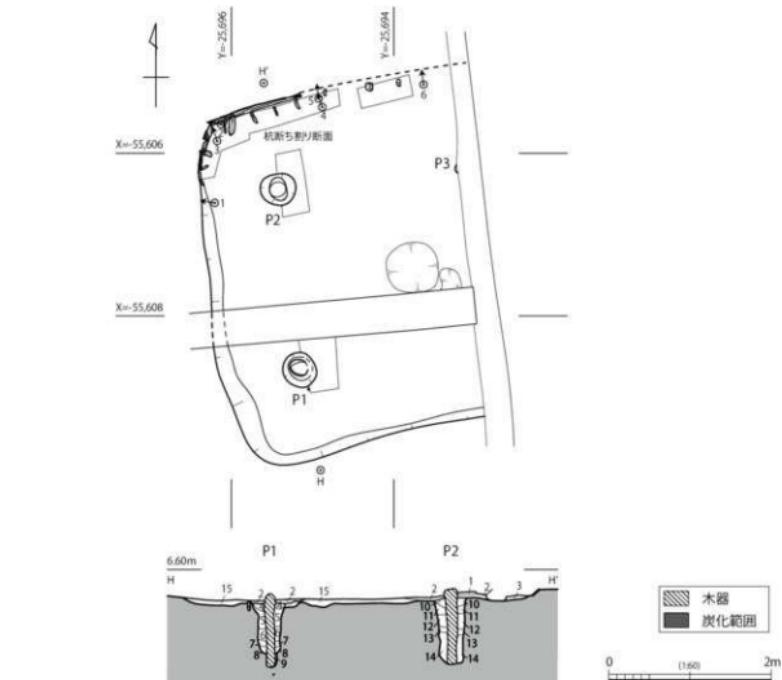
第IV-12-12図 2区 第11面 積穴住居(2S-1147) 遺物出土状況及び断面図



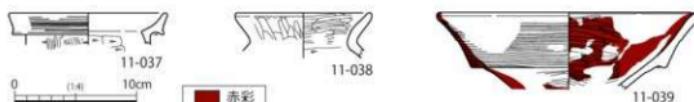
第IV-12-13図 2区 第11面 竪穴住居(2S-1147) 機能時床面 平・断面図



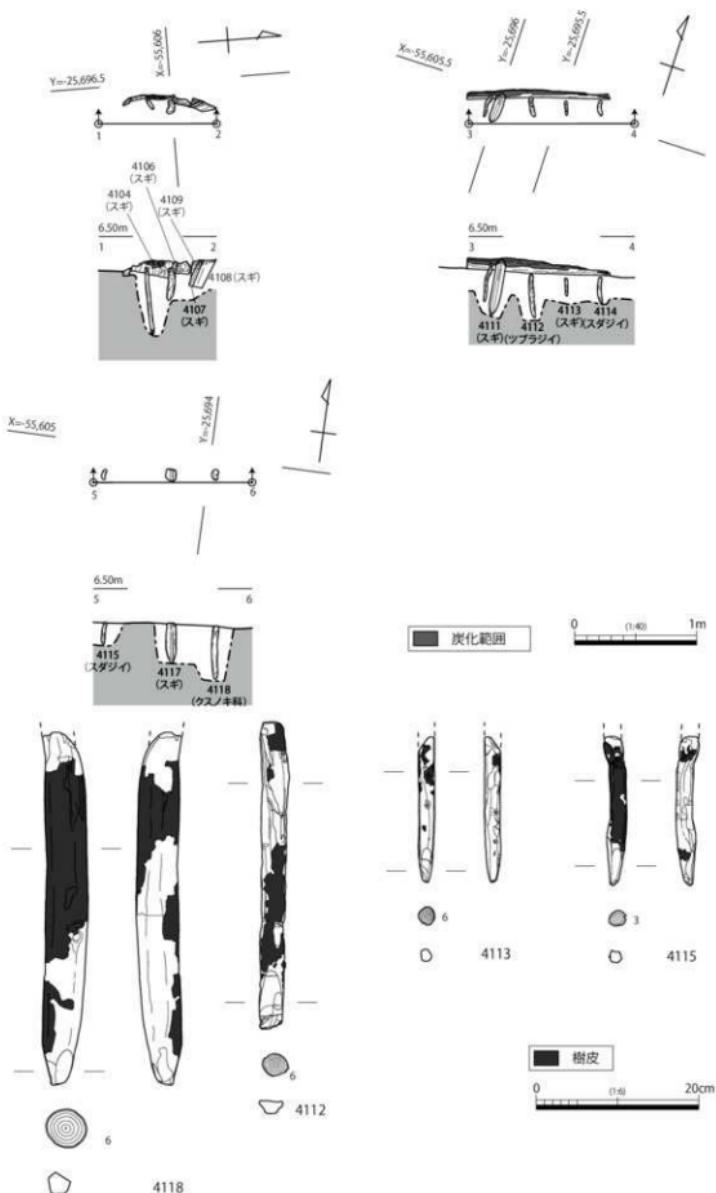
第IV-12-14図 2区 第11面 積穴住居(2S-1147) 構造物除去後床面 平面図及び出土遺物 1



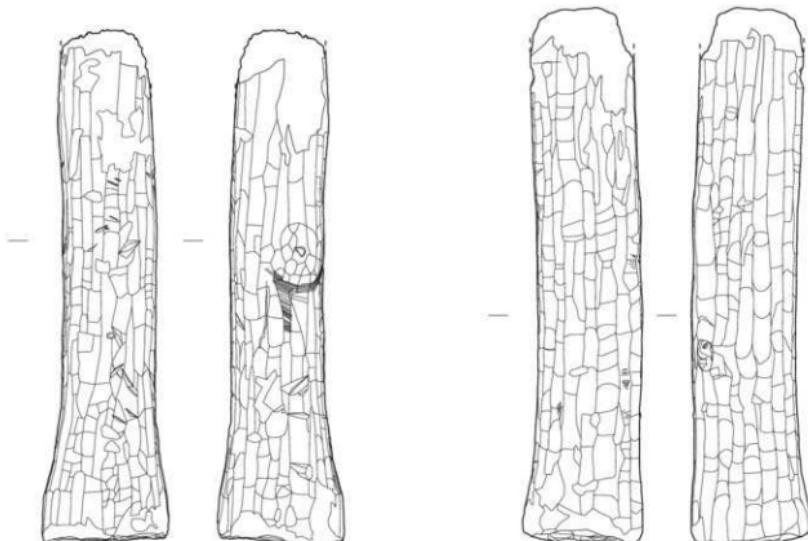
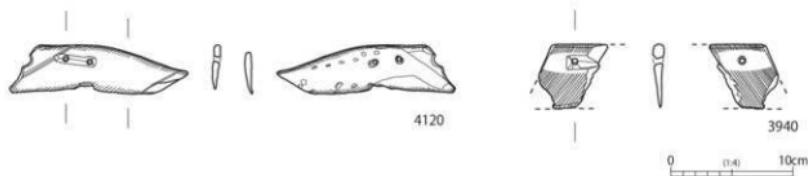
- 2S-1147埋土
1 10YR2/1黒色砂～細縫混シルト・10YR3/2 黒褐色 砂～シルトとの混土
10YR5/3にぶい黄褐色 粗粒砂～細縫 多混粘土～細粒砂ブロック
雜(径1cm～うずら卵大)、炭片・炭化多含む
- 2S-1147貼床
2 2.5Y6/4にぶい黄色 細縫混粘土～砂ブロック主体
2.5Y3/1黒褐色 粗粒砂～細縫多混シルトとの混土 炭片・炭化含む
3 10YR2/1黒褐色 砂混シルト 10YR3/1黒褐色 粗粒砂～細縫多混シルト～細縫砂の混土 炭化含む
4 10YR3/1黒褐色 砂混シルト 2.5G4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫砂粘土～細粒砂ブロック含む
5 2.5G4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫混粘土～細粒砂・10YR7/1灰白色 シルト～細縫の混土
10YR3/1黒褐色 砂混シルトブロック少含 雜(うずら卵～卵卵大)含む
- 2S-1147-P1
6 10YR7/1灰白色 シルト～細縫・2.5G4/1オリーブ灰色 砂～細縫の混土
7 10YR3/1黒褐色 シルト 2.5G4/1オリーブ灰色 砂～細縫ブロック含む
8 2.5G4/1オリーブ灰色 細縫混砂～シルト
9 2.5GY3/1暗オリーブ灰色 細縫混砂～シルト
10 2.5Y3/1黒褐色 砂混シルト・2.5GY4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫混シルト～細粒砂ブロック含む
11 2.5GY4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫混シルト～細粒砂・2.5Y3/1黒褐色 砂混シルトブロック含む
12 2.5GY4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫混シルト～細粒砂・2.5Y5/1オリーブ灰色 シルト～砂の混土
13 2.5GY5/1暗オリーブ灰色 シルト～砂
14 2.5GY5/1暗オリーブ灰色 シルト～砂・2.5GY4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫混シルト～細粒砂の混土
15 2.5GY4/1暗オリーブ灰色 粗粒砂～細縫多混シルト～細粒砂・2.5Y2/1黒色砂混シルトブロック含む
- 2S-1147-P2
- 2S-1147貼床



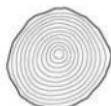
第IV-12-15図 2区 第11面 積穴住居(2S-1147) 掘方平面図、柱穴断面図及び出土遺物2



第IV-12-16図 2区 第11面 竪穴住居(2S-1147) 壁材平・立面図及び出土遺物3



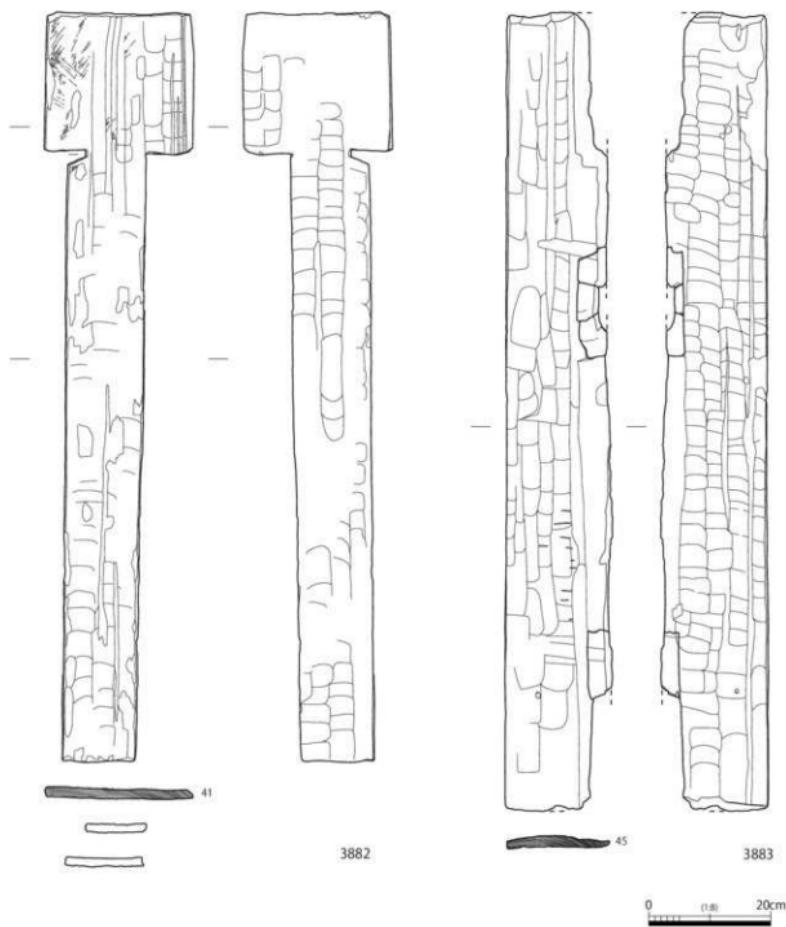
4014 (P 1)



4013 (P 2)



第IV-12-17図 2区 第11面 竪穴住居(2S-1147) 出土遺物4

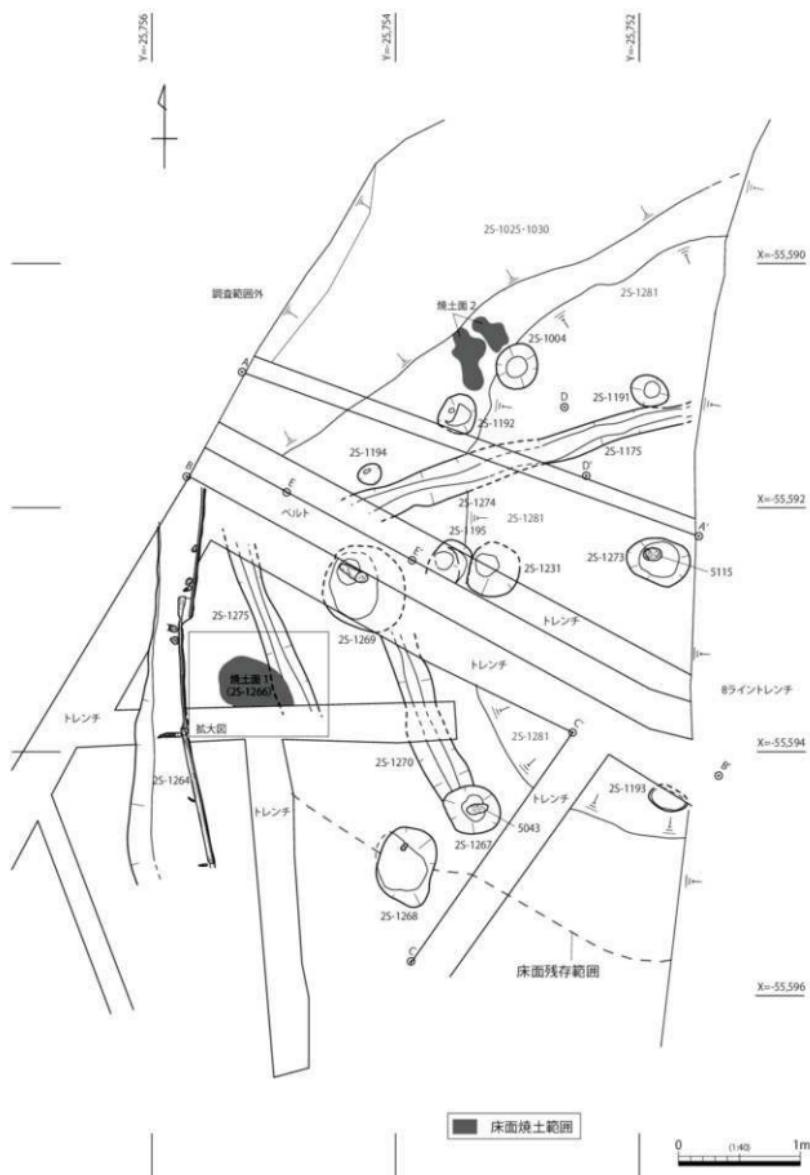


第IV-12-18図 2区 第11面 竪穴住居(2S-1147) 出土遺物5

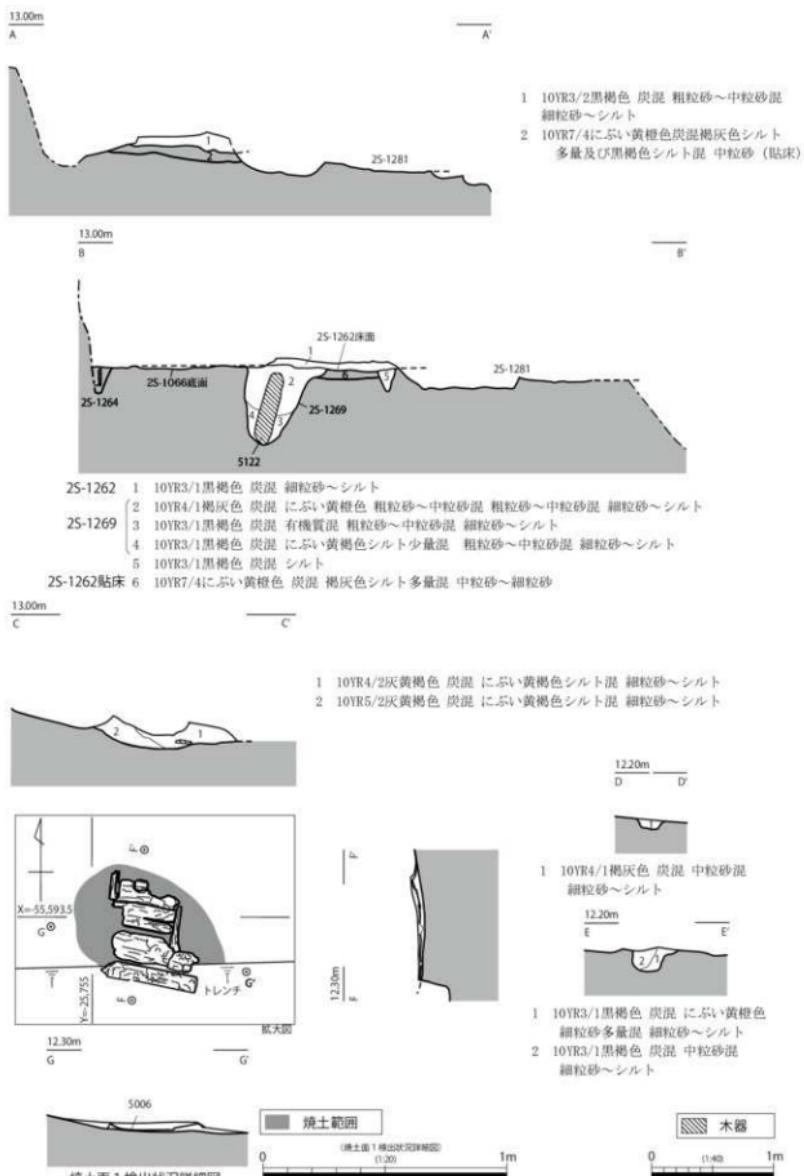
2 S-1262(第IV-12-10・11・19～23図)

D 8グリッドで検出した竪穴住居の可能性がある遺構である。層位的には第9面にあたるが、乙亥正V～VI期頃の土器が出土する状況を踏まえて、第11面の遺構とした。北側を2 S-1025、1030、東側を2 S-1281、南側を2 S-1029、1065などに切られており、埋土の一部と床面のみを部分的に検出したものである。南側では、断面C C'の2層下面が僅かに残存する壁面の立ち上がりと推定される。また西側は、溝2 S-1264の検出面が2 S-1262の床面と同レベル(第IV-12-11図)であることから、関連施設の可能性を考慮して2 S-1264も平面図に図示している(2 S-1262は第IV-12

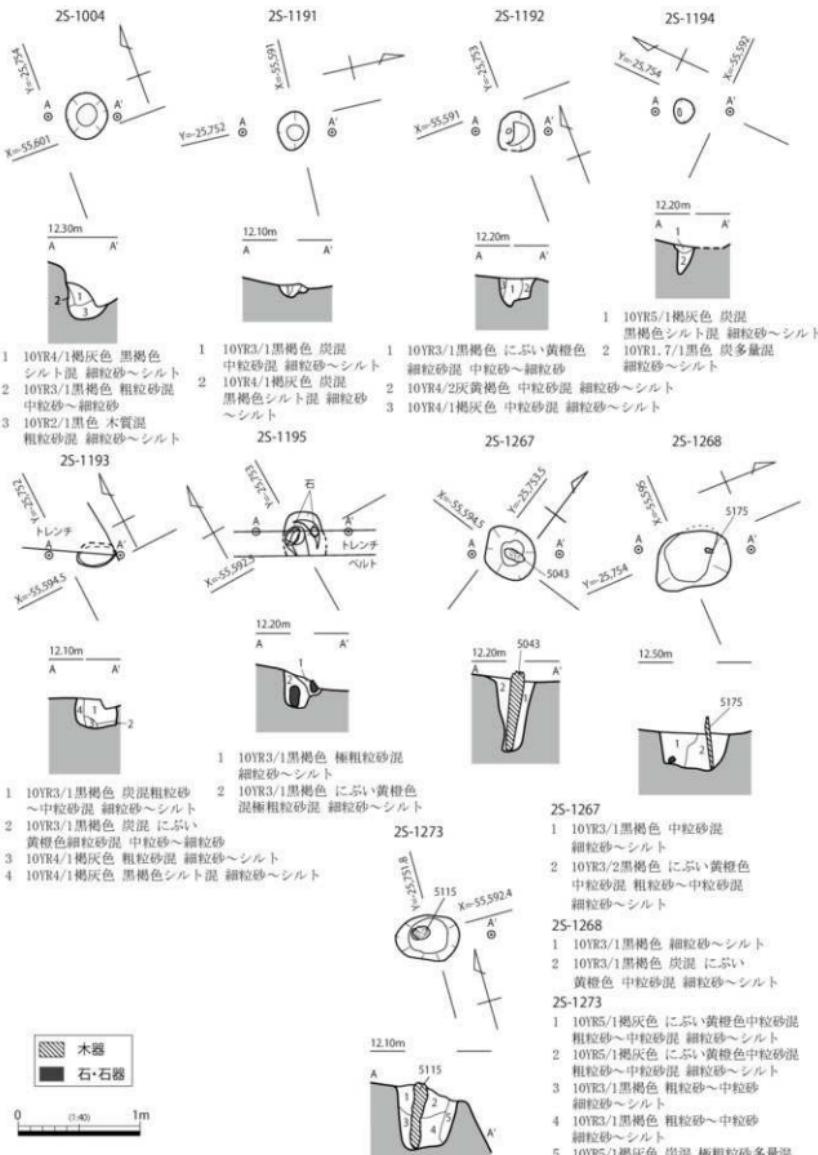
第12節 第11面(X層下面)の調査



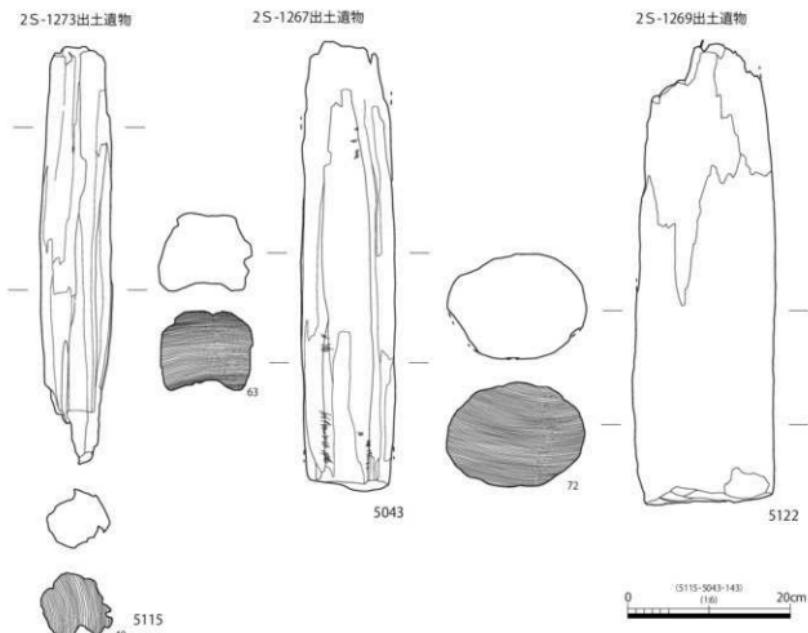
第IV-12-19図 2区 第11面 建物跡(2S-1262) 平面図



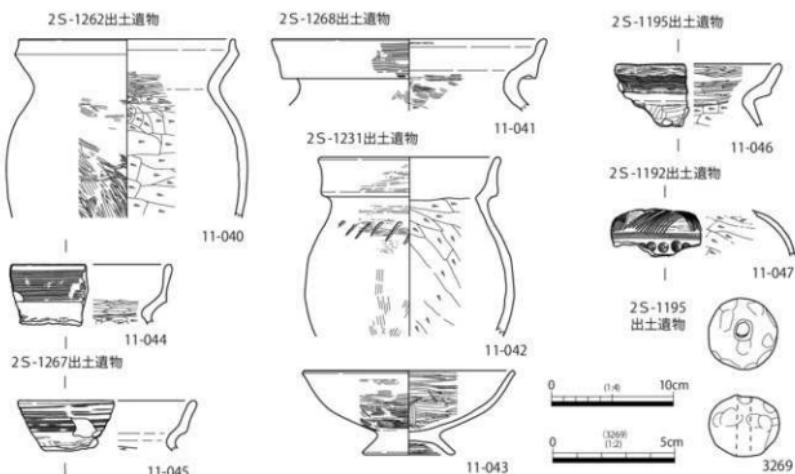
第N-12-20図 2区 第11面 建物跡(2S-1262) 断面図、床面焼土検出状況図



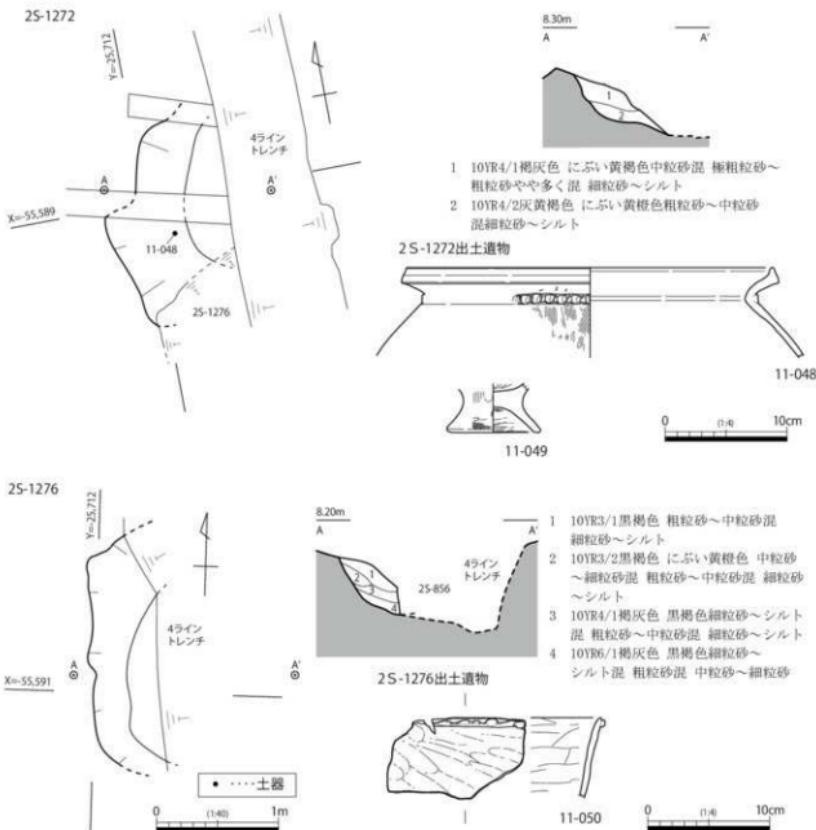
第IV-12-21図 2区 第11面 建物跡(2S-1262)関連柱穴等(2S-1004, 1191~1195, 1267, 1268, 1273) 平・断面図



第IV-12-22図 2区 第11面 柱穴(2S-1267、1269、1273) 出土遺物



第IV-12-23図 2区 第11面 建跡(2S-1262)、
関連土坑(2S-1231、1267、1268、1192、1195) 出土遺物



第IV-12-24図 2区 第11面 土坑(2S-1272、1276) 平・断面図及び出土遺物

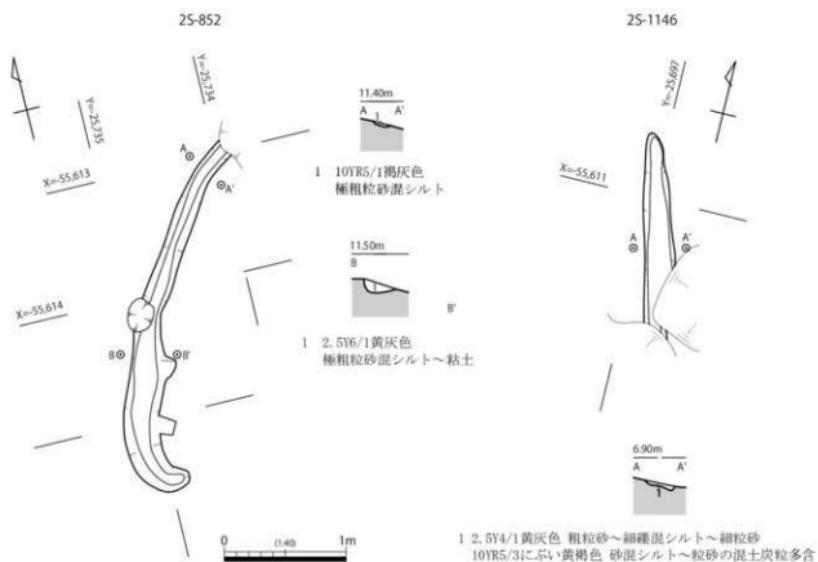
- 55 ~ 57図)。床面の標高は約11.9 ~ 12.0mと大きな差はないが、床面の範囲が南北約6m、東西約4mと広く、方形の溝や柱穴が床面に散在する状況から、複数の建物跡が重複していることも考えうる。

床面で検出した構造は、溝3(2S-1270、1175、1274、1275)、柱穴3(2S-1267、1268、1269)、土坑3(2S-1192、1194、1195)、焼土面2か所(焼土面1、2)である。他の柱穴・土坑2S-1004、1191、1193、1231、1273は2S-1281など他の構造で検出したものであるが、本構造に伴う可能性があるためここで掲載した。2S-1175は2S-1274と連続する。2S-1268は床面との位置関係からみて、別構造に伴うものかもしれない。

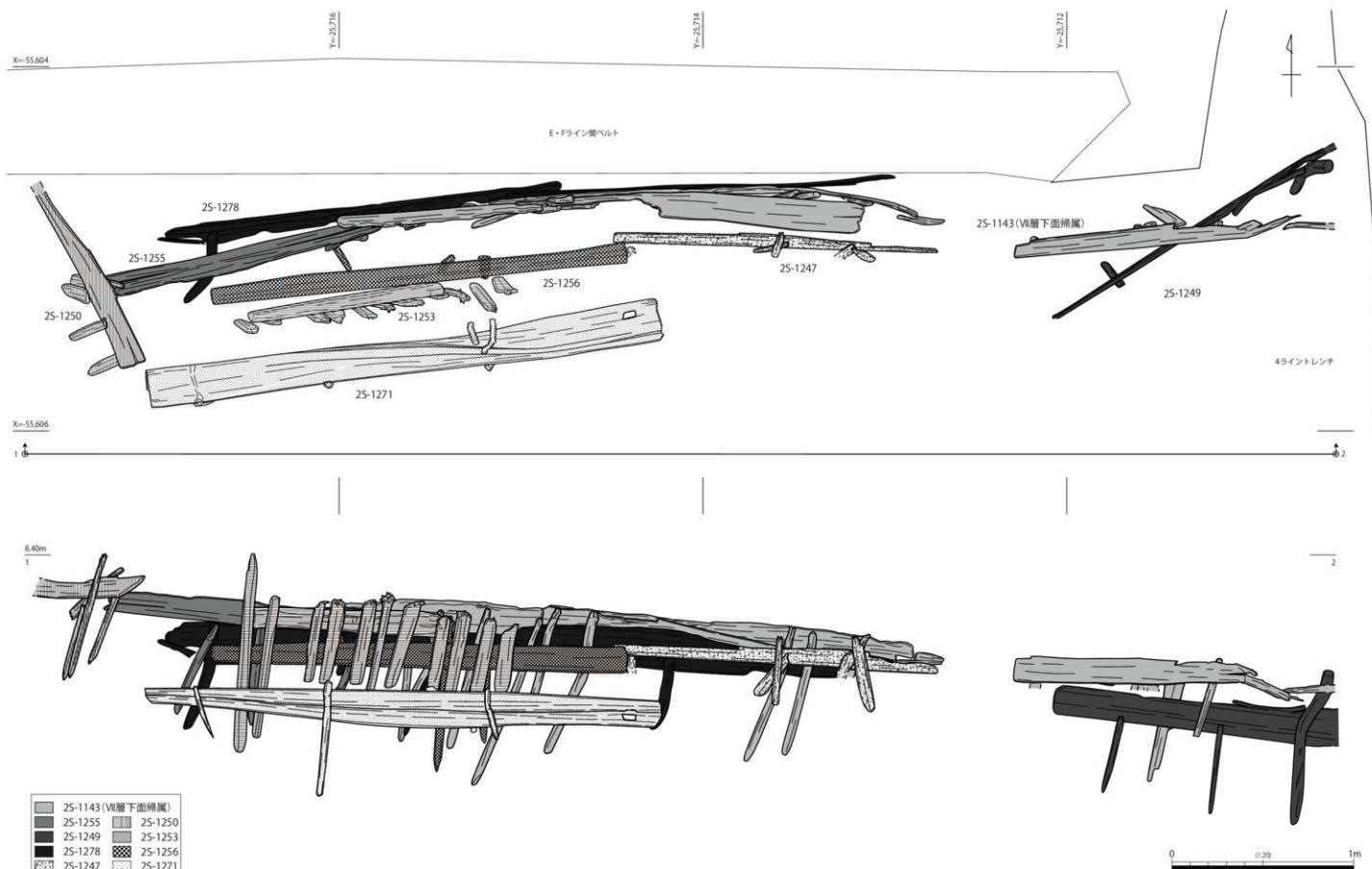
2S-1269、1273、1267、1268には柱が残存する。2S-1268の柱は直径3cm程度の細いもので大半が腐朽したか、あるいは柱ではなかった可能性もある。2S-1269は直径約14cm、2S-1273



第IV-12-25図 2区 第11面 土坑(2 S-1240、1242) 平・断面図



第IV-12-26図 2区 第11面 溝(2 S-852) 平・断面図



第IV-12-27図 2区 第11面 E4 グリッド検出矢板列合成図

は直径9.3cm、2S-1267は直径11.7cmが残存する。樹種はいずれも針葉樹と推定される。

焼土面1(調査時は2S-1266)は、長径67cm、短径45cmの範囲で検出し、直上には、北北東-南南西方向を主軸とする幅2~3cmの板の上に、これと直交方向をなし幅7~11cmの板4枚が置かれていた。いずれの板も炭化していた。焼土面付近は周囲の床面から1~2cm程度緩やかに窪む。焼土面の下部に土坑は確認できない。他の埋土や床面の状況からは建物全体が焼失したとは考えにくいため、部分的に火を使用した痕跡と理解している。

2S-1274、1175、1270はいずれも幅20~34cmの溝で深さは2S-1274で最大12cmである。2S-1175、1274と1270は2S-1267、1269に切られているが平面方形に巡る溝と考えられる。外側にはほぼ同規模の溝2S-1275がある。この溝の焼土面1付近の埋土は焼土化しており、焼土面1より古い溝である。

2S-1262埋土中から、甕(11-040、044)、柱穴状の各土坑から甕(11-041、042、045、046)、小型装飾壺(11-047)、低脚壺(11-043)が出土した。概ね乙亥正V~VI期の土器と推定される。(岡野)

土坑

2区では、竪穴住居に伴うものを除いて合計5基の土坑を検出した(第VI-1-1表)。その内2基は、竪穴住居(2S-1147)の約0.7m西側で検出したものだが、竪穴住居との関連は不明である。2S-1242(第IV-12-17図)が2S-1240(第IV-12-17図)を切る。2S-1240、1242からは土器は出土しなかった。2S-1240からは、木器が2点出土したが、器種は不明である。

2S-1272(第IV-12-24図)

C4グリッドに位置する土坑である。西側を2S-856溝に切られており、東側の一部のみを検出した。南北方向1.84m、東西方向0.61m、深さ0.49mの規模で検出した。埋土中から乙亥正I期頃の特徴を有する甕(11-048)や、脚部(11-049)が出土した。(岡野)

2S-1276(第IV-12-24図)

D4グリッド、2S-1272の南側に位置する。南北方向2.08cm、東西方向0.60m、深さ0.47mの規模で検出した。埋土中から、縄文晩期の深鉢(11-050)が出土した。(岡野)

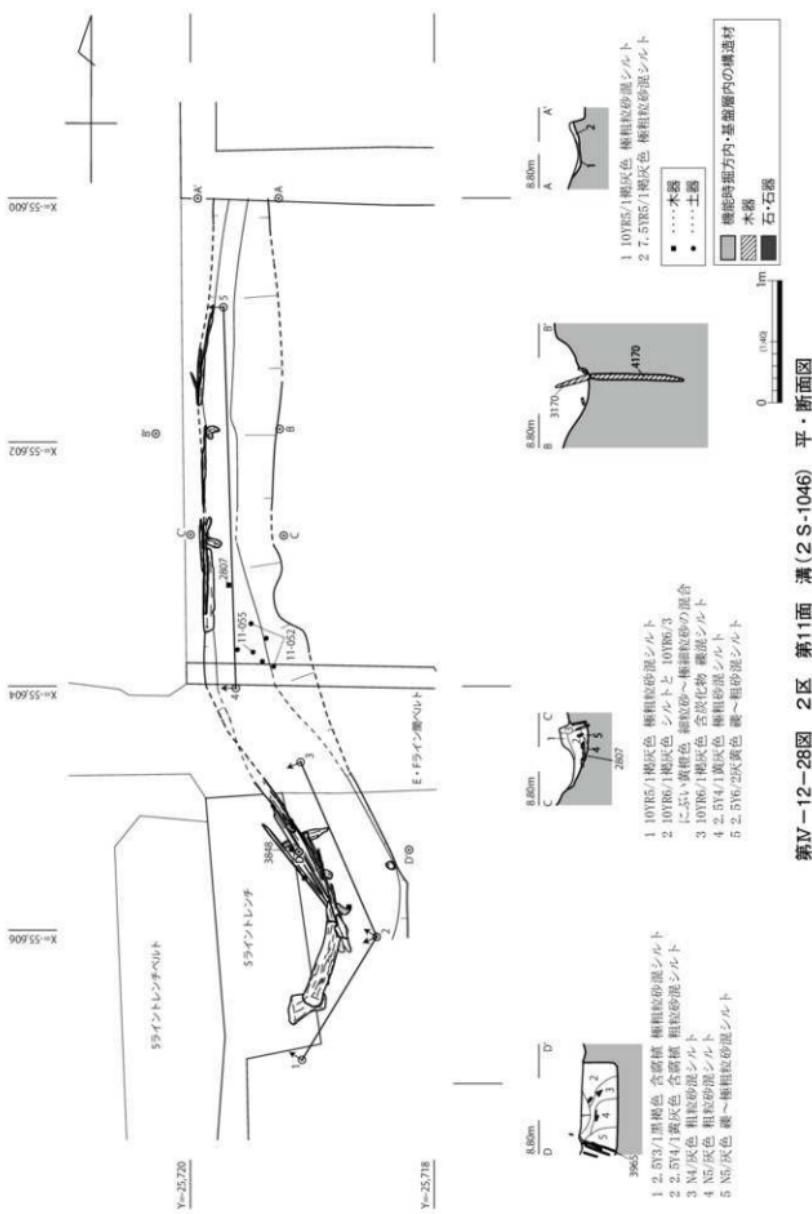
溝

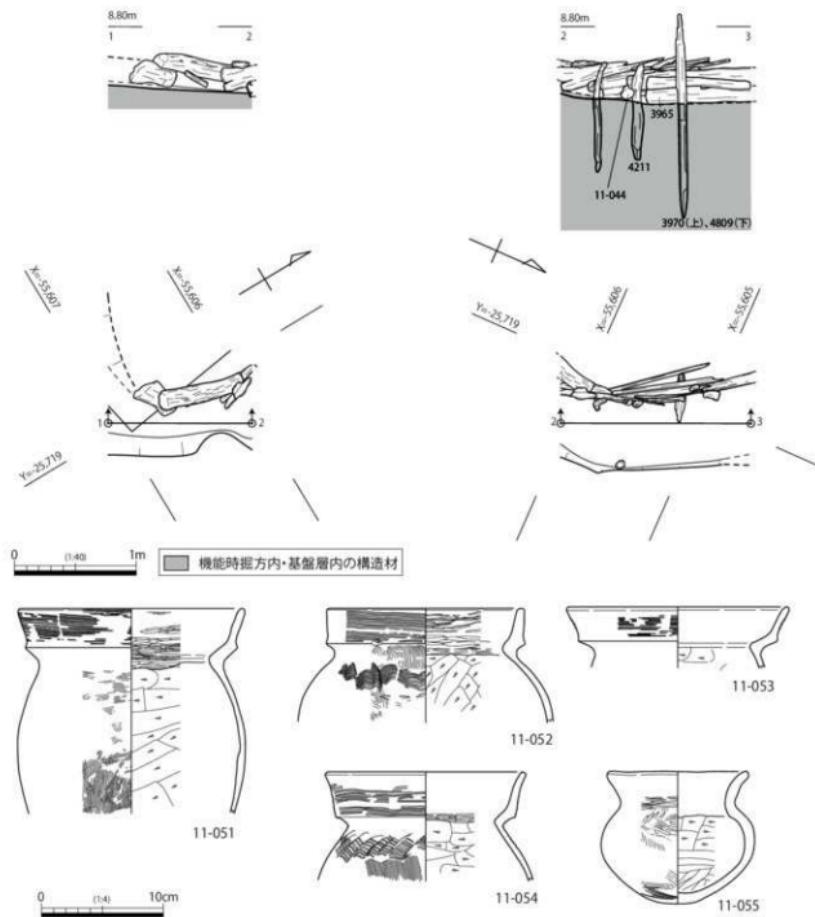
2S-852(第IV-12-26)

F6グリッドで検出した。2S-840の西側で谷地形に沿って北東から南西に伸びる溝で、南西程深く、幅も若干広くなる。南西端は南東方向に緩やかに屈曲して終わる。長さは約2.9m、AA'断面で幅約0.14m、深さ0.04m、BB'断面で幅約0.26m、深さ0.11mである。遺物は、乙亥正III~V期の土器片が出土した。(馬路)

2S-1146(第IV-12-26図)

F2グリッドで検出した短く、浅い溝である。南北約1.7mの長さで、南端は擾乱を受けて残存しない。幅は約0.25m、深さ0.08mである。遺物は出土しなかった。(馬路)

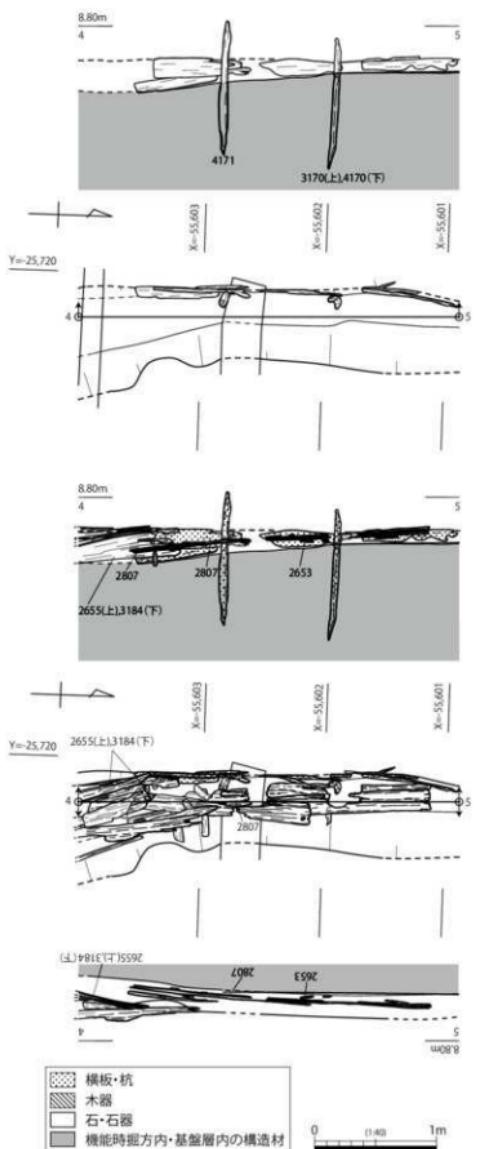




第IV-12-29図 2区 第11面 溝(2S-1046) 平・立面図1及び出土遺物1

E 4 グリッド検出溝および護岸群(第IV-12-27図)

E 4 グリッドで検出した溝および護岸をまとめて報告する。2S-840掘削途中で検出した護岸は、2S-840の完掘を優先したため、現地での遺構実測作業は行わず、部分的な座標値の記録に留め、ほかの遺構のオルソ画像やメモ写真などから作図したもので、細部は正確さを欠く可能性がある。これらの溝と護岸の新旧関係は各遺構の重複関係や横板底面の標高差によって推測したが、2S-1143は4ライントレングル断面から第9面に帰属し、既に報告したので説明は省略する。南北方向に掘削された溝と、東西方向に設置された護岸の2つに分けて報告する。(馬路)

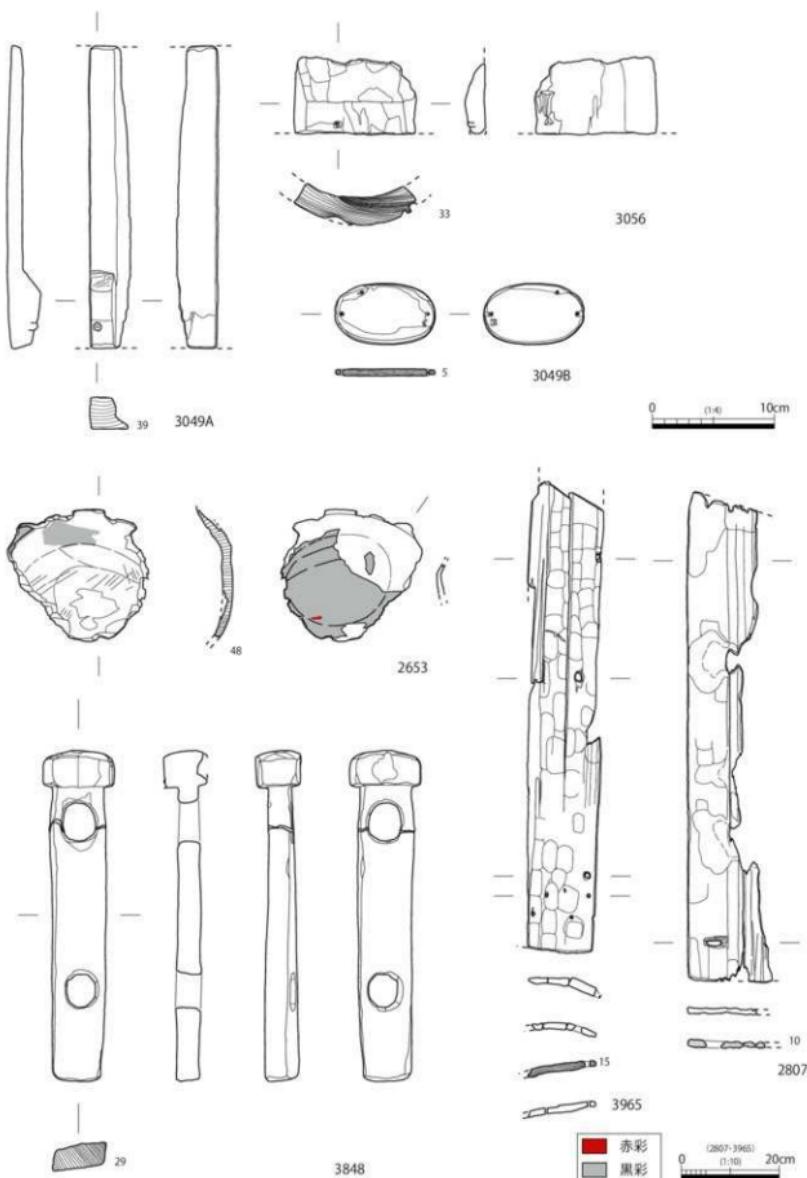


第IV-12-30図 2区 第11面 溝(2 S-1046)
平・立面図2及び遺物出土状況図

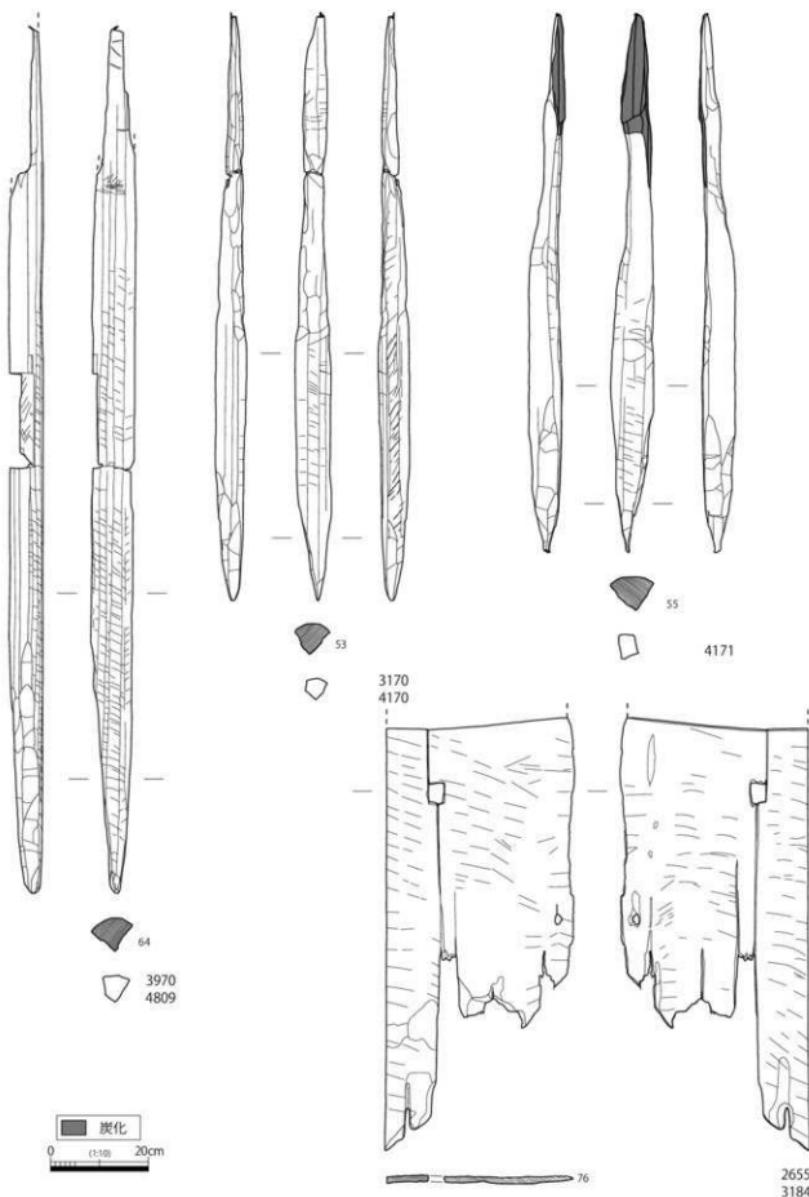
2 S-1046、1047、1048・
1250、1248(第IV-12-
28~37図)

2 S-1046(第IV-12-28~
32図)は、E 4 グリッドで5
ライントレンチに沿って検出
した溝で、2 S-1047、1048・
1250と重複する。断面観察
から、2 S-1048・1250、
1047、1046の順に少しずつ西
側に溝の位置をずらしながら
連続して掘削されたと考えられ
る。本遺構が一番新しい。2
S-840の上層掘削後に検出さ
れたものである。溝の西岸のみ
護岸が残存する。東岸には杭
の痕跡がないので、元々設置
していなかったと考えられる。
検出した延長は、約6.4
m、幅は0.5~0.7mで、北端
に向けて若干狭くなる。深さ
は、南側が約0.3m、北側が
約0.17mで南側の方が深い。
埋土は砂混じりのシルト層
で、南側では埋土上層から側
方に腐植を多く含む層が堆積
しており、全体的に流れは停
滞していたと考えられる。

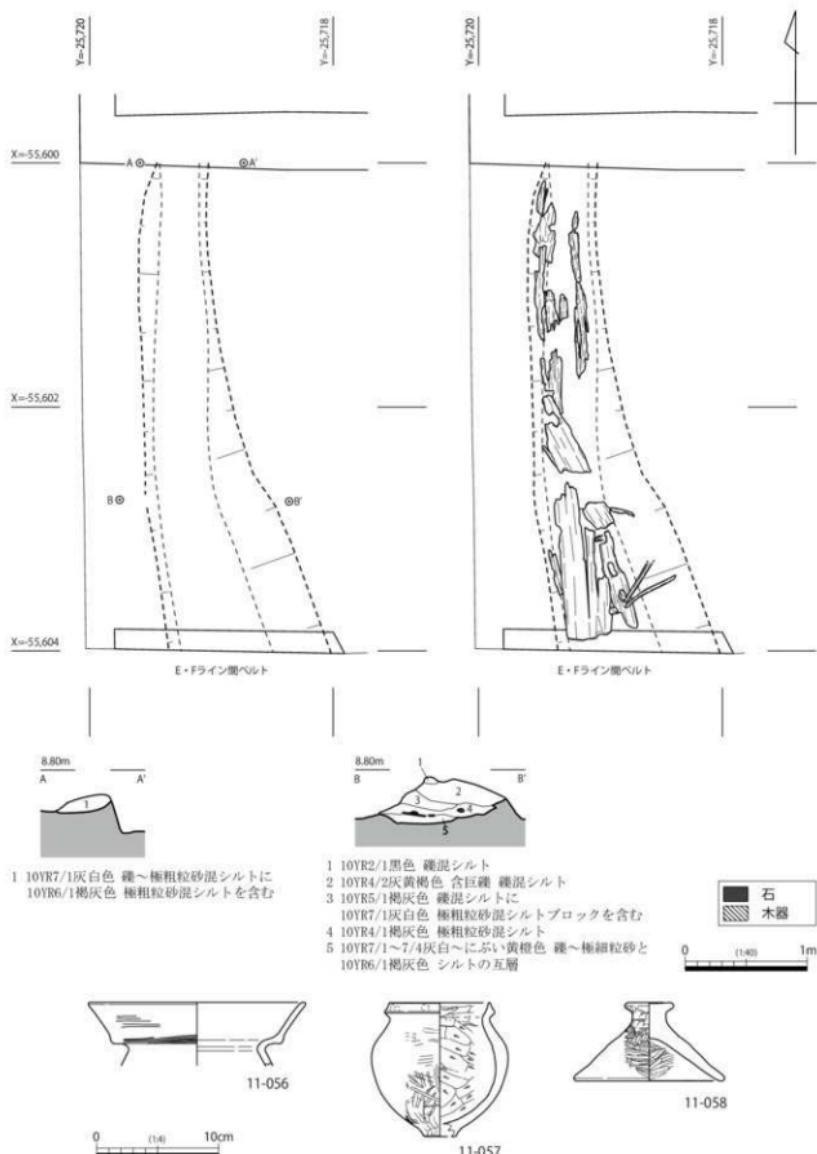
西岸の護岸(2・3間)は、
板材を前後及び上下に重ねて
設置し、約0.35m間隔で杭を
3本打設している。杭の長さ
にはかなり差があり、2・3
間の北端の杭は特に長い。1
・2間は2・3間の護岸に連続
して検出したものだが、杭の
打設ではなく、丸太材が底面か



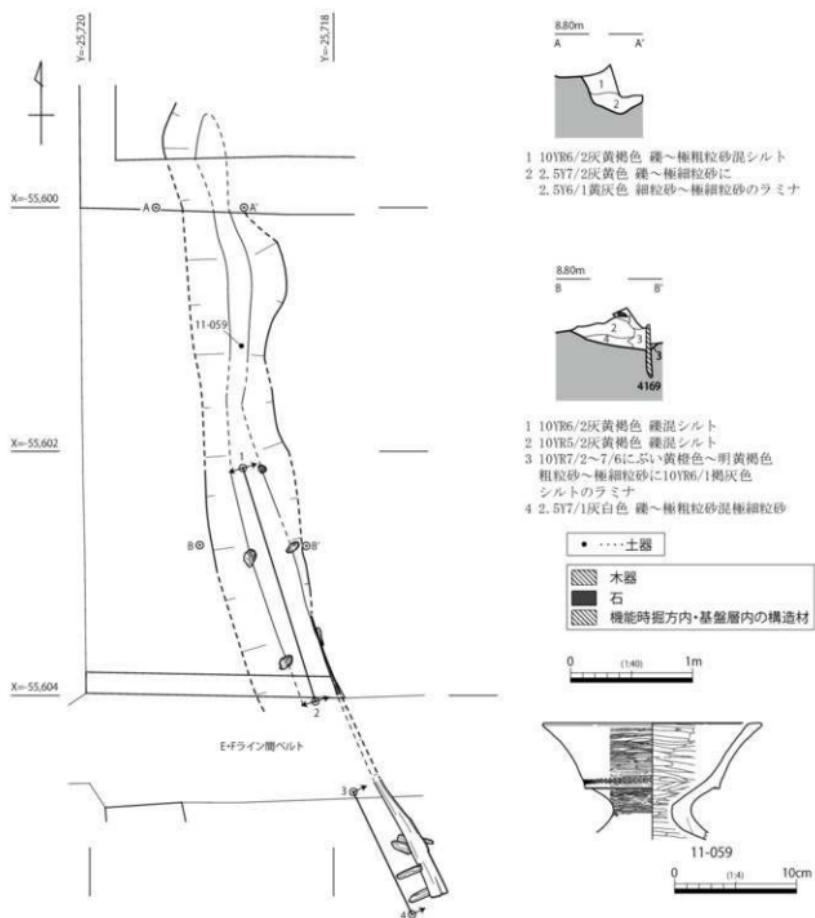
第IV-12-31図 2区 第11面 溝(2 S-1046) 出土遺物2



第IV-12-32図 2区 第11面 溝(2 S-1046) 出土遺物3



第IV-12-33図 2区 第11面 溝(2 S-1047) 平・断面図及び出土遺物

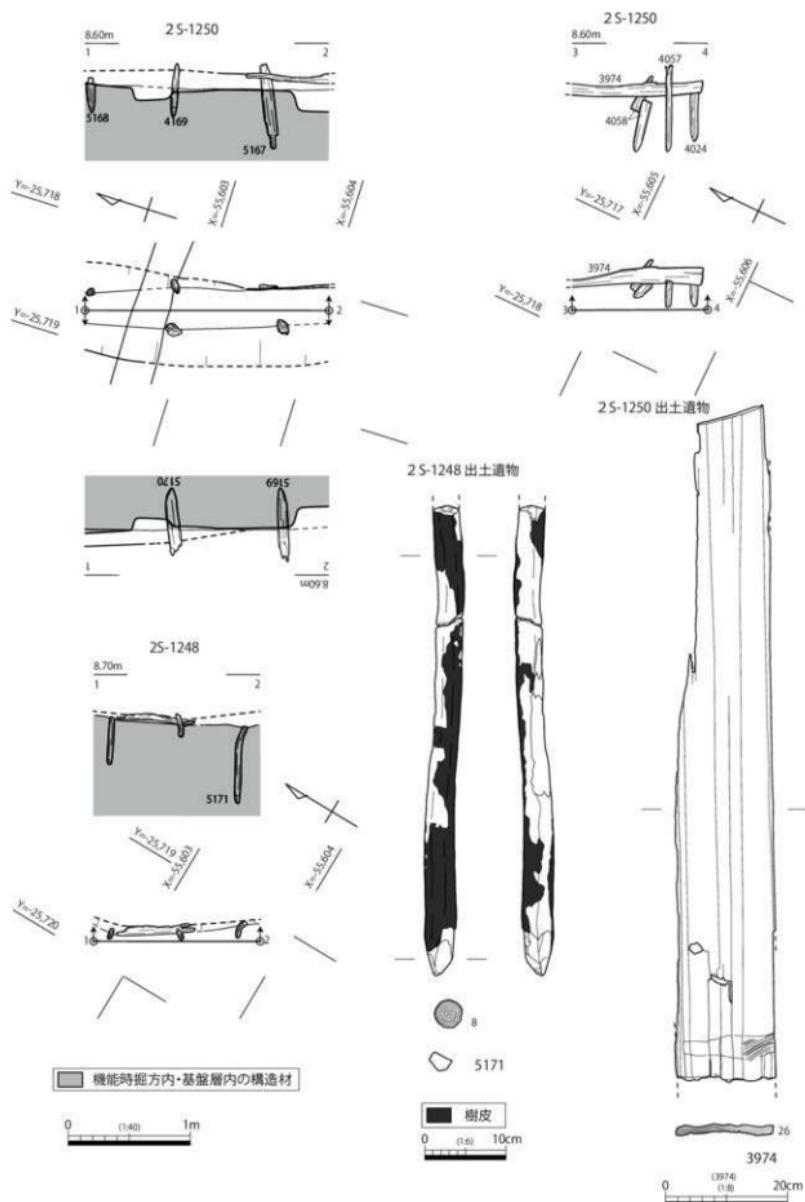


第IV-12-34図 2区 第11面 溝(2S-1048・1250) 平・断面図及び出土遺物

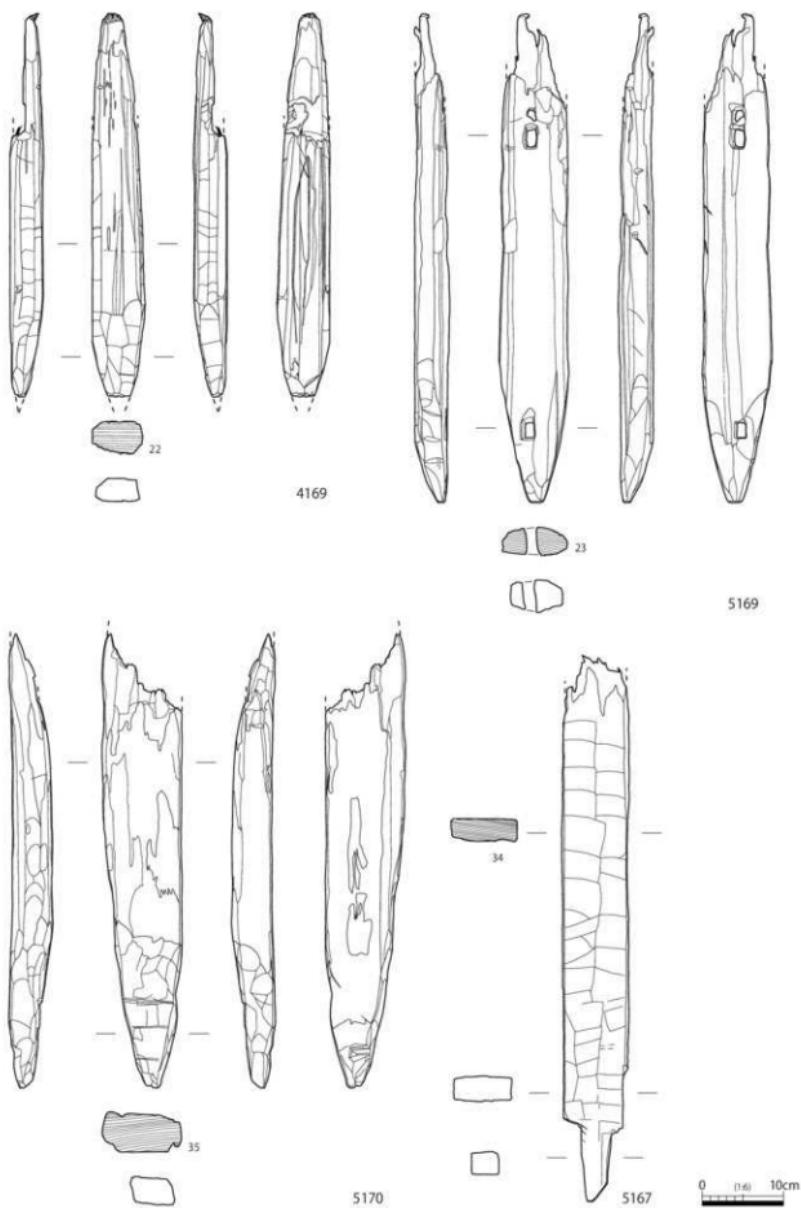
ら浮いた状態で出土しており、護岸ではなく2S-840埋土中の遺物だった可能性も考えられる。トレンチ北側の護岸(4-5間)は板材を設置し、杭2本を打設して留めている。

出土遺物は特に北側に集中しており、多くの板材が重なって出土した。そのほか、2S-1047の埋土を掘削してしまった部分もあり、どちらの遺構に帰属するかはっきりしないが、乙亥正V～VI期の甕と壺(11-051～055)が出土した。

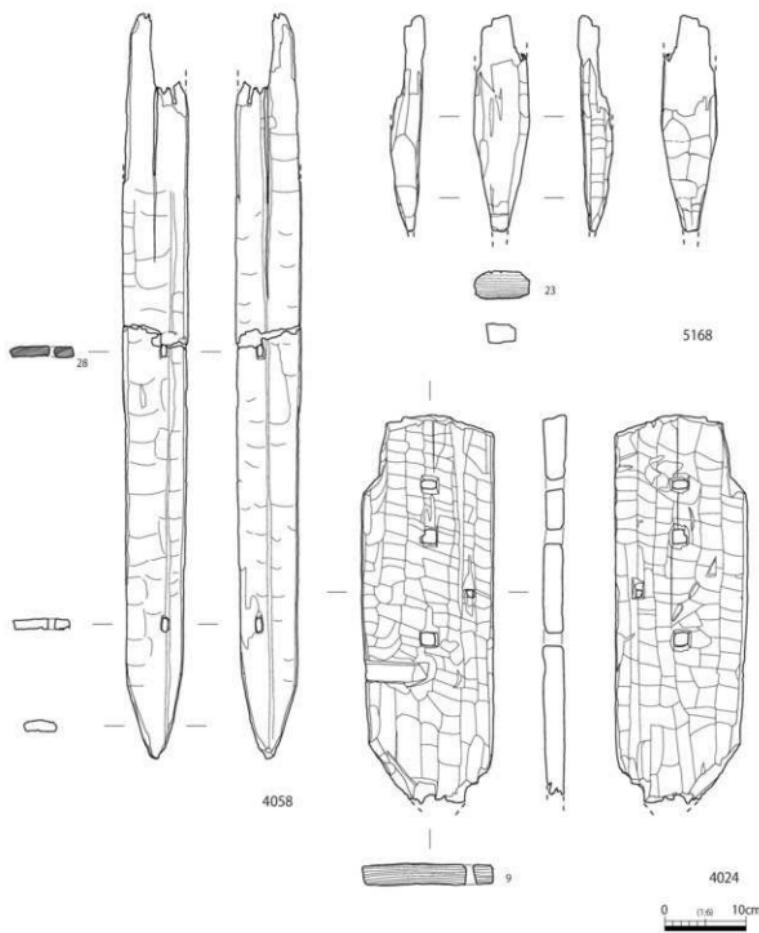
木器は3049Aと3056の桶が出土した。いずれも底板を受けるための目釘が残存する。2653は蓋と考えられる。大部分を欠損し、表面も剥落が著しい。アーチ状に中央部が盛り上がる形態のものである。内外面共に黒彩し、外面の一部には赤彩の痕跡がある。3848は栓で軸部に円孔を穿つタイプである。



第IV-12-35図 2区 第11面 溝(2S-1048・1250、1248) 平・立面図及び出土遺物



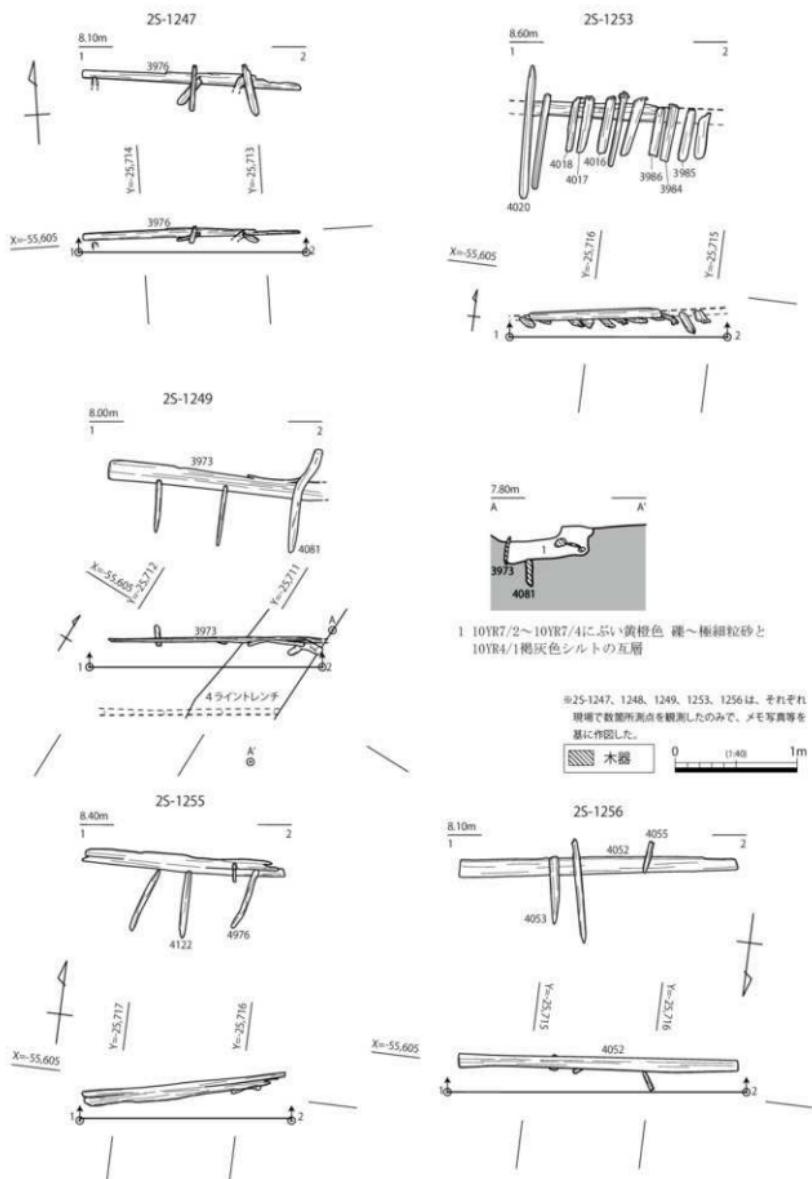
第IV-12-36図 2区 第11面 溝(2S-1250) 出土遺物 1



第IV-12-37図 2区 第11面 溝(2S-1250) 出土遺物2

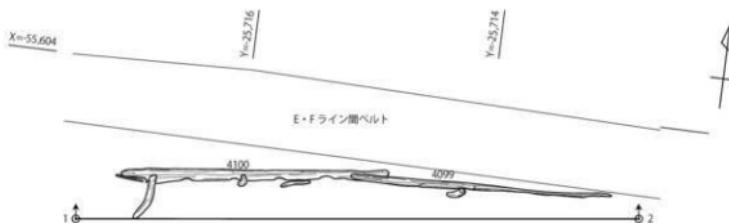
青谷上寺地遺跡の分類ではA類に該当する。2807、3965、3184は建築部材である。板材に穿孔がある。3184は表裏両面ともに平行切削による調整がされている。上端部は土層観察用ベルトに統一していたため、切断して取り上げたことによる欠損である。4170、4171、4809は杭である。横断面三角形で、分剖面以外は杭に転用される前の平行切削の痕跡が密に並ぶ。

2S-1047(第IV-12-33図)は、西側半分を2S-1046に切られる。断面では確認していたが、平面の検出が十分でなかったため、遺構の輪郭は推定である。埋土は、最下層に砂層が堆積するが、それ以外はシルト層である。埋土中からは、板材がまとまって出土した。2S-1047に伴う土器は、壺(11-056)、壺(11-057)、蓋(11-058)がある。乙亥正VI期と考えられる。

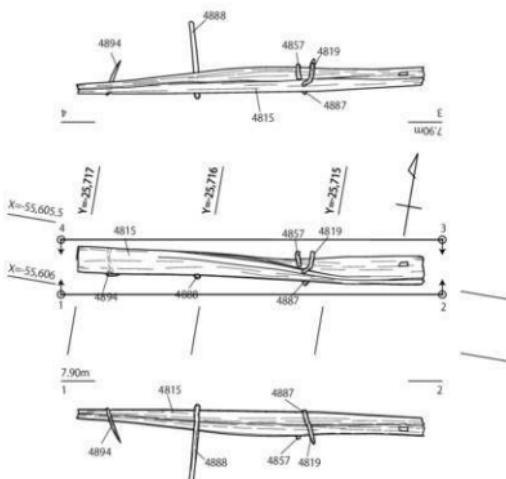


第IV-12-38図 2区 第11面 溝(2 S-1247、1249、1253、1255、1256) 平・立・断面図

25-1278



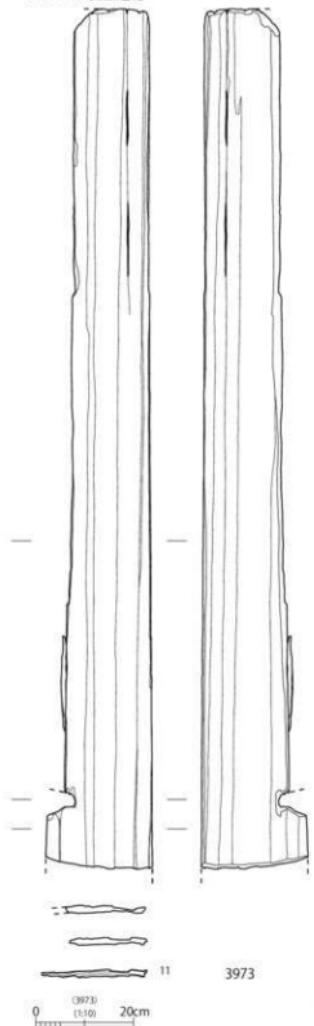
25-1271



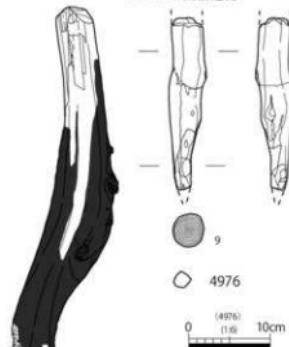
※25-1278、1271は、それぞれ現場で数箇所測点を観測したのみで、メモ写真等を基に作図した。

第IV-12-39図 2区 第11面 溝(2 S-1278、1271) 平・立面図

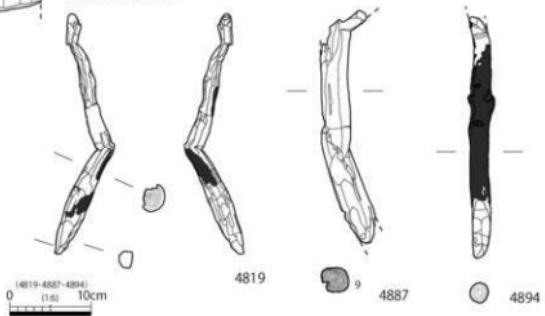
2S-1249 出土遺物



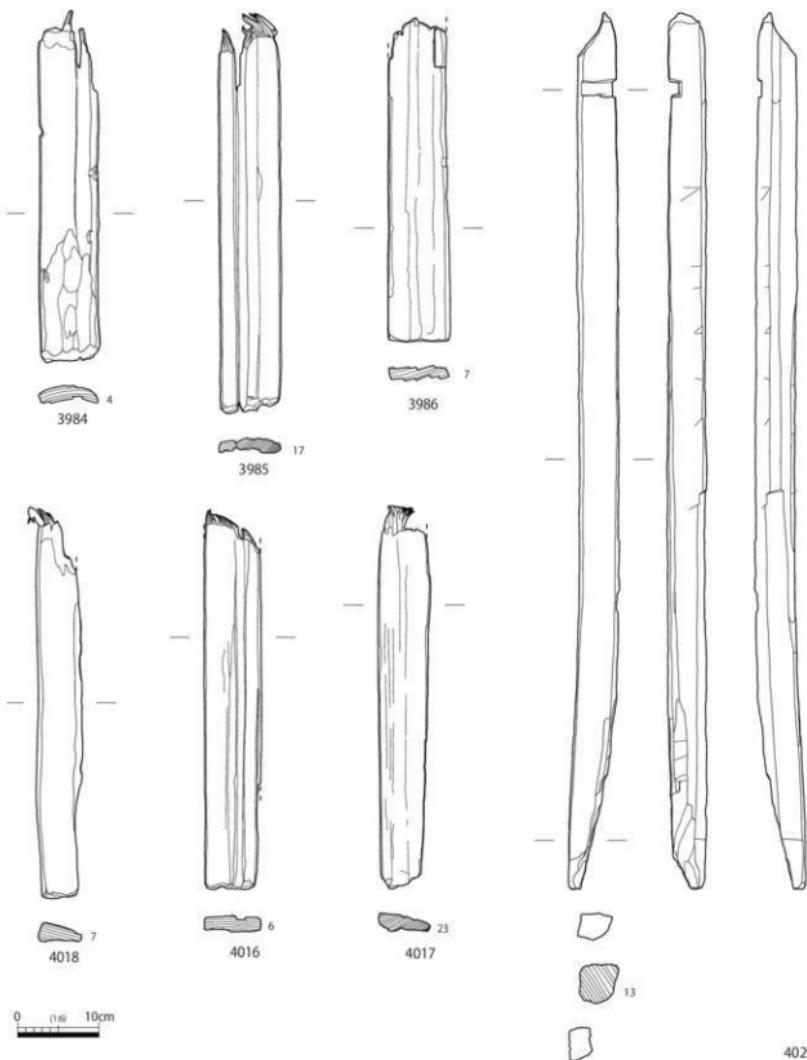
2S-1255 出土遺物



2S-1271 出土遺物



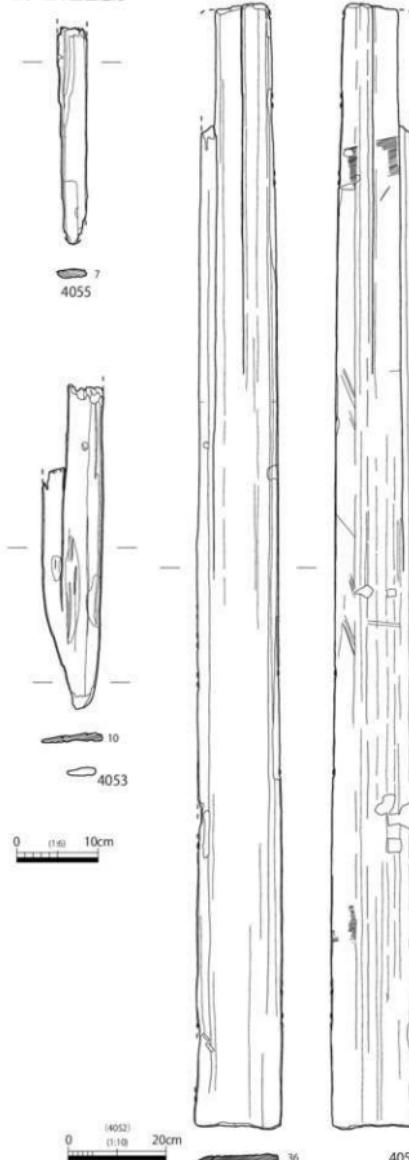
第IV-12-40図 2区 第11面 溝(2S-1247、1249、1255、1271) 出土遺物



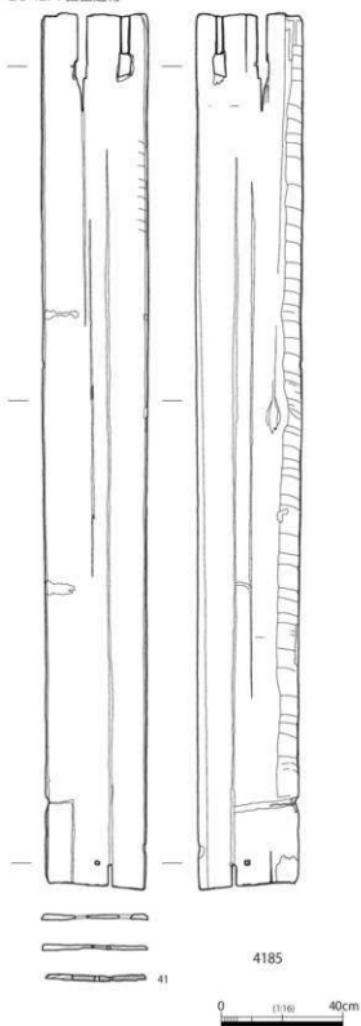
第IV-12-41図 2区 第11面 溝(2S-1253) 出土遺物

2S-1048・1250(第IV-12-34図)は、E・Fライン間トレンチを挟んで南北に掘削された護岸である。検出延長は、約7.0m、幅は0.5～0.7mである。南側半分には東西両岸に護岸があったと考えられるが、西岸には杭が2本残存するだけだった。東岸は杭と板材による護岸があり、横板の前と後ろに杭が打設されている。埋土は下半分が砂層、上半部がシルト層で、流れのある状態から徐々に停

2S-1256 出土遺物



2S-1271 出土遺物



第IV-12-42図 2区 第11面 溝(2S-1256、1271) 出土遺物

滞していったと考えられる。埋土中からは、乙亥正Ⅵ期の器台(11-059)が出土した。

これらの3条の溝は、B B' 断面付近の底面の標高が一番高く、その両側に向けて標高が低くなる。2 S-1046は南北両端の底面の標高は南側が低いので、北から南に流れたと考えられる。2 S-1048は南北両端の標高差はあまりないことから、どちらに流れるかは一概には決めがたいが、2 S-1046同様に南向きに流そうとしていたと考えられる。

2 S-1248(第IV-12-35図)は、2 S-1046、1047の底面で検出した護岸である。上述の3条とは若干方向が異なり、北西から南東方向に流れる溝の護岸と考えられる。検出できたのは東岸のみで、トレンチやはかの遺構による搅乱で西岸は検出できなかった。杭3本と横板のみで横板は腐食により長さ0.6m程度しか残存しなかった。2 S-1248と1250から出土した護岸材を図化した。2 S-1248の杭は芯持ち丸太材で樹皮が残存する。2 S-1250の杭は横断面方形の分割材である。転用前の方孔を留めるものの(5169、4058)もある。3974は建築部材、4024の板材は表裏面に切削痕が明瞭に残り、4カ所に方孔を穿っている。(馬路)

2 S-1255、1253、1247、1278、1256、1249、1271(第IV-12-38~42図)

これらの横板と杭は、2 S-840掘削途中に検出したもので、谷の中心からやや北よりに東西方向に設置されていた。横板の底面の標高から、2 S-1255、1253、1247、1278、1256、1249、1271の順に古くなると考えられる。いずれの護岸も、2 S-1256と2 S-1271以外は横板の南側に杭を打設していた。2 S-1256は、横板の北側に杭を設置するもので、設置場所が谷の中心よりも北側にあることから、本来は、対になる護岸があったと考えられる。2 S-1278は、横板底面のレベルがかなり近いことから、2 S-1256とセットで溝を形成した護岸の可能性がある。2 S-1271は、横板の両側に杭が打設されていたが、北側に打設された杭は、細く、短いものが近接して2本打設されていただけで、横板を支えるられるものではないので、南側に打設された3本がこの横板に伴うものと考えられる。

これらの護岸の内、対になる護岸が無いものは、元々設置されていなかった可能性もある。その場合は、溝ではなく谷の北岸を護岸する目的で設置されたものと考えられる。

2 S-1249、1253、1255、1256、1271から出土した杭(3984~3986、4813、4976、4016~4018、4020、4053、4055、4819、4887、4894)を図化した。2 S-1249、1255、1271の杭(4813、4976、4819、4887、4894)は芯持ち丸太材で、2 S-1253と1256の杭(3984~3986、4016~4018、4053、4055)は横断面が薄い方形の板材である。2 S-1253の4020は上側に欠き込みがあり転用材と考えられる。そのほかには、護岸に転用された建築部材(3973、4052、4815)を図化した。4815の片側側辺は相欠きに加工されている。(馬路)

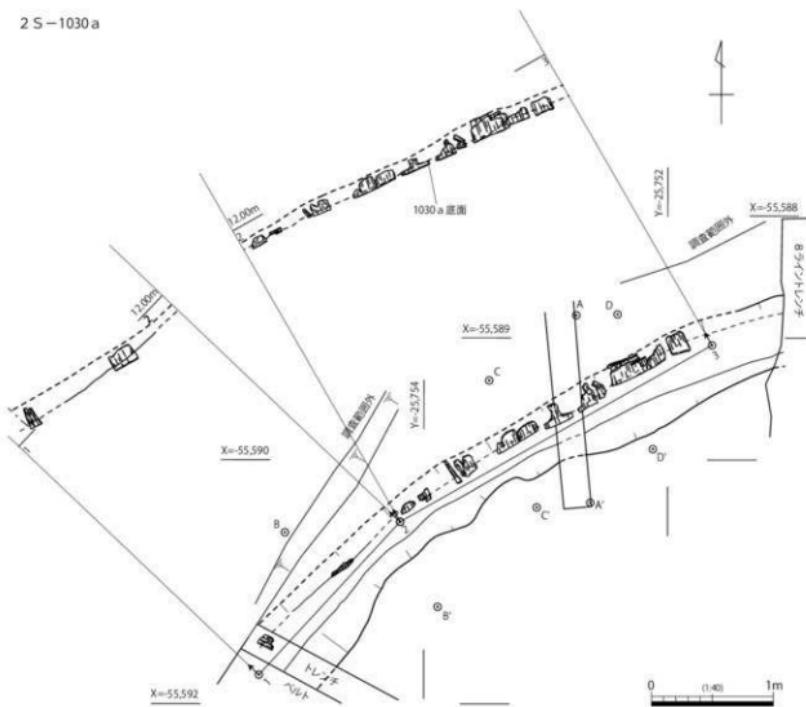
2 S-1030(第IV-12-43~54図)

D 8グリッドに位置する溝である。2 S-1025の下層にあたり、南西から北東へ向けほぼ重複する走向をなす。掘り直しが推定されることから、調査順に1030 a→1030 bとする。

2 S-1030 aは、推定部を含めて幅約0.40~0.70 m、深さ0.10~0.18 m程度である。溝底は南西側が高く、端部で標高約11.9 m、南東側端部で標高約11.5 mである。

北側壁部のみスギ板打設による護岸が施されている。板の上部は腐朽などによる欠損のため、本来の設置高は不明だが、幅15~27 cm、厚さ0.5~1 cm程度の板が17枚検出された。概ね連続

2 S-1030 a



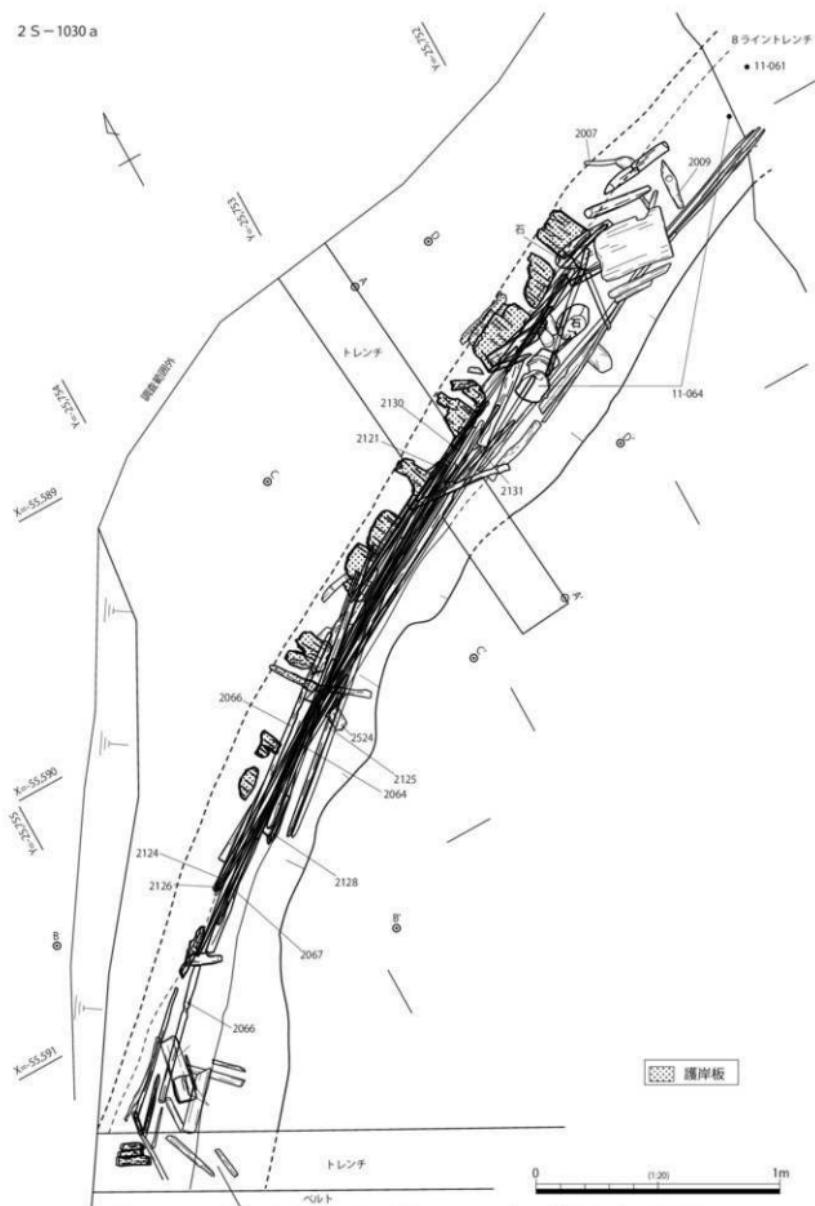
第IV-12-43図 2区 第11面 溝(2 S-1030 a) 平・立面図

して設置されているが、土層断面DD'付近は2~3枚の板が重複して設置されている部分もある。1030 a溝底と護岸板の下端部は数cmのレベル差があり、設置深度は浅く、打設というより板を押し入れた程度と考えられる。設置角度は北東側は約20~35度前後、南西側は約50度である。北東側の板下端は溝内側へずれ落ちた状態とみられる。なお、本遺構掘削当初は1030 a・1030 bを一本の溝と捉えていたため、1030 aの北側上端ライン、及び溝下端ラインは過掘削しており、矢板列や土層断面から捉えた推定線である。

1030 a埋土中から、乙亥正V~VI期頃の特徴を有する壺(11-061)、甕(11-062)、器台(11-064)、土玉(2101)、石核(S1914)のほか、多量の木器が出土した。建築材とみられるものが主で、断面の幅が1~2cm、厚さが1cm前後、最大長252cmの木舞とみられる棒状部材20本程度に加えて、建築部材とみられる板、桶、匙、土器が出土している。これらの多くは、溝の護岸板列にはば密着した状態で間層を介せず、密集して出土したものである。

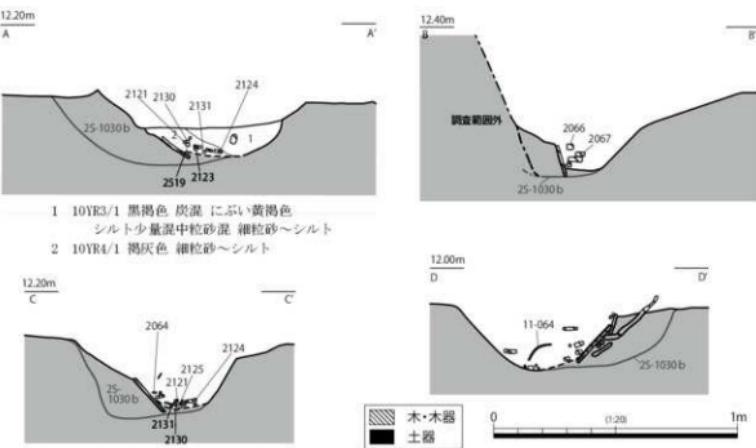
このうち図化したのは、桶(1947)、匙(2007)、用途不明品(2009)、建築材とみられる部材(2064、2066、2067、2069、2121、2124、2125、2126、2128、2130、2131)である。桶(1947)は、把手を有し、表面に赤彩がある。匙は持ち手が断面三角形を呈するもので、丁寧に加工された完存とみられるものである。2009はケヤキ製で一部が幅広となる扁平な部材に直径約2.6cmの円孔を穿つ用途不明品で

第12節 第11面(X層下面)の調査

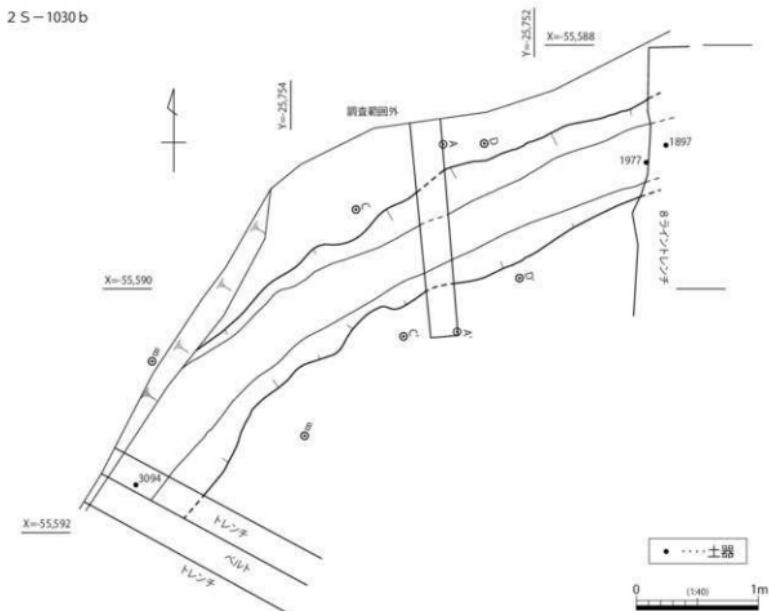


第IV-12-44図 2区 第11面 溝(2 S-1030 a) 遺物出土状況平面図

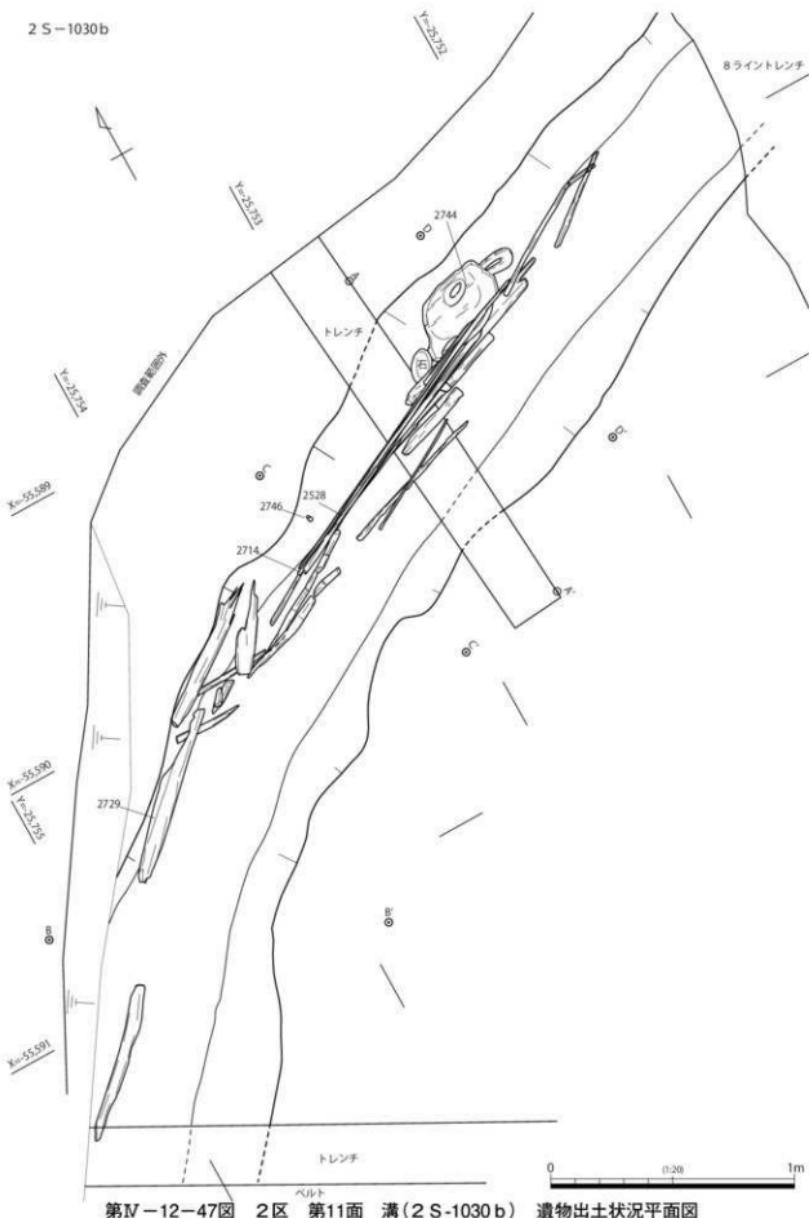
第IV章 2・3区の調査成果

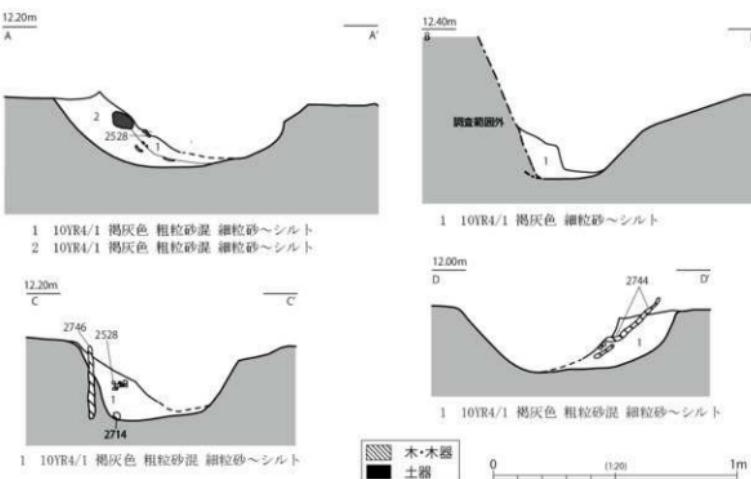


第IV-12-45図 2区 第11面 溝(2 S-1030 a) 断面図

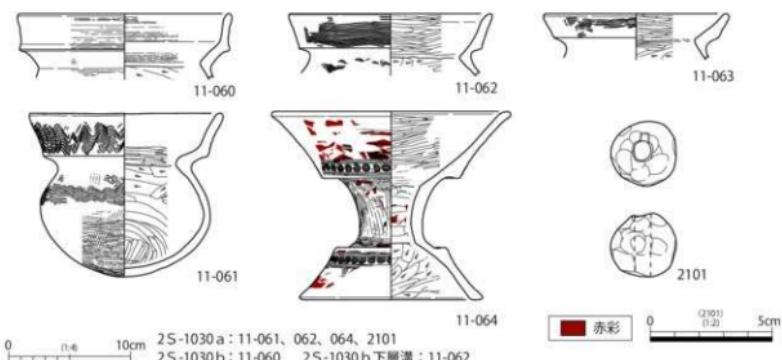


第IV-12-46図 2区 第11面 溝(2 S-1030 b) 平面図





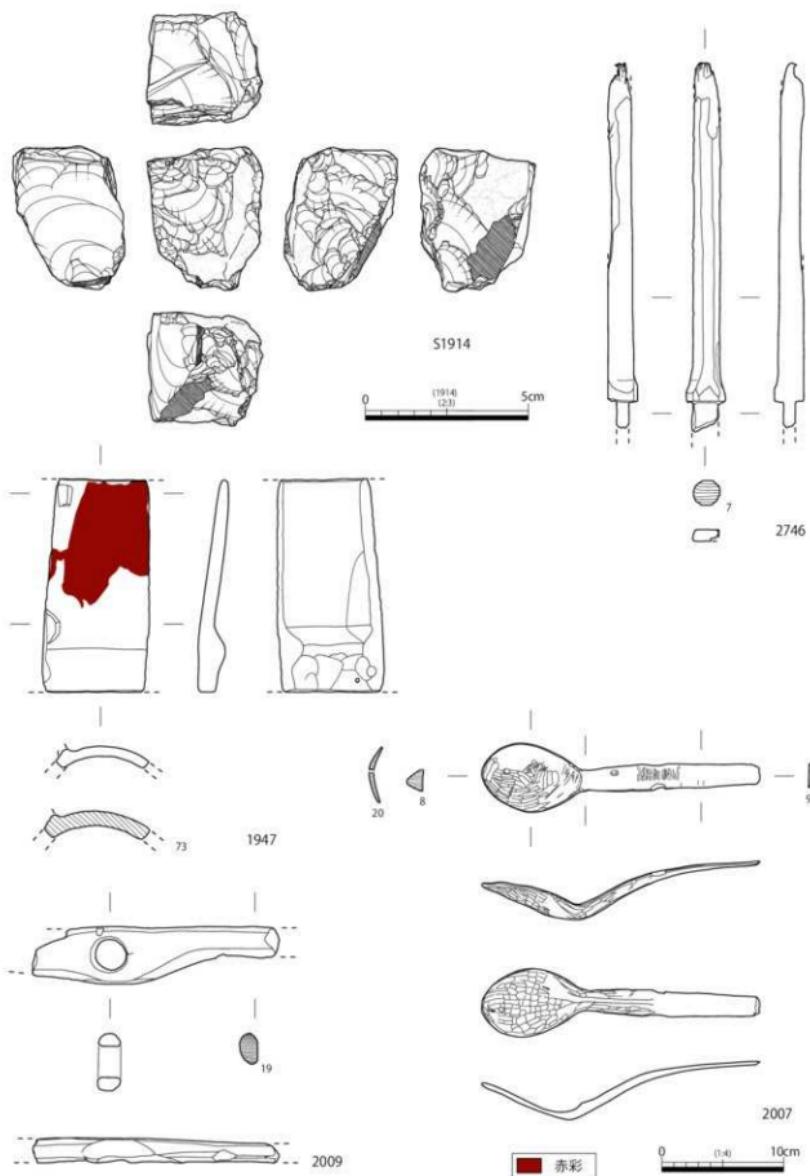
第IV-12-48図 2区 第11面 溝(2 S-1030 b) 断面図



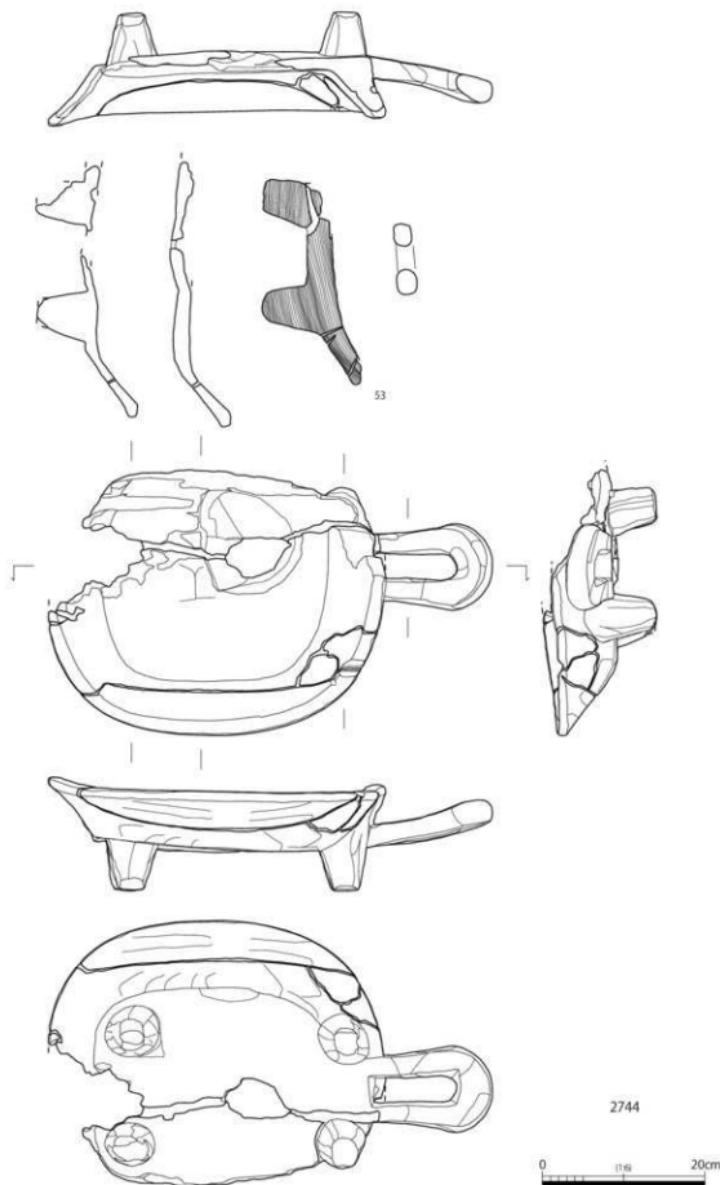
第IV-12-49図 2区 第11面 溝(2 S-1030) 出土遺物 1

ある。建築材とみられる板 2067 は、表面は手斧痕、裏面は腐朽により不明。2502 も同様の板であるが、下部左側面にベルト状のあたり痕がある。先端部は薄く加工している。へぎ板 2069 は下端部を一段細く加工するもので、割肌状であるが一部手斧痕がある。2064 も下端を細く加工するが、完存する下半部はほぼ全面を加工する。木舞とみられるへぎ板 (2131, 2124, 2066, 2125, 2126, 2130, 2121) は、ほぼ同種の部材とみられるもので、幅約 2~3 cm、厚さ 1.8~2.2 cm、最大長 252 cm、全てスギ製とみられる。ほぼ全面割肌状を呈し、2066, 2125 など一部には、主軸に対して斜め方向の幅 2 cm 前後の圧痕 (あたり痕) がある。こうした圧痕は 2 S-840 などから出土した同種の部材にもみられる。

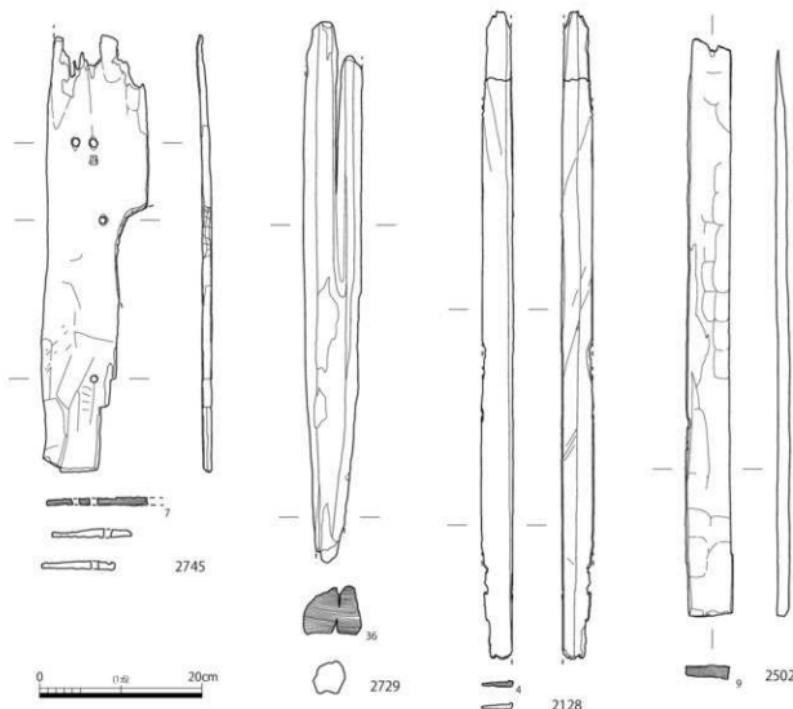
2 S-1030 b は、幅 0.65~0.94 m、深さは最大 0.23 m である。走向は 1030 a と同じで、南側の側



第N-12-50図 2区 第11面 溝(2 S-1030) 出土遺物2



第IV-12-51図 2区 第11面 溝(2 S-1030) 出土遺物3



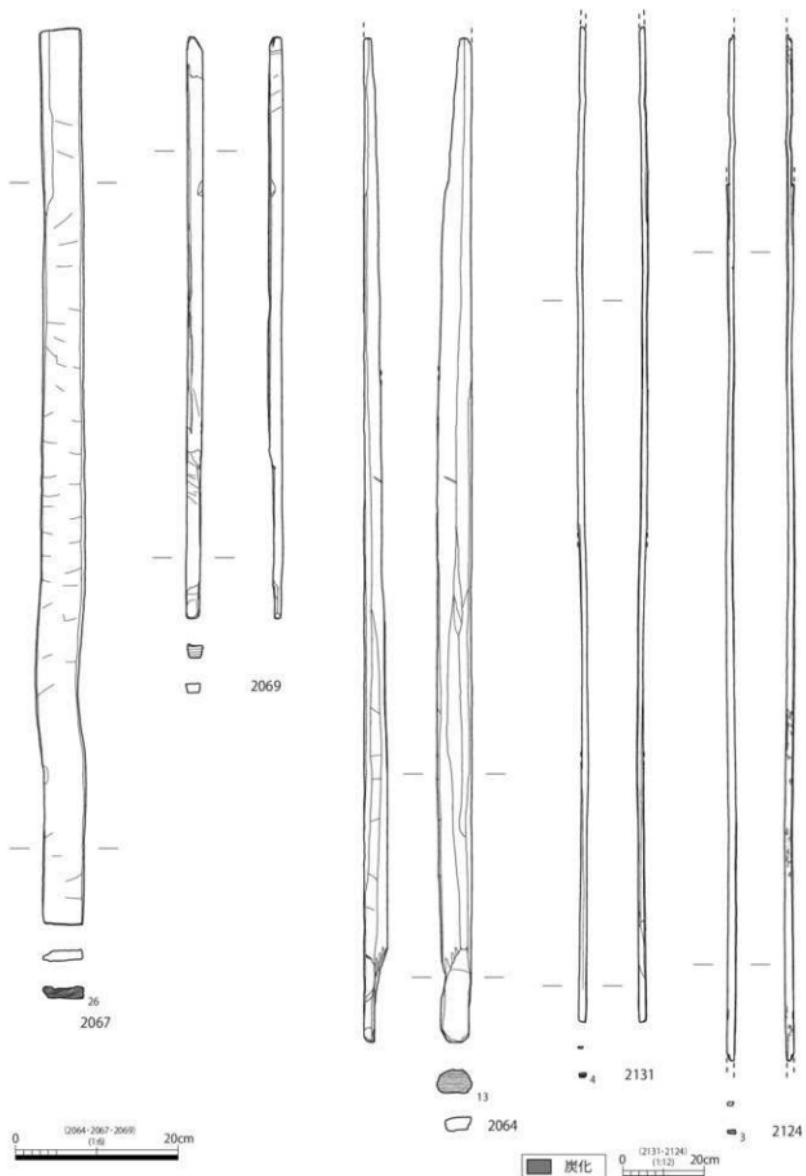
第IV-12-52図 2区 第11面 溝(2S-1030) 出土遺物4

壁は1030 aとほぼ同じと推定され、北側は1030 aより広い。1030 b埋土中から、乙亥正V～VI期頃の特徴を有する甕(11-060)のはか、盤(2744)、側面に円弧状の加工とえつり穴をもつ板(2745)、へぎ板(2714)などが出土した。用途不明品(2746)は、杭として転用されたとみられ、北側壁に打ち込まれた状態で出土した。1本のみのため、他の遺構に伴うことが推定される。断面円形の棒材だが、下部を太く加工し、端部をほぞ加工する。盤(2744)は、1030 aの護岸板の背後から把手を東側へ向け横倒しの状態で出土したものである。実測図表面下方にみられる直線状の割れ(接合線)は直上に護岸板が乗ることから、板の挿入圧により破断したものと考えられる(PL.140-3)。平面は隅丸方形で、四隅に断面円形の脚、一端には長円形の把手が作り出されている。表面の木目間に僅かに赤色痕跡がある。樹種はスギである。棒状の建築部材(2528、2714)は1030 a出土の2131他と同種の部材である。

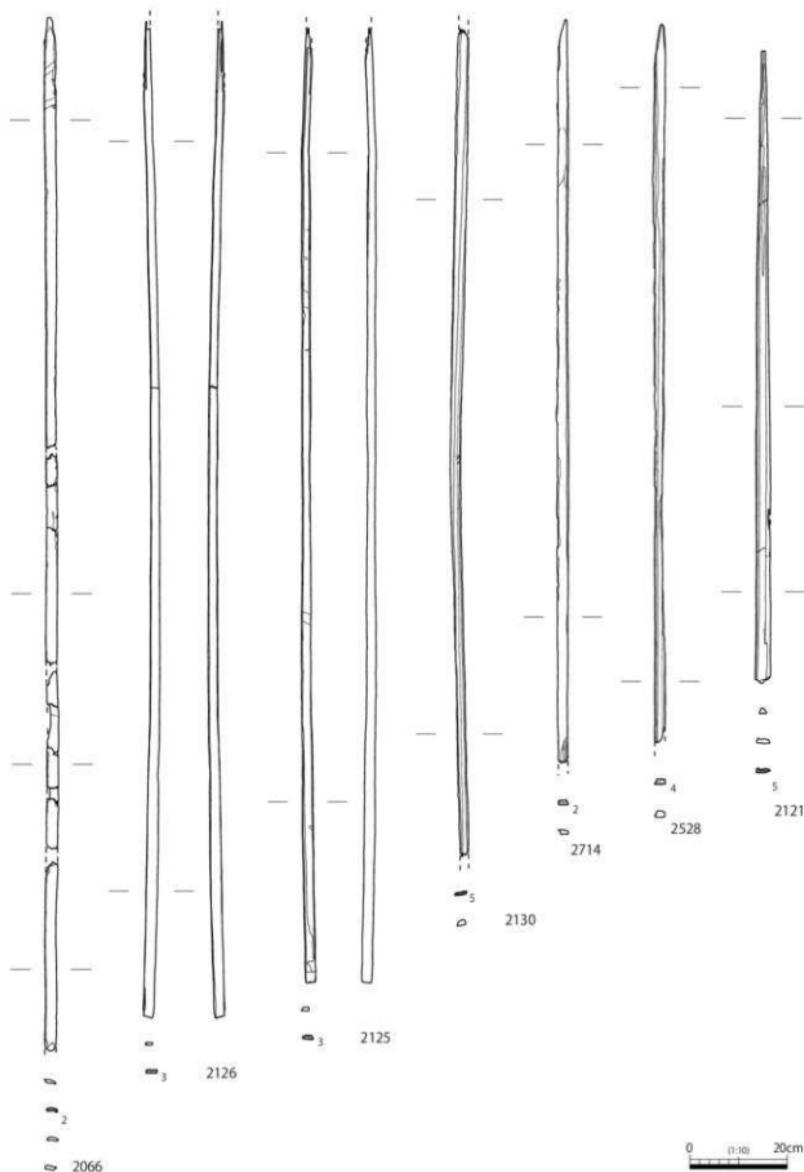
2 S-1030 a、bは出土した土器から、乙亥正V～VI期頃の遺構と推定される。なお、1030 bの下層には類似する溝が存在すると思われ、トレンチ内から甕(11-063)が出土している。(岡野)

2 S-1264(第IV-12-55～57図)

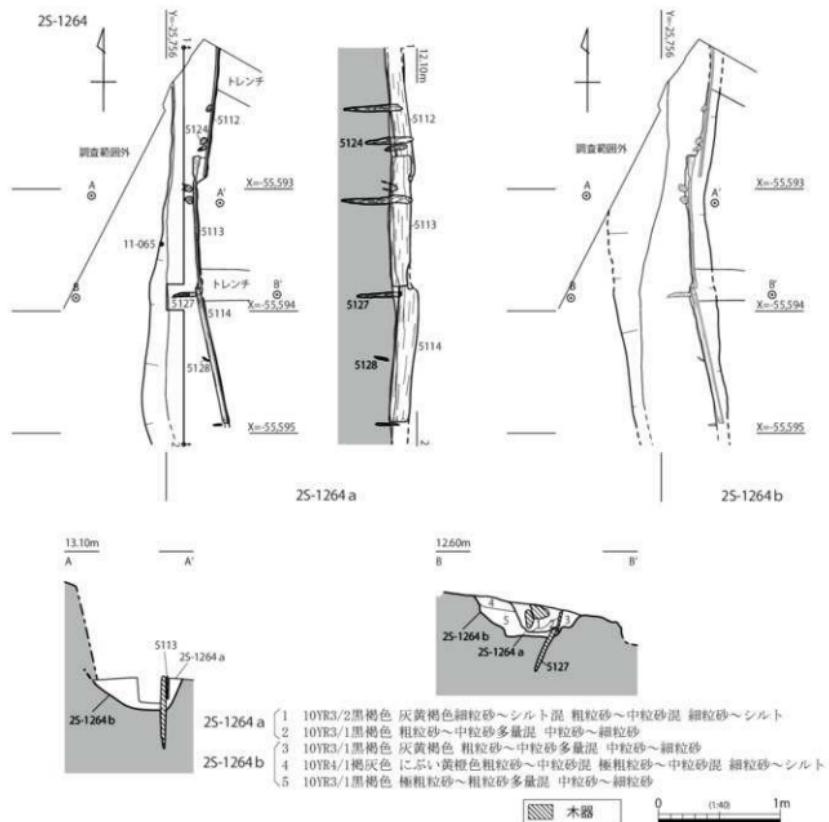
D 8グリッドの2 S-1262床面とほぼ同じ高さで検出した。ほぼ南北を主軸とする溝で、長さ33m



第IV-12-53図 2区 第11面 溝(2 S-1030) 出土遺物5



第IV-12-54図 2区 第11面 溝(2S-1030) 出土遺物6



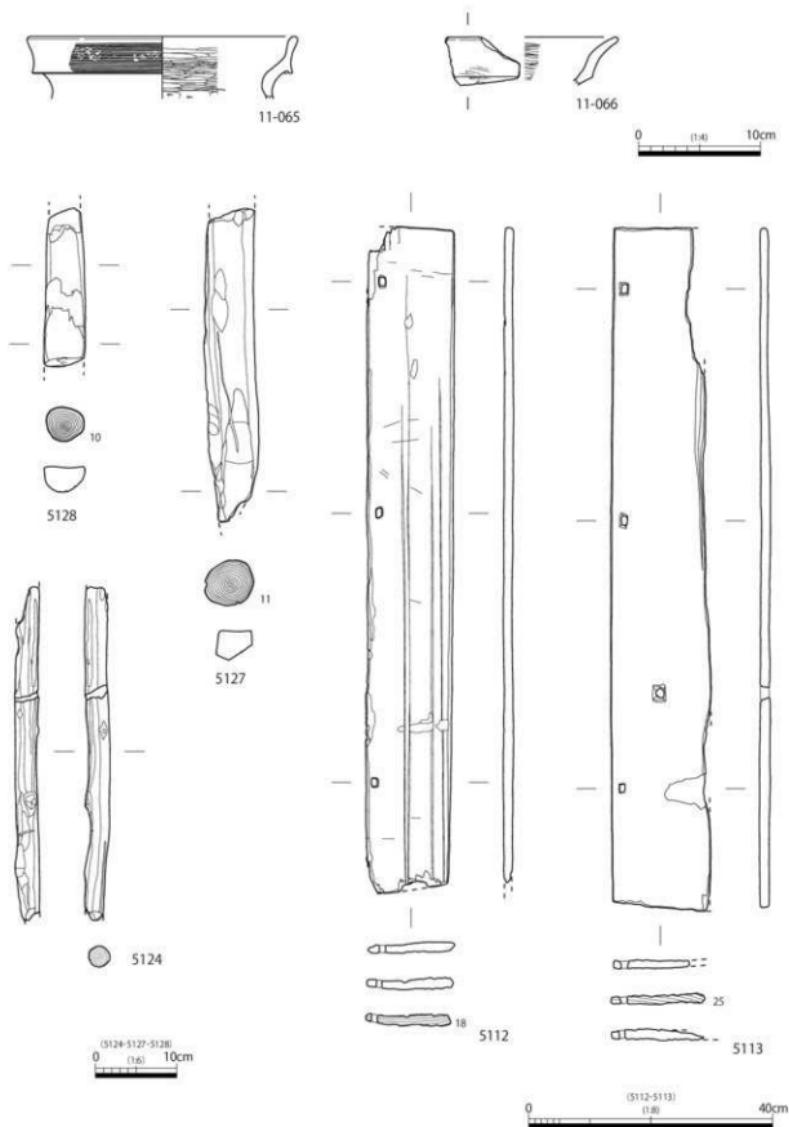
第IV-12-55図 2区 第11面 溝(2S-1264) 平・立・断面図

を検出した。南側は2S-1234に切られたとみられ残存しない。溝は調査順に2S-1264a→1264bの二段階に分かれる。

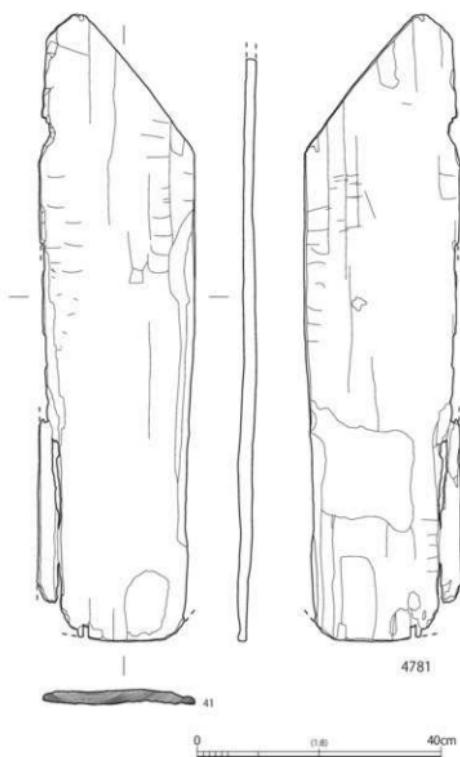
1264aは、幅0.28～0.62m、深さ0.22m前後で、東側にのみ杭と横板による護岸がある。護岸は8本の杭と3枚の横板で構成される。杭は直径約2～6cmの芯持丸太である。横板2枚は建築部材からの転用とみられ、片側にえつり孔とみられる方孔が概ね38cm程度のピッチで穿たれている。杭5124と横板5112はいずれもスギと鑑定された。埋土中から乙亥正V期頃の特徴を有する壺(11-065)、高坏(11-066)が出土した。このほか自然木の比較的大振りな木片が数点出土している。なお、図化した板(4781)は、溝西側の検出面(土層断面BB'北西側)で溝と平行した状態で出土した板である。板の上端部は調査都合による切断である。取り上げ時のミスにより出土状況を図化できていないが、本遺構と関連する可能性がある。

1264 b は、1264 a の掘方の可能性もある。幅 0.80m 前後、深さ 0.25 ~ 0.28m 前後である。埋土中か

第12節 第11面(X層下面)の調査



第IV-12-56図 2区 第11面 溝(2 S-1264) 出土遺物 1



第IV-12-57図 2区 第11面 溝(2 S-1264)
出土遺物2

(以下B材)が並んだ状態で出土した。板の主軸は場所により若干異なるが、A材に対してB材はほぼ直交する（西端の細いB材1本のみはA材と同方向に置かれる）。いずれも腐朽により残存状態は不良で、とりわけA材の多くは本来の形状を保持しておらず、断片的な状態のものも多数みられる。A材は大型で、幅20～25cm前後のものが多く（最大幅約35cm）、長さは最大約2.3mである。これらのA材と直交、平行するB材のうち、2663は仕口痕跡を残す幅広の材、3004は垂木か木舞状の材であり、大きさや形態は一定せず、建築部材と考えられるものもある。2663は本来長さ1.2m近くの部材であるが、下半部は腐朽により図化していない。A材と直交方向にあるB材のピッチも比較的のランダムで0.2～0.7m程度である。A材のB材の上下関係は、下からB材→A材→A材→B材→A材といった重複状況がみられることから、A材とB材を概ね交互に組み合わせているようだ。これらの木器は、溝底面にはば貼り付いた状態であるため、横断面は南南西側が低く北北東側が高い。北北東側の端部は、溝の側壁に沿って立ち上がる箇所もある。棒と板を緊縛した痕跡やえつり穴はみられず、緊縛のための紐や樹皮は出土していない。

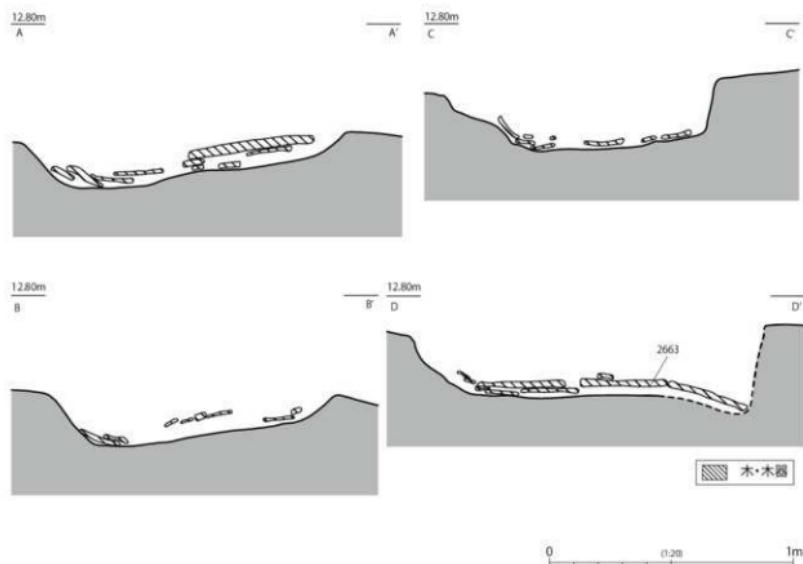
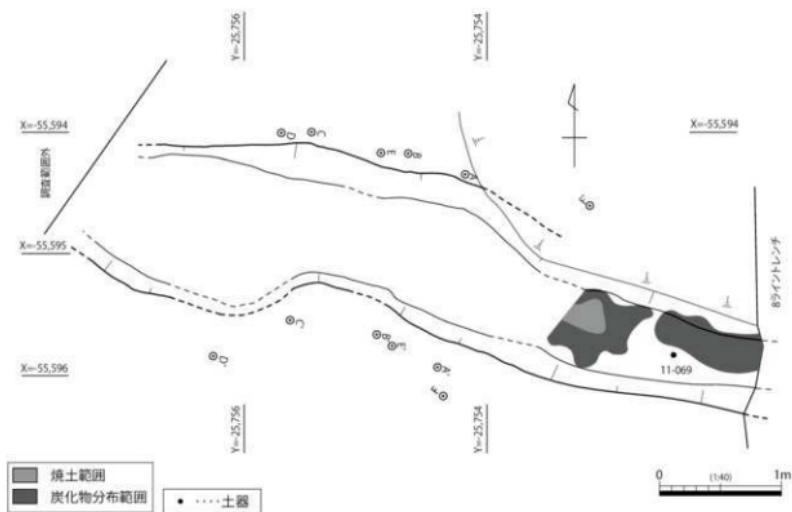
ら遺物は出土していない。（岡野）

2 S-1065(第IV-12-58～60図)

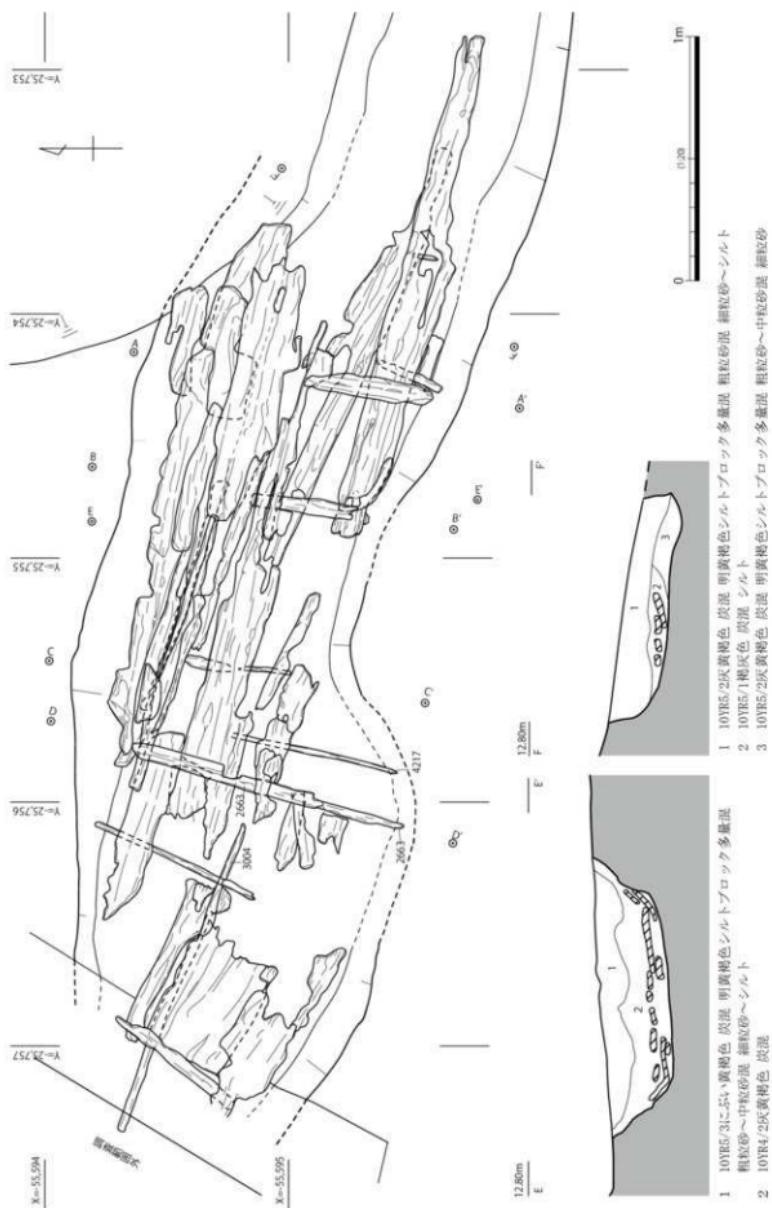
D8グリッドで検出した溝である。第9面で検出したが、出土土器からみて、第11面の遺構として報告する。以下、2 S-1063、1234、1263、1265も同様である。西北西～南南西の走向をなし、幅1.05～1.3m程度、深さ約0.20～0.30mの規模で検出された。後述する2 S-1063、1234、1263を切って掘削される。溝底の縦断は、西北西側が高く、端部で標高約125m、南南西端部では約120mである。横断は南側が北側より6～10cm程度低い。断面DD'付近は、遺構ラインが明確ではない。溝東側の最下層には炭と焼土が薄く堆積する。

埋土中から、甕(11-067～071)、高坏(11-072)、蓋(11-073)、底部(11-074)、敲石(S2302)のほか、遺構のほぼ底面で多量の木器が出土した。甕(11-071)は混入かもしれない。

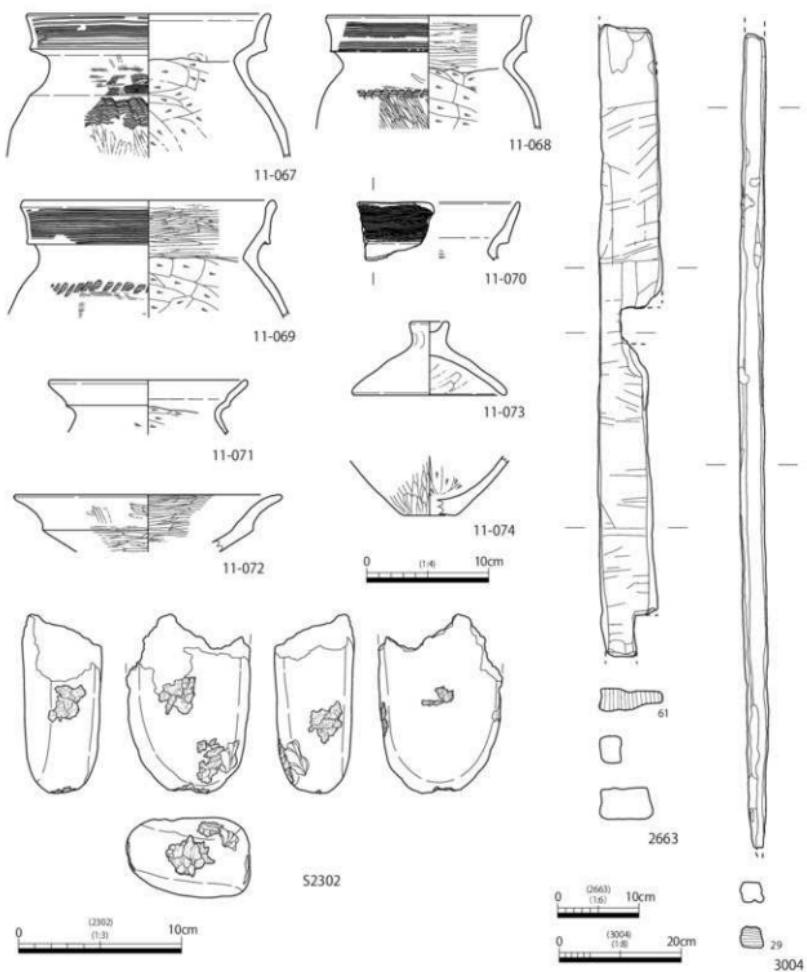
溝の主軸方向に沿い大型の板材（以下A材）がほぼ並列し、板と直交方向に断面方形の幅6～9cm程度の板状、または直径3～4cm程度の棒状の部材



第IV-12-58図 2区 第11面 溝(2S-1065) 断面図



第IV章 2・3区 第11面 溝(2S-1065) 遺物出土状況 平・断面図

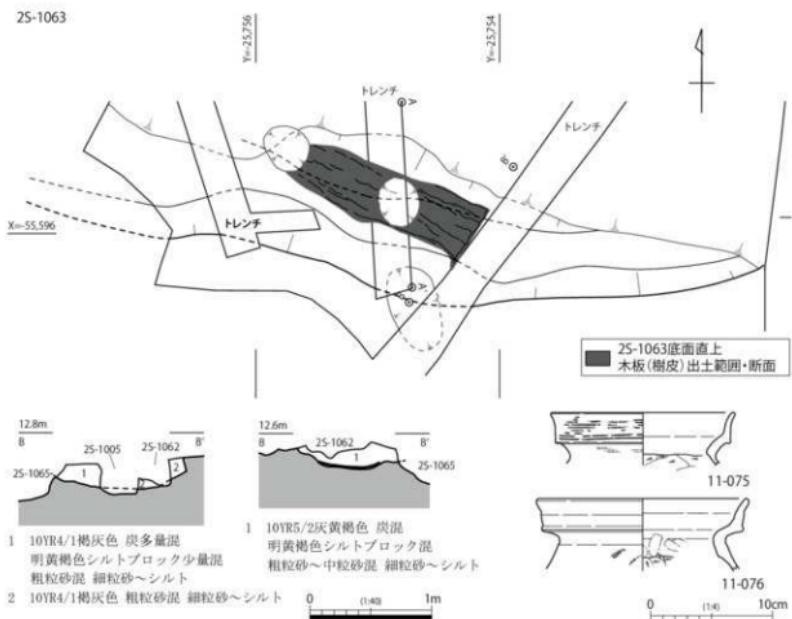


第IV-12-60図 2区 第11面 溝(2 S-1065) 出土遺物

こうした出土状況の解釈としては、本来は板材と棒材それぞれ一対がワンセットをなし、板塀や建物の壁などに利用されていたものをパネル状に解体し、重ねて溝内に設置（あるいは投棄）したことなどが想起される。また、材同士の結合方法が不明である現状を重視すれば、地業などを目的に板や棒材で現地組みした可能性も排除できない。今後の類例を待ちたい。（岡野）

2 S-1063(第IV-12-61図)

D 8 グリッドに位置する溝である。北側を溝 2 S -1065 に切られる。走向はほぼ西北西-東南東を



第IV-12-61図 2区 第11面 溝(2S-1063) 平・断面図及び出土遺物

軸とする。推定部を含めて、幅1.0～1.2m程度、深さ25cm前後、長さ5.6mが検出された。継断は西北西側が高く端部で標高約12.6m、東南東側端部は12.2mである。

底面に貼り付いた状態で樹皮とみられる木質が出土した。幅45cm、長さ1.5m程度の範囲で、溝底の形状に沿い湾曲した状態で検出された。一部土壤化しているが、木目の方向からみて、少なくとも2枚は重ねた状態と考えられる。

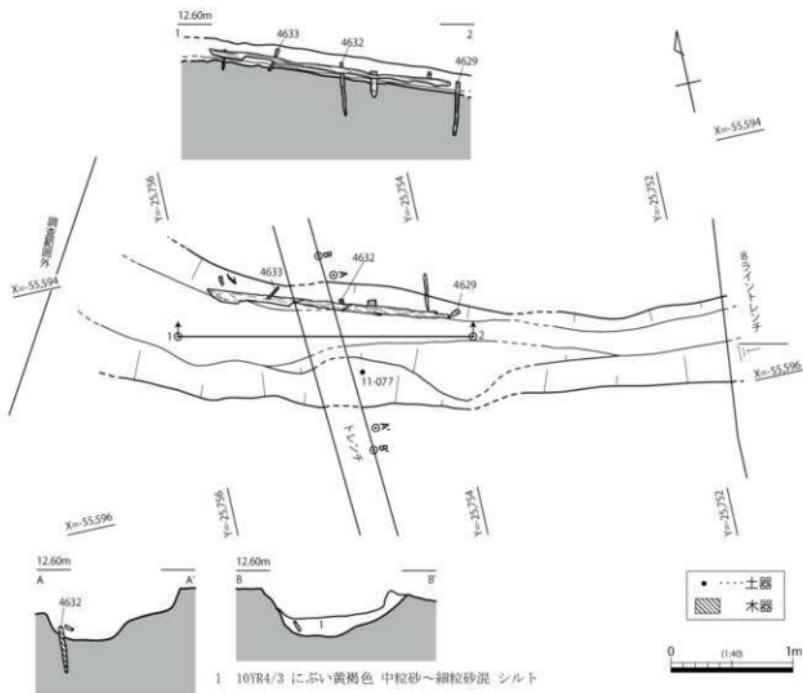
埋土中から、乙亥正VI期頃とみられる甕(11-075、076)が出土した。(岡野)

2S-1234(第IV-12-62・63図)

D8グリッドで検出した溝である。上部を2S-1029・1063・1065に切られる。残存部で、幅0.56～1.1m、深さは概ね0.15mである。西北西～東南東を軸とする走向で、溝底の継断は西北西側が高く、西北西端部では標高約12.4m、東南東端部では約11.8mである。2S-1063、1065と類似した位置、走向の溝である。

北北東側の側壁は一部のみ杭列と横材が検出されたが、杭列の溝内側に横材が位置することから、横材は少なくとも使用状態での護岸材ではない。

横材は、幅最大6cm、長さ199cmが残るもので、腐朽が顕著である。杭は、6本が検出され、打設ピッチは25～57cm、深度もかなり差違がある。このうち3本(4629、4632、4633)を図化したが、いずれも比較的細身の断面方形の材である。上層の2S-1065掘削時に杭の上部は切断された



第IV-12-62図 2区 第11面 溝(2S-1234) 遺物出土状況 平・立・断面図

とみられ、ピッチが広い部分の杭は抜き取られた結果かもしれない。

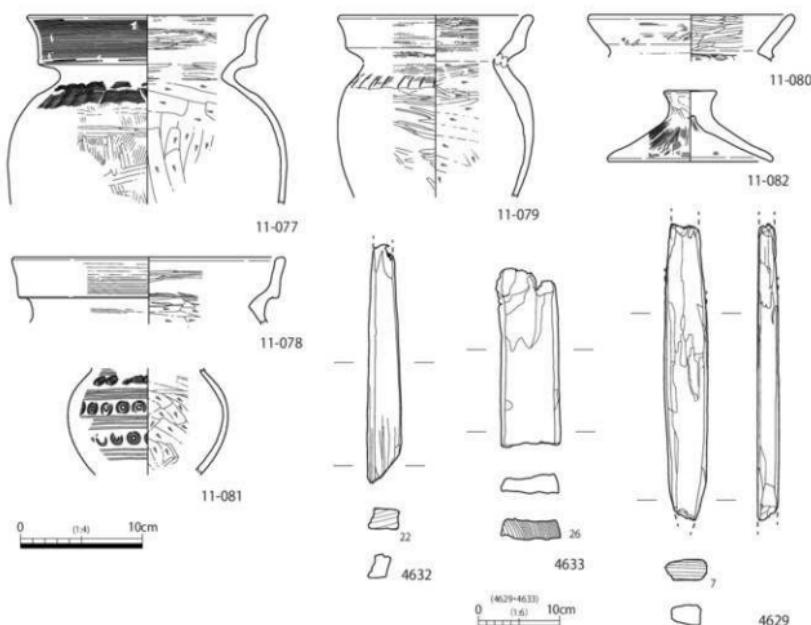
埋土中から出土した土器は、乙亥正V期頃の特徴を有する甕(11-077~080)、小型壺(11-081)、蓋(11-082)である。(岡野)

2 S-1263(第IV-12-64図)

D 8 グリッドで検出した。西北西-東南東を軸とする溝で、幅約0.8~1.7m、深さは最大0.40mである。上部を2 S-1063、1065、1234に切られる。AA'断面付近の埋土最下層(3層)には多量の炭化物が堆積していた。BB'断面には台石状の石が出土したが、使用痕は認められない。埋土中から、乙亥正V期頃とみられる甕(11-083、084)が出土した。(岡野)

2 S-1265(第IV-12-65図)

D 8 グリッドで検出し、2 S-1263の下層にあたる遺構である。トレンチ断面のみで確認したもので、幅3~4m前後の溝か流路とみられるが、遺構底面までは掘りきれなかったため、規模や走向は推定である。8 ライントレンチでは、本遺構の土色の特徴をもつ堆積土は北側に広がることから、予想される溝(あるいは流路)の走向は、上層の2 S-1063、1064、1234、1263より北側へ蛇行すると



第IV-12-63図 2区 第11面 溝(2S-1234) 出土遺物

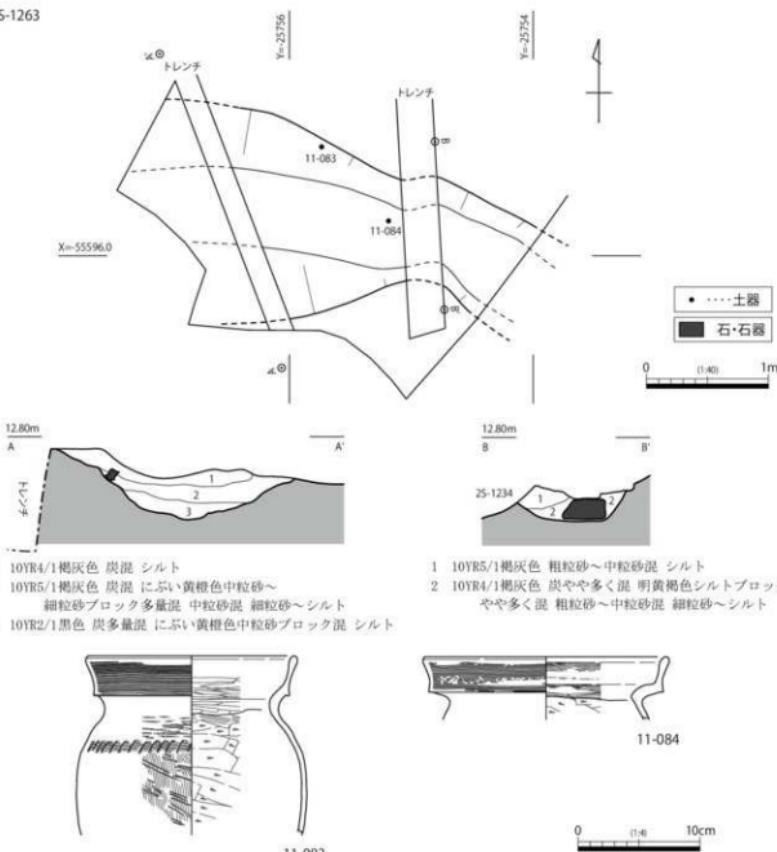
推定される。

埋土中から、乙亥正V期頃の特徴を有する壺(11-085)、蓋(11-086)、石錘のほか、網枠(5121)が出土した。網枠は、緩やかにたわみをもつ棒木の先端に、断面方形で端部を丸く加工した留め具が装着された状態で出土した。棒木は細い枝木そのものではなく、直径5cm程度の原本を直径3cm程度に整形したものである。棒木の先端には突起を作り出し、留め具の装着部分以外の棒内側は、上下両面を段状にカットし、平坦部に網を留めるための小穴を4cm前後のピッチで穿つ。留め具は一端を欠損するが、中央に断面方形の穴をもち、片側には断面ほぼ円形の穴を棒木を装着する斜め方向にあけたものである。反対側にも片側と同様の斜め方向の穴の痕跡があることから、この棒木は本来左右対称であったと思われる。棒木の上部や柄は残存しないが、全体形としては、下部中央に柄が付き、上部に梢円形の網枠が付くテニスラケットのような形状であったのかもしれない。(岡野)

2S-964(第IV-12-66図)

C・D4グリッドに位置する。第9面で検出したが、出土遺物から第11面の遺構として報告する。北北西-南南西を軸とし、ほぼ直線的に伸びる溝である。南側は2S-999、北側は2S-245に切られる。幅0.19~0.72m、深さは最大0.14mである。溝底面のレベルは南南西側が高く、端部で標高約8.1m、北北西側端部で約7.7mである。埋土中から、乙亥正V期頃とみられる赤彩された高壙(11-087)が出土した。(岡野)

2S-1263

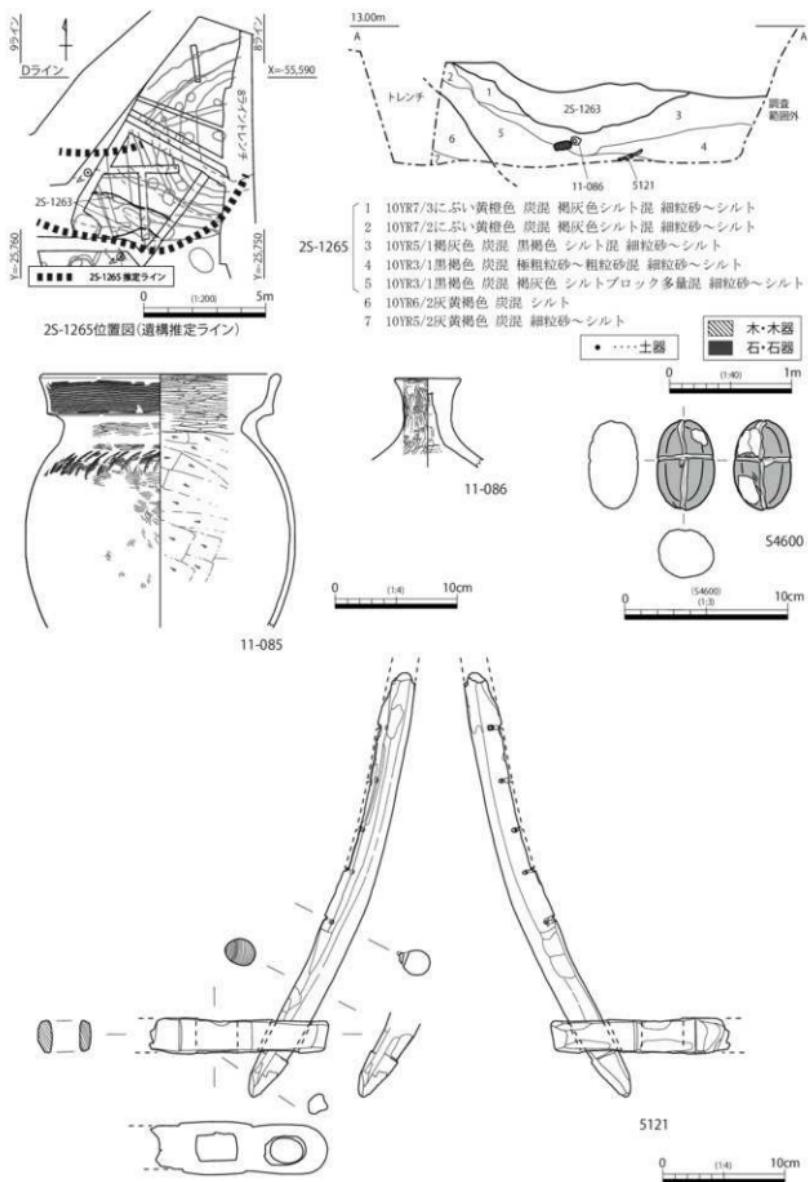


第IV-12-64図 2区 第11面 溝(2S-1263) 平・断面図及び出土遺物

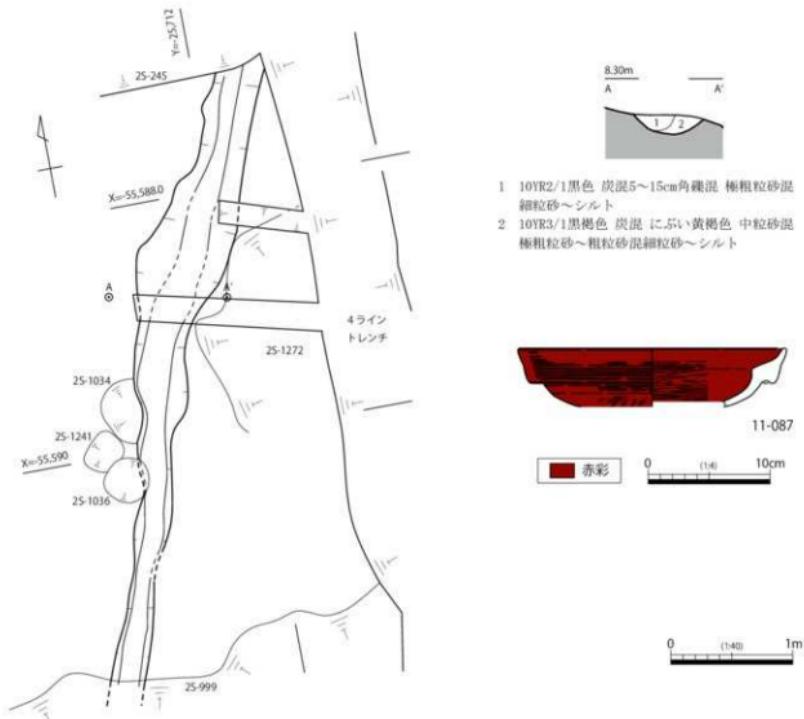
流路

2 S-1057(第IV-12-67 ~ 81図)

C 4・5 グリッド範囲のみを調査した。第10面で検出したが、出土土器から第11面の遺構として報告する。東西に伸びる流路で、埋没谷の最上部にある。流路全体を掘りきることはできず、多量に木器を含む上層部(第IV-12-68図、AA'断面、1~14層相当)のみを調査した。埋没谷の縁辺部にあたることから繰り返し流路による開削、堆積が想定され、トレンチ断面のみでは1057流路の下層部を確定し難いが、AA'断面の15~22層を下層部と推定しており、この場合の流路幅は概ね4.0m程度である。上層部の埋土には有機質を多量に包含するが、部分的にラミナとの互層をなす堆積もあることから、滞水と緩やかな流水を繰り返した流路と考えられる。



第IV-12-65図 2区 第11面 溝(2S-1265) 平・断面図及び出土遺物

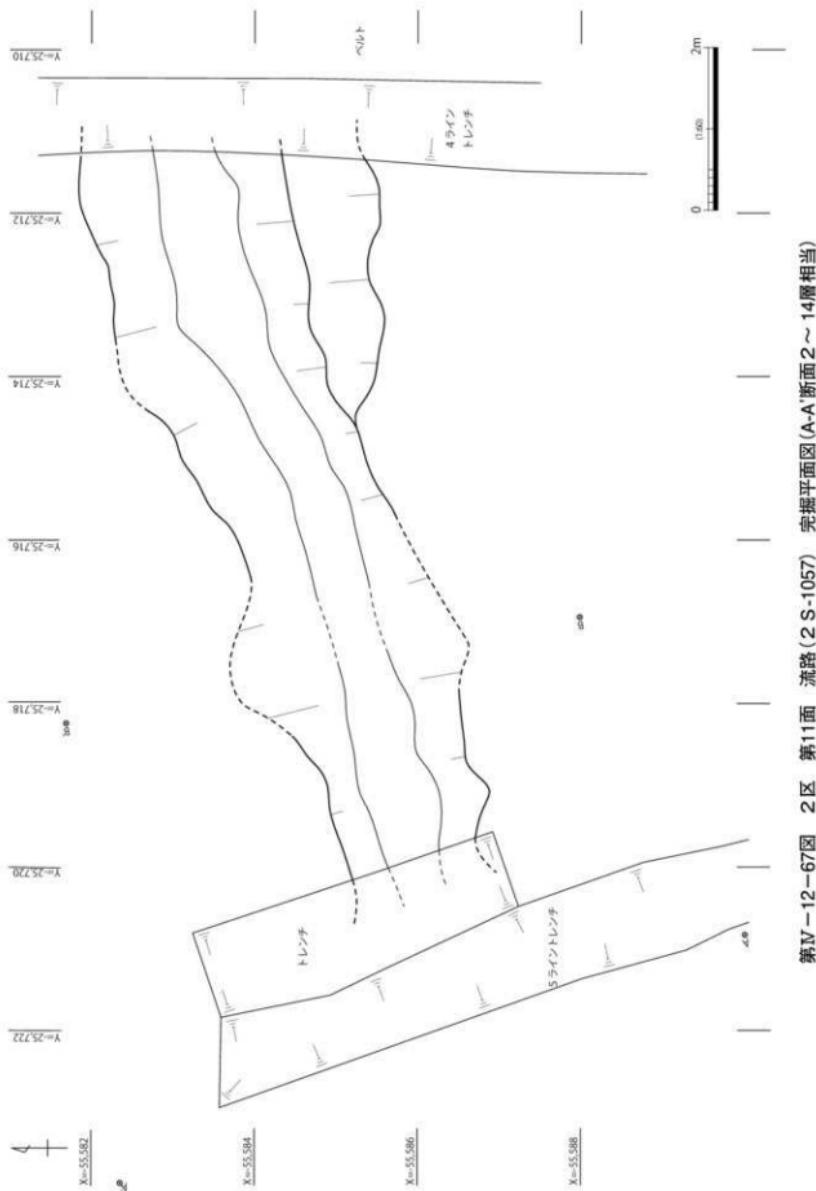


第IV-12-66図 2区 第11面 溝(2S-964) 平・断面図

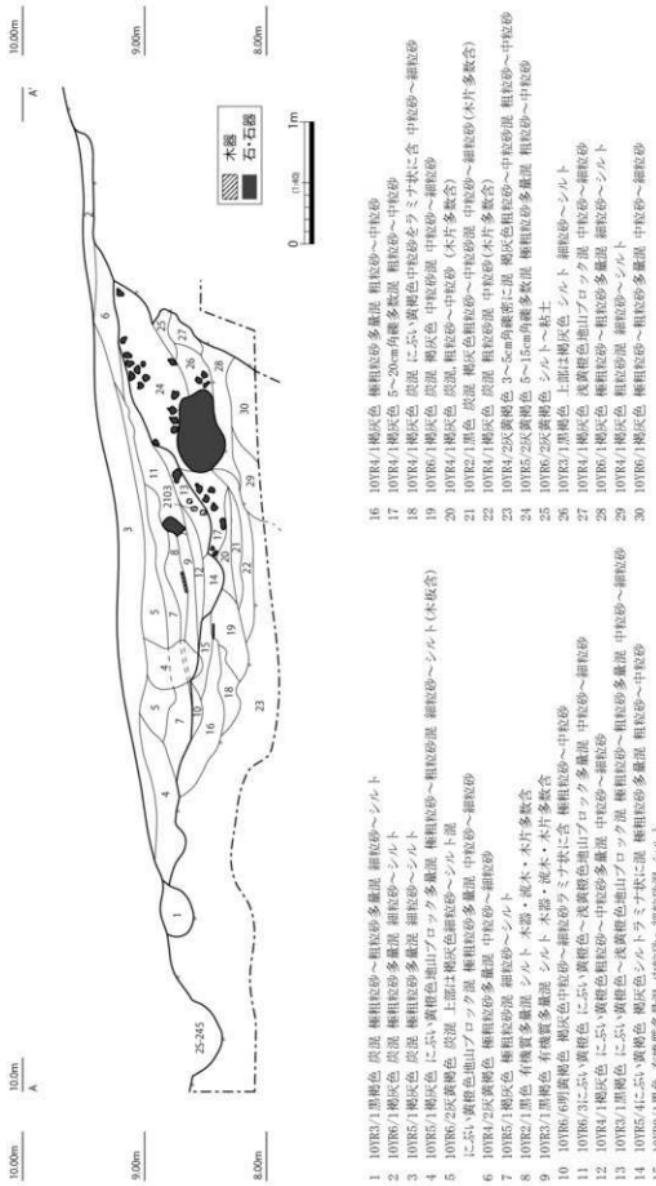
埋土中から、乙亥正V期頃の土器を含む壺(11-088)、甕(11-089～093)、高坏(11-094)、器台(11-095、096)、鉢(11-097)、土玉(2663B、2241)、管玉の未成品とみられる凝灰岩製の石器(S2135)、と共に多量の木器が出土した。木器は、容器、農具、漁労具、武具、建築部材、その他用途不明品が出土している。図示したものは全てAA'断面の7～9層に相当する埋土(BB'断面では4～6層)から出土したものである。大型の建築部材は概ね流路の軸と平行をなすものも多いが、一定方向に組んだり置いたりした状況ではなく、乱雜に投棄された状態と考えられる。以下図化した木器の詳細を記す。

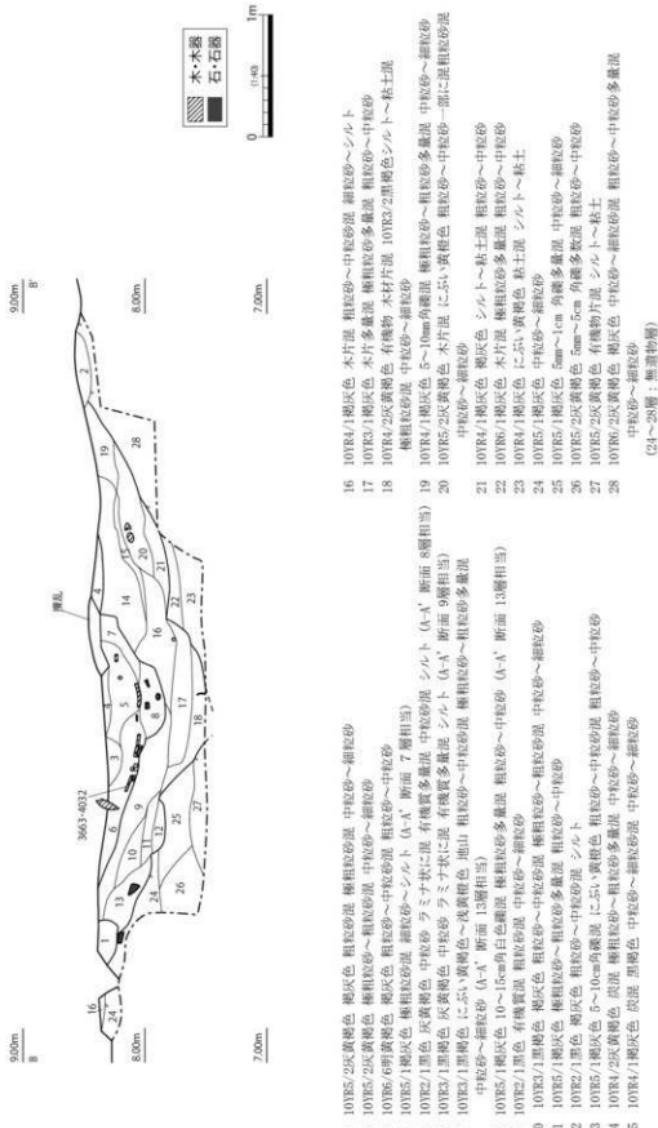
3456は別物桶の蓋である。左右両端部に紐孔、裏面縁辺に身のあたり痕がある。

2145、4087、3702は箱形の指物の一部とみられるものである。2145は断面台形の箱の側板である。両側縁及び底面には固定のための目釘を施す。表面の両側縁は斜めにカットし、裏面側の片側面には部材あたりの細い窪みがある。4087は箱の底板とみられ、両端部に柄状の突起、両小口面各2箇所に各板を固定する目釘を施す。3702は、箱の小口板とみられ側板と底面をは嵌めるための断面方形溝を彫り、それぞれ外面からの目釘で固定している。下面是中央をアーチ状にカットする。2119は一部が屈曲する板で、目釘孔が残る。指物箱の一部であろうか。

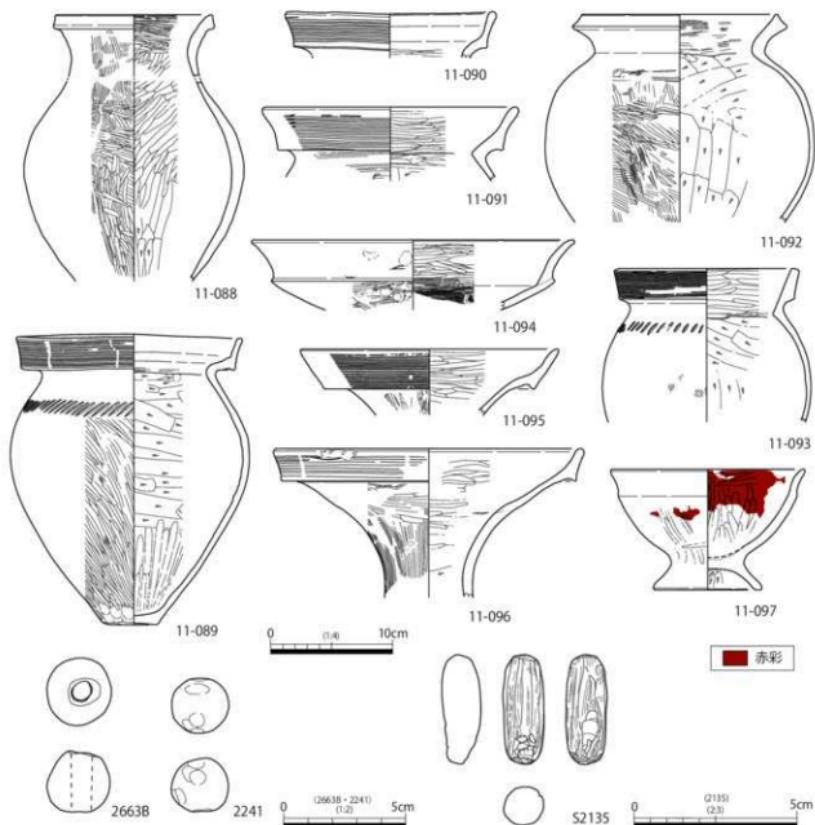


第12節 第11面(X層下面)の調査







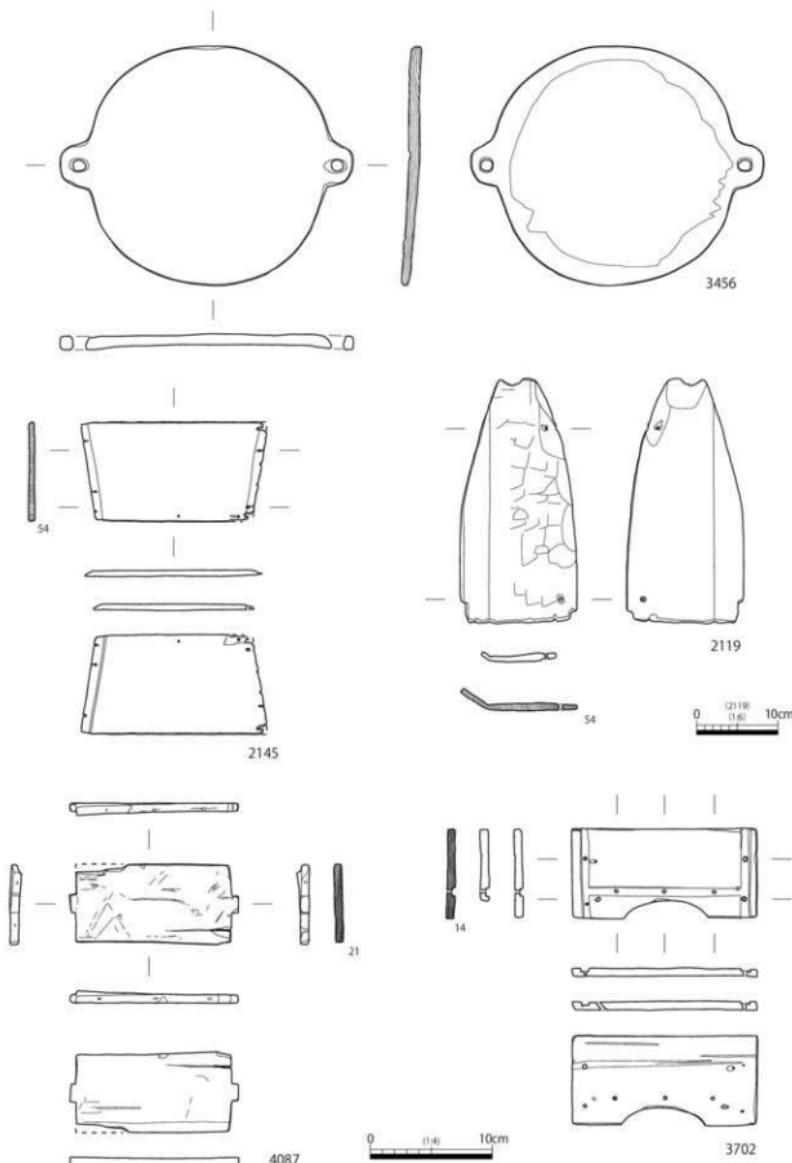


第IV-12-71図 2区 第11面 流路(2S-1057) 出土遺物 1

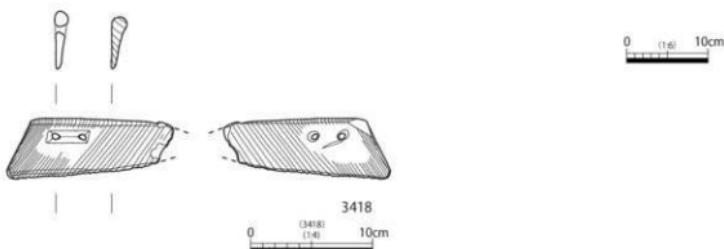
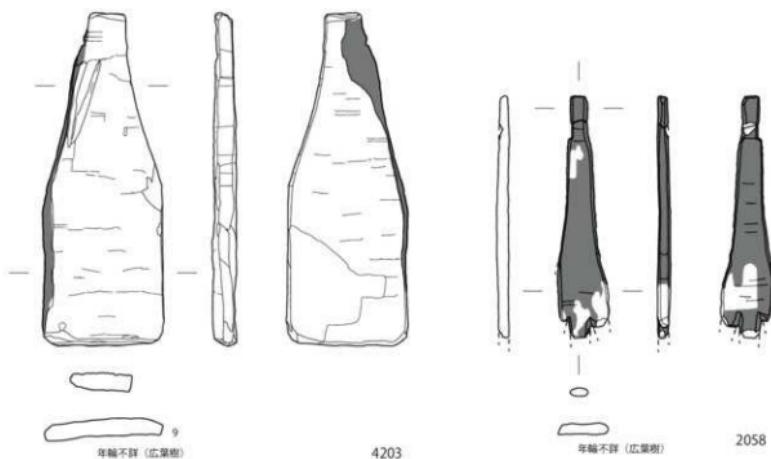
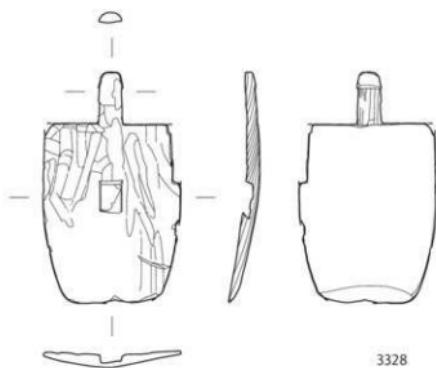
2407は組合せ平鋤の身である。平面方形の中央部に方形の柄孔が付くタイプのものであるが、柄孔は貫通しないため未製品とみられる。裏面は中央部を厚く両端部に向け薄く作る。刃先は斜めに作り出されている。2058、4203はなすび形の曲柄又鋤である。4203は未製品とみられる。樹種は両者ともアカガシである。3418はヤマグワ製の穂摘具である。平面は平行四辺形を呈し、二カ所の紐孔を方形の溝で結ぶものである。

2779はヤマグワ製の櫛である。平面は紡錘形を呈するもので、基部付近は中央に緩やかな稜を有する。3593は平面がほぼ方形をなし、内部を方形に剃り抜くものである。上端部は一部突出しているが折損ではない。形状はアカ取りにも類似するが、樹種はクリである。容器類の未製品であろうか。

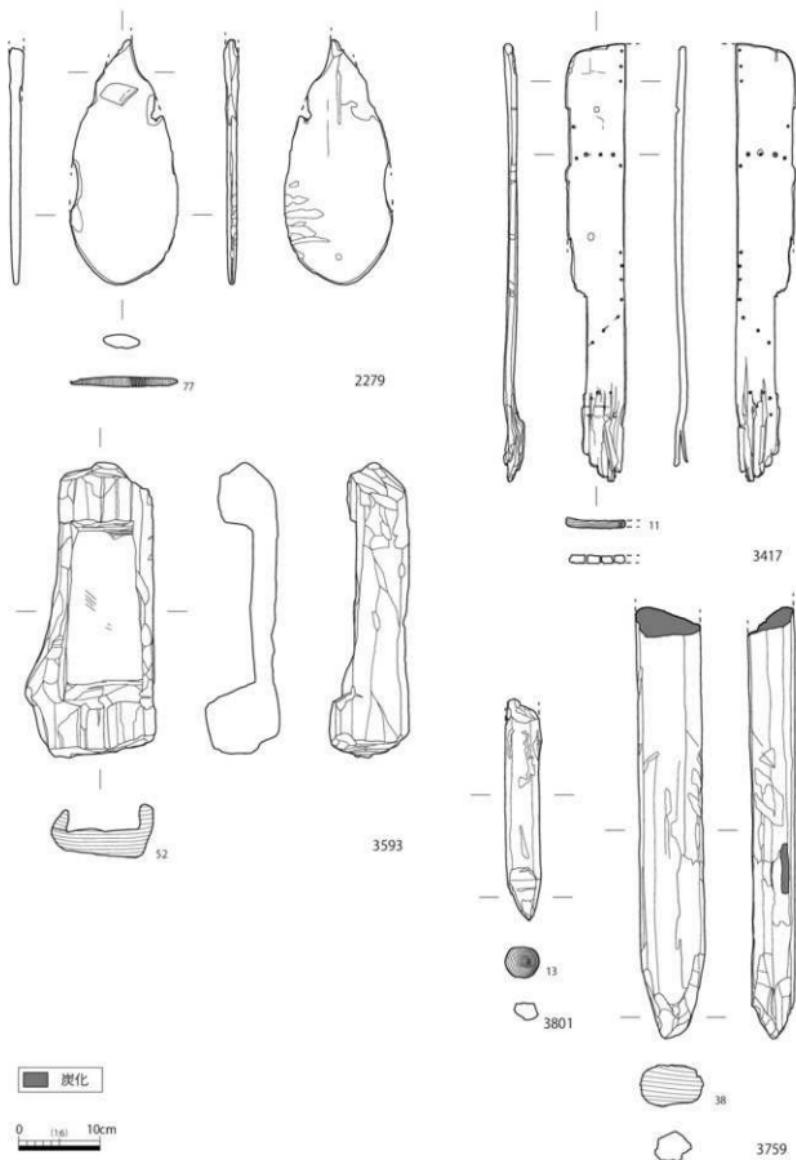
3417はスギと鑑定された板目の板状品で、盾と推定している。緩くカーブする上端から左側面上部のみ端部が残り、左側面には長さ7.5cm程度の削り込みがある。縦、斜め方向のはか半円状に紐



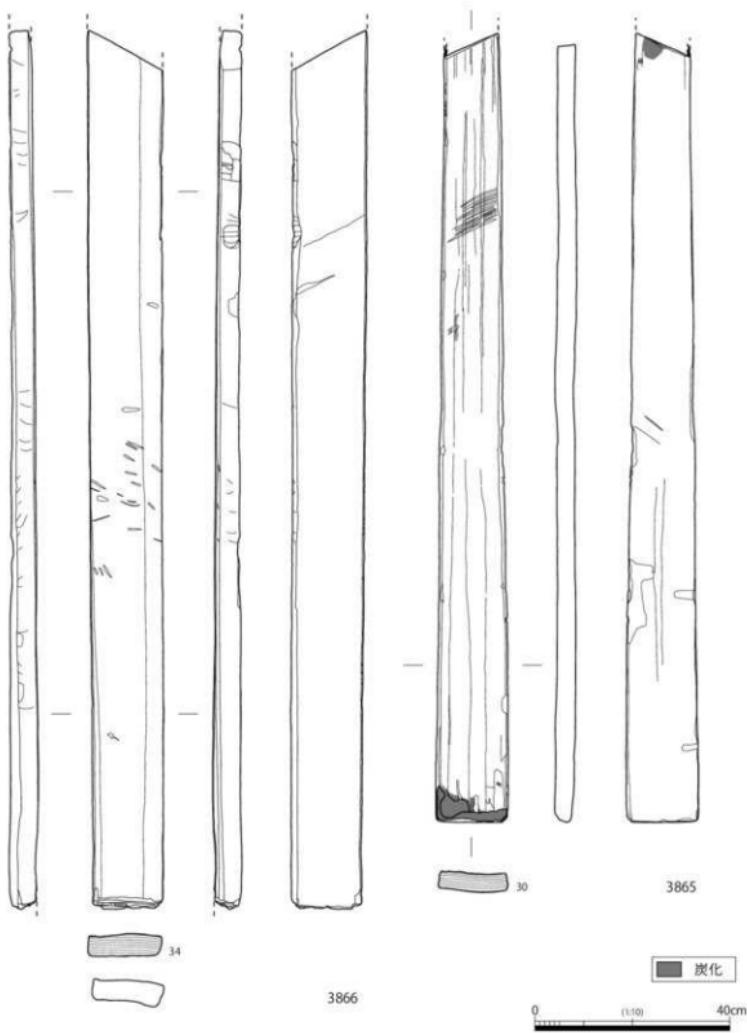
第IV-12-72図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物2



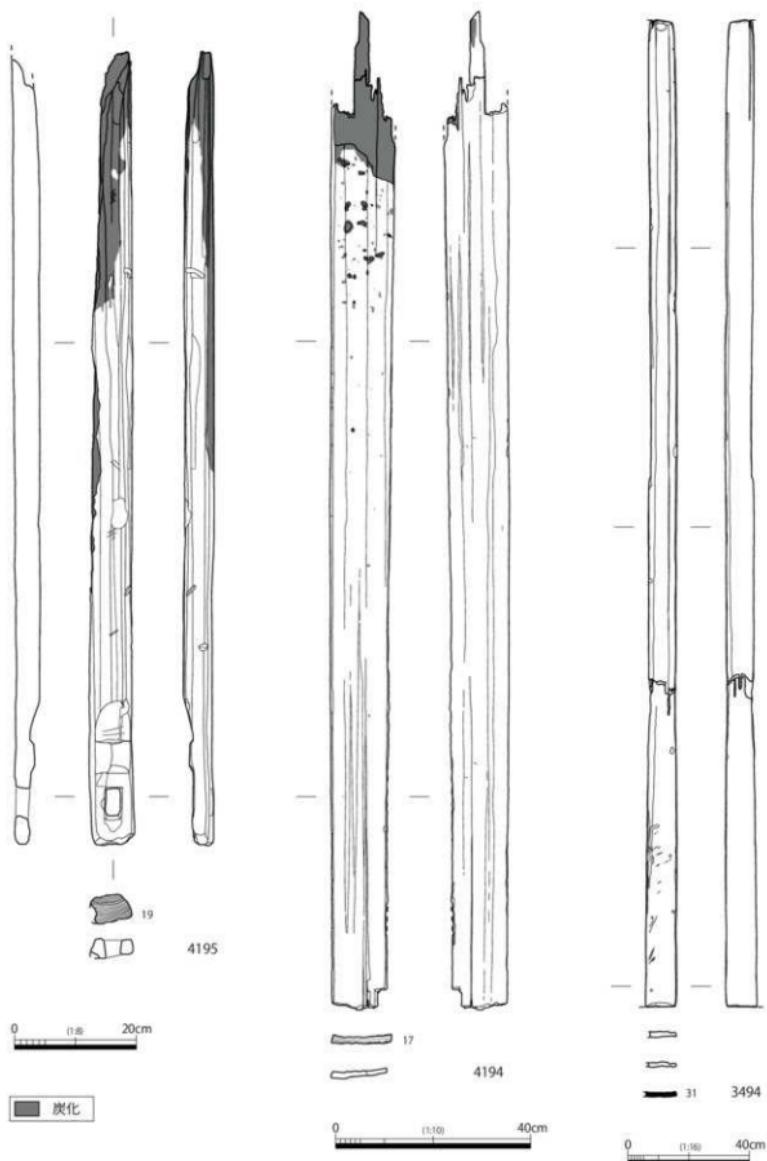
第IV-12-73図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物3



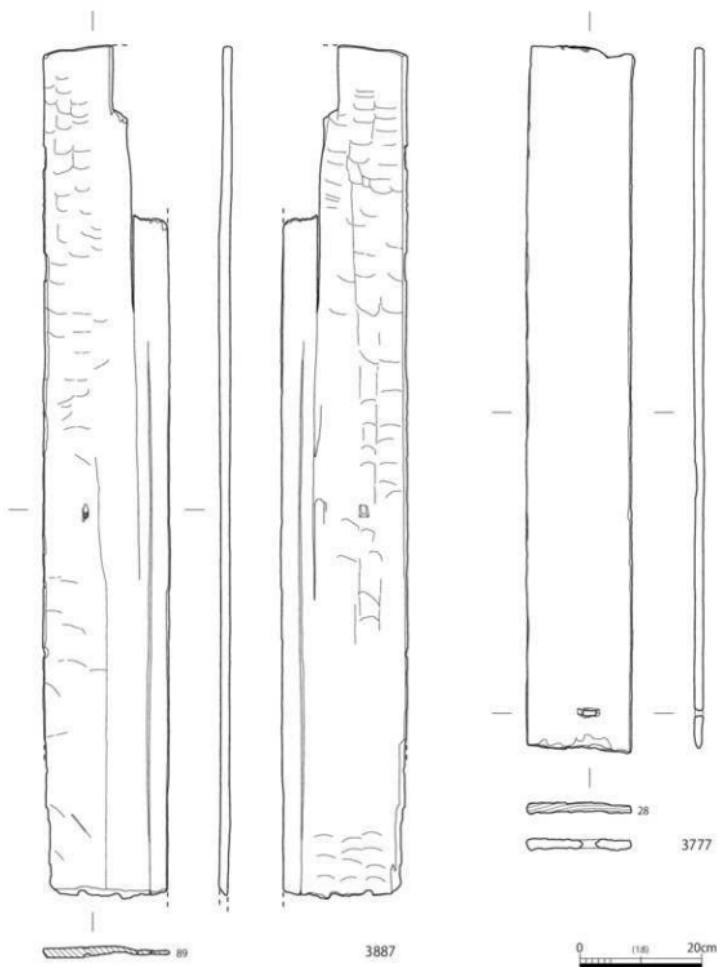
第IV-12-74図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物4



第IV-12-75図 2区 第11面 流路(2S-1057) 出土遺物5



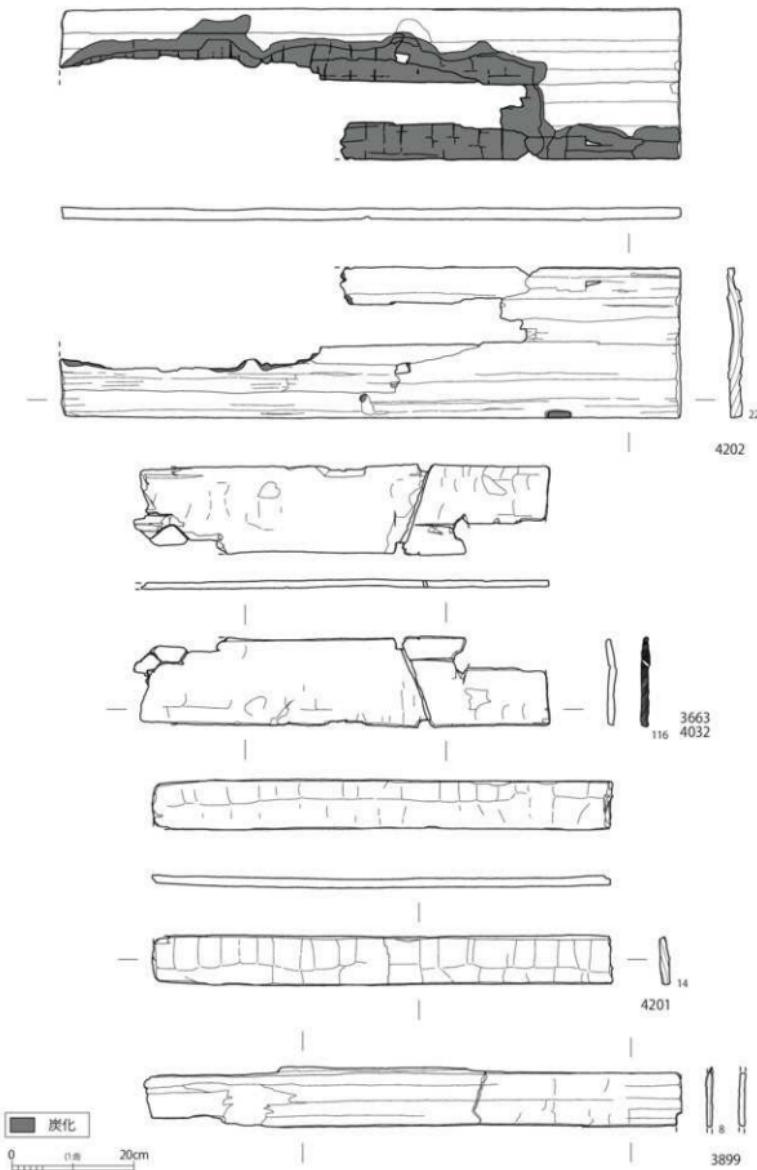
第IV-12-76図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物6



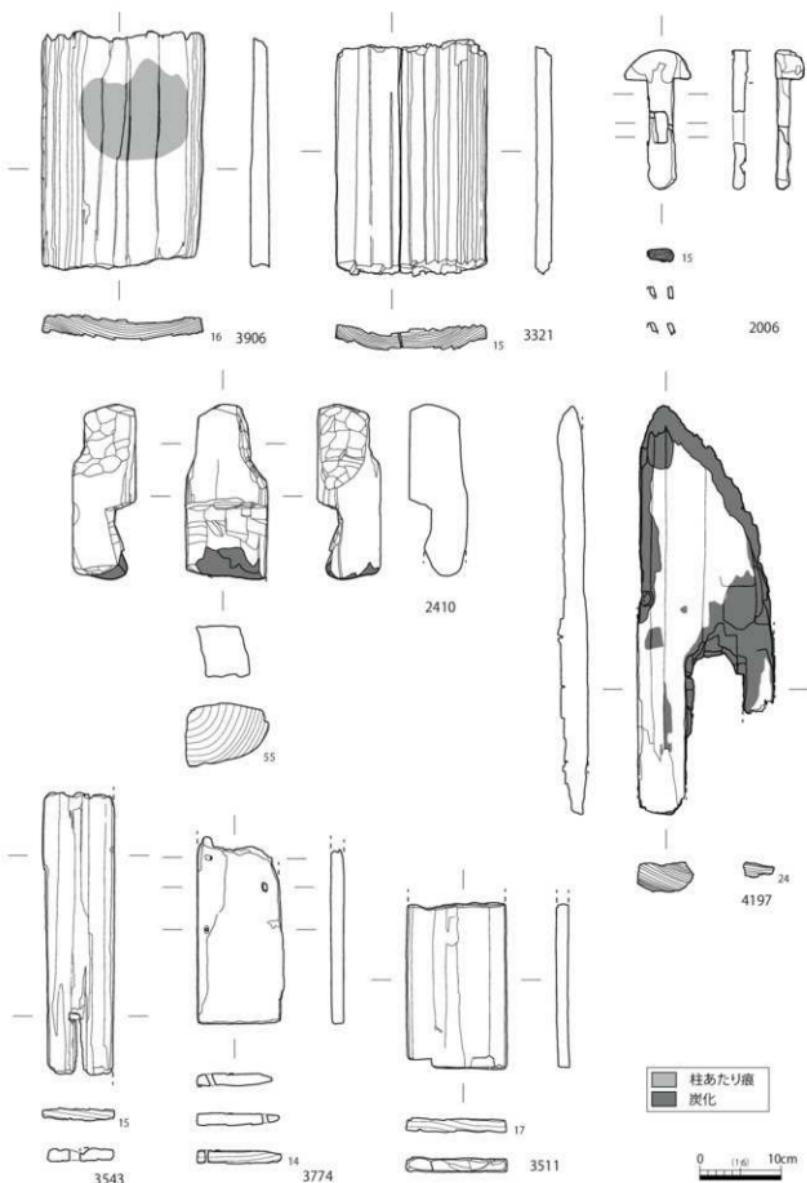
第IV-12-77図 2区 第11面 流路(2S-1057) 出土遺物7

綴孔が施されている部分があり、一部には綴じ紐の痕跡が残る。3801は芯持ち丸太、3759は芯去材でいずれも杭と推定される。

建築部材とみられるものは多数出土した。一部が炭化した部材が多くみられる。樹種同定したのは4195、3494、3663・4032のみでありいずれもスギと同定されたが、他の部材も針葉樹とみられる。3865、3866は、幅15cm前後、厚さ4.0～4.8cmと比較的断面が大きな部材で、構造材の可能性がある。いずれも上端部は調査都合によりやむなく切断したものである。4195は、断面台形状をな

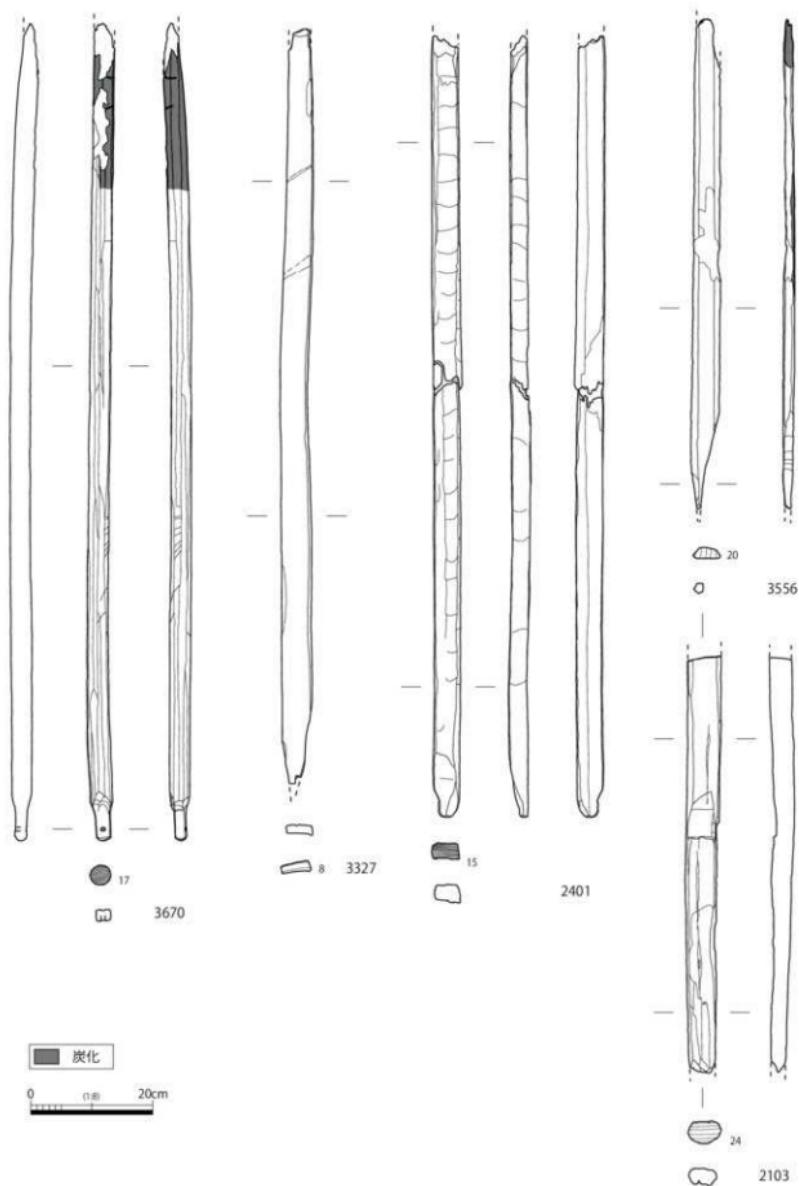


第IV-12-78図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物8

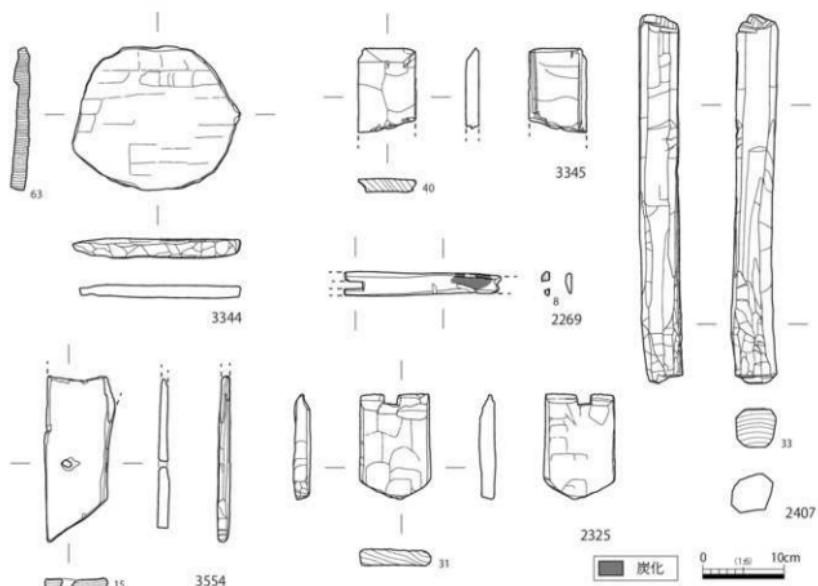


第IV-12-79図 2区 第11面 流路(2 S-1057) 出土遺物9

第12節 第11面(X層下面)の調査



第IV-12-80図 2区 第11面 流路(2S-1057) 出土遺物10



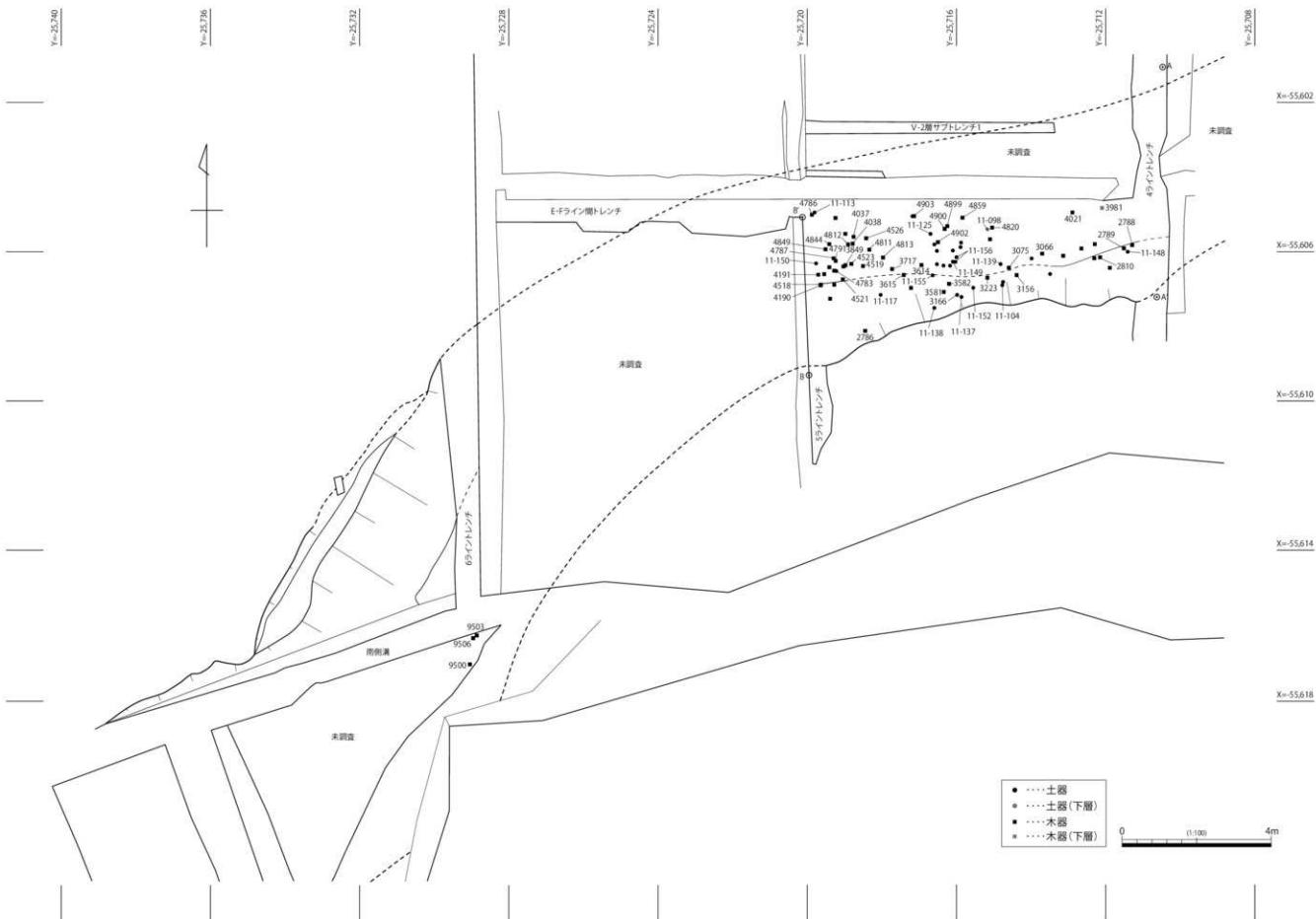
第IV-12-81図 2区 第11面 流路(2S-1057) 出土遺物11

す芯去材で、端部は平らに整形し柄穴を穿つ。柄穴の上部にも縦断が三角形状に欠き込みを有する。4194は長さ204cm、3494は長さ323.5cmの長い板である。4195、4194とも上部は焼損する。3494は左側を欠損する。3887は長さ139.8cm、幅20.8cm、厚さ1.8cmの追柱目の板で、上部側縁には、長さ約4cm、幅約4mmの欠き込みがある。ほぼ中央に平面方形の掘り込みが表裏ともにあるが、貫通しない。3777は、長さ116cm、幅17.8cm、厚さ1.9cmの板で端部にえつり孔とみられる方孔を有す。壁板であろうか。4202は表裏とも割肌状を呈するやや厚手の板で裏面の多くを焼損する。3663、4032は、左側面に2箇所、右側面に1箇所の欠き込みがあり、幅広の欠き込みは長さ8.4cm、加工幅約1.8cmのもので、裏面から斜めに加工されている。右側には3.5×2.5cm程度とみられる不整形な孔を有する。4201、3899は幅8~10cmの板である。

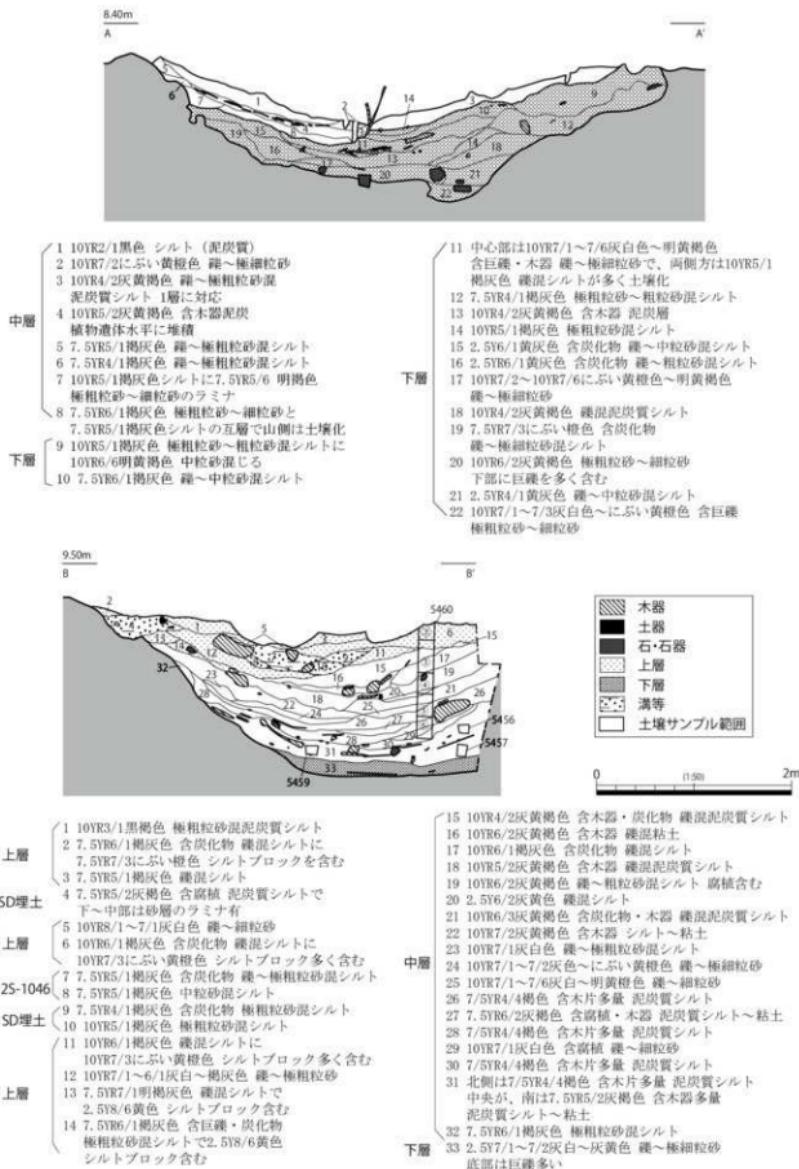
建物関連の部材として、礎板・木栓・梯子がある。3906、3221は礎板とみられ、3906には直径13cm程度の柱あたりが観察される。2006は栓である。3321、2006はスギと同定された。4197は焼損したもので、梯子の下端部とみられるが、裏面が焼損しており定かではない。3543、3774、3511は幅の狭い板材である。3670は芯去材で、直径3.8cm程度の断面円形の棒材である。端部を柄状に加工し、柄中央に目釘の残る孔を有する。2401は、幅4.7cm、厚さ2.9cm、2103は、幅5.5cm、厚さ3.8cmの棒状の材である。2103には欠き込みがある。

3227、3556は、幅5cm前後、厚さ1.8cm前後の杭とみられる。

用途不明の木器もある。3344は平面円形であるが両端部がやや突出する。厚さ2.4cmの板状を呈し、全面を荒加工されている。樹種はケヤキで、容器の蓋の未成品であろうか。3554は中央に円孔



第N-12-82図 2区 第11面 谷(2 S-840) 平面図及び出土遺物分布図



第IV-12-83図 2区 第11面 谷(2S-840) 断面図

を有するもので、右側面の緩やかなカーブはやや丁寧に加工されている。下端部は転用後の切断かもしれない。2325の上端部は枘穴部を切断したものとみられる。2269は、幅3.0 cm、厚さ0.9 cmの細い部材で、端部に枘穴とみられる加工を有する。2407は断面隅丸方形の芯去材である。

出土した土器から、乙亥正V期頃に埋没した流路と考えられる。(岡野)

谷

2 S-840(第IV-12-82 ~ 151図)

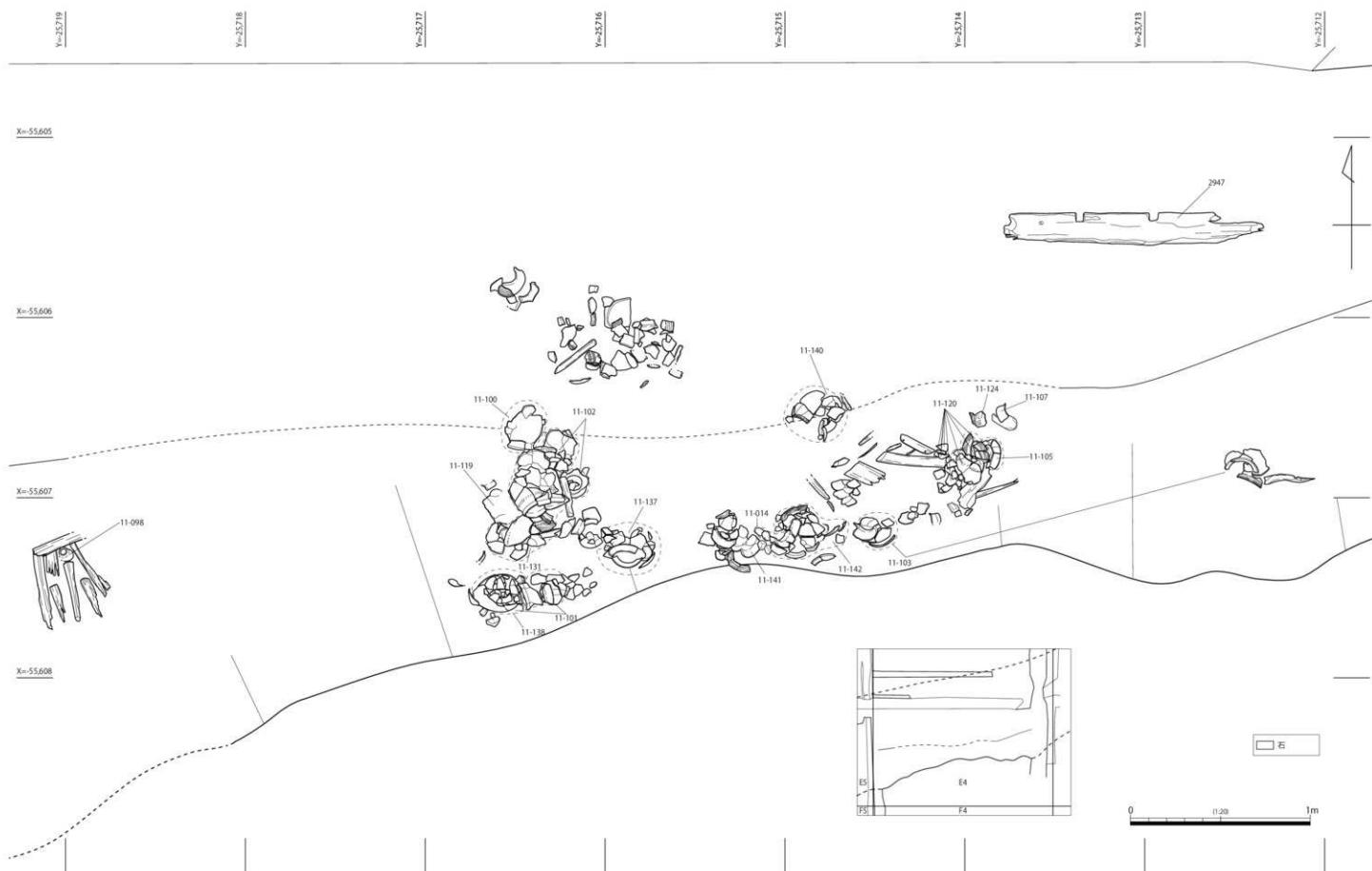
人為的なものではなく、自然の谷地形と考えられる。遺跡の南側の丘陵裾部に沿って弧状に形成された谷である。調査を行ったのは6ライントレーナーの西側で南側溝に挟まれた場所と、4ライントレーナーと5ライントレーナーの間で、E・Fライン間トレーナーの南側の2カ所だけである。

谷の幅は約50mで、西から東にかけて徐々に浅くなる。6ライントレーナーから10m東の5ライントレーナーまでの底面標高の比高差は0.9mで、5ライントレーナーから10m東の4ライントレーナーまでの底面標高の比高差は0.75mとなり、東ほど傾斜が緩やかになる。東側溝断面では78~82層、2ライントレーナー断面では43、44層が平面の位置からは2 S-840に相当する可能性があり、谷地形そのものが明確でなくなる。

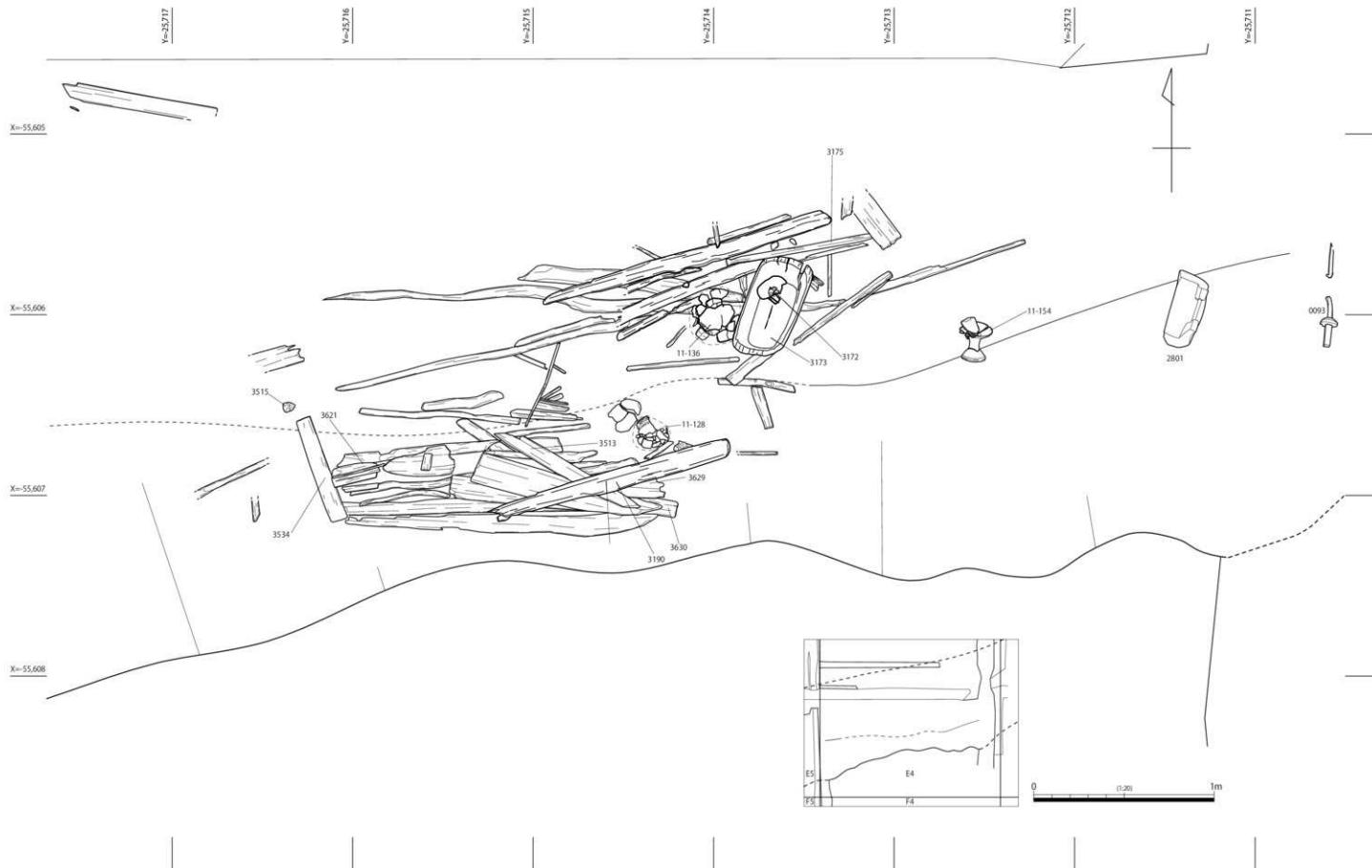
4、5ライントレーナーの土層断面(第IV-12-83図)では、埋土は大きく上・中・下層の3層に分層でき、上層は地山に由来するシルトブロックを多く含む礫～砂混じりのシルト層である。上層中には、いくつかの溝ないし流路と考えられる堆積が認められる。中層は、植物遺体を多く含む泥炭質シルト層で遺物を多量に含む。下層は礫を含む砂層で最下層には巨礫を多く含む。4ライントレーナーには上層に相当する堆積は認められず、中層も薄い一方、下層は厚く堆積する。5ライントレーナーは、中層が厚く堆積する一方で下層の砂層は薄い。中層と下層の境界の標高差は約0.5mで、底面の標高差よりも緩やかになっており、下流側の堆積がより進んだ状況を示す。5ライントレーナー側で中層が厚く堆積するのは、後述するように多量の木器や土器が谷をせき止めるように廃棄されたことによると考えられる。下層からは乙亥正I~V期の土器が出土しており、この段階には流水があったと考えられる。中層には乙亥正V~VI期の土器が多量に含まれることから、乙亥正V~VI期の中で流水のある段階から湿地化した状態へと谷の堆積環境が変化したと考えられる。さらに、上層ではブロック土を含む土層が堆積し、人為的に土を入れて谷を埋めた可能性も考えられる。こうした行為は、X層に淘汰の悪いブロック土を多量に含む土層が堆積することから、乙亥正VI期頃まで行われたと考えられる。

なお、6ライントレーナー以西の調査では、断面で底面までの堆積状況を確認するのと同時進行で調査を行ったため、上層、中層、下層の区別を断面に当てはめることはできない。ただし、調査では便宜的に以下のように分層して遺物の取り上げを行った。上層は、最初の泥炭質シルト層の直上までの炭化物を含む粗粒砂混じりのシルトないし粘土を主体とする層である。下層は、最下層の砂層とその直上の泥炭質シルト層及び同層と概ね同レベルの肩部のシルトないし粘土である。中層は概ね上層と下層の間の炭化物や腐植を多く含むシルトないし粘土層である。

6ライントレーナー及び5ライントレーナー断面で年代測定、珪藻分析、花粉分析、種実同定、寄生虫卵分析を行った(第V章第2~6節参照)。年代測定結果は、中層の最下層から上層にかけて概ね新しくなる。中層最下層の校正暦年代は 2σ calBC408~calBC375、上層はcalAD60~calAD210である。中層最下層は出土土器の年代に比べてやや古いか、上層の年代は出土土器の年代観に近いと考えられ



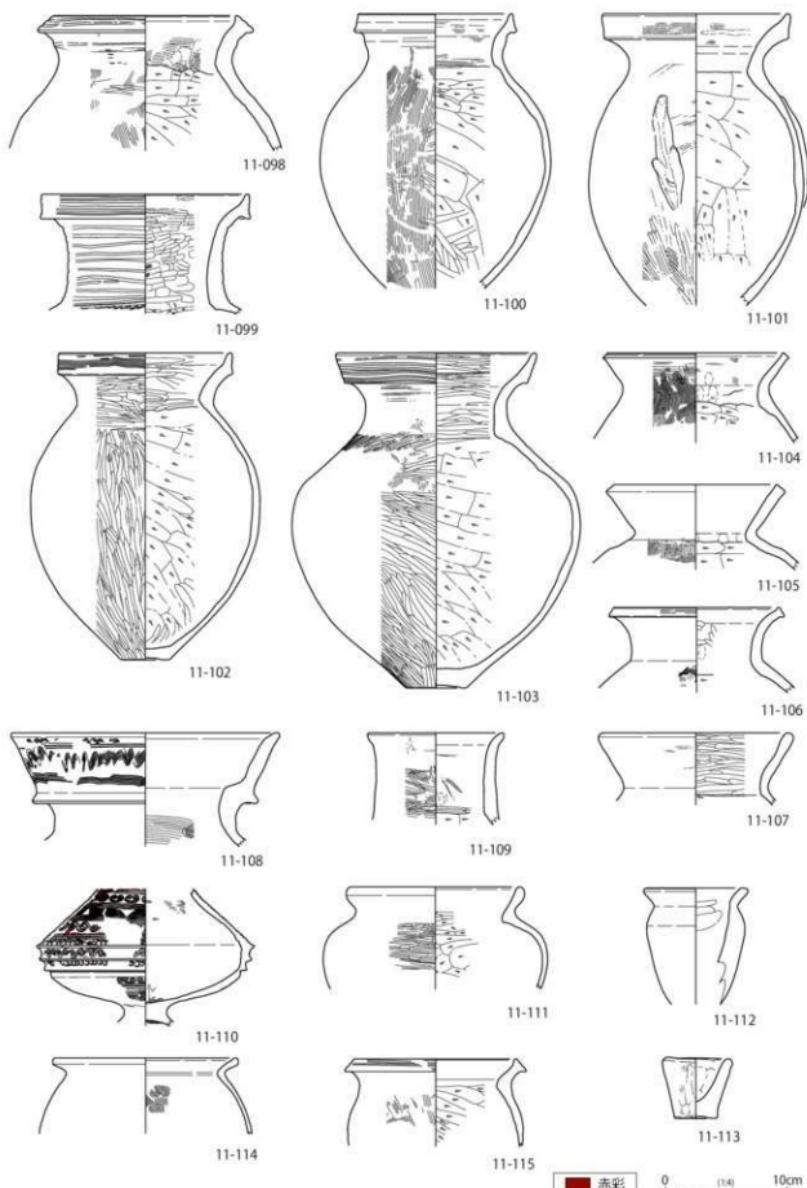
第IV-12-84図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(1段目:全体図)



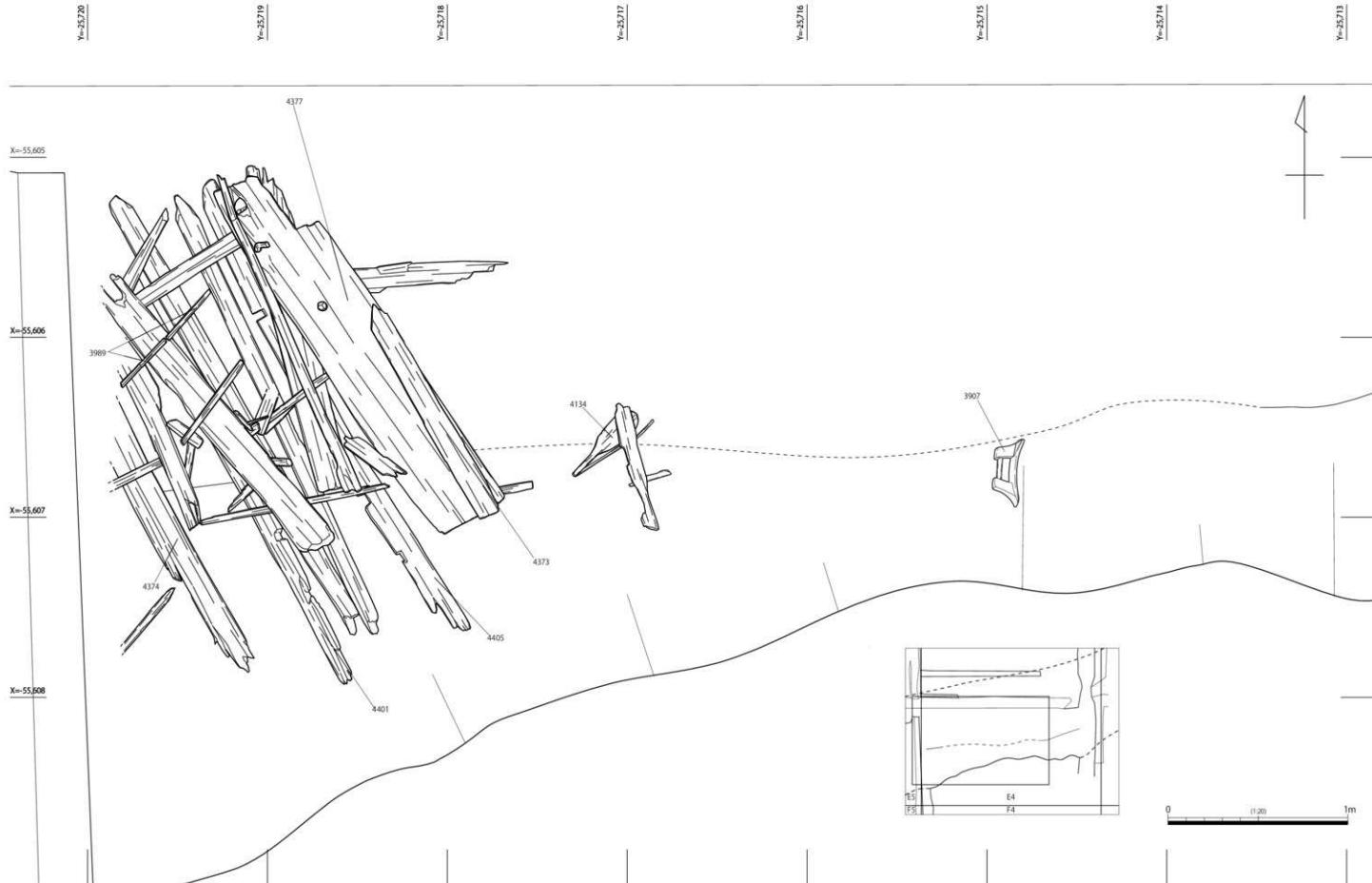
第IV-12-85図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(2段目:全体図)



第12-86図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図(3段目: 全体図)



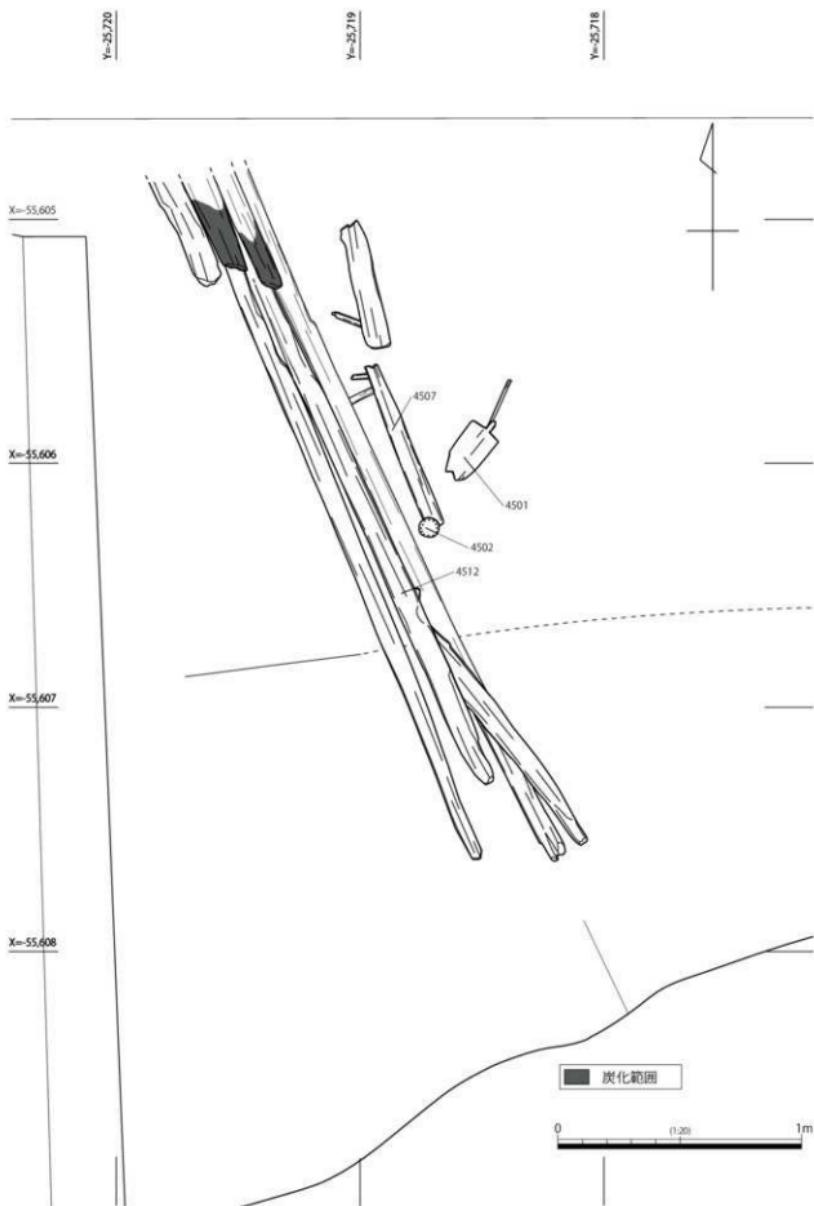
第IV-12-87図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物1



第IV-12-88図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-1段目:木器出土状況拡大図)



第IV-12-89図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-1段目を除く全体図)

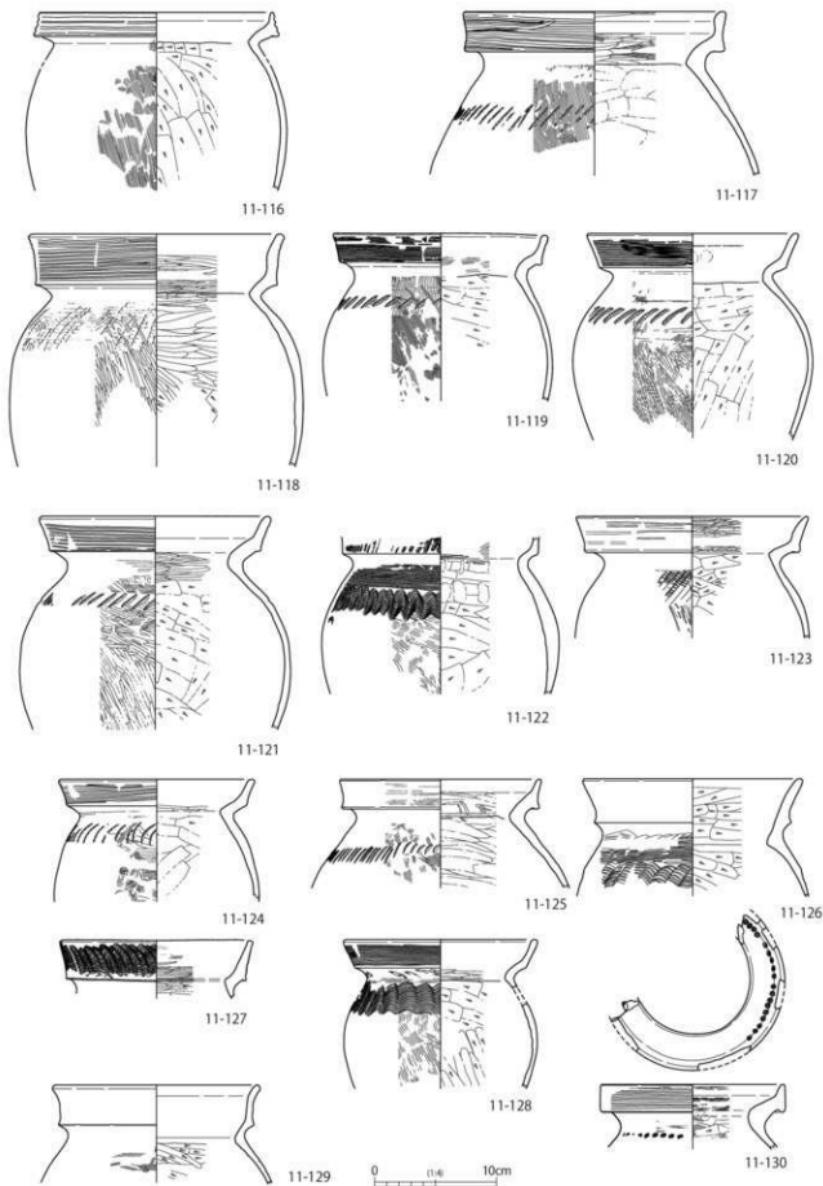


第IV-12-90図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図

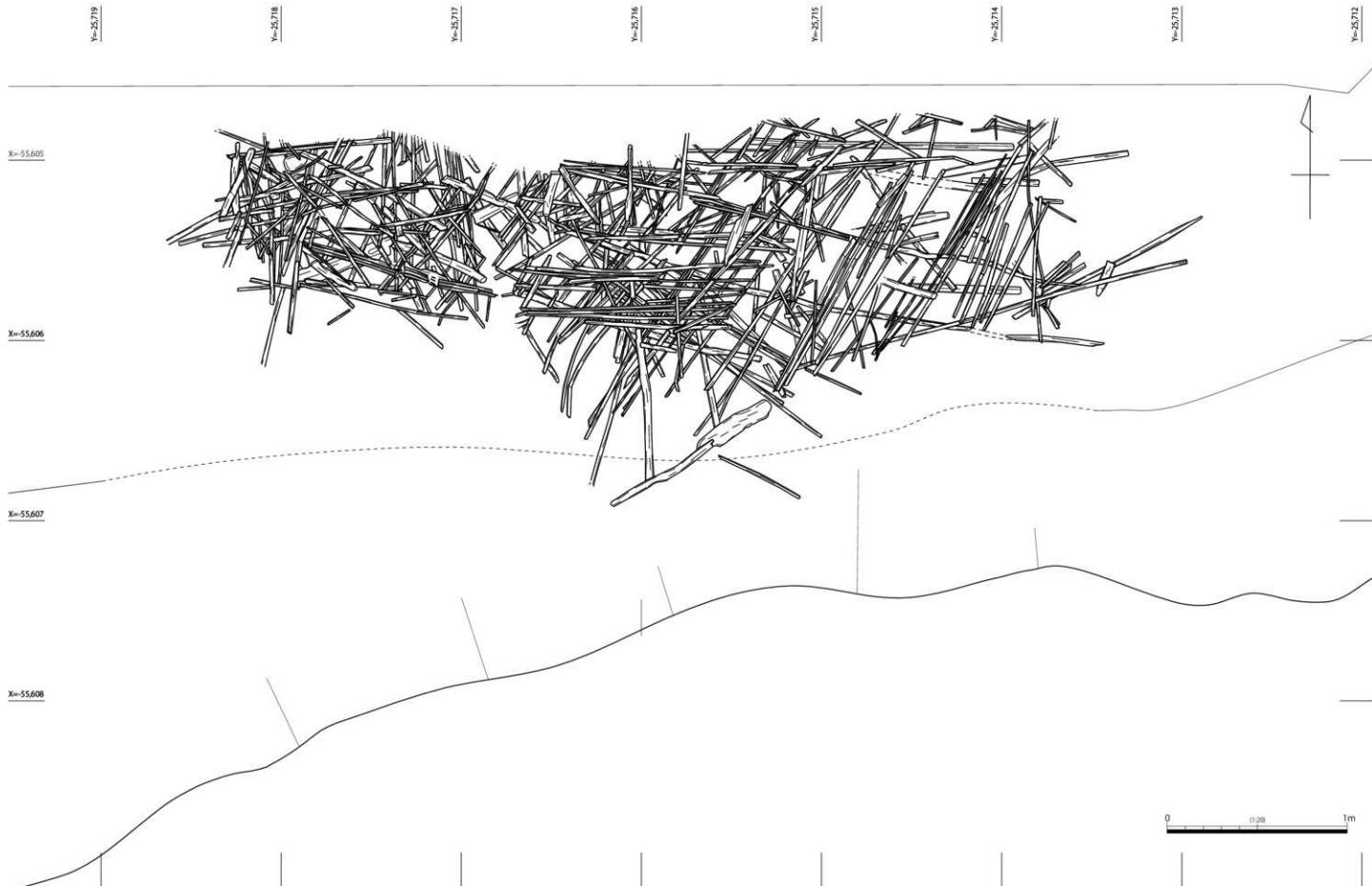
(3-2段目: 木器出土状況拡大図)



第IV-12-91図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-2段目を除く全体図)



第IV-12-92図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物2



第IV-12-93図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞出土状況拡大図)

る。種実同定では、栽培種としてはイネ類が多量に出土し、その他にモモ、アワ、エゴマが検出されている。なお、寄生虫卵は検出されたが、一般的な汚染状況を示す程度であった。

遺物は埋土中から多量に出土したが、6ライントレーナー以西の調査箇所では遺物の出土量は少なかった。多量に出土した遺物の大半は、4～5ライン間の調査地の中層からのものである。出土レベルの上位のものからまとまりごとに1段目、2段目の順に整理して報告する。1段目は、上層下部から中層上部の南側肩部にかけてまとまって出土した土器などである(第IV-12-84図)。谷の肩部に近いところで出土した土器は、土圧で潰れたような状態で、ほぼ完形に復元できる個体を含む。肩部から若干離れた場所で出土した個体は、大型の破片が多く、完形に復元できるような個体は無かった。出土した土器はほとんどが壺である。土器のほかには建築部材と考えられるものが谷の中央部寄りで出土した。

2段目は、建築部材などの木器がまとまって出土した(第IV-12-85図)。建築部材などの長い木器は、谷の南側肩部に沿って、東西方向を長軸に重なって出土した。これらの建築部材以外にも、槽、高杯の脚部、腰掛、刀形などの木器も出土した。刀形は、平成27年度の調査時に、4ライントレーナーから出土したもので、4ライントレーナー断面との対比から中層に帰属すると判断した。土器は破片が多く出土したほか、ほぼ完形の器台や壺が出土した。

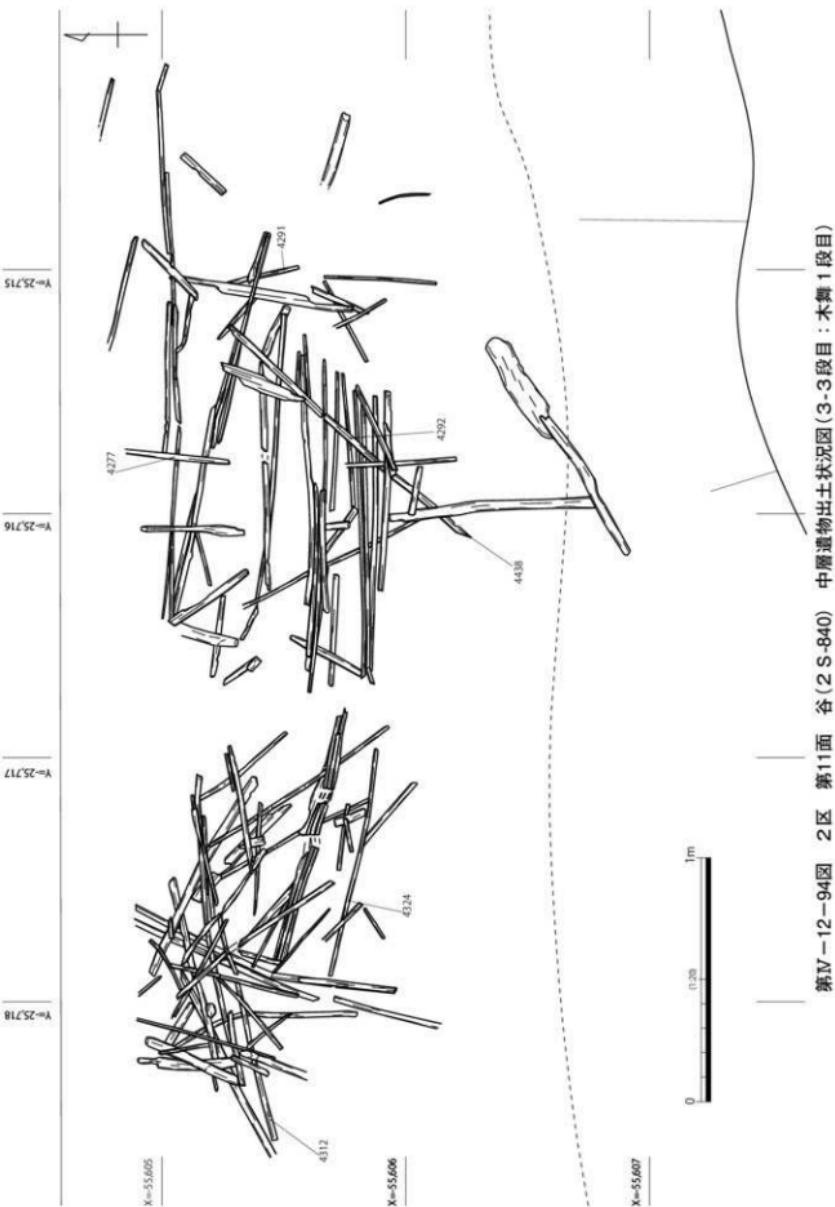
3段目は、下層の直上辺りまで出土した多量の建築部材である(第IV-12-86図)。現地の調査では、取り上げ準備が進んだ箇所から隨時取り上げたため、十分な記録は取れなかつたが、図上で各遺物の上下関係を整理して報告する。

全体的な出土状況としては、一部炭化しているものが散見され、南側肩部から谷の中心部に向けてある程度のまとまりごとにまとめて廃棄されたと考えられる。4～5ライントレーナーの真ん中辺りから西側にかけて板材がまとまって出土し、それらと一部重複しつつ真ん中辺りから東側に幅と厚さが1～2cm程度の細長い木舞が多量に折り重なって出土した。板材は長さ3mを超える部材もあり、谷を横切るように出土した。板材の一端は肩部の斜面にもたれかかるような状態で、谷の横断面形に沿うように湾曲して出土し、特に長いものは北側の未調査部分へ続いている。

これらの内一番上にある3-1段目は、5ライントレーナー際から出土した板材のまとまりである(第IV-12-88図)。床材ないし壁材かと思われる材や幅15cm程度で厚みがある材の片側長片に一定間隔で加工を施した材が重なって出土した。これらの部材の間には短く細い材が直交して出土した。ほかには、やや離れて櫛や腰掛(2段目の腰掛と接合)が出土した。

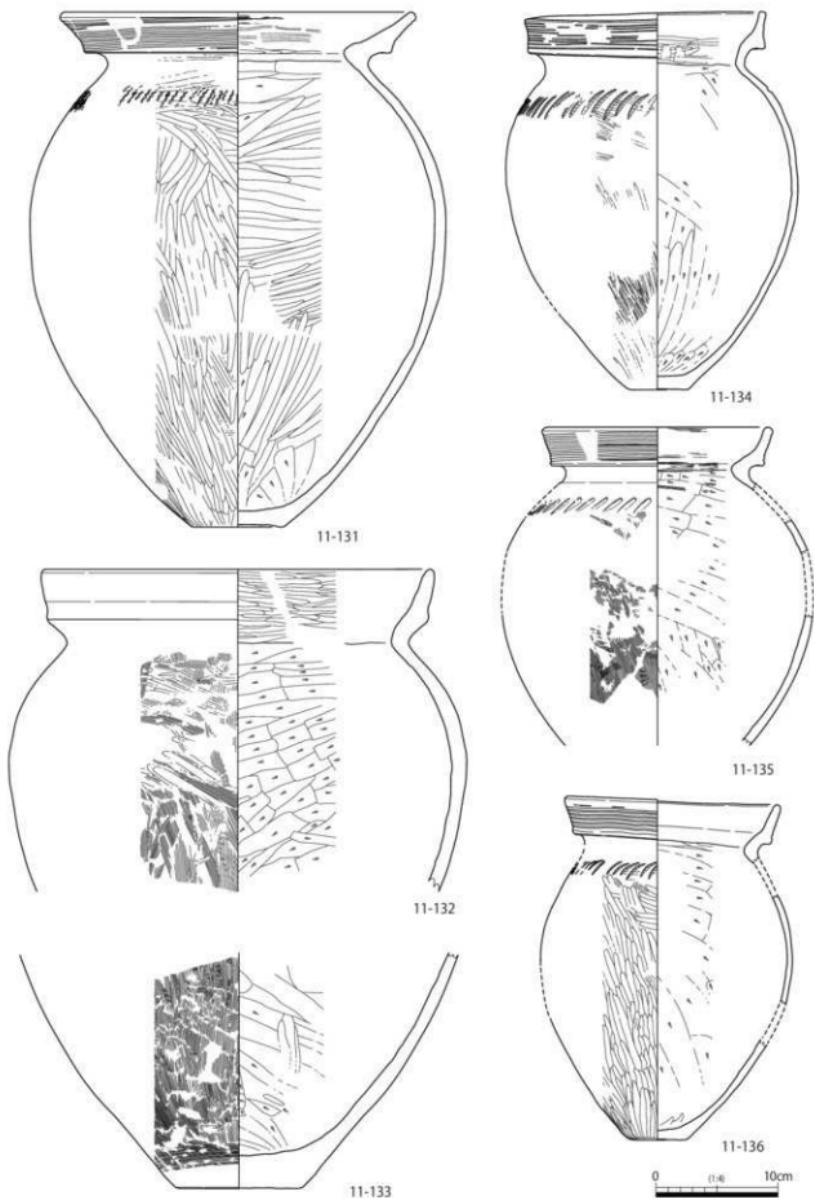
3-2段目(第IV-12-89、90図)は、3-1段目のすぐ下から出土した板材である。細長い材が3本と、長さ0.5～1mの短めの材3本、鋤、直径7cm程の円形の板の縁に沿って多数の穿孔をした板などが出土した。長い建築部材の北端は未調査区に続いている。また、これらの上にさらに3本の材が載っており、2本は炭化していた。これらの材は大半が未調査区のもので詳細は不明だが、これらの部材が焼失した建物の一部であることを示すと考えられる。

3-3段目(第IV-12-93図)は、幅と厚さが1～2cm程度の小舞、幅10cm程度の垂木などの屋根材と考えられる部材の集積である。これらの材は、垂木と考えられる幅広の材の上に直交して重なる小舞を1つの単位として仕分けると5段程度の重なりに分解できる。中には、上下関係が入れ替わっているものも若干認められるが、概ね材の重なりと方向に基づいて仕分けている。1段目(第IV-12-94図)は、雑然としていて材と材の関係がはっきりしないが、調査範囲内で東側のまとまりと西側

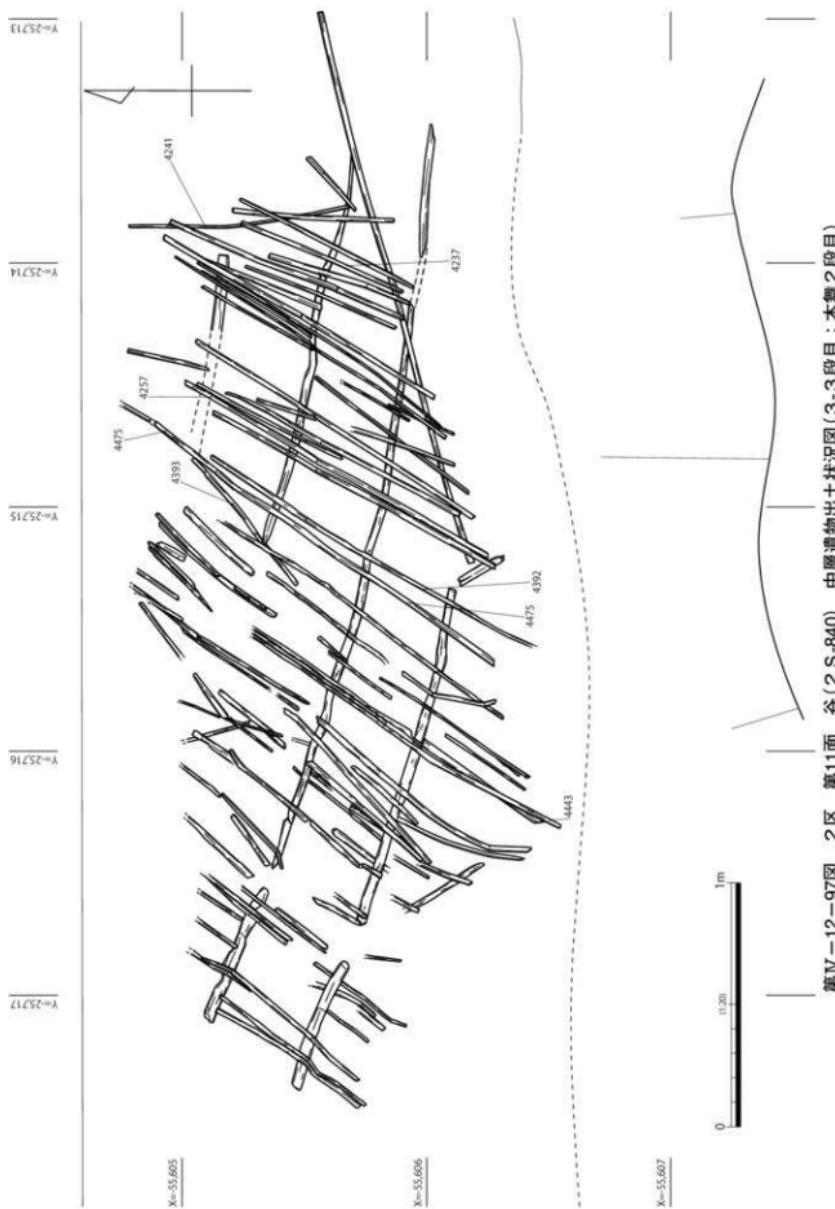


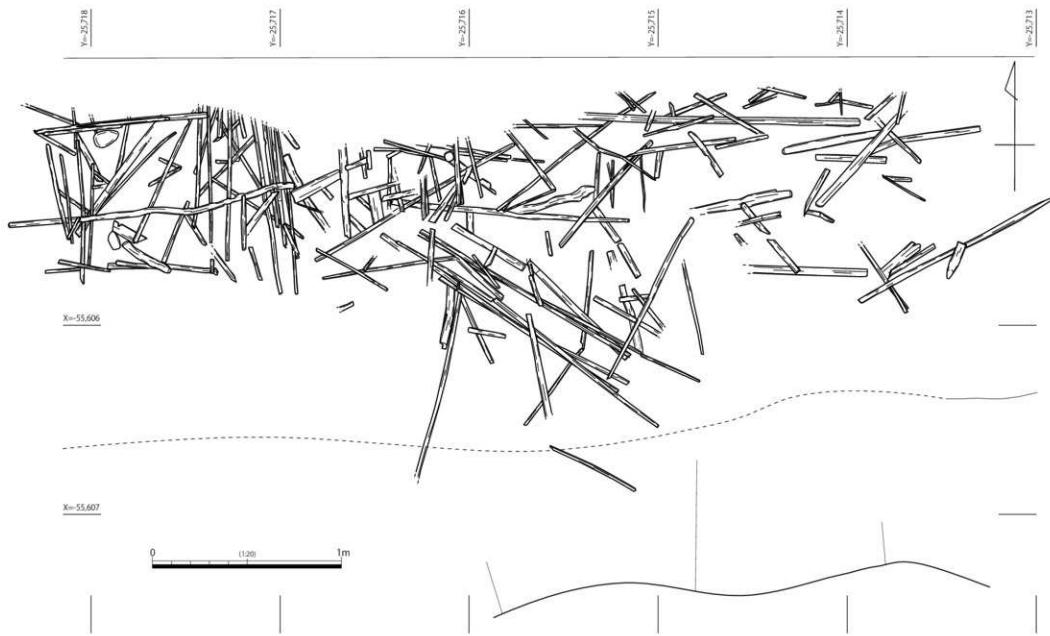


第IV-12-95図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞1段目を除く全体図)

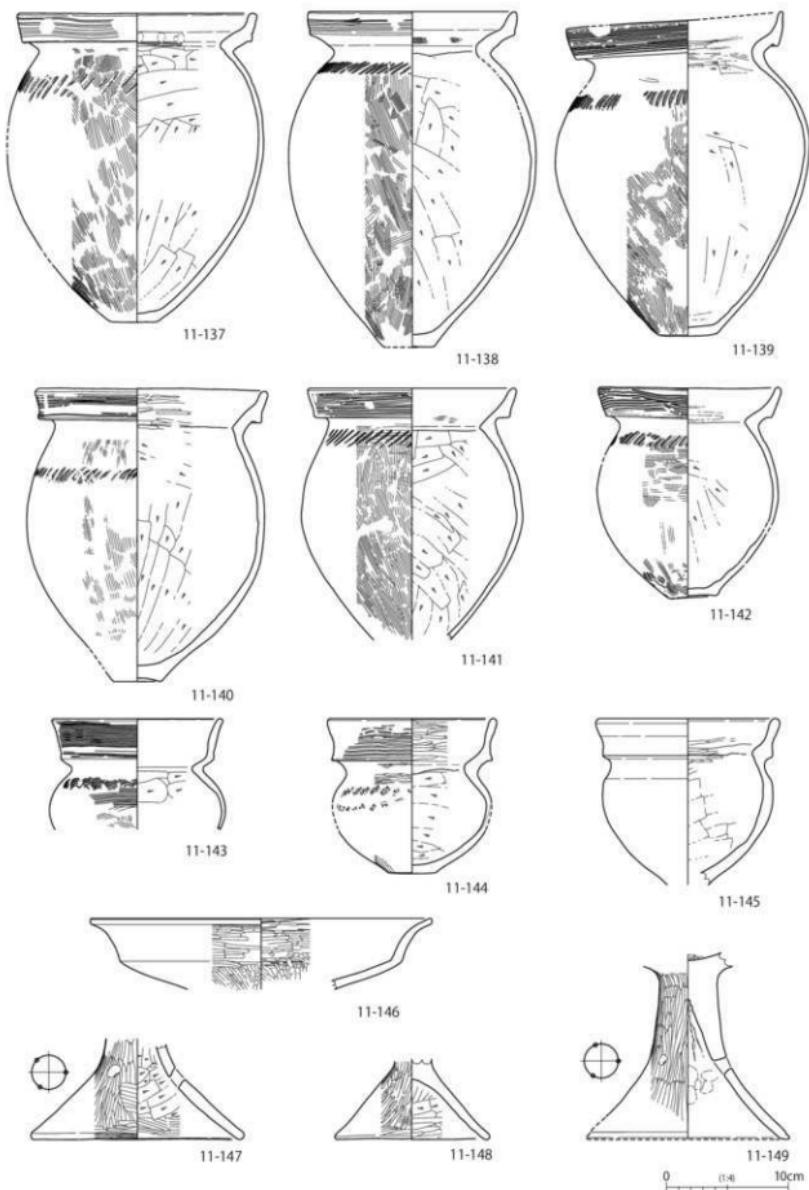


第IV-12-96図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物3

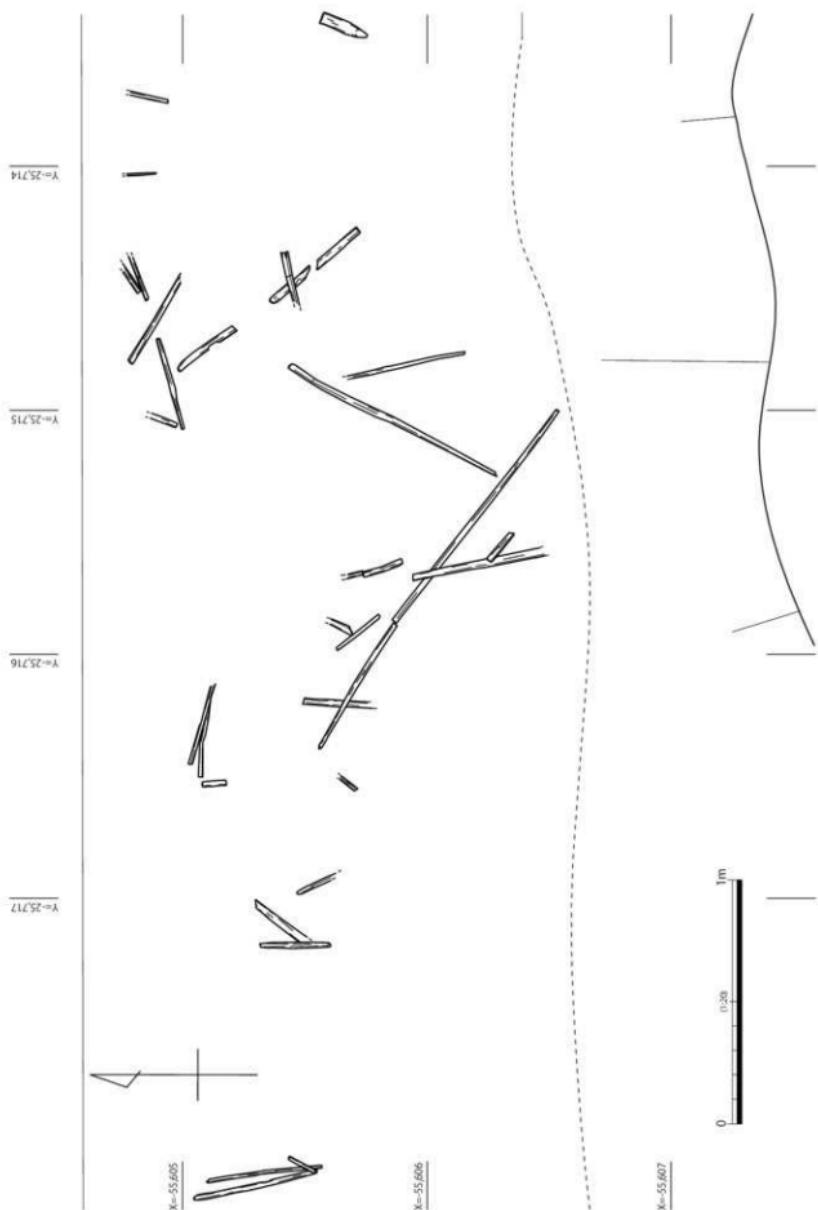




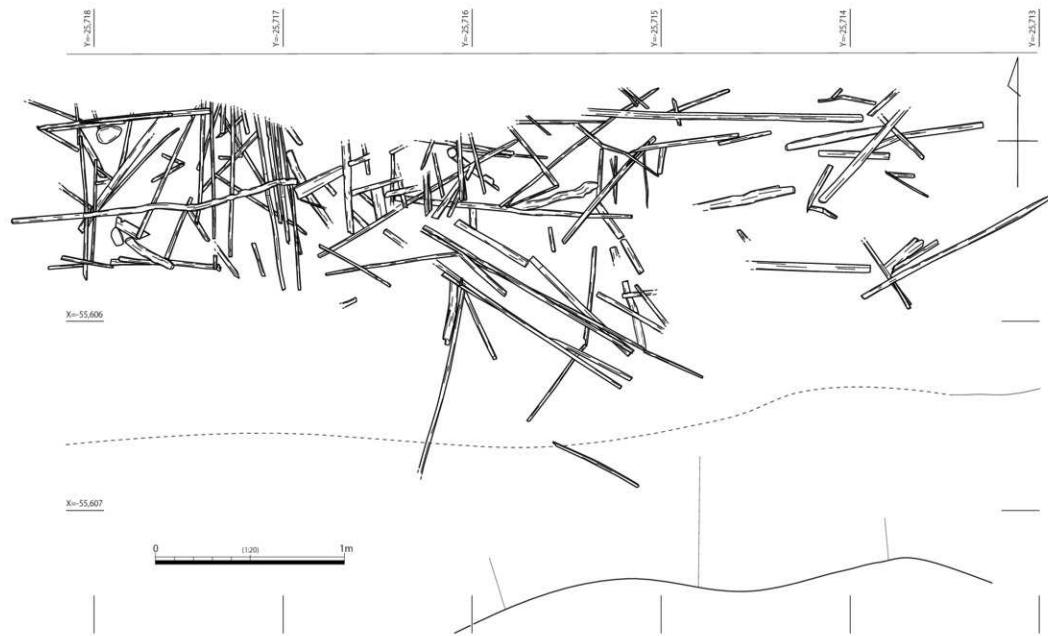
第IV-12-98図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞2段目を除く全体図)



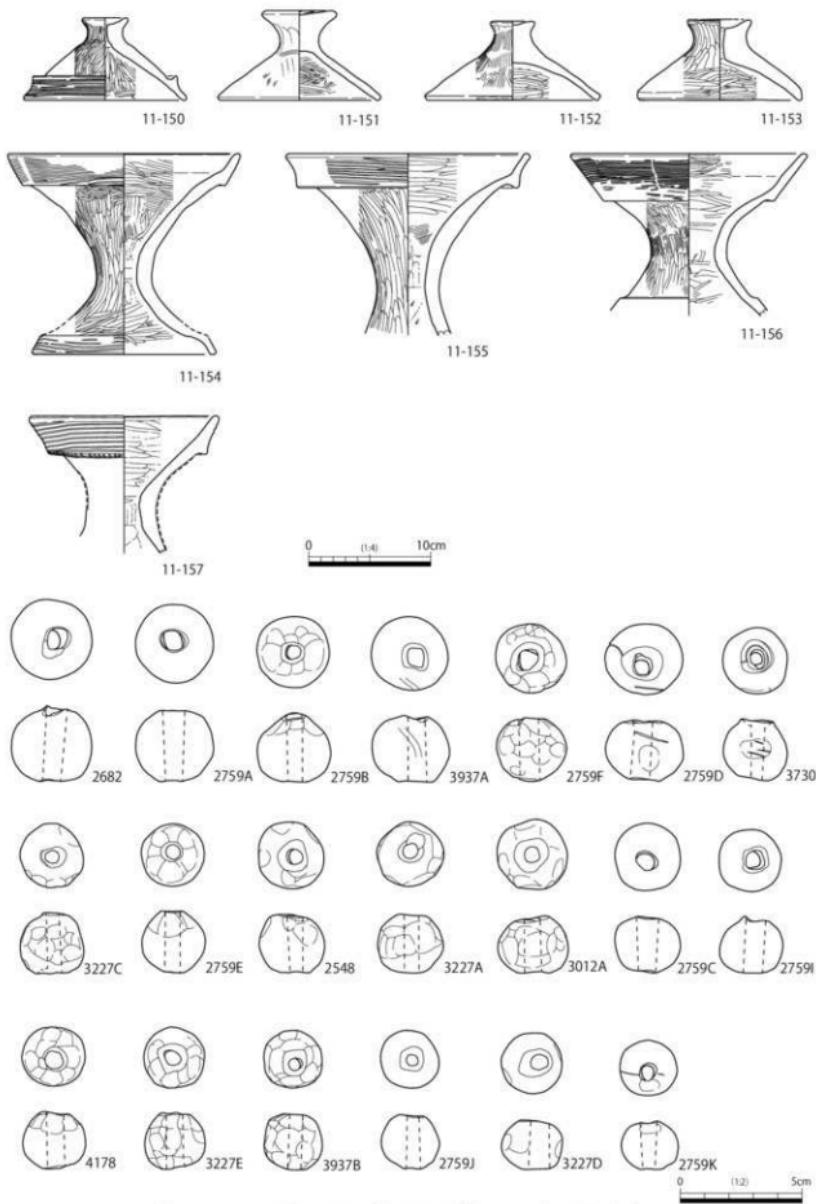
第IV-12-99図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物4



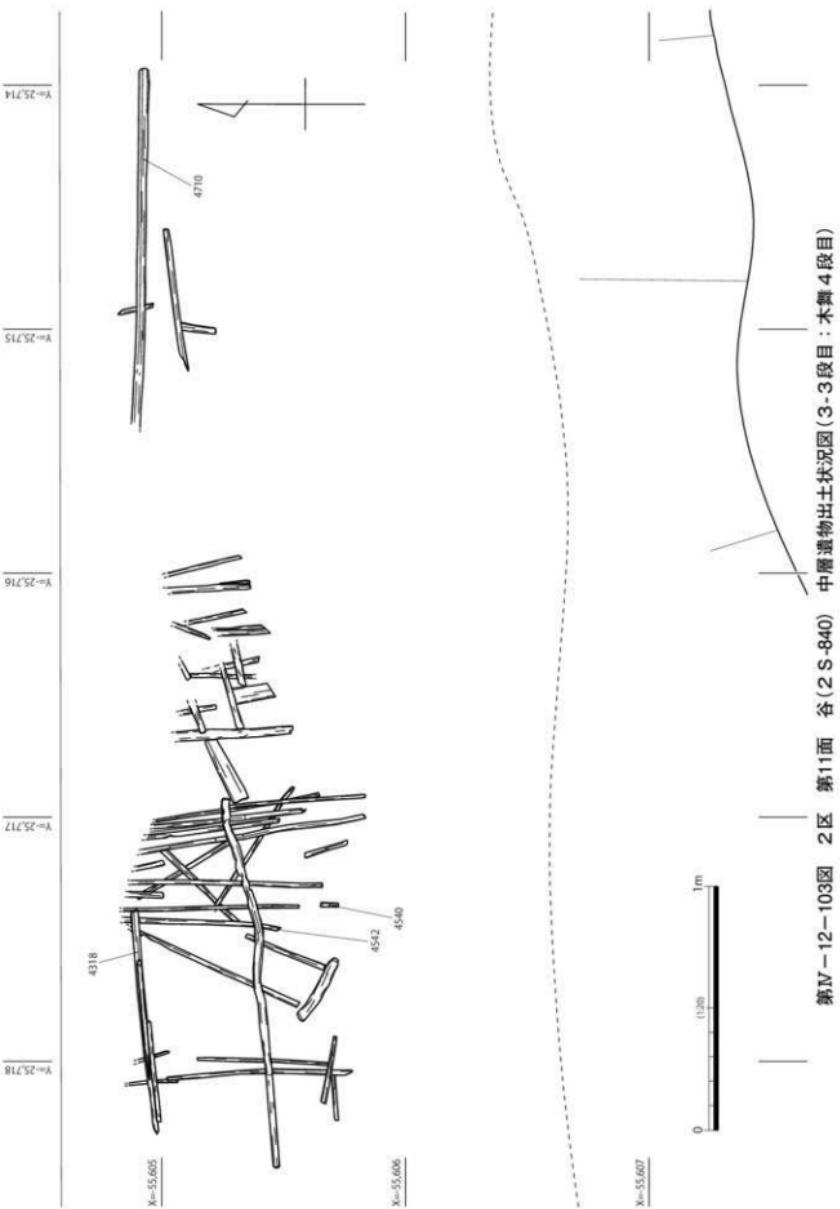
第IV-12-100図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞3段目)

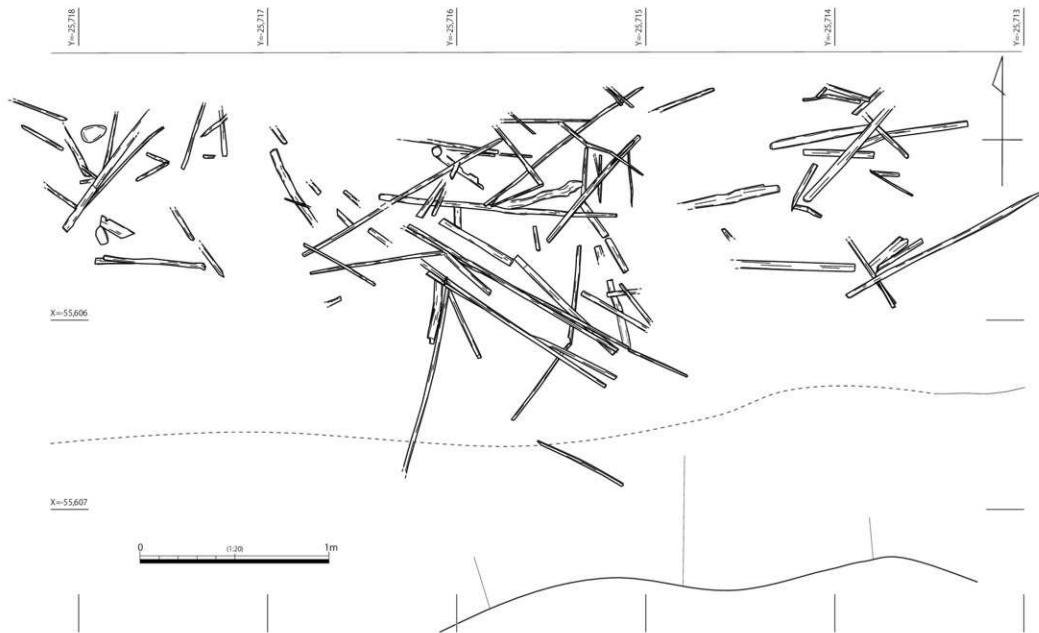


第IV-12-101図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞3段目を除く全体図)



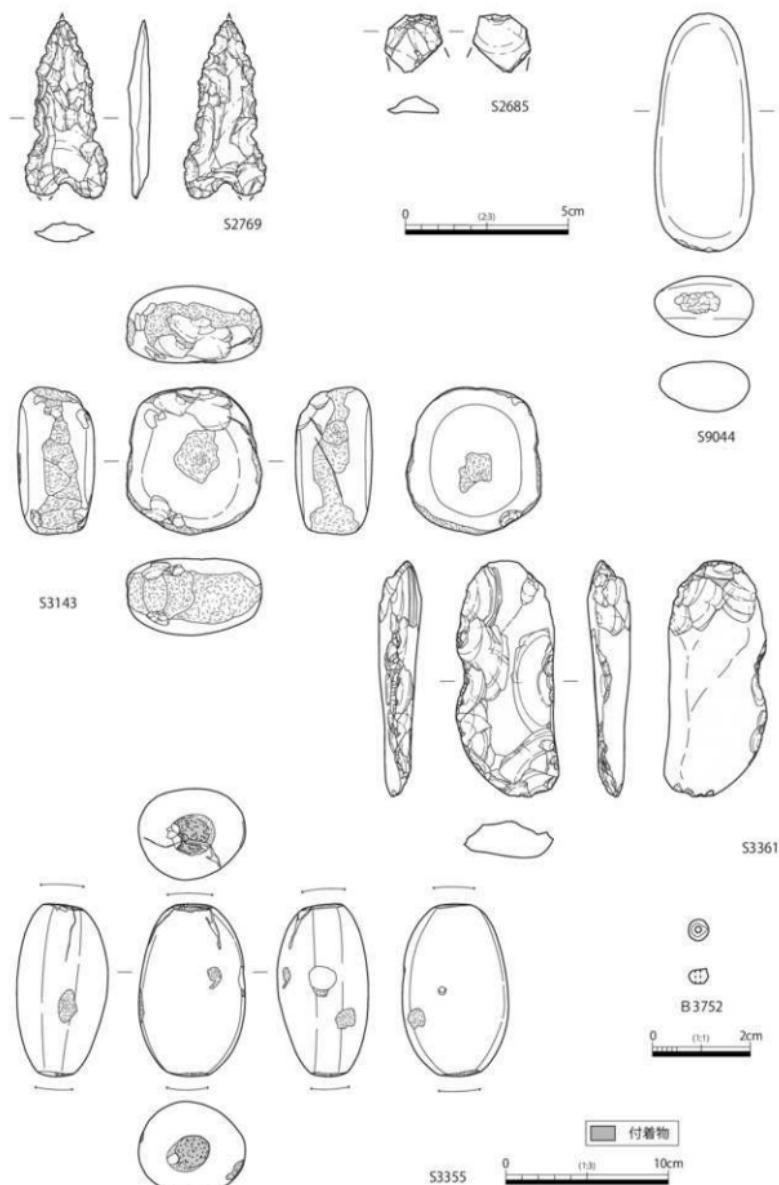
第IV-12-102図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物5



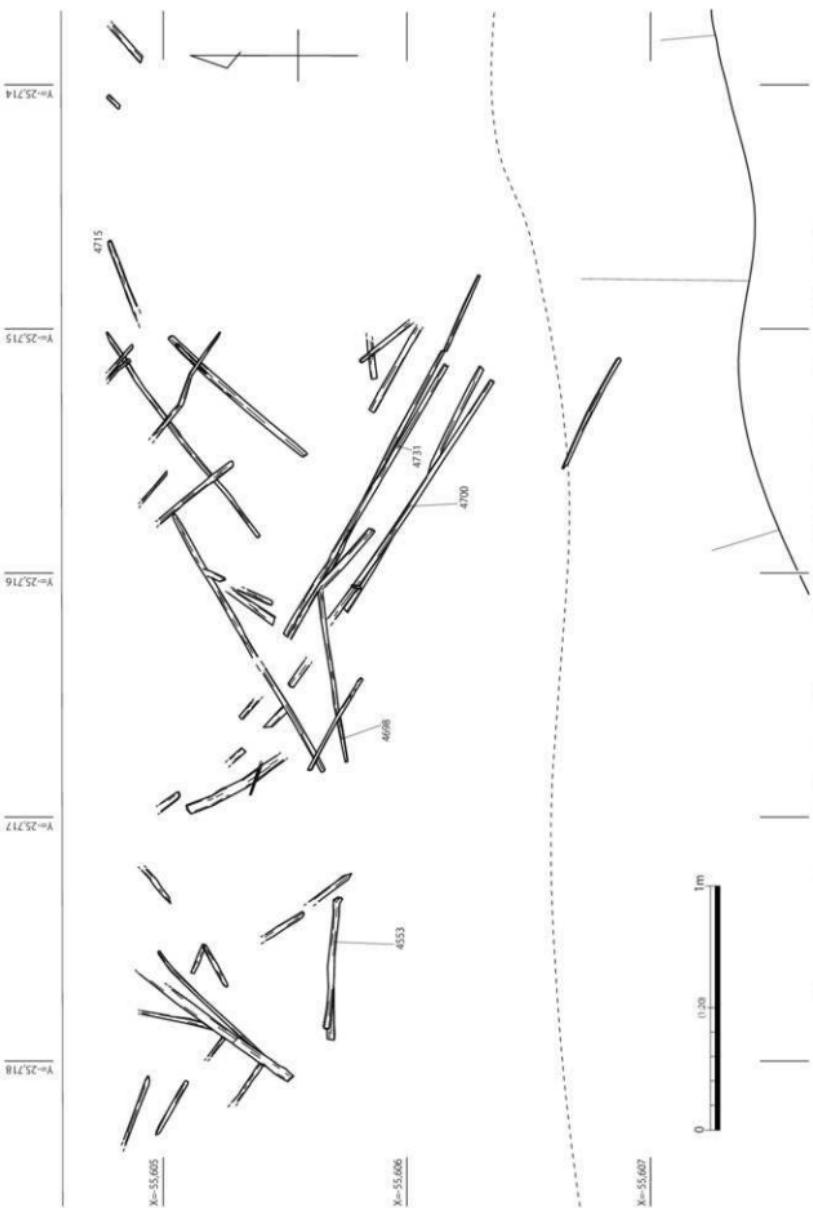


第IV-12-104図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞4段目を除く全体図)

第12節 第11面(X層下面)の調査



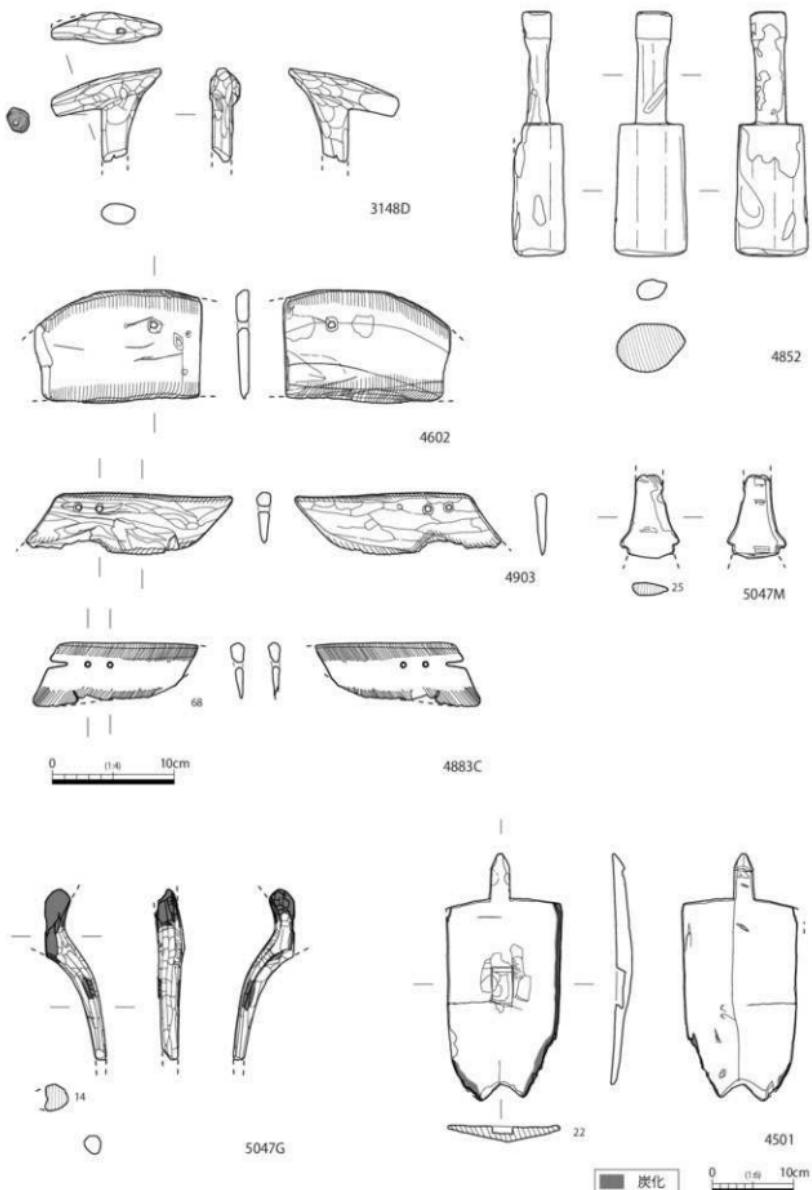
第IV-12-105図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物6



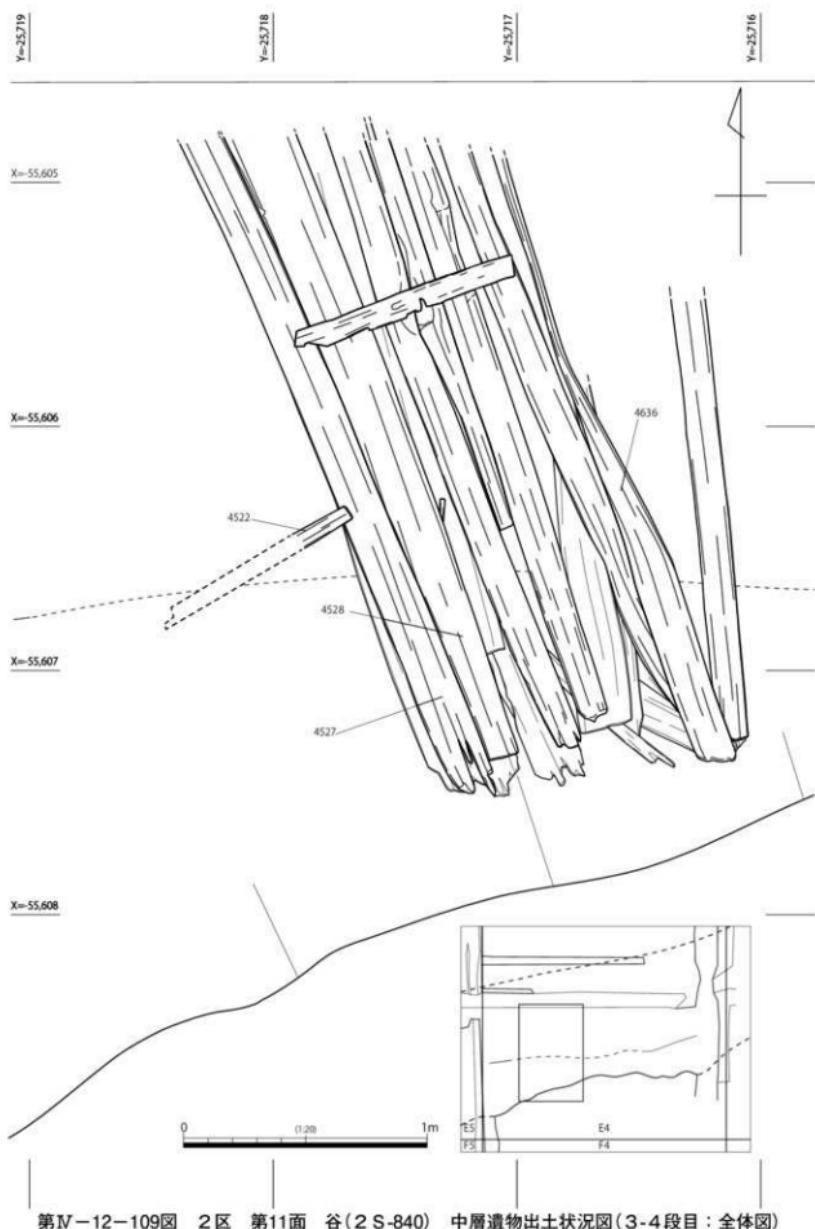
第IV-12-106図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞5段目)



第IV-12-107図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図(3-3段目:木舞6段目)

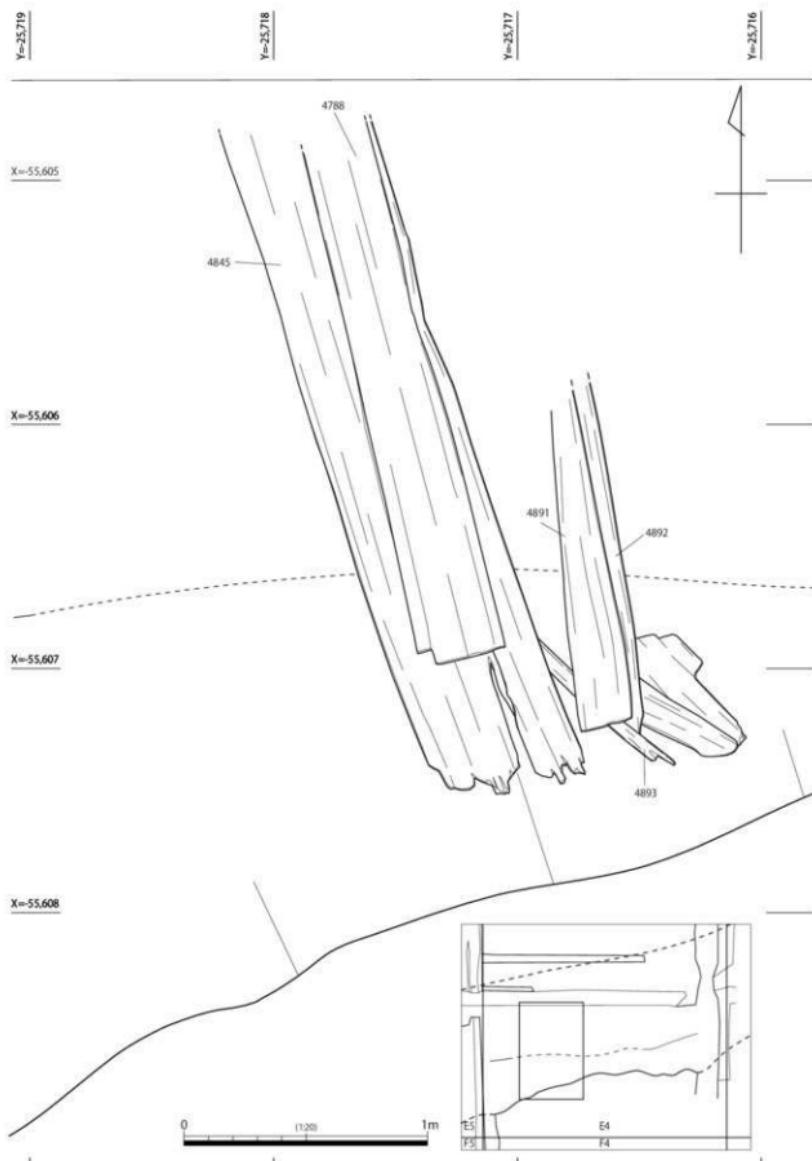


第IV-12-108図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物7

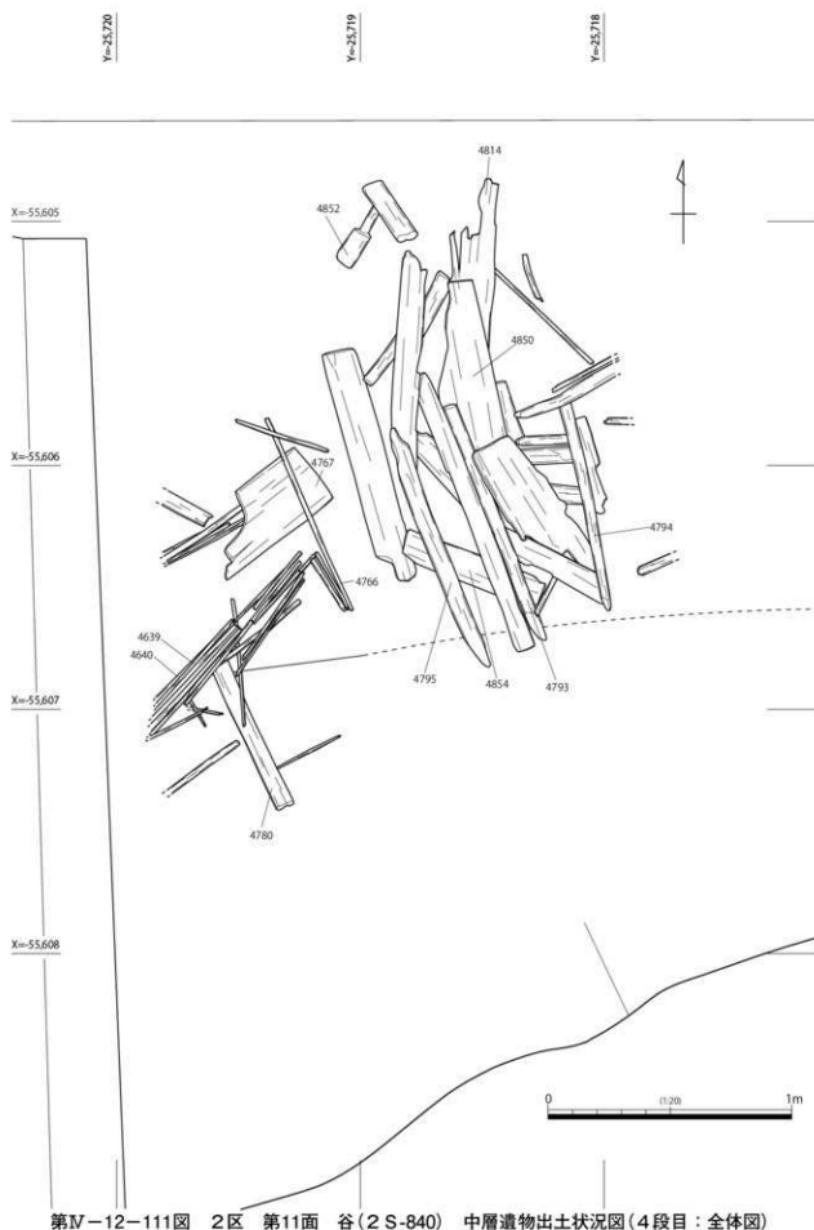


第IV-12-109図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(3-4段目: 全体図)

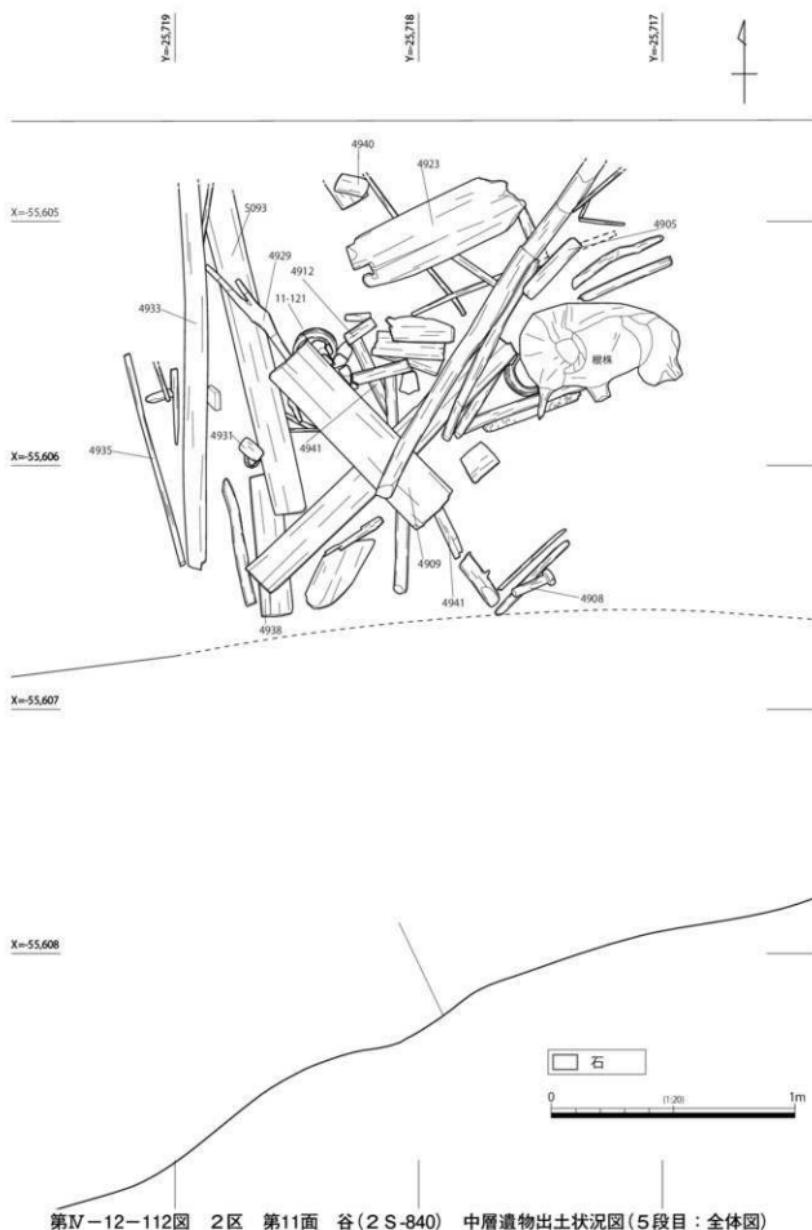
第12節 第11面(X層下面)の調査

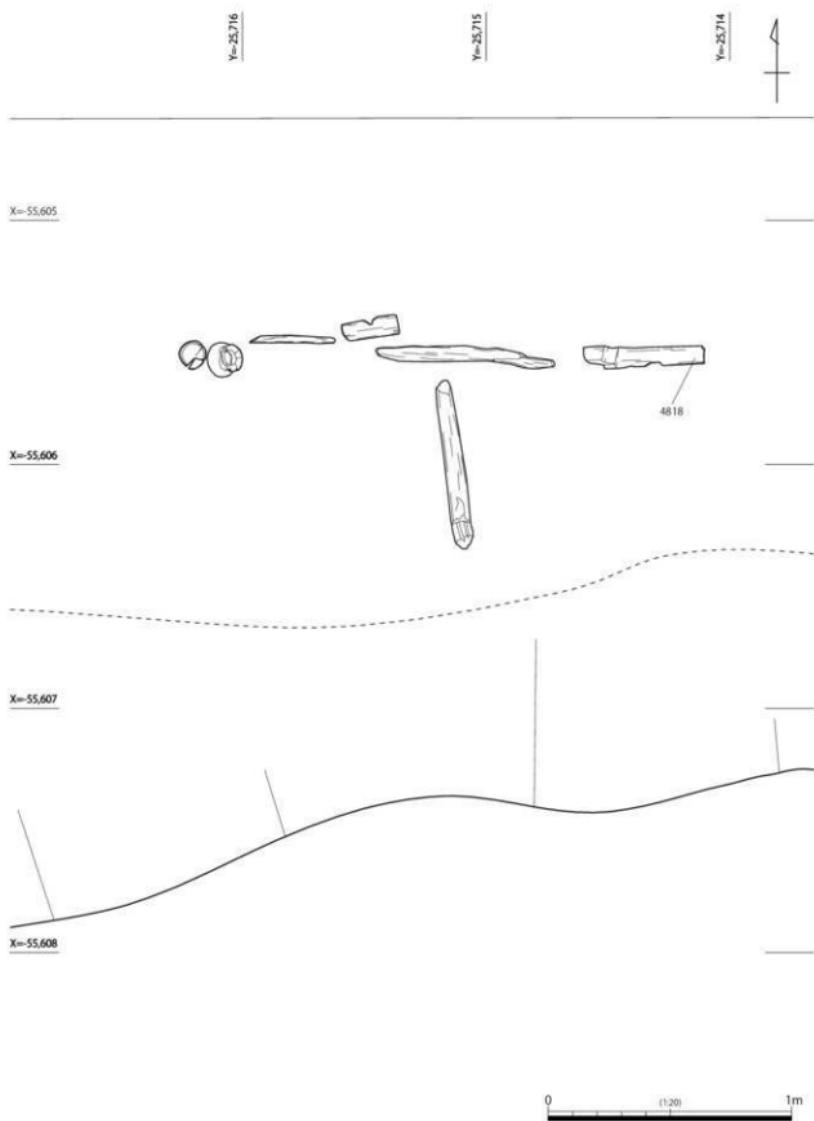


第IV-12-110図 2区 第11面 谷(2S-840) 中層遺物出土状況図(3-5段目: 全体図)

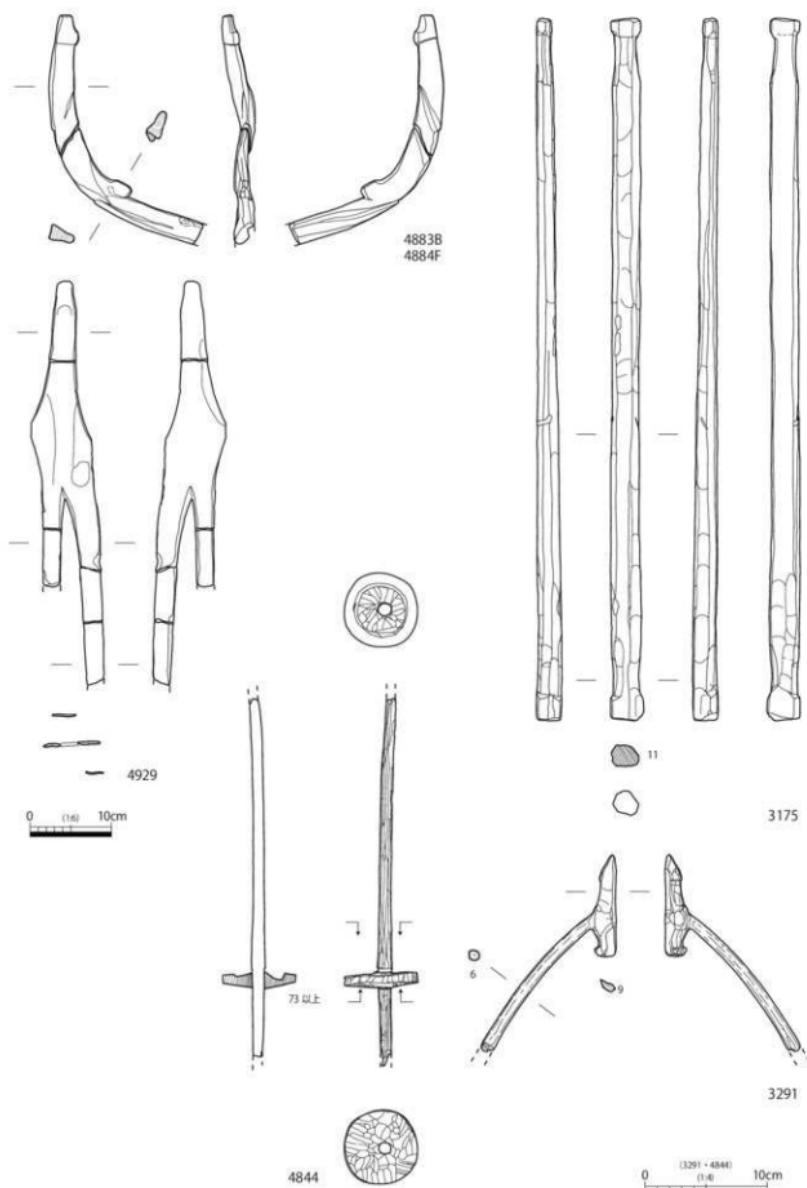


第12節 第11面(X層下面)の調査

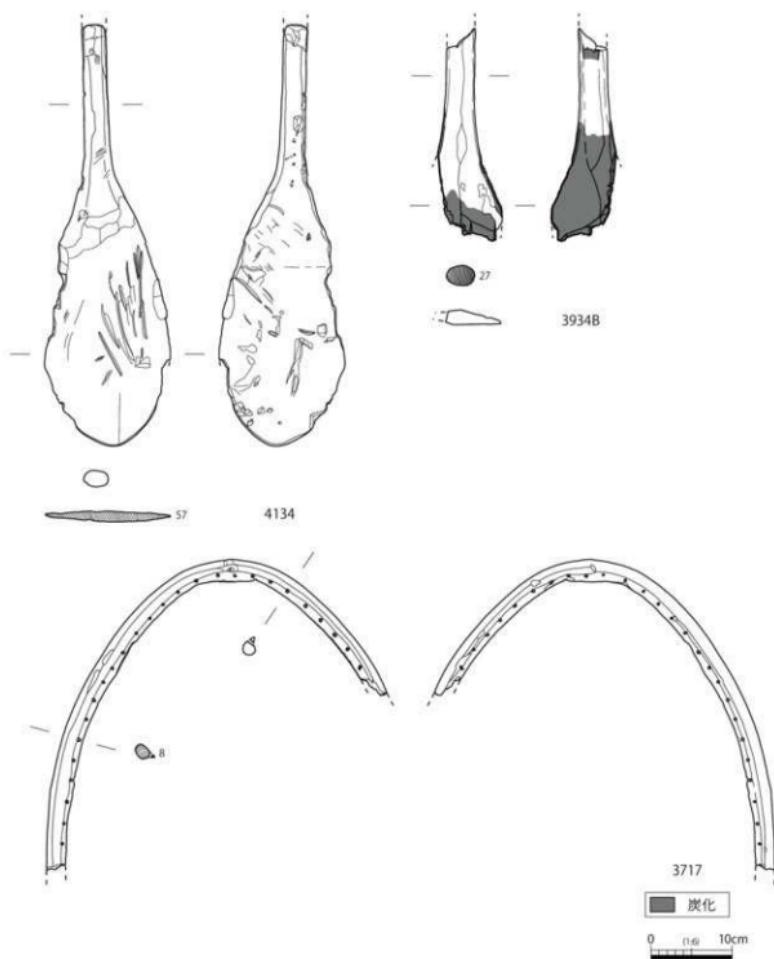




第IV-12-113図 2区 第11面 谷(2 S-840) 中層遺物出土状況図(6段目: 全体図)

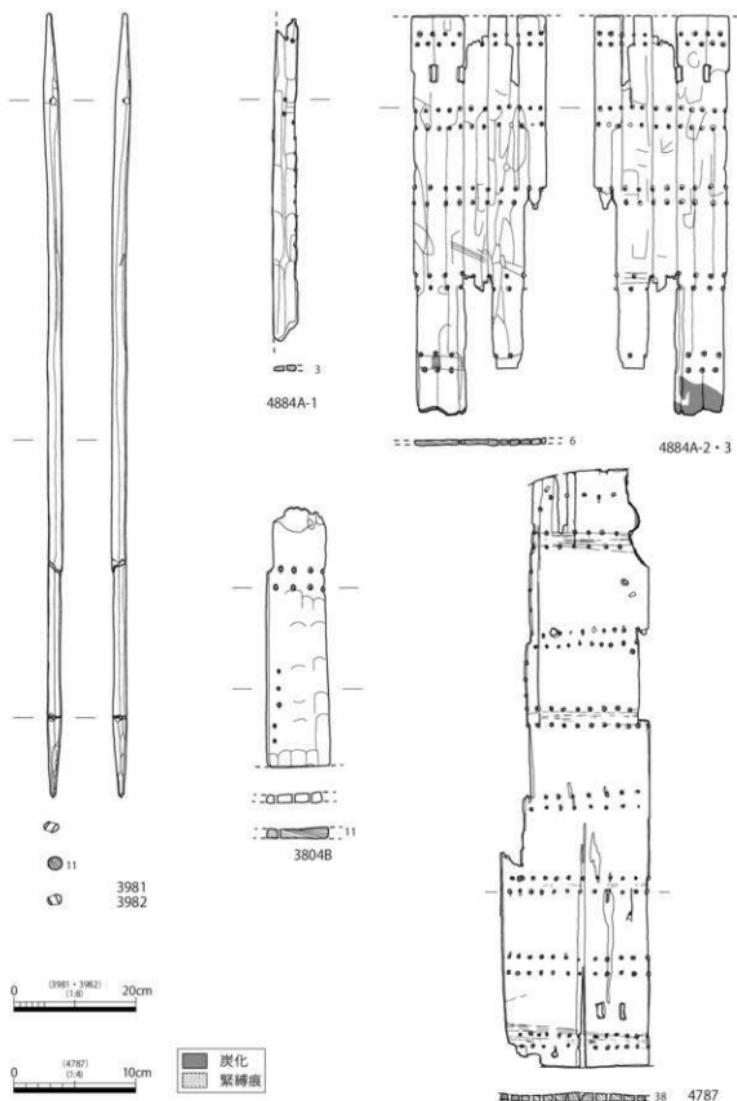


第IV-12-114図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物8



第IV-12-115図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物9

のまとまりがある。東側は、ほぼ東西方向の材と南北方向の材が重なっている。西側のまとまりは東北東から西南西方向の材とそれに直交する材がある。2段目(第IV-12-95、97図)は、垂木と考えられる長さ3m前後の材が東南東から西北西に4本あり、それらの上に直交して細い材がある。垂木の間隔は約0.4mで一定である。小舞は一定間隔では並んでいない。廃棄される時に原位置を留めていないか、由来の異なる材も一緒に廃棄された可能性、仕分け方に問題がある可能性などが考えられる。垂木と小舞の縋縛の痕跡がないか現地調査でも確認したが、はっきりした痕跡は認められなかった。埋土中には湿地に生える植物遺体が集積しており、それらの圧痕とも区別がつきにくい。3段目(第



第IV-12-116図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物10

IV-12-98、100図)は、2段目と4段目の間に挟まれた材の方向が不定のものである。4段目(第IV-12-101、103図)は主に、調査範囲の西側半分で垂木と考えられる材の下に直交した小舞がある。垂木は2本あり約0.5mの間隔で平行に並ぶ。小舞はそれらの下で密に並び、2段目と同様に間隔は一定しない。これらも、緊縛状況ははっきりしないが、2段目同様垂木の間隔が一定であることから廃棄時にはある程度固定された状態だったと推定できる。5、6段目(第IV-12-104、106、107図)では、材の方向性や大きさなどには明瞭な規則性はあまり認められなかった。

3-4段目(図IV-12-109)と3-5段目(図IV-12-110)は長さ3m以上の板材が重なって、谷を横切って出土した。壁材ないし床材などの可能性がある。

これら建築部材の集積の下に4段目から6段目(第IV-12-111~113)の木器が出土した。これらは直接重なり合って出土したのではなく、5ライントレントチ際から東側にかけて少しづつ場所をずらしてまとまって出土したものである。4段目(第IV-12-111図)から出土した木器は、細い棒状材や加工された板材、横柾などである。5段目(第IV-12-112図)は建築部材と考えられる板材のほかに、又鋏、栓などが出土した。6段目(IV-12-113図)からは、台付壺と蓋、槽などの木器が出土した。

これらの出土状況を図化した遺物以外にも、出土位置のみ記録して取り上げた遺物(図IV-12-82図)、グリッドと地層のみで取り上げた遺物も多くある。

土器は、11-098~110が壺である。概ね乙亥正三~VI期のものと考えられる。11-110は台付装飾壺で外面に赤彩をする。内面に黒色と白色の付着物があり、X線回折分析、赤外分光分析、放射性年代測定を行った(第V章第2、10節)。分析の結果、黒色と白色の付着物は同じ材質の有機化合物であることは明らかになったが、材質を特定するには至らなかった。年代測定の結果はcal A D29- cal A D129である。

11-111、112、114~145は壺で11-114は埋土下層から出土したもので、乙亥正I期に該当する。他は概ね乙亥正三~VI期のものと考えられる。11-146~149は高坏、11-150~153は蓋、11-154~157は器台である。

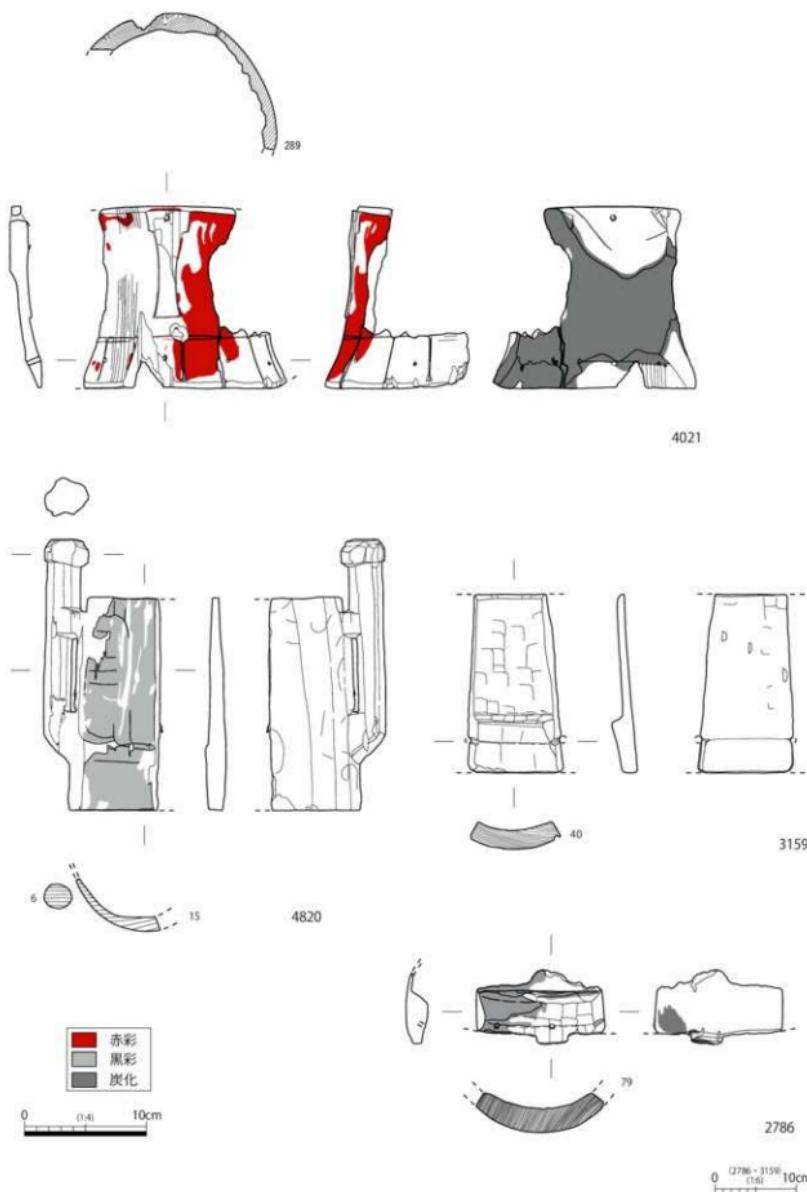
石器は、S2769が石鎌、S2685が剥片、S3143、S9044、S3355は敲石、S3361は石鋤である。

ガラス小玉(B3752)は、淡青色のもので、6ライントレントチの東壁から出土した。層位から2S840の上層に該当する。

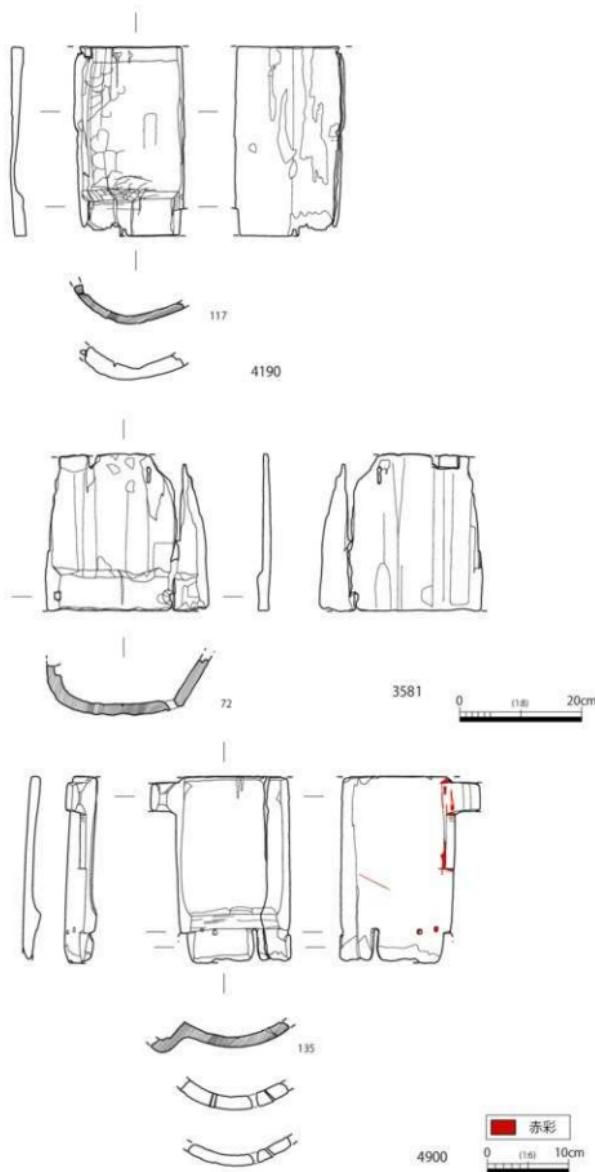
木器は多数出土しており、大まかな分類毎にまとめて報告するが、レイアウトの都合などにより、必ずしも分類通りに配列していないものもある。

農工具、紡織具、漁労具、武器、服飾具(第IV-12-107、114~116図)

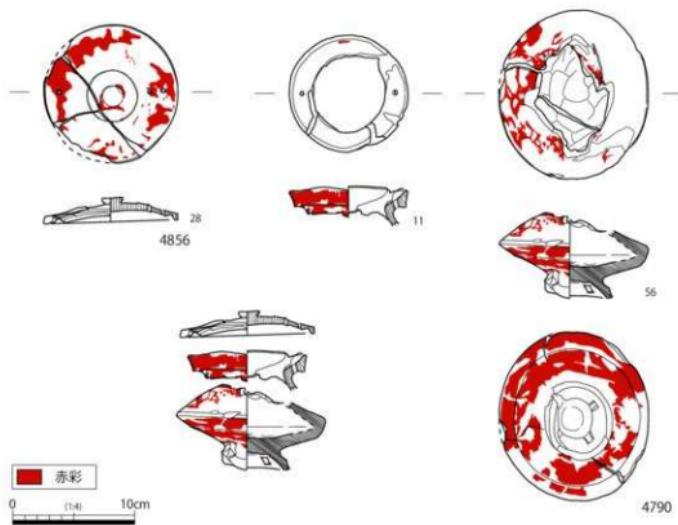
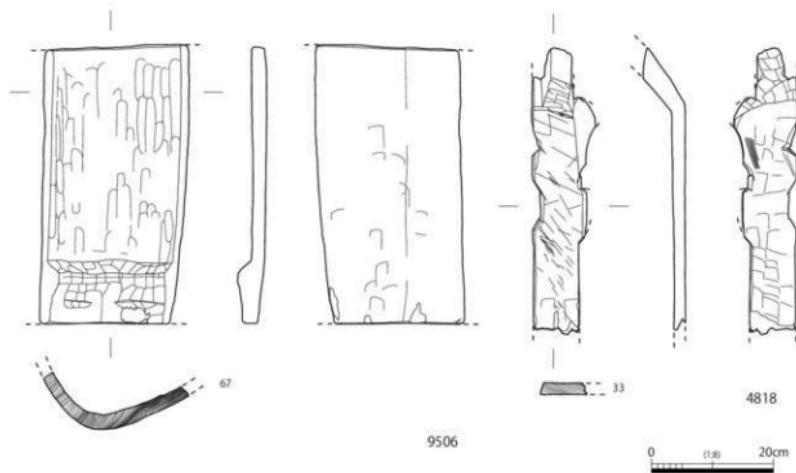
農工具は袋状鉄斧の膝柄(3148D)、横柾(4852)がある。木包丁(4602、4903、4883C)は紐孔をつなぐ溝があるものとないものがある。溝のないものは形態も異なり平面形は平行四辺形にならず、刃部は直線的で、背側は丸く弧状に成形されている。木目はほぼ真っ直ぐ伸びるが、鎬から刃部は斜めに削られることにより、他の木包丁と同様に木目は刃部に対して斜交するように仕上げられている。5047Mは曲柄又鋤の頭部の破片である。5047Gは直柄又鋤の歯、4501は組み合わせ鎬で、後面中央部に貫通しない柄がある。前面は中央から若干左寄りに縫に稜をなす。身の下端中央部を三角形に抉って、2又に成形している。4883B・4883Fは曲柄又鋤の柄である。保存処理後に実測したため全体に細くなり、重んでいる。4929は曲柄又鋤である。これも保存処理後の実測のため、薄くなってしまった。



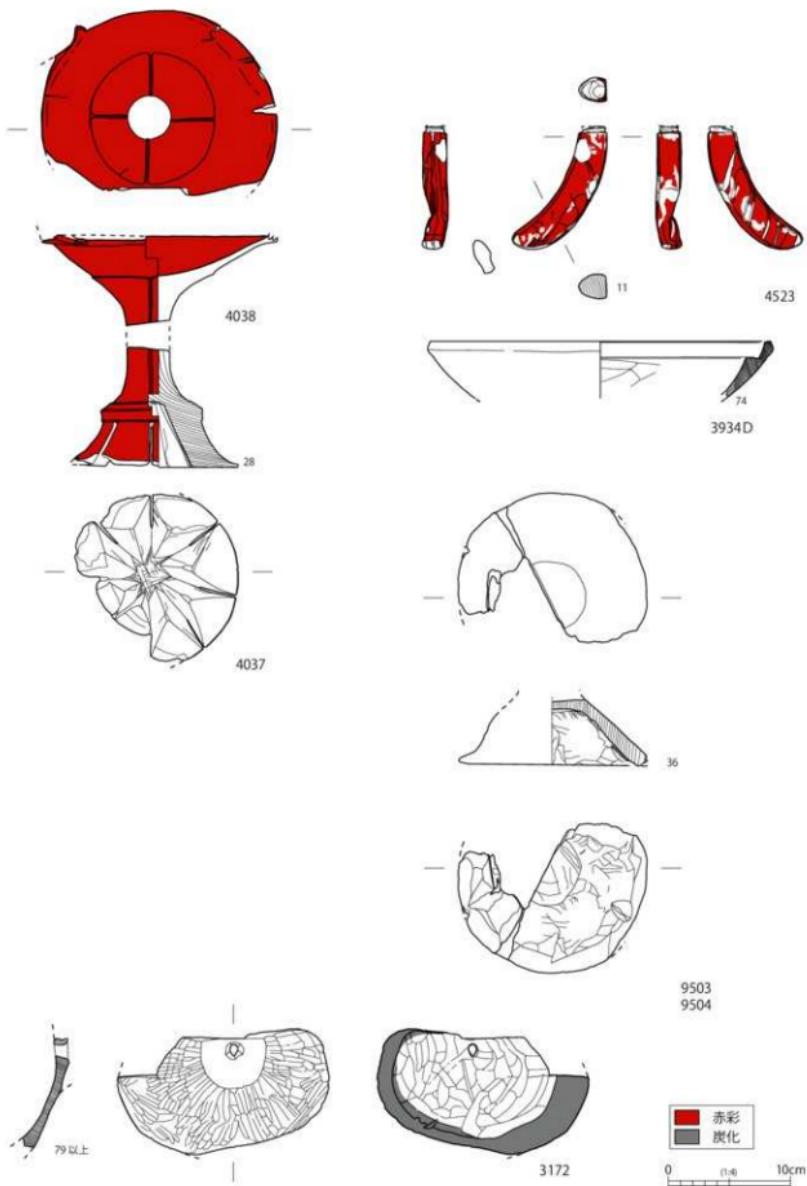
第IV-12-117図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物11



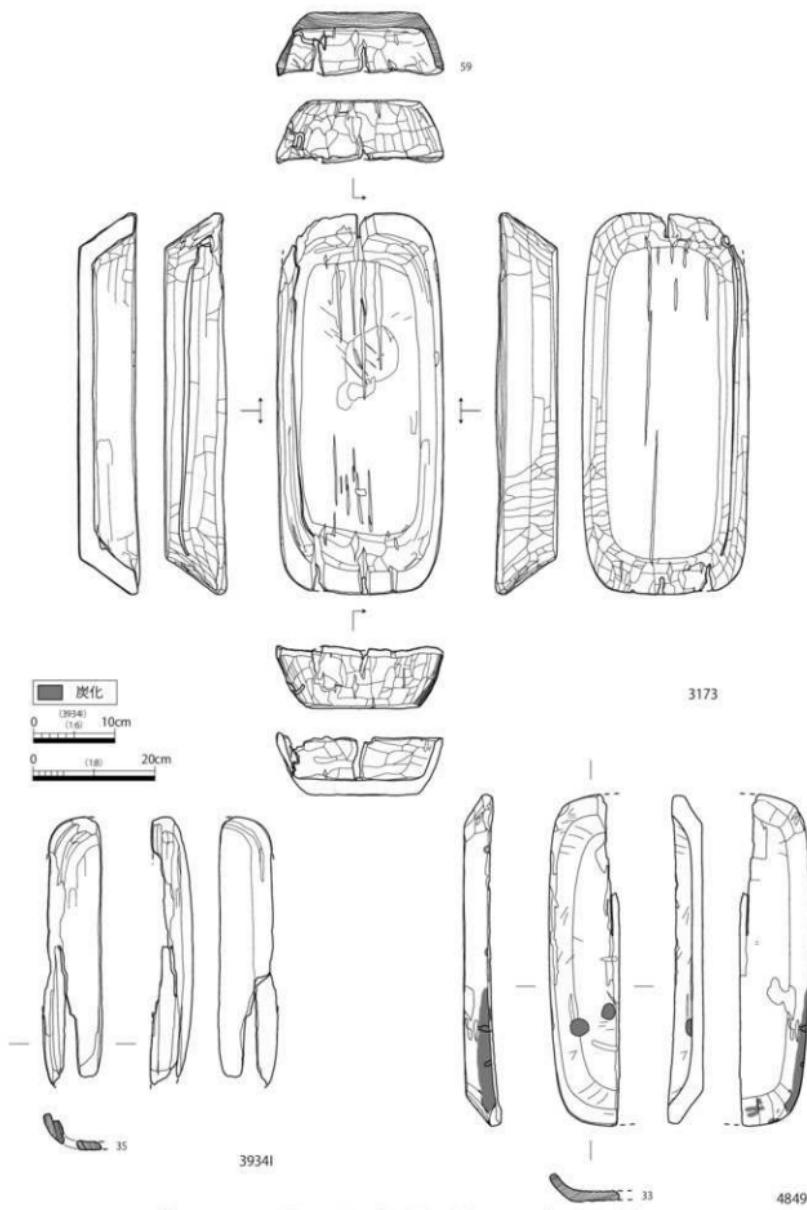
第IV-12-118図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物12



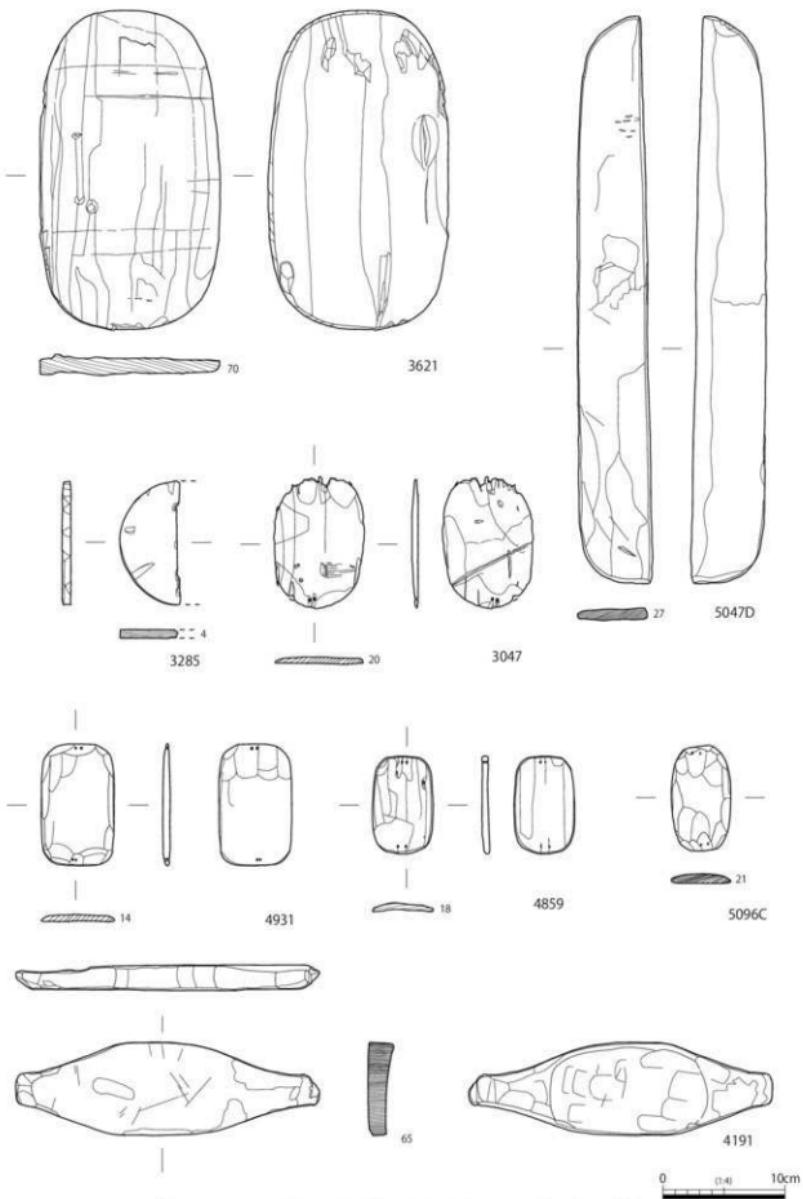
第IV-12-119図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物13



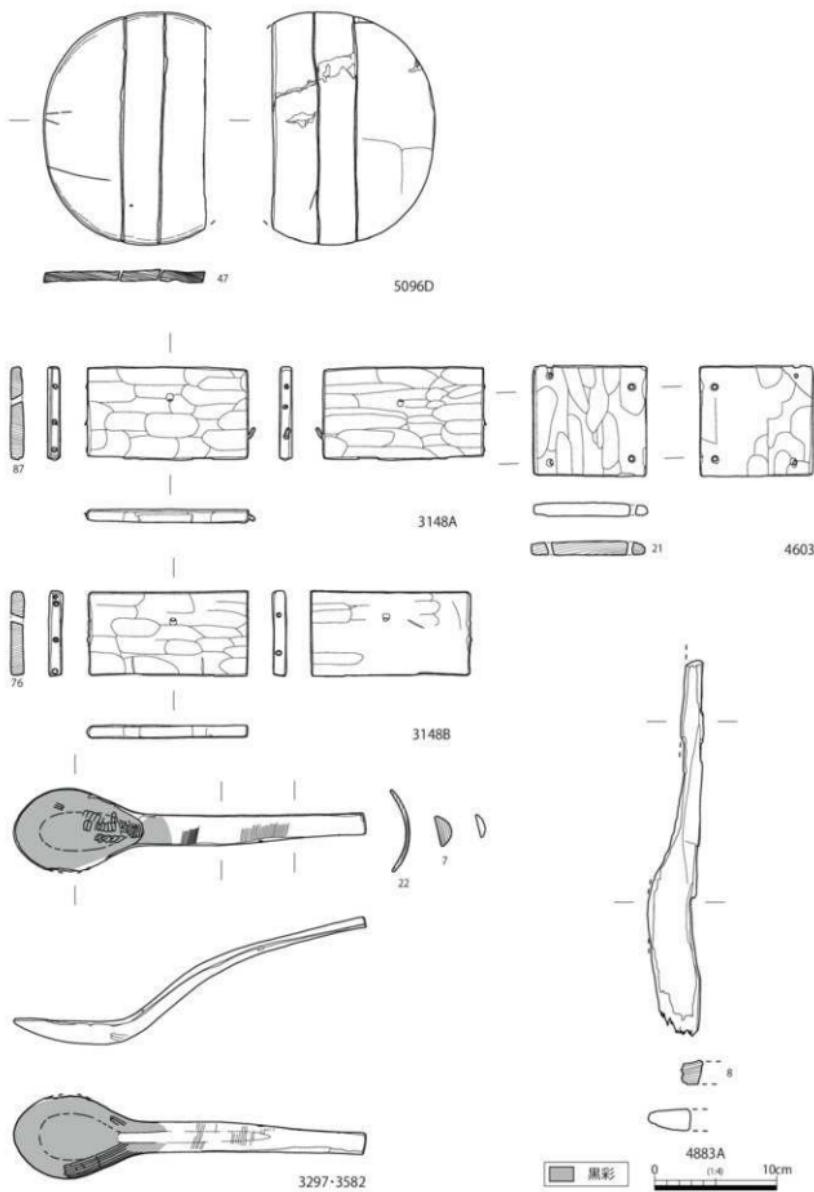
第IV-12-120図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物14



第IV-12-121図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物15



第IV-12-122図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物16



第IV-12-123図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物17

ている。

紡織具としては、紡錘車(4844)が出土した。紡輪と紡軸が組み合わさったまま出土した。紡輪は円盤の中心部に穿孔して軸を通し、上面は縁を残して内側を一段薄く削る。紡軸は上下端が欠損している。3175は絆卷具ないし布巻具と考えられる。棒材の両端部に紐かけを削り出している。

3291は衣笠である。青谷上寺地遺跡にも同形態の類例がある。

4134、3934Bは櫛、3717は網枠である。網枠は芯持ち材ではなく、細い枝などの材から削り出して作られている。

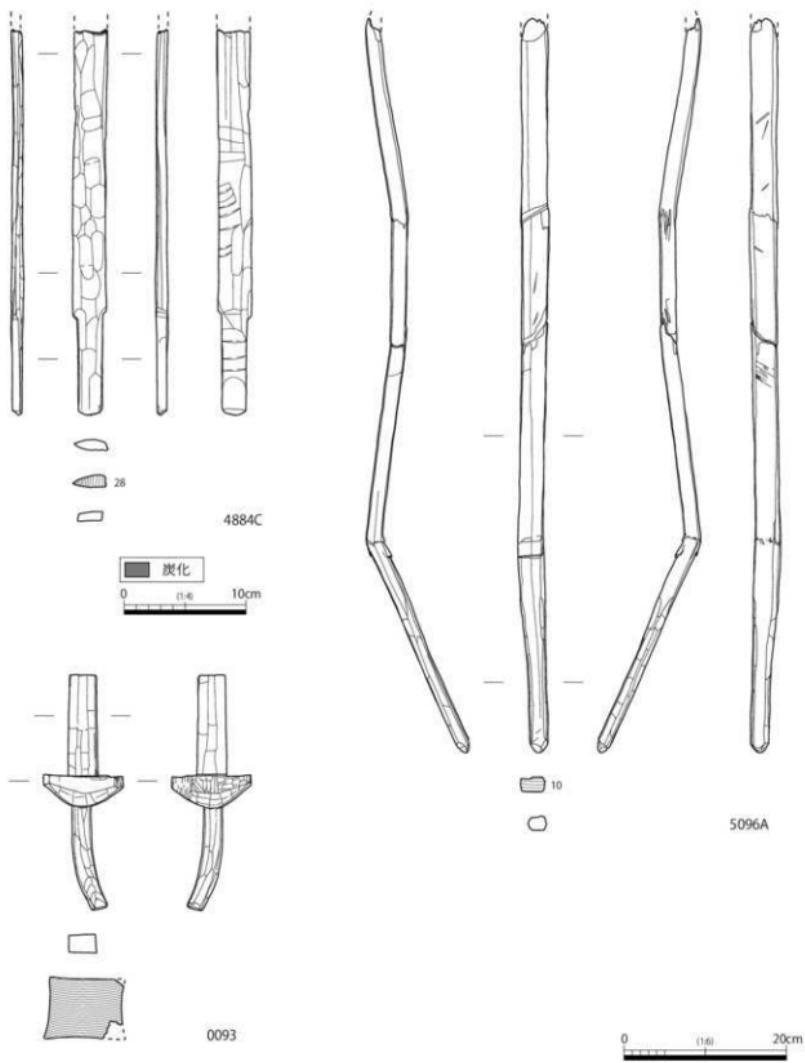
3804B、4884A-1、4884A-2・3、4787は盾である。2孔1対で穿孔されている。4884A-2・3は最上段の穿孔と次の段の穿孔との間に方孔が2つある。4787は、紐孔の間に筋状及び帯状に緊縛の痕跡が残っている。また、上下両端共に完存し、上端は緩くRを描く。

食事具、容器(第IV-12-117～123)

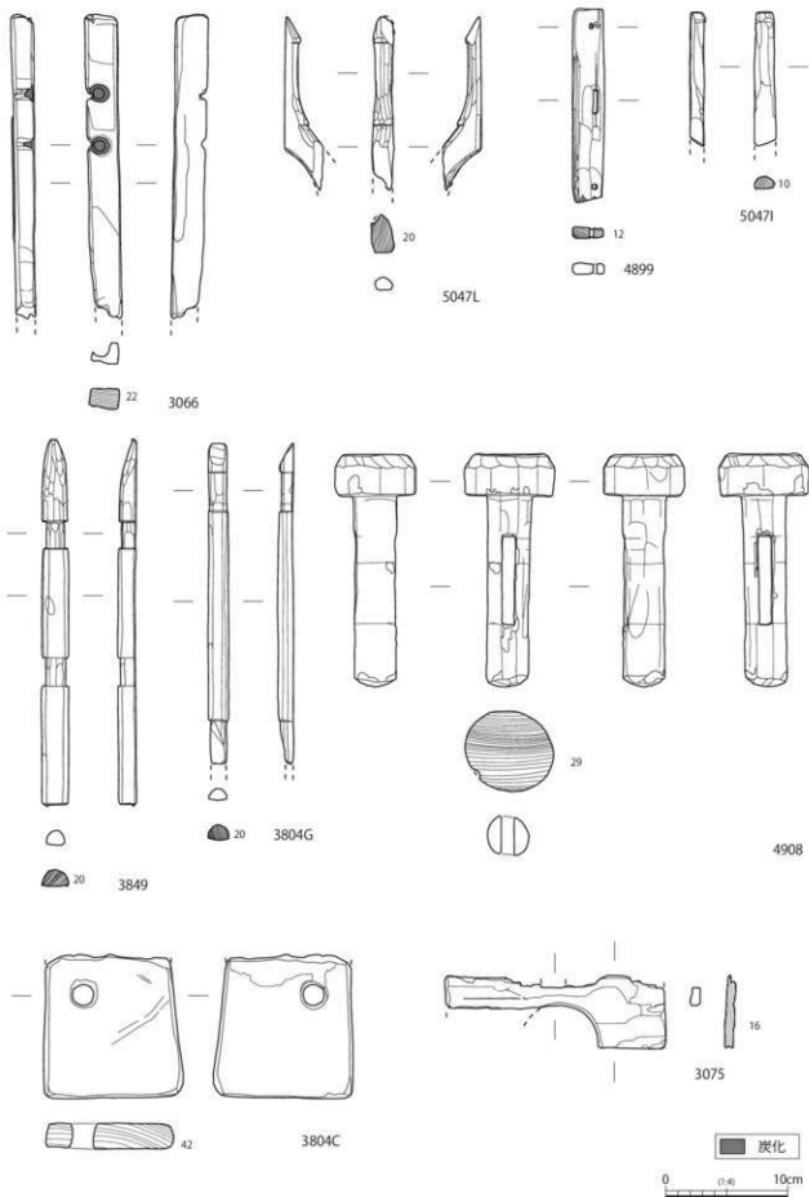
容器は、桶(4021、4820、3159、2786、4190、3581、4900、9506)が出土した。4021は外面赤彩されて、バチ形の紐孔突起が作られている。紐孔は口縁部に外面から内面に穿孔されている。紐孔突起の下には水平に溝を彫り、その溝から下端に向けて等間隔に溝を彫っている。水平方向の溝と下端部との中間に外側から内側に向けてやや下向きに目釘を打っている。内面は全体的に炭化している。4820は把手付きのものである。一本で削り出した把手は、口縁部から少し下がった位置とさらに胴部の下寄りの2カ所でつながり、その間を透かしている。把手の上端部は有頭状に削り出して、口縁部よりも上に突出する。内面は全体的に黒彩されている。4900は紐孔突起が残存する。紐孔突起は口縁部から少し下がった位置に作り出されている。孔は突起の中央部に貫通している。胴部下端にはスリット状に溝を設けている。

4818は槽の破片だが、側面は人為的に加工されており、何かに転用されている。4790の台付壺と4856の蓋はセットで出土したものである。壺は出土した時点でかなり破損して土圧で潰れた状態だった。保存処理により、収縮に差ができるて口縁部は原位置に接合することができなかった。全体に歪んでいるが、現状のまま図化した。そろばん玉形の胴部に4方から長方形の透かしを設けた脚が付く。口縁部は蓋とセットで相対する2カ所に小さく紐孔の穿孔がある。蓋は被せ蓋I類(上原真人編1993木器集成図録)で、外面中央部につまみを有する。また、紐孔の隣に並んで目釘が1カ所ある。身と蓋はいずれも外面全体を赤彩されている。4037と4038は花弁高杯の脚部と杯部である。図化は別々に行い、保存処理後接合した。一本式のもので横木取り、ヤマグワ製である。杯部外面に4弁の花弁装飾を持つ。口縁部の1カ所に飾り耳が付いていた痕跡がある。3934Dは、容器の口縁部片で、口縁内側に段を作り出す。9503・9504は花弁高杯の脚部と考えられる。脚部内面の加工は彫り込みが浅く外面にスリットを形成する程では無い。3172は高杯の脚部で杯部との接合部を欠損しているが、雇い柄が残存しており、杯部とは別作りと考えられる。内外面共に加工痕が明瞭に残る。内面は縁に沿って炭化している。4523は脚と考えられる。上端には柄があり、差し込む構造になっている。

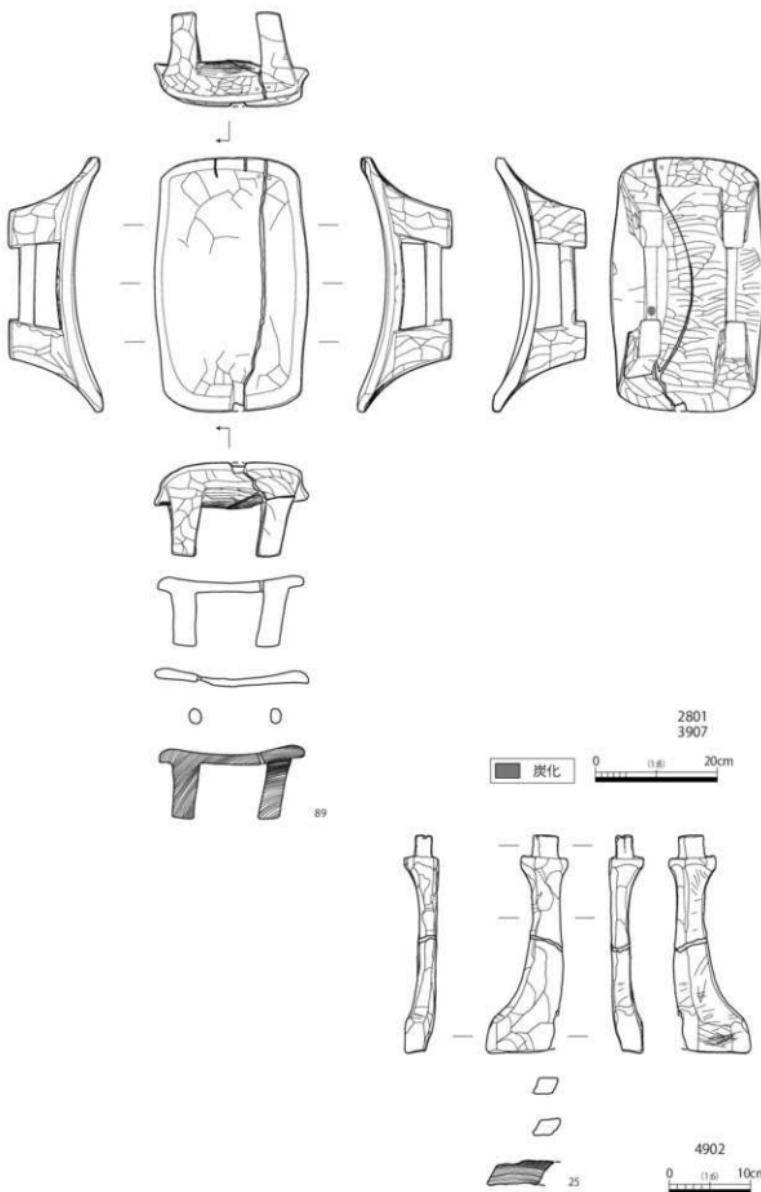
3173、3934I、4849は槽である。3137はほぼ完存する大型品である。3934Iは口縁内面に段を有する。3621、5047D、3285、5096Dは底板と考えられる。5047Dはやや縦長で相当する器形の容器は出土していないから、底板ではない可能性もある。3047、4931、4859、5096Cは蓋と考えられる。平面形は小判形で、相対する端部に2孔1対の小孔を穿つ。4191は横長の板材を両端に向けて細く紡錘形に加



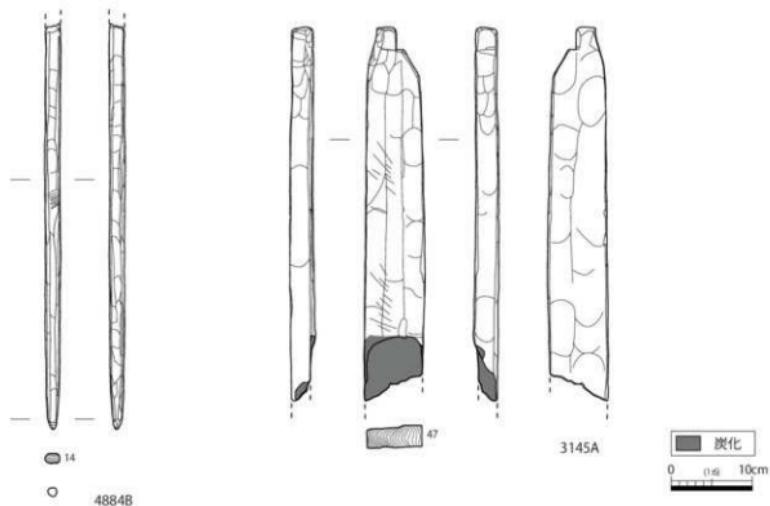
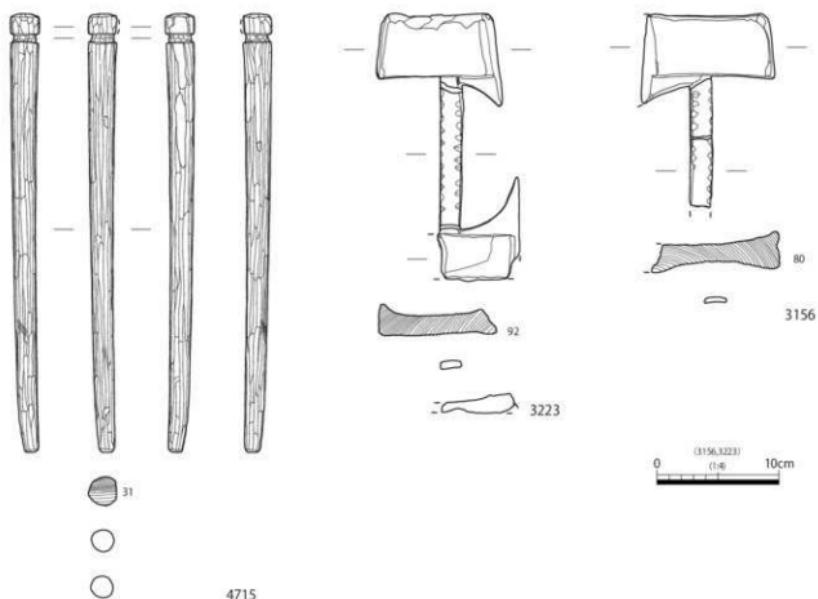
第IV-12-124図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物18



第N-12-125図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物19

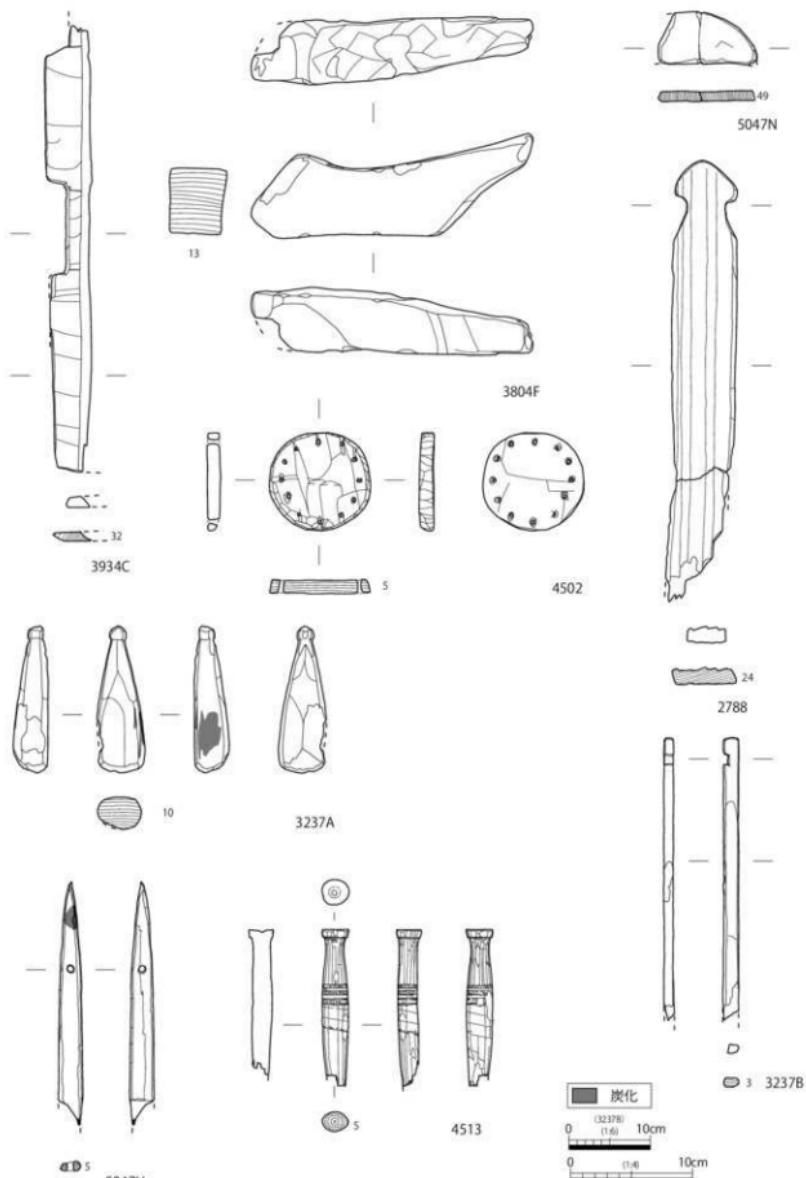


第IV-12-126図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物20

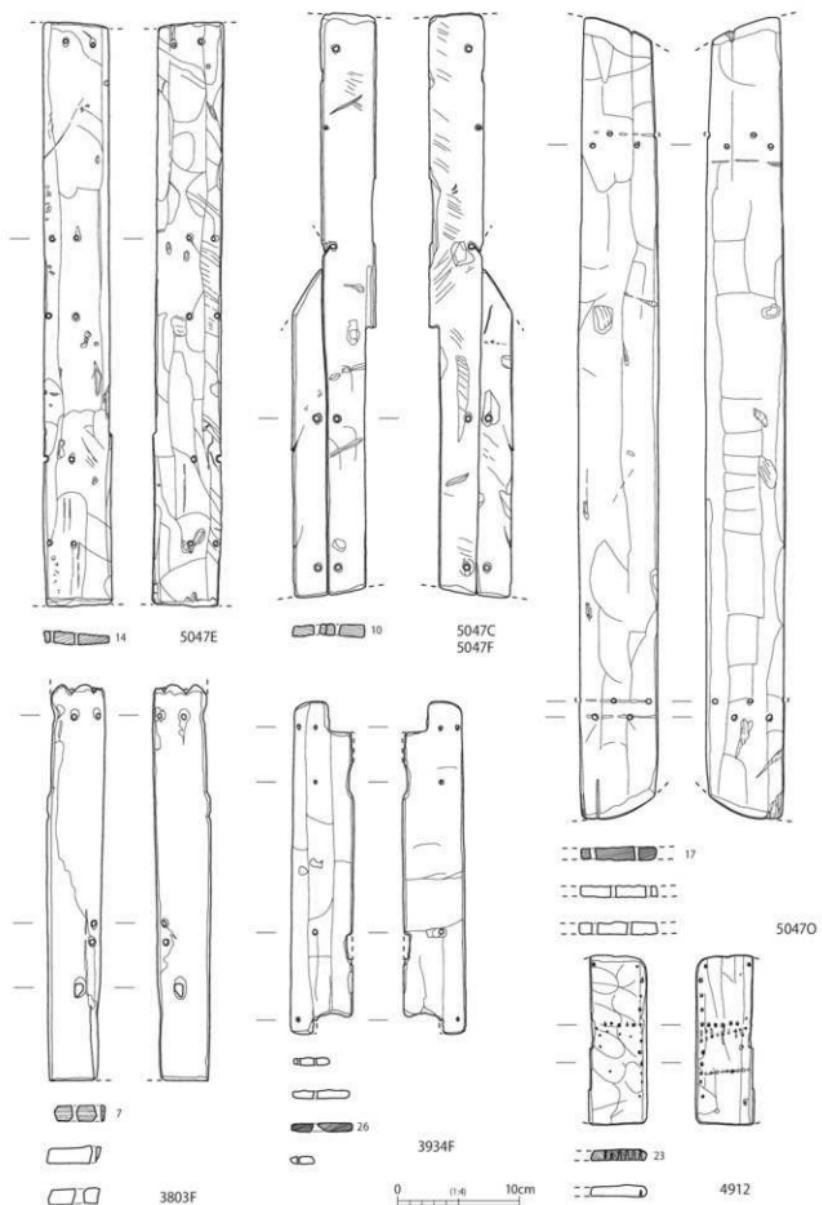


第IV-12-127図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物21

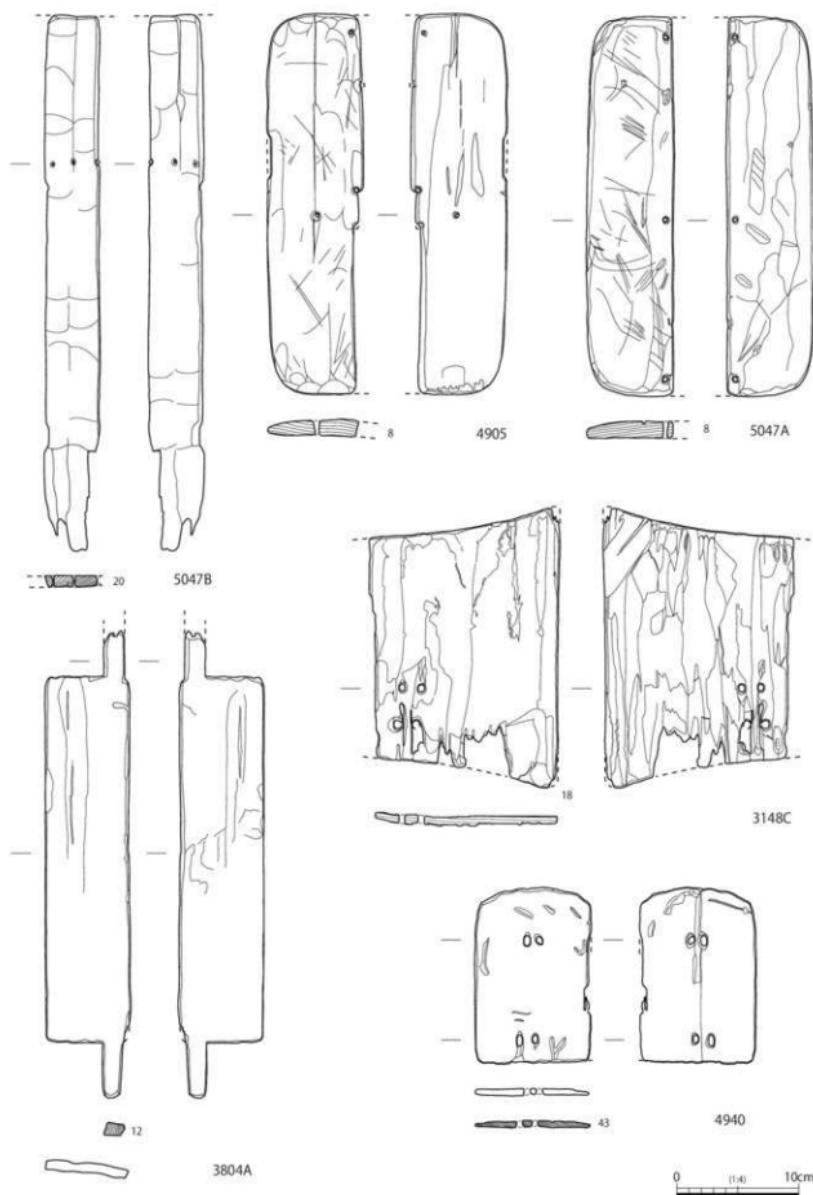
第12節 第11面(X層下面)の調査



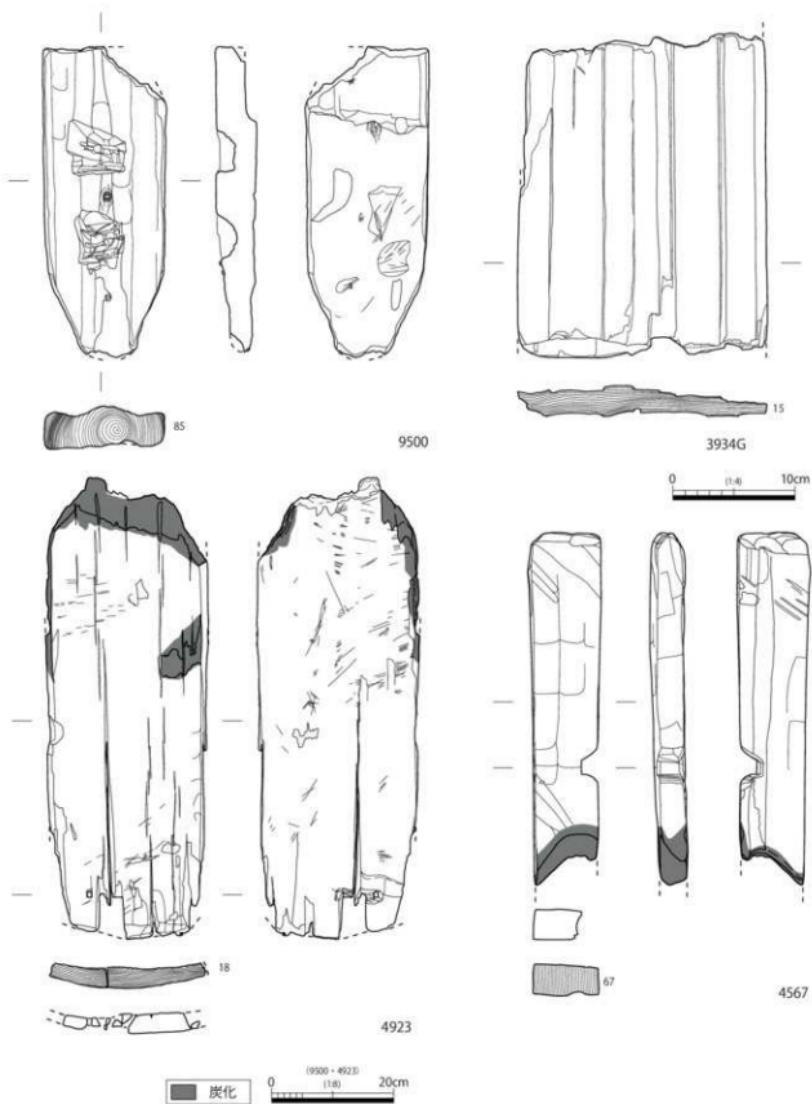
第IV-12-128図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物22



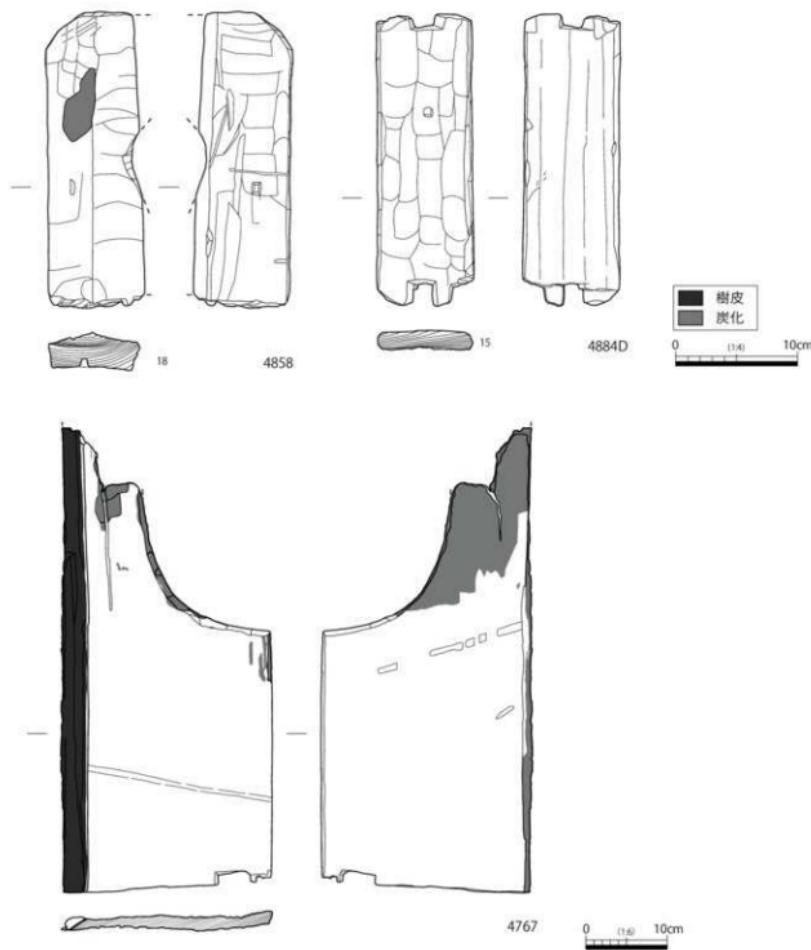
第IV-12-129図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物23



第IV-12-130図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物24



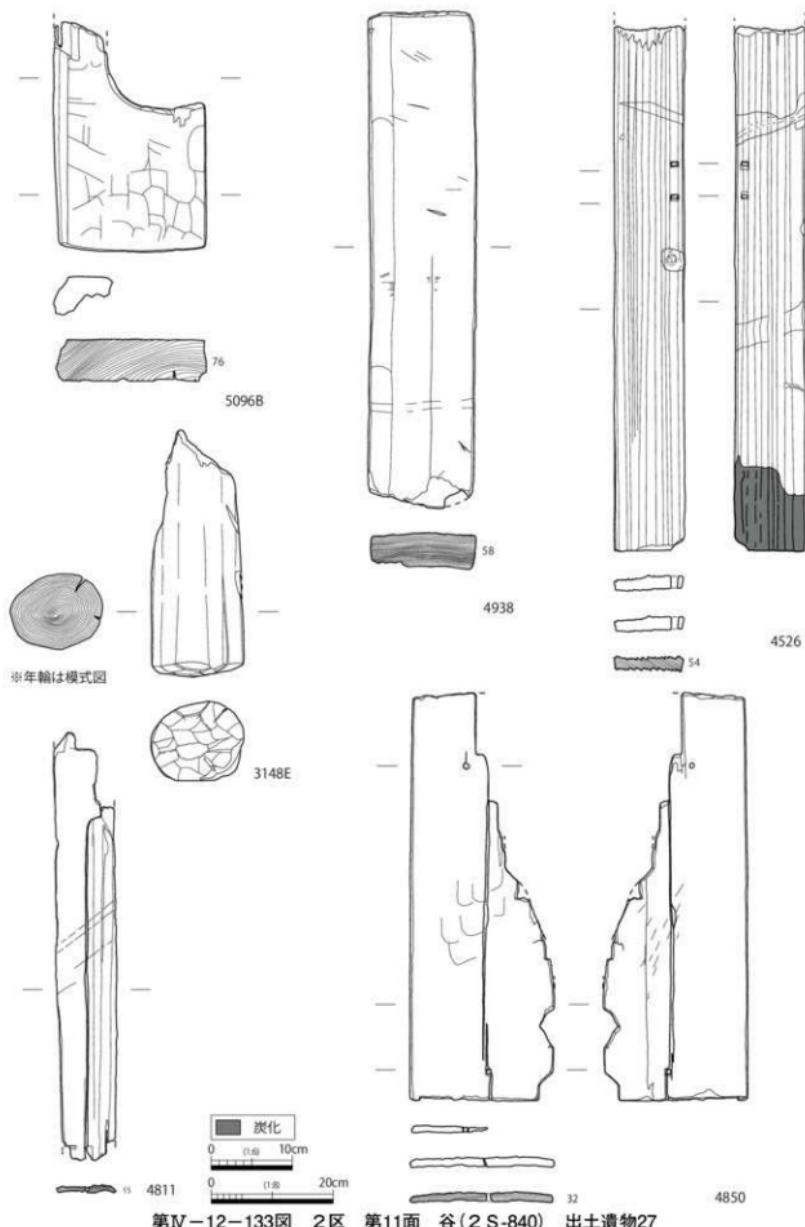
第IV-12-131図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物25



第IV-12-132図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物26

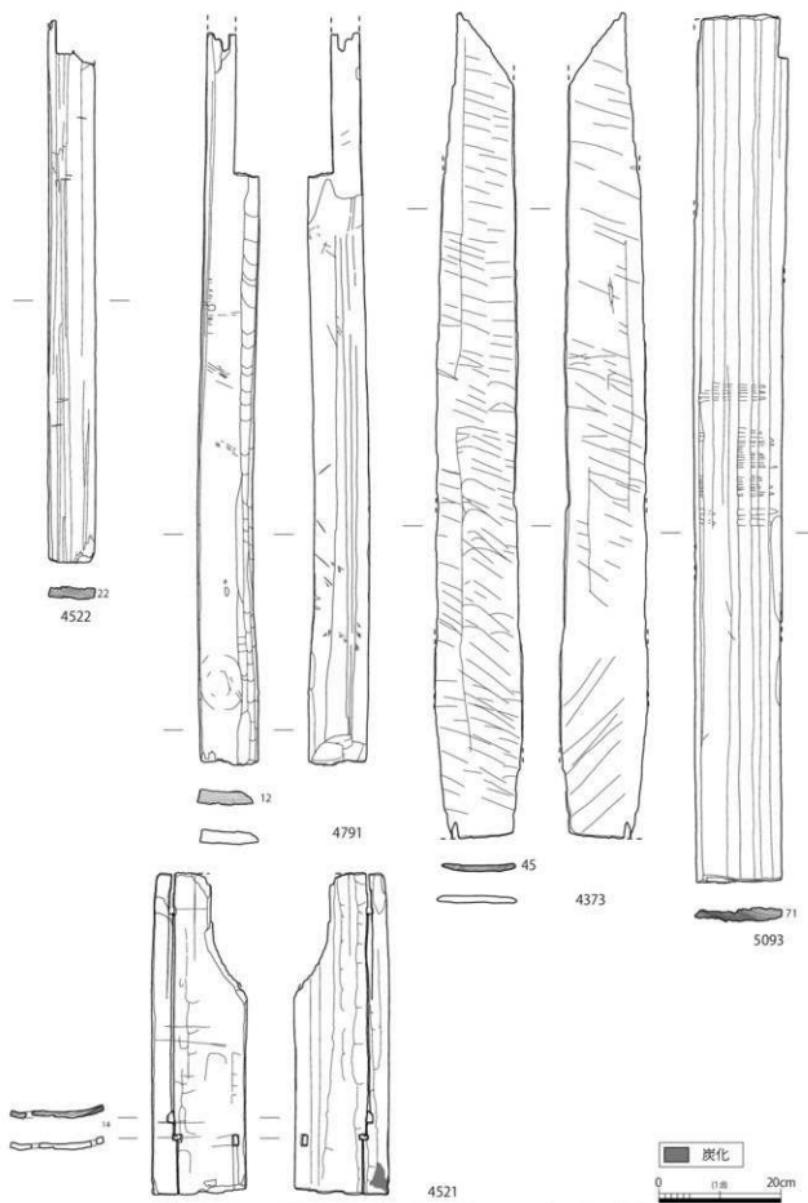
工する。内面は中央部を楕円形に浅く彫り窪める。蓋ではない可能性もある。

3148A、3148B、4603は指物と考えられる。3148A、3148Bはほぼ同型で、セットで使用されたと考えられる。長方形の板材の短辺の小口に目釘を打っている。3148Aは等間隔に3本、3148Bは図の左側面には4本、右側面には2本の目釘がある。左側面の4本は一番上の目釘を打ち直したものと考えられる。4603は方形の板材で四隅に穿孔がある。3148A、Bと組み合わさりそうだが、穿孔の間隔と目釘の間隔が合わないので、別の材と組み合わせるものと考えられる。

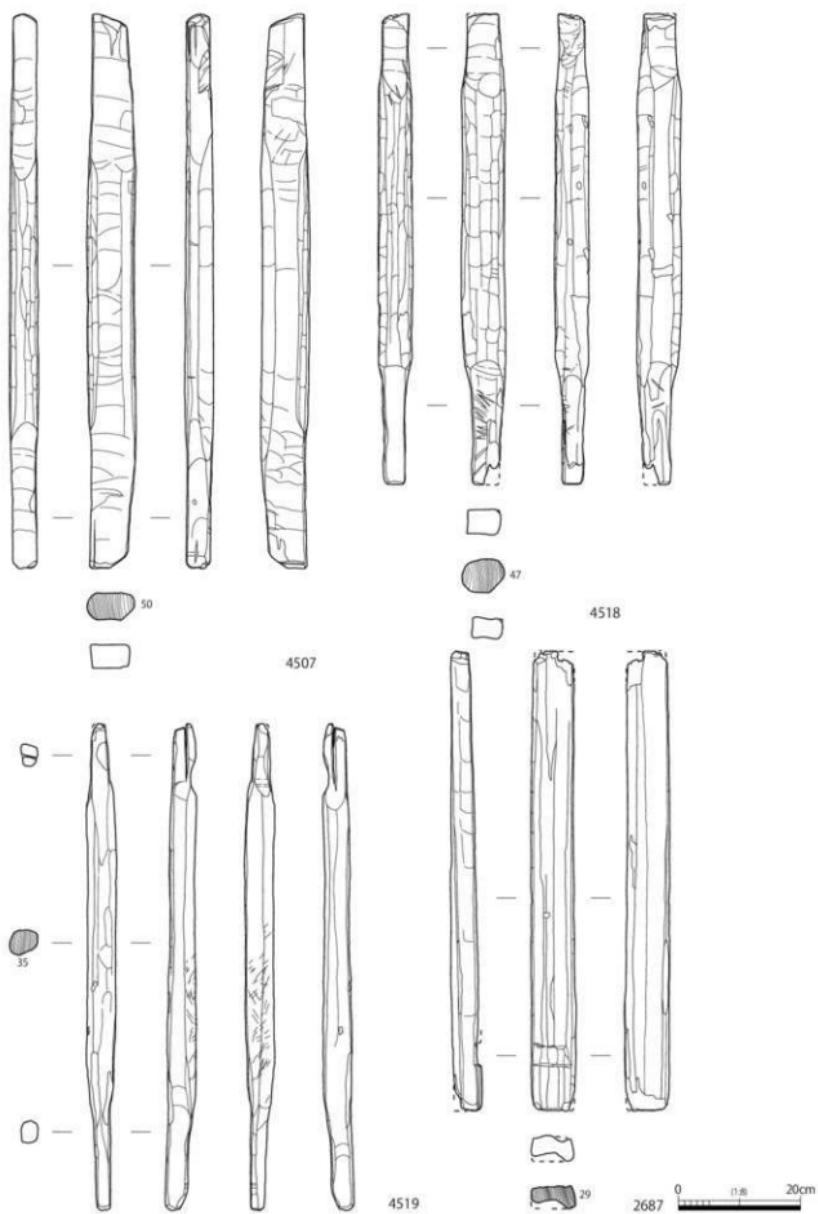


第IV-12-133図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物27

第12節 第11面(X層下面)の調査

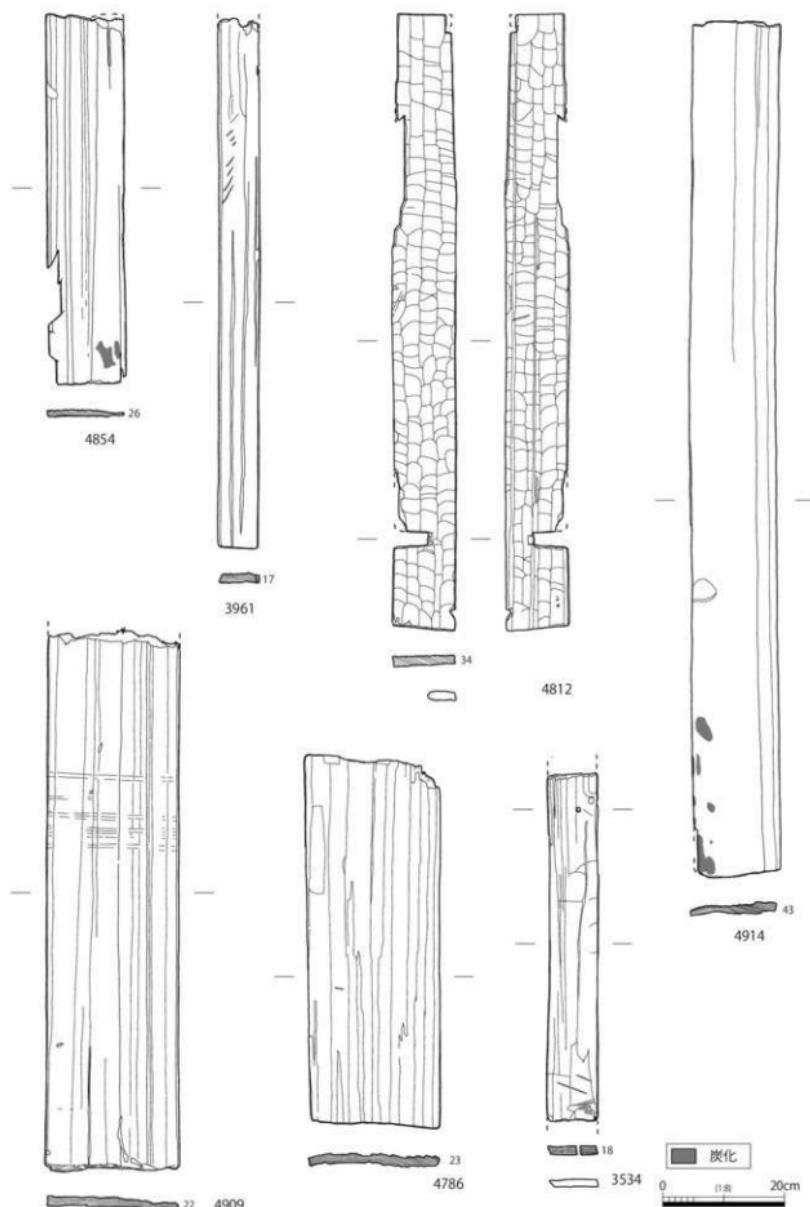


第IV-12-134図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物28

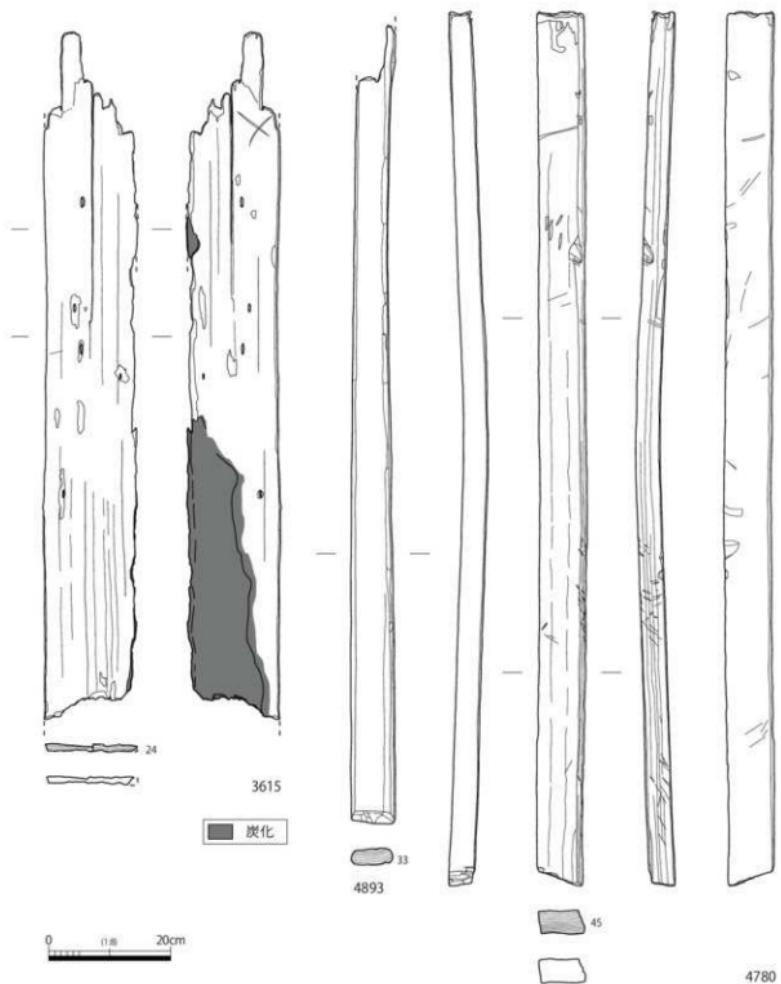


第IV-12-135図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物29

第12節 第11面(X層下面)の調査

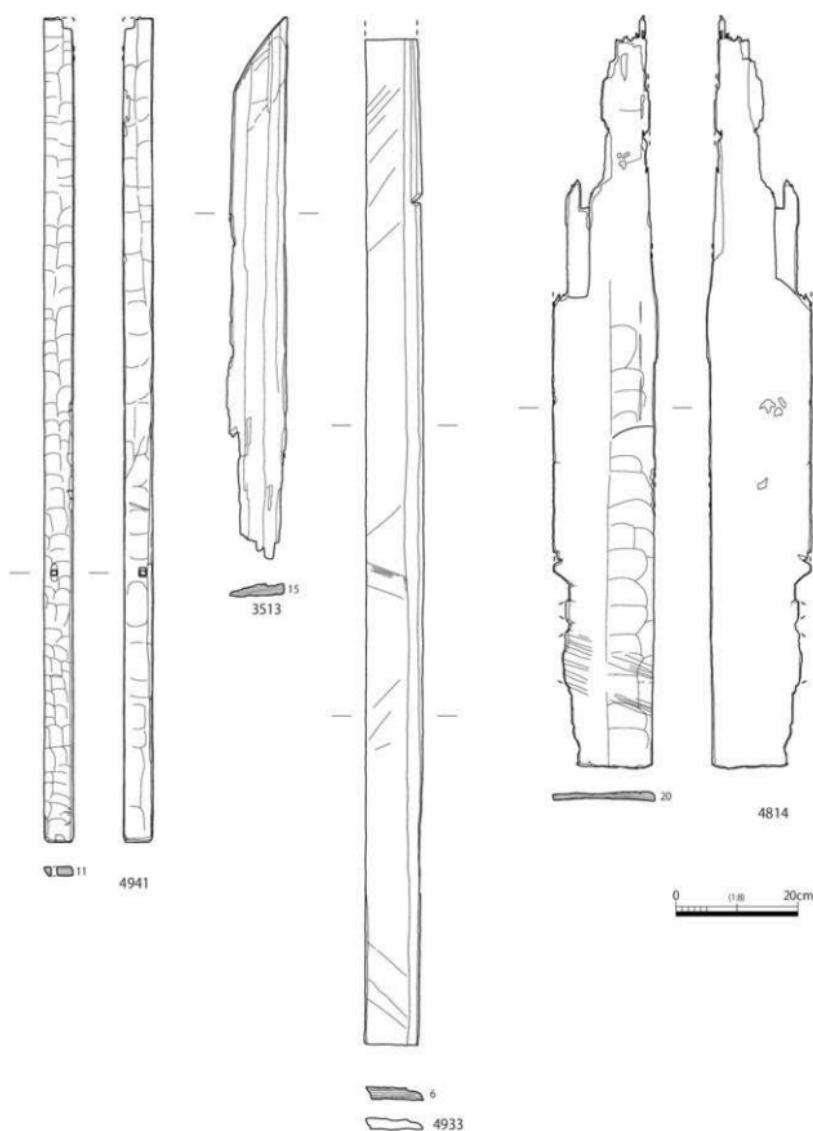


第IV-12-136図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物30

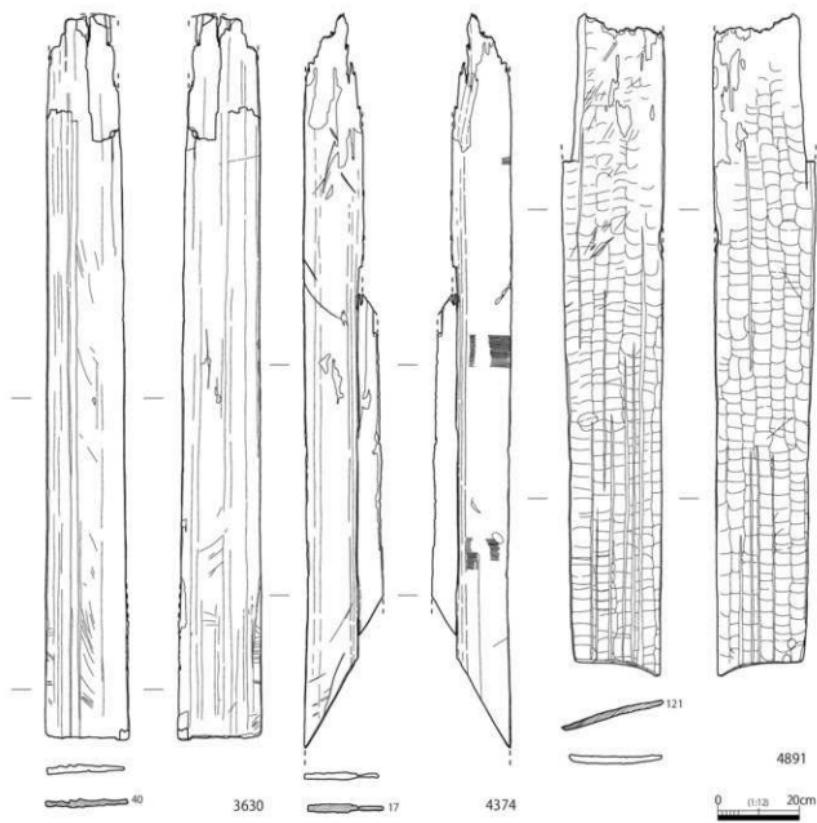


第IV-12-137図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物31

第12節 第11面(X層下面)の調査



第IV-12-138図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物32

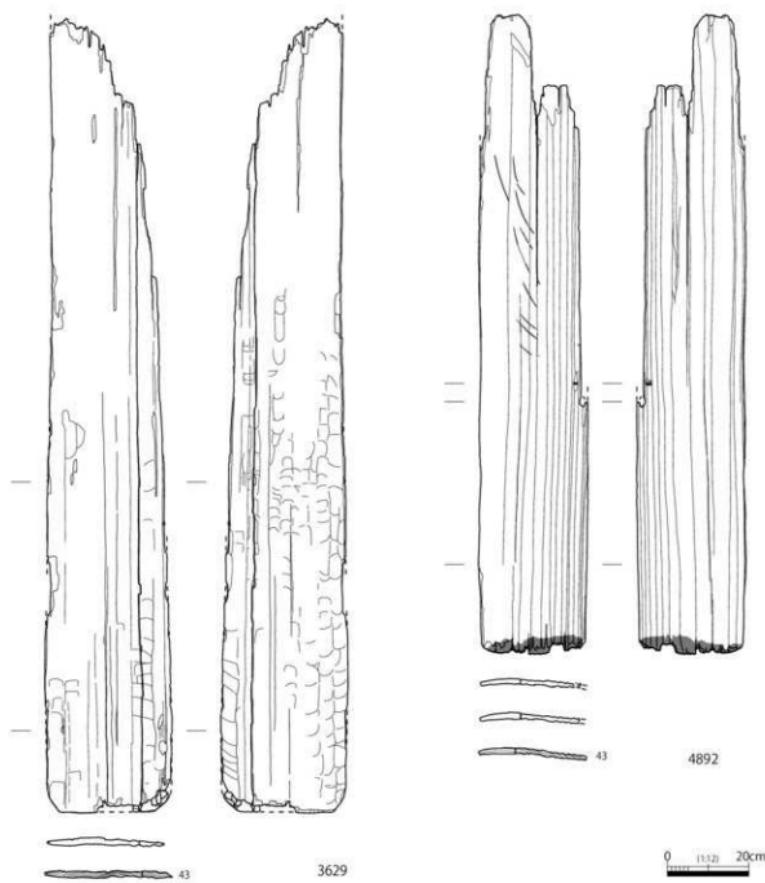


第IV-12-139図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物33

3297・3582は匙で身の外面に黒彩がある。身と柄は折れて別々に出土したが、ほぼ完存する。4883Aは杓子形木器の破片と考えられる。

祭祀具(第IV-12-124図)

4884Cは刀形で、茎は横断面長方形で身は片側に刃部を作り出す。5096Aは剣形ないし刀形の未製品の可能性を考えた。下端を茎状に削り出している。0093は4ライントレンチで出土したもので、出土位置と土層断面の検討から本遺構に帰属するものと判断した。剣形ないし刀形の完形品である。身は長さ約12cmしかなく、途中でなくなり、断面方形で刃部も作られていない。また、図の展開ではわからないが、側面からみると身と茎は一直線にならずずれている(PL535-2)。平面方形の鍔が削り出されている。側面から見ると茎側に凸になる裁頭四角錐で後は丸みを帯びる。茎は下端に向けて

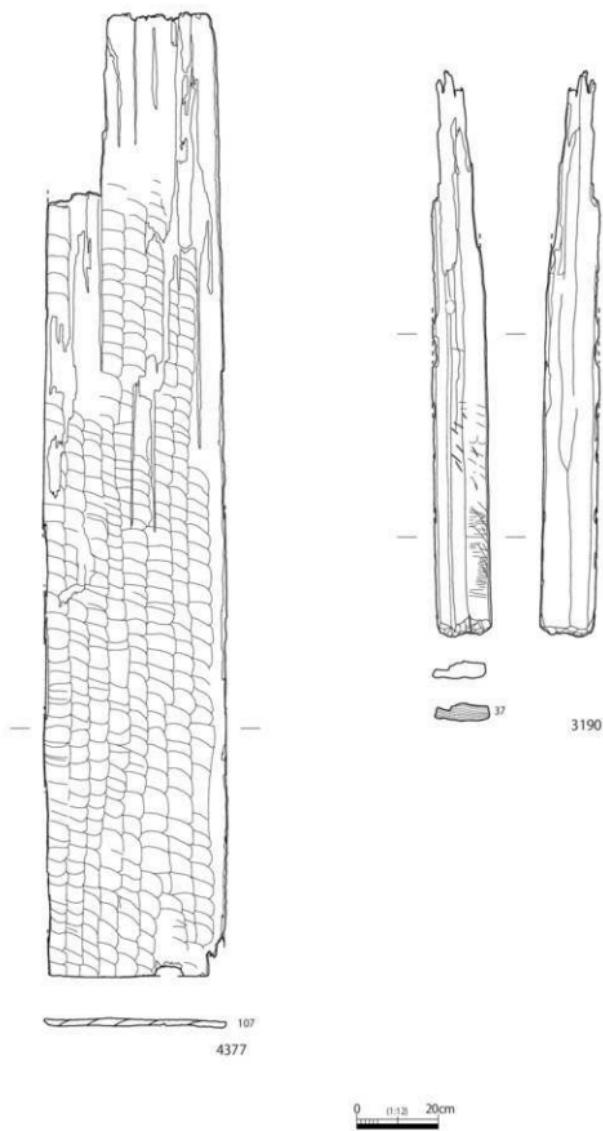


第IV-12-140図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物34

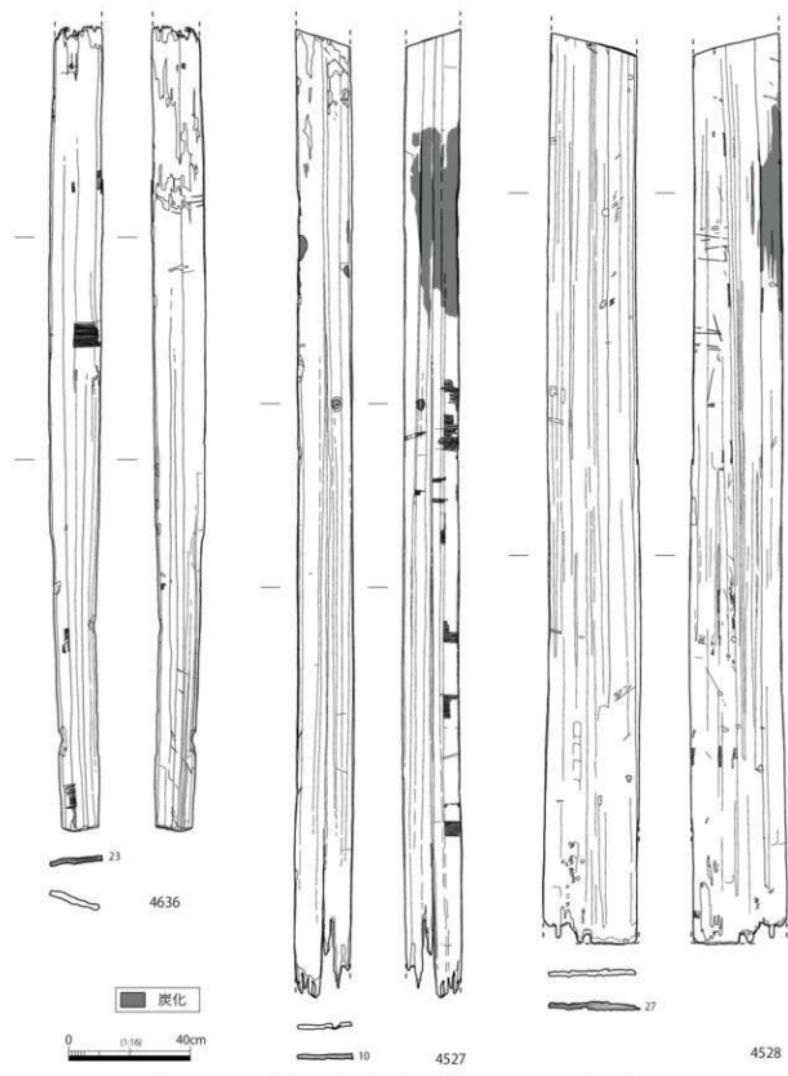
湾曲する。

雑具類、用途不明品(第IV-12-125～132図)

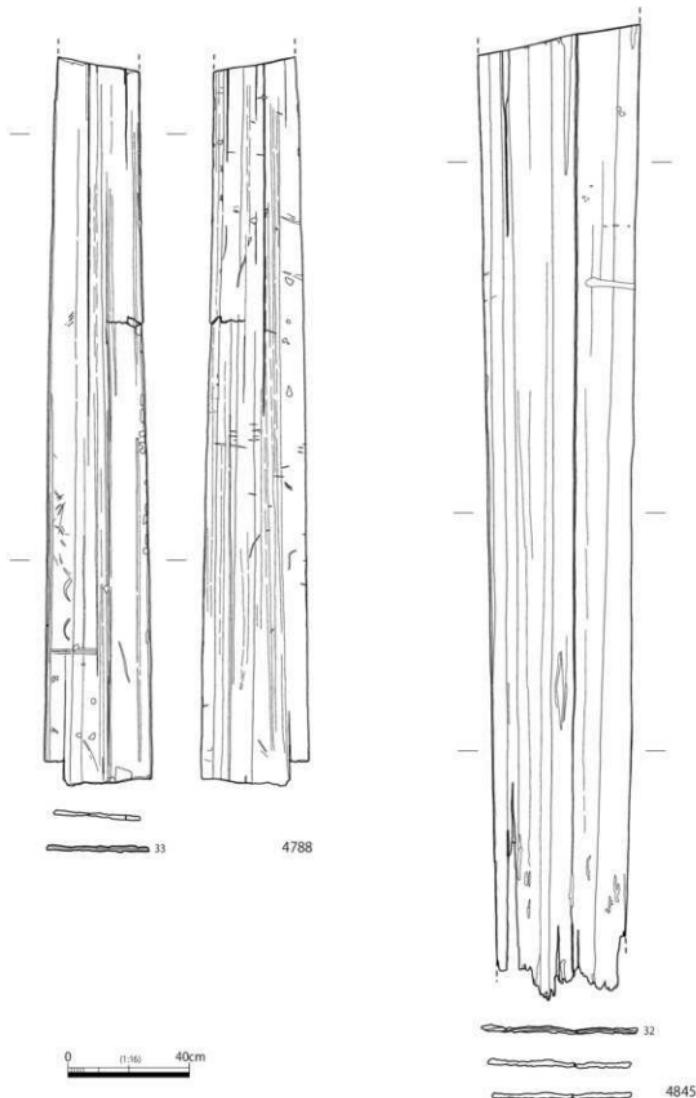
3066は火鑽臼、5047Lは把手で緊縛するための紐かけがある。4899は平面長方形の板材の中央に長方形の穿孔があり、両端に小さい円孔がある。5047I、3849、3804Gは横断面半円形の棒材に緊縛用の紐かけを作り出したものである。4908は円形の頭部に長方形孔を持つ軸部が付く栓である。横断面は円形である。青谷上寺地遺跡の分類ではB 3類に該当する。3804Cは平面台形の板材に円孔を穿つ。3075は長方形の板材の長側辺中央部を半円形に欠き込む。欠き込みの反対側にも加工痕があるが欠損



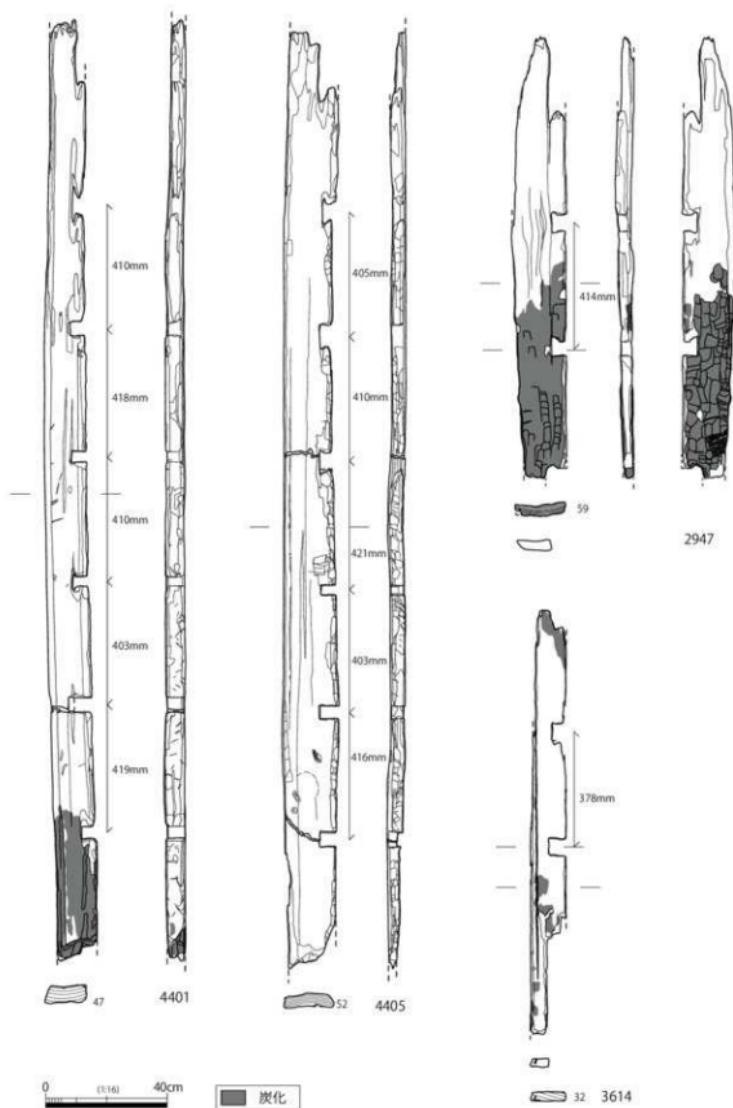
第IV-12-141図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物35



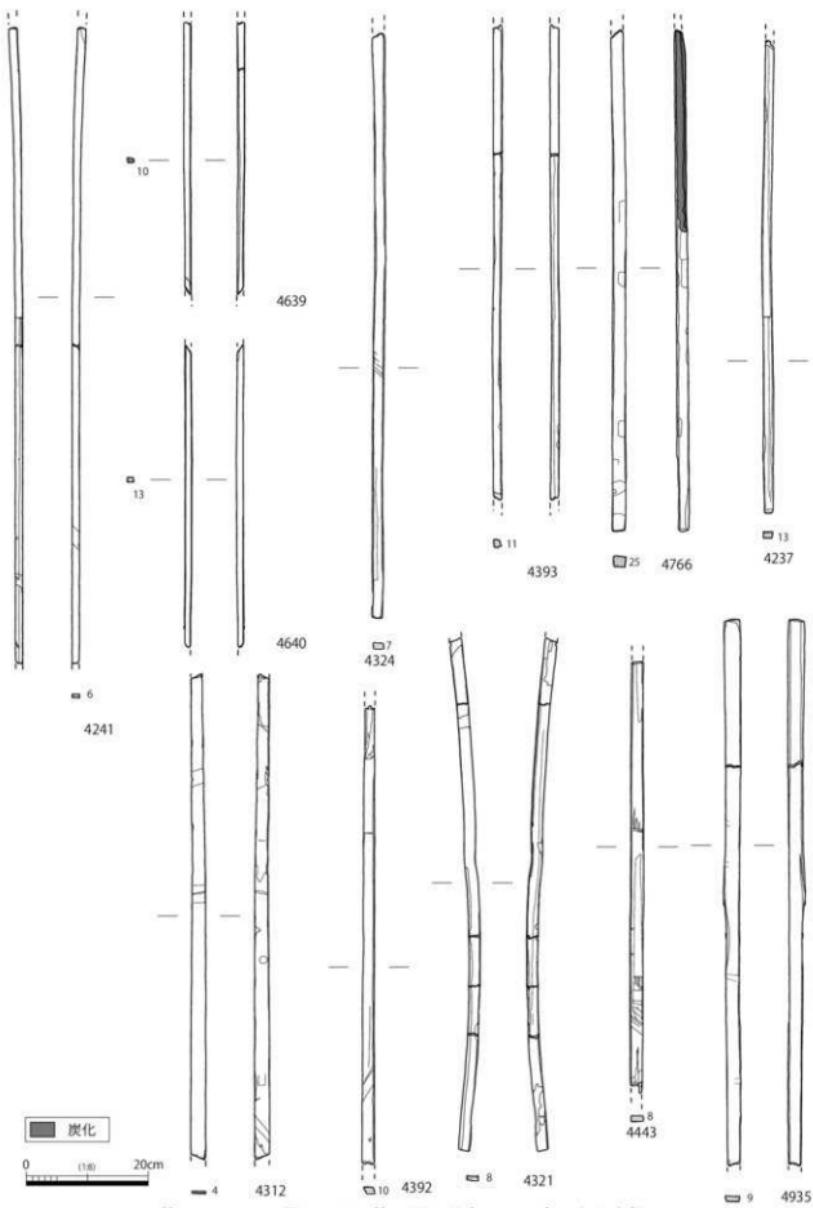
第IV-12-142図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物36



第IV-12-143図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物37

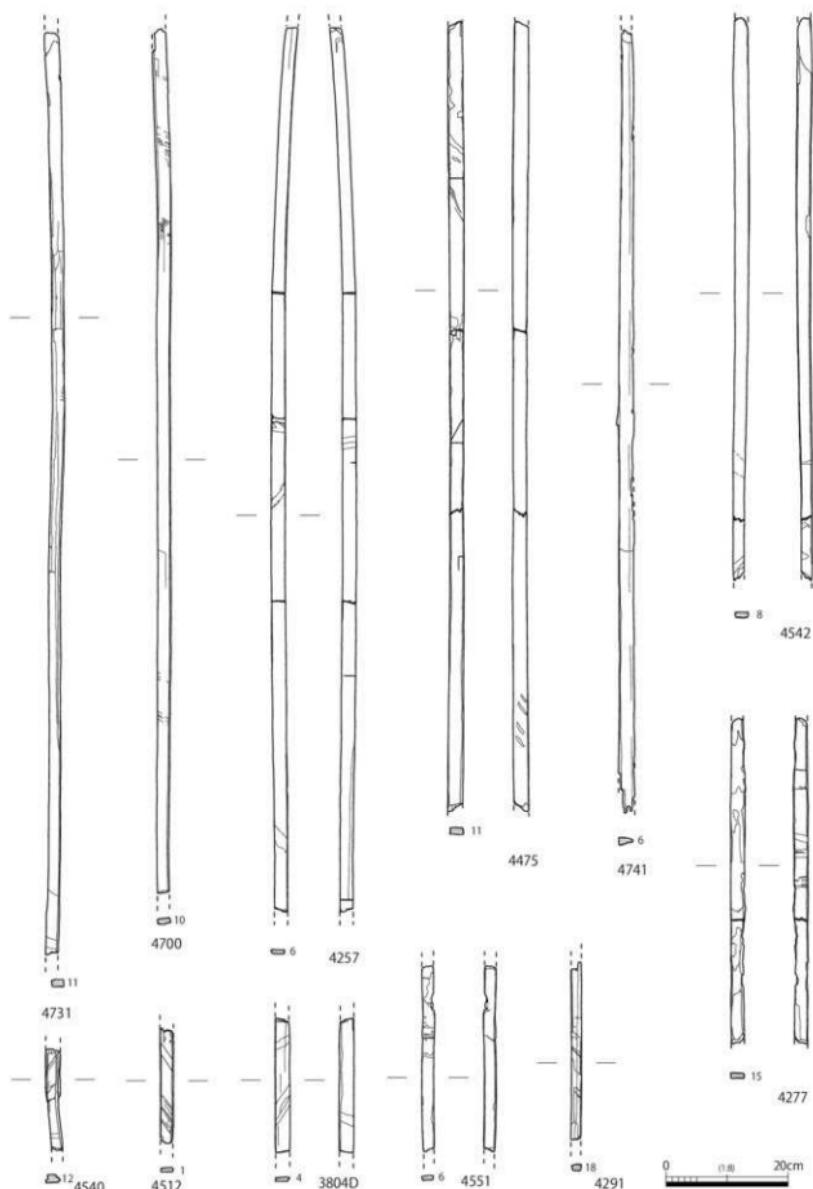


第IV-12-144図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物38

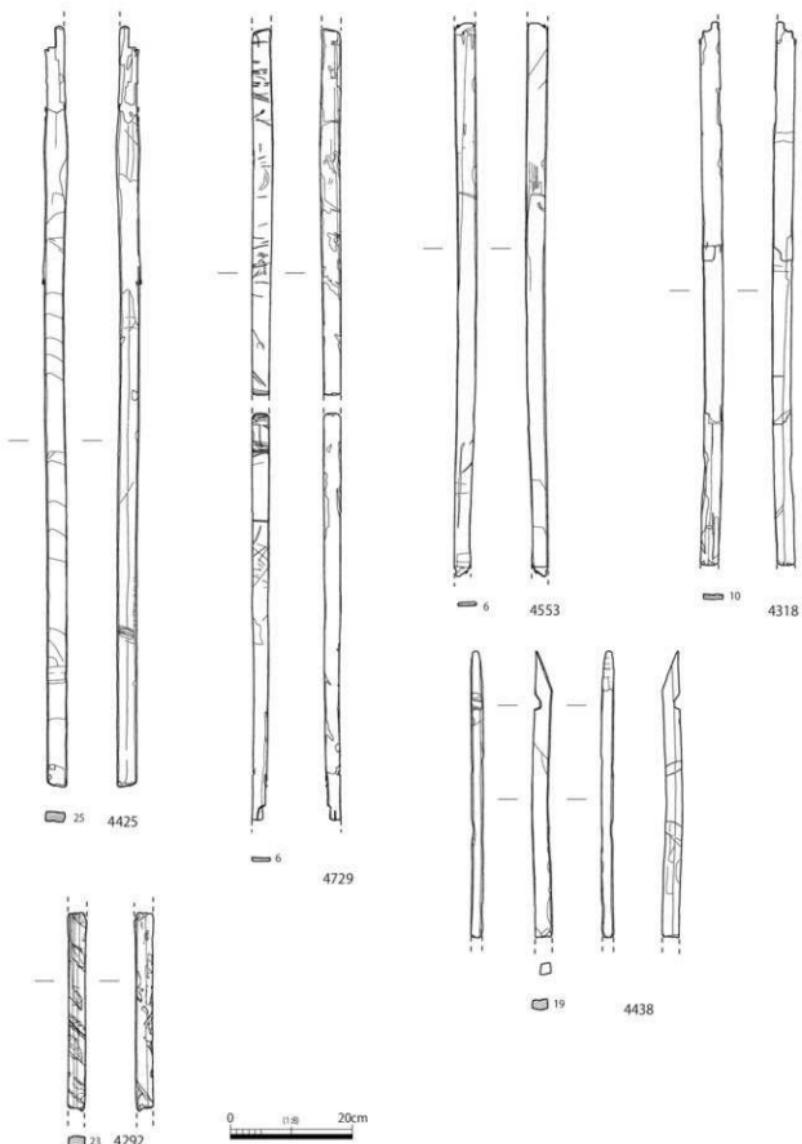


第IV-12-145図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物39

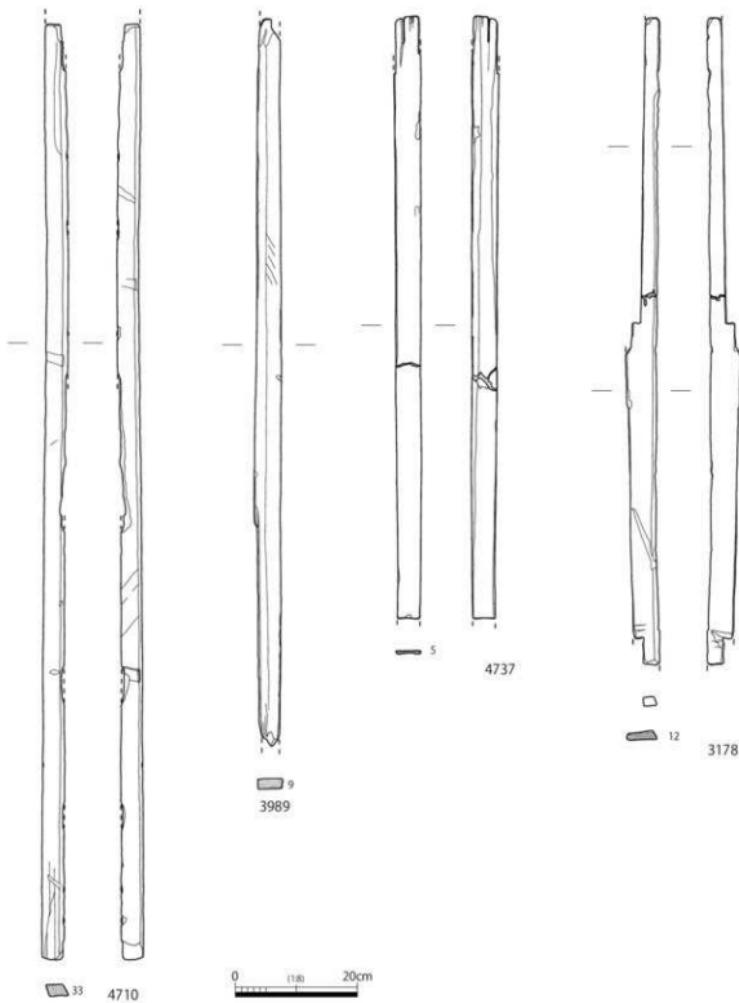
第12節 第11面(X層下面)の調査



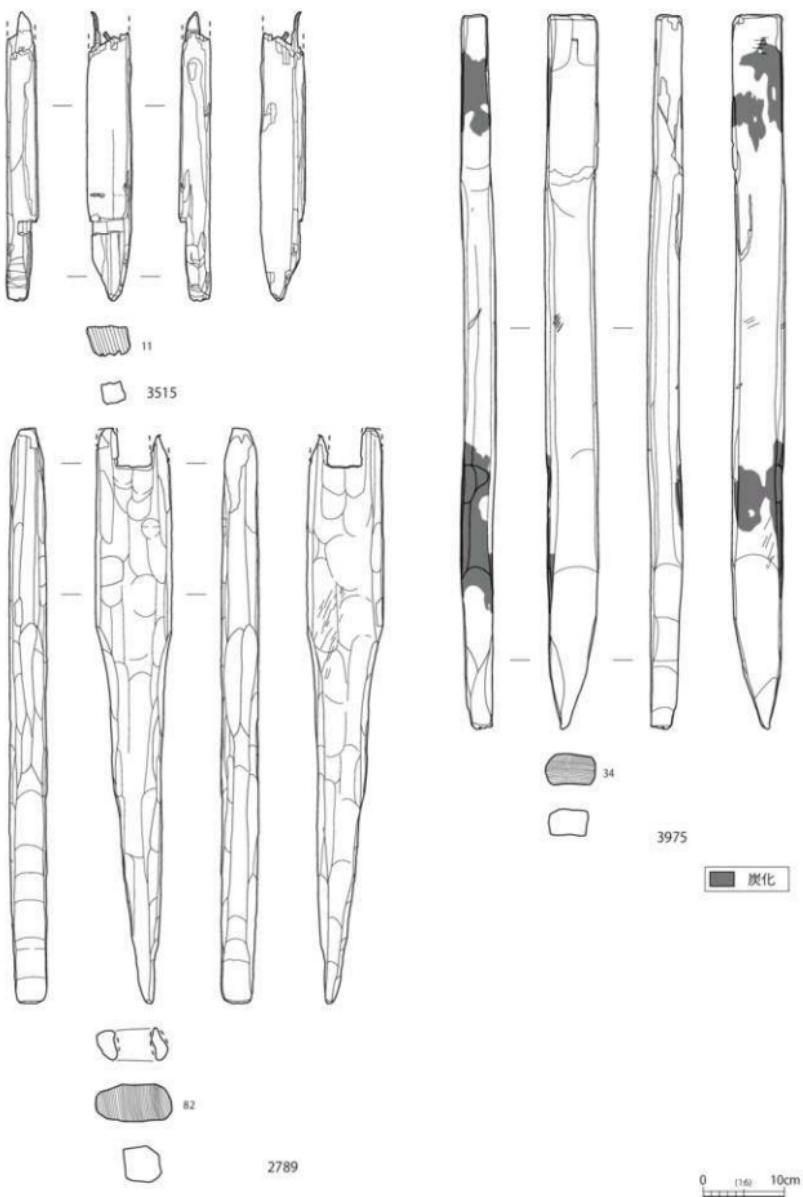
第IV-12-146図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物40



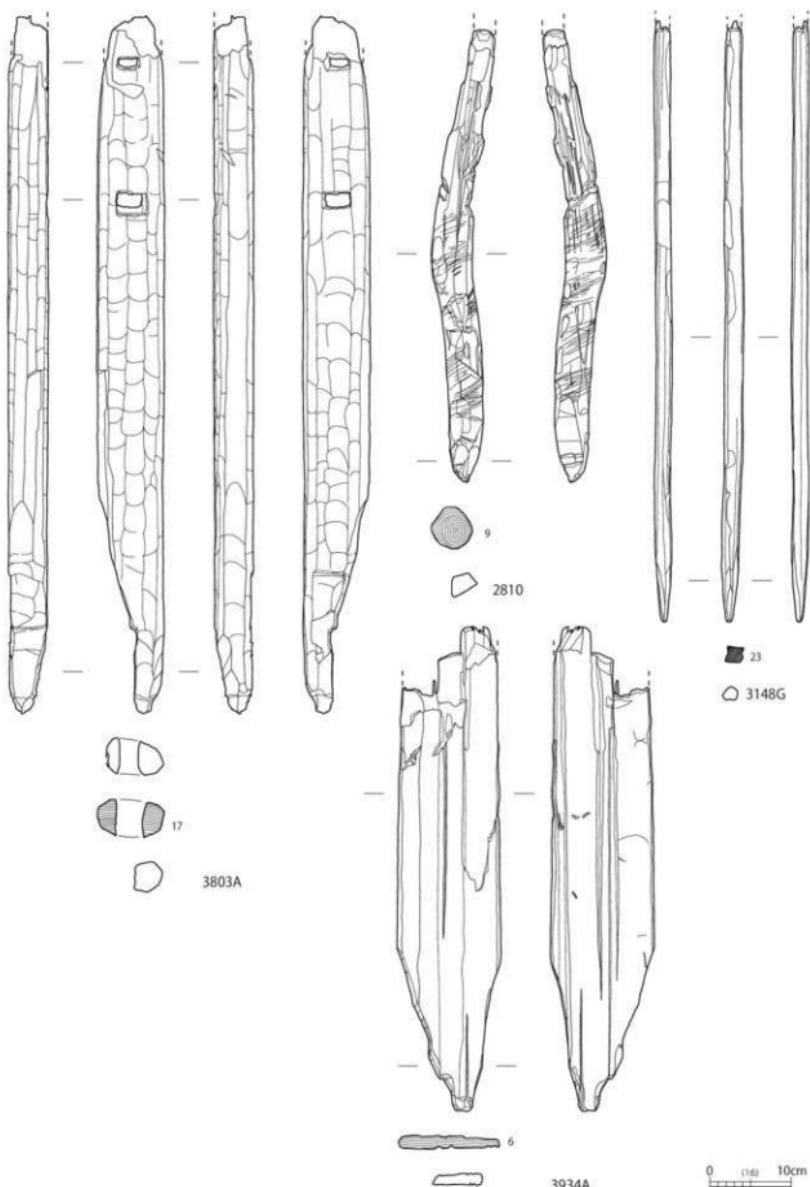
第IV-12-147図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物41



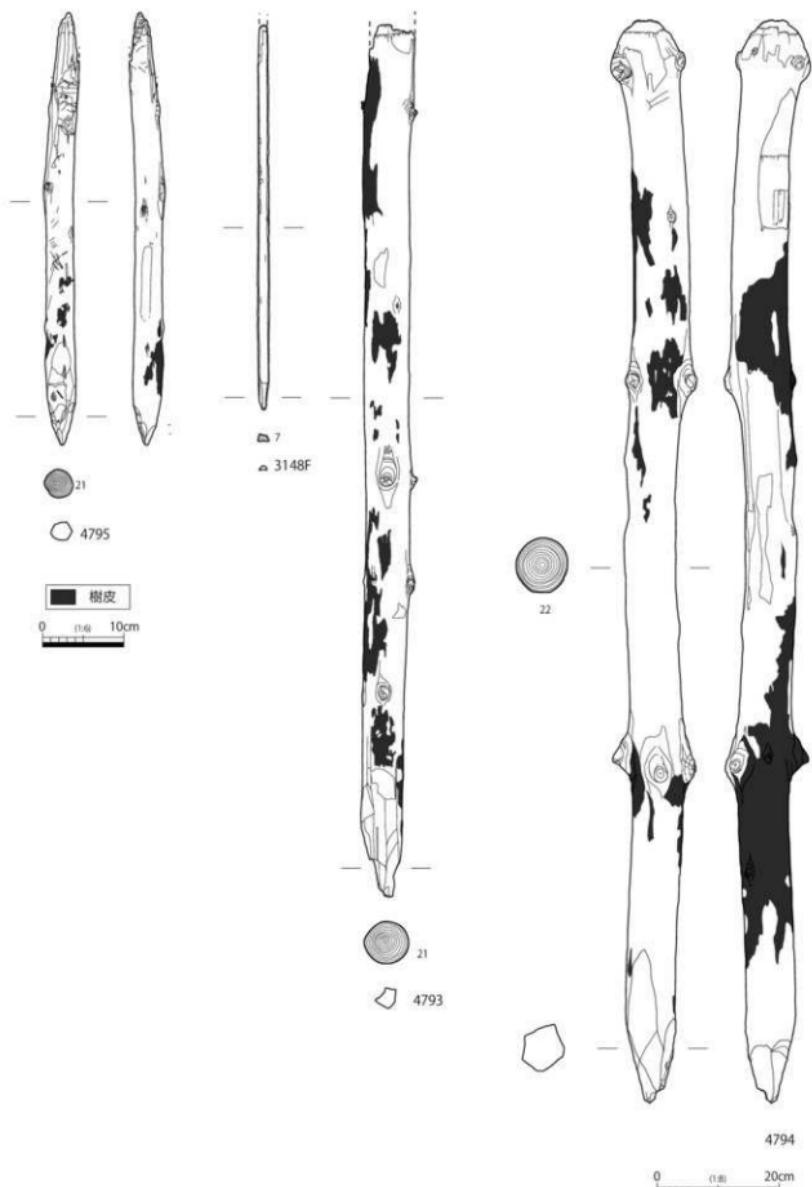
第IV-12-148図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物42



第IV-12-149図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物43



第IV-12-150図 2区 第11面 谷(2S-840) 出土遺物44



第IV-12-151図 2区 第11面 谷(2 S-840) 出土遺物45

していて全体形は不明である。

2801・3907は剖物の腰掛で、樹種はスギである。座板が長軸方向に割れて別々に廃棄されていたものが接合した。座板の上端には割れ口を挟んで穿孔が1つずつある。反対側には円孔の痕跡は確認できないから、おそらく上端側がひび割れたため孔をあけて紐で縛った補修して使用していたが、最終的には割れてしまったと考えられる。座板の横断面形は図の右側の方が左側よりやや反り上がっているから、図の表面に対して左側を向いて座ったと思われる。脚は4脚を削り出し、長軸方向の2脚をつなぐ部分を削り出している。座面の形態は異なるが類似した腰掛が青谷横木遺跡P12区からも出土しており(W1696)、半分に割れた後で穿孔して綴じ合わされている。4902は机の脚と思われる。樹種はクリである。

4715は栓かと思われるが違う可能性もある。丸棒の下端を一回り細く削り、上端は長軸に対して直交して一回り溝を掘って頭部を作り出している。3223と3156はほぼ同型のものである。長方形の板材の真ん中に幅2cm程の軸部を残して、軸部の両側を半円形に削り貫いた形をしている。軸部は断面方形で、表面には縁に沿って三角形の刻みが連続する。4884Bは細い杭状のものである。3145Aは長方形の板材の一端を加工して突起を作っている。

3934Cは部材で細長い板材の長側辺に長方形の欠き込みが2か所ある。3804Fは厚みのある材を平面形は船の舳先を側面からみたような形に加工している。鳥形の未製品の可能性も考えられる。5047Nは平面半月形の板材。4502は円盤の縁に沿ってほぼ等間隔に円孔が12個並ぶ。2788は板材の一端に両長側辺から抉りを入れて頭部を作り出している。3237Aは倒卵形の平面形で細い側に円形の小さい頭部を作り出している。5047Hは刺突具の先端部のような形状をして、円孔が1つある。4513は小型の栓のように横断面梢円形の軸部に円盤状の頭部が付く形状で、軸部は中央部が膨らみ、両端部に向けて細くなる。軸中央部には相対する三角形の刻みを帯状に3段巡らせる。さらに下方には相対しない三角形の刻みを1段巡らせる。表面は全体的に丁寧に加工されている。何らかの装飾品かもしれない。3237Bは細い板材の端部に欠き込みがある。

5047E・5047C・F・5047O・5047Bは縦長の板材に列状に穿孔を穿つもので、盾と考えられるが、穿孔の大きさと間隔が一般的な盾に比べて大きい。5047Oの両端部は水平ではなく斜めに丸みを帯びるから全体形を推定すると梢円形ないし小判形をしていたと考えられる。

3803F・3934Fは長方形の板材に円孔を穿つ。4912は縁に沿って小孔を穿ち、水平方向にも小孔を穿つ。4905と5047Aは隅丸長方形の板材の割れ面に沿って円孔を穿つ補修用の孔と考えられる。3804Aは、長方形の板材の両短辺側に長側辺の延長に枘を作り出している。指物の部材かと考えられる。3148Cは平面台形の板材である。一か所に円孔を4つ近接して穿っている。4940は一端を山形に丸く加工し長方形の板材で、中央部に2孔1対の円孔を2つ縦に並べて穿っている。9500は板材の表面に貫通しない2つの方孔を刳る。3934Gは板材で、上下両端を欠損する。何かの素材と考えられる。4567は厚みのある板材で、片側の長側辺に欠き込みが残る。

4858は厚みのある板材の中央部に抉りがあるが、側面が欠損のため孔の可能性もある。4884Dは、長方形の板材の両短辺に欠き込みがある。

建築部材(第IV-12-132~148)

4767と5096はそれぞれ板材の一端に隅丸方形と推測できる欠き込みがあり、他の部材と組み合う。

4521も同じように他の部材と組み合うと考えられる。3148Eは柱材と考えられる。これら以外の第IV-12-133、134図は板材である。

4507、4518、4519は建築部材かどうかわからないが、横断面長方形の角材の両端部を中心部より一回り細く削ったものである。2687は横断面長方形の角材の端寄りに、欠き込みを有する。

第IV-12-136～143図(4893、4780を除く)は長さに長短と幅に広狭はあるが、板材である。板材の一端が斜めにカットされているもの(4374、4527、4528、4788)は、現場で土層観察用の土手にくい込んでいたために、切断して持ち帰ったものである。切断したものや欠損品が多いので、全長のわかるものは無いが、残存部の長さが3m前後のものがあるので、本来3m以上の長さがあったものが多いと考えられる。厚さは約1.5～2cmの薄いものが多く、壁材と考えられるが4528は厚さ2.9cmあり、床板になり得る厚さと考えられる。これらの板材は、基本的に板目材で、4812、4814、4891、3629、4377は表面に加工痕がある。

4513、4941、4933は横断面長方形の板材で、他の板材に比べて幅が狭い材である。4893と4780は横断面長方形の角材で、端部を斜めにカットしている。

第IV-12-144図の4401、4405、2947、3614は桁材と考えられる。横断面長方形の角材の片側辺に方形の欠き込みが約41～42cm間隔に並ぶ。第IV-12-97図で出土した垂木の心々距離も出土状態で約41～42cmで、これらの桁材とほぼ同一の間隔である。

第IV-12-145、146図は小舞と考えられる薄く、細長い材である。幅は約1.5～2.5cm、厚さは1cm前後のものが多い。基本的には板目材だが、柾目のものも希に認められる。年輪界に沿って割られており、表面の一部には横断方向に切断痕が残るものがある。割り肌で加工痕のあるものは無い。第IV-12-147、148図は第IV-12-145、146図に比べて幅が広く約3～5cmある。厚さは1cm未満のものと1.8～1.9cm程度のものの2種類がある。

杭(第IV-12-149～151図)

横断面方形の転用材と考えられるもの(3515、2789、3975、3803A、3148G、3934A、3814F)、と芯持ち丸太材を用いたもの(2810、4795、4793、4794)がある。前者の杭は、欠き込みや穿孔が残存するもの(3515、2789、3803A)がある。後者の杭は、樹皮が残存し、先端部以外は加工されていない。

第13節 I層、I b層、攪乱及びトレンチ出土の遺物

1 I層、I b層、攪乱出土の遺物(第IV-13-1~3図)

土器は、攪乱-1が壺、攪乱-2が壺、攪乱-3が低脚壺の脚部である。Br 1837は八禽鏡である。近現代の流路(I b層)から出土したものである。復元径は9.1cmである。破面は研磨されており、1か所に表面から穿孔されている。穿孔部はかなり丸みを帯びた隅丸三角形をしており、紐をとおして長期間ぶら下げて利用したためにこのような形状になった可能性がある。S0219は玉作りの石核で、石材は碧玉である。

木器は、1338が紡錘車で鉄製の軸が残る。3970が部材、0118は蓋で内外面黒漆塗り、1446、1062、1706、7502は椀である。0919は杓子で、底部に2か所の穿孔がある。2S-763出土の0435と同様の形態だったと推測できる。3934は底板、2089は蓋、0379Bは蓋ないし底板で、破面に目釘を差し込んだ跡があり、割れた後も補修して利用したと考えられる。0881、0404は用途不明の製品である。0992は梯子である。古錢のC3940は古寛永、C1795は至道元宝である。

2 トレンチ出土の遺物(第IV-13-4~12図)

2 ライントレンチ出土遺物(第IV-13-4図)

Tr 2-1は台付装飾壺の胴部片である。7318Aは蓋で、穿孔が2つあり、片方に緊縛用の樹皮が残存する。

東側溝出土遺物(第IV-12-4図)

S0213は両端部を打ち欠いた石錘、1254は蓋付きの剣物箱である。

4 ライントレンチ出土遺物(第IV-12-4、5図)

Tr 4-1~4は壺、Tr 4-5は壺、Tr 4-6、7は低脚壺でTr 4-7は脚端部から内面に竹管文を隙間なく施している。Tr 4-8、9は高脚部、Tr 4-10、11は器台である。S0492は伐採斧の刃部片、S0581は石錘と考えられ、紐で緊縛されていたと考えられる部分のみ筋状に石の色を留めており、その他の部分は黒色を呈する。7007は把手付きの桶である。

5 ライントレンチ出土遺物(第IV-12-6図)

Tr 5-1は壺、Tr 5-2は台付装飾壺、Tr 5-3は壺である。S1681は柱状片刃石斧、3381、1879A、Bは杭である。3381と1879Bは転用されたもので、穿孔が残る。

6 ライントレンチ出土遺物(第IV-12-7図)

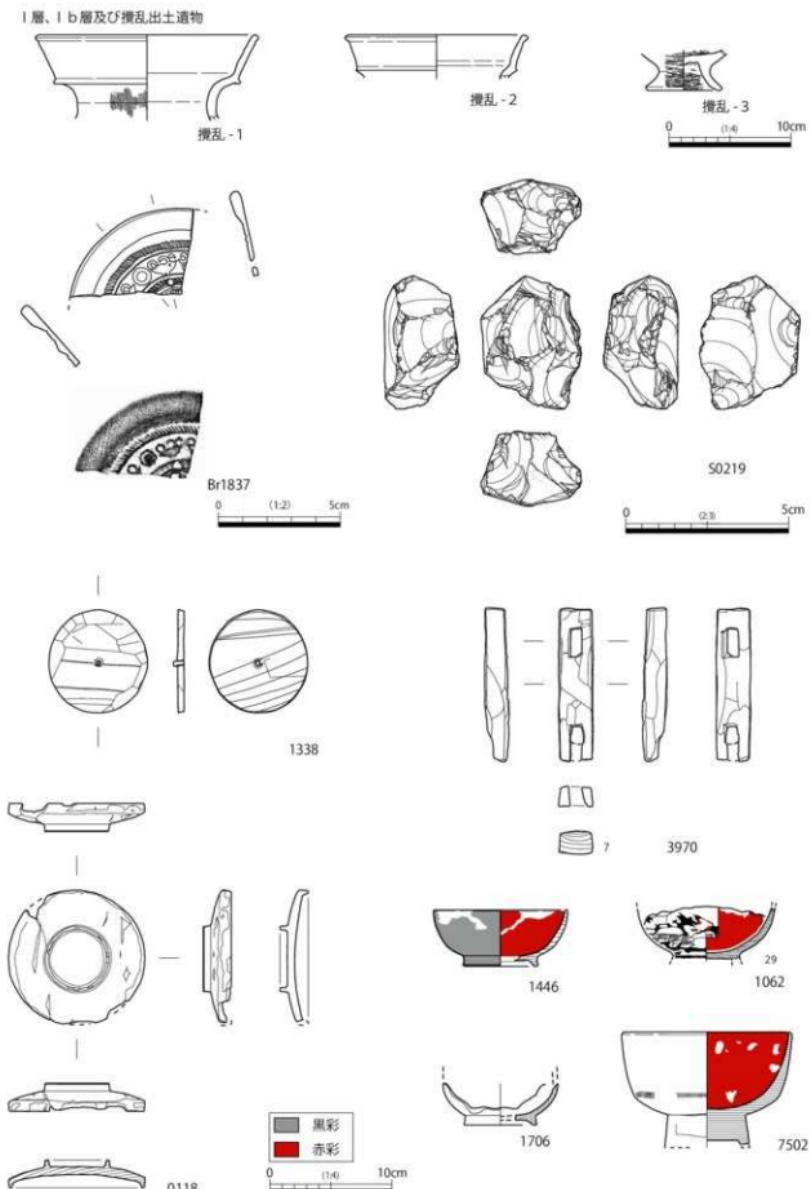
S2453は石皿、2455は部材である。

8 ライントレンチ出土遺物(第IV-12-8図)

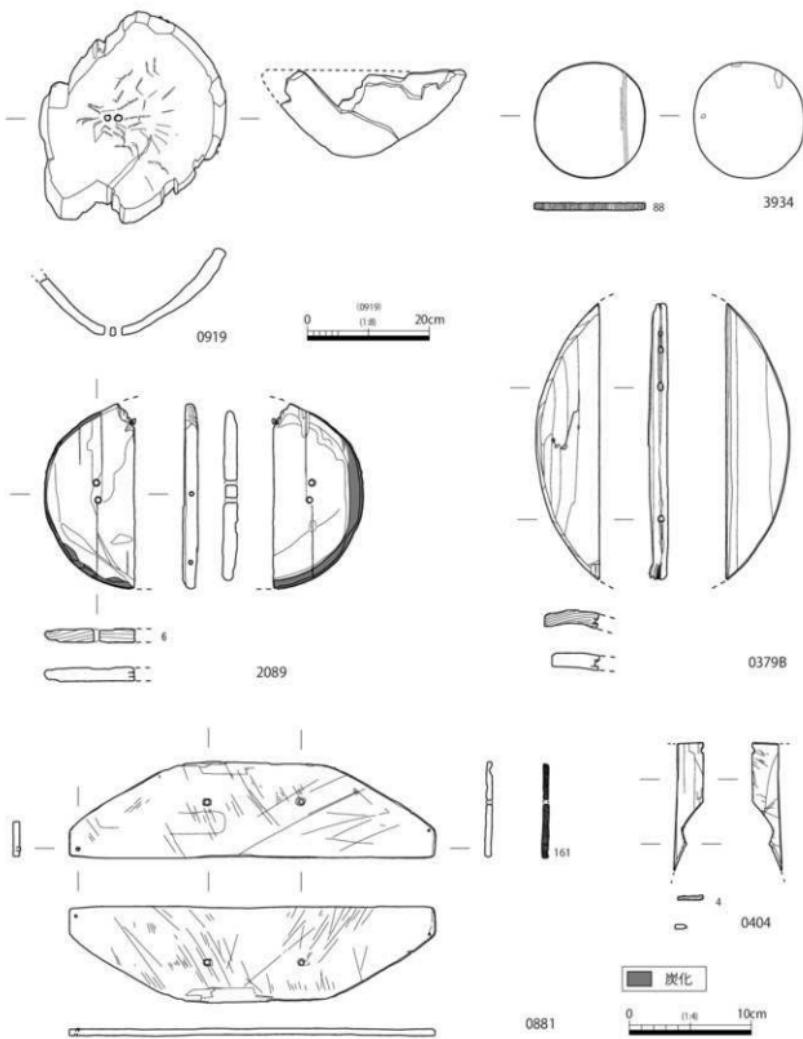
S2250は石錘、S2872は伐採斧である。

北側溝出土遺物(第IV-12-8・9図)

北-1は壺、北-2~6は壺、北-7、8は高脚壺、北-9は台付壺で内外面赤彩されており、胴部には焼成後に穿孔が穿たれている。高脚(北-7)は北陸系のものと考えられる。北-10、11は低脚壺、北-12は小型器台、北-13は蓋、北-14はミニチュアの鉢、北-15、16は壺蓋と壺身、北-17は高脚、



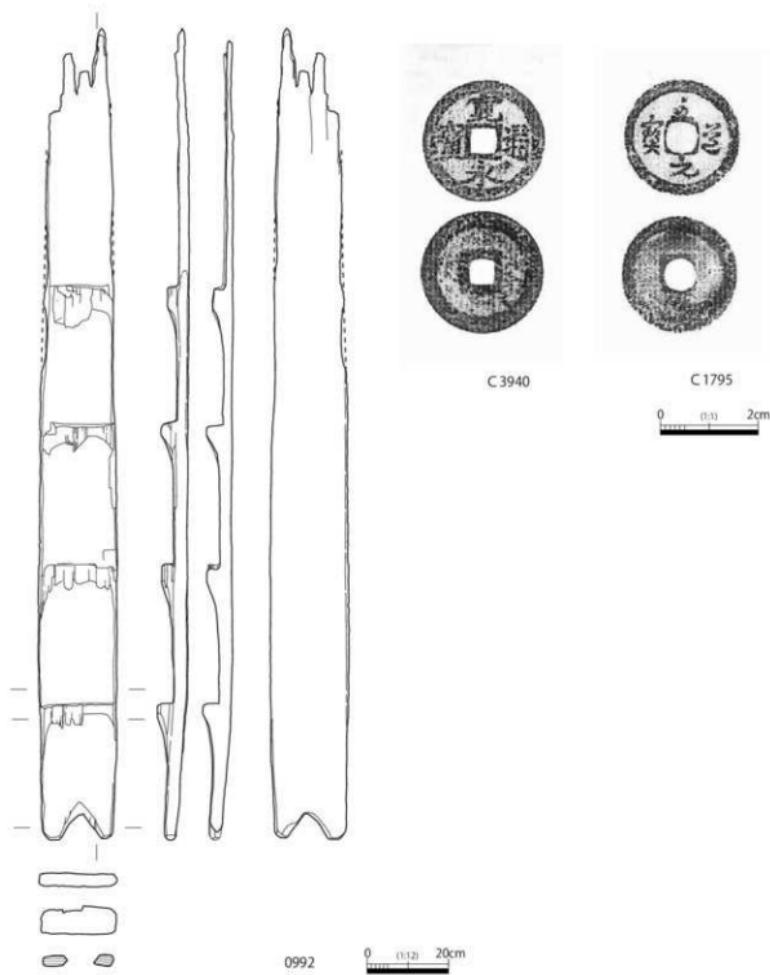
第IV-13-1図 I層、I b層及び擾乱出土遺物 1



第N-13-2図 I層、Ib層及び攢乱出土遺物2

北-18は皿である。S0281は伐採斧を敲石に転用したものと考えられる。3894は木錘、3945は杭である。
中央側溝出土遺物(第IV-12-9・10図)

中-1は内外面赤彩された壺で、2孔1対の紐孔がある。中-2～7は甕、中-8は高坏、中-9は台付鉢、中-10、11は器台である。S1711は石包丁、F0509は袋状鉄斧である。C0261は古寛永である。
E・Fライン間トレンチ出土遺物(第IV-12-11・15図)



第IV-13-3図 I層、I b層及び擾乱出土遺物3

S 2675は玉作りの分割片、S 0984は石鉤、2644は杭、4075Eは底板、0812は用途不明品である。4043Hは錘状の土製品である。

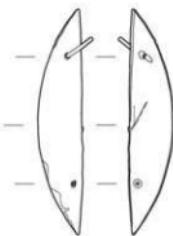
南側溝出土遺物(第IV-12-12図)

南-1～6は甕、南-7は鉢、南-8、9は低脚壺、南-10は高壺、南-11～14は蓋である。0821は芯持ち材の一端を先鋒に削り出しが、杭とは異なり、中ほどを階段状に抉っている。栓かと思われる。

2 ライントレンチ出土遺物



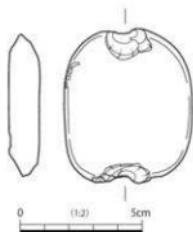
Tr 2-1



15

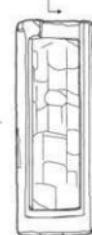
7318A

東側溝出土遺物

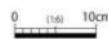


0 (1:2) 5cm

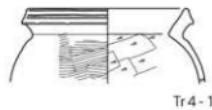
50213



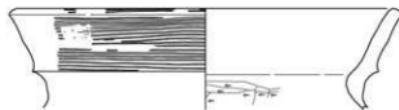
1254



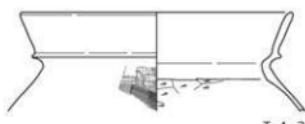
4 ライントレンチ出土遺物



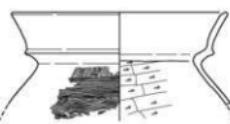
Tr 4-1



Tr 4-2



Tr 4-3

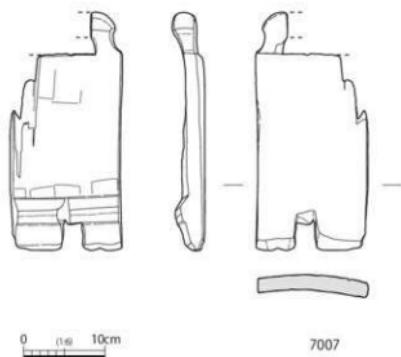
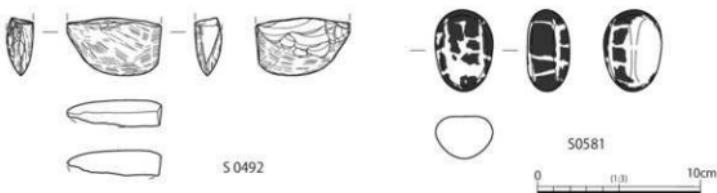
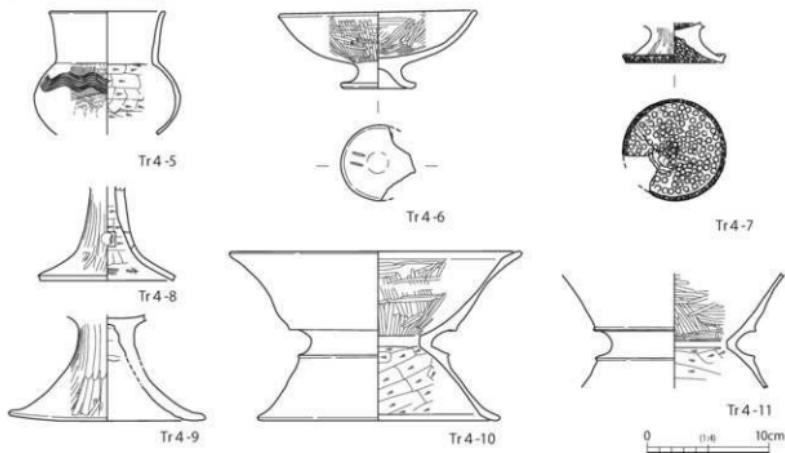


Tr 4-4



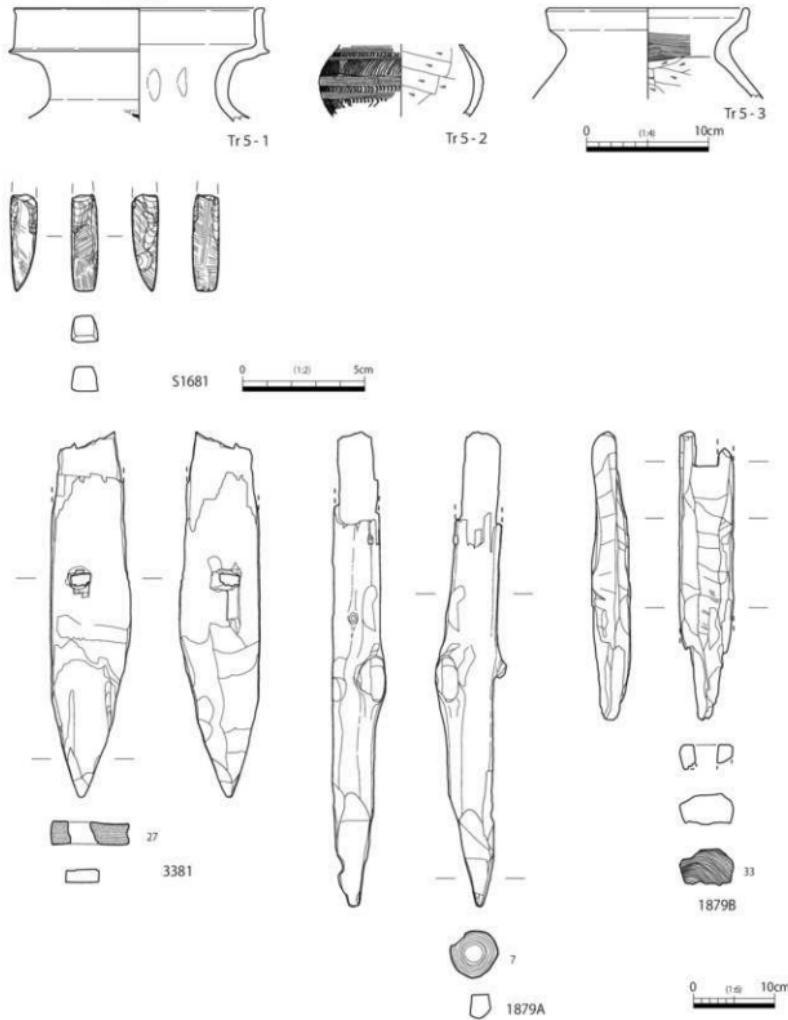
第IV-13-4図 各トレンチ出土遺物 1

4 ライントレンチ出土遺物



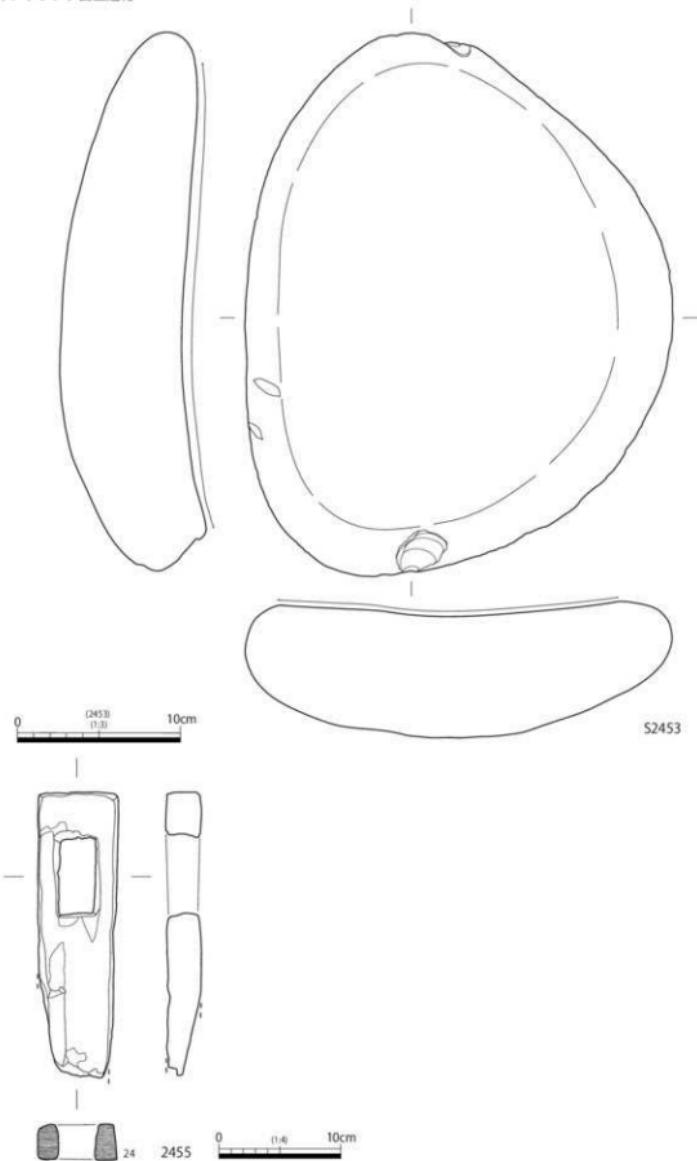
第IV-13-5図 各トレンチ出土遺物2

5 ライントレンチ出土遺物



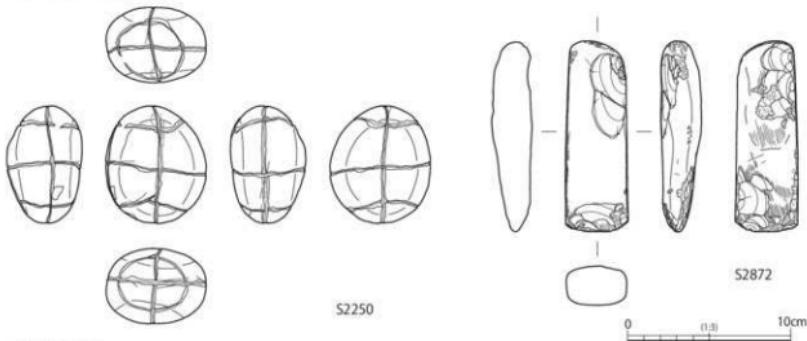
第IV-13-6図 各トレンチ出土遺物3

6 ライントレンチ出土遺物

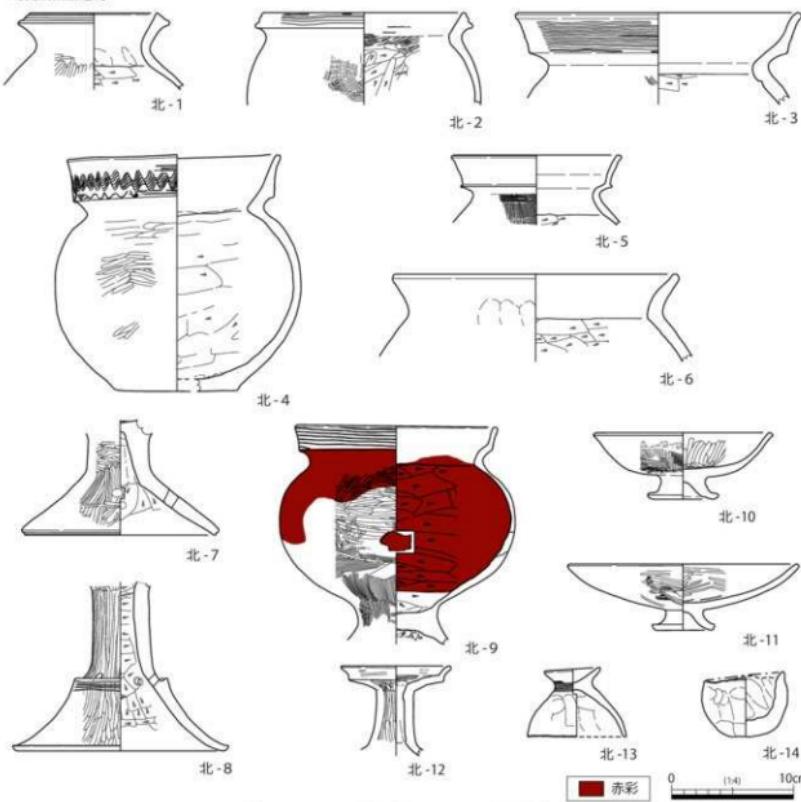


第IV-13-7図 各トレンチ出土遺物4

8 ライントレンチ出土遺物

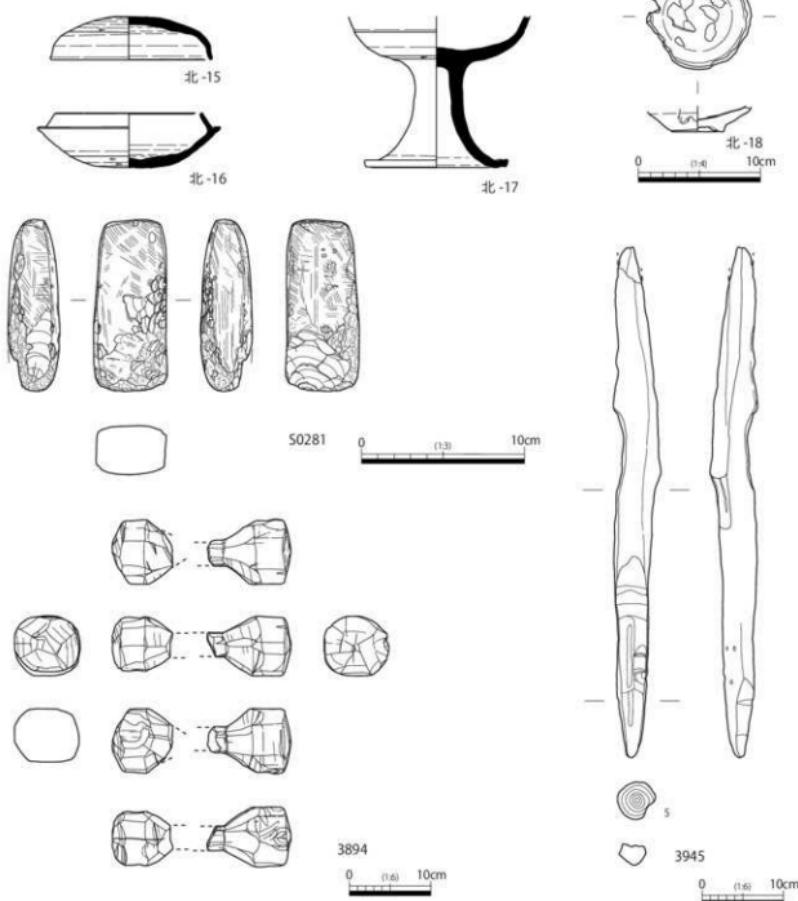


北側溝出土遺物

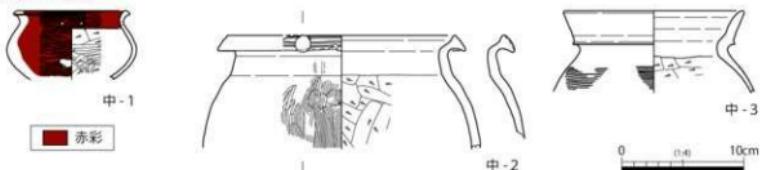


第IV-13-8図 各トレンチ出土遺物5

北側溝出土遺物

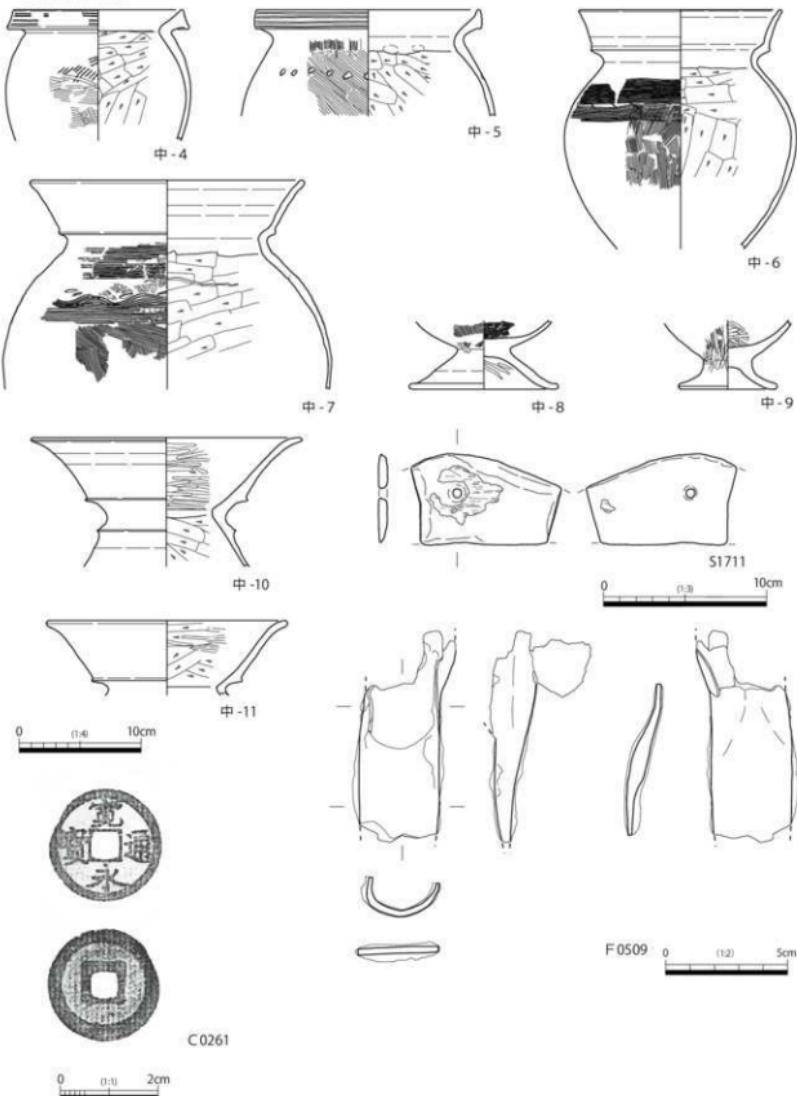


中央側溝出土遺物



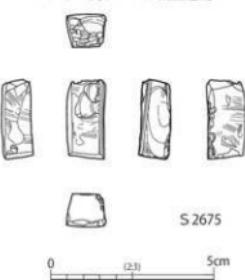
第IV-13-9図 各トレンチ出土遺物6

中央側溝出土遺物



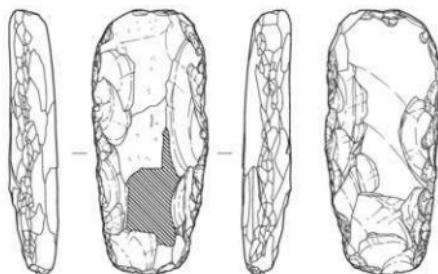
第IV-13-10図 各トレンチ出土遺物7

E・Fライン間トレンチ出土遺物



S 2675

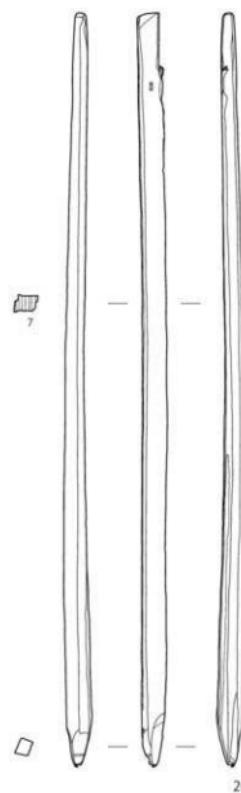
0 (2:3) 5cm



S 0984

■ 節理

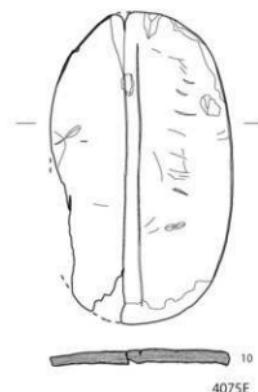
0 (1:3) 10cm



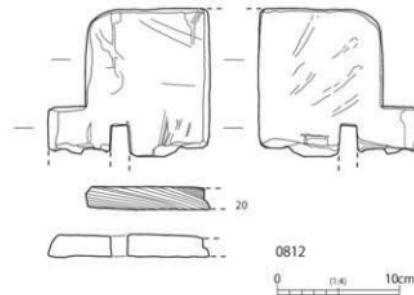
7

□

2644



4075E

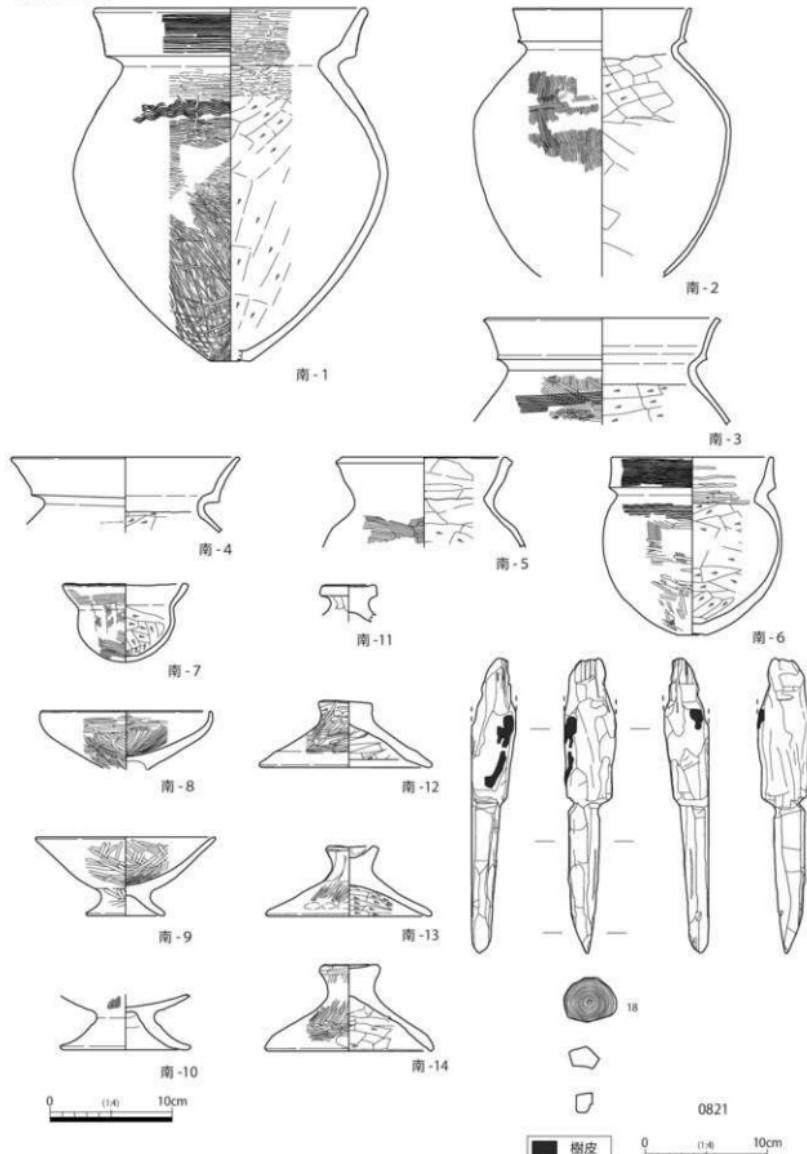


0812

0 (1:4) 10cm

第IV-13-11図 各トレンチ出土遺物 8

南側溝出土遺物



第IV-13-12図 各トレンチ出土遺物9

G 7 トレンチ出土遺物(第IV-13-13図)

2区南西部でV-5層下面調査時に、下層の堆積状況確認を目的として設定したトレンチで出土した遺物で、全てVI層以下の堆積に含まれるものである。トレンチほぼ中央部を2S-824が走っているが、トレンチ掘削後での確認であったため、本来2S-842に含まれる遺物もトレンチ出土遺物として扱っている。9164と9165の樹種はスギで、扉に用いられた部材の一部であった可能性がある。9164には9167が、9165には9166が差し込まれるように出土している。9164と9165は重なるように出土しており、セットで使用されていたことが窺える。9241は高杯の坏部で、杯底部外面に花弁状の彫り込みが見られることから花弁高杯としたものである。ただし、形状が浅い皿状を呈しており、かなり薄手に仕上げられていることから、類例は知らないものの、蓋の可能性も否めない。

このほかに、紡錘車(7798)、匙(9016)、桶(9242)などが出土した。

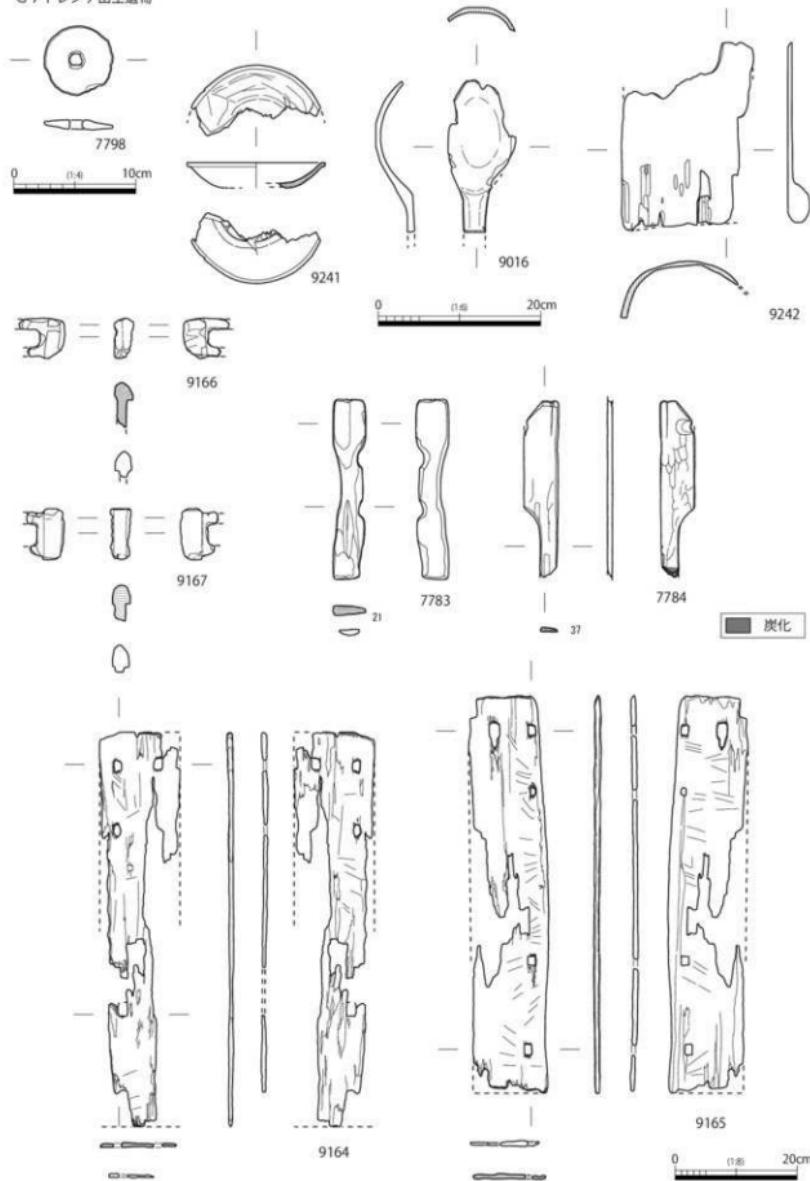
H 7-2 トレンチ出土遺物(第IV-13-14・15図)

主にVI層以下で出土した遺物を掲載した。7469・7461は、把手の付く脚付の剣り物桶である。上半を失っているが、底部から緩やかに内湾するものと思われる。底板がセットで出土しているが、その中央部には穿孔が認められ、目釘状の部材が打ち込まれている。7280は長さ60cmを測る大型の棒状製品である。スギを用いており、ほぞ穴を施した腕に支えをはめ、目釘で固定している。この他に、槽(7563)、木包丁(8476)、盾(8286)などが出土した。S8095は石包丁、S6954は環状石斧である。1058は土製の勾玉である。

F・G 6 確認坑出土遺物(第IV-13-15図)

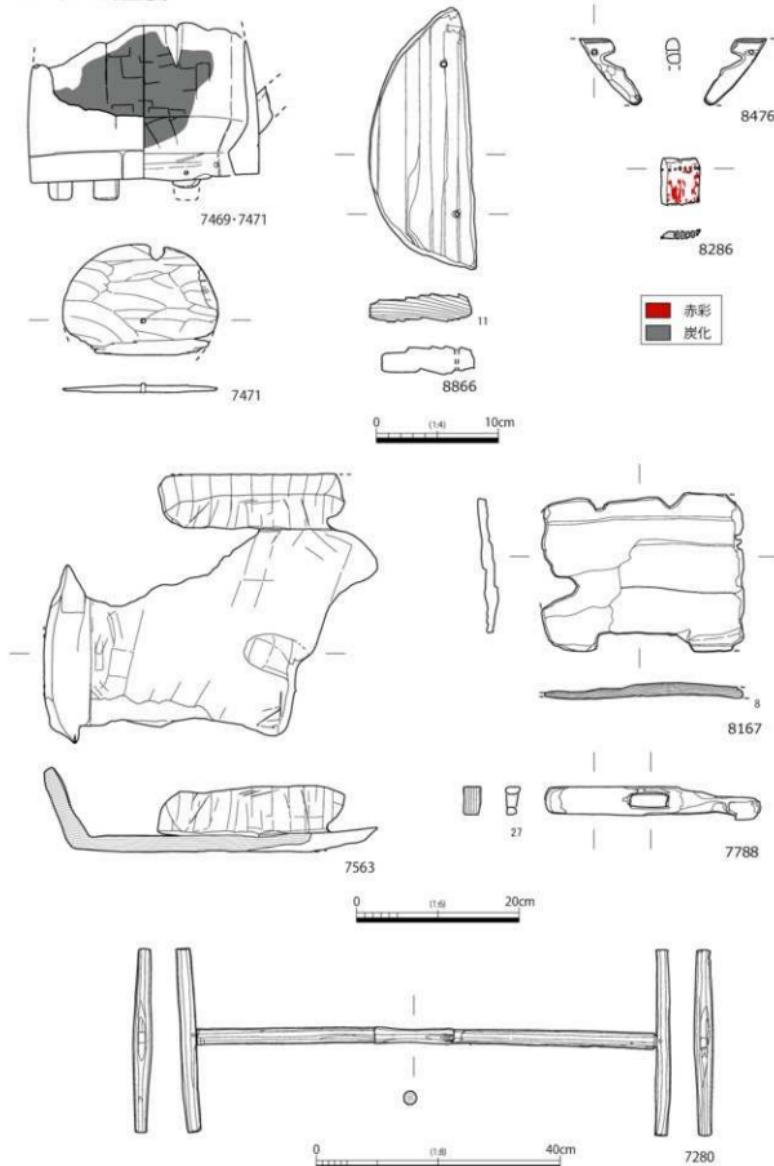
3535は坏形の容器、7605は木包丁である。9056は赤彩された高坏の脚部と思われ、8135は用途不明であるが、建築部材と推定されるものである。

G 7 トレンチ出土遺物



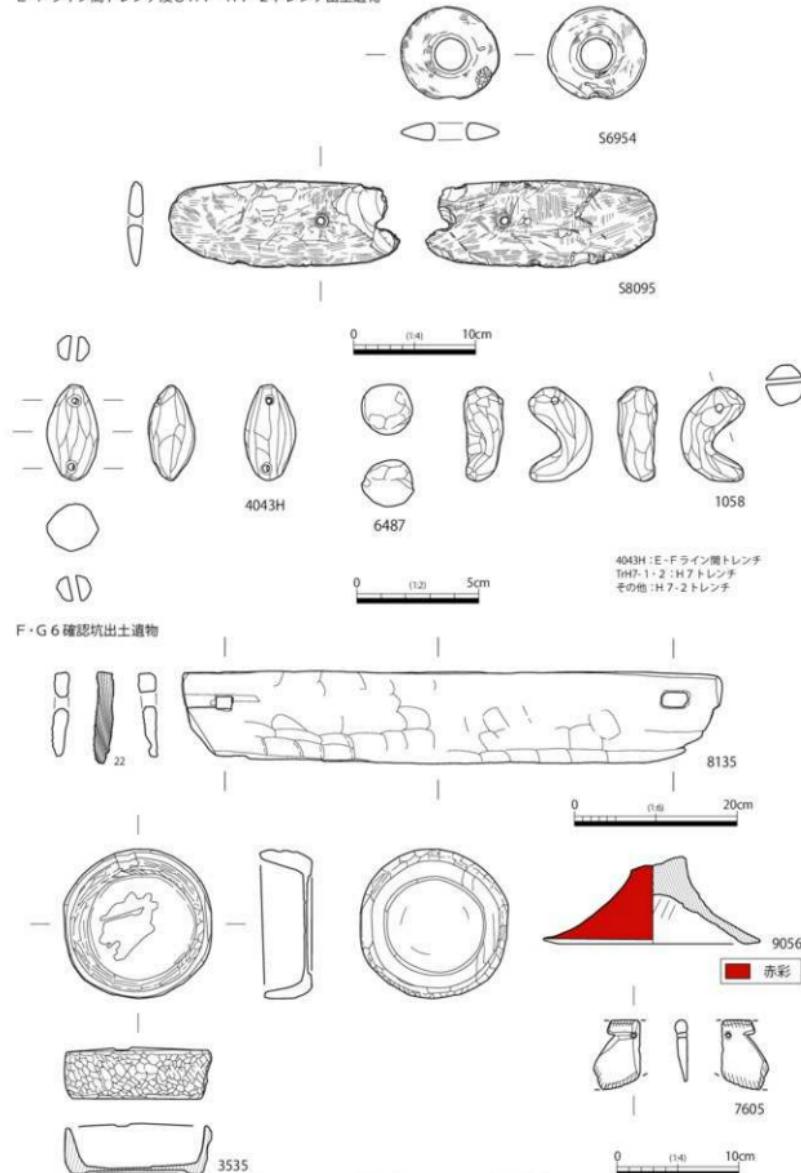
第IV-13-13図 各トレンチ出土遺物10

H 7-2 レンチ出土遺物



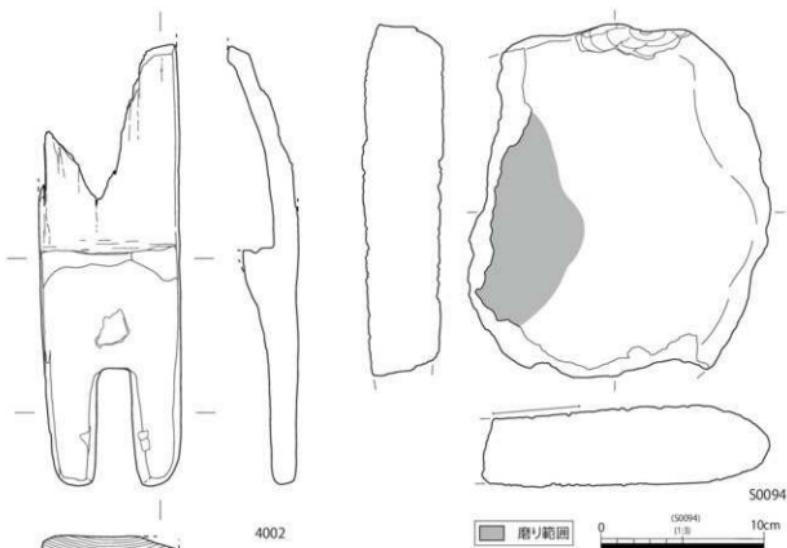
第IV-13-14図 各レンチ出土遺物11

E-Fライン間トレンチ及びFH 7・H 7-2トレンチ出土遺物

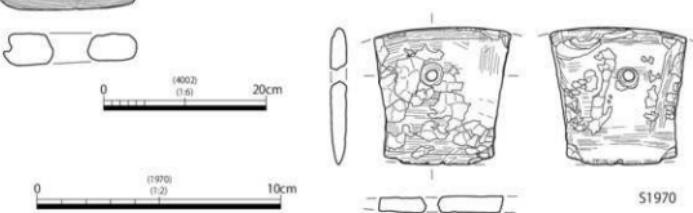


第IV-13-15図 各トレンチ出土遺物12

東西サブトレンチ出土遺物



C 8 グリッド出土遺物



第N-13-16図 各トレンチ出土遺物13、調査区内出土遺物

報告書抄録

鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 68
一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXVIII
鳥取県鳥取市鹿野町
乙亥正屋敷廻遺跡
第2分冊（2・3区）

発 行 2019年3月18日
編 集 鳥取県埋蔵文化財センター
〒 680-0151 鳥取市国府町宮下 1260 番地
電話 (0857) 27-6711
発行者 鳥取県埋蔵文化財センター
印 刷 中央印刷株式会社
〒 689-1121 鳥取市南栄町 34 番地
電話 (0857) 53-2221